

花
宴
遺
跡

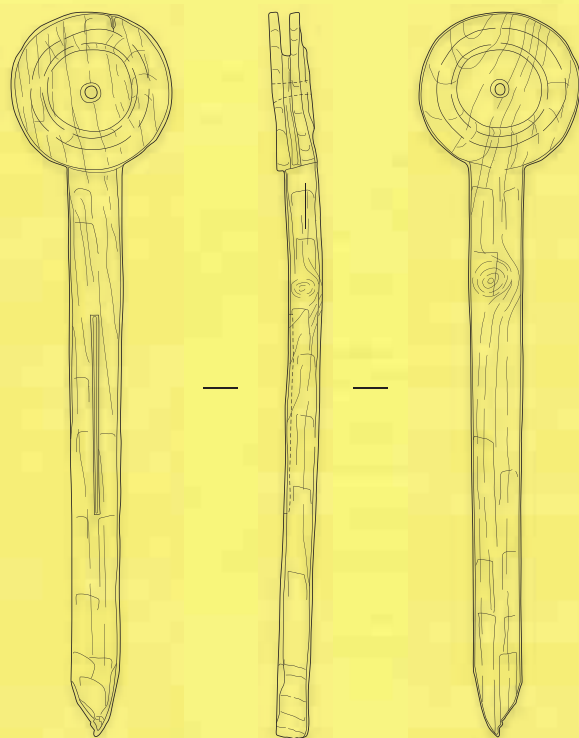
花 宴 遺 跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ)

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ

第115集 二〇一〇・十二

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



2010.12

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

花 宴 遺 跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ)

2010.12

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成16年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局の業務委託を受けた一般国道55号自動車専用道路(高知東部自動車道)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。この事業には高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路が含まれ、今回報告する花宴遺跡は香南市香我美町徳王子に所在し、南国安芸道路計画路線上に位置します。

南国安芸道路は南国市物部から安芸市に繋がる全長21kmの自動車専用道路で、これまで香南市夜須町と香我美町分の調査がほぼ完了し、平成19年度には『口槇ヶ谷遺跡』の報告書を刊行しました。今回の報告書が南国安芸道路関係では2冊目に当たります。

遺跡は香宗川の後背湿地に当たる沖積平野に立地しており、試掘調査前は遺跡が存在する可能性は低いのではないかとおもわれていましたが、弥生時代の自然流路が6条確認され、地名から花宴遺跡と命名されました。確認された6条の自然流路は、単なる河川ではなく、それぞれ護岸工事が行われ、維持管理されたもので、周辺では水田経営が行われていたものと思われます。また、この内の1条からは県内初となる堰状遺構が検出され、当時の人々の暮らしの一端を垣間みることができると共に木製の威儀具を始めとして貴重な資料を数多く提供しております。

本書が地域の歴史解明や考古学研究的資料、さらには埋蔵文化財の保護に繋がれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、香南市そして地元の関係者の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成22年12月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 小笠原 孝夫

例 言

1. 本書は、(財)高知県文化財団が高知県教育委員会の委託を受けて平成17・18年度に実施した花宴遺跡の発掘調査報告書(『花宴遺跡』)である。
2. 発掘調査は高知東部自動車道南国安芸道路建設に伴うもので、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 花宴遺跡は高知県香南市香我美町徳王子に所在する弥生時代の生産関連遺跡で、発掘調査延べ面積は7,303㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成17年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総 務：同次長兼総務課長 湯浅文彦，同主任 池野かおり，同主幹 長谷川明生

調 査 総 括：同調査課長 森田尚宏

調 査 担 当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 田淵瑞代・井上昌紀，主任調査員 小野由香(Ⅳ区担当)，同調査員下村裕(Ⅰ～Ⅲ区担当)，技術補助員 宮地啓介・坂本憲彦・大野大，測量補助員 畝川雅行・西村譲二

事務補助員：友永可奈

平成18年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川島博海

総 務：同次長 森田尚宏，同総務課長 戸梶友昭，同主任 池野かおり

調 査 総 括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調 査 担 当：同調査第四班長 藤方正治，同専門調査員 鍵山真一，同調査員 下村裕(Ⅳ区担当)，技術補助員 宮地啓介，測量補助員 畝川雅行

事務補助員：友永可奈

平成22年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫

総 務：同次長 森田尚宏，同総務課長 里見敦典，同主任 弘末節子

調 査 総 括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

事務補助員：友永可奈

5. 本書の執筆、遺物撮影は廣田が行い、調査日誌抄と現場写真は調査担当が執筆、撮影したものを使用した。編集総括は廣田が行い、整理作業員の補助を得た。
6. 遺構は、SR(自然流路)、SK(土坑)、SD(溝跡)、SF(祭祀関連遺構)、SX(性格不明遺構)とし、遺構番号は遺構ごとに通し番号とした。掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記載しており、方位(N)は世界標準座標方眼北である。
7. 遺物は原則として弥生土器を $S = 1/4$ 、木製品を $S = 1/4 \sim 1/15$ 、それ以外を $S = 1/3$ で掲載し、各挿図にはスケールを掲載している。遺物番号は調査区ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号は一致している。なお、遺物番号は、Ⅰ区が1001～1068、Ⅱ区が2001～2294、Ⅲ区が3001～3062、Ⅳ区

が4001～4492で、掲載遺物の総点数は916点である。

8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたっては、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

趙哲済(大阪市博物館協会 大阪市文化財研究所), 山田昌久教授(首都大学東京), 辻本裕也・辻康男(パ
リノ・サーヴェイ株式会社), 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏

9. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所, 香南市のご協力を頂いた。また、
地元住民の方々には遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。記して感謝する次第である。

西内広美, 岩貞泰代, 横山めぐみ, 黒岩佳子, 中西純子, 内村富紀, 元木恵利子, 小林貴美, 松田美香,
田島 歩, 岡宗真紀, 川添明美, 大賀幸子, 山形和江

11. 出土遺物は「05-16KH」, 「06-1KH」と註記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序章	1
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	2
(1) 契機と経過	2
(2) 確認調査	2
(3) 調査の方法	6
3. 遺跡の地理的・歴史的環境	7
(1) 地理的環境	7
(2) 歴史的環境	7
第Ⅱ章 調査の概要	11
1. 調査の経緯	11
(1) 調査の経緯	11
(2) 調査日誌抄	11
2. 調査区の概要	17
(1) I区	17
(2) II区	18
(3) III区	19
(4) IV区	20
第Ⅲ章 遺構と遺物	25
1. I区	25
(1) 自然流路	25
(2) 溝跡	29
2. II区	31
(1) 自然流路	31
3. III区	53
(1) 自然流路	53
4. IV区	59
(1) 自然流路	59
(2) 土坑	108
(3) 溝跡	109
(4) 祭祀関連遺構	113
(5) 性格不明遺構	116

第IV章 自然科学分析	117
1. 自然科学分析調査報告	117
(1) はじめに	117
(2) 試料	117
(3) 分析方法	119
(4) 結果	121
(5) 考察	143
(6) 小結	159
2. II区及びIII区出土土器付着炭化物(おこげ)の放射性炭素年代測定(AMS測定)	164
(1) 遺跡の位置	164
(2) 測定の目的	164
(3) 測定対象試料	164
(4) 化学処理工程	164
(5) 測定方法	164
(6) 算出方法	164
(7) 測定結果	166
3. 花宴遺跡出土木製品保存処理樹種同定記録	169
(1) 平成17年度	169
(2) 平成18年度	169
(3) 平成19年度	171
第V章 総括	173
1. はじめに	173
2. 遺跡周辺の古環境と地形発達史	173
3. 自然流路の出現と埋没	174
4. 堰の構築と廃絶	176
5. その他の遺構	177
6. 微隆起突帯の諸種と変遷	177
7. 木製威儀具について	179
8. まとめ	181
9. おわりに	181
遺物観察表	183

挿図目次

図1-1	花宴遺跡位置図	1
図1-2	平成16年度香我美地区試掘調査位置図(S=1/5,000)	2
図1-3	平成17年度香我美地区試掘調査位置図1(S=1/5,000)	4
図1-4	平成17年度香我美地区試掘調査位置図2(S=1/5,000)	5
図1-5	花宴遺跡周辺の遺跡(S=1/25,000)	9
図2-1	I区西壁セクション	17
図2-2	I区第I層出土遺物実測図	18
図2-3	II区北壁セクション	18
図2-4	III区中央バンクセクション	20
図2-5	III区第VIII層出土遺物実測図	20
図2-6	IV区南壁セクション(図3-41に中央バンクセクションを掲載)	21
図2-7	IV区第V・VIII・IX・XI層出土遺物実測図	23
図2-8	調査区全体図(S=1/2,000)	24
図3-1	I区遺構平面図(S=1/400)	25
図3-2	SR-1(北壁)	26
図3-3	SR-1出土遺物実測図1	26
図3-4	SR-1(南壁)	27
図3-5	SR-1出土遺物実測図2	27
図3-6	SR-1出土遺物実測図3	28
図3-7	SR-1出土遺物実測図4	29
図3-8	SD-1	29
図3-9	SD-2	30
図3-10	II区下面検出遺構平面図(S=1/400)	31
図3-11	SR-2(北壁)	32
図3-12	SR-2(南壁)	32
図3-13	SR-2出土遺物実測図1	33
図3-14	SR-2出土遺物実測図2	34
図3-15	SR-2出土遺物実測図3	35
図3-16	SR-2出土遺物実測図4	36
図3-17	SR-2出土遺物実測図5	37
図3-18	SR-2出土遺物実測図6	38
図3-19	SR-2出土遺物実測図7	39
図3-20	SR-2出土遺物実測図8	40
図3-21	SR-2出土遺物実測図9	41
図3-22	SR-2出土遺物実測図10	42
図3-23	SR-2出土遺物実測図11	43

図3-24 SR-2出土遺物実測図12.....	44
図3-25 SR-2出土遺物実測図13.....	45
図3-26 SR-2出土遺物実測図14.....	46
図3-27 SR-2出土遺物実測図15.....	47
図3-28 SR-2出土遺物実測図16.....	48
図3-29 SR-3(北壁).....	49
図3-30 II区上面検出遺構平面図(S=1/400).....	50
図3-31 SR-3(南壁).....	51
図3-32 SR-3出土遺物実測図1.....	51
図3-33 SR-3出土遺物実測図2.....	52
図3-34 III区遺構平面図(S=1/400).....	53
図3-35 SR-4出土遺物実測図1.....	54
図3-36 SR-4出土遺物実測図2.....	55
図3-37 SR-4出土遺物実測図3.....	56
図3-38 SR-4出土遺物実測図4.....	57
図3-39 SR-4出土遺物実測図5.....	58
図3-40 IV区下面検出遺構平面図(S=1/400).....	59
図3-41 IV区中央バンクセクションとSR-5・6.....	60
図3-42 SR-5出土遺物実測図1.....	61
図3-43 SR-5出土遺物実測図2.....	61
図3-44 SR-5出土遺物実測図3.....	63
図3-45 SR-5出土遺物実測図4.....	64
図3-46 SR-5出土遺物実測図5.....	65
図3-47 SR-5出土遺物実測図6.....	66
図3-48 SR-5出土遺物実測図7.....	67
図3-49 SR-5出土遺物実測図8.....	68
図3-50 SR-5出土遺物実測図9.....	69
図3-51 SR-5出土遺物実測図10.....	71
図3-52 SR-5出土遺物実測図11.....	72
図3-53 SR-5出土遺物実測図12.....	73
図3-54 SR-5出土遺物実測図13.....	74
図3-55 SR-5出土遺物実測図14.....	75
図3-56 SR-5出土遺物実測図15.....	76
図3-57 SR-5出土遺物実測図16.....	77
図3-58 SR-5出土遺物実測図17.....	78
図3-59 SR-5出土遺物実測図18.....	79
図3-60 SR-5出土遺物実測図19.....	79
図3-61 SR-5出土遺物実測図20.....	80

図3-62	IV区上面検出遺構平面図(S=1/400)	81
図3-63	SR-6(南壁)	82
図3-64	SR-6 堰状遺構(S=1/100)	83
図3-65	SR-6 出土遺物実測図1	84
図3-66	SR-6 出土遺物実測図2	85
図3-67	SR-6 出土遺物実測図3	86
図3-68	SR-6 出土遺物実測図4	87
図3-69	SR-6 出土遺物実測図5	89
図3-70	SR-6 出土遺物実測図6	91
図3-71	SR-6 出土遺物実測図7	92
図3-72	SR-6 出土遺物実測図8	93
図3-73	SR-6 出土遺物実測図9	94
図3-74	SR-6 出土遺物実測図10	95
図3-75	SR-5 出土木製品実測図	96
図3-76	SR-6 出土木製品実測図1	97
図3-77	SR-6 出土木製品実測図2	98
図3-78	SR-5・6 出土木製品実測図1	99
図3-79	SR-6 出土木製品実測図3	100
図3-80	SR-5・6 出土木製品実測図2	101
図3-81	SR-6 出土木製品実測図4	102
図3-82	SR-6 出土木製品実測図5	103
図3-83	SR-6 出土木製品実測図6	104
図3-84	SR-6 出土木製品実測図7	105
図3-85	SR-6 出土木製品実測図8	106
図3-86	SR-6 出土木製品実測図9	107
図3-87	SK-1	108
図3-88	SK-2	109
図3-89	SK-2 出土遺物実測図	109
図3-90	SD-3	109
図3-91	SD-3 出土遺物実測図	109
図3-92	SD-4	110
図3-93	SD-4 出土遺物実測図	111
図3-94	SD-5	111
図3-95	SD-5 出土遺物実測図	112
図3-96	SF-1・2 出土遺物実測図	114
図3-97	SF-3 出土遺物実測図	115
図4-1	II区試料採取位置	117
図4-2	IV区試料採取層準	118

図4-3	Ⅱ区2地点の主要珪藻化石群集の層位分布	128
図4-4	Ⅳ区1地点の主要珪藻化石群集の層位分布	132
図4-5	Ⅱ区1地点の主要花粉化石群集の層位分布	135
図4-6	Ⅱ区2地点の主要花粉化石群集の層位分布	135
図4-7	Ⅱ区3地点の主要花粉化石群集の層位分布	135
図4-8	Ⅳ区1・2・3地点の主要花粉化石群集の層位分布	136
図4-9	Ⅱ区1地点での植物珪酸体含量の層位的変化	137
図4-10	Ⅱ区2地点での植物珪酸体含量の層位的変化	138
図4-11	Ⅱ区3地点での植物珪酸体含量の層位的変化	138
図4-12	Ⅳ区1・2・3地点での植物珪酸体含量の層位的変化	139
図4-13	Ⅱ区の堆積層柱状模式断面図と分析試料採取層準の位置	145
図4-14	Ⅳ区に累重する堆積層の柱状模式断面図	146
図4-15	調査地点位置図	147
図4-16	香長平野の地形と遺跡の立地	147
図4-17	花宴遺跡周辺地形分布図	148
図4-18	花宴遺跡の東西方向の堆積物累重状況	151
図4-19	Ⅰ～Ⅳ区の弥生時代以降の堆積層の累重	153
図4-20	分析試料No.1の暦年補正データ	167
図4-21	分析試料No.2の暦年補正データ	167
図4-22	分析試料No.3の暦年補正データ	168
図5-1	自然流路の変遷	175
図5-2	自然流路の規模と検出標高	175
図5-3	堰状遺構断面図	176
図5-4	微隆起突帯の諸種	178
図5-5	儀杖形木製品と花宴遺跡出土威儀具	180

表目次

表1	自然流路計測表	xiii
表2	土坑計測表	xiii
表3	溝跡計測表	xiv
表4	祭祀関連遺構計測表	xiv
表5	性格不明遺構計測表	xiv
表1-1	花宴遺跡周辺の遺跡一覧表	9
表4-1	放射性炭素年代測定結果	121
表4-2	暦年較正結果(1)	122
表4-3	暦年較正結果(2)	123

表4-4 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群.....	124
表4-5 II区2地点珪藻分析結果(1).....	125
表4-6 II区2地点珪藻分析結果(2).....	126
表4-7 II区2地点珪藻分析結果(3).....	127
表4-8 IV区1地点珪藻分析結果(1).....	129
表4-9 IV区1地点珪藻分析結果(2).....	130
表4-10 IV区1地点珪藻分析結果(3).....	131
表4-11 花粉分析結果(1).....	133
表4-12 花粉分析結果(2).....	134
表4-13 植物珪酸体含量.....	137
表4-14 種子分析結果.....	140
表4-15 大型植物化石の記載(1).....	141
表4-16 大型植物化石の記載(2).....	142
表4-17 樹種同定結果.....	143
表4-18 材化石の記載.....	144
表4-19 花宴遺跡出土弥生土器付着炭化物の放射性炭素年代測定結果.....	166
表4-20 分析試料の補正年代.....	166

遺物観察表目次

I区 遺物観察表 1 (1001～1025).....	185
I区 遺物観察表 2 (1026～1050).....	186
I区 遺物観察表 3 (1051～1068).....	187
II区 遺物観察表 1 (2001～2025).....	188
II区 遺物観察表 2 (2026～2050).....	189
II区 遺物観察表 3 (2051～2075).....	190
II区 遺物観察表 4 (2076～2100).....	191
II区 遺物観察表 5 (2101～2125).....	192
II区 遺物観察表 6 (2126～2150).....	193
II区 遺物観察表 7 (2151～2175).....	194
II区 遺物観察表 8 (2176～2200).....	195
II区 遺物観察表 9 (2201～2225).....	196
II区 遺物観察表10 (2226～2250).....	197
II区 遺物観察表11 (2251～2275).....	198
II区 遺物観察表12 (2276～2294).....	199
III区 遺物観察表 1 (3001～3025).....	200
III区 遺物観察表 2 (3026～3050).....	201

Ⅲ区 遺物観察表 3 (3051～3062).....	202
Ⅳ区 遺物観察表 1 (4001～4025).....	203
Ⅳ区 遺物観察表 2 (4026～4050).....	204
Ⅳ区 遺物観察表 3 (4051～4075).....	205
Ⅳ区 遺物観察表 4 (4076～4100).....	206
Ⅳ区 遺物観察表 5 (4101～4125).....	207
Ⅳ区 遺物観察表 6 (4126～4150).....	208
Ⅳ区 遺物観察表 7 (4151～4175).....	209
Ⅳ区 遺物観察表 8 (4176～4200).....	210
Ⅳ区 遺物観察表 9 (4201～4225).....	211
Ⅳ区 遺物観察表10 (4226～4250).....	212
Ⅳ区 遺物観察表11 (4251～4275).....	213
Ⅳ区 遺物観察表12 (4276～4300).....	214
Ⅳ区 遺物観察表13 (4301～4325).....	215
Ⅳ区 遺物観察表14 (4326～4350).....	216
Ⅳ区 遺物観察表15 (4351～4375).....	217
Ⅳ区 遺物観察表16 (4376～4400).....	218
Ⅳ区 遺物観察表17 (4401～4425).....	219
Ⅳ区 遺物観察表18 (4426～4450).....	220
Ⅳ区 遺物観察表19 (4451～4475).....	221
Ⅳ区 遺物観察表20 (4476～4492).....	222

写真目次

写真2-1 Ⅱ区発掘調査風景.....	12
写真2-2 Ⅱ区埋め戻し風景.....	12
写真2-3 Ⅲ区発掘調査風景.....	13
写真2-4 Ⅳ区発掘調査風景.....	14
写真2-5 Ⅳ区堰状遺構発掘調査風景1.....	14
写真2-6 Ⅳ区堰状遺構発掘調査風景2.....	15
写真4-1 Ⅱ区北壁断面の流路堆積物断面.....	145
写真4-2 Ⅳ区E2中央バンク深掘断面(西端部).....	149
写真4-3 Ⅳ区E2中央バンク断面(東端部).....	150
写真4-4 Ⅳ区E2 SD-3断面と試料採取状況.....	150
写真4-5 Ⅳ区W北壁断面.....	152
写真4-6 Ⅳ区W2北壁断面最下部埋没段丘堆積層.....	152
写真4-7 Ⅱ区北壁断面深掘状況.....	154

図版目次

- 図版1 調査前全景(北より)
調査前全景(東より)
- 図版2 I区 遺構検出状態(北より)
I区 遺構完掘状態(北より)
- 図版3 I区 遺構検出状態(南より)
I区 遺構完掘状態(南より)
- 図版4 I区 遺構完掘状態(上空より)
I区 遺構完掘状態(西上空より)
- 図版5 I区 西壁セクション(東より)
I区 下層確認トレンチセクション(東より)
- 図版6 I区 SR-1北バンク(南より)
I区 SR-1南バンク(南より)
- 図版7 I区 SR-1(東より)
I区 SR-1(西より)
- 図版8 I区 SD-1(南東より)
I区 SD-1(東より)
- 図版9 I区 SD-2(南東より)
I区 SD-2(南東より)
- 図版10 I区 SR-1弥生土器壺(1004)出土状態
I区 SR-1弥生土器甕(1024)出土状態
- 図版11 II区 上面遺構検出状態(北より)
II区 上面遺構完掘状態(北より)
- 図版12 II区 上面遺構検出状態(南より)
II区 上面遺構完掘状態(南より)
- 図版13 II区 上面遺構完掘状態(上空より)
II区 上面遺構完掘状態(東上空より)
- 図版14 II区 北壁セクション(南より)
II区 上面中央バンクセクション(南より)
- 図版15 II区 北壁セクション(南より)
II区 北壁セクション(南より)
- 図版16 II区 SR-3(南より)
II区 SR-3護岸跡(東より)
- 図版17 II区 下面遺構検出状態(北より)
II区 下面遺構完掘状態(北より)
- 図版18 II区 下面遺構検出状態(南より)
II区 下面遺構完掘状態(南より)
- 図版19 II区 下面遺構完掘状態(東上空より)
II区 下面遺構完掘状態(上空より)
- 図版20 II区 下面中央バンクセクション(南より)
II区 SR-2(南より)
- 図版21 II区 SR-2弥生土器壺(2010)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2019)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2030)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2031・2058)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2032)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2033)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2038)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2060)出土状態
- 図版22 II区 SR-2弥生土器壺(2062)出土状態
II区 SR-2弥生土器壺(2102)出土状態
II区 SR-2弥生土器甕(2141)出土状態
II区 SR-2弥生土器甕(2159)出土状態
II区 SR-2弥生土器甕(2184)出土状態
II区 SR-2弥生土器鉢(2256)出土状態
II区 SR-3弥生土器甕(2283)出土状態
II区 SR-3ミニチュア土器(2294)出土状態
- 図版23 III区 遺構検出状態(北より)
III区 遺構完掘状態(北より)
- 図版24 III区 遺構検出状態(北東より)
III区 遺構完掘状態(北東より)
- 図版25 III区 遺構検出状態(南より)
III区 遺構完掘状態(南より)
- 図版26 III区 遺構完掘状態(上空より)
III区 遺構完掘状態(北上空より)
- 図版27 III区 中央バンクセクション(南より)
III区 下層確認トレンチセクション(南より)
- 図版28 III区 SR-4(南より)
III区 SR-4杭列検出状態(東より)

- 図版29 Ⅲ区 SR-4 弥生土器甕(3035)出土状態
Ⅲ区 SR-4 弥生土器甕(3036)出土状態
- 図版30 Ⅲ区 SR-4 ミニチュア土器(3061)出土状態
Ⅲ区 SR-4 石庖丁(3062)出土状態
- 図版31 IV区 W 遺構検出状態(北西より)
IV区 W 遺構検出状態(西より)
- 図版32 IV区 W 遺構完掘状態(西上空より)
IV区 W 遺構完掘状態(南上空より)
- 図版33 IV区 W 遺構完掘状態(北上空より)
IV区 W 遺構完掘状態(東上空より)
- 図版34 IV区 SR-6 堰状遺構(南東より)
IV区 SR-6 堰状遺構(北東より)
- 図版35 IV区 W 東壁セクション(西より)
IV区 W 中央バンクセクション(南西より)
- 図版36 IV区 SD-5 (南西より)
IV区 SD-5 弥生土器甕(4475)出土状態
- 図版37 IV区 SF-1 (東より)
IV区 SF-1 弥生土器壺(4482)出土状態
- 図版38 IV区 SF-3 (北西より)
IV区 SF-3 弥生土器甕(4490)出土状態
- 図版39 IV区 W 遺構検出状態(南より)
IV区 W 遺構完掘状態(南より)
- 図版40 IV区 E 遺構検出状態(南より)
IV区 E 遺構完掘状態(南より)
- 図版41 IV区 E 遺構完掘状態(西上空より)
IV区 E 遺構完掘状態(上空より)
- 図版42 IV区 W 中央バンクセクション(南より)
IV区 W 下層確認トレンチセクション(南より)
- 図版43 IV区 E 下層確認トレンチセクション(南より)
IV区 SD-3 (東より)
- 図版44 IV区 SR-6 堰状遺構断面(西より)
IV区 SR-6 木製品出土状態(南西より)
IV区 SR-6 木製品出土状態(北より)
IV区 SR-6 木製品出土状態(東より)
IV区 SD-4 (南より)
- IV区 SD-5 (南より)
IV区 SR-5 杭列検出状態(南西より)
IV区 SR-5 杭列検出状態(西より)
- 図版45 IV区 第Ⅷ層弥生土器壺(4005)出土状態
IV区 第Ⅸ層弥生土器甕(4008)出土状態
IV区 第Ⅺ層弥生土器鉢(4016)出土状態
IV区 SR-6 炭化米出土状態
IV区 SR-6 弥生土器壺(4297)出土状態
IV区 SR-6 弥生土器甕(4342)出土状態
IV区 SR-6 弥生土器鉢(4379)出土状態
IV区 SR-6 弥生土器鉢(4389)出土状態
- 図版46 IV区 SR-6 木製品曲柄鋤(4416)出土状態
IV区 SR-6 木製品組合わせ鋤(4417)出土状態
IV区 SR-6 木製品一本鋤(4419)出土状態
IV区 SR-6 木製品田下駄(4420)出土状態
IV区 SR-6 木製品堅杵(4424)出土状態
IV区 SR-6 木製品槽(4429)出土状態
IV区 SR-6 木製品鳥形(4436)出土状態
IV区 SR-6 木製品梯子(4442)出土状態
- 図版47 IV区 SR-5 弥生土器壺(4050)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器壺(4052)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器壺(4056)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器壺(4082)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器壺(4089)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器壺(4097)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器壺(4133)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器甕(4182)出土状態
- 図版48 IV区 SR-5 弥生土器甕(4189)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器高杯(4253)出土状態
IV区 SR-5 弥生土器蓋(4270)出土状態
IV区 SR-5 ミニチュア土器(4277)出土状態
IV区 SR-5 ミニチュア土器(4279)出土状態
IV区 SR-5 ガラス玉(4287)出土状態
IV区 SR-5 木製品横槌(4426)出土状態
IV区 SR-5 木製品威儀具(4438)出土状態

图版49	木製品(威儀具保存処理後)	弥生土器(甕)
图版50	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版69 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版51	弥生土器(壺) 弥生土器(甕)	图版70 弥生土器(甕) 弥生土器(鉢)
图版52	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版71 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版53	弥生土器(甕) 弥生土器(壺)	图版72 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版54	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版73 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版55	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版74 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版56	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版75 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版57	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版76 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版58	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版77 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版59	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版78 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版60	弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	图版79 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版61	弥生土器(壺) 弥生土器(甕)	图版80 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版62	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版81 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版63	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版82 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版64	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版83 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版65	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版84 弥生土器(高杯) 弥生土器(鉢)
图版66	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版85 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)
图版67	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	图版86 弥生土器(甕) 弥生土器(甕)
图版68	弥生土器(甕)	图版87 弥生土器(甕)

	弥生土器(甕)	図版118	弥生土器(甕)
図版 88	弥生土器(鉢) 木製品(器具の部材)	図版119	弥生土器(甕・高杯・鉢)
図版 89	弥生土器(甕) 弥生土器(甕)	図版120	弥生土器(鉢・蓋・ミニチュア土器)
図版 90	木製品(田下駄・鳥形・壁板) 木製品(壁板・横架材・器具の部材)	図版121	弥生土器(ミニチュア土器)
図版 91	弥生土器(壺・甕), 鉄製品(鉄鏃)	図版122	弥生土器(壺・甕), 石製品(磨石)
図版 92	弥生土器(壺・甕)	図版123	弥生土器(甕・鉢)
図版 93	弥生土器(甕), 木製品(槽・組合せ鋤)	図版124	弥生土器(鉢・丸底鉢), 石製品(叩石), 木製品(横槌・皿・槽・側板)
図版 94	弥生土器(甕), 木製品(底板・威儀具保存処理前)	図版125	弥生土器(壺・甕), 石製品(台石・磨石・叩石)
図版 95	弥生土器(壺・甕)	図版126	弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器), 土製品(紡錘車), 古銭(寛永通宝)
図版 96	木製品(掛矢・曲柄又鋏)	図版127	弥生土器(壺・甕)
図版 97	木製品(組合せ鋤・一本鋤・竖杵)	図版128	弥生土器(甕・鉢・高杯)
図版 98	木製品(横槌・槽・舟形・椅子・梯子)	図版129	弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器)
図版 99	木製品(榍形材・方形隅柱・壁板・横架材)	図版130	弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器), 土師質土器(椀)
図版100	木製品(敷居板・大引・建築部材・器具の部材)	図版131	弥生土器(壺・甕・高杯・ミニチュア土器), 石製品(石庖丁)
図版101	弥生土器(壺・甕)	図版132	弥生土器(壺・甕)
図版102	弥生土器(壺)	図版133	弥生土器(甕)
図版103	弥生土器(甕)	図版134	弥生土器(壺・甕・鉢・ミニチュア土器), ガラス玉
図版104	弥生土器(壺・甕)	図版135	弥生土器(甕・鉢)
図版105	弥生土器(甕)	図版136	弥生土器(鉢)
図版106	弥生土器(甕・甌)	図版137	弥生土器(鉢), 石製品(石庖丁), 木製品(側板)
図版107	弥生土器(甕・ミニチュア土器), 石製品(台石), 木製品(直柄平鋏)	図版138	弥生土器(壺・甕・鉢), 木製品(椅子・屋根材・壁板・床か壁板・大輪・建築部材)
図版108	弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器)	自然科学分析	
図版109	弥生土器(壺・ミニチュア土器)	図版139	珪藻化石(平成17年度実施分)
図版110	弥生土器(壺)	図版140	花粉化石(平成17年度実施分)
図版111	弥生土器(壺・甕)	図版141	植物珪酸体(平成17年度実施分)
図版112	弥生土器(壺・甕・鉢・蓋・ミニチュア土器)	図版142	大型植物遺体(平成17年度実施分)
図版113	弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器), 歯牙	図版143	木材1(平成17年度実施分)
図版114	弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器)	図版144	木材2(平成17年度実施分)
図版115	弥生土器(壺・甕・鉢)	図版145	木材3(平成17年度実施分)
図版116	弥生土器(壺)	図版146	木材4(平成17年度実施分)
図版117	弥生土器(壺・甕)		

図版147 珪藻化石(平成18年度実施分)	図版156 木製品の木材 2 (平成 18 年度保存処理実施分)
図版148 花粉化石(平成18年度実施分)	図版157 木製品の木材 3 (平成 18 年度保存処理実施分)
図版149 植物珪酸体(平成18年度実施分)	図版158 木製品の木材 4 (平成 18 年度保存処理実施分)
図版150 木本種実(平成18年度実施分)	図版159 木製品の木材 5 (平成 18 年度保存処理実施分)
図版151 草本種実(平成18年度実施分)	図版160 木製品の木材 6 (平成 19 年度保存処理実施分)
図版152 木材 1 (平成18年度実施分)	
図版153 木材 2 (平成18年度実施分)	
図版154 木材 3 (平成18年度実施分)	
保存処理木製品の樹種	
図版155 木製品の木材 1 (平成 17 年度保存処理実施分)	

付図目次

付図1 花宴遺跡 I 区遺構平面図(S=1/200)
付図2 花宴遺跡 II 区下面遺構平面図(S=1/200)
付図3 花宴遺跡 II 区上面遺構平面図(S=1/200)
付図4 花宴遺跡 III 区遺構平面図(S=1/200)
付図5 花宴遺跡 IV 区下面遺構平面図(S=1/200)
付図6 花宴遺跡 IV 区上面遺構平面図(S=1/200)

表1 自然流路計測表

遺構番号	形状	規模(m)			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長	幅	深さ		
SR-1	南北溝	55.0	2.80 ~ 3.80	0.66 ~ 0.83	N-163°-E~N-171°-W	
SR-2	南北溝	57.0	4.65 ~ 6.32	0.75 ~ 1.19	N-170°-E~N-159°-E	
SR-3	南北溝	56.0	2.18 ~ 3.97	0.39 ~ 0.56	N-169°-E~N-173°-W~N-152°-E	
SR-4	南北溝	54.0	3.13 ~ 4.35	0.85 ~ 1.09	N-153°-E~N-174°-W~N-157°-E	
SR-5	南北溝	41.0	31.01 ~ 45.07	1.57 ~ 1.67	N-167°-W	
SR-6	南北溝	48.0	5.65 ~ 10.04	0.22 ~ 0.77	N-109°-W~N-175°-W	

表2 土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-1	舟形	3.28	0.78	31	N - 38° - W	
SK-2	舟形	2.41	0.88	11	N - 13° - W	
SK-3	舟形	3.90	1.25	11	N - 73° - E	

遺構計測表

表3 溝跡計測表

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-1	東西溝	5.22	0.50～0.98	6～17	N-68°-W	
SD-2	東西溝	8.70	0.28～0.84	2～16	N-128°-E	
SD-3	南北溝	14.55	0.38～0.89	4～21	N-2°-E	
SD-4	南北溝	10.04	0.84～3.54	16～47	N-171°-W	
SD-5	南北溝	30.11	0.83～5.19	12～64	N-174°-W	

表4 祭祀関連遺構計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SF-1	不整円形	3.39	3.32	-	-	
SF-2	〃	4.31	4.00	-	-	
SF-3	〃	4.60	2.90	-	-	

表5 性格不明遺構計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SX-1	不整形	3.46	1.92	7～39	N-28°-E	
SX-2	不整形	6.02	1.86	2～11	N-0°-E	

第I章 序 章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が平成17年度と平成18年度に国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下「埋蔵文化財センター」という。）が高知県教育委員会から受託した花宴遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省（四国地方整備局土佐国道事務所）が計画し、実施している一般国道55号南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡（埋蔵文化財）について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

花宴遺跡は、平成16年度から実施した香我美地区の試掘調査によって新たに発見された遺跡で、本書で報告するのは平成17年度と平成18年度に行った花宴遺跡の発掘調査の報告である。

確認された遺構は自然流路を中心とした弥生時代の遺構で、4ヵ所（Ⅰ～Ⅳ区）に分かれる。Ⅳ区については、確認調査で検出した自然流路（SR-6）の下層からさらに別の自然流路（SR-5）が確認されたため、下層の自然流路（SR-5）については翌平成18年度に発掘調査を実施した。

現在、花宴遺跡は香宗川左岸の三角州平野に所在し、後背湿地の様相を呈する。調査と並行して実施した花粉分析などの自然科学分析でも古代以降黒褐色腐食質の泥層の累重が認められ、湿生な環境であったものと推定されている。一方、自然流路や自然堤防が形成され、人為的な痕跡が残る弥生時代には、河川攪乱の頻度が高く、氾濫原面が約2.0m上昇しており、相対的に乾燥した土壌環境が形成されていたとみられる。それ故に、遺構が形成されたとみることができ、Ⅳ区のSR-6で検出した県内初の堰状遺構を始めとして多くの木製品が出土し、中でもSR-5から出土した威儀具は注目される。

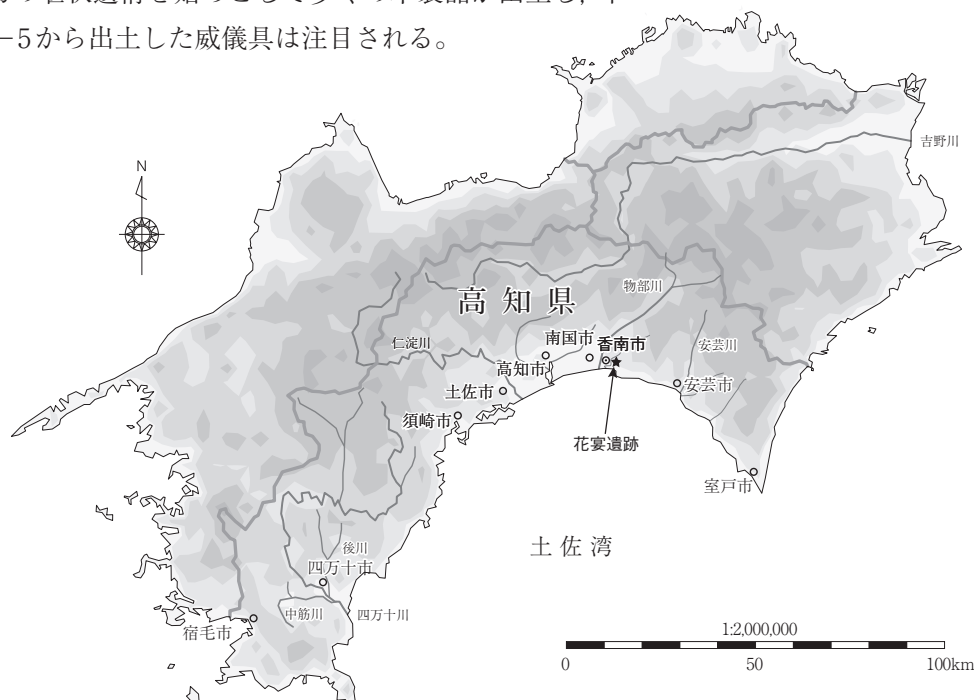


図1-1 花宴遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

南国安芸道路は、高知市～安芸市間 36 kmを結ぶ一般国道 55 号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、高知南国道路、四国横断自動車道と接続し、広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和 62 年、国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。

埋蔵文化財について埋蔵文化財センターを交え具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からである。まず、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて高知県教育委員会を交え調整を行った。その結果、当面の工事予定区域について周知の遺跡も存在するものこれまでに発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所から順次試掘調査を行うこととなった。なお、試掘調査は、平成 15～18 年度が埋蔵文化財センター、平成 19 年度からは高知県教育委員会が実施すると共に調整業務も行っている。

発掘調査は、埋蔵文化財センターが国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け、平成 15 年度以降継続的¹⁾に実施しており、南国安芸道路関係では、口楨ヶ谷遺跡(平成 16・17 年度)、花宴遺跡(平成 17・18 年度)、坪井遺跡(平成 18 年度)、徳王子広本遺跡(平成 19 年度)、徳王子大崎遺跡(平成 20・22 年度)、徳王子前島遺跡(平成 19～21 年度)、東野土居遺跡(平成 21～24 年度)の調査を実施している。

一方、整理業務も並行して行っているが、報告書の刊行は平成 20・21 年度はなく、これまでに刊行したのは『口楨ヶ谷遺跡』(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)平成 20 年 3 月のみで、本年度、本書の『花宴遺跡』(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ)と『徳王子前島遺跡』(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)を刊行する。

(2) 確認調査

ここでは、平成 16～18 年度に実施した香我美町徳王子地区の確認調査について記す。確認調査は土地の買収が完了した部分から順次実施し、新たに 4 遺跡を発見した。なお、確認調査を実施するまでは工事予定区域に周知の遺跡はなかったが、遺跡の立地に適するとみられる丘陵が存在した。なお、後述するが周辺には古墳 2 基、古代の窯跡 1 基、中世の城跡 2 城が確認されていた。

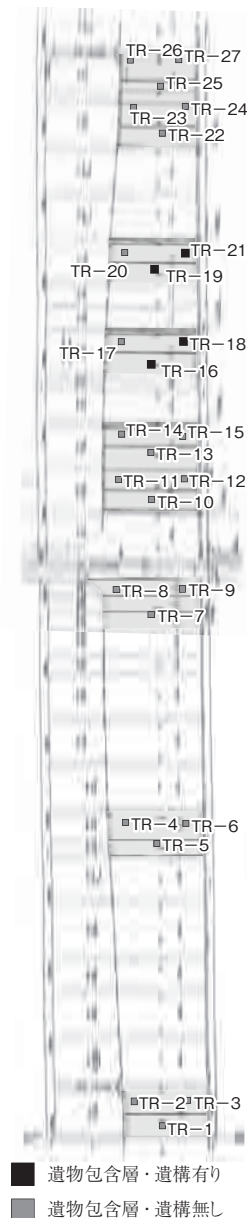


図1-2 平成16年度香我美地区
試掘調査位置図(S=1/5,000)

① 調査の概要

平成16年度は平成17年2月21日～3月15日にかけて西側の平野部に27ヵ所のトレンチを設定して調査を行った。その結果、自然流路が2ヵ所で検出されたことにより、新たに花宴遺跡が確認された。平成17年度は土地の公有化が進んだこともあり、70ヵ所にトレンチを設定して試掘調査を行った。試掘調査は3回に分けて実施し、第1回は平成17年9月12日～10月19日で、TR-1～35について、第2回は平成17年12月19日～12月21日で、TR-36～41について、第3回は平成18年1月24日～2月23日で、TR-42～70についてそれぞれ実施した。その結果、花宴遺跡の範囲が拡大すると共に新たに3遺跡(徳王子大崎遺跡、徳王子広本遺跡、徳王子前島遺跡)が発見された。平成18年度には花宴遺跡の西側の平野部の確認調査を実施したが、遺跡の広がりには確認できなかった。

花宴遺跡

平成16年度の試掘調査のTR-16・18・19・21から弥生時代中期とみられる自然流路を2条検出したことにより、遺跡の存在が判明したもので、平成17年度にはTR-3・4・9・11・13の5ヵ所で、弥生時代前期と考えられる自然流路1条、弥生時代中期と考えられる自然流路3条を検出した。さらに、東側のTR-14～16・18の4ヵ所のトレンチからは弥生時代中期～後期の自然流路を検出し、東に隣接するTR-17・19では遺構は検出できなかったものの、当該期の遺物包含層を確認し、遺跡の範囲が拡大した。その結果、TR-3・4(I区)、TR-9(II区)、TR-11・13(III区)、TR-14～16周辺(IV区)について本発掘調査が必要となり、平成17年度の確認調査終了後、引き続き発掘調査を実施した。なお、前述のとおりIV区では下層から新たに自然流路(SR-5)が確認されたため、それについては平成18年度に調査を実施した。

徳王子大崎遺跡

平成17年度、丘陵先端部に設定したTR-48～50から弥生時代中期の竪穴建物跡と中世の溝跡、ピットが検出されたことにより新たに確認された遺跡で、平成20年度に発掘調査を実施した。なお、未買収地として残っていた部分については平成22年度に調査を行う予定である。

徳王子広本遺跡

平成17年度、東西の丘陵間の低地に設定したTR-51～56・58から中世の溝跡、ピット、自然流路、下層からは弥生時代の自然流路が確認され、東側の丘陵部に設定したTR-60・64～68から中世の土坑、溝跡、ピット等の遺構と共に多量の遺物が出土し、さらにTR-65・66・68では下層から古代のピットが検出され、布目瓦の破片も出土した。これらのことによりその存在が明らかになった遺跡で、平成19年度に発掘調査を実施したが、東側に未調査の未買収地が残る。

徳王子前島遺跡

平成17年度、谷部に設定したTR-69・70から中世のピットと自然流路が確認されたことにより新たに確認された遺跡で、平成19年度に発掘調査を実施した。また、発掘調査終了後に実施した確認調査では西側の平地部分からも弥生時代と古代の自然流路が検出され、遺跡の範囲が広がり、平成20・21年度に発掘調査を実施した。

② 遺跡の概要

平成16年度から実施している香我美地区の確認調査で発見された前述の4遺跡についてその概要を記す。

花宴遺跡

香宗川左岸の三角州平野に立地する弥生時代前期～後期の人為的痕跡が加わった自然流路を中心とした生産関連遺跡である。南流する自然流路が4カ所で確認され、木杭と横木で護岸補強されていた。このうち東側の後期の自然流路からは多量の木製品と共に木杭と建築部材等を転用して構築した県内初の堰状遺構が確認されている。

徳王子大崎遺跡

花宴遺跡の東側の丘陵上に立地する弥生時代の集落遺跡と中世の屋敷跡である。平成20年度に発掘調査が実施され、弥生時代前期前半と後期の竪穴建物跡が確認されると共に屋敷を区画するとみられる中世の溝跡が検出されている。

徳王子広本遺跡

徳王子大崎遺跡の東側の丘陵上を中心に立地する弥生時代、古代～中世の集落遺跡である。平成19年度に発掘調査を実施しており、西側の低地部分では、上層から中世の掘立柱建物跡や溝跡、下層から弥生時代の土坑や祭祀関連ではないかとみられる土器や石器、木製

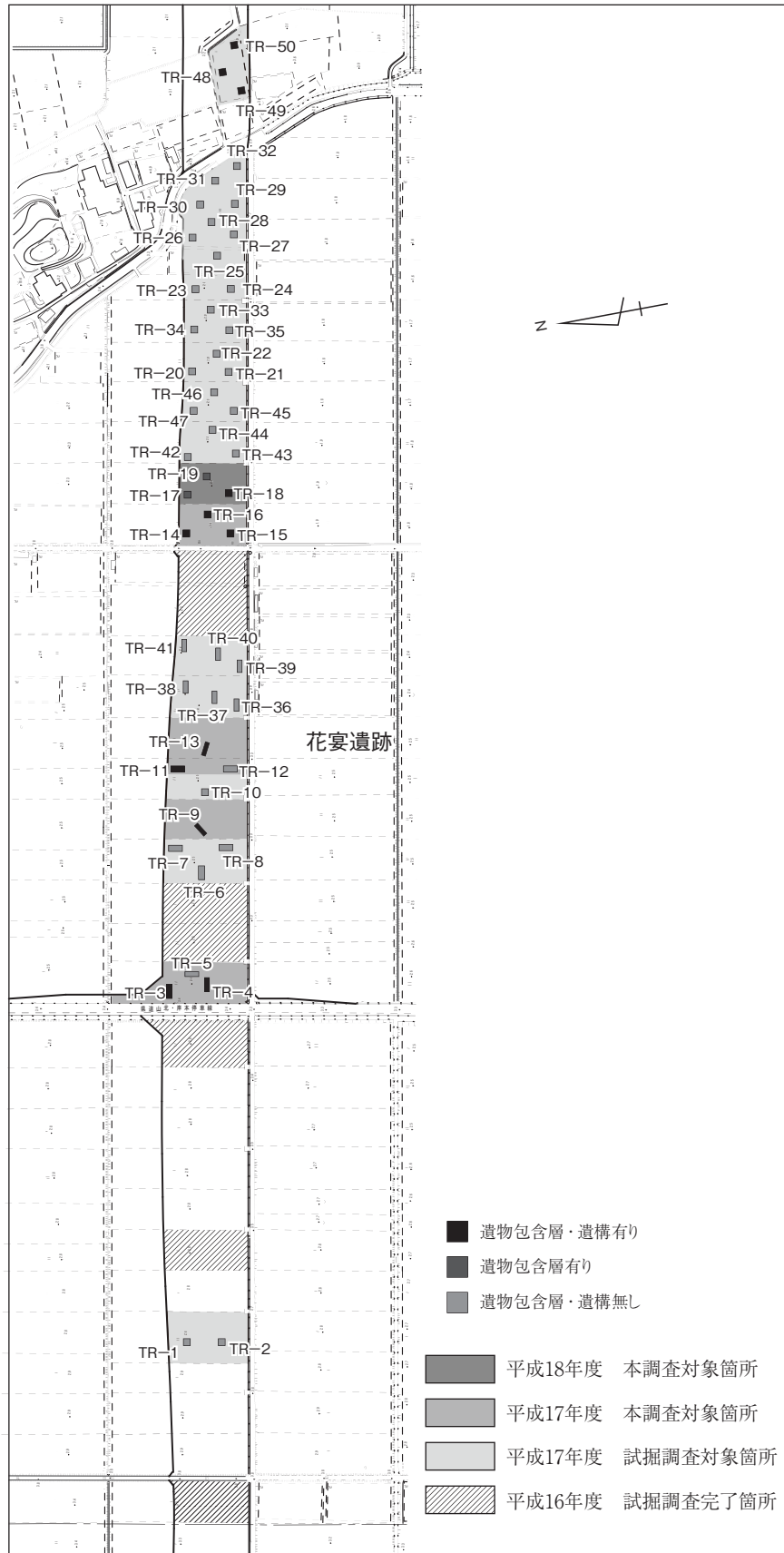


図1-3 平成17年度香我美地区試掘調査位置図1 (S=1/5,000)



図1-4 平成17年度香我美地区試掘調査位置図2 (S=1/5,000)

品を含む幅約 4m, 延長約 20m 集石が検出されている。一方, 東の丘陵上からは弥生時代の土坑, 古代の掘立柱建物跡と溝跡, 中世の溝に囲まれた屋敷跡などが確認されている。

徳王子前島遺跡

徳王子広本遺跡の東側を南流する大留川の左岸の低湿地から谷部に立地する弥生時代から中世にかけての遺跡で, 平成 19～21 年度に発掘調査を実施した。その結果, 東側の谷部からは中世の溝跡やピット群, 西側の低湿地からは弥生時代と古代の自然流路が検出され, 古代の自然流路からは完形の土器と共に多量の木製品が出土している。出土した木製品の中には県内初の木簡を始めとして櫛, 斎串, 人形などがあり注目される。また, 古代の自然流路に沿って, 杭列や足跡などが確認されると共に僅かではあるが畝状の高まりも確認され, 自然流路を利用した水田耕作が行われていたものとみられる。

(3) 調査の方法

試掘調査の結果を受け, 調査範囲 7 ヶ所に世界測地系第 4 座標系(IV系)の基準点(4級)を設置すると共に航空測量を行い 1,000 分の 1 の地形図を作製した。なお, 各調査区に設置した先の基準点(4級)には 4 等水準点を併設するとともに各基準点からの方位標も設定し発掘調査に備えた。

調査区が 4 ヶ所に分れるため各調査区ごとにグリッドを設定して調査に当たった。なお, 遺構図にはグリッド名ではなく座標値を表記している。調査区は X = 61,300, Y = 21,700 (北緯 33° 33' 09", 東経 133° 44' 01", 真北方向角 -0° 07' 45") から X = 61,100, Y = 22,100 (北緯 33° 33' 03", 東経 133° 44' 17", 真北方向角 -0° 07' 54") にかけての範囲である。

調査は, 原則として遺物包含層直上まで機械力を導入し, 遺物包含層以下は人力で行った。なお, 遺物包含層でも遺物量が少ない部分や薄い部分については作業効率を考慮して機械力を導入した。調査区は 4 ヶ所に分れるため, 西から順に I 区, II 区, III 区, IV 区と呼称して調査を行い, 前述のとおり IV 区を調査中, 下層に別の自然流路(SR-5)の存在が判明したため, それについては翌平成 18 年度に調査を実施した。

また, 考古学成果のみではなく, 遺跡の成り立ちを含めた古環境復元にも重点を置き, 地質学や土壌学等関連分野の協力を得て, 自然科学分析を積極的に取り入れた。平成 16 年度までは大阪市自然史博物館故那須孝悌元館長, 平成 17 年度からは大阪市文化財協会(現財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)趙哲濟氏に現地指導を仰いだ。

測量は, 先の基準点を基にした人力での実測と共に産業ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影測量を行うことにより効率化を図った。

通常実施している現地説明会については, 現場状況が悪かったため実施していない。

なお, 発掘調査終了後には埋め戻しを行い現況に復し, 引き渡しを行った。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

今回調査対象地となった花宴遺跡は香宗川左岸の徳王子の平野部に位置し、平成16年度に調査が入るまで周辺で確認されていた遺跡は北側の丘陵部に所在する古墳2基(徳善天皇古墳・螢野古墳)と古代の窯跡(徳善古窯跡群)及び中世の山城(徳善城跡)のみであった。

この香我美地区で実施した一連の調査によって確認された遺跡は、今回報告する花宴遺跡、徳王子大崎遺跡、徳王子広本遺跡、徳王子前島遺跡の4遺跡で、徳王子大崎遺跡と徳王子広本遺跡は丘陵上に立地する。

(1) 地理的環境

遺跡の所在する香南市は平成18(2006)年3月1日、香美郡の夜須町・赤岡町・香我美町・野市町・吉川村が新設合併して誕生した市で、市名の由来は市域が旧香美郡南部を占めていることによる。今回報告する花宴遺跡が所在するのはこの中の香我美町である。

香南市は地理的に高知県の中央部にある高知平野の東側、物部川左岸に位置し、地勢は大きく南部、中部、北部の3地域に分れる。南部地域は土佐湾(太平洋)に面する海岸部と東西に広がる平野部からなり、中部地域は河川の中流域に当り、四国山地から続く山地斜面と丘陵が連なり、里山環境がみられる。北部地域は標高300～600mの四国山地の一部を構成し、四国山地を源流とする物部川、香宗川、山北川、山南川、夜須川が南流する。

次に、地形をみてみると、物部川左岸には下ノ坪遺跡(野市町1997・1998・2000)や深淵遺跡(野市町1989)などが立地する沖積扇状地・自然堤防がみられ、東には一段高くなった台地が香宗川右岸付近まで広がり、遺跡が点在し、東端部には香南市最大規模を誇る東野土居遺跡が所在する。南の海岸部には砂浜と浜堤・砂礫洲が形成され、東部にはクノ丸遺跡(高知県文化財団2010)があり、その背後の香宗川下流部には三角州平野がみられ、花宴遺跡が所在する。山側は丘陵・山地斜面となり、山北川と香宗川中・上流部、山南川および夜須川流域は氾濫原(沖積平野)を形成し、その微高地上には曾我遺跡や下分遠崎遺跡が所在する。

このような地形の中で、一般に遺跡は相対的に乾燥した土壤環境にみられ、氾濫原(沖積平野)の中の微高地上や沖積錐および沖積扇状地・自然堤防から台地上にかけて確認されている。しかし、今回の花宴遺跡のように一見後背湿地とみられる場所から自然流路と堰状遺構などが発見されたことは、遺跡埋没後の自然環境、換言すれば現在の地形的環境での遺跡の有無の判断の難しさを示唆する。遺跡の形成時期の環境については第IV章に譲るが、花宴遺跡が形成された当時(弥生時代前期～後期)は河川攪乱の頻度が高く、相対的に乾燥した土壤環境が形成されていたと考えられている。

今回報告する花宴遺跡は前述のような環境であるが、当時の集落は背後の丘陵部に形成されていたものと推察され、徳王子大崎遺跡などがその候補地の一つとなろう。しかし、その多くは削平を受けており、遺存するのは限られた部分かもしれない。いずれにしても出土遺物とその量から考えて弥生時代前期から後期にかけての一定規模の集落が周辺部に存在したことは間違いのないであろう。中でも、威儀具の存在は注目される。

(2) 歴史的環境

香南市ではこれまでに旧石器時代から近世に至る約150遺跡が確認されており、中でも香我美町、野市町、夜須町に集中する。遺跡の大半は散布地と中世の城館跡で、集落跡と古墳がそれに続く。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

遺物としては夜須町手結遺跡のナイフ形石器を最古として、縄文時代後期の土器が拝原遺跡(香我美町 1993)から出土し、縄文時代晩期の貯蔵穴が香我美町十万遺跡(香我美町 1988)で発見されている。今のところ竪穴建物跡が確認され、明らかに人が居着くようになるのは弥生時代からで、下分遠崎遺跡(香我美町 1987・1989・1993)や十万遺跡で前期末から中期前半、本村遺跡からは前期末から後期初めの集落跡が確認され、今回発見された徳王子大崎遺跡からは前期前半の遺構が検出されている。この一連の調査で確認された他の遺跡(野市町 1993)などからも弥生時代の遺構が確認され、さらに、本年度調査中の野市町東野土居遺跡からも後期後半の竪穴建物跡が多数検出されている。このような状況からすると弥生時代になり徐々に集落が広がっていた様子が看取できる。

ところが、古墳時代になると確認される遺跡は激減する。集落遺跡は4世紀後半から5世紀初めとみられる竪穴建物跡が3棟検出された香我美町拝原遺跡に過ぎず、確認されている古墳の大半は後期古墳で、それも6世紀後半以降で、集落もその時期以降に広がるとみられる。一方、その中で勾玉、管玉、古鏡が出土したといわれる徳善天皇古墳は古い様相を呈し、5世紀に遡る可能性もあるが、詳細は不明である。

古代になると野市町下ノ坪遺跡、深淵遺跡(野市町 1989)、曾我遺跡(野市町 1989)、香我美町十万遺跡で官衙関連遺構が確認されている。性格については、十万遺跡が豪族の館ではなかったかとみられる以外は、明確な性格付けはなされていないものの、深淵遺跡と曾我遺跡が郷家に関係したものではないかとの見方もある。下ノ坪遺跡からは県下最大級の掘立柱建物跡が復元され、さらに全国でも出土例の少ない八稜鏡が出土しており、その性格が注目される。いずれにしても、律令制度が浸透すると共に中央との紐帯がみられる。今回確認された徳王子前島遺跡からは前述のように県内初の木簡を始めとして櫛、斎串、人形などが出土すると共に軒丸瓦もみられ、県内の古代祭祀と古代寺院の研究に一石を投じている。

中世以降は、山城跡が各所にみられると共に平野部にも遺跡が散見されるようになる。今回発見した花宴遺跡を除く各遺跡からも遺構と遺物が検出され、屋敷跡の一角も確認されており、時代が下るに従って遺跡の広がりが窺える。

註

(1) 平成 20 年度は道路特定財源が一般財源化される問題で4月当初には契約できず、契約が締結されたのは平成 20 年 6 月 6 日であった。また、平成 19 年度からは高知西バイパスについても高知南国道路外の事業の一つとして高知県教育委員会が業務委託を受け実施している。平成 21 年度は高知南国道路が一時凍結路線(平成 21 年 3 月 31 日に凍結発表)となり、凍結が解除され再開したのは7月からであった。また、この間、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から報告書の印刷部数について問題提起され、高知県教育委員会との間で協議を重ねた結果、決着したのは平成 22 年度経費積算段階であった。

参考文献

- 高知県文化財団 2010『クノ丸遺跡』
- 香我美町教育委員会 1987『下分遠崎遺跡試掘調査概要』
- 香我美町教育委員会 1988『十万遺跡』
- 香我美町教育委員会 1989『下分遠崎遺跡(Ⅰ)』
- 香我美町教育委員会 1993『下分遠崎遺跡(Ⅱ)』



図1-5 花宴遺跡周辺の遺跡(S=1/25,000)

表1-1 花宴遺跡周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	中山田土居遺跡	中世	13	曾我遺跡	弥生～中世	25	螢野古墳	古墳
2	東野遺跡	古代	14	下分遠崎遺跡	弥生	26	徳善古窯跡群	古代
3	香宗城跡	中世	15	中城跡	中世	27	徳善天皇古墳	古墳
4	香宗遺跡	中世	16	嗚呼遺跡	古墳～古代	28	花宴遺跡	弥生
5	東野土居遺跡	弥生～近世	17	岡城跡	中世	29	徳王子大崎遺跡	弥生・中世
6	宝鏡寺跡	中世	18	拝原城跡	〃	30	徳王子広本遺跡	弥生～中世
7	平井遺跡	古墳～古代	19	拝原遺跡	弥生～中世	31	徳王子前島遺跡	〃
8	ハザマ遺跡	弥生～中世	20	東十万城跡	中世	32	徳善城跡	中世
9	大東遺跡	古墳～古代	21	十万遺跡	弥生～中世	33	西峰城跡	中世
10	須留田城跡	中世	22	十万城跡	中世	34	クノ丸遺跡	古墳・中世
11	御所の前遺跡	弥生～中世	23	国吉城跡	〃	35	姫倉城跡	中世
12	江見遺跡	古墳	24	刈谷城跡	〃	36	加治ヶ山古墳	古墳

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

- 香我美町教育委員会 1993『拝原遺跡』
野市町教育委員会 1989『深淵遺跡発掘調査報告書』
野市町教育委員会 1989『曾我遺跡発掘調査報告書』
野市町教育委員会 1993『野市町本村遺跡調査報告書』
野市町教育委員会 1997『下ノ坪遺跡Ⅰ』
野市町教育委員会 1998『下ノ坪遺跡Ⅱ』
野市町教育委員会 2000『下ノ坪遺跡Ⅲ』

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経緯

(1) 調査の経緯

花宴遺跡は平成16年度に実施した高知東部自動車道南国安芸道路建設工事に伴う事前の試掘調査によって、確認された遺跡で、字名の「花宴」をとって遺跡名とした。翌平成17年度の試掘調査では新たに西側と東側で遺物を含む自然流路が検出され、遺跡の範囲が広がった。なお、地名が「花宴」となっているのは、昭和54年に完成した徳王子地区の圃場整備事業に伴って地名の変更が行われ、源氏物語に因んだ名称が付されたことによる。

発掘調査については、平成16年度の試掘調査結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所との間で協議を重ねた結果、平成17年度に口檜ヶ谷遺跡の残りの発掘調査終了後、夜須西地区と香我美地区の試掘調査の結果を受けて、実施することとなった。平成17年度の試掘調査によって、遺跡の範囲が広がり、調査区が2カ所増えたことにより、2パーティーで実施することとなった。発掘調査は、Ⅰ区(第Ⅰ調査区)からⅣ区(第Ⅳ調査区)に分けて行うこととした。1パーティーはⅠ～Ⅲ区の発掘調査を行い、もう一方のパーティーは西野々遺跡Ⅳ区の調査終了後、発掘調査に加わり、Ⅳ区の発掘調査を行うこととし、平成17年度中に完了する計画で着手した。ところが、Ⅳ区の発掘調査途中で新たに自然流路(SR-5)が確認されたため、再度協議を行い、新たに確認された自然流路(SR-5)については平成18年度に改めて行うこととし、Ⅳ区については安全のために一度埋め戻すこととなった。

調査期間は、平成17年度が平成17(2005)年11月1日～平成18(2006)年3月21日、平成18年度が平成18年4月21日～8月28日であった。また、調査面積は、平成17年度が5,163㎡、平成18年度が2,140㎡であり、合計7,303㎡であった。なお、各地区の調査期間は次項のとおりである。

(2) 調査日誌抄

Ⅰ区(第Ⅰ調査区)

平成17(2005)年11月1日～12月8日(実働24日)……………

- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 11.1 安全柵を設置し、表土掘削を行う。 | 11.16 職員研修のため現場作業を休止する。 |
| 11.2 引き続き表土掘削を行い、矢板を1部打設する。 | 11.17 機械掘削を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。 |
| 11.4 引き続き表土掘削を行う。 | 11.18 遺構調査を開始する。 |
| 11.7 雨天のため現場作業を中止する。 | 11.19 SR-1の調査を行う。 |
| 11.8 表土掘削を終了し、遺構検出面までの機械掘削を南西隅から開始する。 | 11.21 引き続きSR-1の調査及び堆積土層の写真撮影を行う。 |
| 11.9 引き続き機械掘削を行う。 | 11.22 引き続きSR-1の調査及び堆積土層の図面作成を行う。 |
| 11.10 機械掘削及び遺構検出を行う。 | 11.24 SR-1の調査及び図面作成を行う。 |
| 11.11 雨天のため現場作業を中止する。 | 11.25 SR-1の調査をほぼ終了する。 |
| 11.14 機械掘削及び調査区周囲に配水用のトレンチを掘削する。 | 11.28 SR-1の調査を終了し、清掃作業を開始する。 |
| 11.15 職員研修のため現場作業を休止する。 | |

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 11.29 図面作成及び測量を行う。
- 11.30 清掃作業を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 12.1 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 12.2 下層確認トレンチの設定及び調査を行う。
- 12.3 埋め戻し作業を開始する。
- 12.5 下層確認調査並びに埋め戻し作業を行う。
- 12.6 埋め戻し作業及び矢板の撤去を行う。
- 12.7 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 12.8 埋め戻し作業と安全柵の撤去を終了し、I区の調査を全て完了する。

II区(第II調査区)

平成17(2005)年12月8日～平成18(2006)年2月9日(実働38日)……………

- 12.8 安全柵を設置し表土掘削を行う。
- 12.9 引き続き表土掘削を行う。
- 12.12 表土掘削をほぼ終了する。
- 12.13 表土掘削を終了し、機械掘削を南西隅から開始する。
- 12.14 遺構検出を行う。
- 12.15 清掃作業後、第1次遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 12.16 遺構調査を開始する。
- 12.19 SR-3の調査及び図面作成を行う。
- 12.20 引き続きSR-3の調査を行う。
- 12.21 SR-3の調査をほぼ終了し、清掃作業を開始する。
- 12.22 積雪のため現場作業を中止する。
- 12.26 清掃作業を終了し、第1次遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 12.27 第1次遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 1.4 第2次面の機械掘削及び遺構検出を行う。
- 1.5 清掃作業後、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 1.6 遺構調査を開始する。
- 1.10 SR-2の南側から調査を行う。
- 1.11 引き続きSR-2の調査を行う。
- 1.12 南側の調査をほぼ終了し、北側の調査を行う。
- 1.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.16 南側の調査を終了し、北側を中心に調査を行う。
- 1.17 引き続きSR-2の北側の調査を行う。
- 1.18 SR-2の調査を行っていたが、降雨のため作業を中止する。
- 1.19 SR-2の北側の調査及び図面作成を行う。
- 1.20 引き続きSR-2の北側の調査を行う。
- 1.23 SR-2の北側の調査及び堆積土層の写真撮影を行う。
- 1.24 引き続きSR-2の北側の調査並びに堆積土層の図面作成を行う。
- 1.25 SR-2の調査をほぼ終了し、清掃作業を開始する。
- 1.26 SR-2の調査を終了し、引き続き清掃作業を行う。
- 1.27 引き続き清掃作業を行う。
- 1.28 清掃作業を終了し、第2次遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 1.30 第2次遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 1.31 下層確認を行いつつ、土層の堆積について趙氏による現場指導を受ける。



写真2-1 II区発掘調査風景



写真2-2 II区埋め戻し風景

- 2. 1 引き続き下層確認を行いつつ、現場指導を受ける。
- 2. 2 埋め戻し作業を開始する。
- 2. 3 引き続き埋め戻し作業及び矢板の撤去を行う。
- 2. 4 引き続き埋め戻し作業を行う。

- 2. 6 雨天のため埋め戻し作業を中止する。
- 2. 7 埋め戻し作業及び矢板の撤去を行う。
- 2. 8 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 2. 9 埋め戻し作業及び安全柵の撤去を終了し、Ⅱ区の調査を全て完了する。

Ⅲ区(第Ⅲ調査区)

平成18(2006)年2月10日～3月13日(実働19日)……………

- 2.10 Ⅱ区の仮設水路の復旧作業並びにⅢ区の表土掘削を行う。
- 2.11 引き続き仮設水路の復旧作業並びに表土掘削を行う。
- 2.13 表土掘削及び遺構検出面までの機械掘削を開始する。
- 2.14 引き続き機械掘削及び遺構検出を行う。
- 2.15 表土掘削は終了し、機械掘削及び遺構検出を行う。
- 2.16 機械掘削は終了し、遺構検出を行う。
- 2.17 清掃作業後、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 2.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.21 遺構調査を開始する。
- 2.22 SR-4の南側の調査を行う。
- 2.23 SR-4の南側の調査をほぼ終了する。
- 2.24 SR-4の北側を中心に調査を行う。
- 2.25 引き続きSR-4の北側の調査を行う。
- 2.27 SR-4の調査を終了し、清掃作業を行う。
- 2.28 遺構完掘状態の写真撮影及び空中写真撮影測

- 量を行う。
- 3. 7 下層の確認調査を行う。
- 3. 8 埋め戻し作業を開始し、矢板の撤去を行う。
- 3. 9 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 3.10 〃
- 3.13 埋め戻し作業と安全柵の撤去を終了し、Ⅲ区の調査を全て完了する。



写真2-3 Ⅲ区発掘調査風景

Ⅳ区(第Ⅳ調査区)

平成17(2005)年12月19日～平成18(2006)年3月21日(実働52日)……………

- 12. 8 調査の打合せと調査準備を行う。
- 12.19 範囲確定のための試掘調査を行う。
- 12.20 引き続き試掘調査を行う。
- 12.21 〃
- 12.26 調査区境界杭の設定並びに矢板の打設を行う。
- 1. 5 調査事務所設置のため設置作業を行う。
- 1. 6 南西隅より機械掘削を開始する。
- 1.10 引き続き機械掘削を行う。
- 1.11 機械掘削及び遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.12 引き続き機械掘削及び遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.13 南側の機械掘削は終了し、引き続き遺物包含

- 層の人力掘削を行う。
- 1.16 降雨によって崩落した部分の補強作業並びに北側の機械掘削を行う。
- 1.17 引き続き機械掘削及び遺構検出を行う。
- 1.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.19 機械掘削及び遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.23 機械掘削を終了し、引き続き遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.24 遺物包含層の人力掘削及び遺構検出を行う。
- 1.25 遺物包含層の人力掘削を終了し、引き続き遺構検出を行う。
- 1.26 清掃作業後、遺構検出状態の写真撮影を行う。

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 1.27 遺構調査を開始する。
- 1.30 遺構調査及び堆積層の人力掘削を行う。
- 1.31 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.1 〃
- 2.2 SD-4の調査及び引き続き人力掘削を行う。
- 2.3 引き続きSD-4の調査及び人力掘削を行う。
- 2.6 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.7 SD-4の調査及び人力掘削を行う。
- 2.8 引き続きSD-4の調査及び人力掘削を行う。
- 2.9 SD-4とSX-2の調査及び人力掘削を行う。
- 2.10 引き続き遺構調査及び人力掘削を行う。
- 2.13 SD-4・5及びSX-2の調査を行う。
- 2.14 引き続きSD-4・5及びSX-2の調査を行う。
- 2.15 〃
- 2.16 昨夜の降雨のため調査区の水抜き作業を行う。
- 2.17 SD-4・5及びSX-2の調査を行う。
- 2.18 SR-6及びSD-4・5の調査を行う。
- 2.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.21 SR-6及びSD-4の調査を行う。
- 2.22 引き続きSR-6及びSD-4の調査を行う。
- 2.23 〃
- 2.24 SR-6を中心に調査を行う。
- 2.25 引き続きSR-6を中心に調査を行う。
- 2.27 SR-6の調査を行う。
- 2.28 引き続きSR-6の調査を行う。
- 3.1 雨天のため現場作業を中止する。
- 3.2 SR-6の調査並びに北半部から清掃作業を開始する。



写真2-4 IV区発掘調査風景

- 3.3 引き続きSR-6の調査並びに清掃作業を行う。
- 3.6 遺構測量を行う。
- 3.7 SR-6の調査並びに清掃作業を行う。
- 3.8 遺構完掘状態の写真撮影及び空中写真撮影測量を行う。
- 3.9 SR-6の測量を行う。
- 3.10 引き続きSR-6の測量を行う。
- 3.13 埋め戻し作業を開始する。
- 3.14 引き続き埋め戻し作業及び矢板の撤去を行う。
- 3.15 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 3.16 雨天のため埋め戻し作業を中止する。
- 3.17 昨日の降雨のため埋め戻し作業を中止し、水抜き作業を行う。
- 3.20 埋め戻し作業を行う。
- 3.21 埋め戻し作業を終了すると共に、17年度のIV区の調査を全て完了する。

平成18(2006)年4月21日～8月28日(実働67日)

- 4.21 先行して工事用道路及び水路対象地の機械掘削及び遺構検出を行う。
- 4.24 現場作業を休止する。
- 4.25 東側は遺構検出状態の写真撮影後、遺構調査を開始し、西側は機械掘削を行う。
- 4.26 東側はSR-6の調査を行い、西側は機械及び人力掘削を行う。
- 4.27 東側はSR-6の調査をほぼ終了し、西側は引き続き機械及び人力掘削を行う。
- 4.28 東側は遺構完掘状態の写真撮影を行い、西側は機械掘削を終了する。
- 5.1 東側は新たに遺物包含層の機械掘削を開始

し、西側は遺構検出状態の写真撮影を行う。



写真2-5 IV区堰状遺構発掘調査風景1

- 5. 2 東側は引き続き機械掘削を行い、西側はSFの調査を開始する。
- 5. 8 東側は遺構検出状態の写真撮影後、遺構調査を開始し、西側はSFの調査を行う。
- 5. 9 東側はSR-5の調査を行い、西側は引き続きSFの調査を行う。
- 5.10 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.11 東側はSR-5の調査を行い、西側はSFの調査を行う。
- 5.12 引き続き東側はSR-5の調査を行い、西側はSFの調査を終了する。
- 5.15 東側のSR-5を中心に調査を行い、ほぼ終了する。
- 5.16 東側の調査を終了し、西側はSR-5の検出に向け機械掘削を行う。
- 5.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.18 西側は遺構検出状態の写真撮影後、北東部より遺構調査を開始する。
- 5.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.21 SR-5の調査を行う。
- 5.22 引き続きSR-5の調査を行う。
- 5.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.24 SR-5の調査を行う。
- 5.25 SR-5の北東部の調査をほぼ終了する。
- 5.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.29 SR-5の南部の調査を行う。
- 5.30 工事用道路及び水路対象地の調査を全て終了する。
- 5.31 情報交換会のため現場作業を休止する。
- 6. 1 調査区の清掃作業を行う。
- 6. 2 空中写真撮影測量を行う。
- 6. 3 工事用道路及び水路対象地の埋め戻し作業を開始する。
- 6. 5 引き続き埋め戻し作業及び矢板の撤去を行う。
- 6. 6 埋め戻し作業を終了し、調査区西部の機械掘削を開始する。
- 6. 7 引き続き機械掘削及び遺構検出を行う。
- 6. 8 機械掘削を終了する。
- 6. 9 清掃作業後、遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 6.12 SR-5の調査を行う。
- 6.13 SR-5の南側を中心に調査を行う。
- 6.14 引き続きSR-5の南側を中心に調査を行う。
- 6.15 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.16 SR-5の南側の調査を行う。
- 6.19 引き続きSR-5の南側の調査を行う。
- 6.20 ッ
- 6.21 ッ
- 6.22 SR-5の南側の調査を行うが、降雨のため午後より現場作業を中止する。
- 6.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.26 ッ
- 6.27 SR-5の南側の調査をほぼ終了する。
- 6.28 SR-5の北側の調査を行う。
- 6.29 引き続きSR-5の北側の調査を行う。
- 6.30 ッ
- 7. 3 ッ
- 7. 4 ッ
- 7. 5 雨天のため現場作業を中止する。
- 7. 6 SR-5の北側の調査を行う。
- 7. 7 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.10 SR-5の北側の調査を行うが、職員専門研修のため午後より現場作業を休止する。
- 7.11 職員専門研修のため現場作業を休止する。
- 7.12 SR-5の調査を終了し清掃作業後、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 7.13 空中写真撮影測量を行う。
- 7.14 撮影結果待ちのため現場作業を休止する。
- 7.15 埋め戻し作業を開始する。
- 7.18 下層確認調査と引き続き埋め戻し作業を行う。
- 7.19 雨天のため埋め戻し作業を中止する。
- 7.20 ッ
- 7.21 ッ



写真2-6 IV区堰状遺構発掘調査風景2

2. 調査区の概要

4ヶ所の調査区から計6条の自然流路を検出した。いずれも砂礫が埋土となっており、検出面である砂質シルトなどの地山とは識別された。また、各調査区では下層確認調査も実施しており、それらについては第IV章自然科学分析に記している。

(1) I区

試掘調査で確認した自然流路(SR-1)を調査するために設定した東西約17m、南北約67mの調査区で、調査対象地の西端に当り、県道岸本停車場線の東隣に位置する。調査面積は1,056㎡であった。

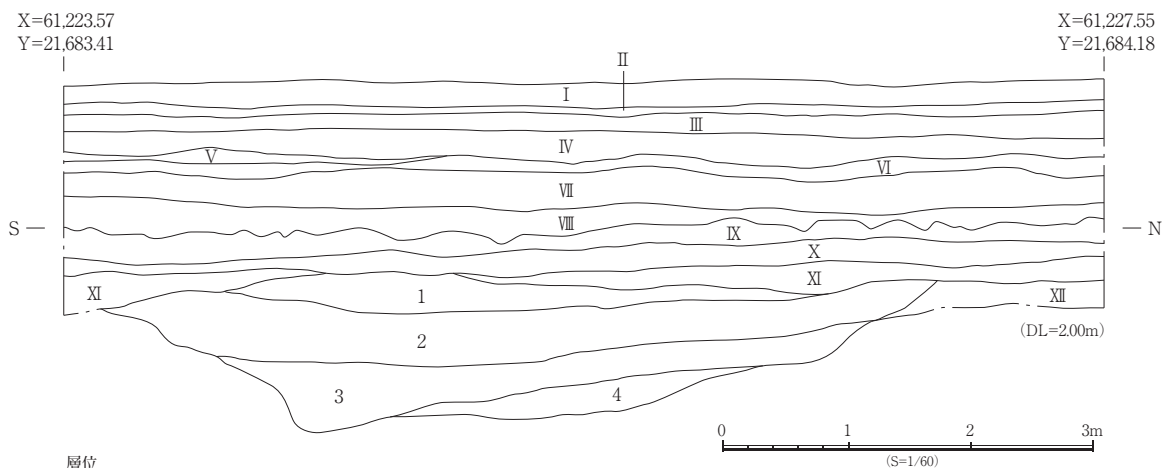
調査区の地勢は北から南に向って緩やかに傾斜しており、検出した自然流路は調査区北西端部からやや湾曲して南流し、調査区外に続く。調査区北部、自然流路左岸に当たる東側では取水に関連したものとみられる溝跡2条が検出されている。

① 層序

遺構は第XII層上面で、シルト質極細粒砂の地山に砂礫が溝状に堆積した状態で検出された。

基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 中礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト層
- 第II層 鉄分混じりの灰黄褐色(10YR6/2)細粒砂質シルト層
- 第III層 マンガン粒混じりの灰色(5Y5/1)砂質シルト層
- 第IV層 鉄分、マンガン粒を含む黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層
- 第V層 鉄分、マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)砂質シルト層
- 第VI層 鉄分、マンガン粒を含む灰色(5Y5/1)砂質シルト層
- 第VII層 鉄分混じりの黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
- 第VIII層 木片混じりの黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト層



- 層位
- 第I層 中礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト層
 - 第II層 鉄分混じりの灰黄褐色(10YR6/2)細粒砂質シルト層
 - 第III層 マンガン粒混じりの灰色(5Y5/1)砂質シルト層
 - 第IV層 鉄分、マンガン粒を含む黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層
 - 第V層 鉄分、マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)砂質シルト層
 - 第VI層 鉄分、マンガン粒を含む灰色(5Y5/1)砂質シルト層
 - 第VII層 鉄分混じりの黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
 - 第VIII層 木片混じりの黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト層
 - 第IX層 木片混じりの黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層
 - 第X層 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂層

- 第XI層 灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂層
- 第XII層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂層

遺構埋土(SR-1)

1. 木片を含む灰色(5Y5/1)中礫質極細粒砂
2. 木片を含む黄灰色(2.5Y4/1)中礫質細粒～中粒砂
3. 木片を含む灰黄褐色(10YR6/2)細粒～中粒砂質中礫
4. 木片を含む黄灰色(2.5Y6/1)細粒～中粒砂質中礫

図2-1 I区西壁セクション

2. 調査区の概要 (2) II区

第IX層 木片混じりの黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層

第X層 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂層

第XI層 灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂層

第XII層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂層

層位中、第I層(耕作土層)から古銭が出土するが、明確な遺物包含層は確認できず、自然流路埋没後はシルトを中心に自然堆積しており、低湿地的様相を呈したとみられる。

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

古銭(図2-2 1001)

寛永通宝で、銅一文銭で古寛永とみられる。

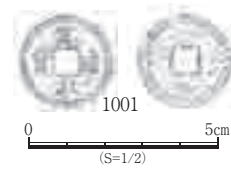


図2-2 I区第I層出土遺物実測図

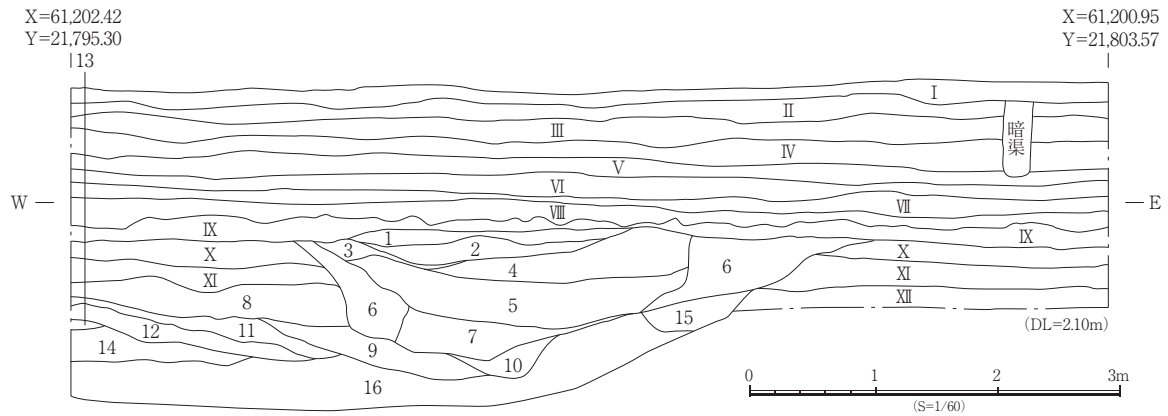
(2) II区

試掘調査で確認した自然流路(SR-2・3)を調査するために設定した東西約16m、南北約66mの調査区で、I区から東へ約100mの地点に位置する。調査面積は1,840㎡(調査延べ面積)であった。

調査区の地勢は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、上層と下層からそれぞれ1条の自然流路を検出した。いずれも北西端から南東端に向かってカーブを描きながら南流し、調査区外に続く。

① 層序

自然流路(SR-2)は第XII層上面、自然流路(SR-3)は第X層上面で、シルト質砂ないしシルト質極細粒砂～細粒砂の地山に砂礫が溝状に堆積した状態で検出された。



層位

- 第I層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層
- 第II層 鉄分の沈着、マンガン粒を含む灰色(5Y5/1)砂質シルト層
- 第III層 鉄分の沈着、マンガン粒を含む褐灰色(10YR6/1)砂質シルト層
- 第IV層 鉄分の沈着、マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)砂質シルト層
- 第V層 マンガン粒を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
- 第VI層 鉄分の沈着がみられる灰色(5Y4/1)砂質シルト層
- 第VII層 鉄分の沈着、炭化物を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
- 第VIII層 木片等を含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルト層
- 第IX層 木片等を多量に含む暗黄灰色(2.5Y5/2)シルト層
- 第X層 木片等を含む灰色(5Y5/1)シルト質砂層
- 第XI層 灰色(7.5Y5/1)シルト質細粒砂層
- 第XII層 灰色(5Y4/1)シルト質極細粒～細粒砂層

遺構埋土(SR-3)

- 1. 極粗粒砂混じりの灰色(5Y4/1)砂質シルト
- 2. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂混じりの中礫質砂
- 3. 中礫混じりの灰色(5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂
- 4. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂混じりの砂質中礫
- 5. シルト質砂混じりの灰色(5Y6/1)砂質中礫
- 6. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂
- 7. 木片等を含む灰色(5Y5/1)中礫質極細粒～細粒砂

遺構埋土(SR-2)

- 8. 木片等を含む中礫混じりの黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂
- 9. 灰色(5Y5/1)中礫質極細粒～細粒砂
- 10. 灰色(5Y5/1)中礫質極細粒～細粒砂
- 11. 中礫を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒～細粒砂
- 12. 中礫・木片を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒～細粒砂
- 13. 木片を含む黄灰色(2.5Y6/1)中礫質極細粒～細粒砂
- 14. 木片を含む黄灰色(2.5Y4/1)中礫質極細粒～細粒砂
- 15. 中礫を含む黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂
- 16. 木片を含む黄灰色(2.5Y6/1)中礫質極細粒～細粒砂

図2-3 II区北壁セクション

基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 鉄分の沈着が見られる黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層
- 第II層 鉄分の沈着, マンガン粒を含む灰色(5Y5/1)砂質シルト層
- 第III層 鉄分の沈着, マンガン粒を含む褐灰色(10YR6/1)砂質シルト層
- 第IV層 鉄分の沈着, マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)砂質シルト層
- 第V層 マンガン粒を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
- 第VI層 鉄分の沈着が見られる灰色(5Y4/1)砂質シルト層
- 第VII層 鉄分の沈着, 炭化物を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
- 第VIII層 木片等を含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルト層
- 第IX層 木片等を多量に含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層
- 第X層 木片等を含む灰色(5Y5/1)シルト質砂層
- 第XI層 灰色(7.5Y5/1)シルト質細粒砂層
- 第XII層 灰色(5Y4/1)シルト質極細粒～細粒砂層

I区と同様に層位中, 明確な遺物包含層は確認できず, 自然流路埋没後はシルトを中心に自然堆積しており, 低湿地的様相を呈したとみられる。

(3) III区

試掘調査で確認した自然流路(SR-4)を調査するために設定した東西約17m, 南北約58mの調査区で, II区から東へ約35mの地点に位置する。調査面積は904㎡であった。

調査区の地勢は北から南に向かって緩やかに傾斜しており, 自然流路は北西端から緩やかに蛇行して南東端に向かって南流し, 調査区外に続く。

① 層序

自然流路(SR-4)は第XII層上面で, 砂質シルトの地山に砂礫が溝状に堆積した状態で検出された。基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト層
- 第II層 鉄分の沈着が見られる褐灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルト層
- 第III層 鉄分, マンガン粒を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト層
- 第IV層 木片を含む鉄分, マンガン粒混じりの黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層
- 第V層 炭化物を含む鉄分, マンガン粒混じりの灰色(5Y5/1)細粒砂質シルト層
- 第VI層 炭化物を含む鉄分, マンガン粒混じりの黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト層
- 第VII層 炭化物を含む鉄分, マンガン粒混じりの灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層
- 第VIII層 炭化物を含む鉄分混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルト層
- 第IX層 木片を多く含む鉄分混じりの黒褐色(2.5Y3/1)シルト層
- 第X層 木片を多く含む灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト層
- 第XI層 木片を多く含む灰色(5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルト層
- 第XII層 中礫を多く含む灰色(5Y5/1)シルト質極細粒砂層

I区, II区と同様に層位中, 明確な遺物包含層は確認できず, 自然流路埋没後はシルトを中心に自然堆積しており, 低湿地的様相を呈したとみられる。なお, 第VIII層からは, 古代末から鎌倉時代初め

2. 調査区の概要 (4) IV区

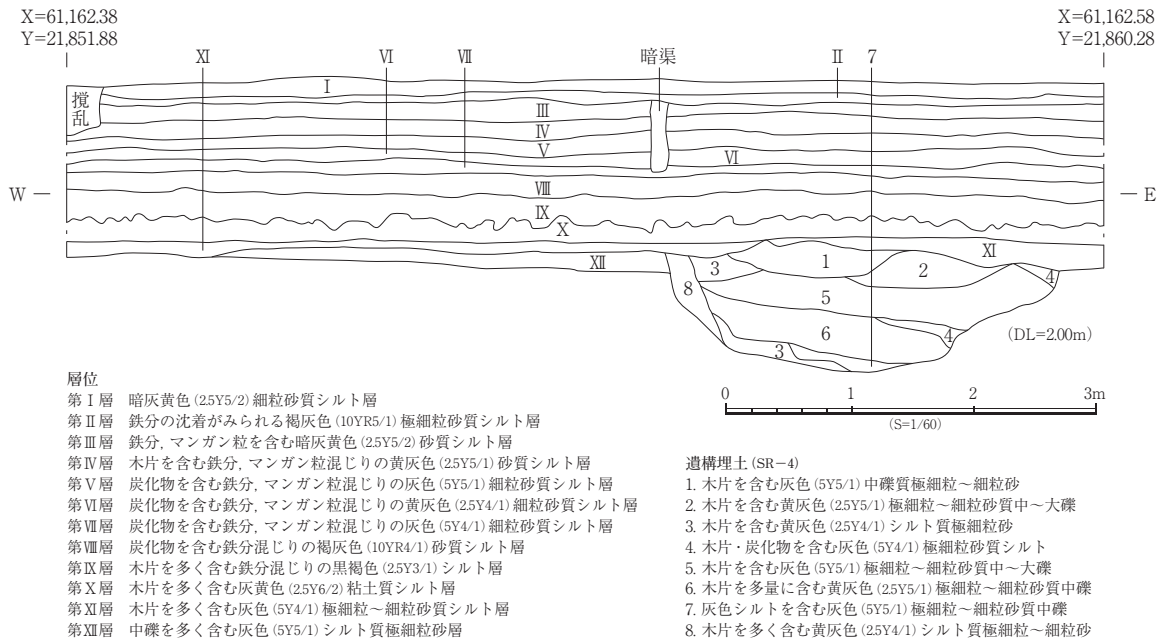


図2-4 III区中央バンクセクション

の遺物が出土しているが、混入と考えられる。

② 堆積層出土遺物

第VIII層出土遺物

土師質土器(図2-5 3001)

椀で、成形はA技法となり、底部から体部にかけて内湾気味に上がる。器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加え、体部外面には回転ヘラ削りを施す。外底面はナデ調整で切り離しの痕をナデ消す。外端部には断面逆台形の高さ0.5cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

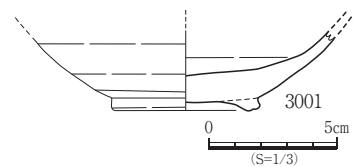


図2-5 III区第八層出土遺物実測図

(4) IV区

平成17年度は試掘調査で確認した自然流路(SR-6)を調査するため東西2カ所(東側に東西約22m, 南北約10mの調査区, 西側に東西約26m, 南北約44mの調査区)に調査区を設定した。III区から東へ約140mの地点に位置し、調査面積は1,363㎡であった。

調査区の地勢はほぼ平坦で、自然流路(SR-6)は北東端から西へ緩やかに蛇行して延びた後、大きく屈曲して南流し、調査区外に続く。屈曲部には堰が構築されており、多量の木製品が遺存していた。また、両岸からは溝跡などが検出されている。また、調査中に下層から新たに自然流路(SR-5)が検出された。

平成18年度は平成17年度の調査の際に検出した自然流路(SR-5)を調査するため東西2カ所(東側に東西約22m, 南北約44mの調査区, 西側に東西約27m, 南北約45mの調査区)に調査区を設定した。ただし、検出した自然流路の規模が大きく、東西それぞれ土手を残して掘削していたが、基底面には至らなかった。調査面積は2,140㎡であった。また、左岸から溝跡(SD-3)を検出した。

① 層序

自然流路(SR-6)は自然流路(SR-5)を掘削し、かつ両遺構とも第IX層上面で、シルト質粘土層の地山に砂礫が溝状に堆積した状態で検出された。

基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2.5)砂質シルト層
- 第II層 中礫、炭化物を僅かに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第III層 中礫を僅かに含む黄灰～黒褐色(2.5Y5/1～3/1)粘土質シルト層
- 第IV層 中礫、鉄分、マンガン粒を含む黄灰～黒褐色(2.5Y5/1～3/1)粘土質シルト層
- 第V層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト層
- 第VI層 細粒～中粒砂混じり、炭化物・遺物を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層
- 第VII層 極細粒～細粒砂を含む黄灰～黒褐色(2.5Y3.5/1)粘土質シルト層
- 第VIII層 極細粒～細粒砂を含む黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト層
- 第IX層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土層
- 第X層 灰黄褐～黒褐色(10YR3.5/1)粘土質シルト層
- 第XI層 極細粒～細粒砂を含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト層

第V層は中世の遺物包含層とみられる堆積層で、5～10cmの厚さに堆積していた。第VI・VIII・IX・XI層には弥生時代の遺物を含むが、自然流路の埋没過程で形成されたものと考えられる。自然流路埋没後は他の地区同様シルトを中心に自然堆積しており、低湿地的様相を呈したとみられる。

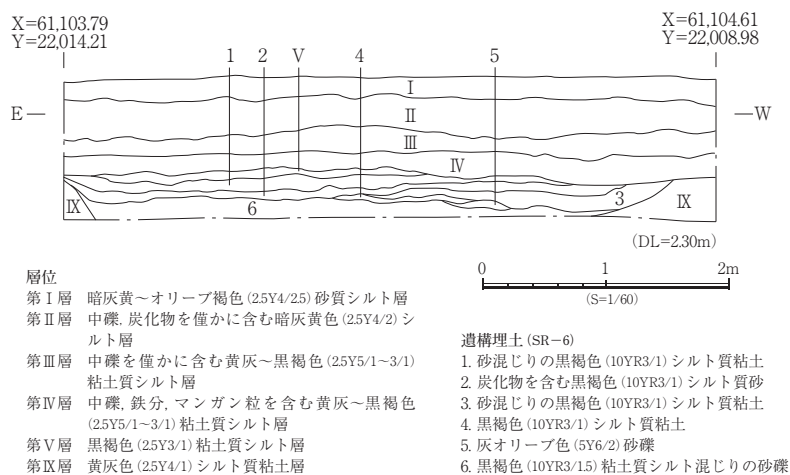


図2-6 IV区南壁セクション(図3-41に中央バンクセクションを掲載)

② 堆積層出土遺物

第V層出土遺物

弥生土器(図2-7 4001)

甕で、口頸部はくの字形を呈し、端部は平面となる。胴部外面にはタタキの後にハケ調整を頸部から加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

土師質土器(図2-7 4002)

杯で、成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。内面はロクロ目が残る。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

金属製品(図2-7 4003)

雁股の鉄鏃で、二股に分かれる身基部と関及び茎が残り、身部は関に向かって厚みを増す。

第VI層出土遺物

弥生土器(図2-7 4004)

高杯で、脚台部はハの字形に開き、丸い透かしを3方向に設ける。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

第VIII層出土遺物

弥生土器(図2-7 4005・4006)

4005は壺の底部で、胴部は平底の底部から外上方に上がり、外面にタタキの後にハケ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

4006は甕の底部で、胴部は平底の底部からやや内湾気味に上がり、内外面にハケ調整を施す。胴部外面には焦げと煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

第IX層出土遺物

弥生土器(図2-7 4007～4014)

4007は壺で、小さな平底の底部から胴部は内湾して立ち上がり、胴部最大径は中位にある。口縁部は外反気味に真上に延びる頸部から外反する。胴部内面下半にヘラ削り、上半に指ナデ調整、外面はタタキの後に下胴部と肩部から頸部にハケ調整を施す。外面は中胴部が被熱で変色し、下胴部と上胴部から口縁部にかけて煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

4008～4010は甕で、口頸部はくの字形を呈する。4008は、底部が小さな平底で、胴部は張りがなく、内湾して立ち上がり、最大径は中位よりやや上にある。胴部内面にはハケ調整とナデ調整、外面にはタタキの後に下胴部と上胴部にハケ調整を施す。煤が外面一面に付着する。4009も胴部は張りがなく、内面にハケ調整の後に指ナデ調整、外面にタタキを施し、頸部にハケ調整を加える。4010はやや大きく、胴部は前二者に比べ張りがある。内面には指ナデ調整、外面にタタキの後にハケ調整を施し、煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を4008・4010が比較的多く、4009が少し含む。

4011～4013は甕の底部とみられるもので、いずれも平底となる。4011は外面にタタキの後にハケ調整、4012は外面にハケ調整、4013は内面にハケ調整の後に指ナデ調整、外面にタタキの後にヘラ削りを施す。また、4012の外面は被熱で変色し、4013の外面には黒斑が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を4011・4013が比較的多く、4012が多く含む。

4014は鉢で、底部は小さな平底となり、体部は内湾気味に立ち上がり、真上を向く。内面にはハケ目が一部に残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

第XI層出土遺物

弥生土器(図2-7 4015～4017)

4015は甕の底部で、しっかりした平底となり、胴部は外上方を向く。内面は指ナデ調整とナデ調整で、焦げ目が付着し、外面にはタタキ目が残る。胎土に細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

4016・4017は鉢で、4016は平底、4017が丸底となる。いずれも体部から口縁部は内湾気味に斜め上方に上がり、端部には口縁部に粘土帯を貼付した際の痕跡が沈線状になって残る。4016の内外面にはハケ目、4017の内面にはハケ目、外面にはタタキ目が残る。胎土には、4016が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く、4017が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

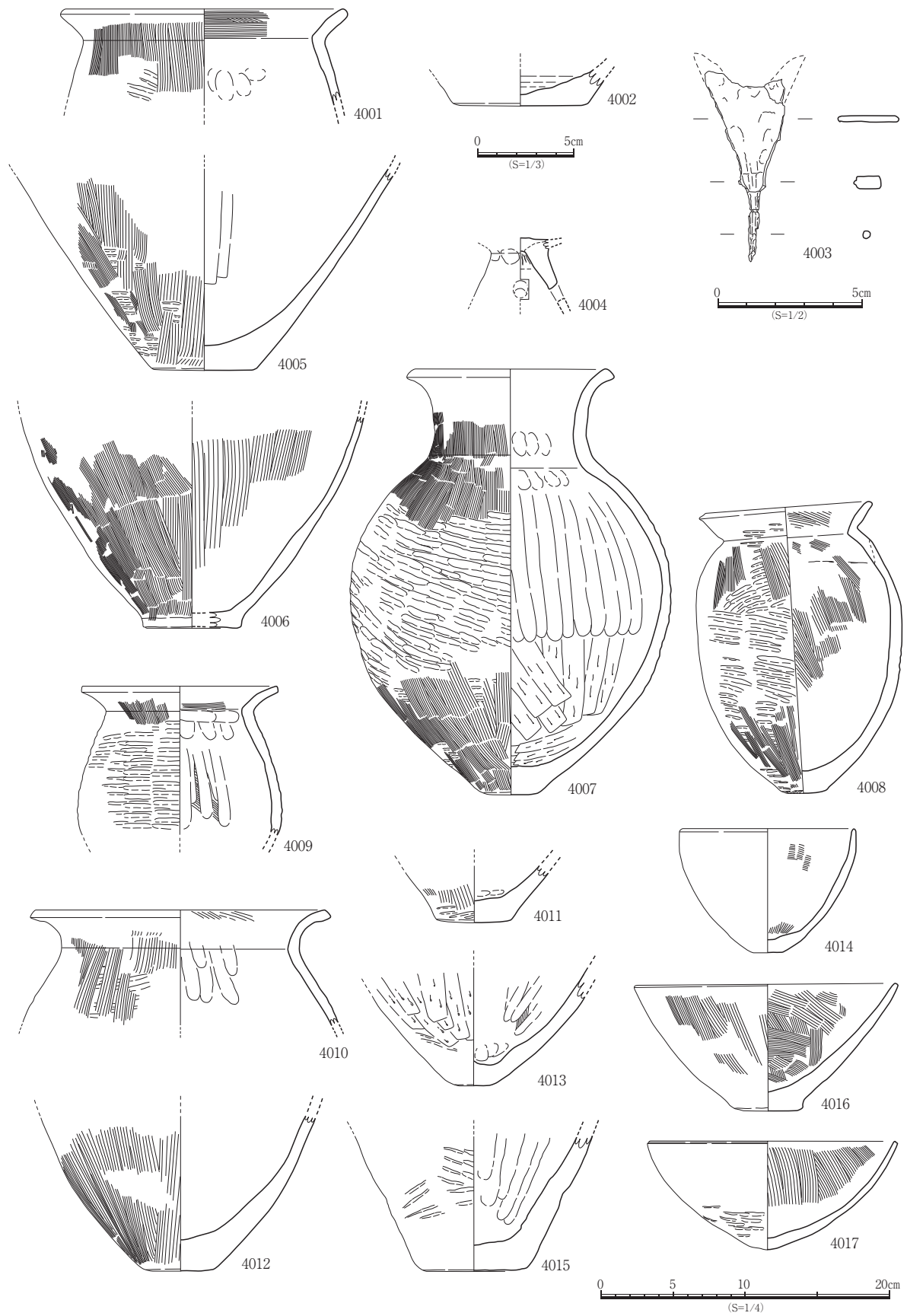


図2-7 IV区第V・Ⅶ・Ⅸ・Ⅺ層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (4) IV区

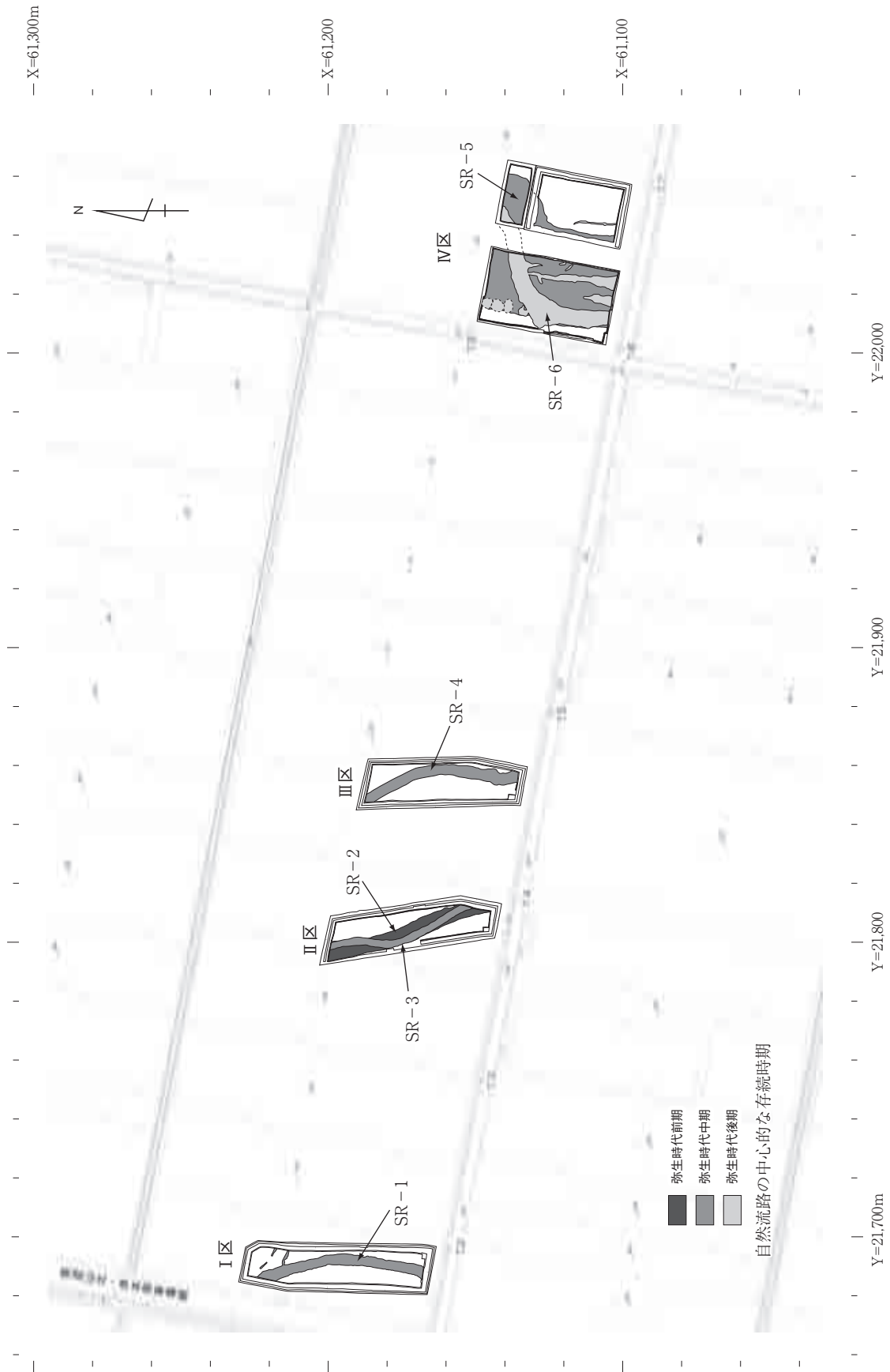


図2-8 調査区全体図(S=1/2,000)

第三章 遺構と遺物

1. I区

I区では、自然流路(SR-1)を中心に、それに関連するとみられる溝跡2条を確認した。

(1) 自然流路

SR-1 (図3-2・4)

第Ⅱ層上面で検出した自然流路で、調査区北西端からやや湾曲して南流し、調査区外に延びる。検出幅2.80～3.80m、深さ0.66～0.83mで、約55.0mを検出した。基底面は比高差0.145m(傾斜角度約0°9′)で北(0.760m)から南(0.615m)に向かって緩やかに傾斜し、主軸方向は南南東(N-163°-E)に延びた後、南(N-171°-W)を向く。断面形は、上位が護岸されたために急角度で立ち上り、中位以下が舟底形を呈し、基底面には一段低い溝状の窪みがみられる。また、両岸沿い肩部からは杭列と横木が確認され、護岸工事を行っていたものとみられ、単なる自然流路ではなく、生活に密接に関わった遺構として捉えることができる。埋土は、間層に木片等の有機物を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトを挟む箇所もみられるが、基本的には3層に分層でき、上層より灰色(5Y5/1)砂質シルト混じりの粗粒砂から細粒中礫を主体とする砂礫層、灰色(5Y5/1)砂質シルト混じりの粗粒砂から中粒中礫を主体とする砂礫層、灰色(5Y5/1)砂質シルト混じりの粗粒砂から細粒中礫を主体とする砂礫層となっており、粗粒砂から粗粒中礫が主体の氾濫堆積により埋没したものとみられる。遺物は3,890点出土するが、その大半はローリングを受けた破片で、復元図示できたものは、弥生土器66点(1002～1067)、土製品1点(1068)で出土遺物の約1.7%に当たる。

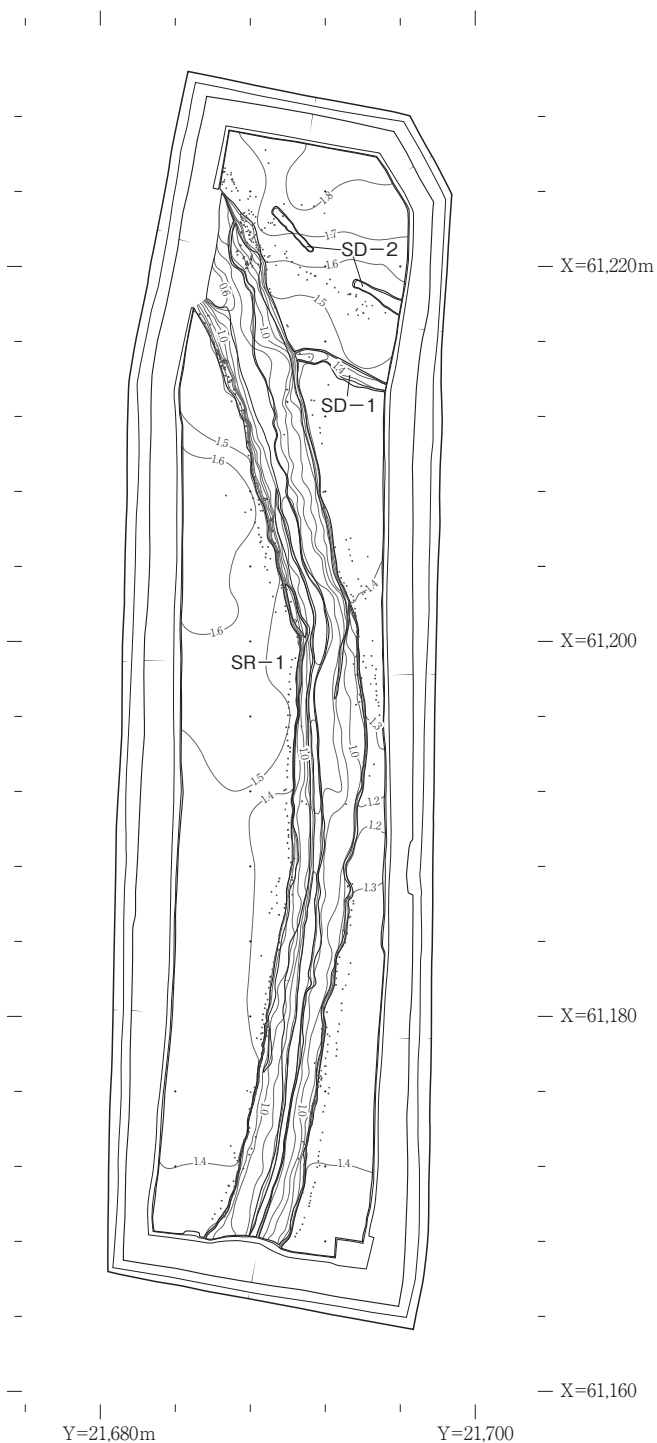


図3-1 I区遺構平面図(S=1/400)

出土遺物

弥生土器(図3-3~7 1002~1067)

1002~1007は壺の口縁部ないし口頸部で、1002~1005の頸部にはヘラ描きの沈線がみられる。1002は短く内湾する頸部に外反する口縁部がつくもので、4条のヘラ描沈線文の上から3条のタテ方向のヘラ描沈線を施す。1003は口縁部内面に煤が付着するもので、直立する頸部外面に8条のヘラ描沈線を施した上にヘラ状工具による刺突文を施す。1004・1005は細頸壺で、頸部には微隆起突帯を貼付した間に3~4条のヘラ描沈線を施し、口縁部内面には微隆起突帯を貼付した間に円孔を穿つ。1006は口縁部に粘土帯を貼付したもので、上端と下端にヘラ状工具による刻目を施す。1007は頸部外面に竹管文を施したもので、最大3列7段が残存する。胎土は、1007が細粒砂から極粗粒砂を少し含む以外は、いずれも細粒砂から極粗粒砂を比較的多くないし多く含むものである。

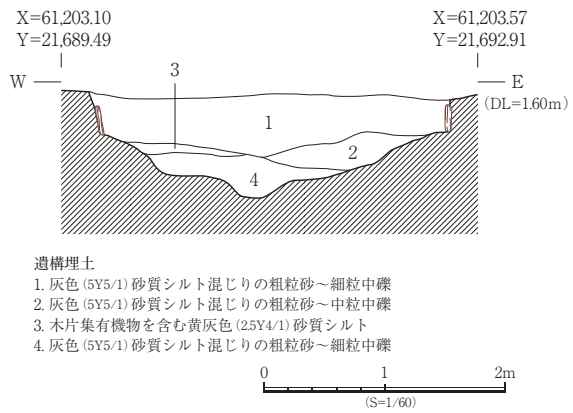


図3-2 SR-1(北壁)

1008~1017は壺の底部ではないかとみられるもので、底径4.9~12.0cmを測る。1013と1014の外

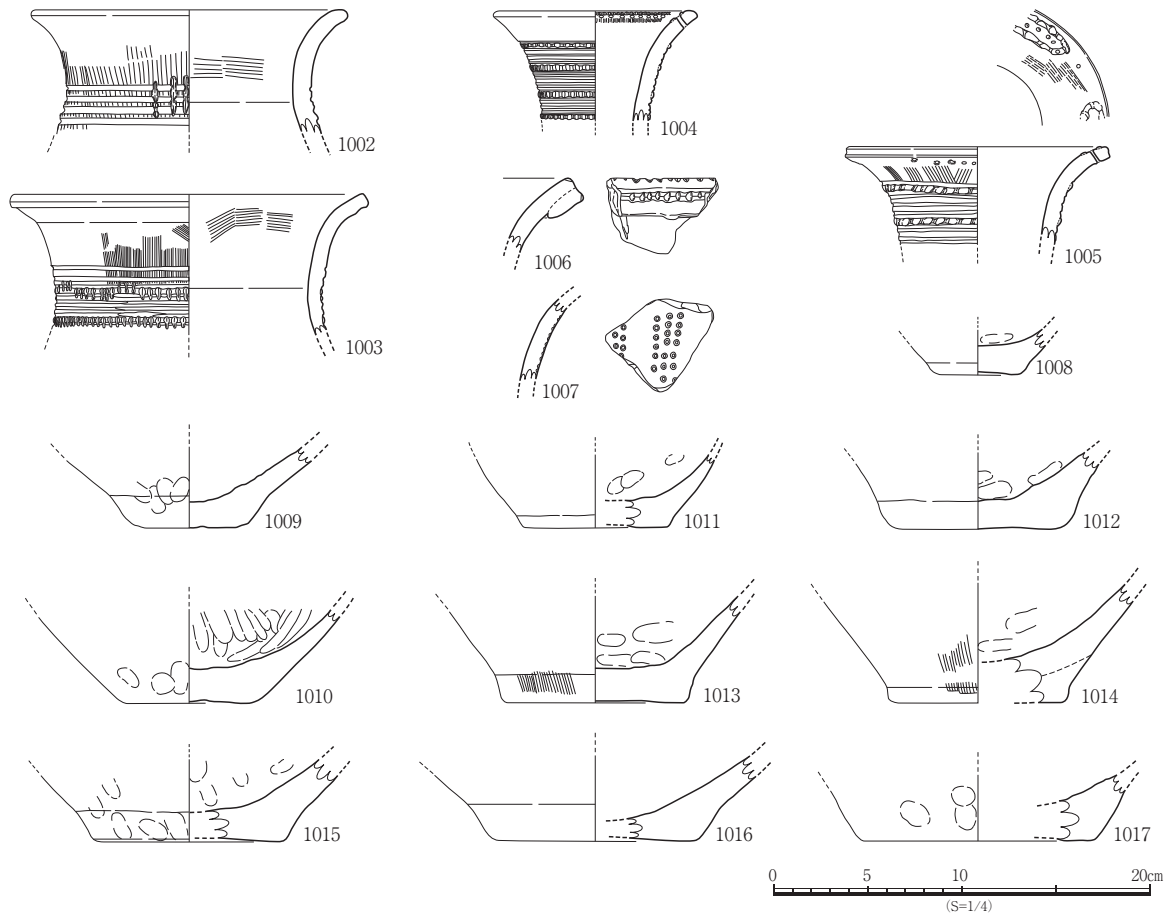


図3-3 SR-1出土遺物実測図1

にハケ調整の痕跡が残る以外、調整はナデと指ナデによる。胎土はいずれも細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多くあるいは多く含むものである。

1018～1033は甕の口縁部ないし口頸部で、粘土帯を貼付するものとしがないものがある。1018と1019は口縁部が頸部から屈曲する所謂如意形口縁を呈するもので、1018にはヘラ描沈線を挟んで刺

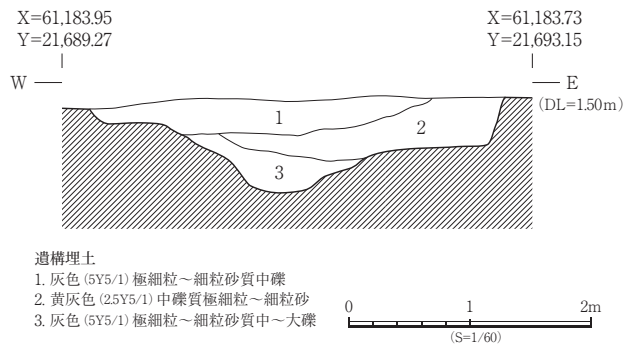


図3-4 SR-1(南壁)

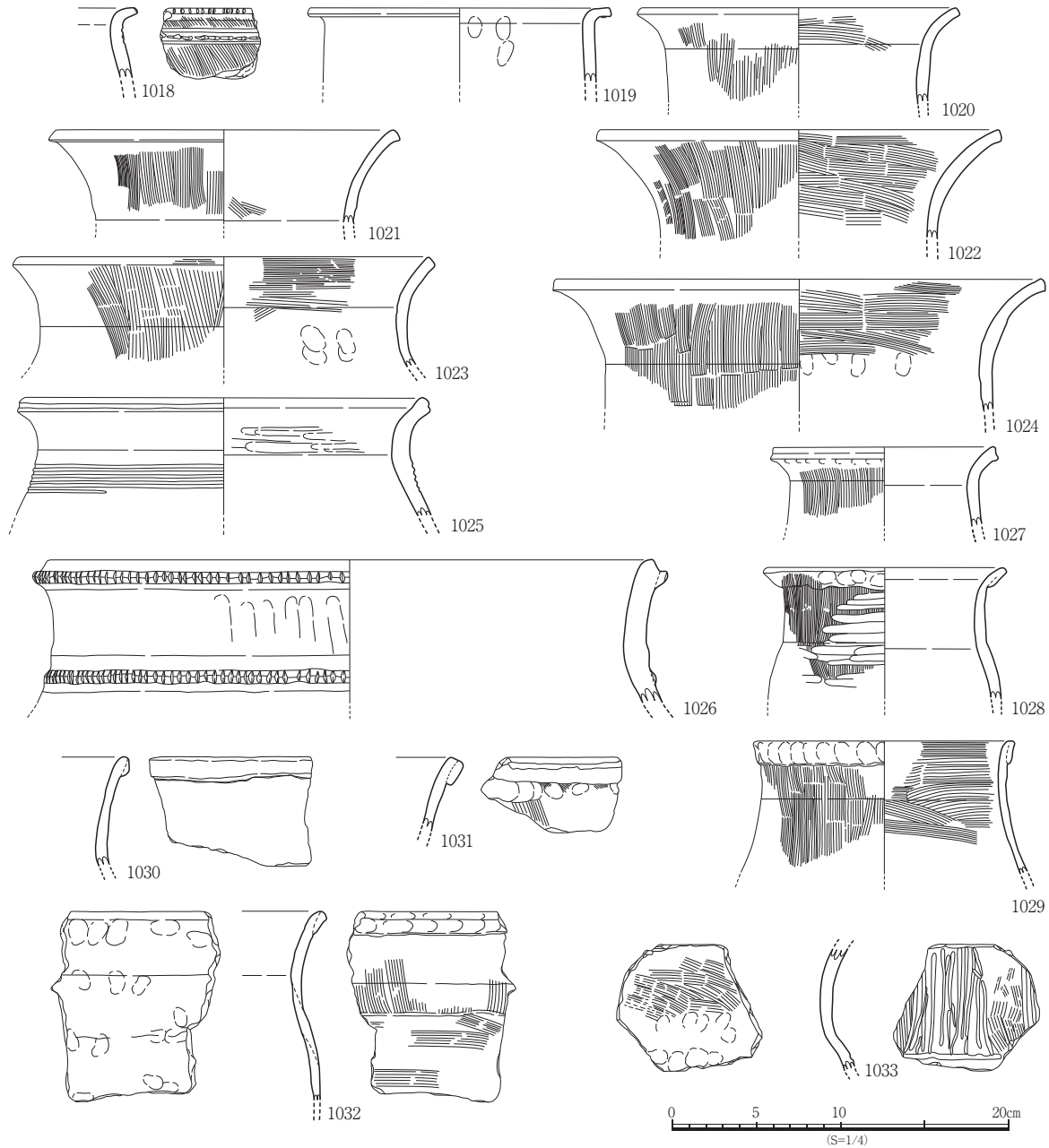


図3-5 SR-1出土遺物実測図2

1. I区 (1) 自然流路

突文と口縁端部に刻目を施す。1019の頸部以下には煤が付着する。1020～1024は短い頸部から口縁部が外反するもので、内外面にはハケ調整を施す。1025は頸部外面下端に4～5条のヘラ描沈線を施すもので、口縁端部にもヘラ描沈線を1条施す。頸部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。1026は大型の甕で、頸部と口縁外面に刻目突帯が付く。頸部刻目突帯の上下にはヨコナデ調整を施す。1027は口縁部外面に粘土帯を貼付したもので、外面には指頭圧痕が残存し、口縁端部は凹面となる。また、口頸部外面には煤が付着する。1028～1032は口縁部外面に粘土帯を貼付した所謂貼付口縁の甕で、調整はハケ調整を基本とする。1033は上胴部から頸部の破片であるが、貼付口縁であったものとみられる。外面にはハケ調整の後にタテ方向のヘラ描沈線を施し、胴部との境に1条のヘラ描沈線を入れる。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むものが一部にみられるが、その大半は砂粒を多く含むものであった。

1034～1061は甕の底部ではないかとみられるもので、底径は4.2～9.6cmを測る。いずれもしっかりした底部で、その多くが上げ底ないし上げ底風となり、調整は、ヘラ磨き、ヘラナデ調整、指ナデ調整のものも僅かにみられるものの外面にハケ調整を施すものが多く、内面はナデ調整を主体とし、指ナデ調整も一定みられる。また、1034・1040・1051・1053・1055・1056・1061の内底面に焦げ目が付着する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多くないし多く含むもので、中には極細粒

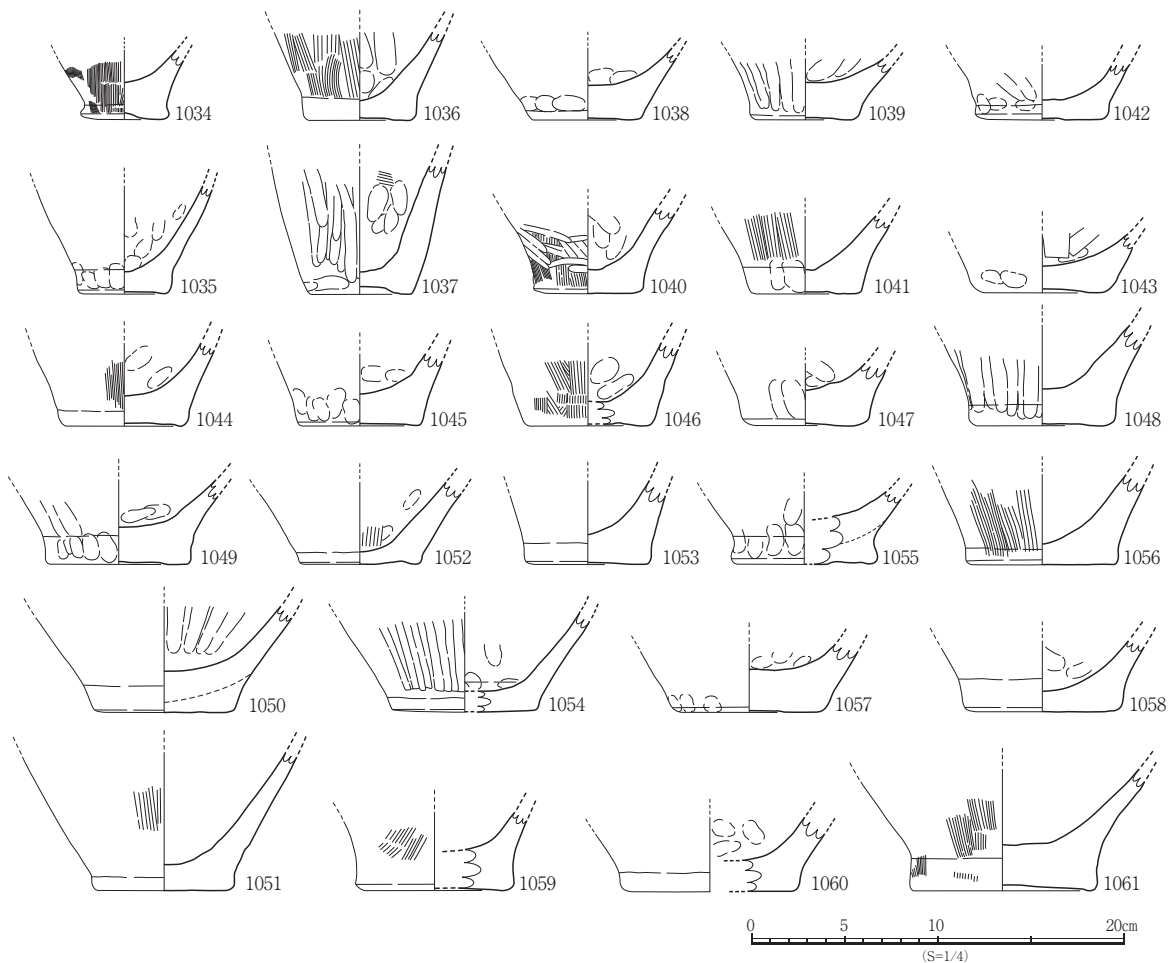


図3-6 SR-1出土遺物実測図3

中礫や細粒中礫を含むもの(1042・1050・1051・1053)や雲母片を含むもの(1054・1059)がある。

1062と1063は蓋で、1062にはつまみが付く。1063は外面にハケ調整、内面にはヘラ磨きを施す。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

1064～1067はミニチュア土器とみられるもので、1064は壺、1065は甕、1066は鉢、1067は蓋をスケールダウンしている。胎土は、細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むもの(1064・1066・1067)と多く含むもの(1065)がある。

土製品(図3-7 1068)

紡錘車で、土器の胴部の破片を転用したものではないかとみられる。両面とも平滑で、ほぼ中央に径2mmの円孔を上下から穿つ。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

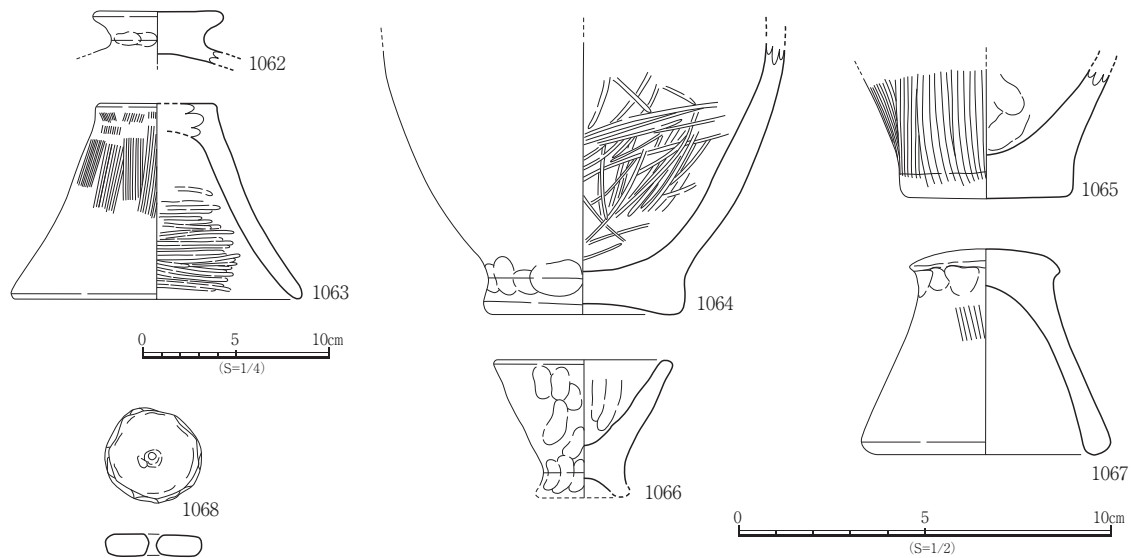


図3-7 SR-1出土遺物実測図4

(2) 溝跡

SD-1 (図3-8)

調査区北部、第Ⅱ層上面で検出した東西溝で、西側はSR-1に接し、東側は調査区外に延びる。溝の南側は2カ所に膨らみがある。検出幅は0.50～0.98m、深さ6～17cm、基底面の標高は東(1.396m)から西(1.249m)に向かって傾斜し、概ね西北西(N-68°-W)を示し、5.22mを検出した。断面形は舟底形を呈し、基底面から緩やかに立ち上がる。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト混じりの礫質砂単一で、SR-1同様洪水によって埋没したものとみられる。出土遺物には弥生土器5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

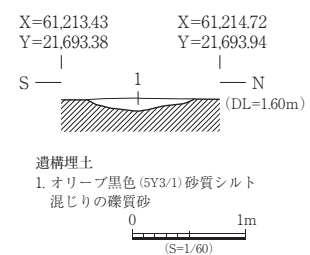


図3-8 SD-1

SD-2 (図3-9)

調査区北部、SD-1の北側、第Ⅱ層上面で検出した東西溝で、東側と西側では約2.80m離れるが、規模と方向からみて同一の溝と捉えた。検出幅は0.28～0.84m、深さ2～16cm、基底面は西(1.708m)から東(1.548m)に向かって傾斜し、概ね南東(N-128°-E)を示し、8.70mを検出した。断面形は舟底形

1. I区 (2) 溝跡

を呈し、基底面から緩やかに立ち上がる。埋土は黄灰色(2.5Y5/1)砂質礫単一で、SR-1同様洪水で埋没したものとみられる。出土遺物には弥生土器14点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

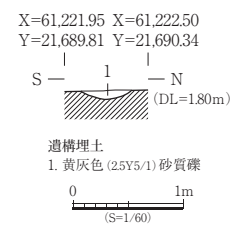


図3-9 SD-2

2. Ⅱ区

Ⅱ区では、重複する自然流路を2条確認した。SR-2の埋没後、SR-2の一部を削る形で新たな自然流路SR-3が形成されていた。

(1) 自然流路

SR-2 (図3-10~12)

第Ⅱ層上面で検出した自然流路で、調査区北西端から南東端に向かって緩やかなカーブを描き南流し、調査区外に延びる。検出幅4.65~6.32m、深さ0.75~1.19mで、約57.0mを検出した。基底面は比高差0.314m(傾斜角度約 $0^{\circ}20'$)で北(0.456m)から南(0.142m)に向かって比較的緩やかに傾斜し、主軸方向は南(N-170°-E)から南南東(N-159°-E)を向く。断面形は概ね舟底形を呈する。また、右岸沿いを中心に肩部からは杭列と横木が確認され、護岸工事を行っていたものとみられ、単なる自然流路ではなく、生活に密接に関わった遺構として捉えることができる。埋土は、基本的に細粒砂から中粒中礫を主体としたもので、概ね11層に分層され、徐々に埋まっていったものとみられ、比較的長期に亘って存続したことが考えられ、出土遺物も17,217点と多い。遺物はほぼ各層から出土し、ローリングを受けた破片が多く、復元図示できたのは出土遺物の約1.5%に当たる弥生土器264点(2001~2264)であった。

出土遺物

弥生土器(図3-13~28 2001~2264)

2001~2066は壺の口縁部ないし口頸部で、遺構の存続期間が長期に亘ったとみられることからバラエティーに富む。2001から2012は口頸部が胴部から内湾気味に上がり、頸部が短く口縁部が外反するタイプで、2001~2003の頸部から口縁部外面にはヘラ描沈線が施される。2001と2002には4条、2003には2条あり、2002の肩部外

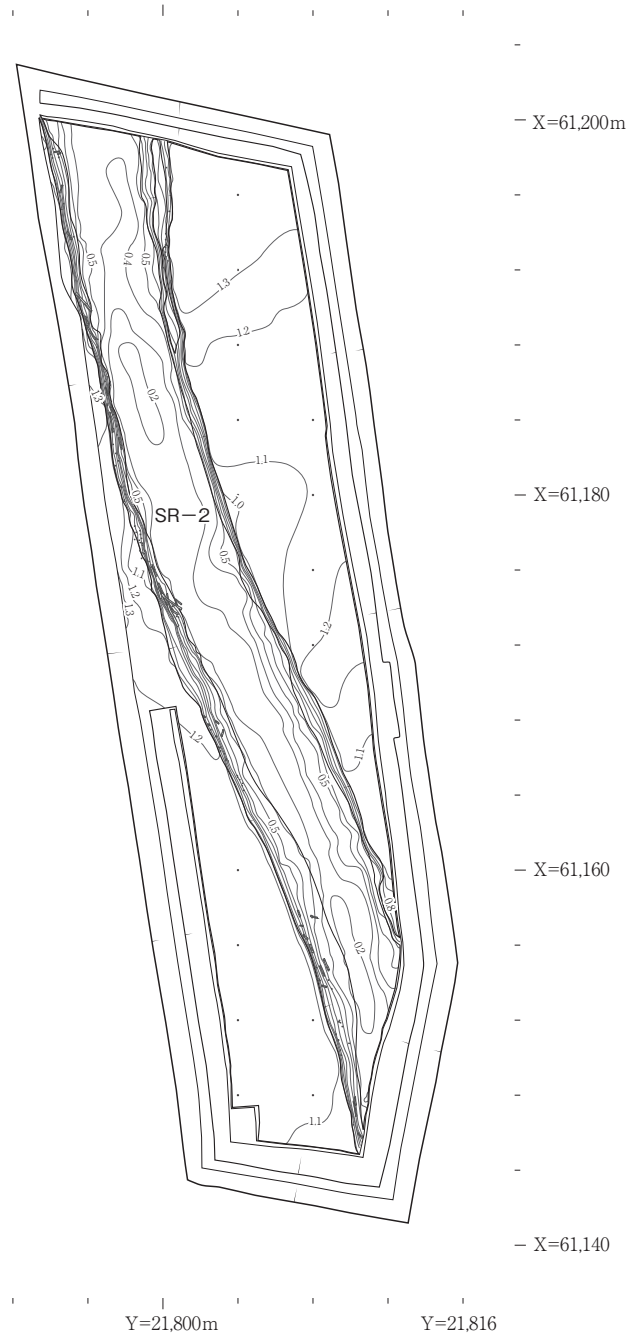


図3-10 Ⅱ区下面検出遺構平面図(S=1/400)

2. II区 (1) 自然流路

面にはヘラ状工具によるタテ方向の直線文と重弧文が施される。2004にはヘラ描沈線は確認できないが、同タイプとみられる。胎土は概して砂粒を多く含むもので、2001が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む、2002が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む、

2003・2004が細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を多く含んでいた。

2005～2012は、2001～2004に比べ口頸部が長くなるもので、2006のみ胴部が残存する。2005にはヘラ描沈線の下に列点文、2006には4条のヘラ描沈線、2007には3条のヘラ描沈線の上にタテ方向の3本単位の刻目、2008には作り出し突帯に上下2段の棒状工具による刺突文、2009には5条のヘラ描沈線、2010には段部、2011には5条のヘラ描沈線、2012には3条のヘラ描沈線がそれぞれ施される。胎土は、2009が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む、2012が細粒砂から極細粒中礫、雲母片を多く含む以外いずれも細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

2013～2026は、口縁部が比較的長く直立する頸部から外反するタイプで、口頸部は胴部から屈曲して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げるものもみられるが、拡張し、下端ないし両端に刻目を施すものが多い。2013は頸部外面に4条のヘラ描沈線を施し、口縁端部下端をヨコナデ調整で拡張する。2014には5条のヘラ描沈線と拡張した口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。2015には7条のヘラ描沈線を施し、口縁端部を指押えにより拡張する。2016にはヘラ描沈線が施されていないが、口縁端部を指押えで拡張する。2017は、頸部外面につまみ出しによる微隆起突帯(A-1タイプ)を2段作り出し、口縁端部はつまみ出しで拡張する。2018は無文で、口縁端部を指押えで拡張する。2019には8条のヘラ描沈線と口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。2020には口縁端部両端にヘラ状工具による刻

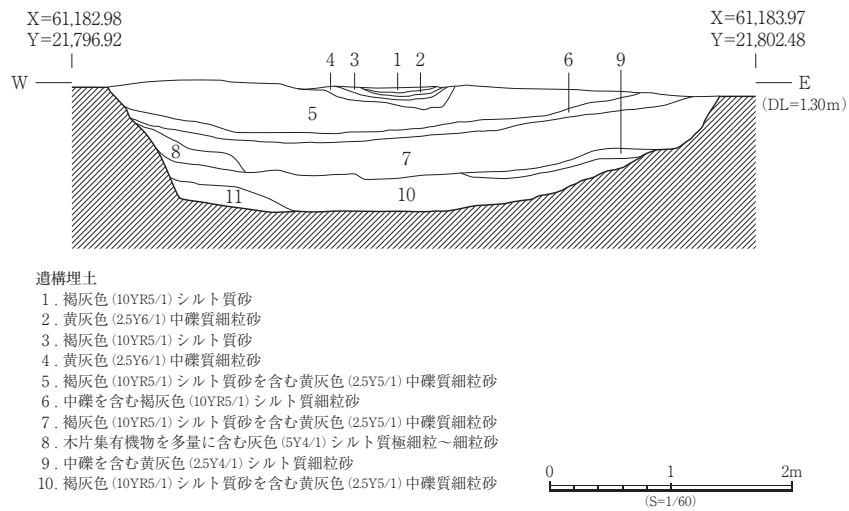


図3-11 SR-2(北壁)

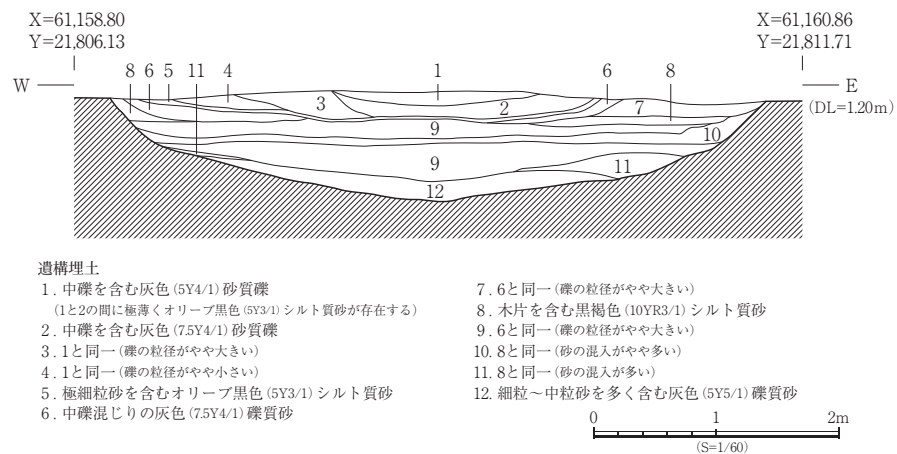


図3-12 SR-2(南壁)

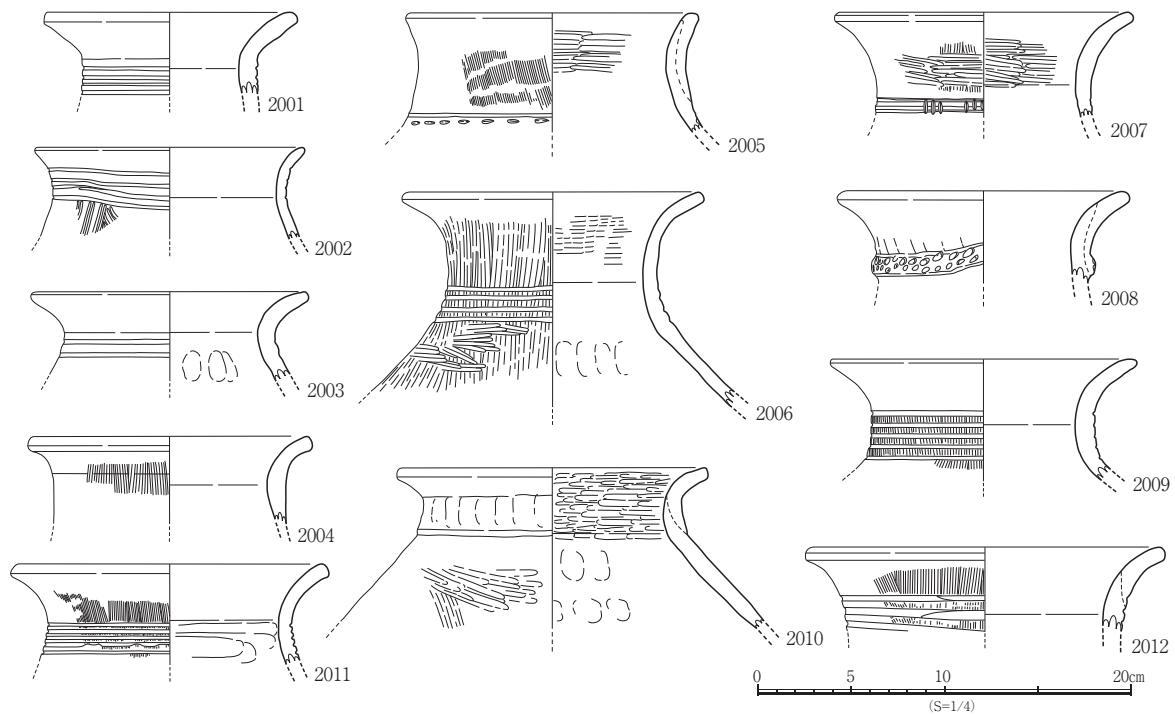


図3-13 SR-2出土遺物実測図1

目を施す。2021は、2020に比べ口縁部が開くもので、口縁部両端にはハケ状工具による刻目を施す。2022は口縁部上端にヘラ状工具による刻目を施す。2023には頸部外面下端にヘラ描沈線と棒状工具による刺突文、拡張した口縁端部下端にハケ状工具による刻目を施す。2024には文様は認められず、頸部外面に煤が付着する。2025は拡張した口縁部両端にヘラ状工具による刻目を施す。2026は2024と同形態のものである。胎土には、2025が細粒砂から極粗粒砂を少し含む以外は、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むものと多く含むものであった。

2027～2058は、前タイプに比べ頸部がさらに長く、外面にヘラ描沈線と微隆起突帯⁽¹⁾を貼付するタイプで、ヘラ描沈線が多条となるものが多くみられる。この微隆起突帯の施文方法には器面の加工により作り出すもの(Aタイプ)と粘土紐を貼付するもの(Bタイプ)とに大きく分かれ、さらに次のように細分される。なお、ここに挙げるタイプのほとんどは後者のBタイプに当たる。

- A-1タイプ：指先(指の腹)でつまみだしたものである。(2017)
- A-2タイプ：上下をヘラ描沈線などで凹めることにより作り出したもので、このタイプは頂部に刻目や刺突文を施す。(2048)
- A-3タイプ：上下を爪で窪めることによって作り出すもので、その痕跡が沈線状にも見え、爪痕が明瞭に残る。(3002)
- B-1タイプ：粘土紐に指先で上から押圧を加えながらつまみ出したもの(2029)
- B-2タイプ：粘土紐に指先でヨコ方向ないし斜め方向の押圧を加えたもの(2031)
- B-3タイプ：粘土紐にヘラ状工具で刻目ないし刺突文を施す際の押圧で貼付したもの(2052)
- B-4タイプ：粘土紐に棒状工具で押圧を加えたもの(2030)
- B-5タイプ：粘土紐にハケ状工具で押圧を加えたもの(2039)
- B-6タイプ：粘土紐に指先の押圧とヘラ状工具や棒状工具等を併用したもの(2032)

2. II区 (1) 自然流路

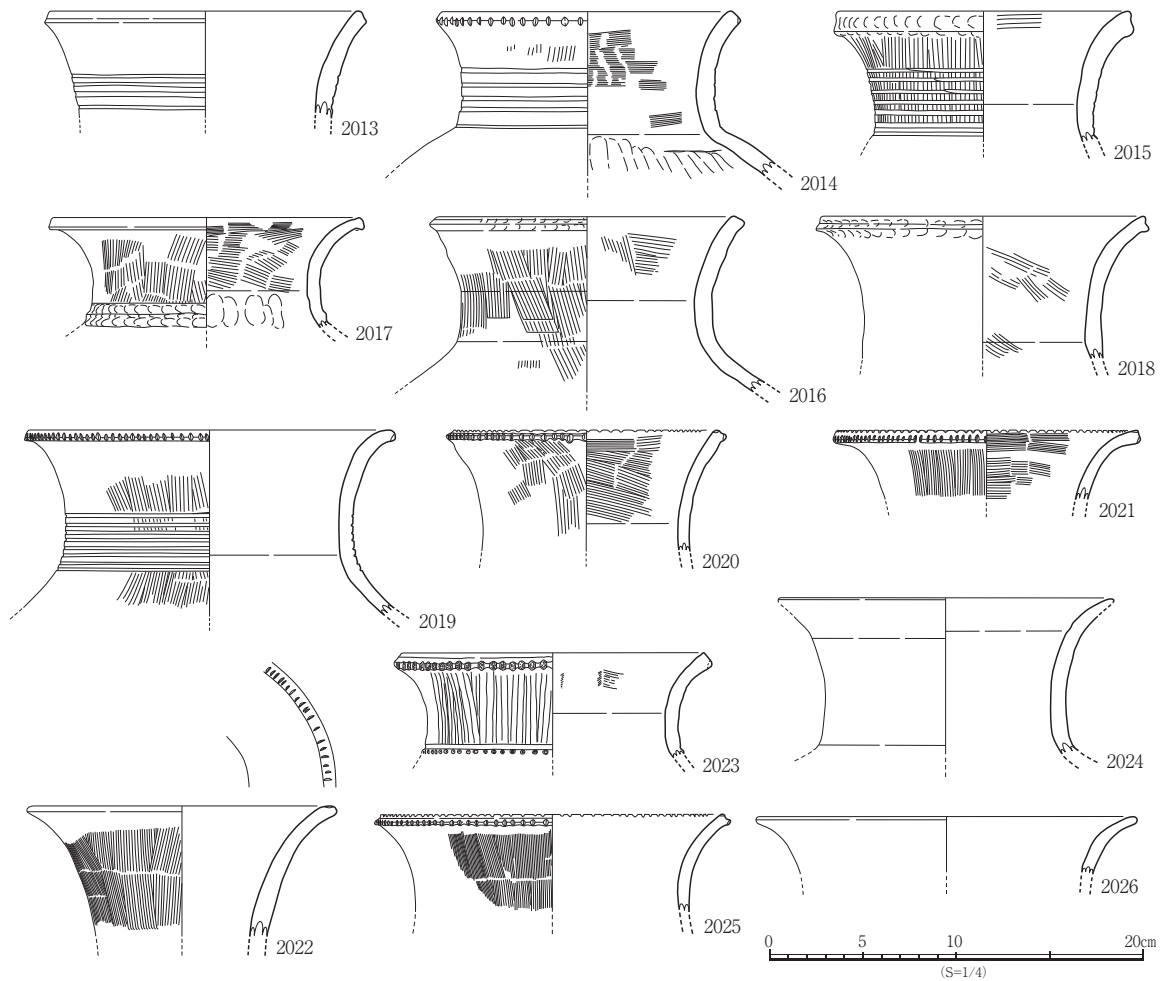


図3-14 SR-2出土遺物実測図2

なお、口縁部内面に施されるものは内側から外側に穿った円孔を伴う場合が多い。

また、このタイプは大きさにより3タイプに細分できる。2027～2035は口径が14cm以下でかつ頸部径が10cm以下となる小型のタイプである。2027にはやや太めのヘラ描沈線を6条以上、2028は2条以上施す。2029～2031にはヘラ描沈線と微隆起突帯が施される。2029は貼付部位をヘラで凹め目印を付けてからB-1タイプの微隆起突帯を施す。2030は直立する口頸部を有するもので、口縁端部両端にハケ状工具による刻目、頸部外面に11条のヘラ描沈線を施した上で内側の沈線の中に胎土とは異なる粘土帯を貼り、B-4タイプの微隆起突帯を貼付する。その下に半裁竹管による刺突文とクシ描波状文が残る。2031は口縁端部が短く水平を向くもので、内側にB-3タイプの微隆起突帯を貼付し、2個一対の円孔を内側から外側に穿つ。頸部外面には2～5条単位のヘラ描沈線の中にB-2タイプの微隆起突帯を貼付する。2032の頸部外面には1～5条単位のヘラ描沈線の中にB-6タイプの微隆起突帯を貼付する。2033は口縁部に2個一対の円孔を穿ち、頸部外面にはヘラ描沈線の中にB-2タイプの微隆起突帯を2条単位の3段貼付する。2034は頸部が欠損するもので、口縁部を指押えて拡張し、円孔が4カ所残る。2035は拡張した口縁端部下端にヘラ状工具による刻目と4個単位の円孔を穿ち、頸部外面にはヘラ描沈線の中にB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。胎土には、2034が細粒砂から極粗粒砂を少し含む以外は、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むもの

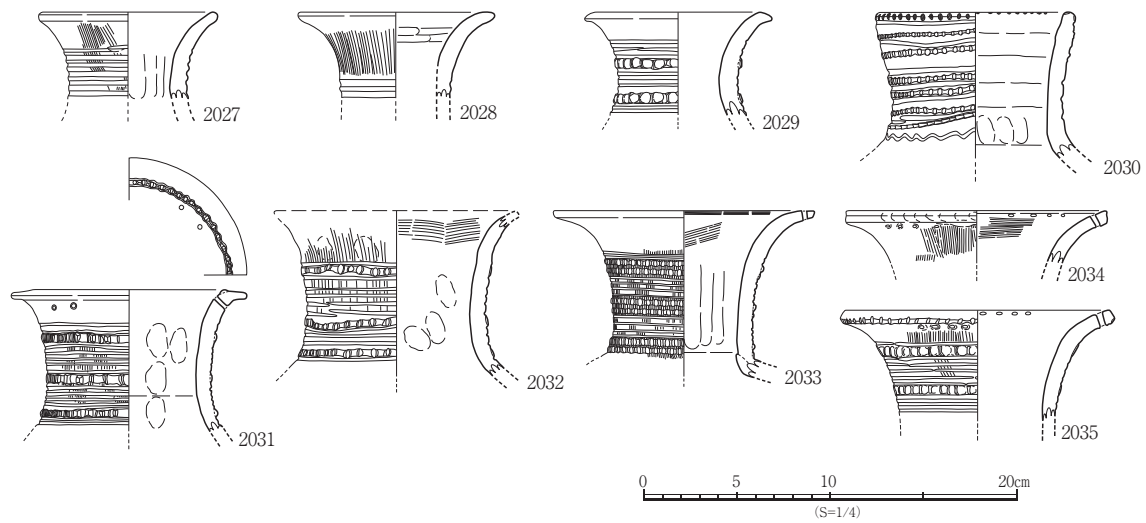


図3-15 SR-2出土遺物実測図3

と多く含むものであった。

2036～2052は、口径が25cm以下で頸部径が10cm以上の中型のタイプである。2036は、拡張した口縁端部両端にヘラ描沈線を挟んでヘラ状工具による刻目、内側にB-3タイプの微隆起突帯を1段貼付し、頸部外面にはヘラ描沈線を挟んでB-2タイプの微隆起突帯を貼付する。2037はヘラ描沈線の中にB-4タイプの微隆起突帯を貼付する。2038はやや太めのヘラ描沈線の中にB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2039は、拡張した口縁端部両端にハケ状工具による刻目を施し、内側にB-5タイプの微隆起突帯を貼付する。頸部外面には6条のヘラ描沈線の中にB-5タイプの微隆起突帯を貼付する。2040は口縁部に4個一組の円孔を7カ所に施していたとみられ、頸部外面には3～4条のヘラ描沈線の中にB-3タイプの微隆起突帯を貼付する。2041は頸部外面に太めのヘラ描沈線4条の間に2条のB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2042は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目、頸部外面には3条以上のヘラ描沈線の中にB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2043は口縁部外面に1条のヘラ描沈線と口縁部に3個の円孔が残る。2044は口縁端部が内傾する浅い凹面をなし、内側にB-1タイプの微隆起突帯を貼付し、その下に4個一組の円孔を穿つ。頸部には3条以上のヘラ描沈線の中にB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2045は口縁端部上端にヘラ状工具による刻目と3個一組の円孔、頸部外面には2条と3条のヘラ描沈線を挟んで、指先の押圧で楕円形浮文を作り出す。2046は搬入品とみられるもので口縁部内面2カ所にB-3タイプの微隆起突帯を貼付し、外面にも3条以上のヘラ描沈線の中にB-3タイプの微隆起突帯を貼付する。2047は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目、頸部外面に4条以上のヘラ描沈線を施す。2048は口縁端部両端にハケ状工具による刻目、頸部外面にヘラ描沈線とA-2タイプの微隆起突帯を作り出し、その頂部に棒状工具による刺突文を施す。2049は口縁部下端にヘラ状工具による刻目、円孔、頸部外面にB-3タイプの微隆起突帯を貼付する。2050は口縁部内面に円孔を挟んでB-4タイプの微隆起突帯を貼付し、頸部外面には3条以上のヘラ描沈線とB-4タイプの微隆起突帯を貼付する。2051は口縁端部を拡張するも刻目はなく、頸部外面にB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2052は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目、内面に円孔を挟んでB-3タイプの微隆起突帯を貼付する。胎土は、2036・2037・2041・2042・2046・2048・2052が細粒砂から極粗粒砂を少し含むもので、これら以外が細粒砂から極粗粒砂ない

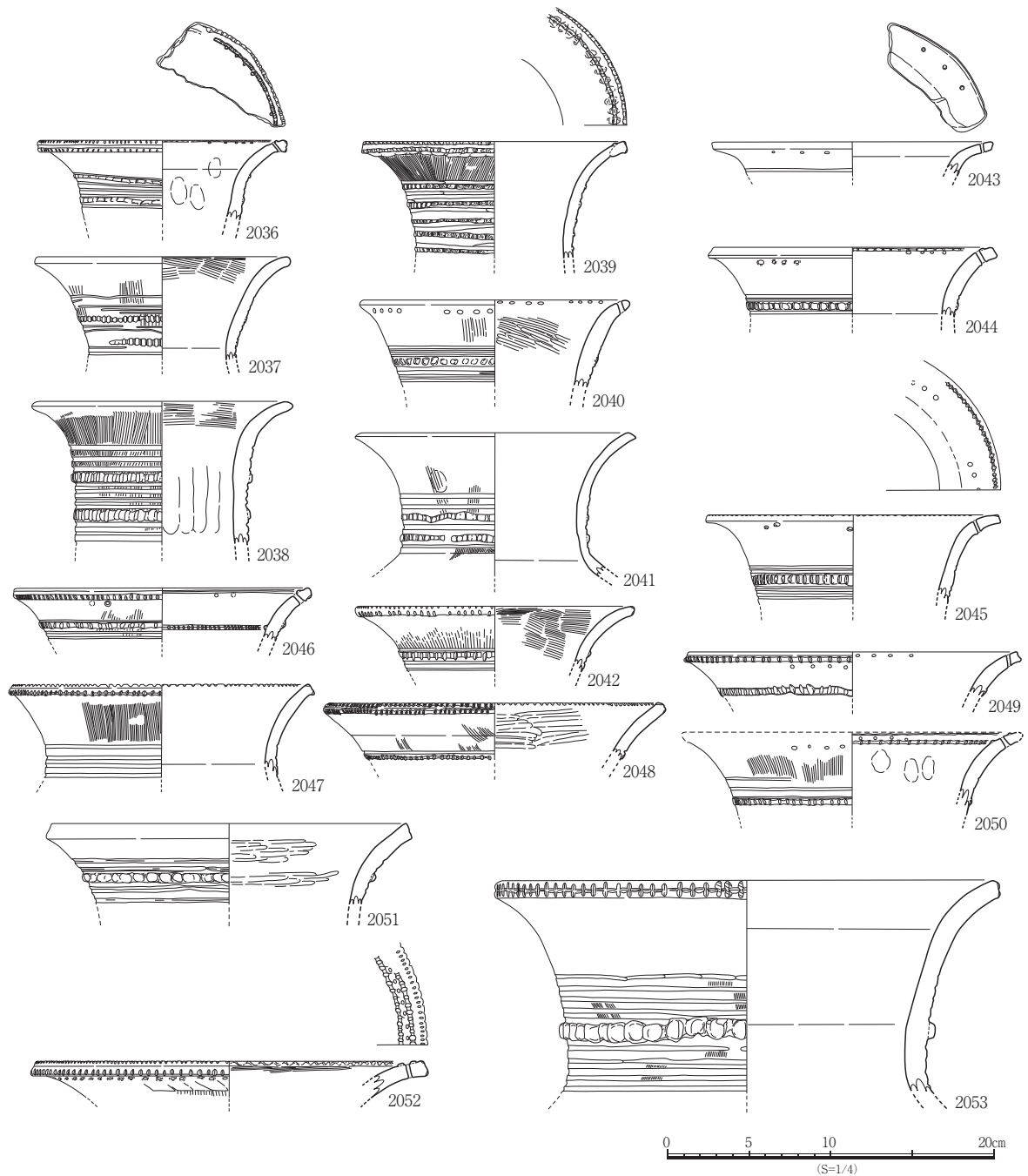


図3-16 SR-2出土遺物実測図4

し極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2053は大型のタイプで、口径は30cmを超し、頸部の径も20cm以上を測る。口縁端部にはヘラ描沈線を1条施した上にハケ状工具で刻目を加え、頸部外面には上下各5条のヘラ描沈線の間にはB-1タイプの突帯を貼付する。胎土には細粒砂から細粒中礫を比較的多く含んでいた。

2054～2058は形態的には前タイプとほぼ同じであるが、クシ描きによるものである。2054は4本単位のクシ描直線文の間に2条のB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2055は口縁部内面に僅かにB-1タイプの微隆起突帯を貼付し、その上から円孔を穿つ。頸部外面には3本単位のクシ描直線文

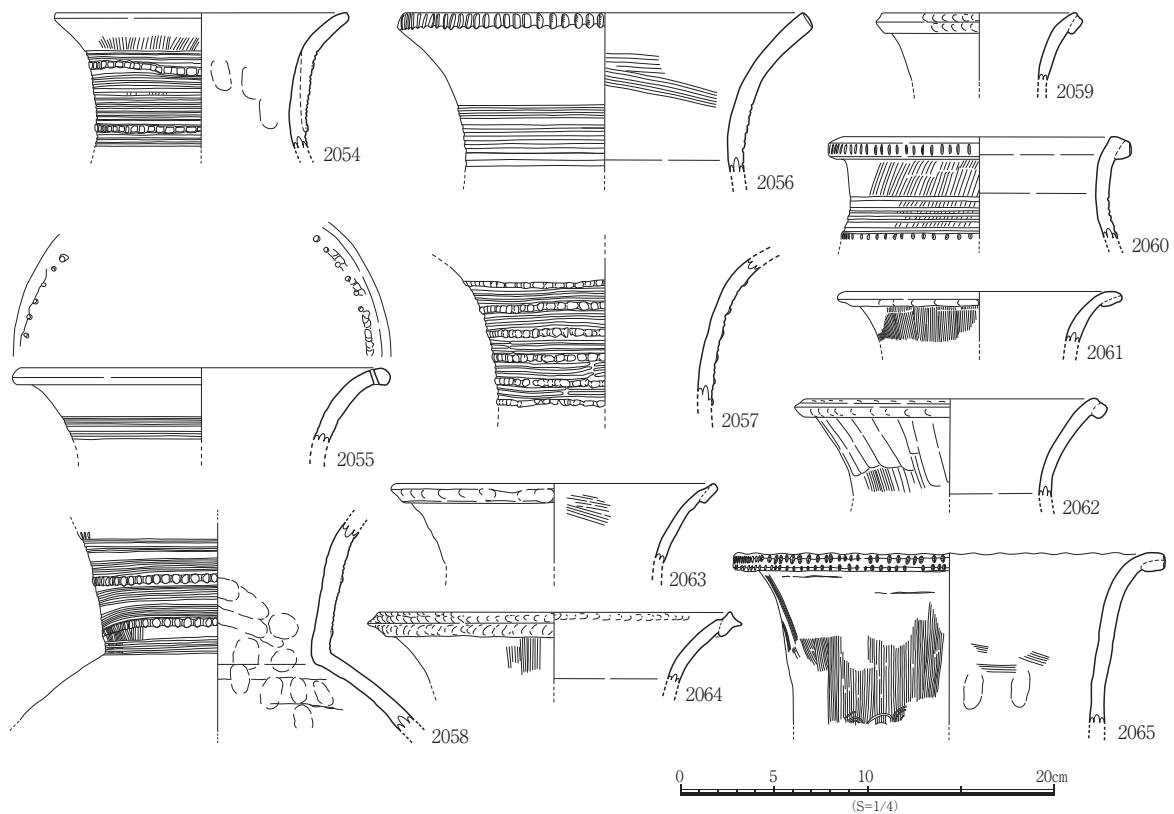


図3-17 SR-2出土遺物実測図5

が施される。2056は口縁端部にハケ状工具による刻目、頸部外面には3～4本単位のクシ描直線文を施す。2057は頸部外面にB-1タイプの微隆起突帯と3本単位のクシ描直線文を交互に施す。2058は頸部外面に4本単位のクシ描直線文を5条とB-1タイプの微隆起突帯を3条施す。胎土は細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むものか多く含むものであった。

2059～2065は貼付口縁となったものである。2059は口縁部外側に断面方形の粘土帯を指押えで貼付する。2060は2059と同様の粘土帯を貼付し、端部にヘラ状工具による刻目を施し、頸部外面には5条のヘラ描沈線とその下に棒状工具による刺突文を施す。2061は薄い粘土帯を貼付したもので、外面には指押えの痕跡が僅かに残る。2062は2059と同様の粘土帯を貼付する。また、外面の一部に煤らしきものが付着する。2063は、口縁部成形時に粘土帯を外側に貼付し、その際の指頭圧痕が残る。2064は太めの粘土帯で口縁部を肥厚する。2065は口縁部の外側に粘土帯を貼付し、両端にハケ状工具による刻目、肩部外面にはクシ描波状文を施す。胎土は、2059が細粒砂から粗粒砂を若干含む以外は、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むか多く含むものであった。

2066～2068は頸部から胴部の破片である。2066は頸部外面下端にヘラ状工具による刻目を施す。2067は頸部外面にヘラ描沈線を挟んで棒状工具による刺突文が2段残る。2068は頸部外面に3本以上の単位のクシ描直線文と胴部との境にB-4タイプの微隆起突帯を貼付する。胎土は3点とも細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むものであった。

2069～2081は頸部ないし上胴部の破片である。2069の頸部外面には上に2条、下に3条のヘラ描沈線の間にはA-1タイプの微隆起突帯を作り出す。2070は胴部外面に2～4条のヘラ描沈線と円形浮文が残る。2071は頸部外面に4本単位のクシ描直線文が2条と2本単位のクシ描重弧文が残る。2072

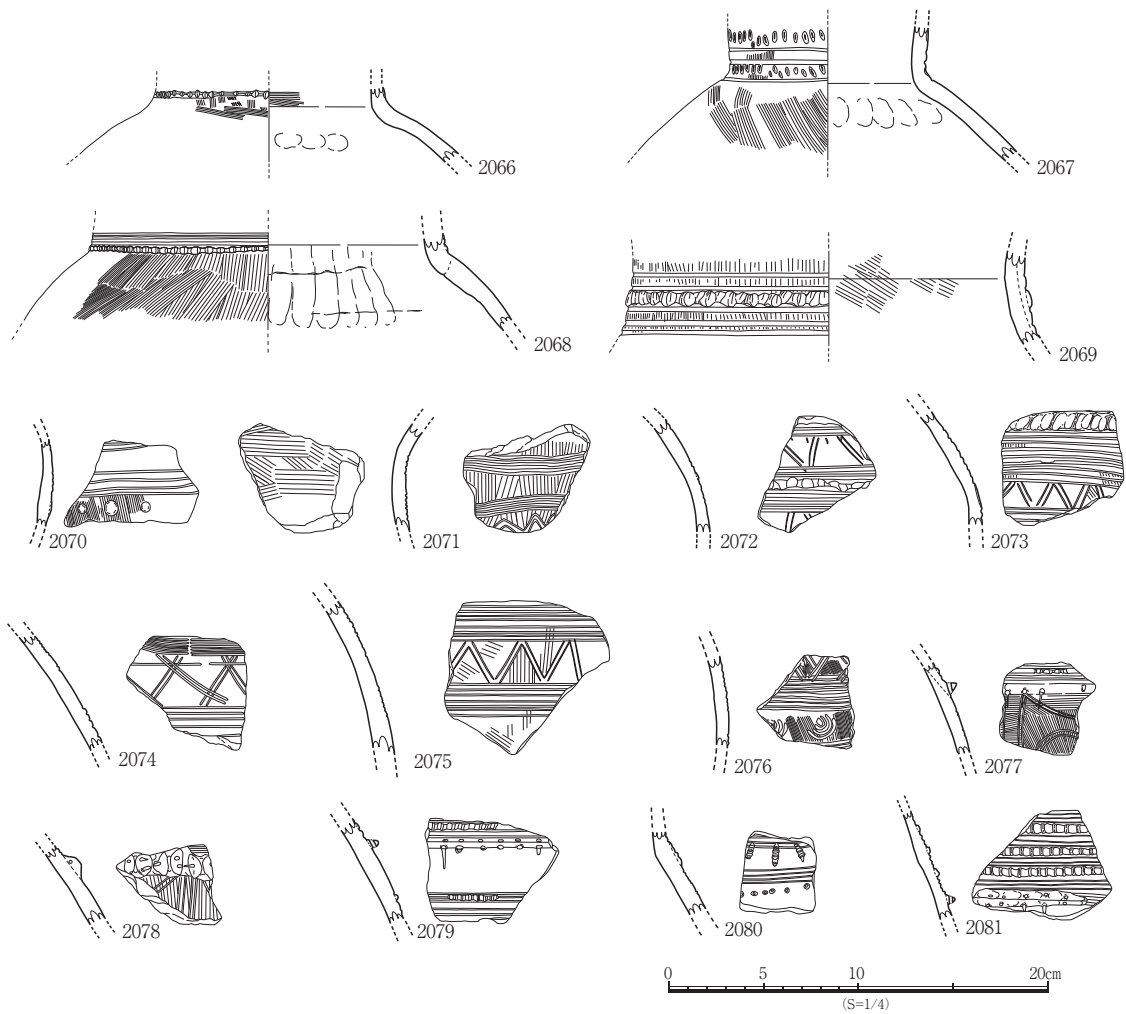


図3-18 SR-2出土遺物実測図6

は、胴部外面に上からヘラ描沈線2条と3条の間に鋸歯文, B-1タイプの微隆起突帯, ヘラ描沈線4条, 鋸歯文が残る。2073は胴部外面に上からA-1タイプの微隆起突帯, 9本単位のクシ描直線文, 2本単位のクシ描鋸歯文, 3条のヘラ描沈線を施す。2074は胴部外面に上から6本単位のクシ描直線文, 2本単位のクシ描斜格子文と1条のヘラ描沈線, 5条のヘラ描沈線が残る。2075の胴部外面には, ヘラ描鋸歯文を挟んで上に8条と下に7条のヘラ描沈線が残る。2076は胴部外面にクシ描きによる鋸歯文, 4本単位の直線文, 重弧文が残る。2077の胴部外面には, クシ描きによる直線文の間にB-1タイプの微隆起突帯, 円孔を穿った断面三角形の突帯, 2本単位のタテ方向の直線文と円弧文が残る。2078の胴部外面には, クシ描きによる直線文, 棒状工具で円孔を穿った楕円形浮文, 2本単位の区画文が残る。2079の胴部外面には, ヘラ描沈線の間にB-1タイプの微隆起突帯, 円孔を穿った断面三角形の突帯, 5~6条のヘラ描沈線の上に部分的に貼付したB-1タイプの微隆起突帯が残る。2080の胴部外面には, 3条のヘラ描沈線, 4カ所にヘラ状工具で刻目を施した棒状浮文, 4条のヘラ描沈線, 半裁竹管文が残る。2081は胴部外面に4本単位のクシ描直線文の上にB-1タイプの微隆起突帯3条と円孔を穿った棒状浮文が残る。胎土は, 2071・2077・2078・2080が細粒砂から極粗粒砂を少し含む以外は, 細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2082~2107は壺の底部とみられるもので, 底径は3.7~10.2cmを測る。2082と2083は小型の壺で,

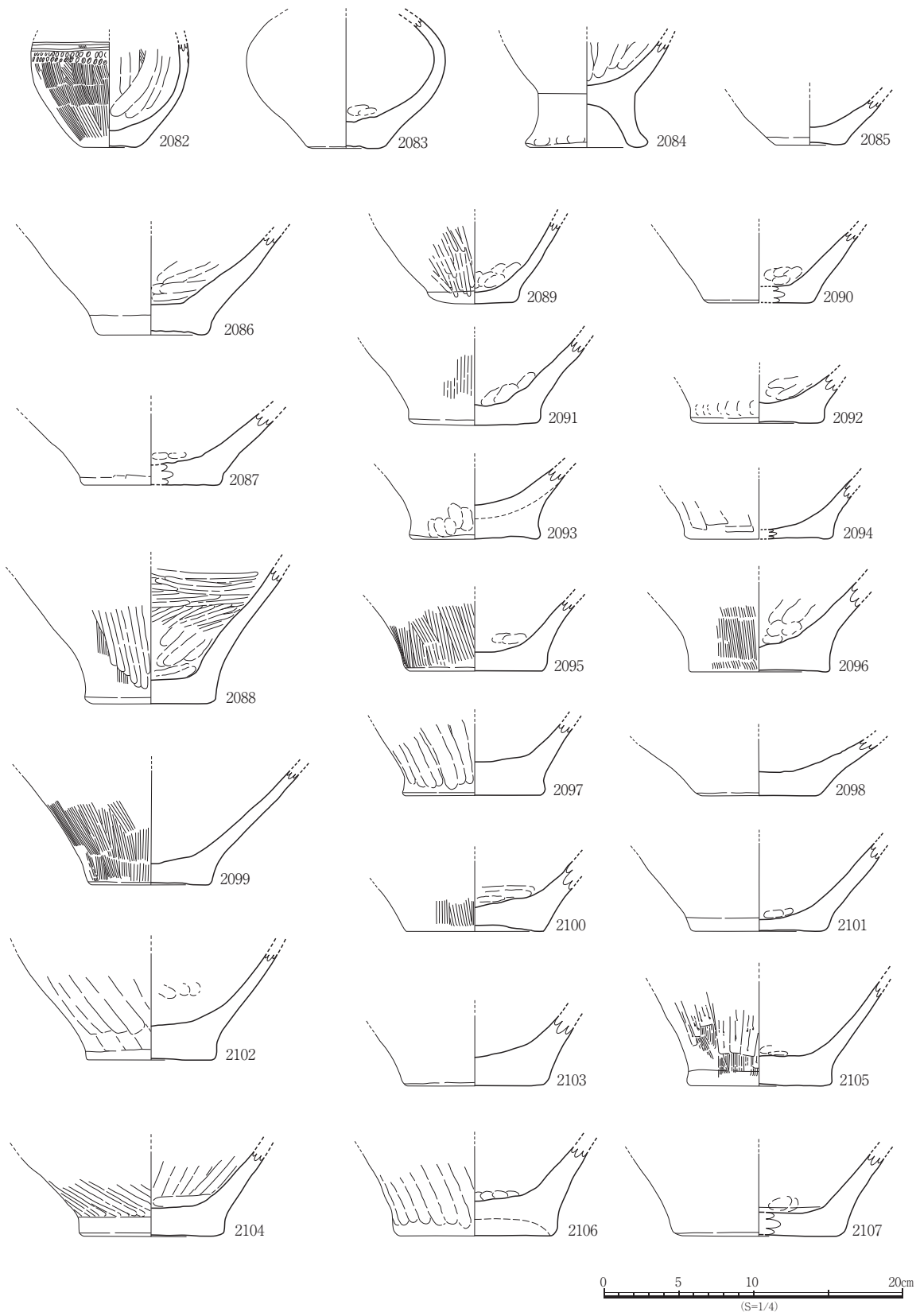


図3-19 SR-2出土遺物実測図7

2. II区 (1) 自然流路

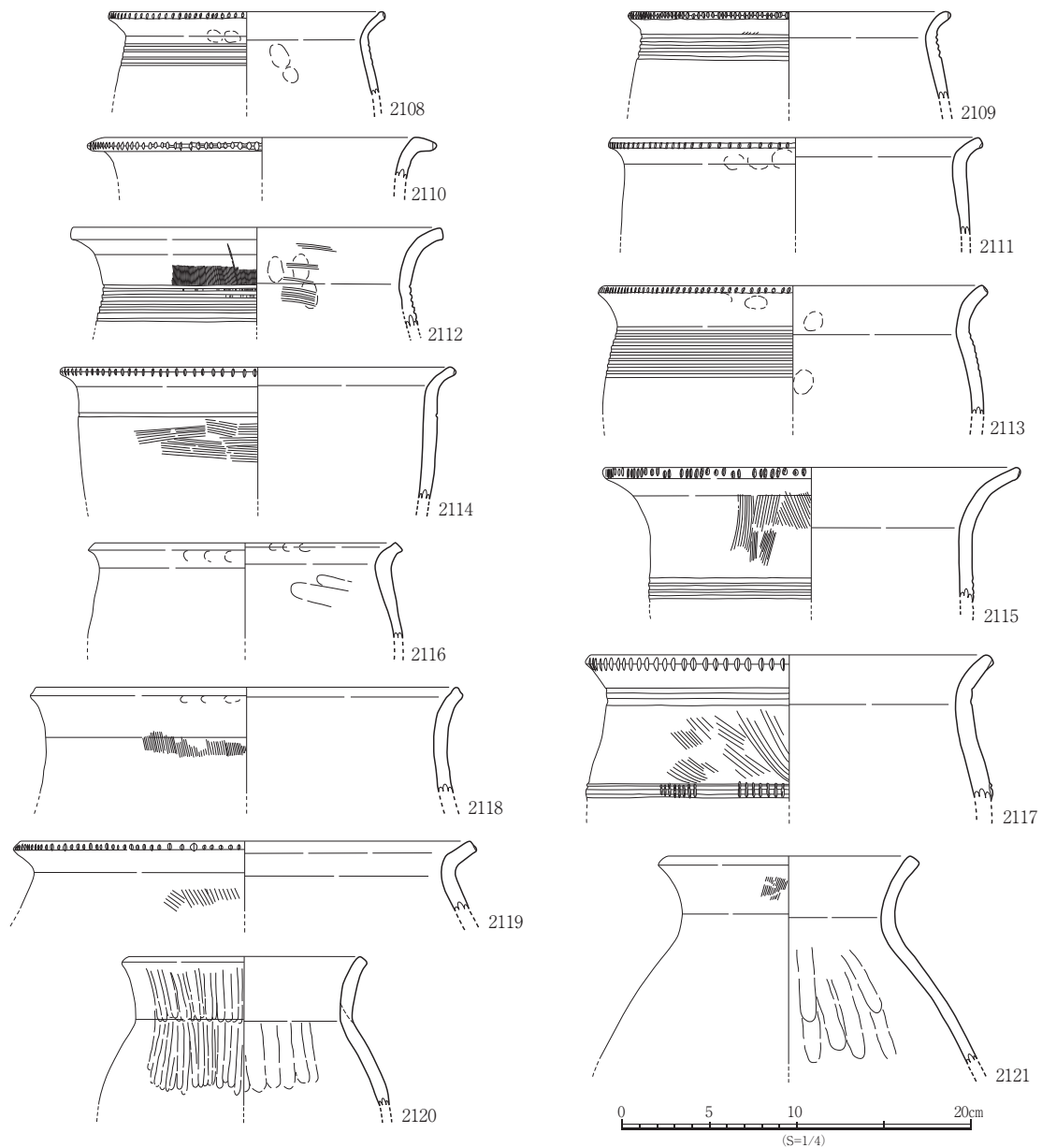


図3-20 SR-2出土遺物実測図8

胴部が残り、2082の中胴部外面には2条のヘラ描沈線と棒状工具による刺突文が2段残る。調整は、外面がハケ調整とナデ調整のものが多く、ヘラ磨きを加えたもの(2088・2089)、ヘラナデ調整を施すもの(2094・2102・2104)、指ナデ調整を施すもの(2097・2106)、ヘラ削りを加えるもの(2105)もみられる。一方、内面の調整はナデ調整と指ナデ調整を施すものが多く、ハケ調整を施すもの(2082)、ヘラ磨きを加えるもの(2088)もみられる。また、被熱で変色したものや煤が付着したもの(2091・2093・2094・2096・2097)もみられる。胎土は、2091が細粒砂から細粒中礫を少し含む以外は、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2108～2185は甕で、2108～2115はほぼ直立する胴部に外反ないし外傾する短い口縁部が付く、所謂如意形口縁を有するものである。2108と2109はほぼ同形態で、口縁端部にはヘラ状工具による刻目、上胴部外面には、2108が2本単位のクシ描直線文、2109が4条のヘラ描沈線を施す。2110は口縁

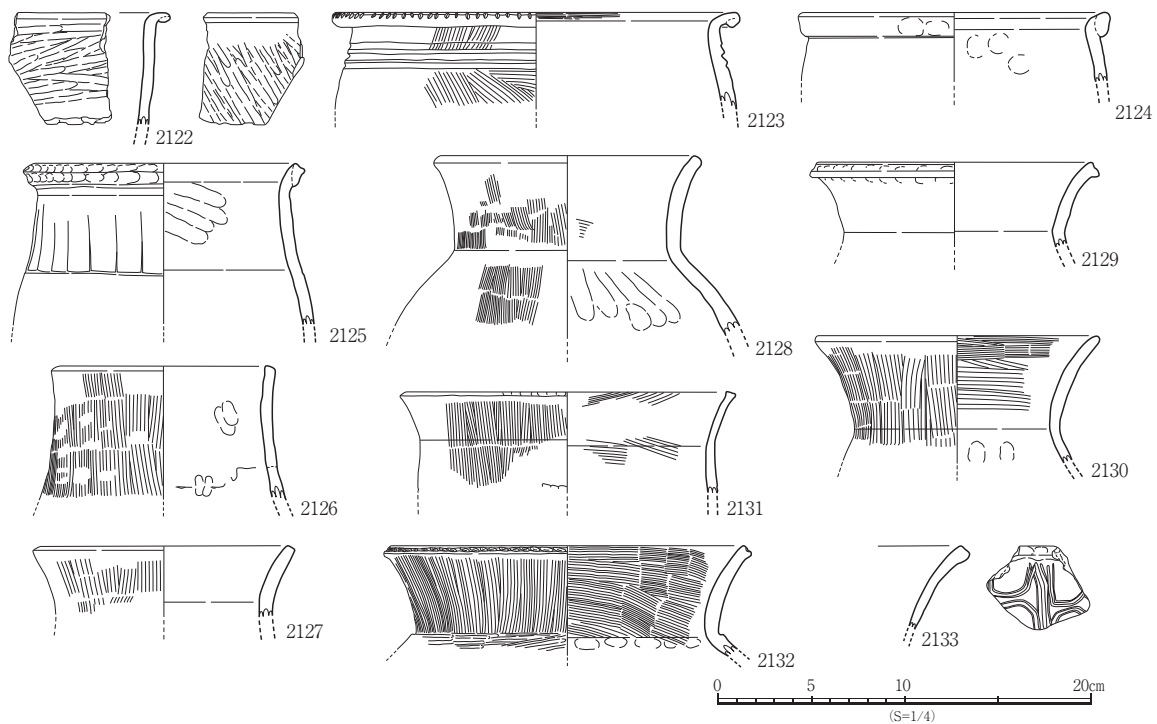


図3-21 SR-2出土遺物実測図9

部が水平に屈曲し、端部にはヘラ状工具による刻目が施される。2111は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目が残る。2112は上胴部外面に6条のヘラ描沈線が残る。2113は口縁端部にヘラ状工具による刻目、上胴部外面に8本単位のクシ描直線文が残る。2114は口縁端部にヘラ状工具による刻目、上胴部外面に1条のヘラ描沈線が残る。2115は口縁端部にハケ状工具による刻目、上胴部外面に4条のヘラ描沈線が残る。胎土には、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2116～2121は中胴部に膨らみを持つ胴部から口縁部が短く外反ないし外傾するものである。2116の口縁部は短く屈曲し、端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁端部と内側に指押えの痕がそれぞれ残る。2117は、口縁端部下端にヘラ状工具による刻目、頸部に2条のヘラ描沈線、胴部外面にはA-2タイプの微隆起突帯を作り出し、その上に7～8本単位のヘラ状工具による刻目を施す。外面には煤が付着する。2118は口縁端部外面に指押えの痕が残り、外面には煤が付着する。2119は口縁端部下半にヘラ状工具による刻目が残る。2120と2121は無文で、2120の外面にはタテ方向のヘラ磨きを施す。胎土は細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2122～2125は口縁部に粘土帯を貼付するもので、2124と2125は朝鮮系無文土器ではないかとみられるものである。2122はほぼ直立する胴部に小さく屈曲する口縁を有するもので、口縁部外側に粘土帯を貼付する。内外面にはヘラ磨きを施す。2123はやや膨らみを持つ胴部から小さく屈曲する口縁部を有するもので、口縁部外側に粘土帯を折り込んで肥厚する。口縁端部にはヘラ状工具による刻目、上胴部には3条のヘラ描沈線を施す。外面には煤が薄く付着する。2124は無文で、ほぼ直立する胴部に粘土帯を貼付し、口縁部が玉縁状をなすもので、外面には煤が一面に付着する。2125は、やや膨らみのある中胴部から上胴部が直立し、口縁部は短く屈曲し、粘土帯を貼付して肥厚する。また、胴部外面にはヘラナデ調整を上下に施すことにより、その境に小さな段部を作り出す。胎土はい

2. II区 (1) 自然流路

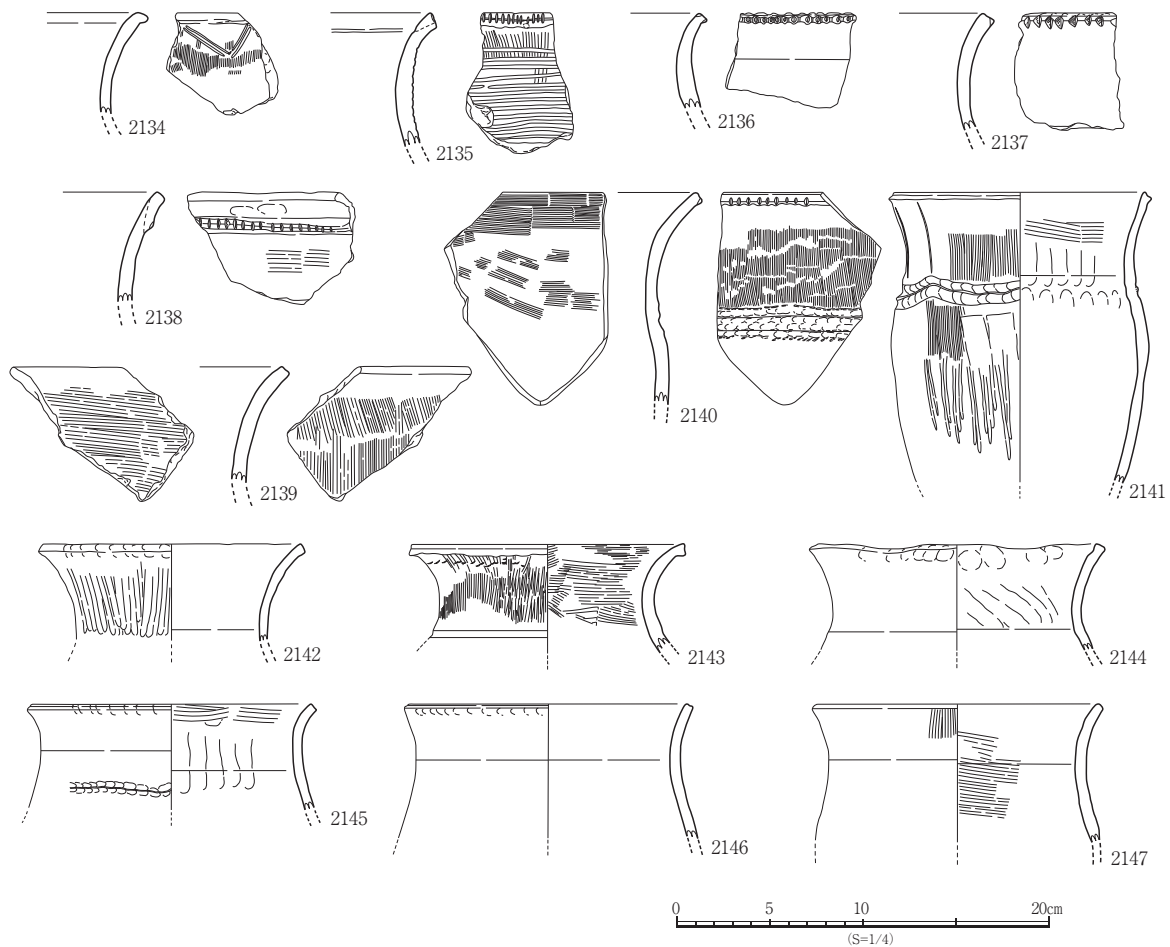


図3-22 SR-2出土遺物実測図10

ずれも細粒砂から極粗粒砂ないし、極細粒中礫を多く含むものであった。

2126は直立する口縁部を有するもので、外面には煤が一面に付着する。胎土は細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

2127～2133は丸味のある胴部から口縁部が外反ないし外傾するもので、2131と2133以外は無文である。2127は外傾する口縁部の破片で、外面には煤が付着する。2128は頸部と胴部外面にハケ調整を施した後で、その境にヨコナデ調整を加える。胴部外面を中心に被熱で変色し、煤が一部に付着する。2129は口縁端部下端を指でつまんで拡張し、端部は内傾する凹面状をなす。2130は、口縁部が胴部から緩やかなくの字形をなすもので、口縁端部は丸く収める。2131は口縁端部を指でつまんで僅かに拡張し、上胴部にA-1タイプとみられる微隆起突帯の痕跡が残る。2132は口縁端部に棒状工具による刺突文を施し、頸部と胴部の境にはタテ方向のハケ調整を頸部に、ヘラ磨きを胴部に行うことにより段部を作り出す。2133は口縁端部下端を指でつまみ出して拡張し、口縁部外面に2本単位のクシ描きでタテの直線文と重弧文を施す。また、外面には煤が付着する。胎土は、2127が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた以外は、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2134～2183は、口頸部が緩やかに外反して延びるもので、胴部は2141のように倒卵形を呈していたものとみられる。2134は口縁端部が水平に短く延びるもので、外面には2本単位のクシ描鋸歯文

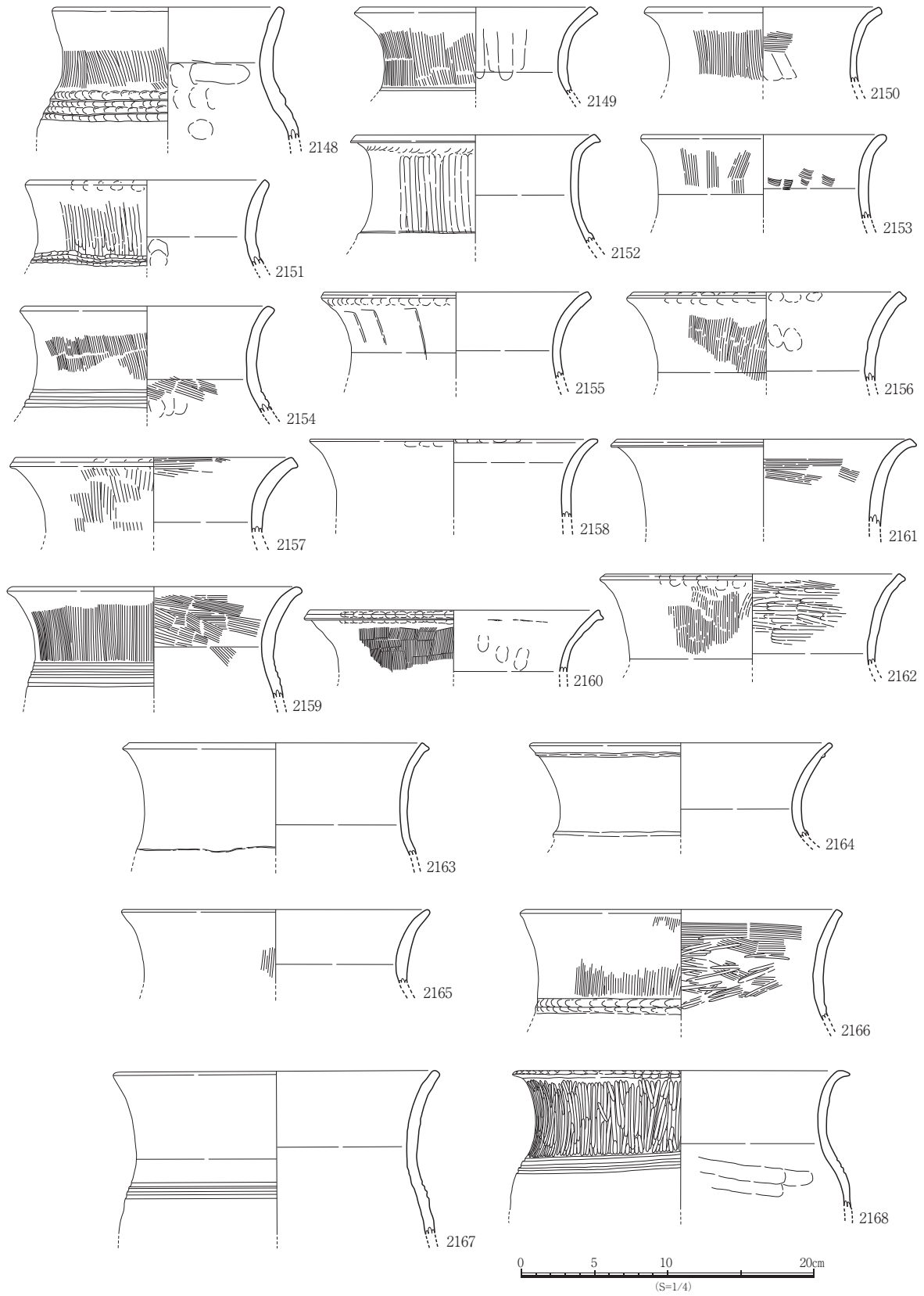


図3-23 SR-2出土遺物実測図11

2. II区 (1) 自然流路

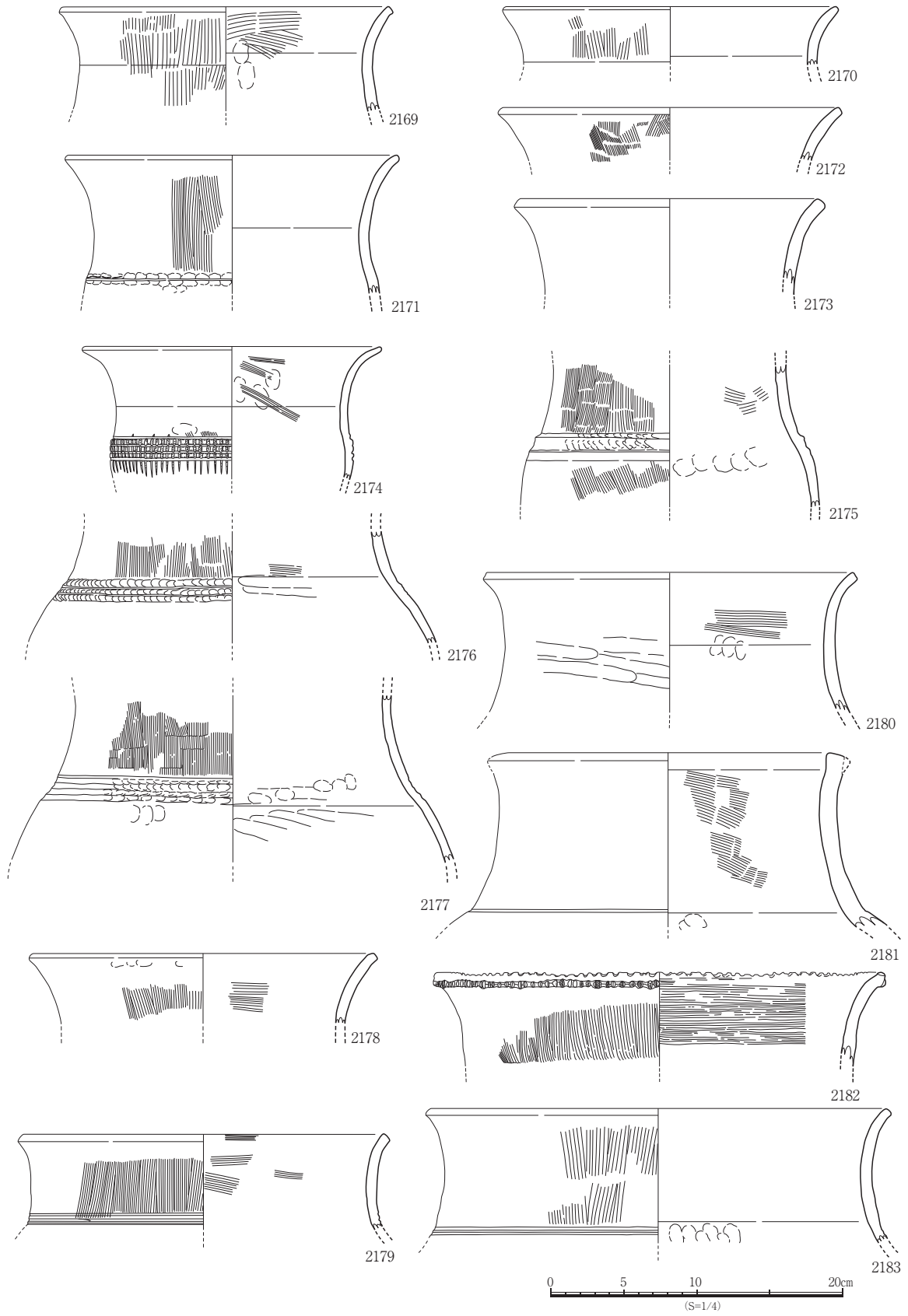


图3-24 SR-2出土遺物実測図12

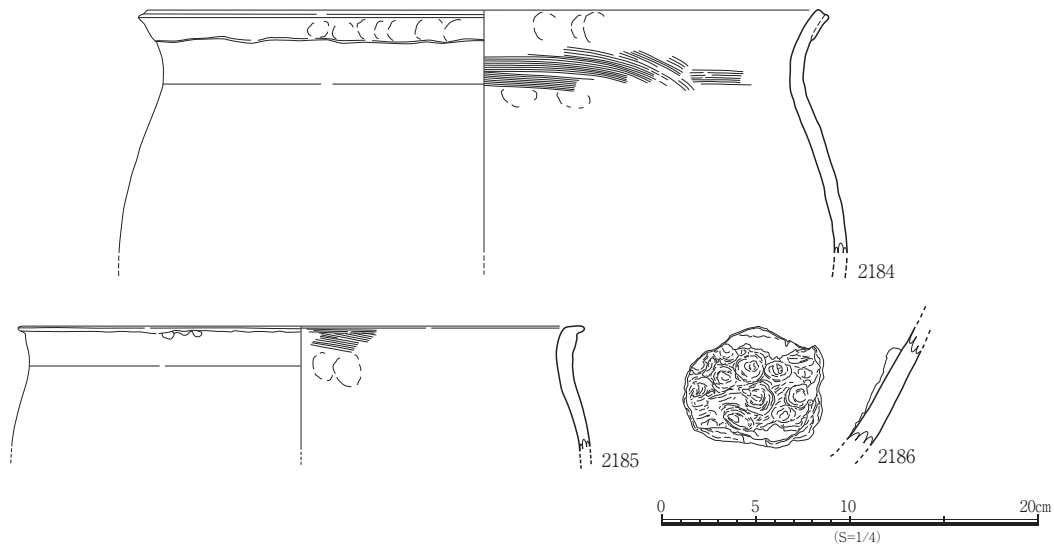


図3-25 SR-2出土遺物実測図13

が残る。2135は口縁端部に1条のヘラ描沈線を施した後、ヘラ状工具で刻目を加え、外面には12条のヘラ描沈線が残る。2136は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目を施す。また、外面には煤が付着する。2137は口縁端部下端にハケ状工具による刻目を施す。2138は口縁部外面にA-2タイプの微隆起突帯にヘラ状工具による刻目を施した所謂刻目突帯を有する。2139は無文で、頸部内外面にハケ目が残る。2140は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目、頸部外面下端にA-1タイプの微隆起突帯を2段作り出し、下方の微隆起突帯には爪の跡が残る。2141は頸部と胴部の境に棒状工具で凹めた上でB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。胴部内面は指ナデ調整の後にナデ調整を加え、上部に指頭圧痕が残り、焦げ目が付着する。胴部外面はハケ調整の後に、中胴部を境に上半にはヘラナデ調整、下半にはヘラ磨きを加える。2142は口縁端部下半を指でつまみ出し拡張する。2143も口縁端部下半を指でつまみ出し拡張し、外面にはその際の爪痕が残る。頸部下端に棒状工具により1条の凹線が残り、外面には一面に煤が付着する。2144は口縁端部を内側と外側から指でつまみ出し成形しており、口縁端部と口縁部内外面に指頭圧痕が残る。2145は口縁端部下端を指でつまみ出し、頸部外面にA-1タイプの微隆起突帯を作り出す。また、外面には黒斑がみられる。2146は無文で、口縁端部に指押えの痕跡が残る。2147も無文で、器面にはハケ目が残る。2148は肩部外面にA-1タイプの微隆起突帯を2段に作り出す。2149は頸部外面下端にヘラ描沈線が1条残る。2150は無文で、外面一面に煤が付着する。2151は頸部外面下端にA-1タイプの微隆起突帯が1条残り、外面には煤が付着する。2152は口縁部外面に口縁端部をつまみ出した際の爪痕が明瞭に残り、頸部外面下端にA-1タイプの微隆起突帯を作り出す。2153は無文で、口縁端部は丸く仕上げ、外面に煤が一面に付着する。2154は肩部外面にヘラ描沈線が3条残り、口頸部外面を中心に煤が付着する。2155は無文で、口縁端部外面に指押えの痕が残る、外面にヨコ方向のヘラナデ調整を施す。2156～2158は無文で、口縁端部と外面に指で成形した痕跡が残る。2156は外面に煤が付着する。2157は、内面はヨコ方向、外面はタテ方向にハケ調整を施す。2158は口縁部を外傾させ、細く仕上げる。2159は肩部外面に4条のヘラ描沈線が残り、外面に煤が付着する。2160は口縁端部と外面に口縁端部下半を指でつまみ出した際の痕跡が明瞭に残り、外面に煤が付着する。2161も2160同様指でつまみ出しているが、ヨコナデ調整でその痕跡は確認できない。また、外面には煤が付着する。2162も2160同様口縁端部と外面に指でつまみ

2. II区 (1) 自然流路

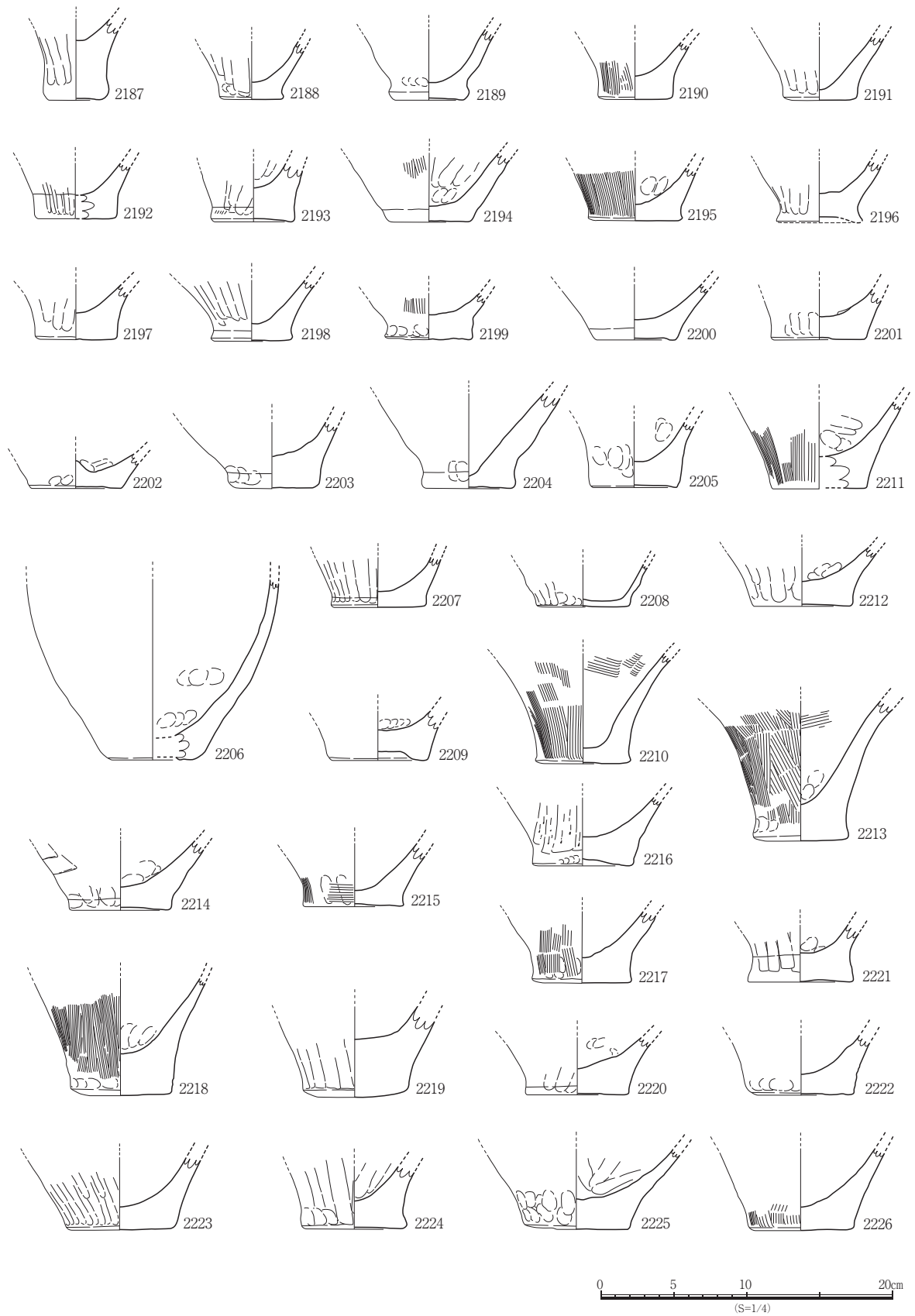


图3-26 SR-2出土遗物实测图14

出した際の痕跡が残り，外面には煤が付着する。2163は頸部外面下端にA-1タイプとみられる微隆起突帯が残り，外面一面に煤が付着する。2164は口縁部と頸部外面下端に各1条B-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2165は無文で，口縁端部は丸く収める。2166は頸部外面下端にA-1タイプの微隆起突帯が1条残る。2167は肩部外面にヘラ描沈線を3条施す。2168は口縁端部を指でつまみ出し，頸部外面にヘラ状工具によるとみられるタテ方向の沈線が一面に残り，肩部にはヘラ描沈線を3条施す。2169と2170は無文で，器面にはハケ目が残る。2169は口縁部外側に煤が付着する。2170は口縁端部を丸く仕上げる。2171は頸部外面下端にA-1タイプの微隆起突帯が1段残る。2172と2173は無文で，いずれも外面には煤が付着する。2172は，口縁端部が内傾する平面となる。2173は，口縁端部が内傾する浅い凹面となる。2174は口縁部を丸く収め，肩部外面に4条のヘラ描沈線を施した上にハケ状工具によりタテ方向に刺突文を加飾する。2175～2177は大きさが異なるものの同形態の甕で，いずれも口縁部が欠損するも頸部から胴部が残存し，肩部外面にはA-1タイプの微隆起突帯を

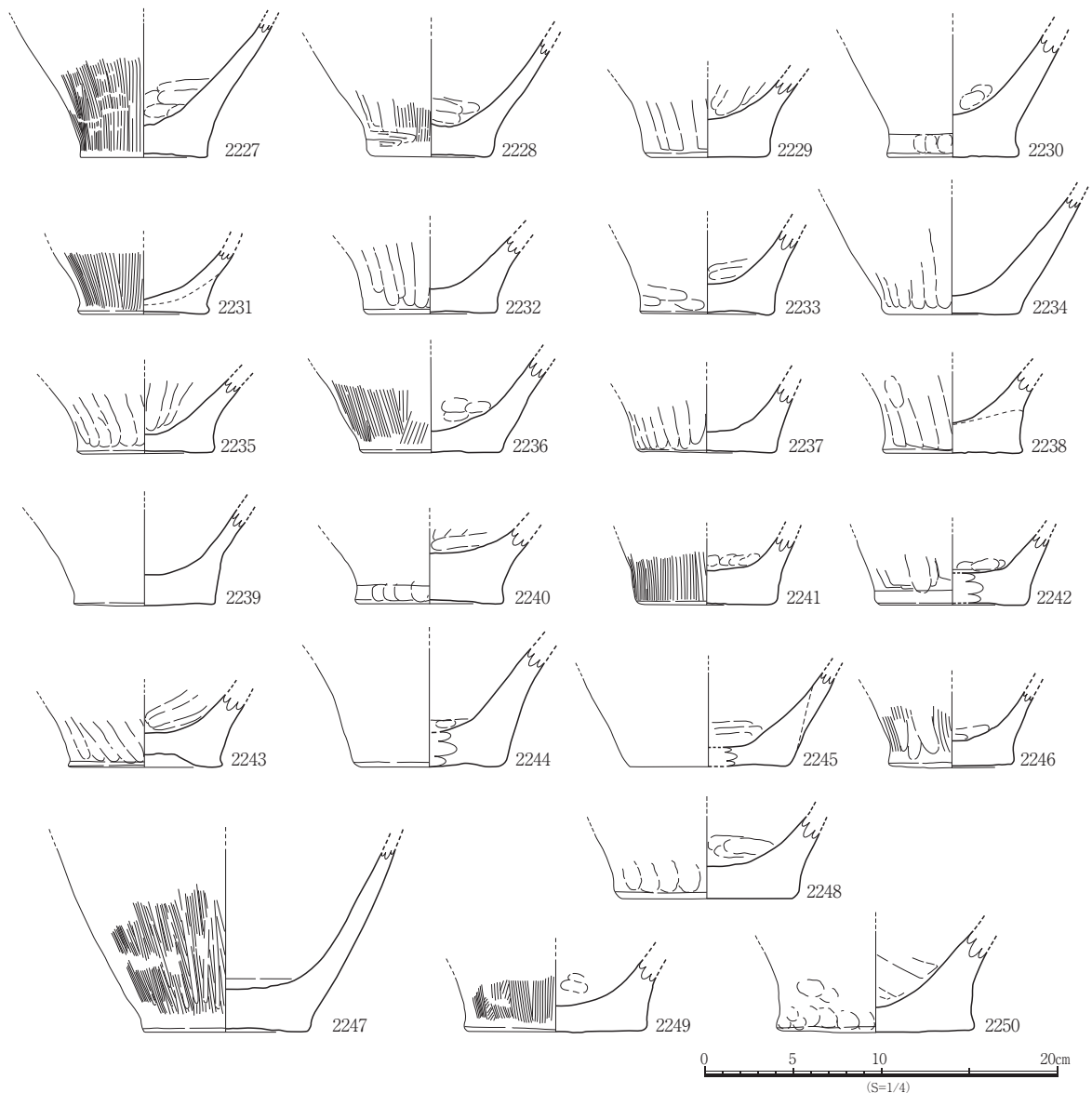


図3-27 SR-2出土遺物実測図15

2. II区 (1) 自然流路

いずれも2条上段から下段の順に作り出し、2175は、下方の微隆起突帯の指の痕をヨコナデ調整でナデ消している。2176は外面を中心に摩耗する。2177は、焼成が被熱のせいかわめて良い。2178は無文で、外面に煤が付着する。2179は頸部外面下端に3条のヘラ描沈線が残り、外面には口縁部を中心に煤が付着する。2180は2179と同形態の大型品とみられるが、残部は無文である。2181は頸部外面に1条のヘラ描沈線が残るもので、大型の壺の可能性もあるが、形態的には2180と似ておりここでは甕とした。2182は口縁端部両端にハケ状工具による刻目を施す。2183はこの類の中では最大のもので、口径31.2cmを測り、頸部外面下端には2条のヘラ描沈線が残る。胎土は、ほとんどの土器が細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであったが、若干含むもの(2144・2145)と少し含むもの(2152・2166・2179)もみられた。

2184は、口縁部が膨らみのある胴部から短く外反するもので、口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付する。内面には焦げ目、外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

2185は、口縁部が膨らみのある胴部から短く外傾し、口縁端部外端を指でつまみ出す。外面は被熱で赤く変色する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

2186は胴部の破片で、内面には厚く焦げが付着しており、放射性炭素分析を行った資料である。製

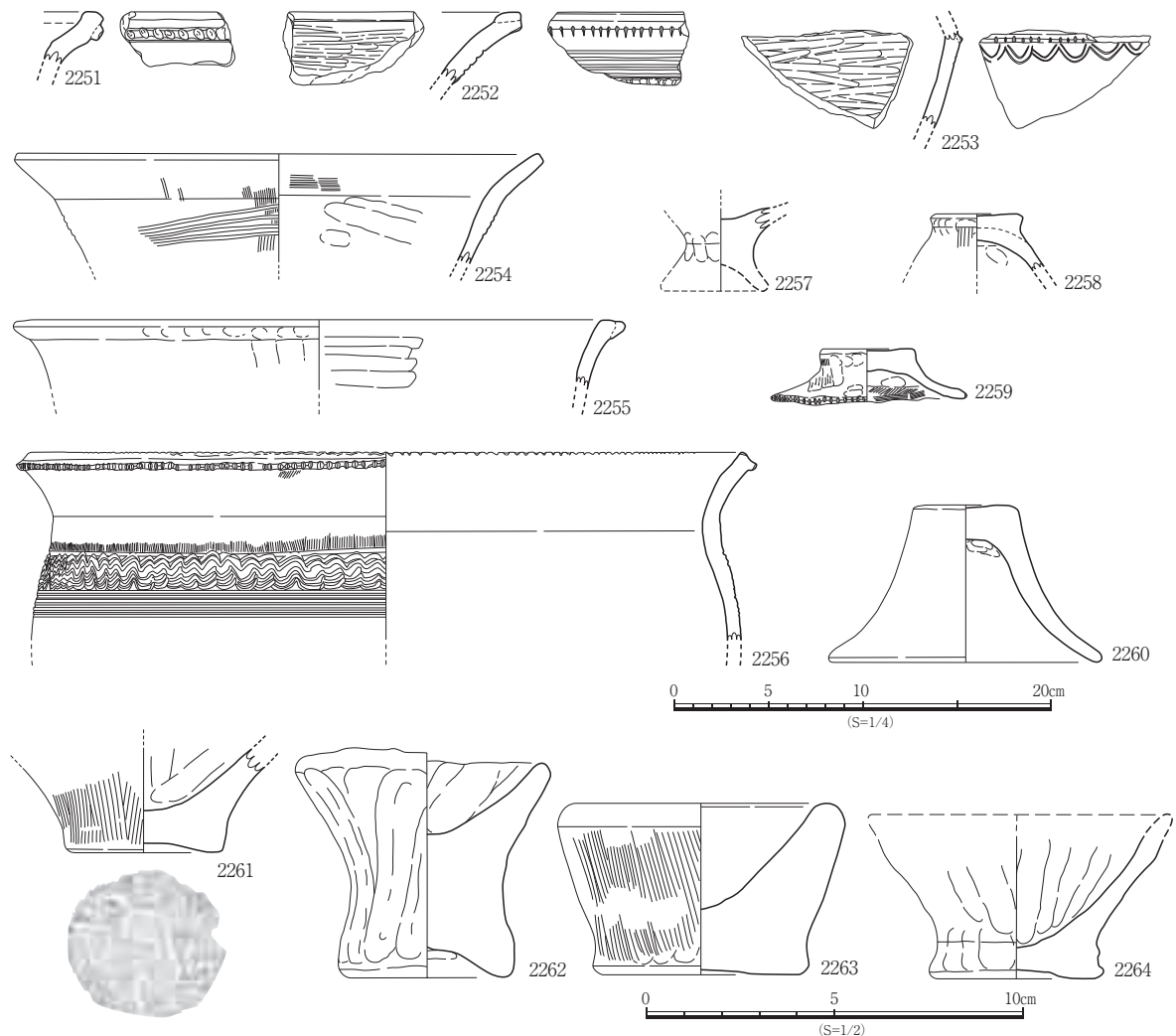


図3-28 SR-2出土遺物実測図16

塩土器の可能性はある。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

2187～2250は甕の底部とみられるもので、底径は3.5～11.0cmを測り、いずれも器壁は厚く、平底ないし上げ底風となる。また、多くは煤が付着したり被熱で器壁が変色し、内面に焦げが付着するものも散見される。2187は細長く、厚さ4.0cmを測るもので、類例の出土はない。調整は、外面がナデ調整、指ナデ調整、ハケ調整とヘラナデ調整を施すものが多く、ヘラ磨き(2192・2223)、ヘラ削り(2216)を施すものもみられ、内面がナデ調整と指ナデ調整を施すものが多く、ハケ調整(2213・2247)、ヘラナデ調整(2250)を施すものもみられる。なお、内底面や外面下端などには指頭圧痕が比較的よく残る。胎土は、2188・2205・2207・2211・2222・2250が細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を少し含んでいた以外は、細粒砂から極粗粒砂ないし細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

2251～2256は鉢とみられるもので、2251は口縁部外面に棒状工具による刺突文を施す突帯を貼付する。2252は口縁端部内側に粘土帯を貼付し、外端にヘラ状工具による刻目、外面に4条のヘラ描沈線とA-1タイプの微隆起突帯を施す。2253は体部とみられる破片で、口縁部との境にA-2タイプの微隆起突帯を作り出し、そこにヘラ状工具による刻目を施し、その下に2本単位のクシ描きによる重弧文を施文する。2254は体部外面に4条のヘラ描沈線が残る。2255は口縁端部外面に粘土帯を貼付する。2256は口縁端部を拡張し、ヘラ状工具による刻目を両端に施し、体部外面にクシ描直線文を施した後で2段にクシ描波状文を加飾する。胎土は、2253・2256が細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を少し含み、2251が細粒砂から極粗粒砂及び雲母片を多く含む以外は、細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むものであった。

2257は高杯の脚部ではないかとみられるもので、杯部は斜め上方に開く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

2258～2260は蓋で、2258と2259は小型品である。2258は僅かにつまみを作り出す。2259は口縁端部にヘラ状工具による刻目を施す。2260は無文で、天井部内面には指押えの痕が残る。胎土は、2260が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた以外は、細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むものであった。

2261～2264はミニチュア土器である。2261は甕のミニチュアとみられ、外面にはハケ調整、外底面にはヘラ削りがみられる。2262は臼のミニチュアではないかとみられるもので、器面には指ナデ調整の痕跡が明瞭に残り、手づくね土器ともいえる。2263と2264は鉢ないし臼のミニチュアで、2263の外面にはハケ調整、2264には指ナデ調整が施される。胎土には、2261が細粒砂から極粗粒砂を少し含み、2262・2264が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、2263が細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。なお、歯牙(イノシシの右上顎第3後臼歯で、咬耗がみられないことから若い個体と判断される。図版113)も出土している。

SR-3 (図3-29～31)

第X層上面で検出した自然流路で、調査区北端西よりから南東端に向かって緩やかにS字状のカーブを描き南流し、調査区外に延びる。検出幅2.18～3.97m、深さ0.39～0.56mで、約56.0mを検出した。基底面は比高差0.136m(傾斜角度0°8′)で北(1.352m)から南(1.216m)に向かって緩やかに傾斜し、主軸方向は

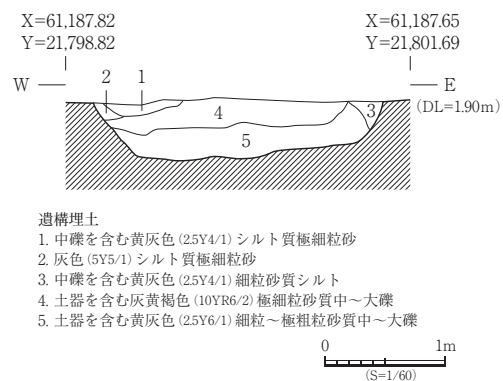


図3-29 SR-3(北壁)

2. II区 (1) 自然流路

南(N-169°-E)から南(N-173°-W)にカーブし、さらに南南東(N-152°-E)に方向を変える。断面形は概ね舟底形を呈する。また、流れの影響を受けやすい攻撃斜面に当たる凹岸肩部には杭列と横木が確認されたことから護岸工事を行っていたとみられ、管理された河川であったものと考えられる。埋土は基本的に細粒砂から中粒中礫を主体としたもので、大きく上下2層に分層され、二度の洪水で埋没しており、存続期間は比較的短かったものとみられ、出土遺物もSR-2と比べ2,525点と少ない。その多くはローリングを受けた破片で、復元図示できたのは出土遺物の約1.2%に当たる弥生土器30点(2265~2294)であった。

出土遺物

弥生土器(図3-32・33 2265~2294)

2265~2271は壺である。2265は頸部外面に断面三角形の突帯を貼付し、内外面にはヘラ磨きを施す。2266は口縁部内面にB-1タイプの微隆起突帯を2段に貼付し、間に円孔を穿ち、外面には2条のヘラ描沈線を施す。2267~2271は口縁部を肥厚したもので、指押えの痕が明瞭に残るものもある。2267は無文で、指押えの痕が口縁端部と外面に残る。2268は口縁端部上端にヘラ状工具による刻目、内側に2条のヘラ描沈線を施し、その下に円孔を穿つ。2269は無文で、ハケ調整を行った上で、粘土帯を貼付する。口縁部外面には、貼付の際の指押えの痕が残る。2270も無文で、口縁部外面には指ナデ調整の痕が残る。2271も無文で、口縁部に貼付した粘土帯の一部が欠損する。胎土は細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むものと多く含むものであった。

2272も壺で底部から胴部が残存するが、中胴部外面を中心に被熱で剥離と摩耗がみられ、調整が残るのは下胴部から底部外面にかけてで、外面下端と底部外面にはヘラ削りが施される。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含んでいた。

2273~2276は壺の底部とみられるもので、底径は6.2~7.8cmを測る。いずれも、ナデ調整を基本とし、外面には指押えの痕が残り、2274にはハケ調整を施す。内面もナデ調整を基本とし、2273と

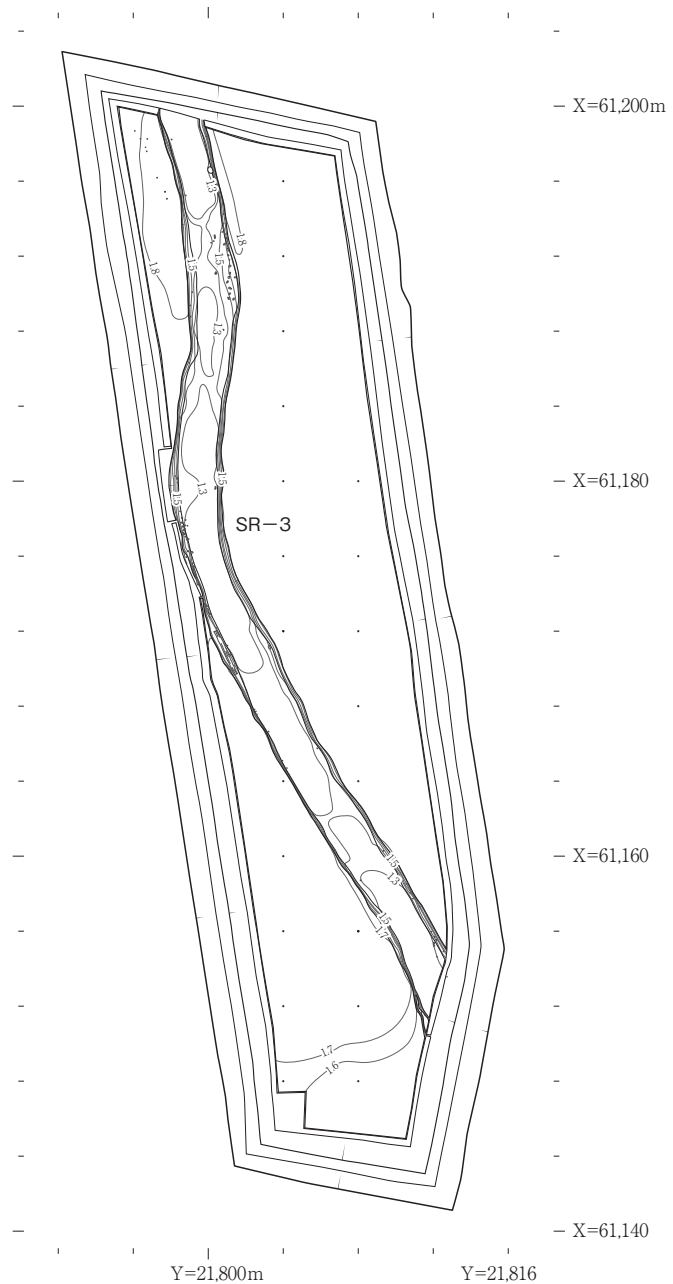


図3-30 II区上面検出遺構平面図(S=1/400)

2276には指ナデ調整が残る。胎土には、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むものと多く含むものがみられた。

2277～2283は甕で、2277は頸部外面にA-1タイプの微隆起突帯を2条に作り出しており、爪痕が明瞭に残る。2278は口縁部外面にB-1タイプの小さな微隆起突帯を2条貼付し、その下に2本単位のクシ描直線文をタテ方向に施す。2279は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目、口縁部外面にヘラ描きによる5条の直線文と3条の重弧文を交互に施していたとみられる。2280は口縁端部下端にB-5タイプの微隆起突帯を貼付した上で、口縁端部下端からハケ状工具による刻目を施し、頸部外面にB-1タイプの微隆起突帯を貼付する。2281～2283は無文で、口縁部が所謂貼付口縁となり、外面には指押えの痕が残る。胎土は細粒砂から粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むものと多く含むものであった。

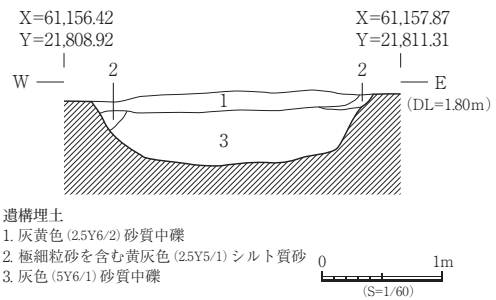


図3-31 SR-3(南壁)

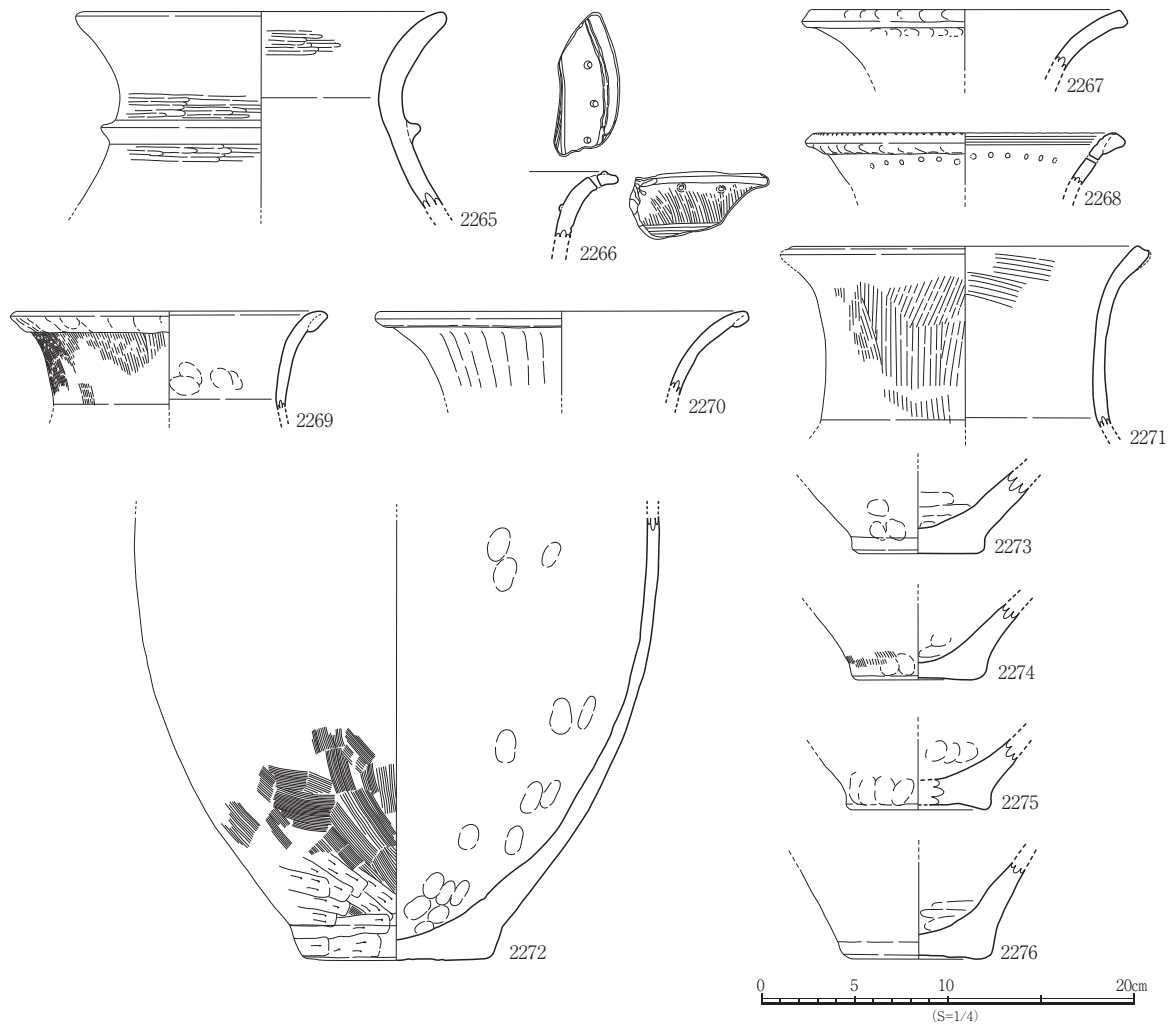


図3-32 SR-3出土遺物実測図1

2. II区 (1) 自然流路

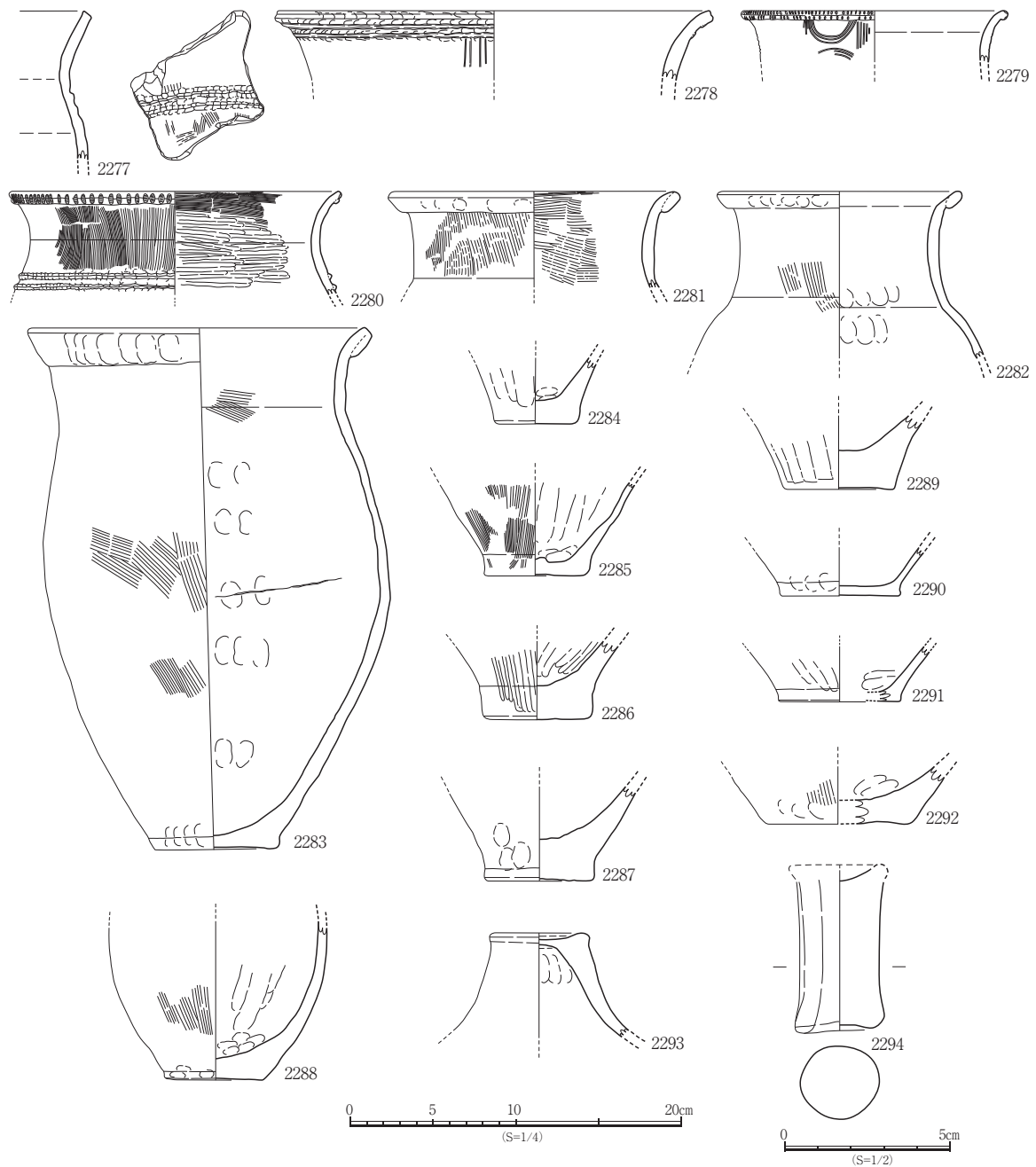


図3-33 SR-3出土遺物実測図2

2284～2292は甕の底部とみられるもので、底径は5.0～8.6cmを測る。調整は、外面がナデ調整とハケ調整を基本とし、指ナデ調整(2284・2291)、ヘラ磨き(2286)、ヘラナデ調整(2289)、内面はナデ調整と指ナデ調整を施す。胎土は細粒砂から粗粒砂ないし極細粒中礫を比較的多く含むものと多く含むものであった。

2293は蓋で、無文であり、天井部内面には指押えの痕が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

2294はミニチュア土器で、円柱状をなし、両端が凹み、側面には指ナデ調整が施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

3. III区

(1) 自然流路

SR-4 (図2-4, 図3-34)

第Ⅱ層上面で検出した自然流路で、調査区北西隅から緩やかに蛇行して南東隅に向かって南流し、調査区外に延びる。検出幅 3.13 ~ 4.35 m、深さ 0.85 ~ 1.09 m で、約 54.0m を検出した。基底面は比高差 0.472m (傾斜角度約 0°30′) で北 (0.729m) から南 (0.472m) に向かって緩やかに傾斜し、主軸方向は南南東 (N-153°-E) から南 (N-174°-W) に緩やかにカーブし、さらに南南東 (N-157°-E) に方向を変える。断面形は概ね舟底形を呈するが、流れの影響を受けやすい攻撃斜面に当たる凹岸肩部は緩斜面となり、凸岸肩部は傾斜がきつくなっていた。また、凹岸肩部を中心に杭列と横木が検出されたことから護岸工事を行っていたとみられ、単なる自然流路ではなく、管理された河川であったものと判断される。埋土は基本的に細粒砂から極粗粒中礫を主体としたもので、9層に分層されるものの 4 ~ 5 度の洪水で埋没したものとみられる。出土遺物は 7,591 点と SR-2 に次ぐ出土量であったが、大半はローリングを受けた破片で、復元図示できたのは出土遺物の約 0.8% に当たる弥生土器 60 点 (3002 ~ 3061)、石製品 1 点 (3062) であった。

出土遺物

弥生土器 (図3-35 ~ 39 3002 ~ 3061)

3002 ~ 3014 は壺の口頸部が残存する。3002 ~ 3006 は、口縁部が胴部から内湾気味に上がり、そのまま外反ないし外傾するものである。3002 は、煤が口頸部外面に付着するもので、頸部外面に爪痕が明瞭に残る A-3 タイプの微隆起突帯を作り出す。3003 は口縁端部に鋭利なヘラ状工具で刻目を施し、肩部外面に A-3 タイプの微隆起突帯を 2 条作り出す。この微隆起突帯の幅は 3002 に比べ広い。3004 は口縁端部上端にヘラ状工具による刻目、頸部外面にヘラ描沈線を 3 条施す。3005 は無文で、口縁部外面に粘土帯を貼付しており、端部が内傾する凹面をなす。3006 は口縁部外面には部分的に煤が付着するもので、頸部外面に粘土紐を指先で押圧した後、その間にハケ状工具で刻みを施す B-6 タイプの微隆起突帯を 3 条貼付し、その下にヘラ描沈線を 5 条施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を少し含むもの (3003 ~ 3005)、比較的多く含むもの (3002・3006) があつた。

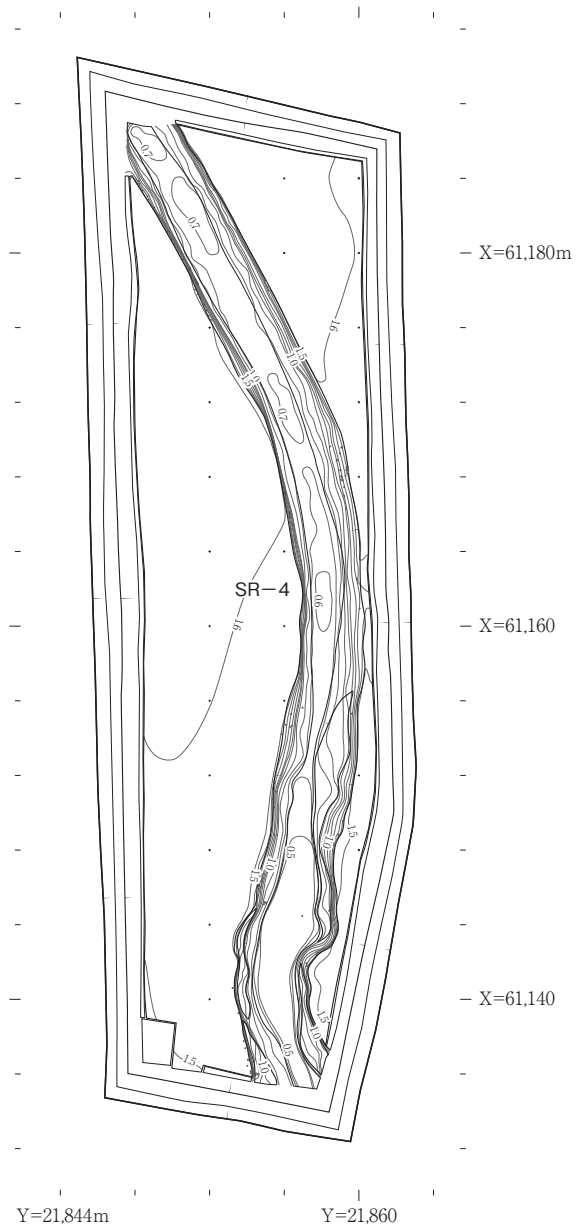


図3-34 III区遺構平面図(S=1/400)

3. Ⅲ区 (1) 自然流路

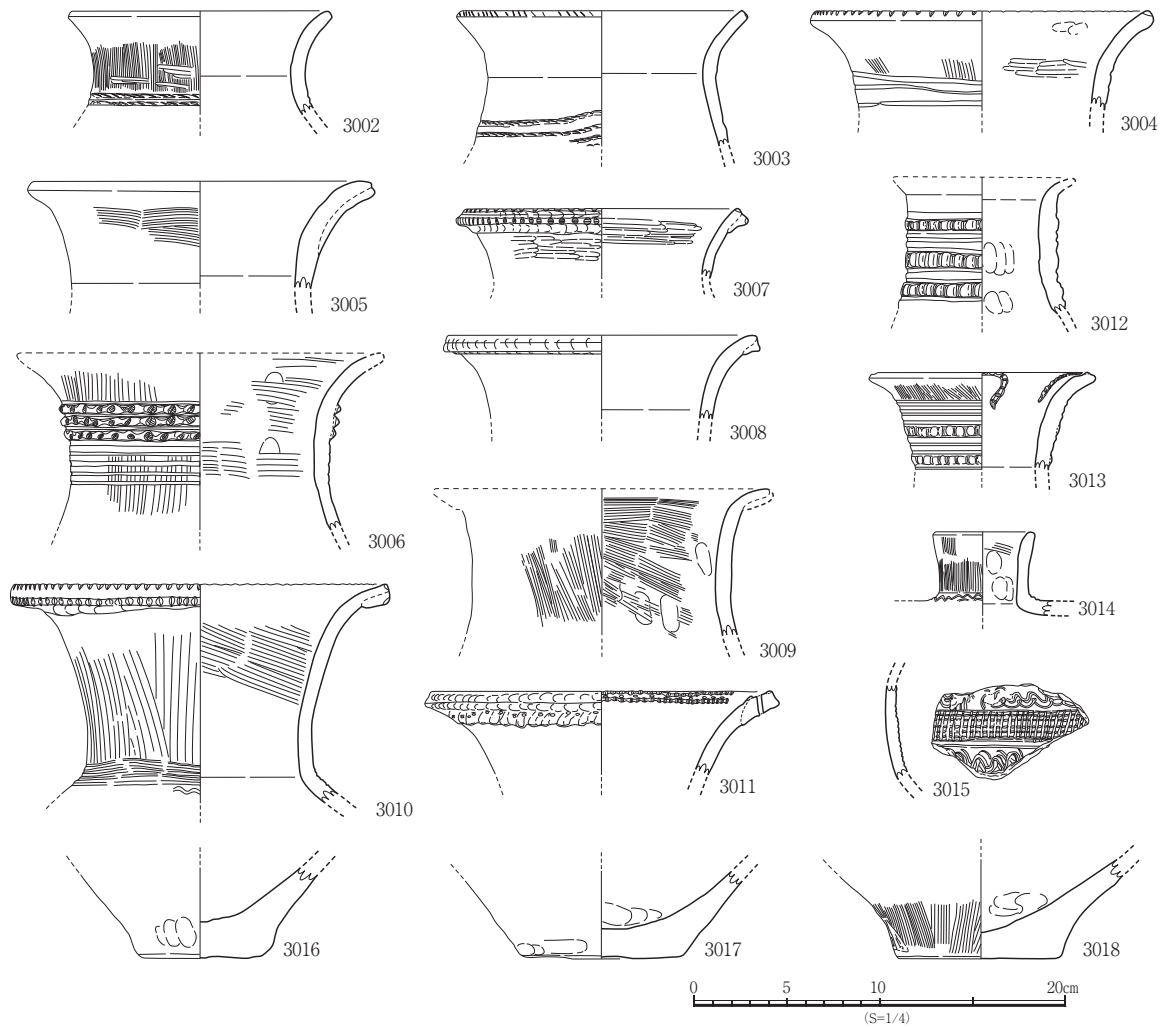


図3-35 SR-4出土遺物実測図1

3007～3010は口縁上部外面に粘土帯を貼付する貼付口縁の壺である。3007は口縁端部両端にハケ状工具による刻目を施す。貼付された口縁には貼付の際の指頭圧痕が明瞭に残る。3008は3007と同形態であるが、無文である。3009は貼付された粘土帯が剥落したもので、3008同様無文である。3010は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目、頸部基部外面に5本単位のクシ描直線文と波状文(2本分が残存)を施す。胎土は、3007が細粒砂から極粗粒砂を多く、3008が細粒砂から粗粒砂を少し、3009が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、3010が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含むものであった。

3011は成形時に粘土紐を外側に出し、一見貼付口縁風にしたもので、口縁上部内面にB-3タイプの微隆起突帯を2条貼付し、その間に円孔を穿つ。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

3012と3013は細首壺で、口縁部がほぼ直立する頸部から短く外反する。3012は頸部外面にヘラ描沈線(上から1条・3条・2条・2条)とA-1タイプの微隆起突帯(全3条)を交互に施す。3013は口縁部内面にB-1タイプの微隆起突帯を波状文風に貼付し、頸部外面にはヘラ描沈線(上から4条・3条・1条以上)とB-1タイプの微隆起突帯を交互に貼付する。胎土にはいずれも細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

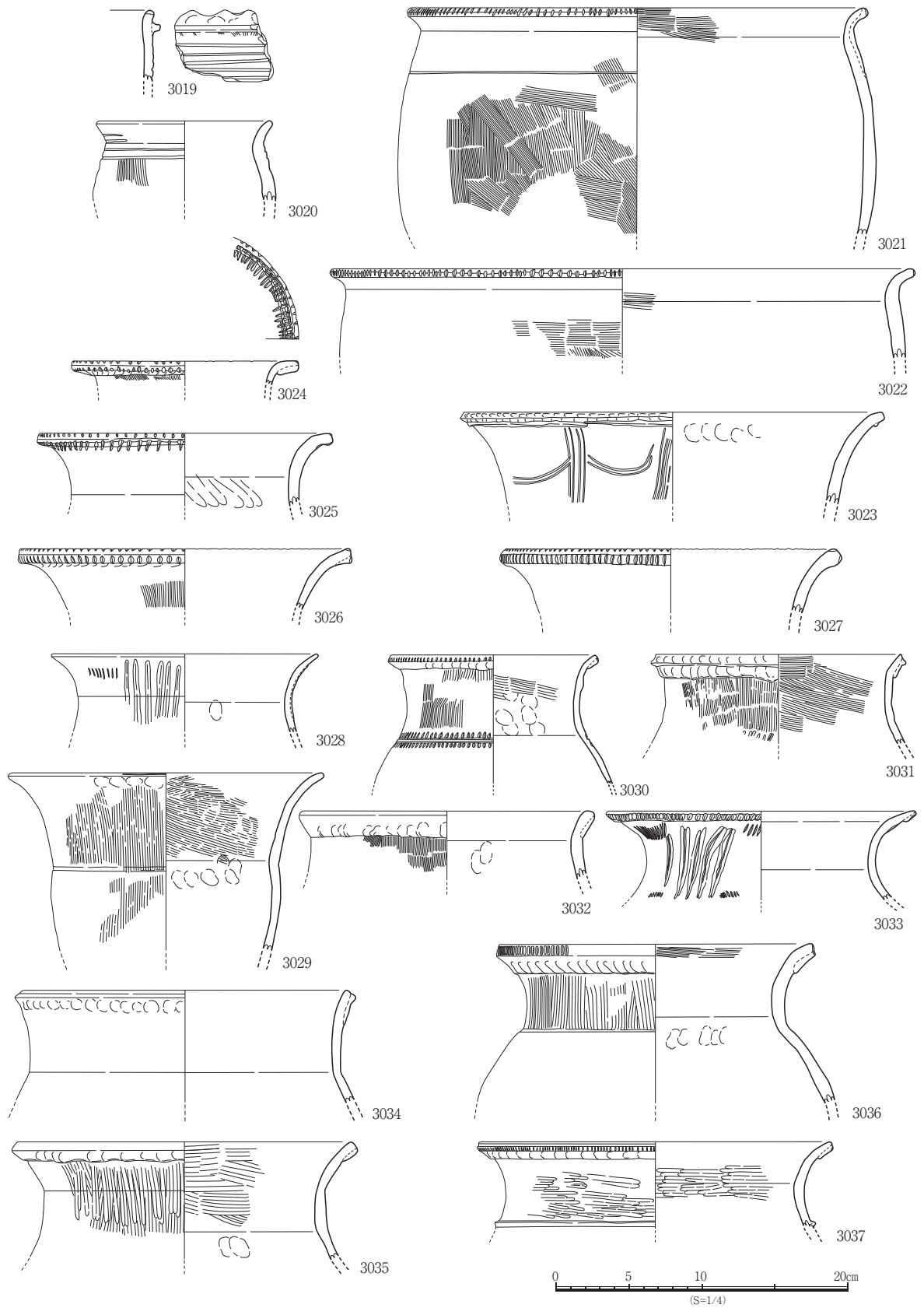


図3-36 SR-4出土遺物実測図2

3. Ⅲ区 (1) 自然流路

3014は直口壺で、口頸部は直立し、口縁端部を丸く仕上げ、肩部外面にクシ描波状文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

3015は壺の頸部の破片で、外面にクシ描きによる波状文風の文様に挟まれた8条のヘラ描沈線の上からヘラ状工具による刻目を施す。波状文は明確ではなく、施文に稚拙感が窺え、ヘラ描沈線による文様は格子目文風であるが、簾状文を施文しようとしたのではなかろうか。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

3016～3018は壺の底部とみられるもので、底径は6.8～8.9cmを測る。調整は、外面がナデ調整ないしハケ調整で、3018にはヘラ削りがみられ、内面がナデ調整ないし指ナデ調整である。また、3016と3017の底部は上げ底風となる。胎土には、3016と3017が細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含み、3018が細粒砂から細粒中礫を比較的多く含んでいた。

3019～3037は甕の口縁部が遺存するものである。3019は唯一直立する口縁部を有するもので、口縁部は指で波状口縁を作り、外面には断面矩形の突帯を1条貼付し、下にヘラ描沈線が5条残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

3020～3022は、大きさが異なるものの、口縁部が膨らみのある胴部から短く外傾ないし外反するもので、3020は肩部外面にヘラ描沈線を4条施す。3021と3022は大型の甕で、いずれも口縁端部にヘラ状工具による刻目、3021の肩部外面に1条のヘラ描沈線が残り、外面には煤が付着する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含んでいた。

3023～3037は、口頸部が膨らみのある胴部から緩やかに外反するものである。3023は口縁部外面にB-1タイプの微隆起突帯を貼付し、その下に2本単位のクシ描きで重弧文とタテ方向の直線文を交互に施す。3024～3027は口縁端部両端に刻目を施すもので、3024はヘラ状工具で刻目を施し、口

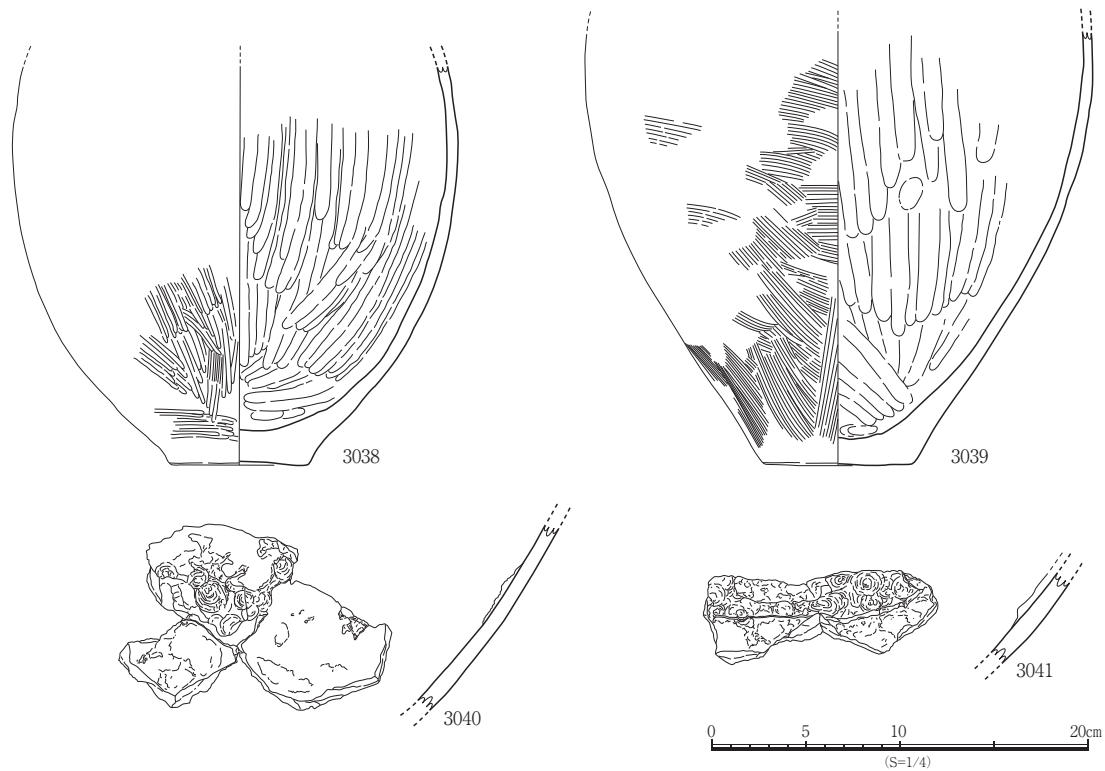


図3-37 SR-4出土遺物実測図3

縁部内面に4条のヘラ描沈線の上からヘラ状工具による刻目を施す。3025・3027はヘラ状工具、3026は棒状工具で刻目を施す。3028・3029は口縁端部を丸く仕上げたもので、3028の口縁部外面にはB-1タイプの微隆起突帯とヘラ描きによる沈線を組み合わせた文様を施す。3029は頸部基部外面にハケ状工具により小さな段部を作り出す。口縁部外面には指頭圧痕が残る。3030～3037は口縁部外面に粘土帯を貼付した所謂貼付口縁となるものである。3030は口縁端部にヘラ状工具による刻目、頸部基部外面下端にヘラ描沈線2条を挟んでヘラ状工具による刺突文を施す。3031は頸部基部外面にタテ方向のヘラ描沈線による文様が、口縁部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。3032は無文であるが、口縁部内面は赤色塗彩される。3033は口縁端部下端から棒状工具による刻目、外面に爪による刻目・列点文とタテ方向のA-1タイプの微隆起突帯を交互に施す。3034は無文で、頸部と胴部の境は稜をなす。3035も無文で、外面にはハケ調整の後にタテ方向のヘラ磨きを施し、口縁部外面には指頭圧痕が残る。3036は口縁端部に棒状工具による刻目を部分的に施し、口縁部外面には指頭圧痕が明瞭に残り、頸部と胴部の境は小さな段となる。また、頸部外面には煤が付着する。3037は器壁が薄いもので、口縁端部下端にヘラ状工具に細かな刻目を施し、頸部外面下端に小さな断面三角形の突帯を貼付する。胎土は、ほとんどの土器が細粒砂から粗粒砂、極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであったが、若干含むもの(3024)と少し含むもの(3025・3032・3034・3035)もみられた。

3038・3039は甕の胴部から底部が残存するもので、3038は外面にハケ調整の後にヘラ磨き、内面に指ナデ調整を施し、外面は被熱で変色し、多くで器壁が剝離する。3039は外面にハケ調整、外底面にヘラ削りとナデ調整、内面に指ナデ調整を施し、内面一面に焦げ目が付着する。胎土には、3038が

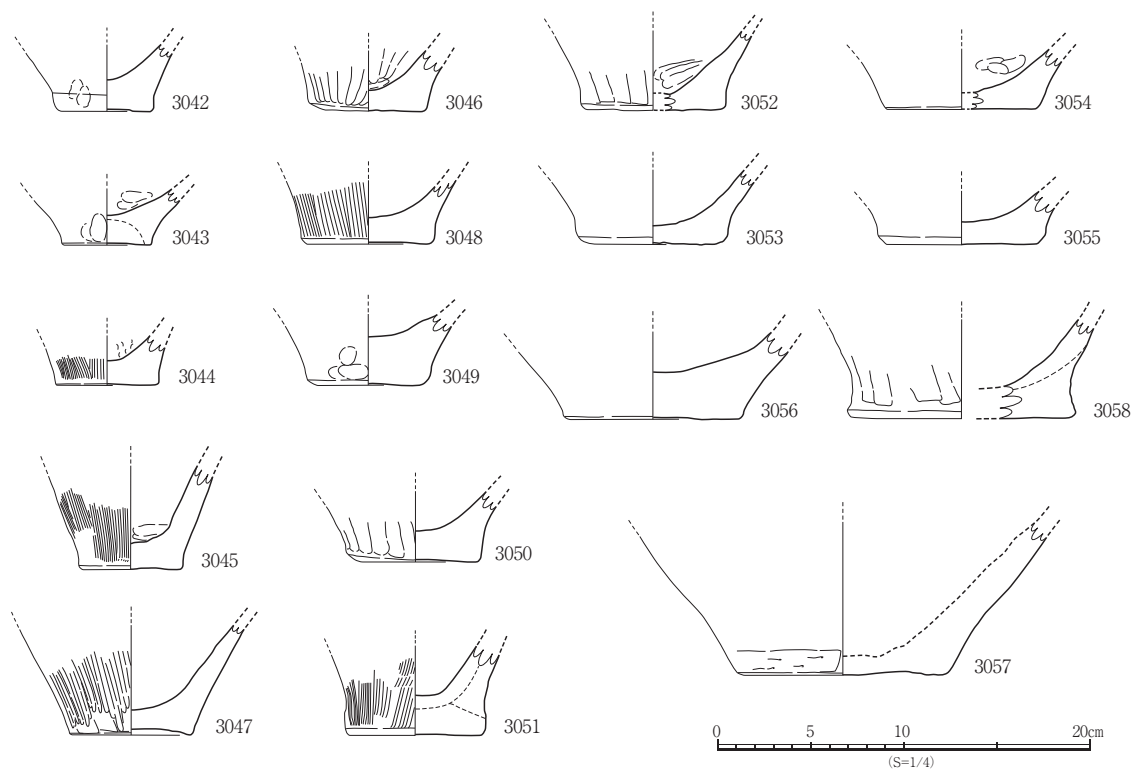


図3-38 SR-4出土遺物実測図4

3. Ⅲ区 (1) 自然流路

細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、3039が少し含んでいた。

3040と3041は甕の胴部の破片で、内面に焦げ目が付着しており、放射性炭素分析を行った試料である。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

3042～3058は甕の底部とみられるもので、底径は4.9～12.2cmを測る。いずれも底部はしっかりした平底で、上げ底風をなすものもみられる。調整は、内面がいずれもナデ調整な

いし指ナデ調整を施し、外面がナデ調整とハケ調整を施すものが多く、指ナデ調整(3046・3050)、ヘラ磨き(3047)、ヘラナデ調整(3047・3052・3057・3058)、ヘラ削り(3057)を施すものもみられる。また、内面に焦げ目が付着するものや外面が被熱で変色するものが散見される。胎土は、ほとんどの土器が細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであったが、少し含むもの(3043・3044・3051・3053)もみられた。

3059～3061はミニチュア土器で、3059は内面に焦げ目が付着し、甕のミニチュアとみられる。3060は鉢か臼、3061は鉢のミニチュアではないかとみられる。3060は外面にハケ調整、3061は体部外面下端にヘラナデ調整を施す。胎土には、3059が細粒砂から極粗粒砂を少し含み、3060・3061が比較的多く含んでいた。

石製品(図3-39 3062)

直線刃石庖丁で、脊がやや湾曲する。刃部は片刃で擦痕がみられ、紐孔は1個が残存する。石材は粘板岩である。

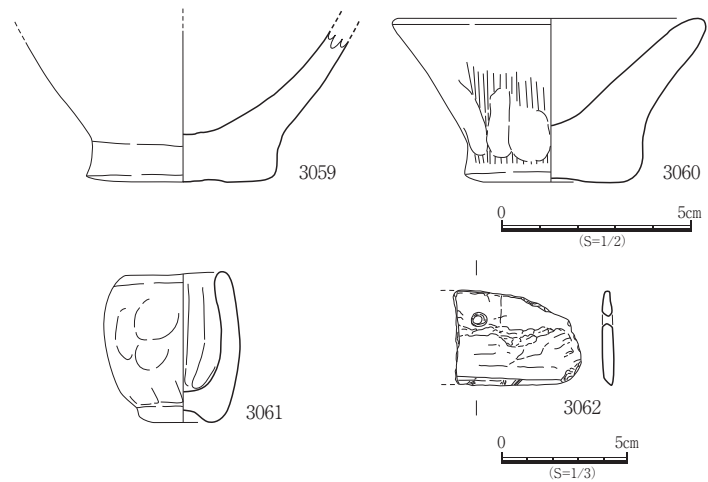


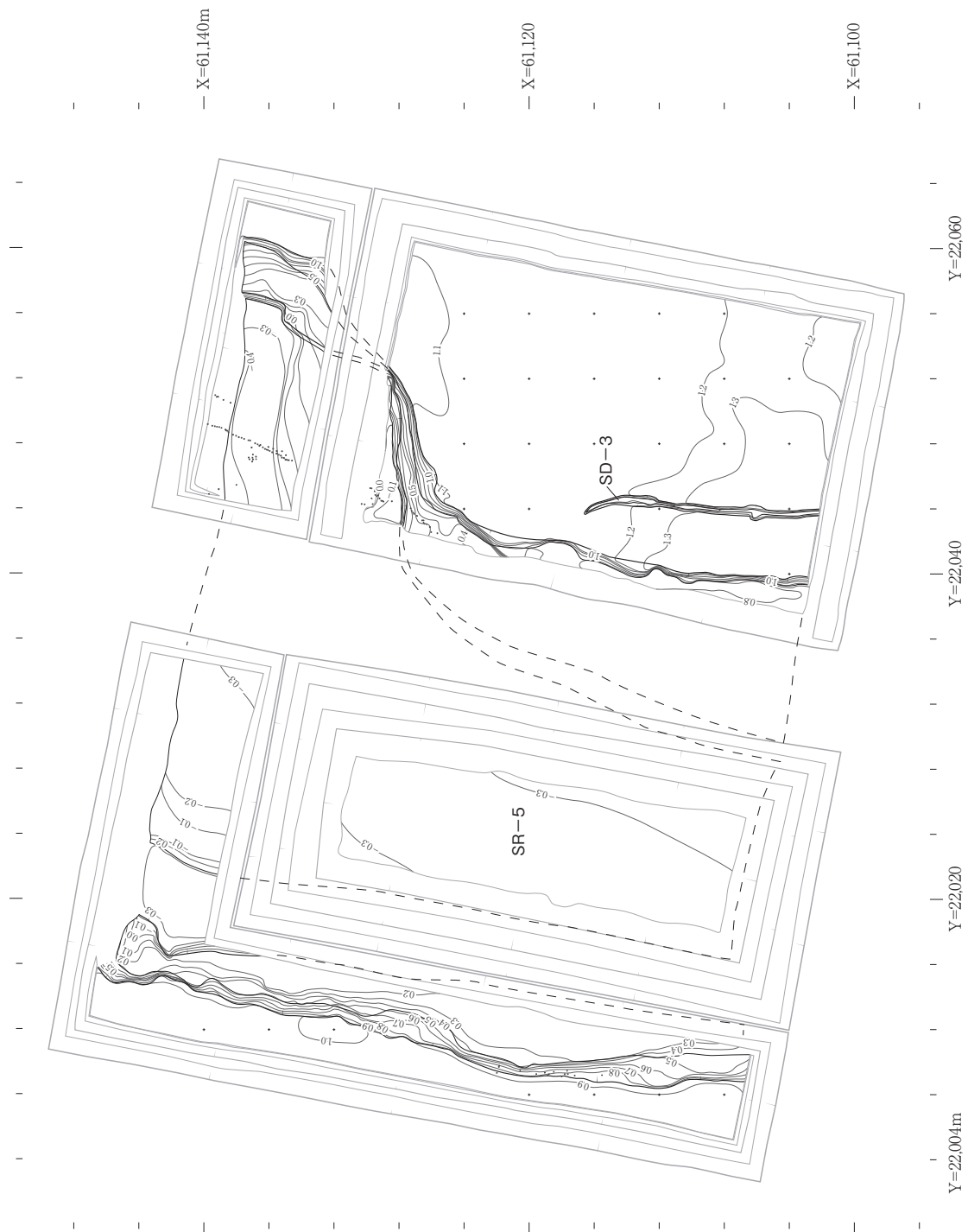
図3-39 SR-4出土遺物実測図5

4. IV区

(1) 自然流路

SR-5

第Ⅺ層上面で検出した自然流路で、調査区北端から南端に向かってほぼ真直ぐ南流し、調査区外に延びる。検出幅31.01～45.07m、深さ1.57～1.67mで、約41.0mを検出した。基底面は比高差0.04mとほぼ平坦であるが概ね北(-0.323m)から南(-0.329m)に向かって僅かに傾斜し、主軸方向は南南西



4. IV区 (1) 自然流路

(N-167°-W)を向く。他の自然流路とは異なり、規模が大きく安全確保のため完掘はできなかったものの、断面形は基底面から緩やかに湾曲して立ち上がっており、概ね舟底形を呈する。埋土は基本的に細粒砂から極粗粒中礫を主体としたもので、10層以上に分層される。また、後述するSR-6も同じ第XI層上面で検出されており、本遺構が埋没後すぐにできた自然流路であるとみられる。出土遺物は6,080点と今回報告する自然流路の中では3番目の出土量であったが、復元図示できた弥生土器は267点(4018~4284)、石製品2点(4285・4286)、ガラス製品1点(4287)、木製品6点(4411・4412・4421・4422・4426・4438)と最も多く、出土遺物の約4.5%であった。なお、図示できた木製品は工具(掛矢:4411)、農具(鍬:4412、杵:4421・4422、横槌:4426)、祭祀具(威儀具:4438)であるが、挿図の関係上、木製品が最も多く出土したSR-6の項で、一緒に掲載し、報告する。

出土遺物

弥生土器(図3-42~61 4018~4286)

4018~4097は壺の口縁部ないし頸部である。4018は小型の壺で、頸部が内湾して立ち上がる胴部から内傾して上がり、口縁部が短く外反するもので、無文である。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

4019~4023は、口頸部が内湾する胴部から外反気味に上がり、口縁部が開くもので、4019は無文である。4020は頸部外面にヘラ描沈線が2条残る。4021は頸部外面に7条のヘラ描沈線が施される。4022は頸部外面に5条のヘラ描沈線が残る。4023は無文で、口縁端部は内傾する浅い凹面をなす。胎土には、4019が細粒砂から極粗粒砂を少し、4020が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く、4021が

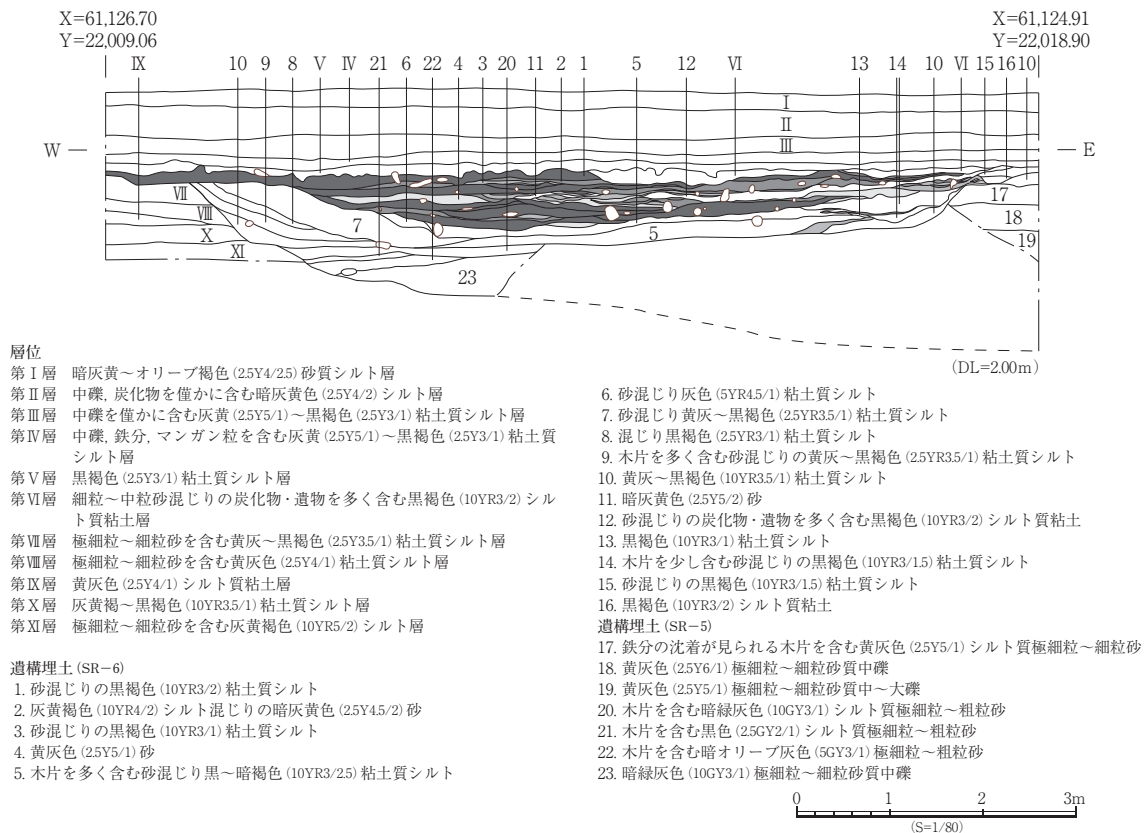


図3-41 IV区中央バンクセクションとSR-5・6

細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、4022が細粒砂から極粗粒砂を多く、4023は細粒砂から粗粒砂を少し含んでいた。

4024～4035は口頸部が胴部から外反するものである。4024は口縁部内面に2カ所B-1タイプの微隆起突帯を貼付し、上方の微隆起突帯の真下に円孔を穿ち、頸部外面には2条のヘラ描沈線を挟んでB-1タイプの微隆起突帯2条が残る。4025の頸部外面には棒状工具による刺突文を挟むヘラ描沈線が2カ所残る。

4026の頸部外面には1条の刻目突帯が残る。4027と4028は無文で、口縁端部はいずれも浅い凹面をなす。4029は口頸部が約1/2残るもので、外面にはハケ調整の後にタテ方向にヘラ磨きが施される。

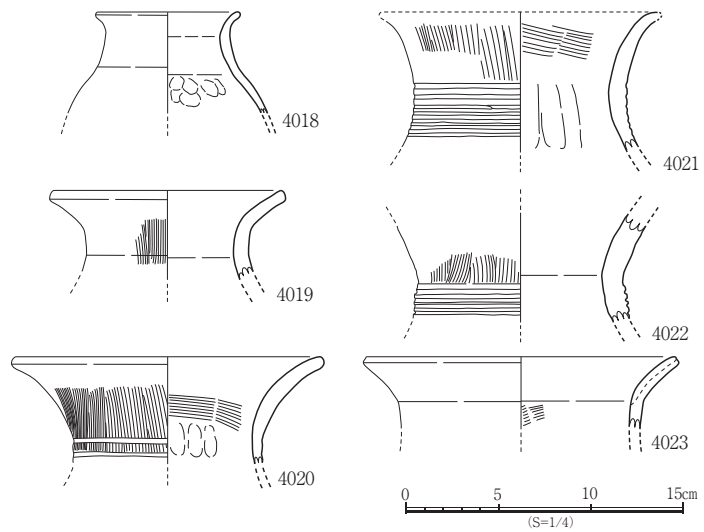


図3-42 SR-5出土遺物実測図1

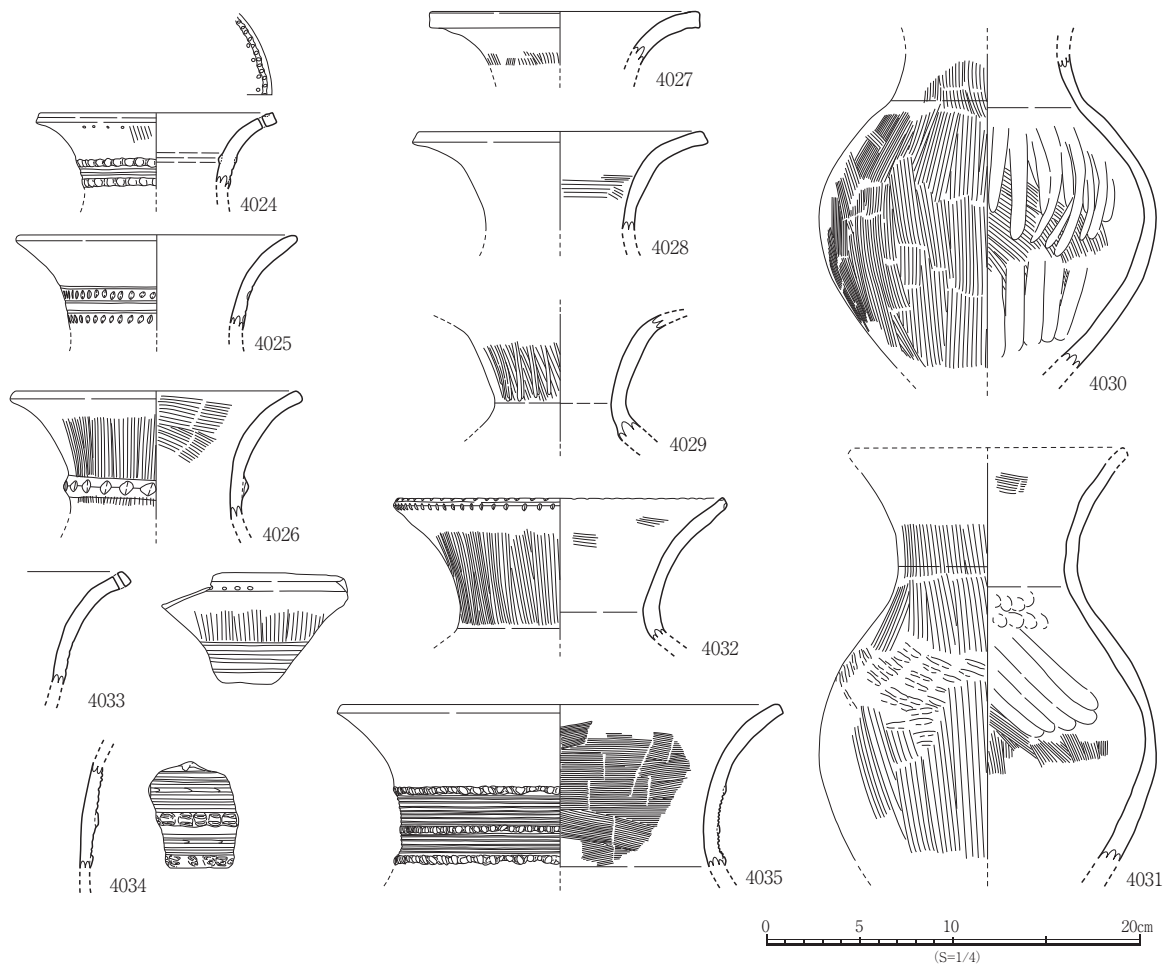


図3-43 SR-5出土遺物実測図2

4030 は胴部中位やや上に最大径を有し、内面はハケ調整の後に指ナデ調整、外面は全面にハケ調整を施し、外面には煤が付着する。4031 は最大径が胴部中位にあり、胴部内面は、上半に指ナデ調整とナデ調整、中位にハケ調整、下位にナデ調整を施し、下半には焦げ目が付着する。外面はハケ調整で、中胴部にタタキ目が残る。煤が、頸部と胴部の境部分を除く外面一面に付着する。4032 は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目を施す。4033 は口縁端部直下に内から外に向かって穿った円孔4個が残存し、頸部外面に4条のヘラ描沈線を施す。4034 は頸部の破片で、外面には上からヘラ描沈線7条、B-3タイプの微隆起突帯(粘土紐を貼付した上からヘラ状工具による刺突文を2段に施したもの)、ヘラ描沈線4条、同じB-3タイプの微隆起突帯が残る。4035 は頸部外面にB-1タイプの微隆起突帯3条、その間に7本単位のクシ描直線文が残る。胎土には、細粒砂から極細粒中礫を若干含むもの(4033)、細粒砂から粗粒砂を少し含むもの(4028・4034)、細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(4029・4030)、細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むもの(4024・4027・4031・4032・4035)、細粒砂から極細粒中礫比較的多く含むもの(4025)、細粒砂から極粗粒砂を多く含むもの(4026)があった。

4036～4038は、口頸部が直立ないし外傾してほぼ真上に立ち上がるものである。4036は細首壺で、外面には不規則にヘラ描沈線が10条残る。4037は口頸部がやや外傾し、口縁部外面上端に棒状工具で2回押圧を加えた円形浮文を貼付する。4038は直立する頸部から外傾する口縁部の端部に円孔を穿ち、頸部外面にはB-1タイプの微隆起突帯を貼付し、その下に4条のヘラ描沈線を施す。胎土には、4036が細粒砂から極粗粒砂を多く含み、4037が細粒砂から粗粒砂を多く含み、4038が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4039～4054は頸部がほぼ直立し、口縁部が外傾ないし外反するものである。4039～4041は無文で、4039の口縁部外面上端に指押えの痕が残る。4040は口縁端部がほぼ真上を向く浅い凹面をなし、胴部内面にはヘラ削りの後にナデ調整を施し、外面はタタキの後にヘラナデ調整を加えるが、中胴部にはタタキ目が残る。4041は口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。4042は口縁部が欠損するもので、胴部内面には指ナデ調整、外面にはタタキの後にヘラ磨きを施す。4043は口縁端部に2条のヘラ描沈線による擬凹線文を施す。4044は口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。4045は口縁端部を拡張したもので、端部は内傾する浅い凹面をなす。4046は口縁部がほぼ直立する頸部からラッパ状に大きく開く。4047はやや外傾する頸部から口縁部が外傾するもので、口縁端部は内傾する浅い凹面をなし、頸部外面はタテ方向のハケ調整の後にヘラ磨きを施す。4048は口縁部に円孔を穿つ。4049と4050は長頸壺で、4049は頸部外面基部に1条の凹線が残る。4050は無文で、口縁部は大きく外反する。4051は頸部外面に10本単位のクシ描直線文に近い波状文が3帯残る。4052は外面にハケ調整を施した後に頸部基部を境として上下にハケ状工具による刺突文(綾杉文)を施す。4053は頸部外面基部にハケ状工具によるナデ調整が残る。4054は肩部外面にハケ状工具で刺突文(綾杉文)を施す。胎土は、ほとんどの土器が細粒砂から極粗粒砂を多く含むものと比較的多く含むものであったが、少し含むもの(4040・4045・4047・4052)や細粒砂から粗粒砂を多く含むもの(4051)もみられた。

4055～4078は口縁部に粘土帯を貼付する所謂貼付口縁の壺である。4055は、口縁部が内傾する頸部から屈曲して外傾するもので、粘土帯を貼付した外面には指押えの痕が残る。4056はほぼ直立する頸部に外傾する口縁部が付き、粘土帯を貼付した部分が水平に屈曲し、頸部外面にヘラ状工具による刺突文が残る。4057は、口縁部が直立する頸部から外傾し、外面には細かいハケ目と指押えの痕が残る。4058は、口頸部が外反気味に開くもので、ハケ調整を施した上で粘土帯を貼付し、外面には

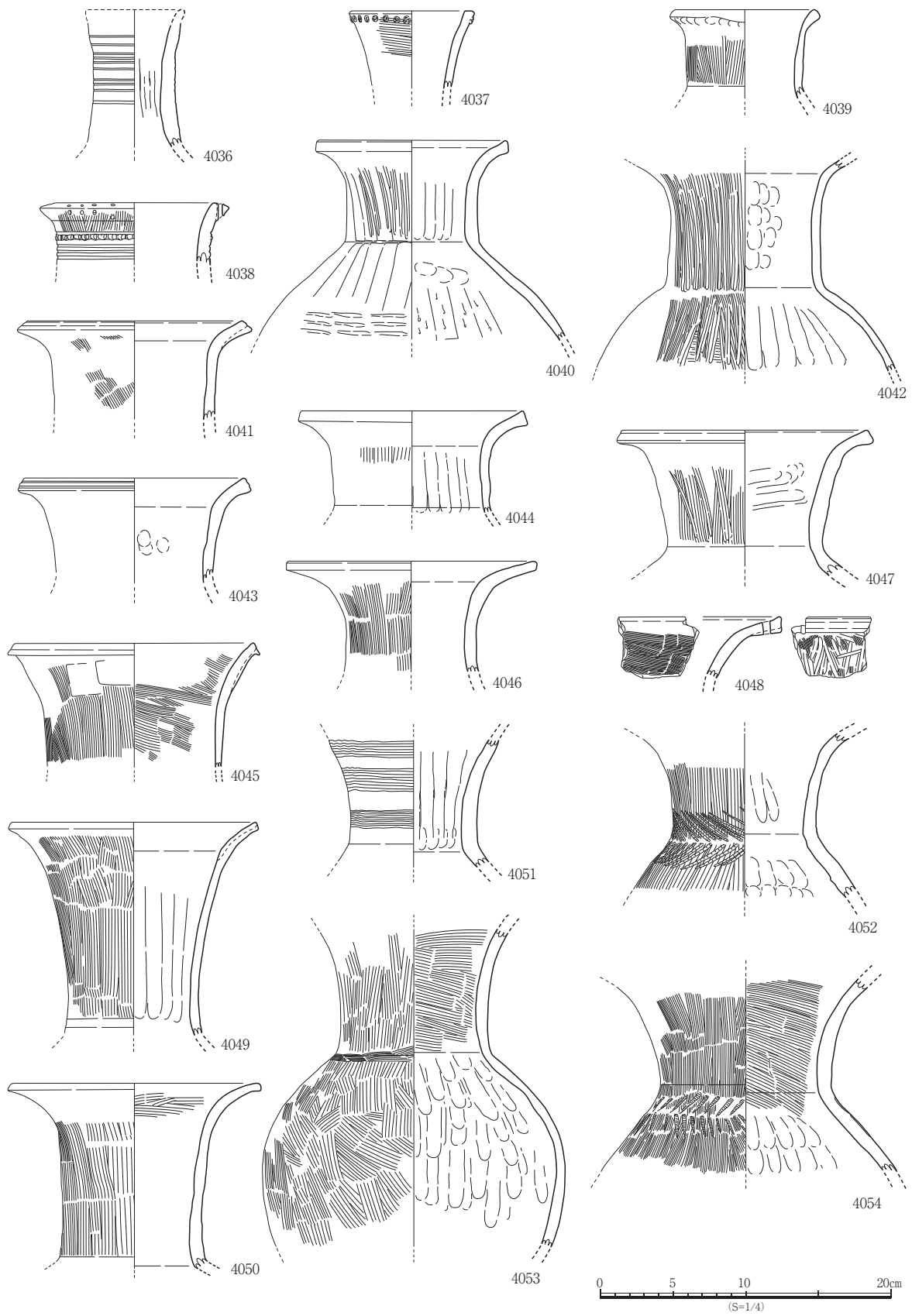


図3-44 SR-5出土遺物実測図3

4. IV区 (1) 自然流路

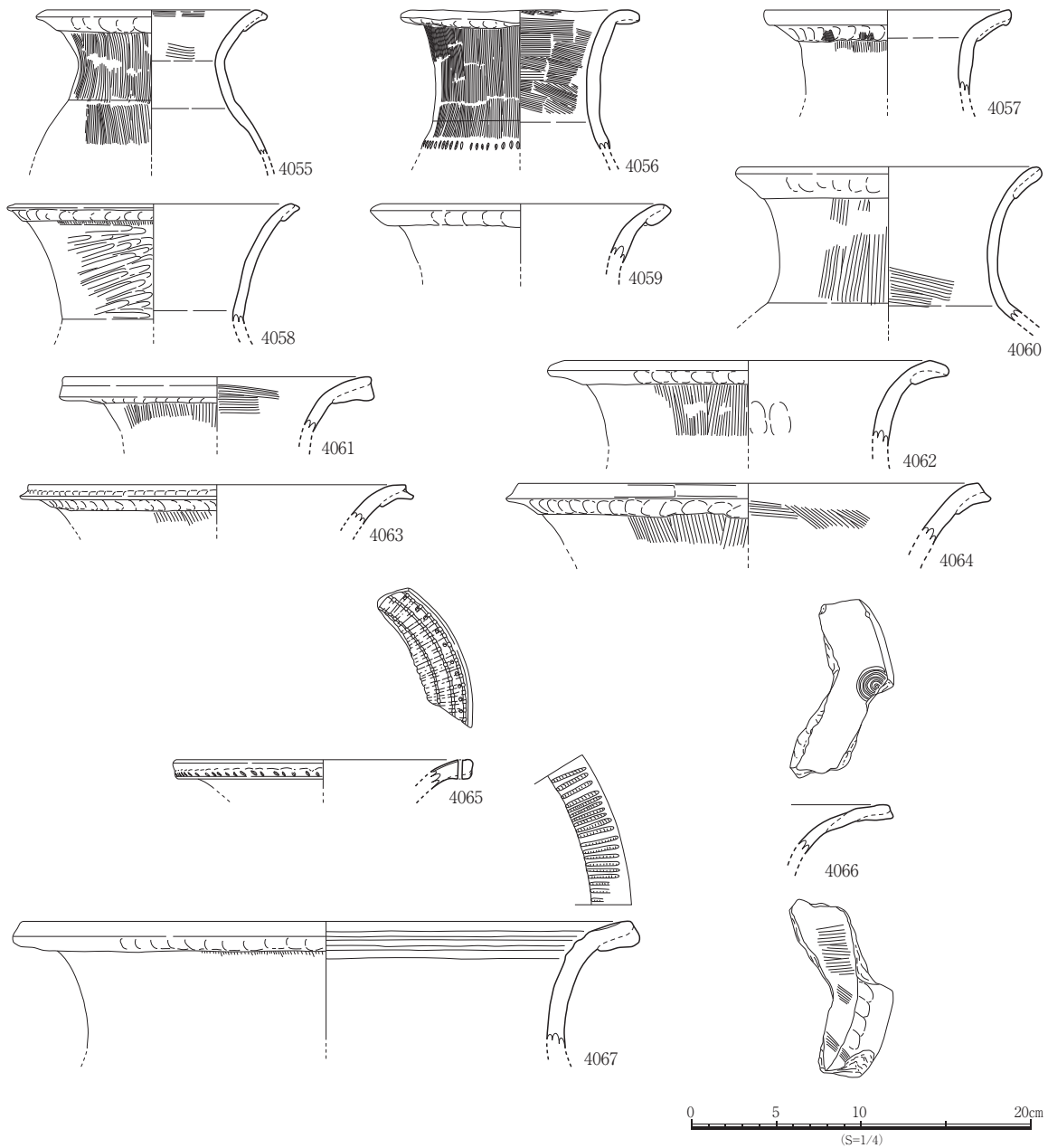


図3-45 SR-5出土遺物実測図4

指押えの痕が残る。4059は4058と同形態とみられ、貼付した粘土帯の外面には指押えの痕が残る。4060も同形態であるが、粘土帯は僅かに外に出る程度である。4061～4064は前者に比べ口縁部が開くもので、4061には断面三角形に粘土帯を貼付する。4062はハケ調整を施した上で比較的小さな粘土帯を貼付する。4063の粘土帯は外側に迫り出し、口縁端部は内傾する深い凹面をなし、爪で刺突文を施したように貼付の際の爪の痕が残る。4064は口縁端部上半をヘラナデ調整し、口縁端部が内傾する凹面となる。4065は口縁端部下半に粘土帯貼付の際の爪の痕が残り、内面にはB-4タイプの微隆起突帯を3条貼付し、上端の微隆起突帯の下に円孔を穿つ。4066は口縁部内面にヘラ描きの重弧文を施す。4067は口縁部内面にハケ状工具による刺突文、その下に棒状工具等で凹線を施すことにより微隆起突帯(A-2タイプ)3条を作り出す。胎土は、4065が細粒砂から極細粒中礫を少し含んでい

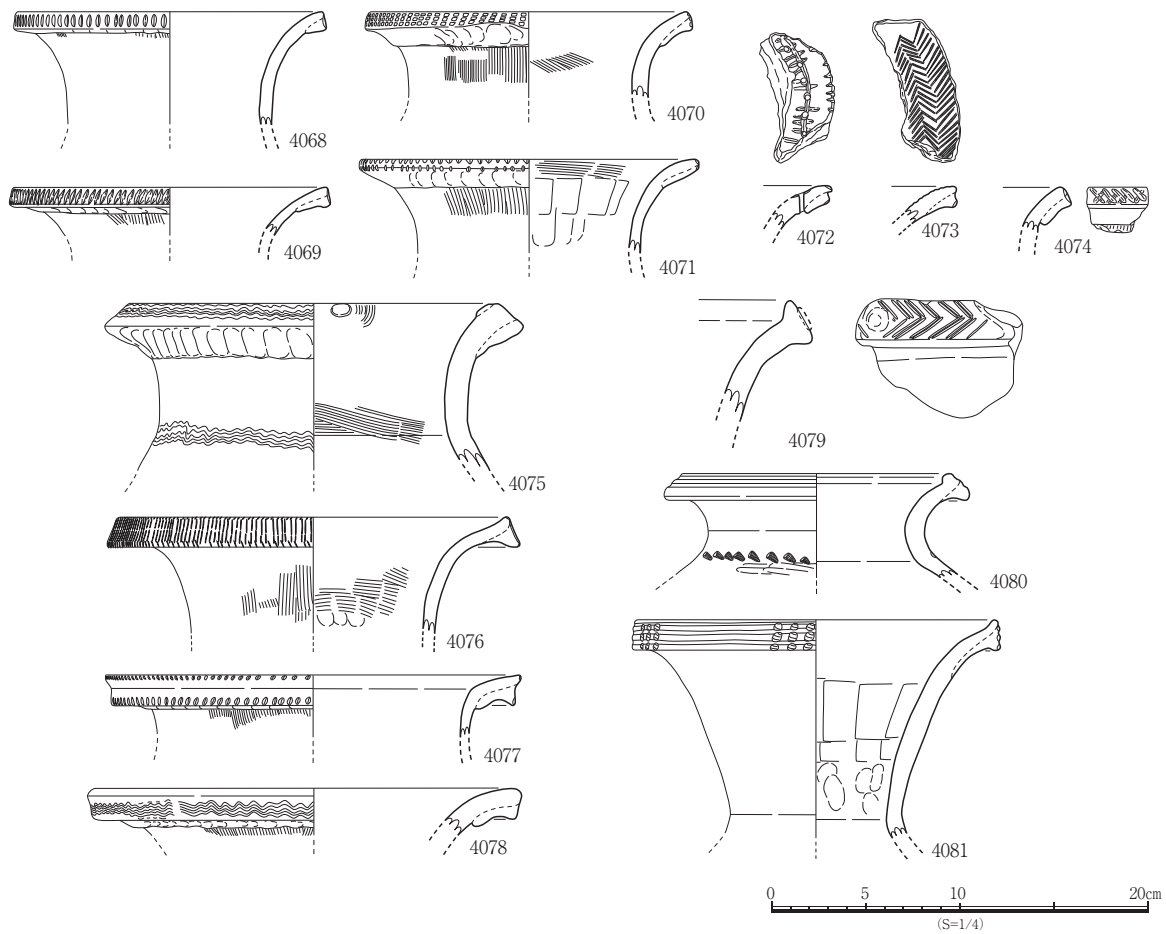


図3-46 SR-5出土遺物実測図5

た以外は、細粒砂から粗粒砂または細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4068～4078は粘土帯を貼付し拡張した口縁端部に文様を施すもので、4068と4069はヘラ状工具による刺突文、4070には格子目状の刺突文を施す。4071は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目を施す。4072は、粘土帯が一段ずれた口縁端部両端にヘラ状工具による刻目、内面にヘラ状工具による刻目と沈線を施した上で、円孔を内側から穿つ。4073は口縁端部両端にハケ状工具による刻目と内面にハケ状工具の刺突によって綾杉文を施す。4074はヘラ状工具による斜格子文を施す。4075は頸部外面と口縁端部外面に5本単位のクシ描波状文、口縁部内面に円形浮文とクシ描きの重弧文を施す。また、口縁部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。4076はハケ状工具による刻目を3段施す。4077は外面をハケ調整した後に口縁部に粘土帯を貼付して口縁端部を拡張し、端部両端にヘラ状工具で刻目を施す。4078は7本以上の単位のクシ描波状文を施す。胎土は、4070・4074が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた以外は細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4079～4081は口縁端部を上下に拡張し、施文したもので、4079には円形浮文とヘラ状工具による綾杉文を施す。4080には凹線文、頸部外面基部にハケ状工具による刺突文が残る。4081は口縁端部に凹線文とハケ状工具による3本1単位の刻目が6ヵ所に施されていたものとみられる。胎土には、

4. IV区 (1) 自然流路

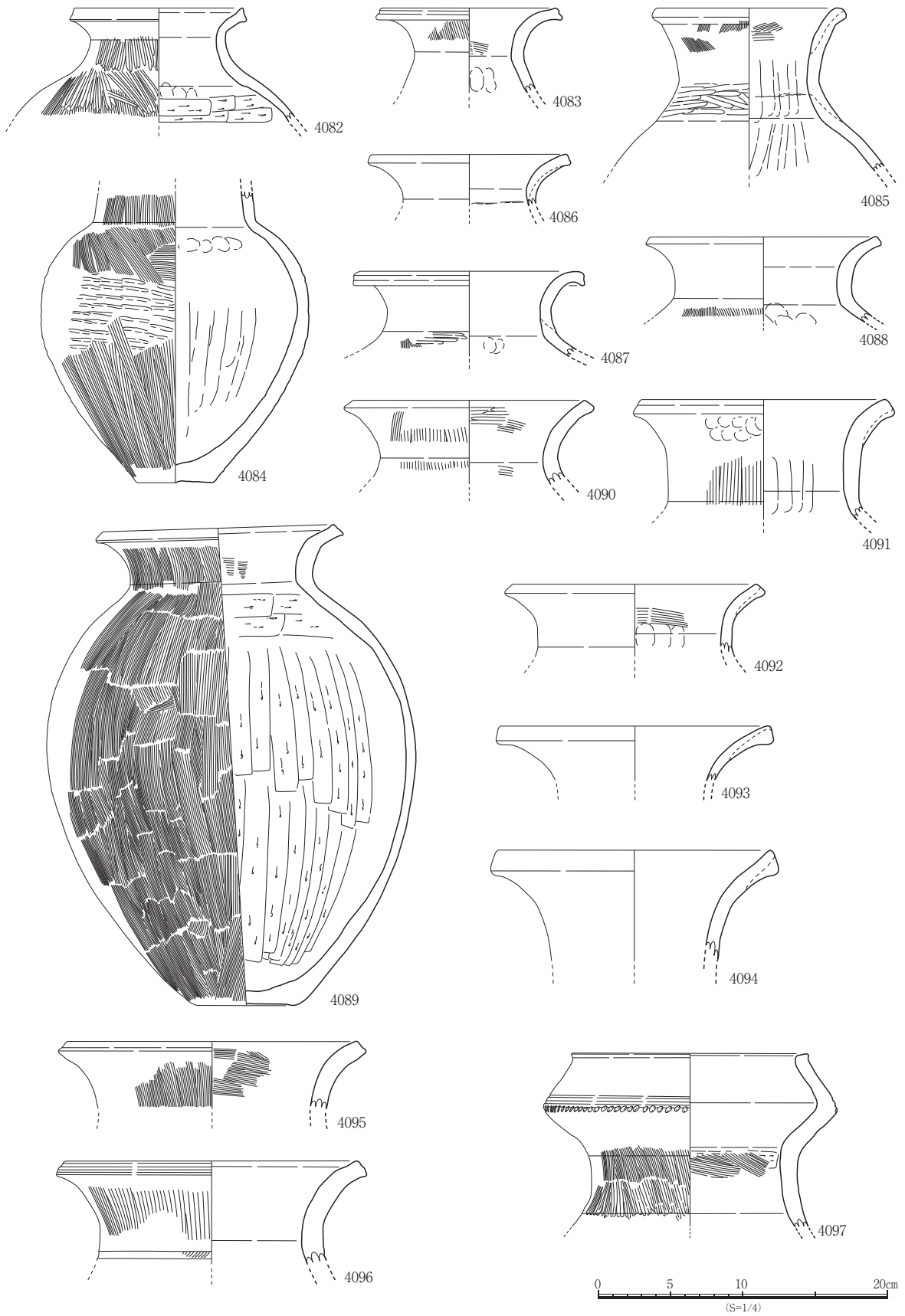


图3-47 SR-5出土遺物実測図6

4079が細粒砂から粗粒砂を多く含み、4080が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、4081が細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

4082～4096は、口縁部が短く立ち上がる頸部から外傾ないし外反するものである。4096の口縁部外面に擬凹線文が施される以外、いずれも無文である。4082は口縁端部を上下に拡張し、内傾する浅い凹面をなし、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整の後に頸部からヘラ磨きを施す。4083は口縁端部に1条の凹線を巡らす。4084は、口縁部が欠損するもので、胴部外面はタタキの後に中胴部以外にハケ調整を施す。外底面はナデ調整である。4085は口縁端部を丸く収め、頸部外面にハケ調整、頸部下半から肩部にかけてヘラ磨きを施す。4086は、口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。4087は、口縁部が大きく外反し、端部は真横を向く浅い凹面をなす。頸部は摩耗するが、胴部内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨きを施す。4088は、口縁端部が内傾する平面をなす。4089はほぼ完存し、胴部内面にヘラ削り、外面にハケ調整を施し、中胴部に被熱の痕が円形に残り、煤が付着する。また、下胴部には黒斑が残る。4090～4093は、口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。4094の口縁端部は内傾する凸面をなす。4095は、口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。4096は口縁端部に擬凹線文が施され、頸部外面下端に1条の凹線が巡り、ハケ状工具による押圧が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(4083・4086・4087・4092・4093)もみられたが、多くが細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4097は複合口縁をなすもので、屈曲部に棒状工具による2条の沈線と刺突文が残る。頸部外面はタテ方向のハケ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4098～4103は壺の胴部の破片である。4098は外面に5条のヘラ描沈線と竹管文が残る。4099は外面にB-1タイプの微隆起突帯をヘラ描沈線の上に貼付し、その間にクシ描波状文を施す。4100は外面にヘラ描沈線を施した上にヘラ状工具で刻目を加える。4101は外面に8本単位のクシ描直線文を挟んでクシ描波状文を施し、クシ描直線文の上から円形浮文を貼付する。4102と4103は無文で、胴部は丸く、4102は上胴部外面に鉄分が付着し、4103は胴部外面にタタキを施した後にハケ調整を加

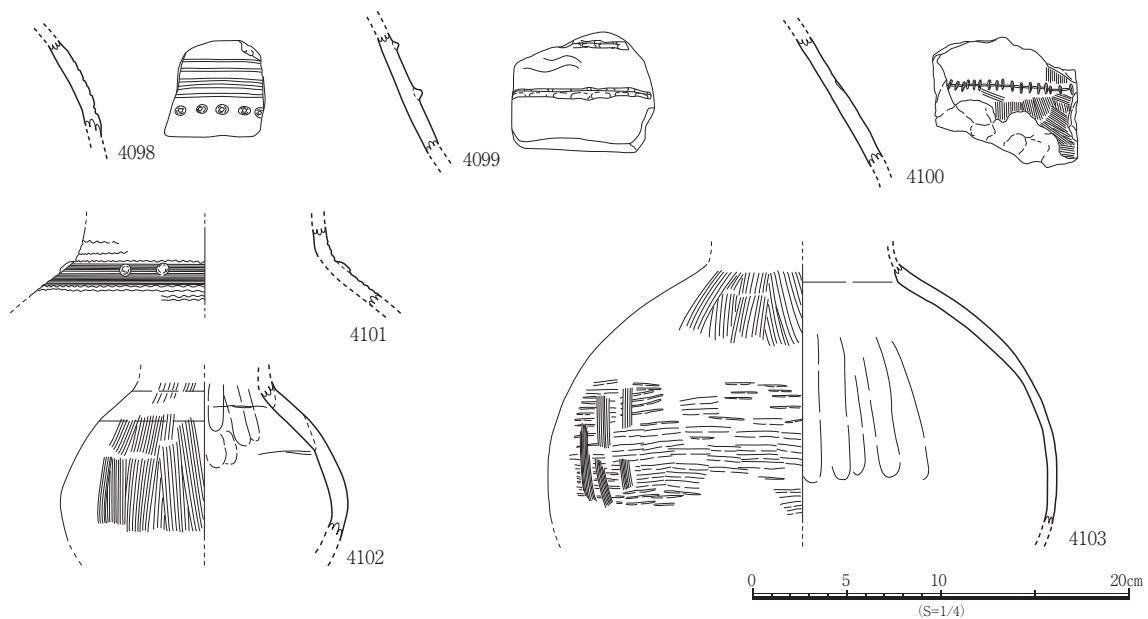


図3-48 SR-5出土遺物実測図7

4. IV区 (1) 自然流路

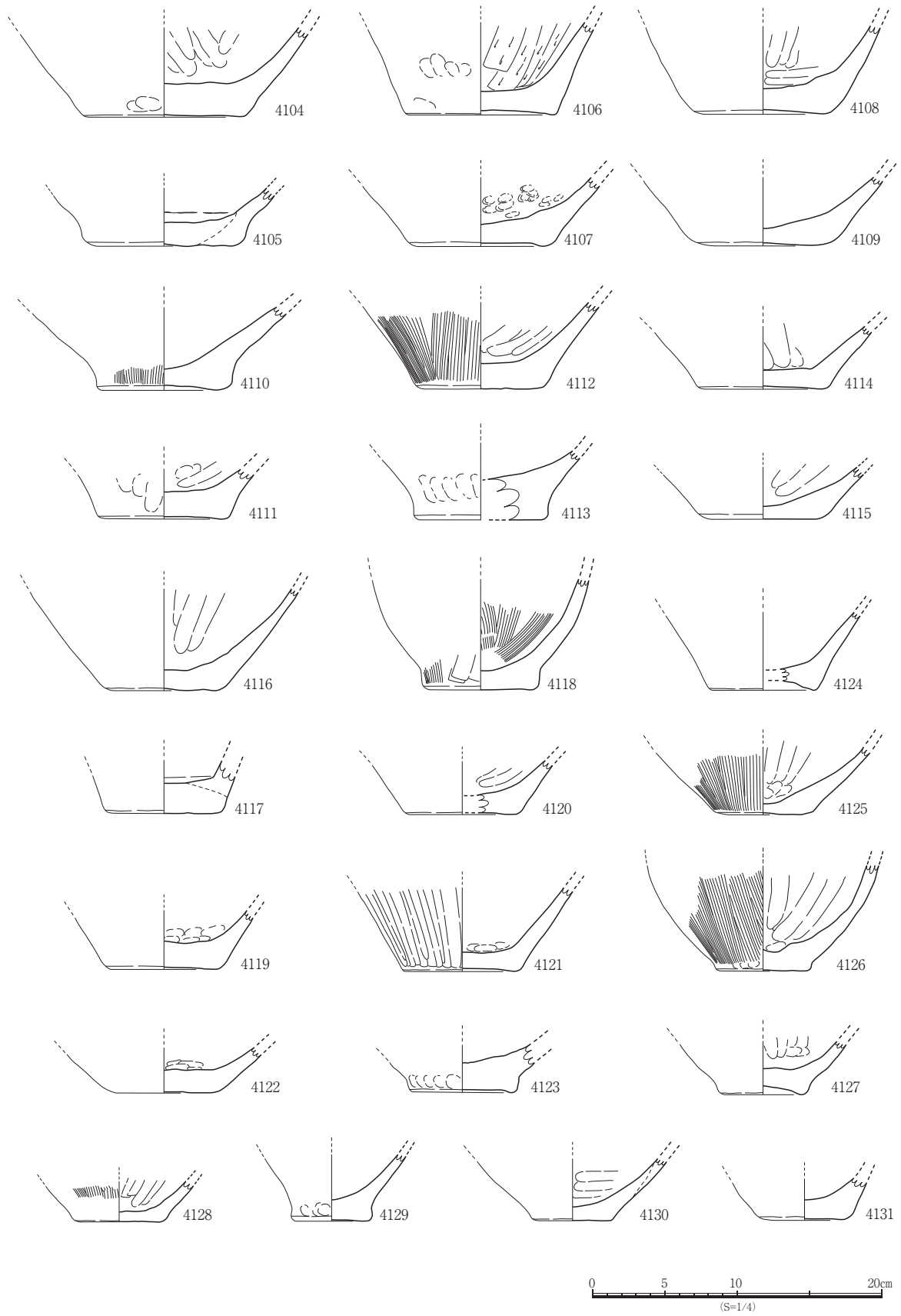


图3-49 SR-5出土遗物实测图8

えるが、タタキ目が残るのは中胴部で、煤の付着がみられる。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(4101・4102)、比較的多く含むもの(4098・4103)、多く含むもの(4099・4100)があった。

4104～4138は壺の底部とみられるもので、底径4.8～11.2cmを測る。調整は、内面がナデ調整と指ナデ調整を施すものが大半で、ヘラ削り(4106・4132・4133)、ハケ調整(4118・4137)、ヘラナデ調整(4134)を施すものもみられ、外面がナデ調整とハケ調整を施すものが多く、ヘラナデ調整(4118)、ヘラ磨き(4121・4137)、タタキ目(4132～4135)を施すものもみられる。いずれも内底面や外面下端を中心に指押えの痕が残る。また、4118の外底面はハケ調整の後にナデ調整を施す。4126の外底面はナデ調整で、外面には煤が付着する。4133は肩部外面と底部外面に黒斑が残る。4134は下胴部外面に煤が部分的に付着する。4135の外面には煤が付着する。4137の下胴部外面には黒斑が付着する。胎土には、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を若干含むもの(4135)と少し含むもの(4107・4108・4128・4138)もみられたが、多くが細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂・極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4139～4205は甕の口縁部が残存するものである。4139と4140は、胴部がほぼ真上に立ち上がり、口縁部は短く外傾ないし外反するもので、4139は上胴部外面に3条のヘラ描沈線、口縁端部にヘラ状工具による刻目が残る。4140は4139とほぼ同形態であるが無文で、所謂如意形口縁をなす。胎土には、4139が細粒砂から極粗粒砂を少し含み、4140が細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

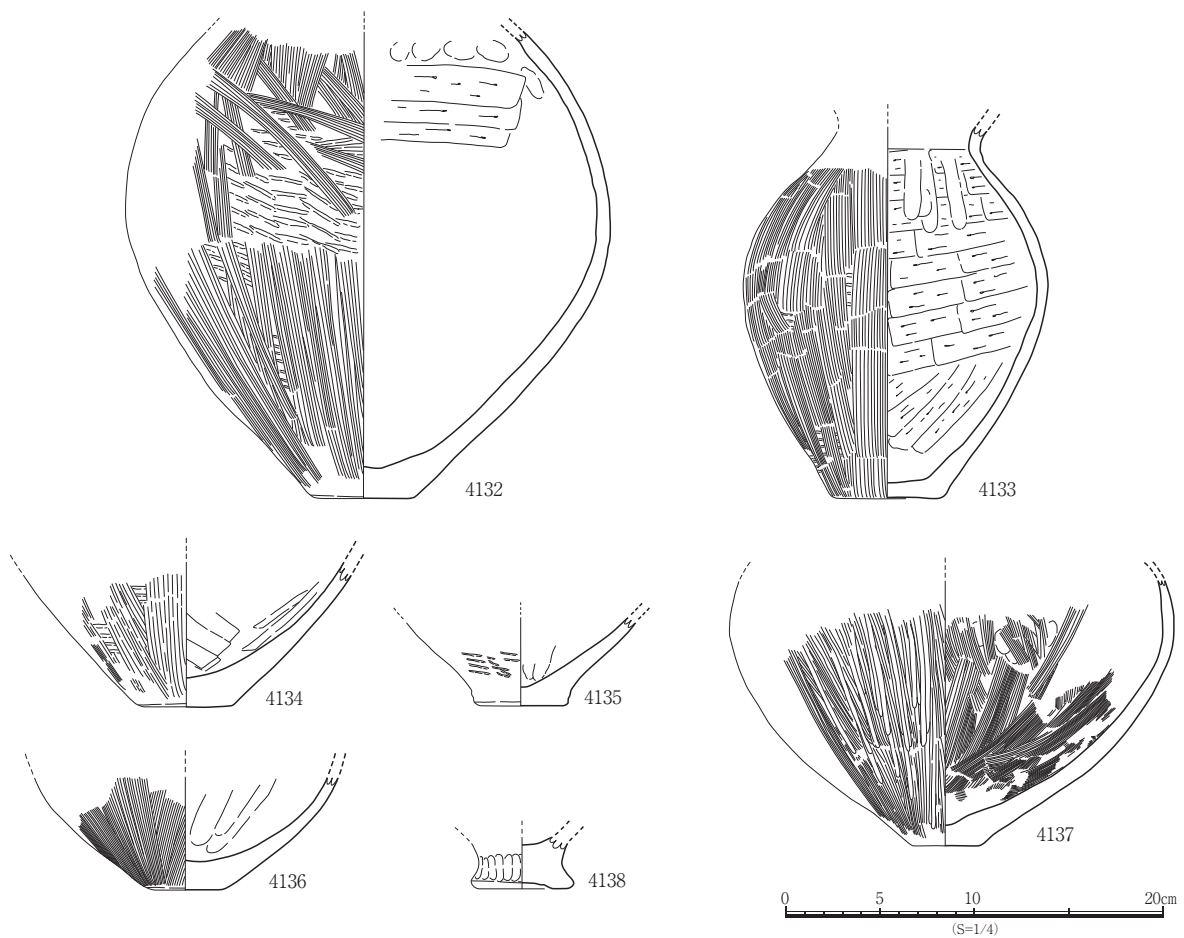


図3-50 SR-5出土遺物実測図9

4. IV区 (1) 自然流路

4141～4145は胴部にやや膨らみがあるもので、4141は、胴部内面にヘラ削り、外面にタタキの後にはハケ調整を施す。4142は無文で、口縁端部は内傾する浅い凹面をなす。頸部内面と頸部から上胴部外面にハケ調整を施す。外面には煤が付着する。4143は口縁部が欠損するもので、内面にはヘラ削り、外面にはタタキ目が残る。4144は内面にヘラ削りが残り、口縁端部下端を肥厚する。4145は口縁部を欠損するが、内面に粘土紐の接合痕跡が明瞭に残り、胴部内面に指ナデ調整を放射線状に施す。胴部外面下半に黒斑が残る。胎土には、4144が細粒砂から極粗粒砂を少し含む以外は、細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4146～4149は、口頸部が胴部から外反気味に立ち上がるもので、口頸部は比較的長い。4146は頸部外面基部に爪による刺突文を2段に施し、口縁端部外面に成形時の爪痕が残る。4147は無文で、口縁端部は丸く仕上げる。4148は口縁部外面に棒状工具によるタテ方向の沈線とA-1タイプの微隆起突帯を4段に配する。4149は、口縁部が水平を向くもので、頸部外面基部に先が平らな棒状工具で凹線を巡らす。胎土には、4148が細粒砂から極粗粒砂を少し、4146が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、4147・4149が細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

4150と4151は口縁端部を肥厚したもので、4150は口縁端部両端にヘラ状工具による刻目を施す。4151は口縁端部下端を指でつまみ出す。胎土には、4150が細粒砂から極粗粒砂を多く、4151が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

4152～4159は、口頸部が内湾して立ち上がる胴部から外反するもので、4146などに比べると口頸部は短くなり、口縁部外面に粘土帯を貼付する。4152は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。4153は無文で、口縁部外面には指押えの痕が残る。外面のハケ調整は、粘土帯を貼付してから行う。4154は丸く仕上げた口縁端部にヘラ状工具による刻目を施す。外面のハケ調整は、粘土帯を貼付してから行う。4155～4158は無文で、口縁部外面には指押えの痕が残る。4155は頸部外面下端にヘラ描沈線を1条施す。4156は口縁端部を丸く仕上げる。4157は、口縁端部外面が浅い凹面をなす。4158も口縁端部が浅い凹面をなす。4159は口縁部外面下端にヘラ状工具による刻目、その下にA-1タイプの微隆起突帯を作り出す。いずれも胎土は細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂・極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4160～4181は、成形時粘土紐を外傾接合することにより上胴部から頸部にかけて直線的な部分が断面に残るもので、接合箇所が上胴部にある場合は内傾し、頸部にある場合は直立ないし外傾する。4160と4180の口縁端部に擬凹線文、4163に刺突文が残る以外はいずれも無文である。4160は口縁端部を上方に肥厚して擬凹線文を施し、頸部外面基部にヘラ状工具による押圧痕が残る、内面にはヘラ削りを施す。4161は4160と同形態のものであるが、口縁端部は内傾する凹面をなし、胴部内面には上位に指ナデ調整とナデ調整、中位以下にヘラ削り、外面にはヘラ磨きの痕跡が残る。4162は肩部内面に接合痕が残る、口縁端部は内傾する平面をなす。4163は口縁部外面粘土帯を足して肥厚し、肩部外面にハケ状工具による刺突文を施す。4164は肩部内面に接合痕が残る、口縁端部を僅かに肥厚し、ヨコナデ調整を加え、内傾する平面をなす。外面は煤が部分的に付着する。4165は口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。胴部外面にはタテ方向のハケ調整を施す。4166は口縁端部が内傾する平面を有し、胴部内面はヘラ削りを施す。外面は胴部にタテ方向のハケ調整を施した後で、肩部付近までヨコナデ調整を加える。また、外面には煤が付着する。4167も4166とはほぼ同形態で、胴部内面上位にハケ調整とナデ調整、中位以下にヘラ削りを施す。また、外面には煤が付着する。4168は口縁部が外傾し、端

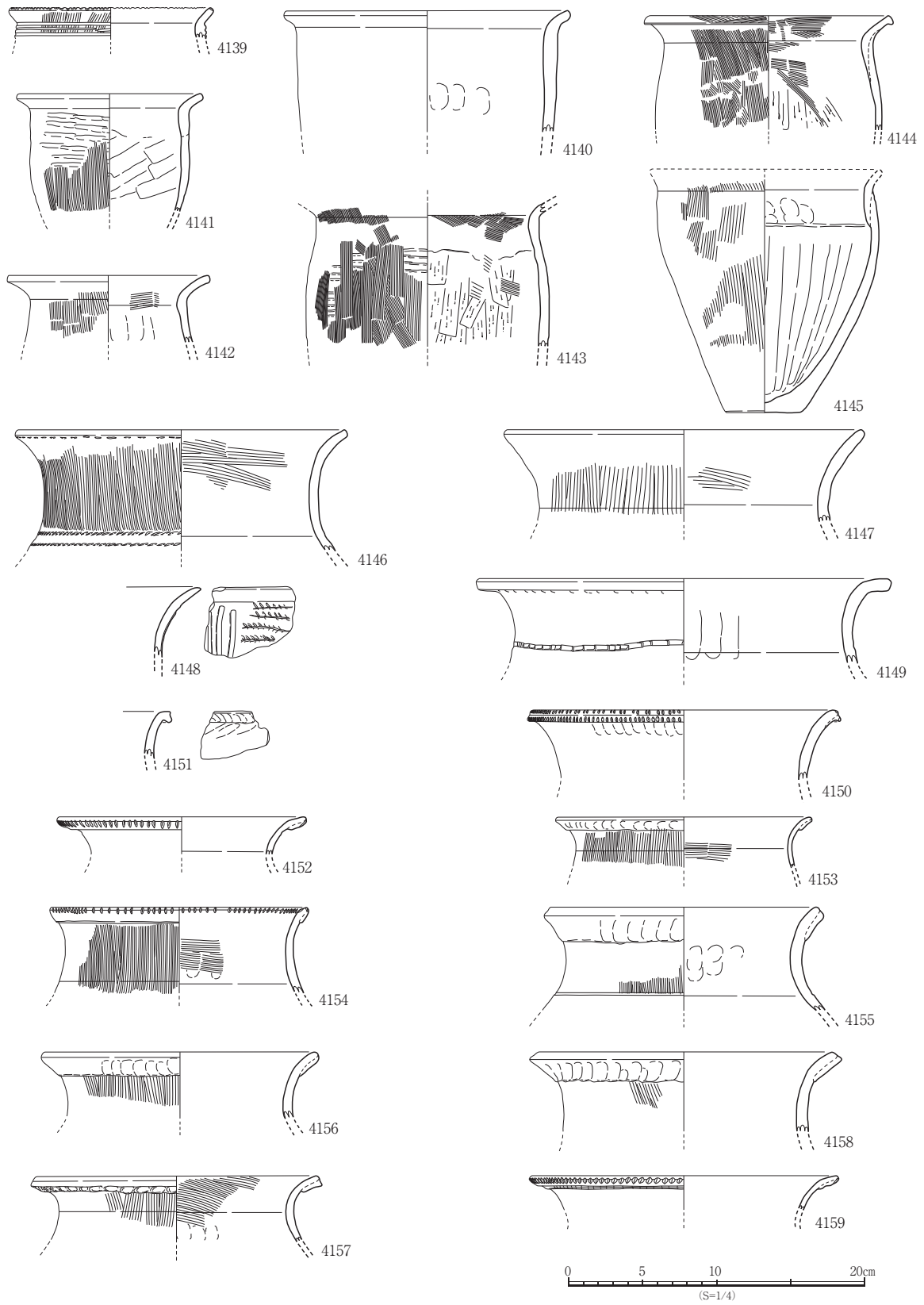


図3-51 SR-5出土遺物実測図10

4. IV区 (1) 自然流路

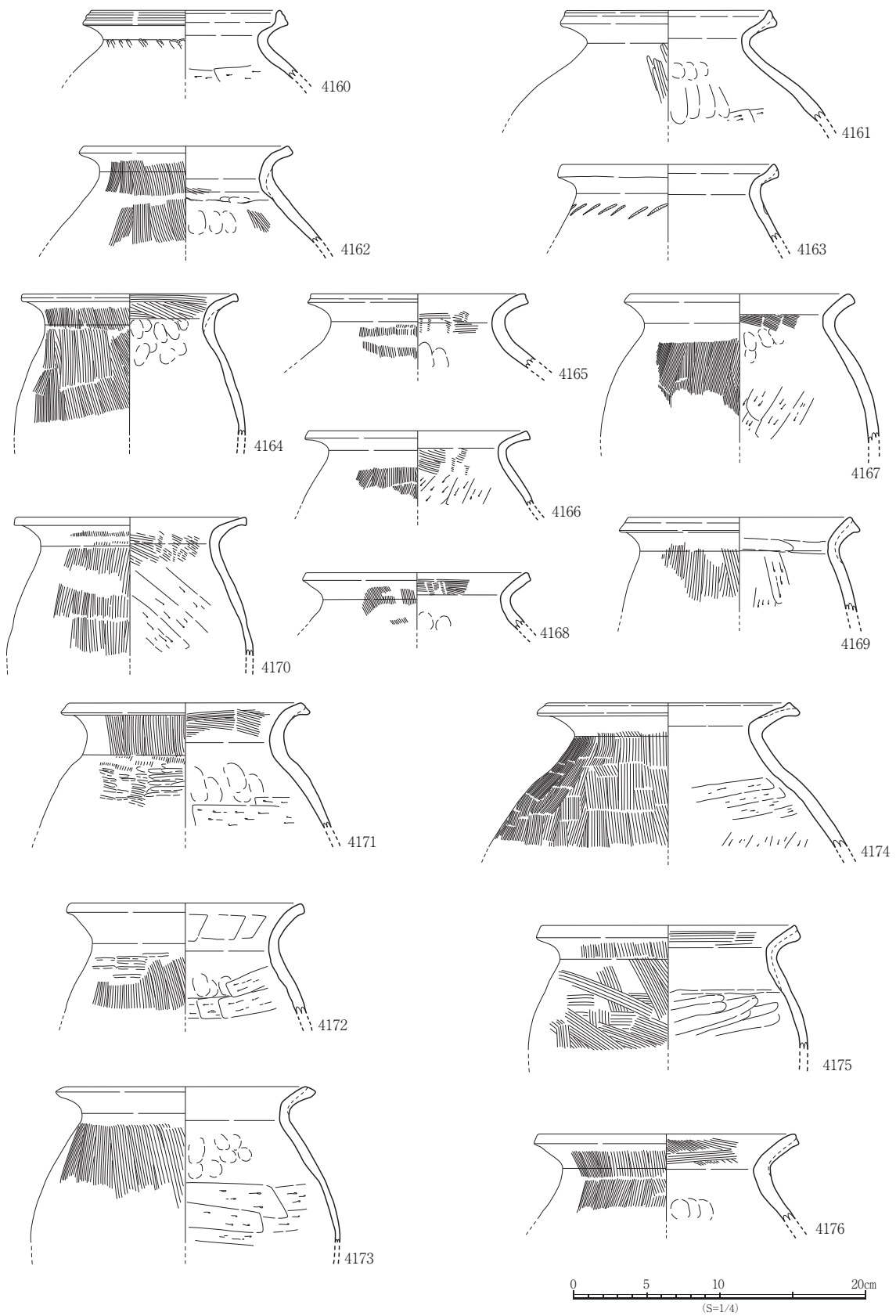


图3-52 SR-5出土遺物実測図11

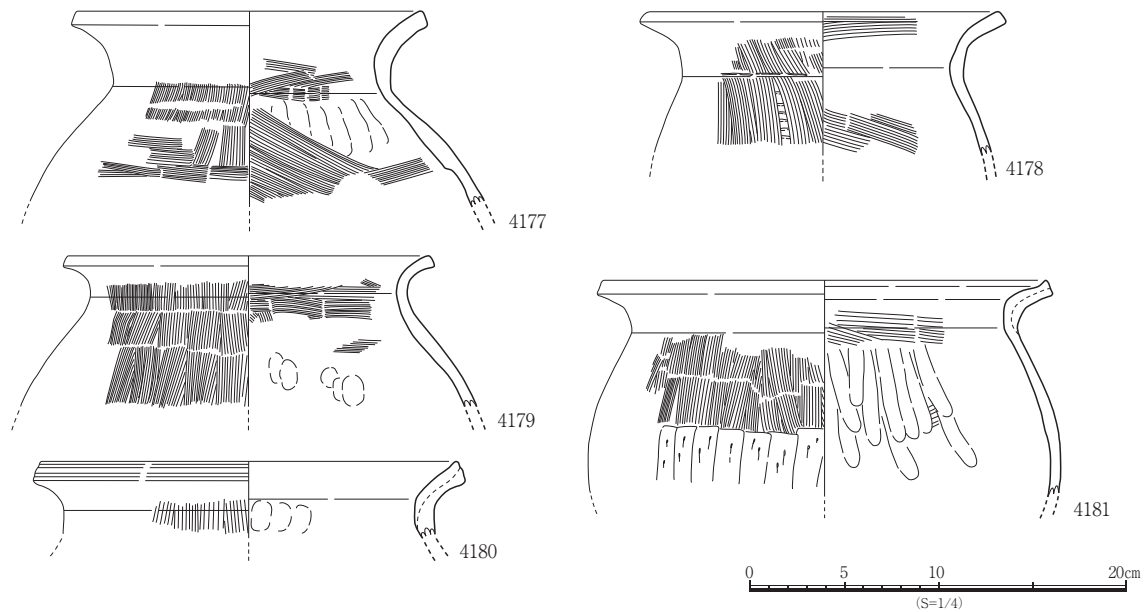


図3-53 SR-5出土遺物実測図12

部が内傾する浅い凹面となる。頸部から上胴部外面にはハケ調整を施す。煤の付着は認められない。4169は口縁部を内傾接合で成形し、端部を肥厚するもので、端部は内傾する浅い凹面となり、胴部内面にヘラ削り調整、外面にはハケ調整を施す。外面は被熱で変色し、頸部外面基部に煤が付着する。4170は口縁部が大きく外傾し、端部は水平を向く浅い凹面となり、胴部内面にはヘラ削りの後にナデ調整を加え、外面にはタテ方向のハケ調整を施す。頸部外面以下に煤が付着する。4171は口縁端部を肥厚し、端部は内傾する凹面となり、胴部内面にヘラ削り、外面はタタキの後に頸部から肩部にかけてハケ調整を施す。4172は胴部内面にヘラ削り、外面はタタキの後にタテ方向のハケ調整を施す。頸部外面には煤が付着する。4173は口縁部を内傾接合で成形し、端部を肥厚するもので、端部は内傾する平面となり、肩部内面に指押えとナデ調整、胴部内面にヨコ方向のヘラ削り、外面はハケ調整を施す。また、外面は肩部以外に煤が付着する。4174は口縁部を外傾接合で成形し、端部を肥厚するもので、端部は内傾する凹面となり、胴部内面にヘラ削り、外面にハケ調整を施す。口縁部外面には煤が付着する。4175は肩部から口縁部にかけて幅広の粘土紐で外傾接合して成形し、端部は内傾する凹面をなし、肩部内面接合部から下に指ナデ調整を施す。胴部内面は指ナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整を施す。外面には煤が付着する。4176は口縁部を内傾接合で成形し、端部を肥厚するもので、端部は内傾する浅い凹面となる。外面には粗いハケ目が残る、煤が付着する。4177は、口縁端部が内傾する平面となるもので、胴部内面には接合痕が残る。胴部外面にはハケ調整の後にナデ調整を部分的に施す。4178は口縁部が外傾し、端部が内傾する平面となるもので、胴部外面にタタキの後に頸部外面からハケ調整を加える。外面には口縁部から煤が付着する。4179は口縁部が外反し、端部が内傾する平面となるもので、胴部内面には焦げ目と煤が付着する。外面は頸部からハケ調整を施し、肩部外面に煤が付着する。4180は口縁部を外傾接合で成形し、端部を肥厚するもので、端部には擬凹線文を施す。4181は口縁部を内傾接合で成形し、端部を肥厚するもので、端部は内傾する浅い凹面となり、胴部外面にはハケ調整の後に中位からヘラ削りを施す。頸部と中胴部外面に煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(4167・4169・4175・4176・4178・4180)もみられたが、多くが細粒砂

4. IV区 (1) 自然流路

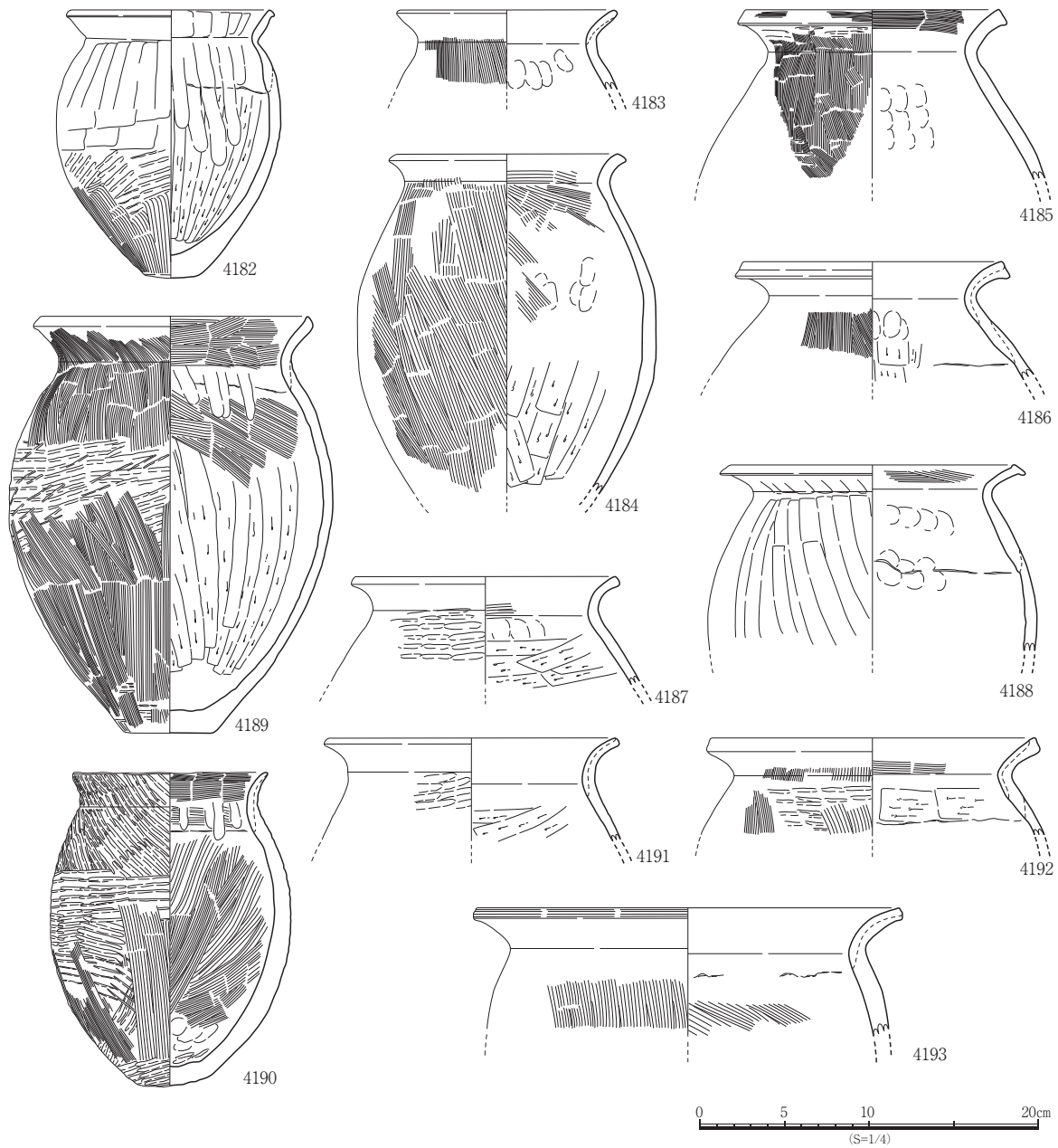


図3-54 SR-5出土遺物実測図13

から粗粒砂ないし極粗粒砂・極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4182～4193は頸部内面が湾曲するもので、口縁部は外傾ないし外反する。4182は口縁端部を僅かに肥厚し、端部は内傾する平面となり、胴部内面中位以下に放射線状のヘラ削り、中位から上に指ナデ調整、外面にタタキを施した後で、下胴部にハケ調整、中胴部から上にヘラナデ調整を加える。内底面と外底面はナデ調整で、外面中胴部以下に煤が付着する。4183は口縁部を外傾接合で成形し、端部を丸く仕上げる。4184は口縁部が短く外反し、端部は内傾する平面となる。胴部内面中位から上はハケ調整の後にナデ調整を加え、下胴部にはヘラ削り、外面にはハケ調整を施す。胴部外面上半は被熱で変色し、下半には煤が付着する。4185は口縁端部下端を肥厚し、端部は内傾する平面となり、頸部から胴部外面にはハケ調整を施し、中胴部にはタタキ目が残る。4186は外傾接合で成形したもの

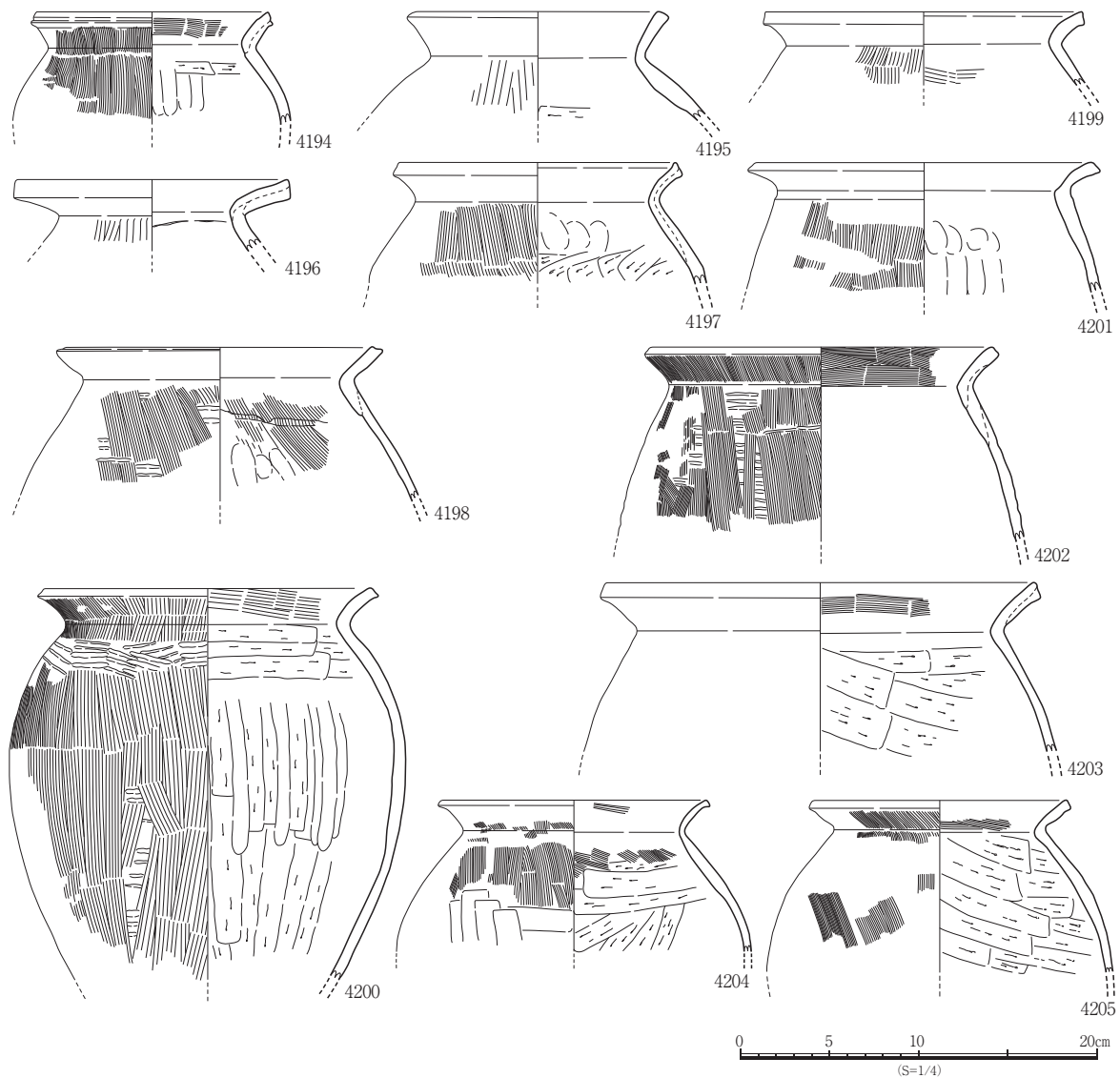


図3-55 SR-5出土遺物実測図14

で、端部を肥厚し、端部は内傾する浅い凹面となり、胴部内面にはヘラ削り、外面はハケ調整とナデ調整を施す。4187は口縁部が外反し、端部は内傾する平面を有し、胴部内面にはヘラ削り、外面にはタタキを施し、外面は口縁部から煤が付着する。4188は口縁端部を上下に肥厚し、端部は内傾する平面となり、外面にはヘラナデ調整を施す。4189は外傾接合で口縁部を成形し、肩部内面に接合痕が残る。胴部内面は、底部から上胴部にかけてヘラ削りを行った上で、上胴部にハケ調整と指ナデ調整を加える。内底面と外底面はナデ調整である。外面は下胴部から上胴部にかけてタタキを施した上で中胴部以外にハケ調整を加える。下胴部は被熱で変色し、外底面と口頸部から肩部の外面にかけて煤が付着する。4190も外傾接合で口縁部を成形し、端部を細く仕上げ、外面一面にタタキを施す。外面は全体に被熱で変色し、中胴部を中心に煤が付着する。4191は外傾接合で口縁部内側を成形し、端部を丸く仕上げ、胴部内面にはヘラ削り、外面にはタタキを施す。頸部基部を除く外面に煤が付着する。4192も外傾接合で口縁部内側を成形し、端部は内傾する浅い凹面となり、胴部内面にはヘラ削り、外面にはタタキの後にハケ調整を加える。頸部基部を除く外面に煤が付着する。4193も外傾接合で

4. IV区 (1) 自然流路

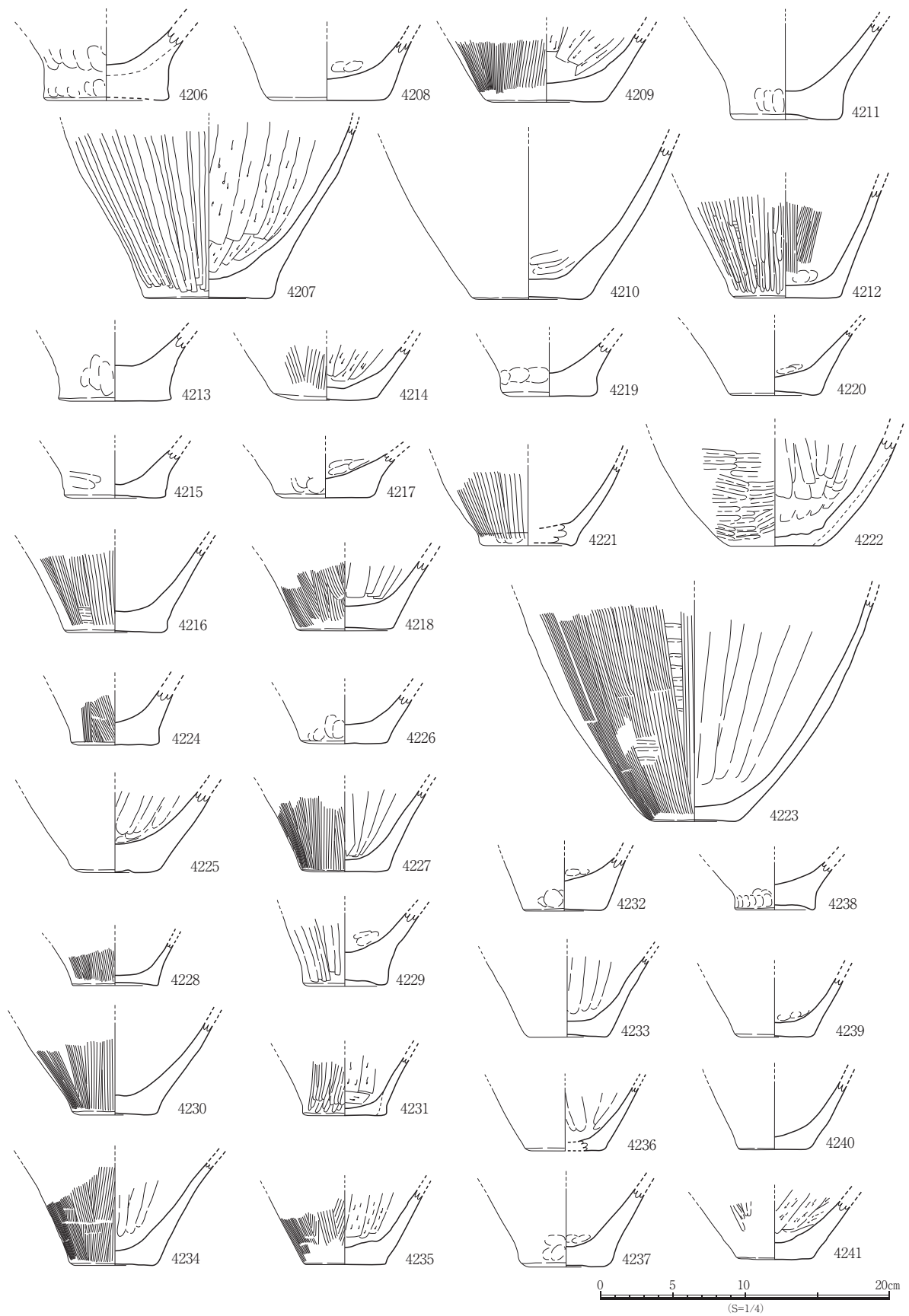


图3-56 SR-5出土遺物実測図15

口縁部内側を成形し、端部に擬凹線文を施す。胴部内外面はハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を少し含むもの(4183・4185)もみられたが、多くが細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂や極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4194～4205は肩部から口縁部がくの字形をなすもので、頸部内面には稜ができ、口縁部は外傾ないし外反し、いずれも無文である。4194は外傾接合で口縁部内側を成形するが、口縁端部が段となり沈線状を呈する。胴部内面は指ナデ調整の後に肩部にヘラ削りとナデ調整を施す。4195は口縁部が外傾し、端部が内傾する平面となり、胴部内面にヘラ削りを施す。4196は外傾接合で口縁部内側を成形し、端部は内傾する平面となる。4197は幅広の粘土紐を用いて外傾接合で肩部から口縁部内面を成形し、口縁端部上端を肥厚し、胴部内面にヘラ削り調整、外面にハケ調整を施す。頸部基部を除く外面に煤が付着する。4198は外傾接合で肩部から口縁部を成形し、口縁端部は内傾する凹面となり、肩部内面には接合痕、外面はタタキの後にハケ調整を施す。4199は、口縁部が外反し、端部は浅い凹面となる。外面には煤が付着する。4200は、口縁部がやや外反し、端部は内傾する浅い凹面となり、胴部内面は肩部にヨコ方向、それ以外にタテ方向のヘラ削りを施した後でナデ調整を加える。胴部外面はタタキの後にハケ調整を施す。外面中胴部以下に煤が付着する。4201は、口縁部が外傾する短い頸部からさらに外傾し、端部は内傾する浅い凹面となる。胴部内面には焦げ目、外面には煤が付着する。4202は外傾接合で成形し、口縁端部は内傾する平面となり、外面はタタキの後に頸部からハケ調整を施す。4203は口縁部を外面に粘土帯を貼付することにより肥厚する。口縁端部は内傾する凹面をなし、胴部内面にはヘラ削り、外面はナデ調整を施す。外面は煤が付着する。4204は、口縁部が外反するもので、端部下端を肥厚し、胴部内面にヘラ削り、外面にハケ調整の後にヘラナデ調整を加える。頸部基部を除く外面に煤が付着する。4205は、口縁部が外傾し、肥厚された端部は内傾する平面となり、胴部内面一面にヘラ削りを施す。外面には煤が付着する。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(4194・4201)と多く含むもの(4202)もみられたが、他は細粒砂から極粗粒砂

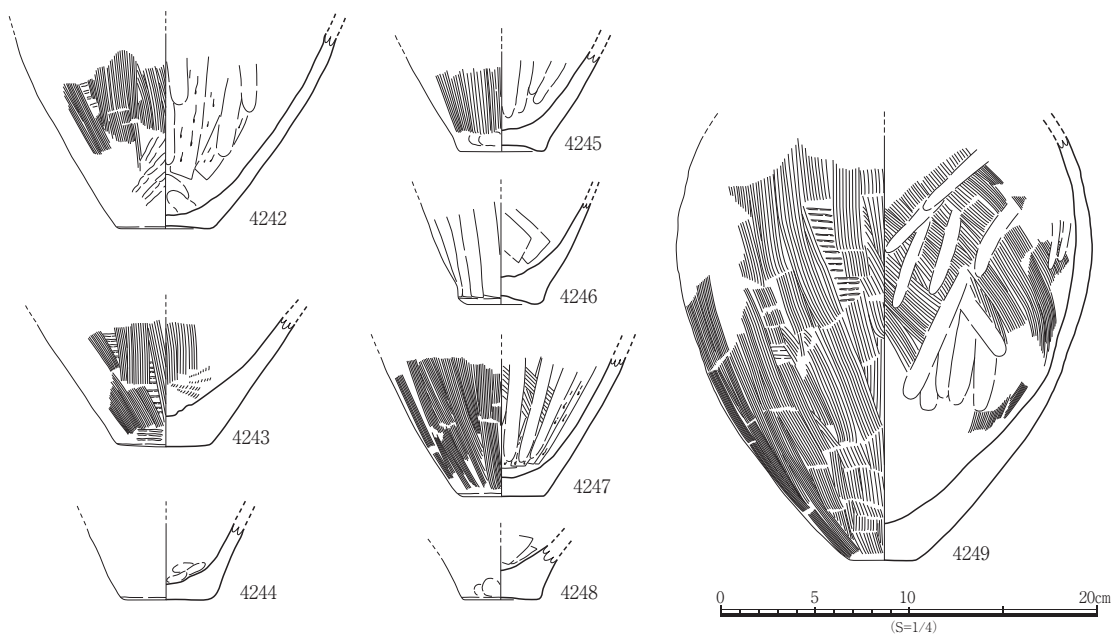


図3-57 SR-5出土遺物実測図16

ないし極細粒中礫を比較的多く含むものであった。

4206～4249は甕の底部とみられるもので、底径は3.6～8.6cmを測る。調整は、内面がナデ調整と指ナデ調整のものが多く、ヘラ削り(4207・4209・4214・4231・4235・4241・4242・4247)、ハケ調整(4212・4243・4247・4249)、ヘラナデ調整(4218・4227・4246・4248)を施すものもみられ、外面がナデ調整とハケ調整のものが多く、タタキ(4212・4216・4222・4223・4242・4243・4249)、ヘラ磨き(4207・4212・4229・4231・4241)、ヘラナデ調整(4246)を施すものもみられる。いずれも内底面や外面下端を中心に指押えの痕が残り、多くで内面に焦げ目、外面に煤が付着し、外面を中心に器面が被熱で変色するものも散見される。胎土には、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を少し含むもの(4218・4233・4242・4245)もみられたが、多くが細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂や極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4250～4257は高杯で、杯部が残存するのは4250と4257で他はすべて杯部が欠損し、裾部が遺存するものはない。4250は内傾する口縁部に5本単位のクシ描きによる擬凹線文を施す。4251は杯部と粘土円盤で接合し、内面にははしほり目が残る。4252～4255は脚柱部の隙間に粘土を充填するもので、4252～4254・4256は円形の透かしを有し、ヘラ磨きが4254の内外面、4255と4256の外面に施される。4257は直立する脚柱部に椀状の杯部が付くもので、脚柱部内面にははしほり目が残る。胎土には、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を少し含むもの(4256・4257)、比較的多く含むもの(4252～4254)、多く含むもの(4250・4251・4255)があった。

4258～4269は鉢である。4258～4260はコップ状を呈するもので、口縁部は平らな底部から外上方に立ち上がり、端部は丸い。4260は口縁部が短く外傾する。胎土には、4258が細粒砂から粗粒砂を多く含む、4259が細粒砂から極細粒中礫を少し含む、4260が細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

4261～4265は、体部が平底ないしボタン状の底部から内湾気味に上がり、口縁部に至るもので、いずれも器面にはヘラ磨きが施される。4261は小さな底部となるもので、口縁端部は細い。体部から底部外面は放射線状にハケ調整を施した後で、ヘラ磨きを加える。4262は、口縁部が欠損するもので、底部は比較的しっかりした平底である。4263はハケ状工具の押圧で平たいボタン状の底部となる。4264もボタン状の底部が付くものとみられる。4265は、口縁部端部が内傾する平面を有するもので、底部は欠損する。胎土には、4261・4263・4264が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む、4262・4265が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

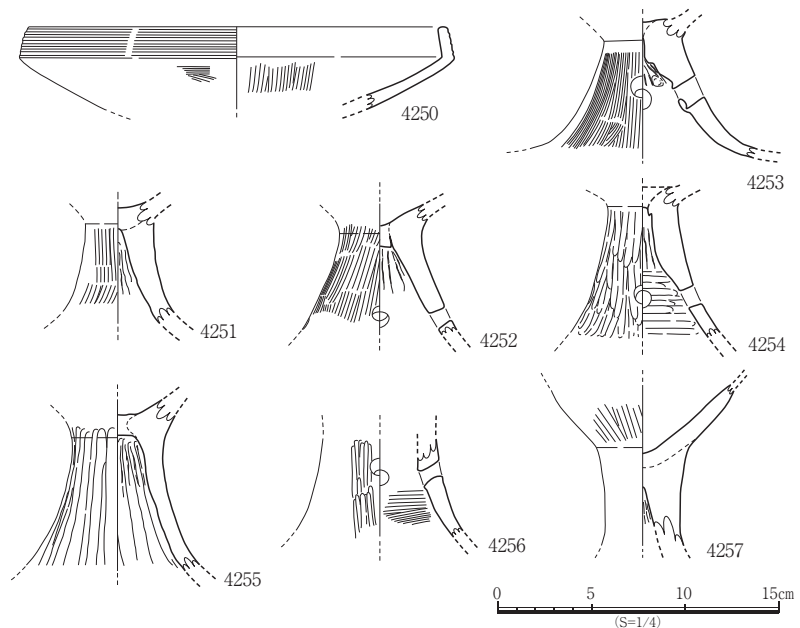


図3-58 SR-5出土遺物実測図17

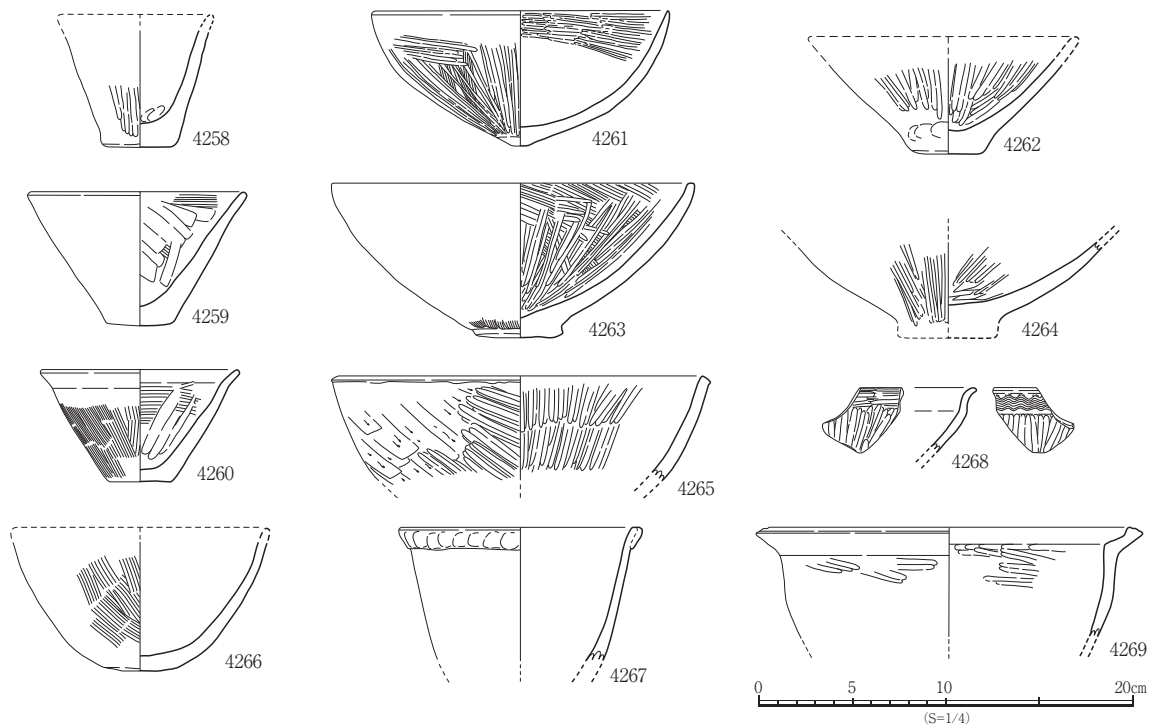


図3-59 SR-5出土遺物実測図18

4266 は体部が丸味のある底部から丸味を持って上外方へ上がる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4267 は口縁部に粘土帯を貼付し、外面には指押えの痕が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を若干含んでいた。

4268・4269 は口縁部を明確に作り出したもので、4268 は、口縁部が斜め上方に延びる体部から短く湾曲し、外面に8本単位のクシ描波状文を施す。4269 は、口縁部が体部から屈曲するもので、口縁端部に擬凹線文を施す。胎土には、4268 が細粒砂から粗粒砂を若干含み、4269 が粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

4270～4272は蓋で、4270と4271は、天井部が平らで中凹みとなり、口縁部はやや開き気味に斜め下外方へ下り、4270の内面にはヘラナデ調整、4271の内面には指ナデ調整を施す。4272は、天井部が欠損するもので、口縁部はハの字形に開く。胎土には、4270が細粒砂から粗粒砂を多く含み、4271が細粒砂から極粗粒砂を多く含み、4272が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含んでいた。

4273～4284はミニチュア土器である。4273～4276は、底部が平らで鉢のミニチュアとみられる。4277～4283は、底部が高台風となったもので、鉢ないし臼のミニチュアとみられる。4282は外面が被熱で変色する。4284は上げ底の底部から胴部が上外方へ立ち上がるもので、外面にはハケ調整を施し、甕のミニチュアとみられる。胎土には、細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂・極細粒中礫を若干含むもの(4283)、少し含むもの(4277～4279)、比

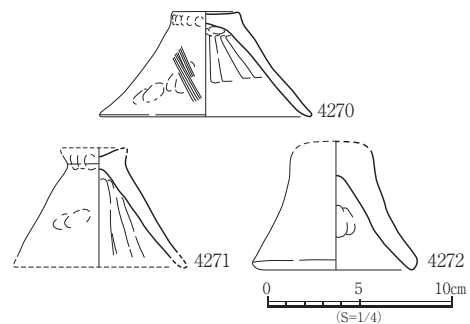


図3-60 SR-5出土遺物実測図19

4. IV区 (1) 自然流路

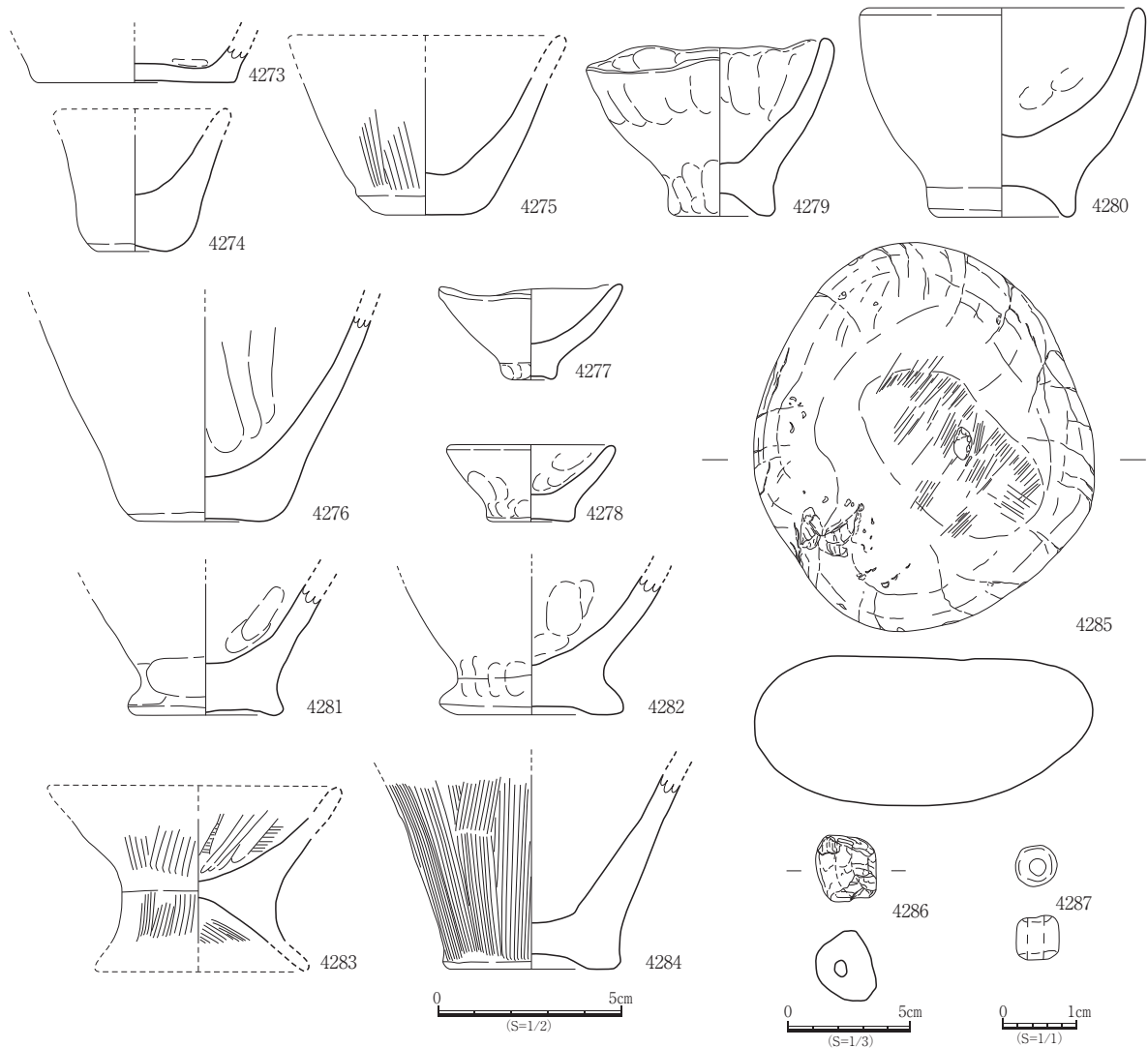


図3-61 SR-5出土遺物実測図20

較的多く含むもの(4274・4276・4281・4282・4284), 多く含むもの(4273・4275・4280)があった。

石製品(図3-61 4285・4286)

4285は磨石で、中央部に擦痕がみられ凹む。4286は自然石とみられるが、径約7mmの穴が中央部に湾曲して開いており、何らかに使用された可能性もある。

ガラス製品(図3-61 4287)

小玉で、コバルトブルーに発色する。

SR-6(図3-63・64)

SR-5と同じく第XI層上面で検出した自然流路で、調査区北東部から西に緩やかに蛇行して延びた後、大きく屈曲して南流し、調査区外に延びる。屈曲部には廃材を利用した柵状の堰が構築されていた。検出幅5.65～10.04m、深さ0.22～0.77mで、約48.0mを検出した。基底面は比高差0.59m(傾斜角度 $0^{\circ}42'$)で北(1.577m)から南(0.985m)に向かって傾斜し、主軸方向は西南西(N-109°-W)から堰を境に南(N-175°-W)を向く。断面形は概ね逆台形を呈する。SR-1～4のような護岸工事を行われていないものの、自然流路の屈曲点に堰を構築しており、本遺構の上部から派生するSD-5は用水路

の機能を果たしていたとみられる。堰状遺構は幅 1.00 ～ 1.60m，高さ 0.70m，検出長 7.20m を測り，西約 2.00m は遺存しておらず，西岸まで達していないが，全長は約 9.20m であったものと推測される。松山市古照遺跡(松山市 1974)のように明確な三段築成は確認できなかったものの，構造的にはほぼ同じで，上流側に斜材(長さ約 1.5m，径約 5cm の廃材または杭)，その上に横材(長さ 2.0 ～ 4.0m，径約 10cm の廃材または丸太材)を乗せ，下流側に縦材(長さ約 1.0m，径約 5cm の廃材または杭)で固定している。東岸から約 3.5m で変化点があり，横材の方向を変え，検出した部分で 2 ブロックあり，確認できなかった

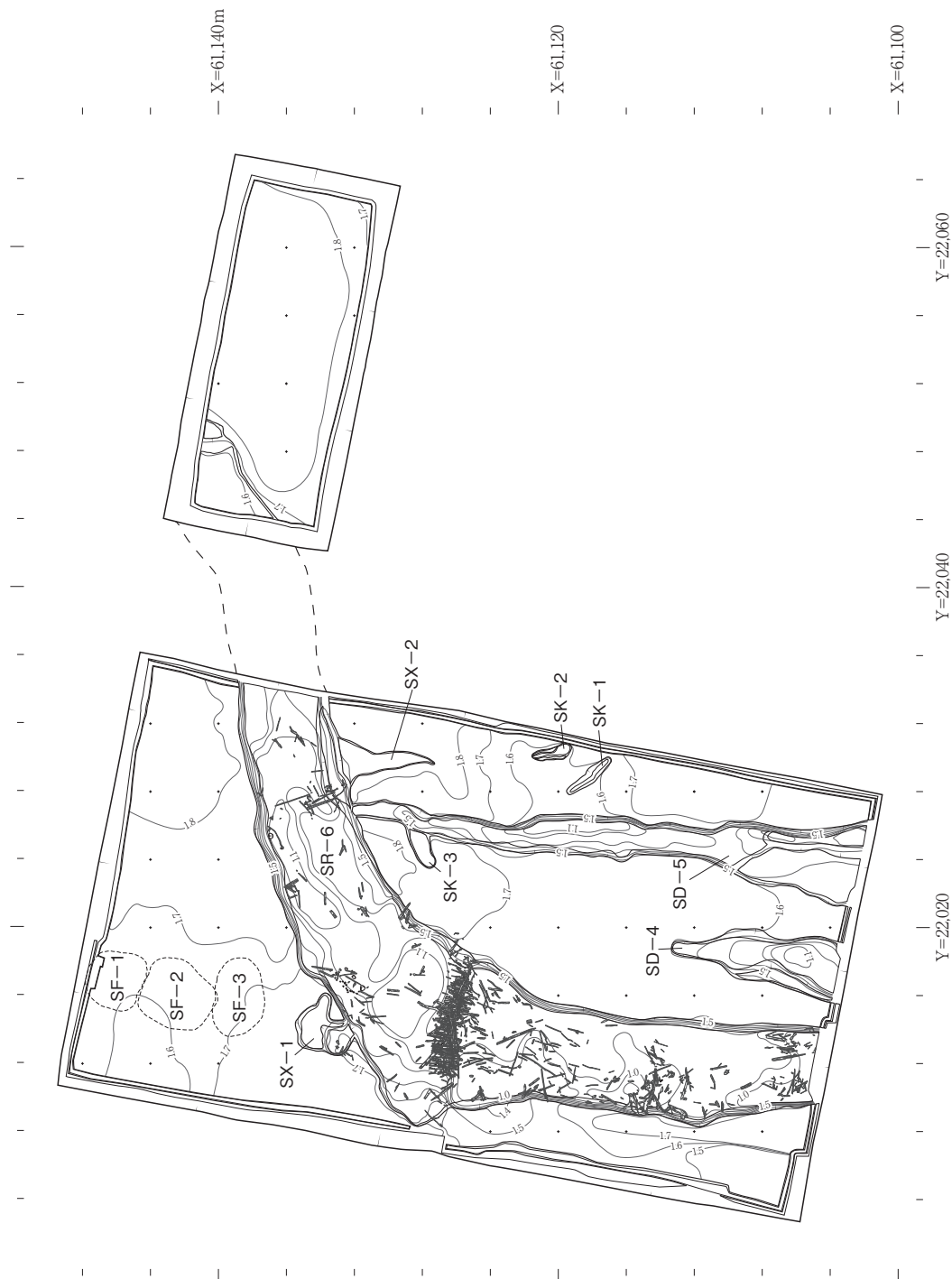


図 3-62 IV 区上面検出遺構平面図 (S=1/400)

部分に方向を変えたブロックがあり、全体で3ブロックで構成されていたものとみられる。堰の構築には堅穴建物や高床式倉庫の部材や折れた堅柱など廃材が多用されており、杭として明確に加工されたものは少なかった。埋土は基本的に細粒砂から中粒中礫を主体としたもので、20層以上に分層され、徐々に埋まって行ったものとみられるが、出土遺物から長期間の存続は考え難い。出土遺物点数は5,158点とSR-5に次ぐ出土量で、木製品が多数出土する。復元図示できたのは出土遺物の約3.5%に当たる172点で、その内訳は弥生土器は120点(4288～4407)、石製品3点(4408～4410)、木製品49点(4413～4420・4423～4425・4427～4437・4439～4465)であった。なお、図示できた木製品には農具(鋤:4413～4416, 鋤:4417～4419, 田下駄:4420, 杵:4423・4424, 横槌:4425・4427)、容器(皿:4428, 槽:4429～4431, 組みもの:4432～4435)、祭祀具(鳥形:4436, 舟形:4437)、家具(椅子:4439～4441)、建築部材(梯子:4442, その他:4443～4462)、不明木器(4463～4465)がある。

出土遺物

弥生土器(図3-65～73 4288～4407)

4288～4297は壺の口縁部である。4288と4289は、口縁部が直立する頸部から外傾するもので、いずれも無文である。4288は、口縁端部が内傾する平面をなし、4289は口縁端部を丸く仕上げる。胎土には、4288が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、4289が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

4290と4291は、頸部が胴部から内湾気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外反するものである。4290は口縁端部に1条の凹線が巡る。4291は口縁端部に丸味を有する。胎土には、4290が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、4291が細粒砂から極細粒中礫を少し含んでいた。

4292～4294は長頸壺で、口縁部は真上に立ち上がる頸部から大きく外反する。4292は口縁端部を上下に拡張し、ハケ状工具による刻目を施す。4293は、口縁端部が内傾する凹面となる。4294は全体が復元できたもので、底部は丸底に近く、胴部は中位よりやや上に最大径を有し、頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反し、端部は内傾する浅い凹面を有する。胴部内面はハケ目をナデ消し、さらに肩部に指ナデ調整を加える。外面はタタキ目をハケ調整で消し、さらに肩部にはヘラ磨きを加える。胎土には、4292が細粒砂から細粒中礫を少し含み、4293が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、4294が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含んでいた。

4295と4296は口頸部が外反するもので、頸部は前者より短い。4295は口縁部に粘土帯を貼付するもので、口縁端部と外面に指押えの痕が残る。4296は外形接合で成形されており、口縁端部は垂直を

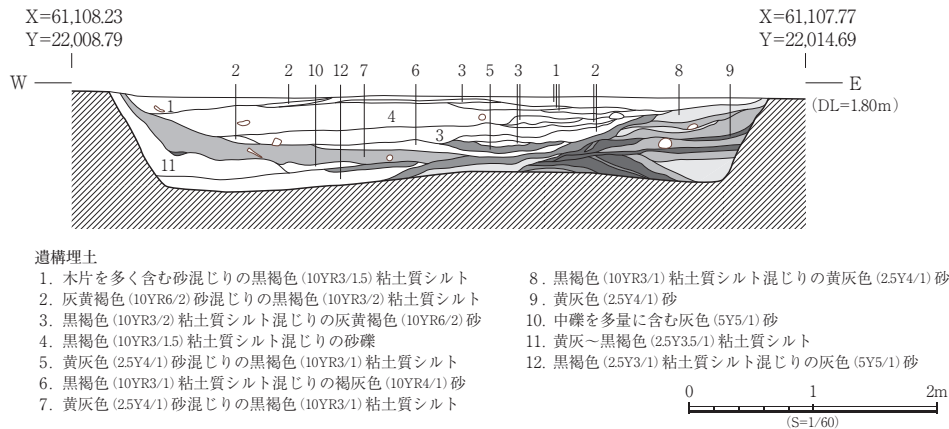


図3-63 SR-6(南壁)



図3-64 SR-6 堰状遺構(S=1/100)

4. IV区 (1) 自然流路

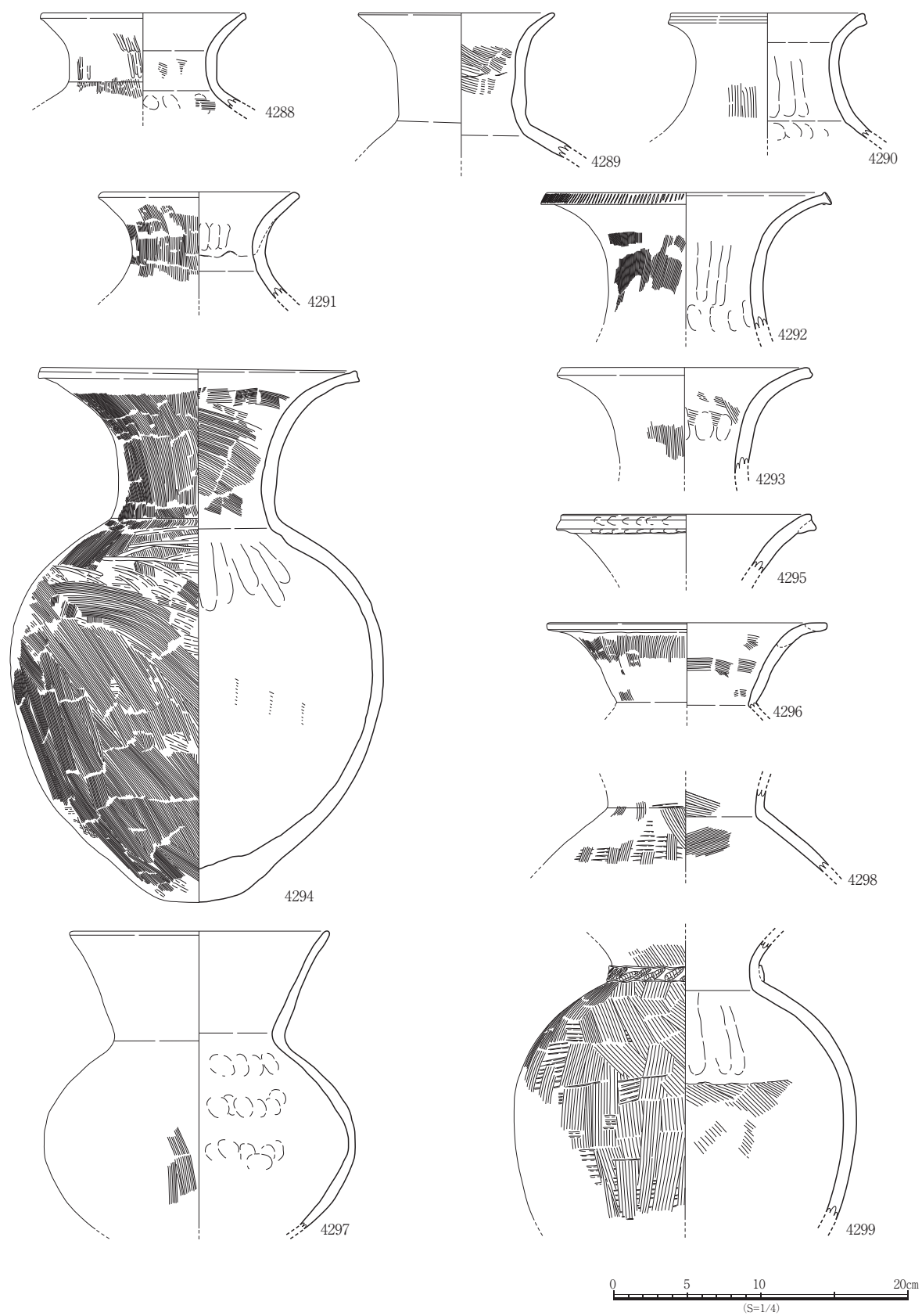


图3-65 SR-6出土遺物実測图1

向く平面となり、口頸部外面には煤が付着する。胎土には、4295が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、4296が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

4297は丸い胴部に外傾する口頸部を有するもので、胎土は精良で、細粒砂から極粗粒砂を若干含み、土師器ともいい得るものである。

4298と4299は胴部から頸部が残るもので、4298は外面にタタキ目を施す。4299は頸部外面基部にハケ状工具で刺突文を施した粘土帯を貼付する。胴部外面はタタキの後にハケ調整を加える。いずれも胎土には、細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4300から4302は壺の底部とみられるもので、いずれも丸底に近くなっている。4300は内面に指ナデ調整の後にナデ調整、外面にタタキを施した後ハケ調整を加える。4301は内面にヘラナデ調整とナデ調整、外面にタタキを施す。4302は内面にヘラ削りの痕が残り、

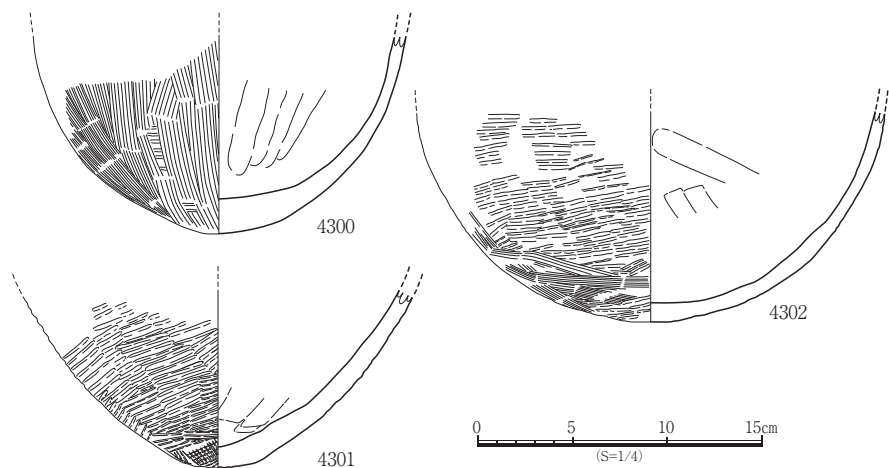


図3-66 SR-6出土遺物実測図2

外面はタタキの後に底部にハケ調整を加える。胎土には、4300が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、4301・4302が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

4303～4350は甕で、口縁部が遺存するものである。4303～4315は、口頸部が膨らみのある胴部から内湾気味に外反ないし外傾するもので、頸部内面は丸みを有する。4303は、口縁端部を丸く仕上げ、胴部外面はタタキの後に中胴部以下にハケ調整を加える。4304は口縁部を内傾接合で成形し、口縁端部を丸く仕上げる。胴部内面は指押えとナデ調整を施し、外面は摩耗する。外面は口唇部から煤が付着する。4305は口縁端部に丸みを有し、胴部外面に粗いタタキ目が残る。口縁部外面に煤が僅かに付着する。4306は外傾接合で成形し、口縁端部を丸く仕上げ、胴部外面にタタキ目が残る。4307は、口縁部が外傾し、端部は丸く仕上げ、胴部内面にはヘラ削りで下胴部に焦げ目が付着し、外面にはタタキを施す。頸部から胴部外面には煤が付着する。4308は、底部が小さな平底で、口頸部は肩の張る胴部から短く外反し、端部を僅かに肥厚する。胴部内面にヘラ削り、底部内面にナデ調整、外面にタタキの後に上胴部から下胴部に粗目のハケ調整を施し、タタキ目を消す。4309はほぼ完存し、底部は丸底に近く、口頸部は中胴部に最大径を有する胴部から外反し、端部は内傾する平面となり、外面にはタタキ目残り、煤が付着する。4310もほぼ完存し、底部は先尖となり、胴部は中位に最大径を有し、口頸部は外傾し、端部は丸みがある。胴部内面は下胴部にヘラ削りの後に中胴部から上にハケ調整を施し、さらに指ナデ調整を加える。外面全面にタタキを施した後で下胴部以下にハケ調整を加える。煤が口縁部外面から中胴部に付着する。4311は、胴部最大径が中位よりやや上にあり、口頸部は外傾し、端部は丸い。胴部内面にはヘラ削り、外面は細かなタテ方向のハケ調整を施す。煤が口縁部から中胴部外面に付着する。4312は、底部が小さな平底となり、胴部は丸く、中位に最大径があり、

4. IV区 (1) 自然流路

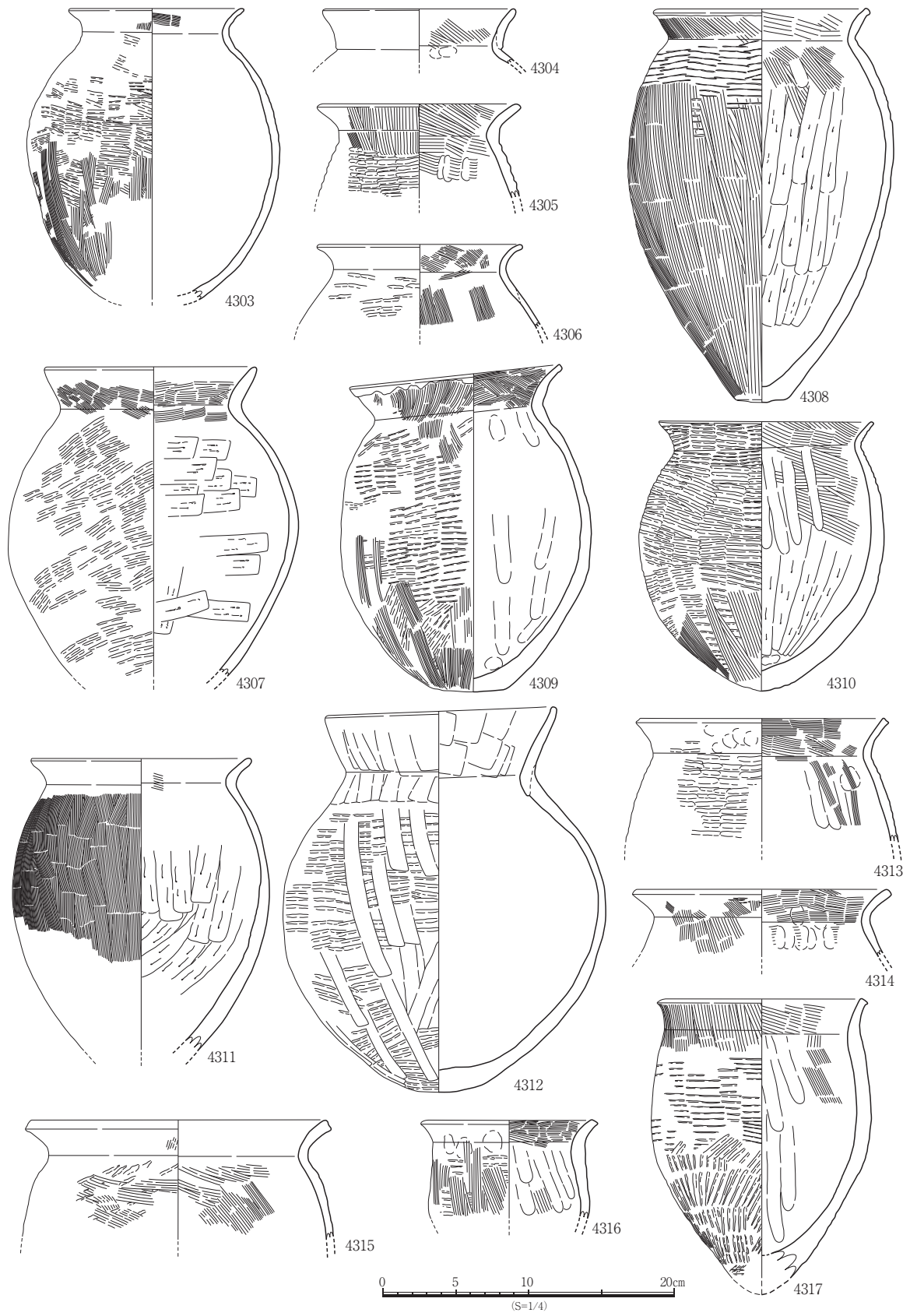


图3-67 SR-6出土遗物实测图3

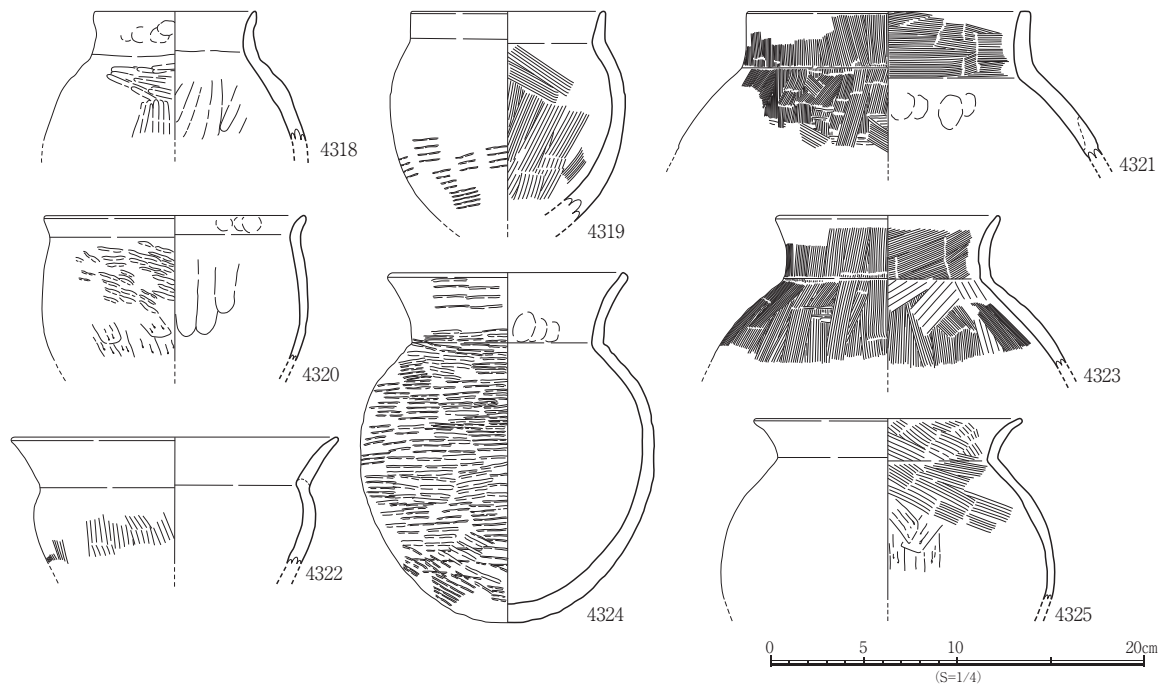


図3-68 SR-6出土遺物実測図4

口頸部は外傾接合で成形され、外傾し端部は丸い。頸部内外面ともヘラナデ調整が施され、胴部外面はタタキの後に放射線状にヘラナデ調整を加える。4313は、口頸部が外傾し、端部は内傾する凹面となり、胴部内面には指ナデ調整とナデ調整の後に部分的にハケ調整、外面にはタタキを施す。4314は、口頸部が外反し、端部は内傾する平面となる。胴部内面はハケ調整とナデ調整、外面は頸部からハケ調整を施し、口縁部外面にタタキ目が僅かに残る。4315は、口頸部が外反し、端部は内傾する凹面となり、外面にはタタキの後にハケ調整を加える。煤が口縁部外面から肩部に付着する。胎土には、細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を若干含むもの(4304)と少し含むもの(4305・4306・4315)もみられたが、多くが細粒砂から極粗粒砂・極細粒中礫を多く含むものと比較的多く含むものであった。

4316と4317は、内湾気味に真上に立ち上がる胴部に短い口頸部が付くものである。4316は、口頸部が外反し、端部は内傾する平面となり、胴部内面はハケ調整の後に指ナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整を施す。煤が口縁部外面から胴部にかけて付着する。4317は、底部が先尖となり、中胴部のやや上に最大径を有する胴部から口頸部がやや外反し、端部は内傾する平面となる。胴部内面はハケ調整の後に指ナデ調整とナデ調整、外面には中胴部を境に方向を異にするタタキを施す。外面中胴部に黒斑、下胴部に煤が付着する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4318～4321は、口頸部が短いもので、4318は丸みのある胴部に短い外反気味の口頸部が付き、端部は細い。胴部外面にはヘラ磨きを施す。4319は丸みのある胴部に短く外傾する口頸部が付き、端部は丸い。胴部外面下半にタタキ目が僅かに残る。4320はやや膨らみのある胴部に短く外傾する口頸部が付き、端部は丸い。胴部外面はタタキの後に下半にヘラ削りを施す。4321は外傾接合で成形されており、丸みのある胴部に短く直立する口頸部が付き、端部は上方を向く平面となる。胴部外面にはタタキの後に頸部からハケ調整を施す。煤が口縁部外面から胴部に付着する。胎土は細粒砂から極

粗粒砂を若干含むもの(4319), 少し含むもの(4318), 比較的多く含むもの(4320・4321)であった。

4322は最大径が口縁部にあるもので、鉢とも考えられるが、外面には煤が付着する。胴部最大径は上胴部にあり、頸部は屈曲して延び、口縁部でさらに外傾し、端部は丸い。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

4323～4325は頸部の傾きと口縁部の傾きが異なるものである。4323は、頸部が丸い胴部から直立し、口縁部で外傾し、端部を丸く仕上げる。胴部は内面に粗目のハケ調整もみられ、外面にはタタキ目が残る。4324は小さな平底の底部となるもので、胴部は丸く、頸部は外傾し、口縁部でさらに外傾する。口縁端部は内傾する平面となる。外面には胴部を中心に口縁部からタタキを施し、口縁部のタタキ目はヨコナデ調整でスリ消す。外面には煤が付着する。4325は丸い胴部に外傾する頸部とさらに外傾する口縁部がつくもので、胴部内面中胴部にヘラ削りを施した後に口頸部から肩部にかけてハケ調整を加える。胴部外面はナデ調整を施す。胎土には、4323が細粒砂から極粗粒砂を少し、4324が細粒砂から極細粒中礫を若干、4325が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4326～4340は口頸部が胴部から屈曲するもので、口頸部はくの字形をなす。4326は、口頸部が外傾し、端部は内傾する平面となり、外面一面にタタキ目残り、煤が付着する。4327は、口頸部がやや外反し、端部は内傾する平面となり、胴部外面を中心にタタキ目残り、煤が肩部を除く外面に付着する。4328は、口頸部が大きく外傾し、端部は内傾する平面となり、胴部外面はタタキの後に中胴部以下にハケ調整を加える。4329は、口頸部が外反し、端部は内傾する平面となり、口唇部から口頸部外面はハケ調整の後にヨコナデ調整を加え、胴部外面はタタキを施す。煤が胴部外面に付着する。4330は、口縁部が外傾し、頸部から胴部外面にタタキ目残り。煤が口頸部外面に付着する。4331は、口頸部が外反し、端部は丸くなり、外面一面にタタキ目残り。煤が口頸部外面に付着する。4332は、口頸部が外傾し、胴部外面にタタキ目残り。黒斑が肩部外面に残り、煤が中胴部外面に付着する。4333は、口頸部が外傾し、端部は内傾する平面となる。胴部は内面にハケ調整の後にナデ調整を加え、口縁部から胴部外面にタタキを施す。4334は、口頸部が外傾し、端部は内傾する凹面となり、倒卵形の胴部外面にタタキを施し、肩部と下胴部外面にハケ調整を加える。4335は、口頸部が外反し、端部は丸くなり、倒卵形の胴部外面はタタキを施した後に中胴部以下にハケ調整を加える。煤が口縁部から中胴部外面に付着する。4336は、口頸部は外傾し、端部は内傾する平面となり、底部は小さな平底で、倒卵形の胴部内面は指ナデ調整とナデ調整、外面はタタキの後に中胴部以下にハケ調整を加える。煤が上胴部外面に付着する。4337は、口頸部が外反し、端部は内傾する凹面となり、外面にはタタキ目残り。煤が口頸部外面に付着する。4338は、口頸部が外傾し、端部は内傾する小さな平面となり、丸い胴部内面にはヘラ削り、外面にはタタキ目残り。煤が肩部外面以外に付着する。4339は、口頸部が外反し、端部は丸くなり、胴部は倒卵形をなすものとみられる。煤が肩部外面基部に付着する。4340は、口頸部が外傾し、端部は丸くなり、胴部は倒卵形をなすものとみられる。胴部外面にタタキを施した後で、ハケ調整を口縁部から加え、さらに口頸部にはヨコナデ調整を行う。煤が口縁部から中胴部外面に付着する。胎土には、細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫・細粒中礫を少し含むもの(4327～4332・4335)と比較的多く含むもの(4326・4333・4334・4336～4340)があった。

4341～4350は搬入品とみられるもので、口頸部は概ねくの字形を呈する。4341は、口縁端部上端を僅かに拡張し、端部は内傾する平面となり、丸い胴部外面には細かいハケ目残り。煤が胴部外面に付着する。4342も口縁端部上端を僅かに拡張し、端部は内傾する平面となり、丸みのある胴部内面

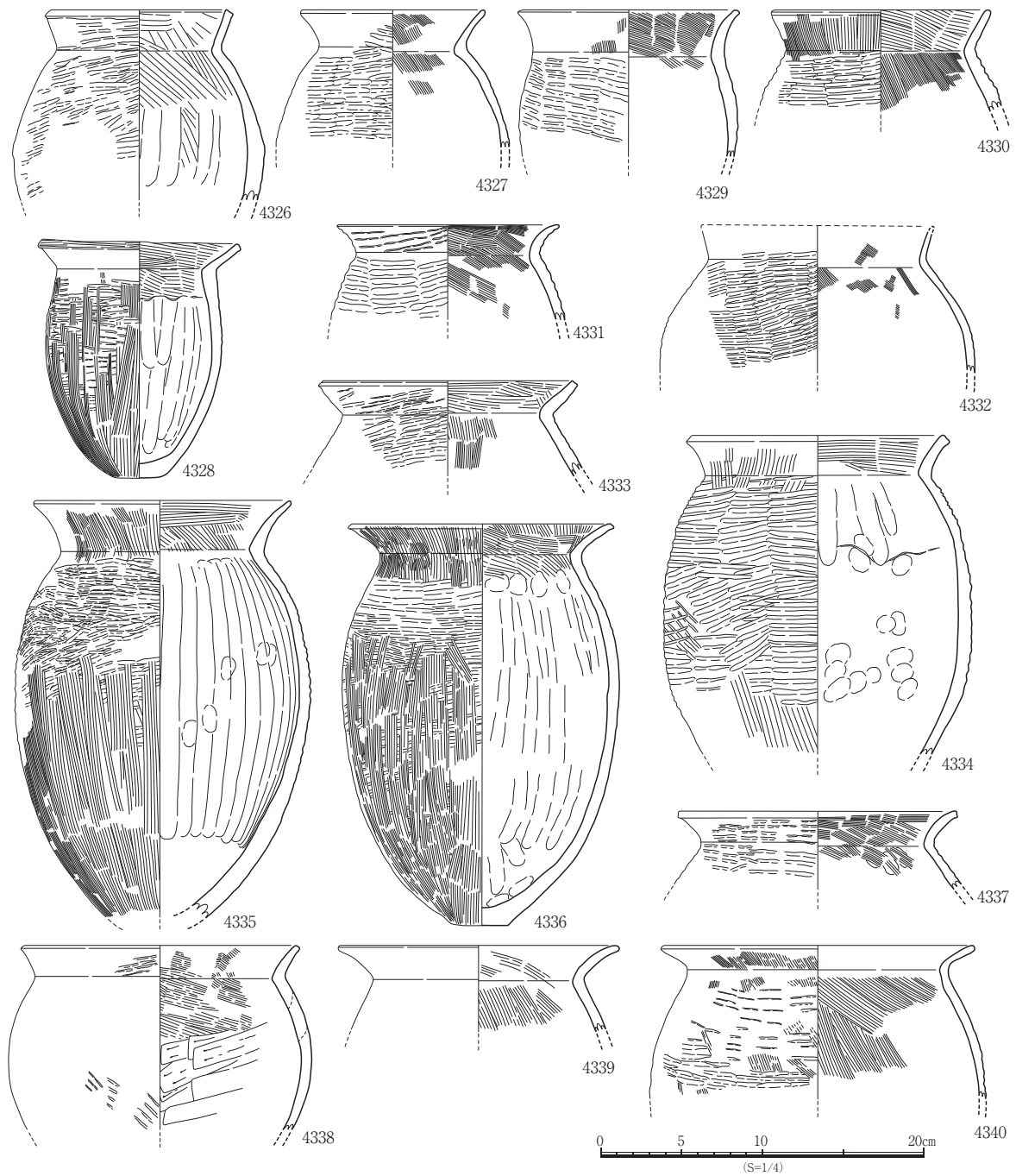


図3-69 SR-6出土遺物実測図5

下半にはヘラ削り，外面にはハケ調整を施す。煤が口縁部から胴部外面一面に付着する。4343は，口縁端部が丸くなり，器面にはハケ目が残る。煤が外面に付着する。4344は口縁端部下端を拡張し，端部は内傾する平面となり，丸い胴部内面はナデ調整，外面はタタキの後にナデ調整を加える。煤が外面に付着する。4345は，口縁端部が丸くなり，丸い胴部外面にはヘラナデ調整とタタキを施す。煤が口縁部から胴部外面に付着する。4346も口縁端部は丸くなり，丸い胴部内面にはヘラ削り，外面にはハケ調整を施す。煤が口縁部から中胴部外面にかけて付着する。4347は口縁端部を上方につまみ上げ，丸い胴部内面にはヘラ削りと指ナデ調整，外面には細かなハケ調整を施す。煤が中胴部外面を中

4. IV区 (1) 自然流路

心に付着する。4348は口縁端部を内側に肥厚し、丸く仕上げ、丸い胴部内面一面にヘラ削り、外面には細かなハケ調整を施す。煤が外面に付着する。4349も口縁端部を内側に肥厚し、端部は内傾する平面となり、丸い胴部内面下半にヘラ削り、外面には細かなハケ調整を施す。煤が肩部を除く外面に付着する。4350は、口縁部が頸部からさらに外傾し、端部は丸くなり、丸みのある胴部内面は上半に指ナデ調整とナデ調整、下半にハケ調整の後にヘラ削りを施し、外面下半にタタキを施した後にヘラナデ調整を加える。煤が外面中胴部以下に付着する。胎土には、細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂・極細粒中礫・細粒中礫を若干含むもの(4343)、少し含むもの(4341・4342・4344・4349・4350)、比較的多く含むもの(4345・4346・4348)、多く含むもの(4347)がある。

4351～4354は胴部が残存するものである。4351の胴部は丸く、外面にはタタキ目が一面に残る。4352の胴部は丸みがあり、外面にはタタキ目が残る。4353の胴部は丸く、外面にはタタキの後にハケ調整を加える。4354は、底部が小さな平底、胴部最大径が中位よりやや上にあるもので、内面上半には指ナデ調整の後にハケ調整、下半にはヘラ削りの後にヘラナデ調整、外面にはタタキの後にヘラ磨きを施す。煤が胴部外面下半に付着する。胎土には、4351・4352が細粒砂から極粗粒砂を少し含み、4353・4354が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4355～4372は甕の底部とみられるもので、平底と丸底のものがみられる。調整は、内面がナデ調整、指ナデ調整およびハケ調整を施すものが多く、ヘラナデ調整(4362)、ヘラ削り(4370)を施すものもみられ、外面がハケ調整、ナデ調整およびタタキを施すものが多く、ヘラナデ調整(4362・4368)を施すものもみられる。煤が、4355、4356、4358、4360～4363、4367～4370、4372の外面に付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂ないし極細粒中礫を少し含むもの(4363・4367・4369・4370・4372)と多く含むもの(4365)もみられたが、他は細粒砂から粗粒砂・極粗粒砂・極細粒中礫・細粒中礫を比較的多く含むものであった。

4373は甕で、丸みのある底部中央に外側から径7mmの円孔を穿ち、胴部は外上方に立ち上がり、口縁部は上方を向き、端部を丸く仕上げる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4374～4406は鉢である。底部の形態は平底と丸底があり、器高指数によってさらに細分される。また、口縁部が体部からそのまま立ち上がるもの(4374～4404)と屈曲するもの(4405・4406)がある。後者は所謂小形丸底埴の一群である。4374～4383は平底のもので、4374と4375は器高指数が40未満となり、4374は口縁端部を丸く仕上げ、内面にはヘラ磨きを施す。4375は、口縁端部が内傾する凹面となり、内面にハケ調整を施す。この端部の形状は、口縁部外面に貼付した粘土帯と口縁部とに段差があった場合、ヨコナデ調整の後もその段差が凹面として残ったもので、4396などにもその痕跡がみられる。胎土には、4374が細粒砂から極粗粒砂を若干含み、4375が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4376～4378は器高指数が40以上50未満のもので、4376は底部内外面に指押えの痕が残る。4377は、口縁端部が丸く、内面にヘラナデ調整、外面にはタタキを施す。4378は、底部がボタン状を呈するもので、口縁端部は内傾する凹面となり、外面一面にタタキ目が残る。胎土には、4376が細粒砂から粗粒砂を少し、4377が細粒砂から極粗粒砂を多く、4378が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4379～4381は器高指数が50以上のもので、底部は深い。4379は口縁端部を丸く仕上げ、外面にはハケ調整を施す。4380は外面にタタキ目が残るもので、焼成後に口縁部に径4mmの円孔を1ヵ所穿つ。

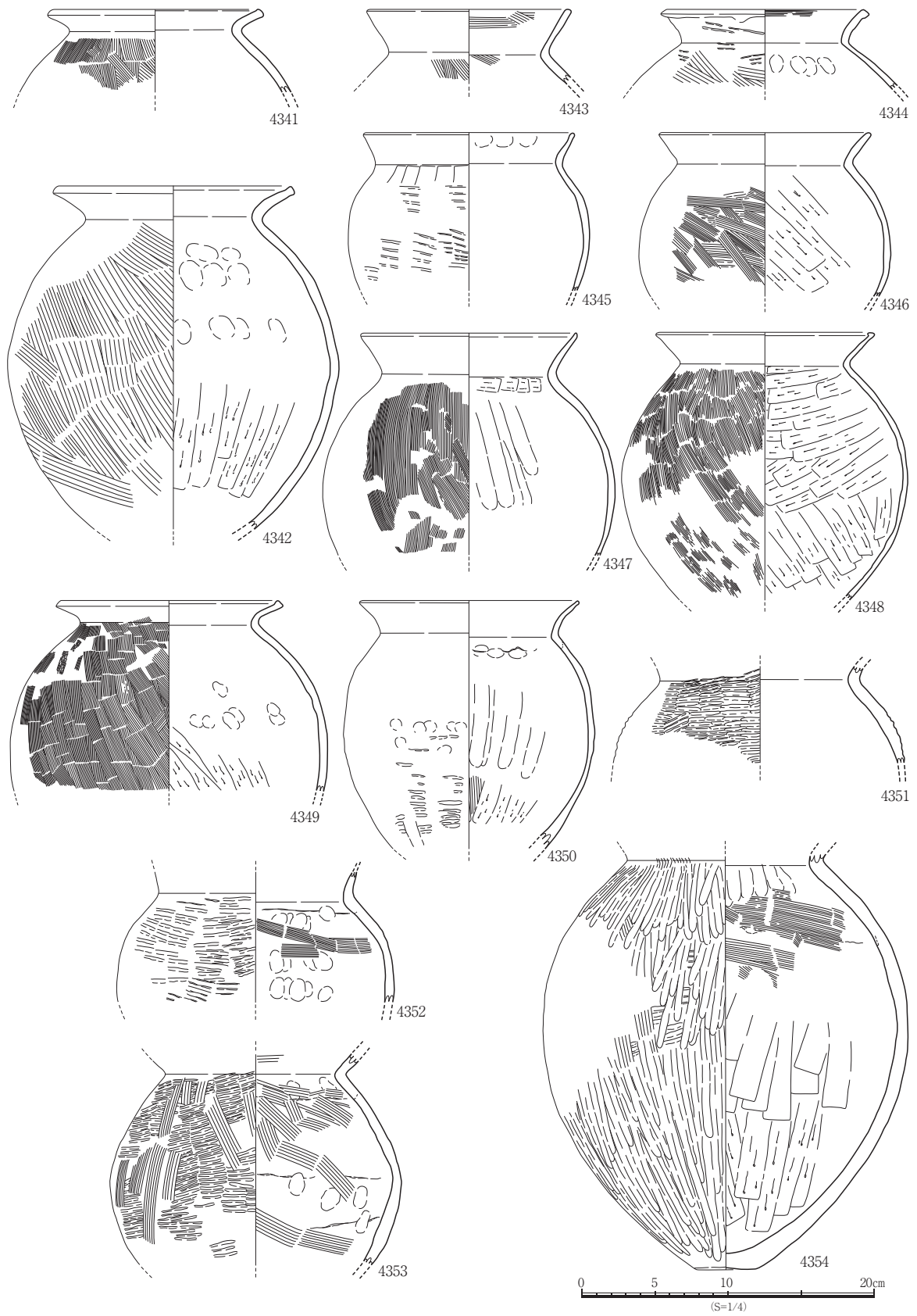


图3-70 SR-6出土遺物実測図6

4. IV区 (1) 自然流路

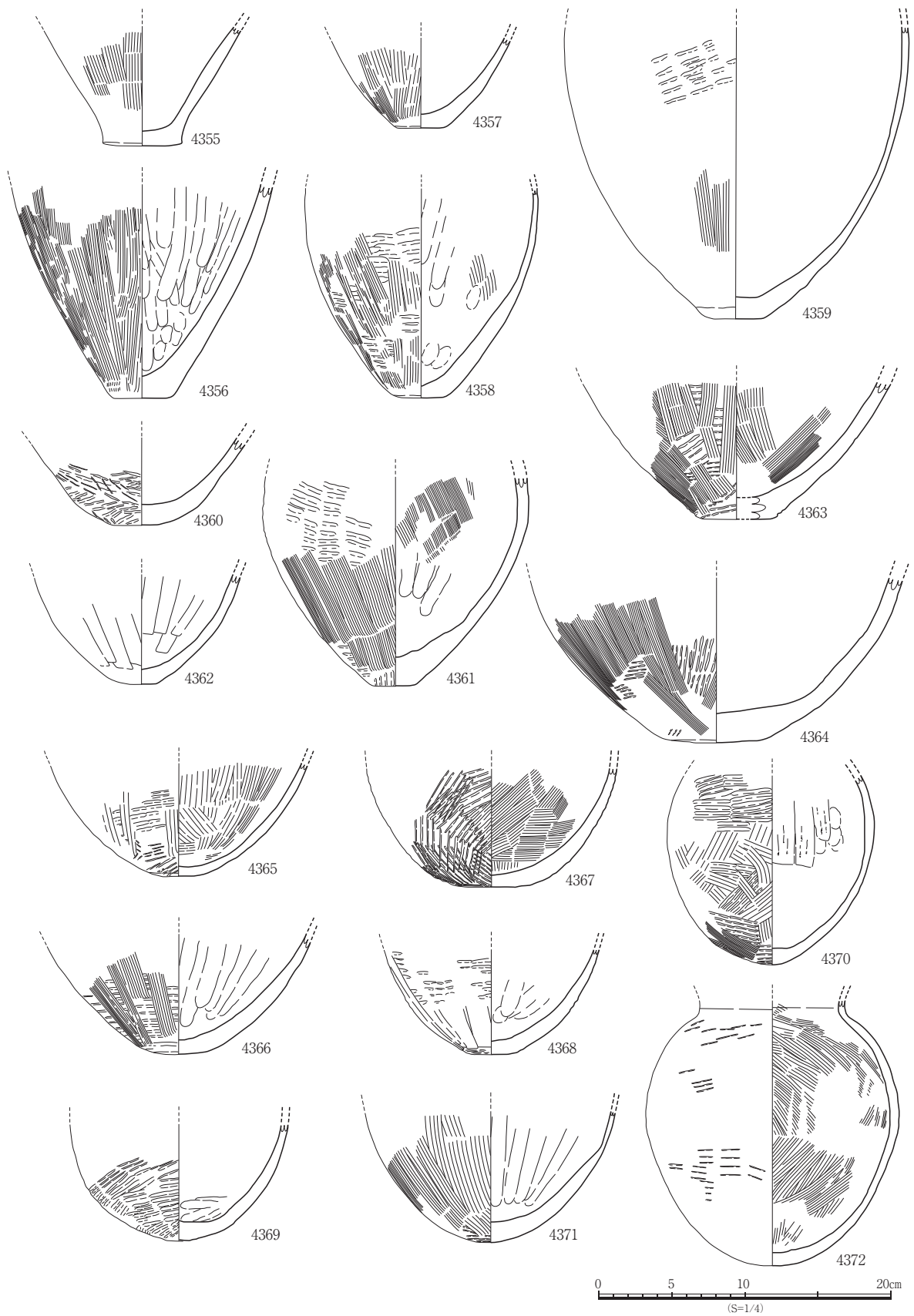


图3-71 SR-6出土遺物実測図7

4381は大型の鉢で、口縁端部は小さな玉縁状となり、外面にはタタキの後にハケ調整を施す。胎土には、4379が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く、4380が細粒砂から極粗粒砂を若干、4381が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4382と4383は、底部が遺存するもので、4382の外面にはタタキ、4383の内面にはハケ調整が施される。胎土には、4382が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、4383が細粒砂から粗粒砂を少し含んでいた。

4384と4385は、底部が高台状をなすもので、4384は底部外端部を高台状につまみ出す。口縁端部は丸く仕上げ、外面にタタキ目が残る。4385は大型の鉢で、外底面に粘土紐を貼付し、高台状とする。口縁端部は外傾する平面となる。胎土には、4384が細粒砂から粗粒砂を少し、4385が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含んでいた。

4386はハの字形に開く脚台が付くもので、体部は内湾気味に上がり、口縁端部は細い。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4387と4388は器高指数が30以下で、皿と表現し得るものである。4387は平底で、口縁端部は丸い。4388は丸底で、口縁端部は細く、内面にはヘラ磨きを施す。胎土には、4387が細粒砂から極粗粒砂を少し、4388が細粒砂から極粗粒砂を若干含んでいた。

4389～4404は丸底のもので、4389～4391は器高指数が40未満となり、口縁端部はいずれも丸い。4389は器面にヘラ磨きを施す。4390は内底面に煤が僅かに付着し、底部外面にヘラ削りを施す。4391は内面にハケ調整の後に暗文風のヘラ磨きを行った後に口縁部にヨコナデ調整を施す。外面にはタタキの後にヘラナデ調整を施し、さらにナデ調整を加える。外面には煤が付着する。胎土には、4389が細粒砂から極粗粒砂を少し、4390が細粒砂から極細粒中礫を少し、4391が細粒砂から粗粒砂

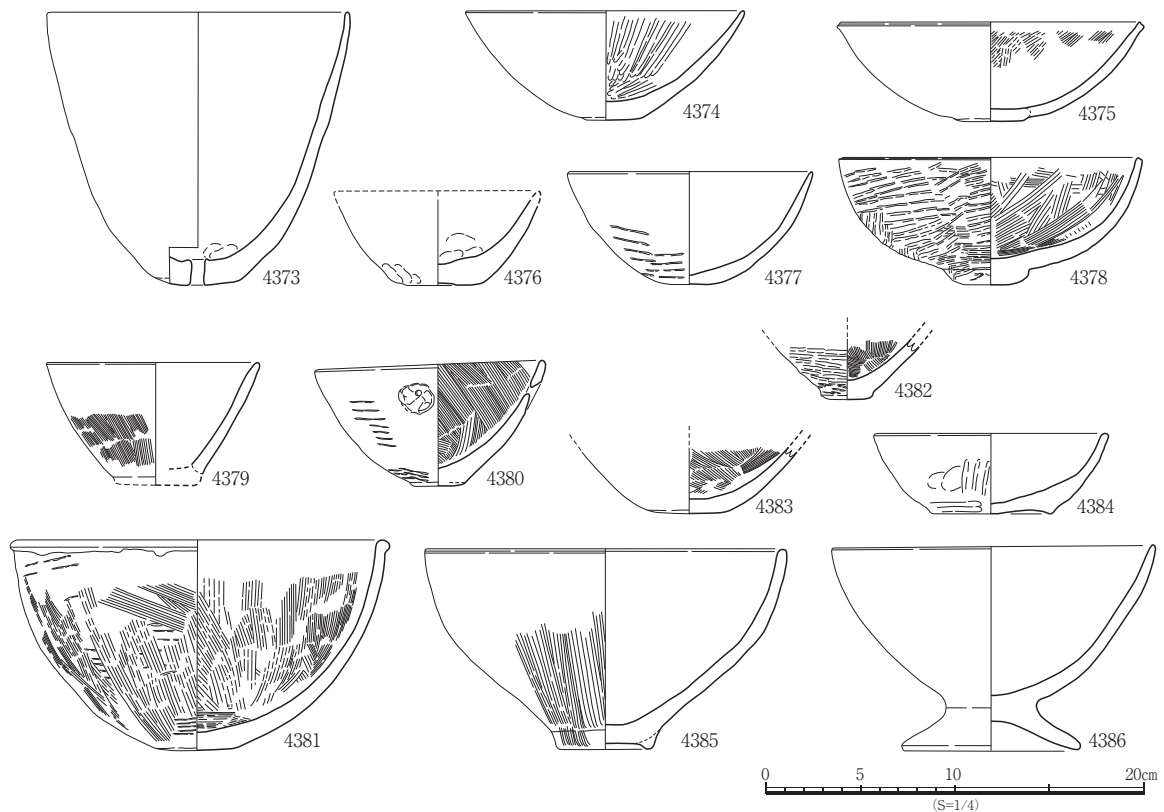


図3-72 SR-6出土遺物実測図8

4. IV区 (1) 自然流路

を少し含んでいた。

4392～4397は器高指数が40以上50未満のもので、口縁端部を丸く仕上げるもの(4392・4393・4395)と内傾する凹面となるもの(4394・4396・4397)がある。4392は内面にヘラナデ調整、外面にタタキを施し、内底面には焦げ目が付着する。4393は内面にハケ調整の後にナデ調整、外面下半にヘラ削りを施した後にナデ調整を加え、さらに上半にヘラ磨きを施す。4394は内面にハケ調整の後にナデ調整、外面にナデ調整を施す。口唇部は口縁外面に粘土帯を貼付する際の指の押圧により沈線状となる。4395も4394と同じ調整を行う。4396は、口縁部が波状をなすもので、内面にはヘラナデ調整とナデ調整、外面にはタタキを施す。口唇部の作りは4394と同じである。4397は中型の鉢で、内外面にはハケ目が残る。いずれも胎土には細粒砂から中粒砂ないし極粗粒砂を少し含んでいた。

4398～4402は器高指数が50以上のもので、底部は深く、口縁端部は4398が内傾する凹面となる以外はいずれも丸い。4398は内面にハケ調整、底部外面にタタキを施す。4399は口縁部外面に成形時のしぼり皺が残る。4400は内面にハケ調整の後にナデ調整、外面にハケ調整の後にヘラ磨きを加える。4401は底部を欠くもので、外面にはタタキ目が残る。4402は口縁部を欠くもので、内外面にハケ

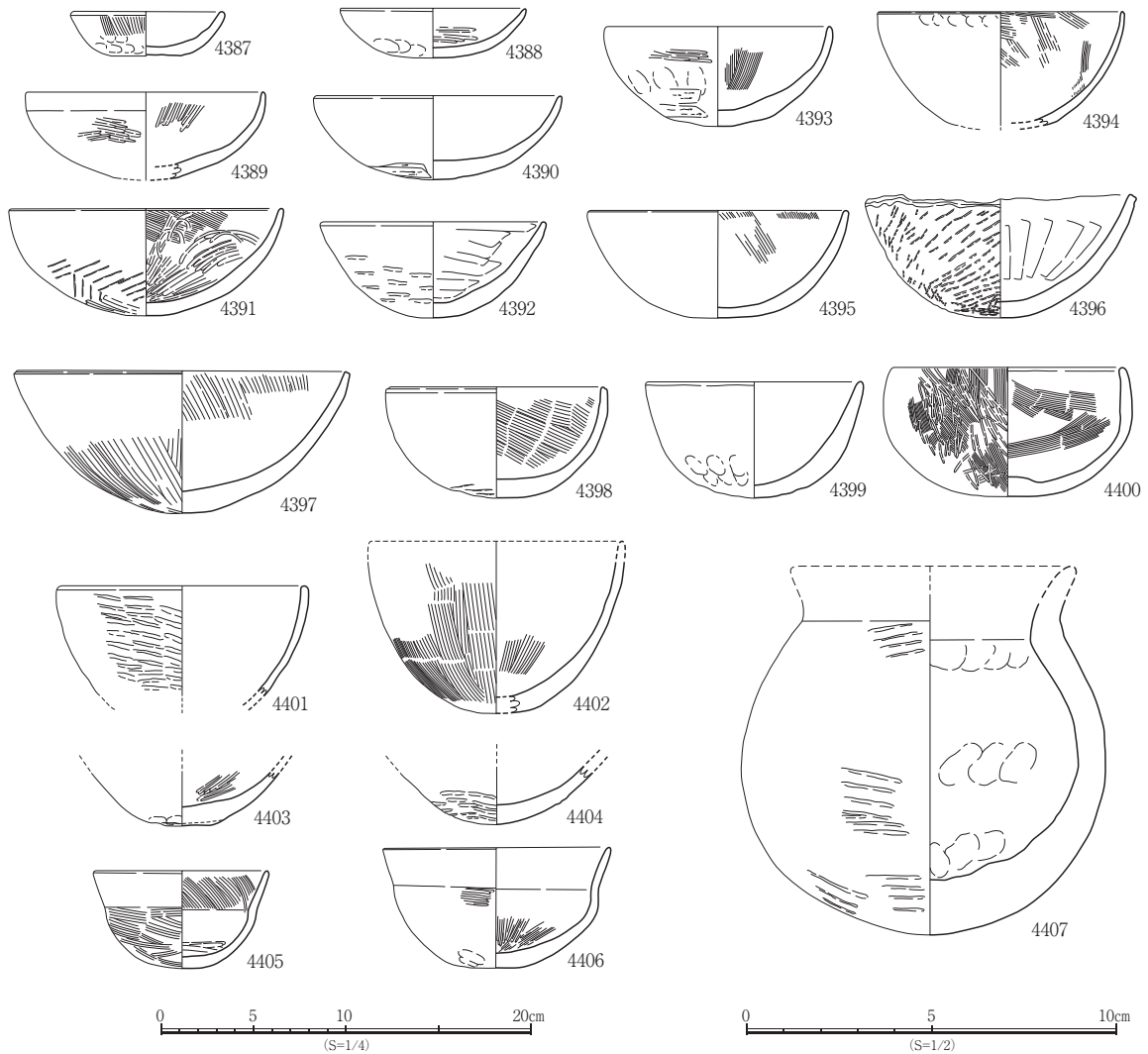


図3-73 SR-6出土遺物実測図9

目が残る。胎土には、4398・4400が細粒砂から粗粒砂を少し、4399が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、4401・4402が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4403と4404は底部が残存するもので、4403は内面にヘラ磨き、4404が外面にタタキ目が残る。胎土には、4403が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、4404が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4405と4406は、体部が丸い底部から内湾して立ち上がり、口縁部が外傾し、端部を丸く仕上げるもので、胎土はいずれも精良である。4405は口縁部内面にハケ調整、内底面にヘラ磨き、体部外面に粗いハケ調整を施す。4406は体部内外面にヘラ磨きを施す。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を若干含んでいた。

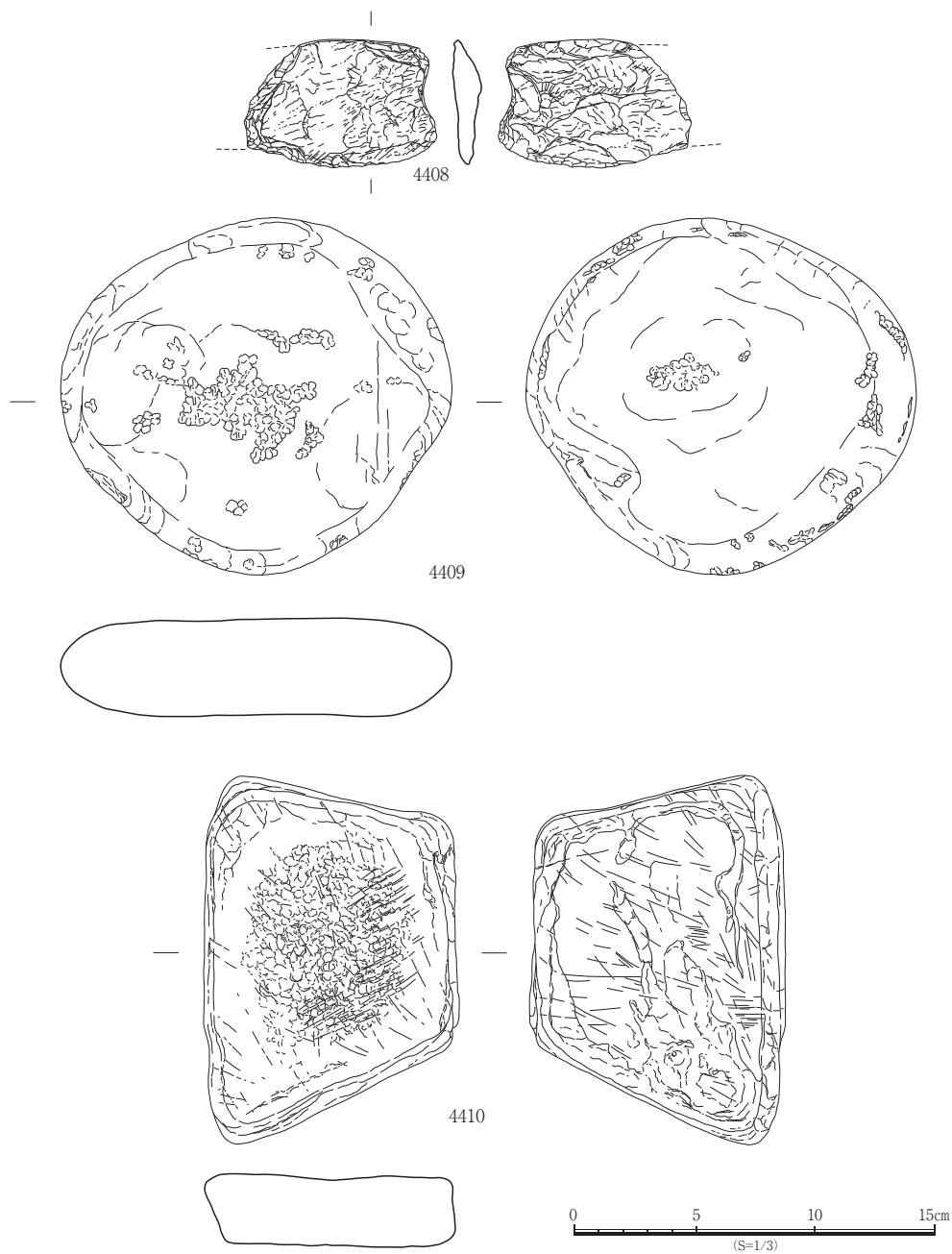


図3-74 SR-6出土遺物実測図10

4407は甕のミニチュアとみられるもので、胴部外面にはタタキ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

石製品(図3-74 4408~4410)

4408は抉りのある石庖丁で、研磨された刃部が一部に残る。4409は扁平な叩石で、両面に弱い敲打痕が残る。4410は扁平な台石で、片面には擦痕と敲打痕、一方の面には擦痕が残る。

木製品(図3-75~86 4411~4465)

4411は掛矢で、扇割り出しによる。身両面に摩滅痕が残り、柄を中心に木瘦せし、木目が目立つ。

4412は直柄平鋏とみられ、半割柀目取りで、後面は矩形突起と方形の柄孔が残り、突起を削り出した際の手斧の痕が突起下端に残る。全体に木瘦せし、木目が目立つ。4413~4416は又鋏で、いずれも半割柀目取りで製作される。4413は小型又鋏で、刃部・軸部とも大半が欠損し、表面は火を受け炭化した部分が多く、全般に木瘦せが著しい。4414はナスビ形の又鋏で、刃部の大半が欠損するも軸部は残存する。表面は摩滅しており、原形を留める部分はほとんどない。4415はナスビ形の三又鋏で、刃部の半分と筥が残存する。全般に木瘦せし原形を留めるところは少ない。4416もナスビ形の三又鋏で、刃部の1本が欠損する。表面は部分的に元の状態を留める部分もみられるが、全般に木瘦せし、虫食いの部分もみられ、木目が目立つ。4417~4419は鋤で、いずれも半割柀目取りで作られており、4419はさらに削り出しを行っている。4417は組み合わせ鋤で、木質の刃部は一部欠損するが、柄軸は遺存する。4418は鉄刃を装着する一本鋤とみられ、柄の軸方向は厚く、身は両端に向かって薄くなる。4419は横刃はこい鋤(田畦切り)とみられ、刃部上端が欠損する。4420は田下駄の部材とみられるもので、半割柀目取りで作られる。中央に柄穴がある台形状の突起があり、両端が細くなっており、足板を固定する横柀の可能性が考えられる。表面には鉋の調整痕が残る。4421~4424は杵で、いずれも芯持ち材で作られた接帯のない堅杵とみられる。4421は、搗き部端が摩滅し平坦となり、握部には削り出し加工痕が残る。全般に木瘦せし、木目が目立つ。4422は、片方の搗き部が残存し、側面に凹みがあり掛矢として転用されたとみられ、全般に木瘦せし木目が目立つ。4423は、握部の大半が欠損し、搗き部端は摩滅し、各所に凹みがみられることから横槌等に転用されたものと考えられる。また、炭化した部分が1ヵ所残る。

4424は約1/2が残存し、搗き部端は摩滅し平らで、握部は手斧等によって切断されており掛矢等に転用されたものと考えられる。4425~4427は横槌である。4425は扇割の削り出しで作られ、断面は放射線状となる。身が残存し、部分的に炭化する。4426も扇割の削り出しで作られ、ほぼ完存する。鉋によるとみられる加工痕が部分的に残るものの全般に木瘦せし、木目が目立つ。4427は芯持ち材で作られており、完存し、握り基部に手

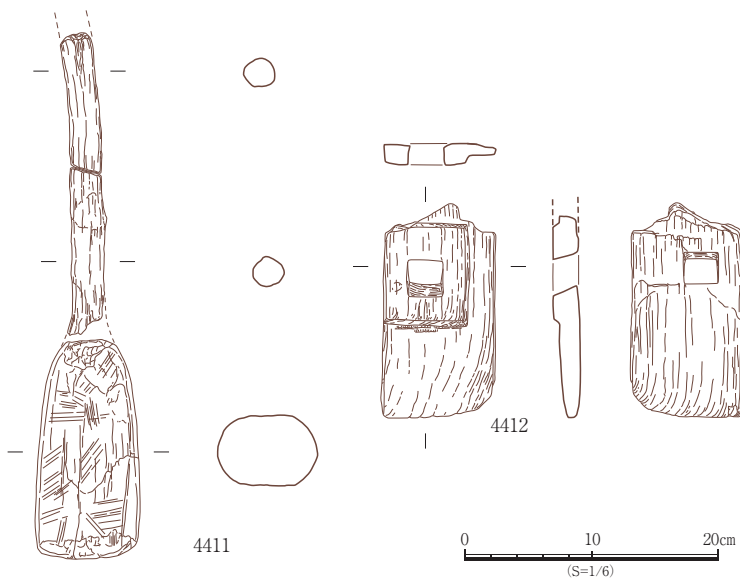


図3-75 SR-5出土木製品実測図

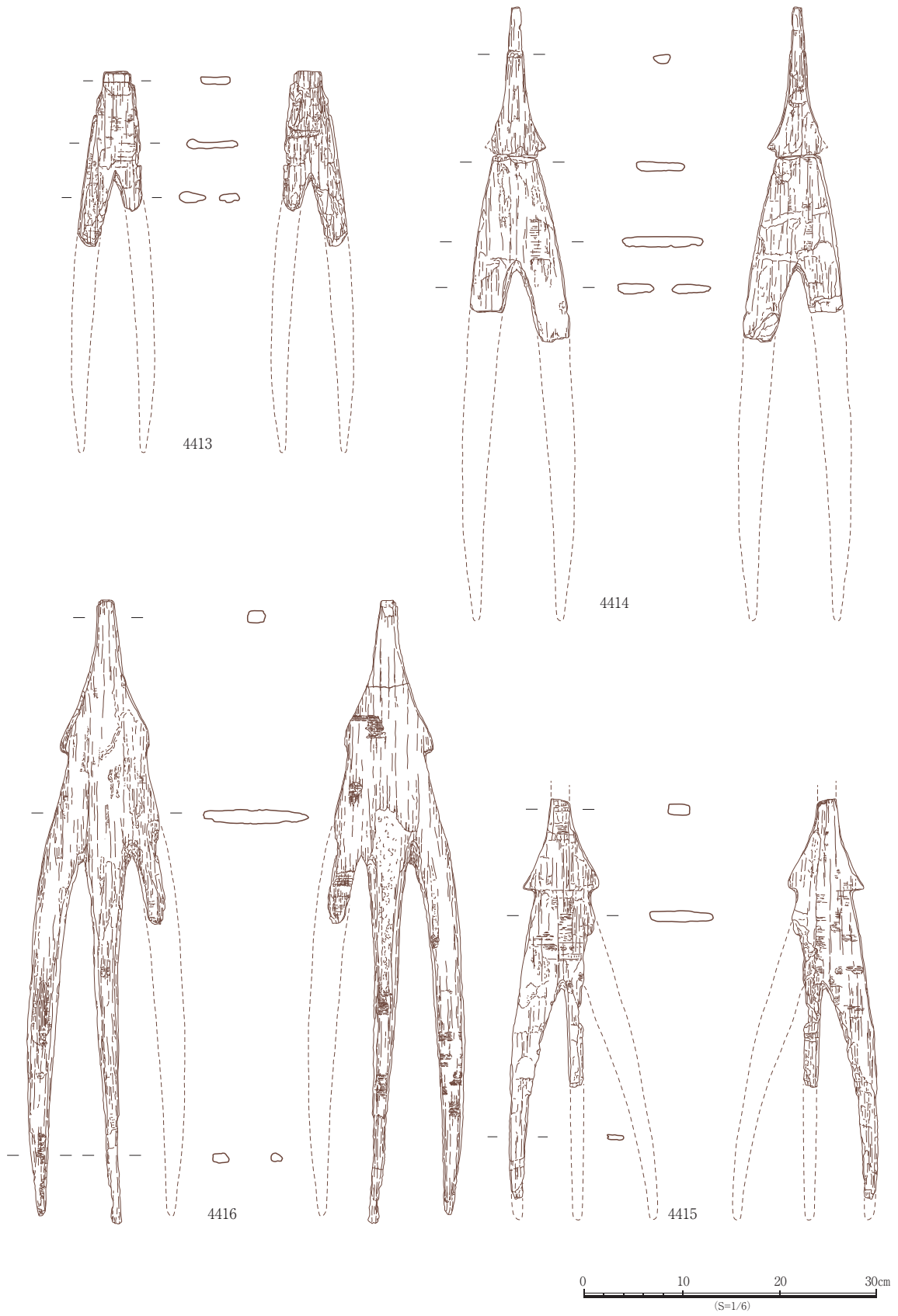


図3-76 SR-6出土木製品実測図1

4. IV区 (1) 自然流路

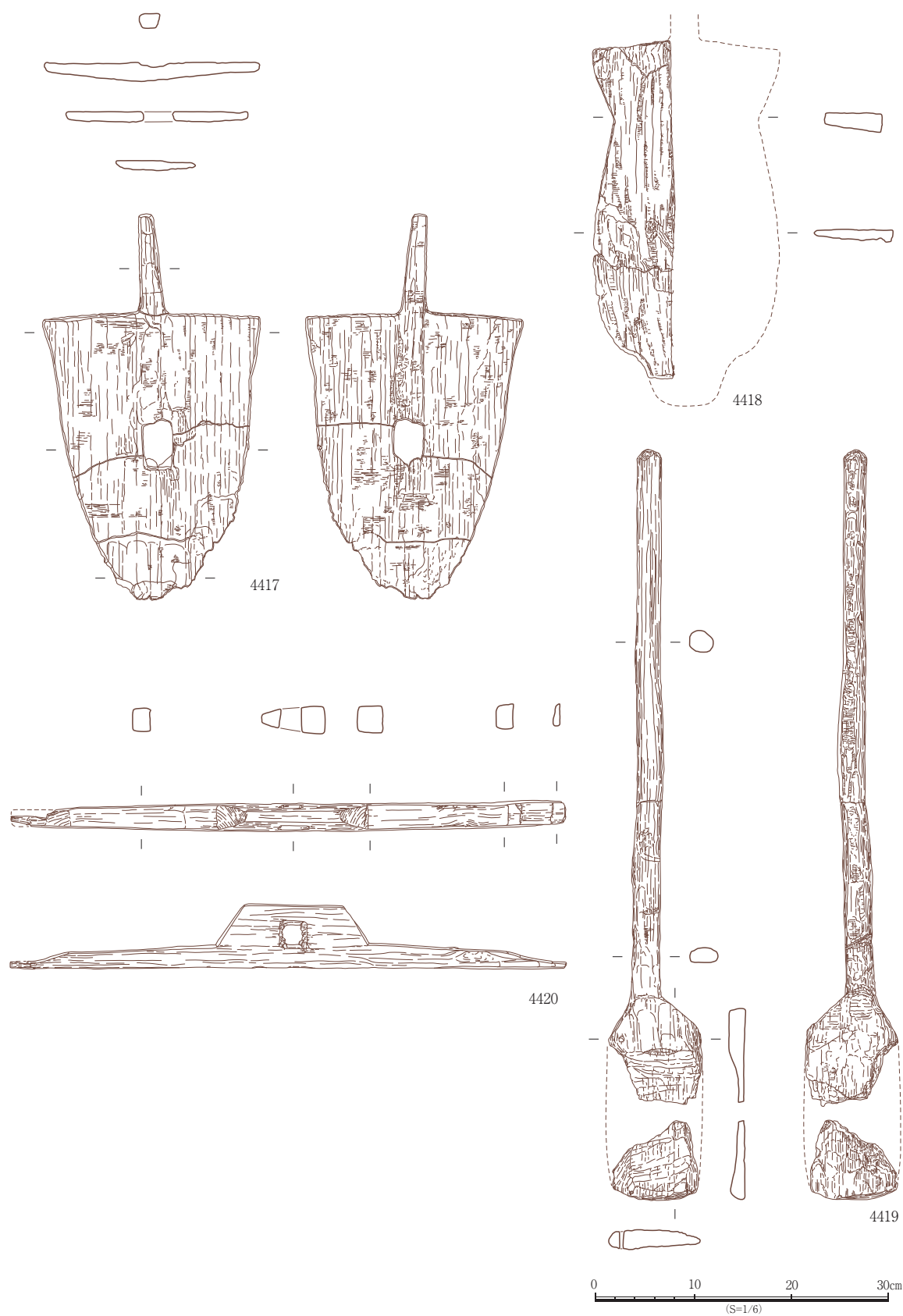


图3-77 SR-6出土木製品実測図2

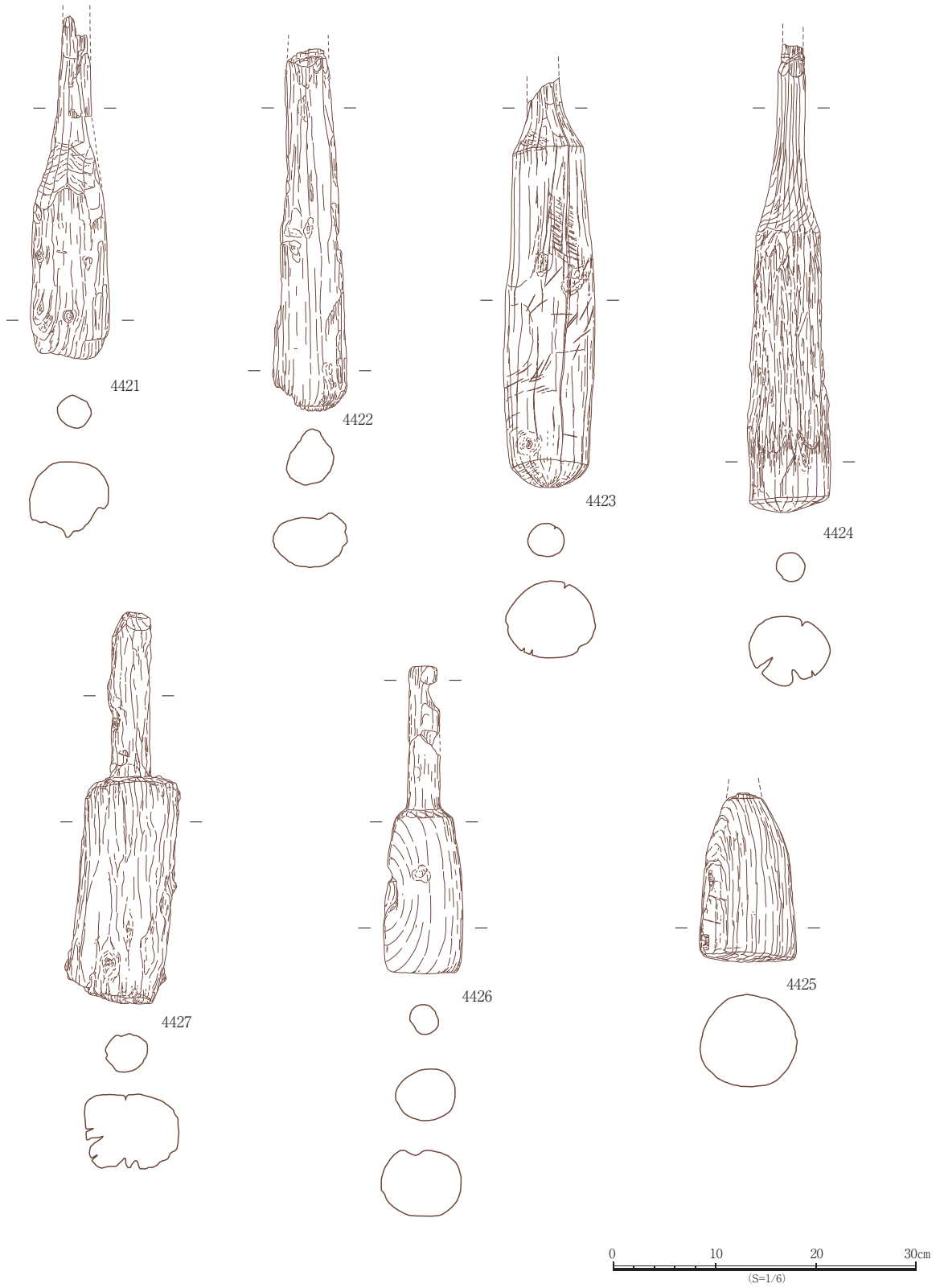


図3-78 SR-5・6出土木製品実測図1

4. IV区 (1) 自然流路

斧によるとみられる加工痕が残る。身の両側面が著しく摩滅することから掛矢に転用されたことも考えられる。

4428～4435は容器またはその部材とみられるものである。4428は半割追柁目となり、木裏から剝り抜いて作られた方形皿で、平らな底と湾曲する側面が残る。全般に木瘦せし、木目が目立つ。4429は扇割木裏削り出しによる槽で、約2/3が残存するとみられる。容器の形状に合わせて両小口を斜めに削り、底は平らで、側面は内湾する。4430は大型の槽か盤の足とみられ、半割剝り抜きで作られ、上端以外は炭化する。4431は大型の槽の一部とみられるもので、扇割柁目取りにより作られる。残

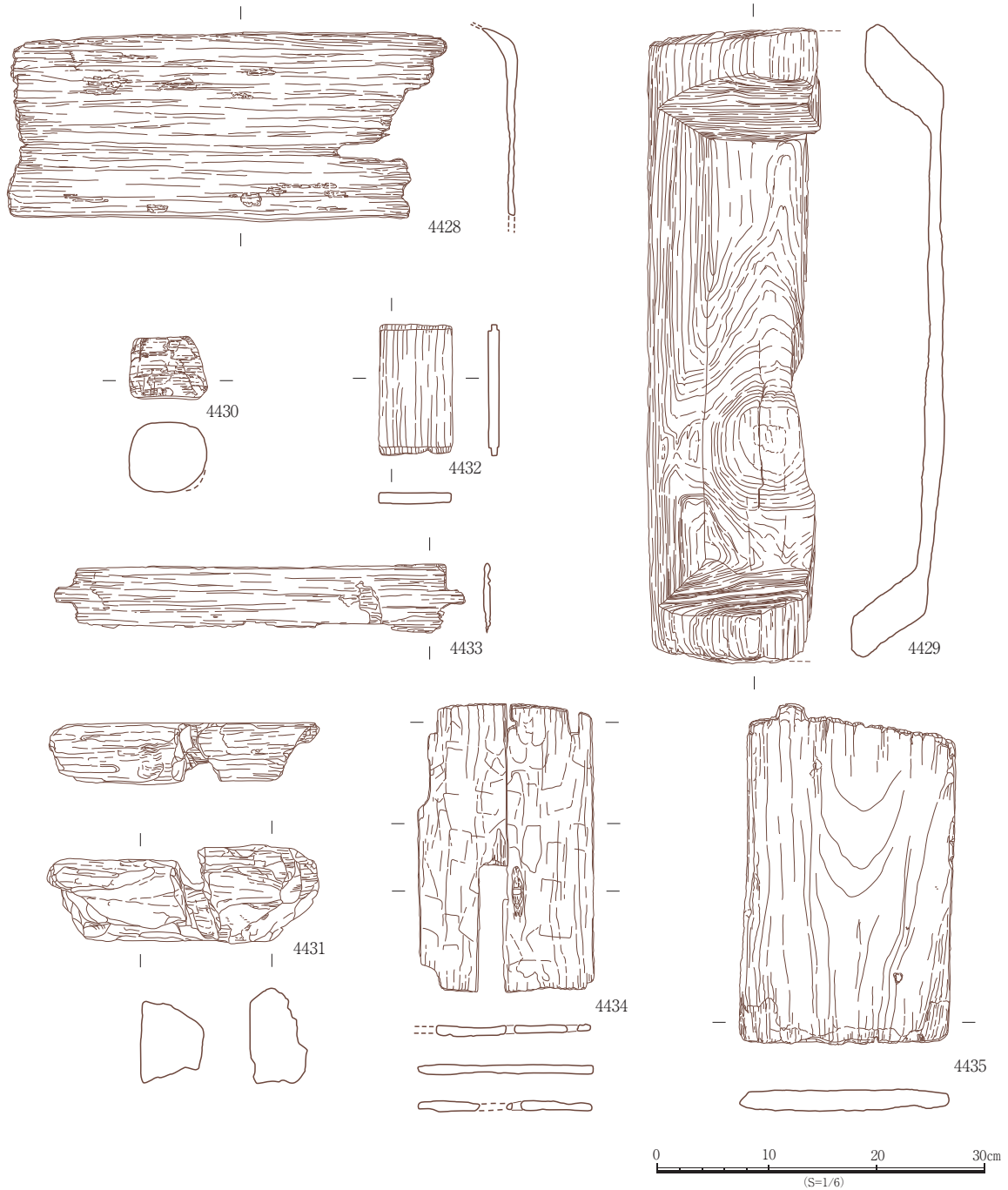


図3-79 SR-6出土木製品実測図3

部には手斧によるとみられる切り込みと切断面が残る。4432は組みもの容器の側板とみられるもので、追柂目取りで作られ、両端には挿入用とみられる突起を作り出す。表面は木瘦せし、木目が目立つ。4433も組みもの容器の側板とみられ、半割柂目取りで作られる。両端に突起を削り出し、側面下端が薄くなる。表面には炭化した部分が残る。4434は容器の底板とみられるもので、扇割の板目取りで作られ、木表は鉋で丁寧に調整が施されるが、木裏は木瘦せし、木目が目立つ。柄穴と抉りが各2カ所残る。4435は容器の底板とみられるもので、半割板目取りで作られ、突起が1カ所残り、両側面が摩滅する。表面は木瘦せし、木目が目立つ。

4436～4438は祭祀具である。4436は鳥形ではないかとみられるもので、板目取りで、胴と尾と考えられる部分が残存する。全般に木瘦せし、木目が目立つ。4437は舟形で、扇割の削り抜きで作られており、船首と船尾が欠損する。各所に加工痕が残るものの全般に木瘦せし、木目が目立つ。4438は威儀具ではないかとみられるもの⁽²⁾で、完存し、全長31.8cmを測る。柂目取りで作られており、各所に鉋によるとみられる加工痕が残る。柄は先端が尖り、長軸中央に長さ8.7cm、幅1～3mm、深さ2～2.5mmの溝を彫り、頂部には径8mmの円孔が空く、径6.8cmの円板を削り出す。円板両側には中央部を

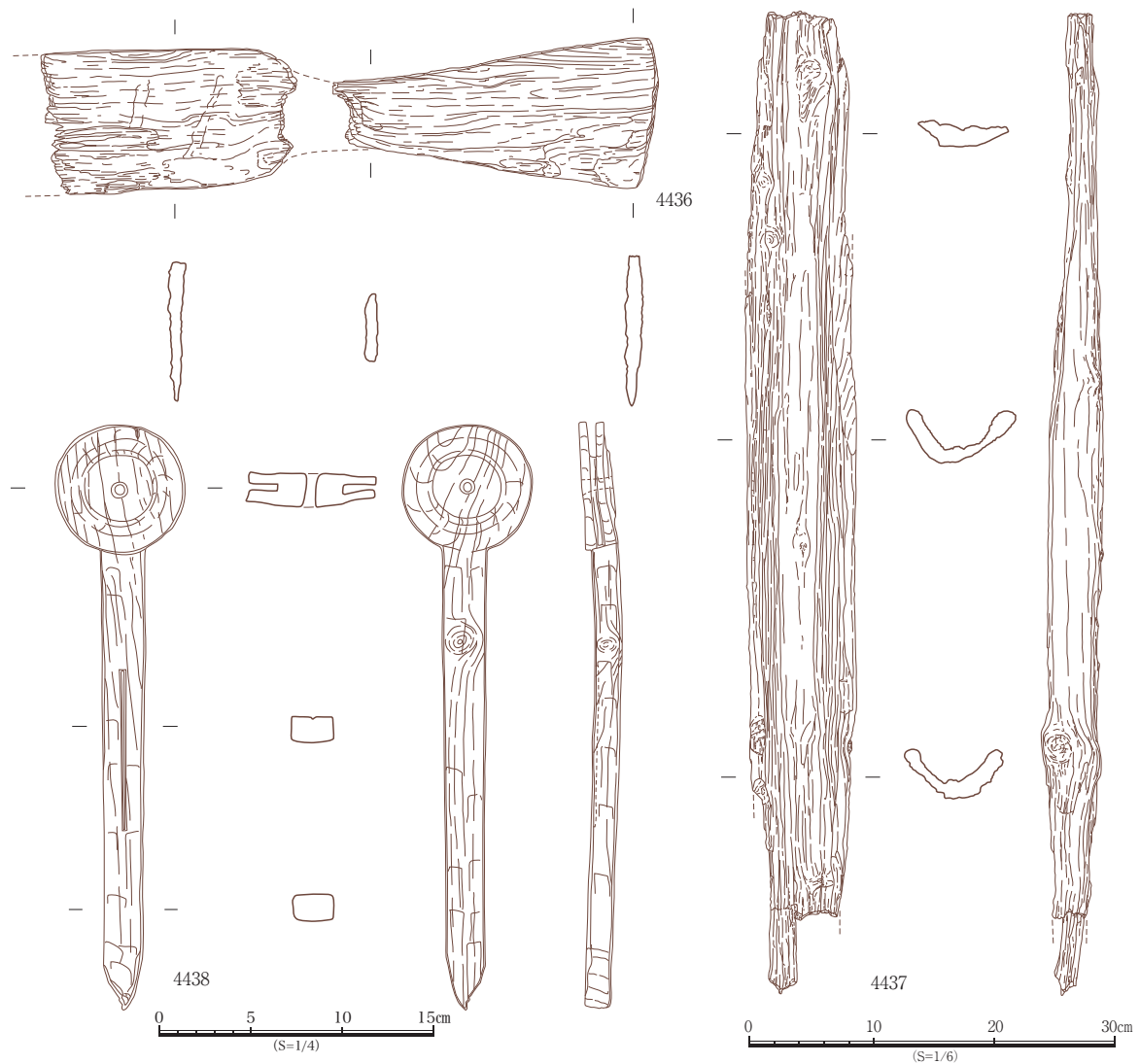


図3-80 SR-5・6出土木製品実測図2

盛り上がらせるように浅い溝を彫り、周縁には深さ2.1cmの溝を掘込む。背面は柄と同一面となるが、前面は、円板部が柄より一段前に迫り出す形となる。

4439～4441は椅子の部材とみられ、3点とも同一個体の可能性がある。4439は椅子の天材とみられ、1部が欠損、半割追柁目取りで作られる。脚を挿入するとみられる柄穴が2カ所残り、木表は鉋で調整され、湾曲する側面は手斧で加工され、木裏は炭化し、木痩せし木目が目立つ。4440は椅子の脚とみられるもので、半割追柁目取りで作られる。端を手斧で削っており、建築部材へ転用したことも考えられる。柄穴と突起が各1カ所残る。片面には鉋によるとみられる調整痕が全面にみられる。4441は4440と同形態で同じ作りとなっており、対になっていたものとみられる。

4442～4462は建築部材である。4442は梯子で、半割木裏削り出しで作られており、足掛けの段が2カ所に残るが、下の段は手斧で削り取っており、何らかに転用されたものとみられる。段の調整痕は比較的よく残るものの全般に木痩せし、特に背面は木目が目立つ。4443は

榭形材とみられるもので、扇割で成形されており、先端が尖っていることから杭に転用されたものと考えられる。端部には抉り、もう一方の端部の近くには柄穴を設ける。側面を中心に鉋と手斧の加工痕が残る。4444は方形隅柱とみられるもので、扇割で成形されており、両端が細く尖ることから杭に転用されたものと考えられる。表面には棧穴が2カ所残り、部分的に加工痕がみられるものの全般に木痩せし、木目が目立ち、部分的に炭化する箇所もある。4445は屋根材ではないかとみられるもので、板目取りとなり、端部には柄穴が1カ所、表面には鉋による調整痕が残る。4446は壁材ではないかとみられるもので、柁目材となり、柄穴が1カ所残る。表面には虫食い痕があり、全般に木痩せし、木目が目立つ。4447も壁材ではないかとみられるもので、半割板目取りとなる。柄穴が2カ所残るが、全般に木痩せし、木目が目立つ。4448は床か壁の板材とみられ、半割柁目取りとなる。柄穴が2カ所残るが、解体時のものとみられる切断痕が認められる。表面は全般に木痩せし、木目が目立つ。4449は壁材とみられるもので、半割板目取りとなる。紐結び用とみられる柄穴が側面近く3カ所、その他に柄穴2カ所、抉りが2カ所と多くの穴が設けられていることから何らかに転用されたものとみられる。柄穴と抉りを設けた際の加工痕が認められるものの、全般に木痩せし、木目が目立つと共に虫食いの痕も残る。4450も壁材ではないかとみられるもので、半割追柁目で作られる。端部

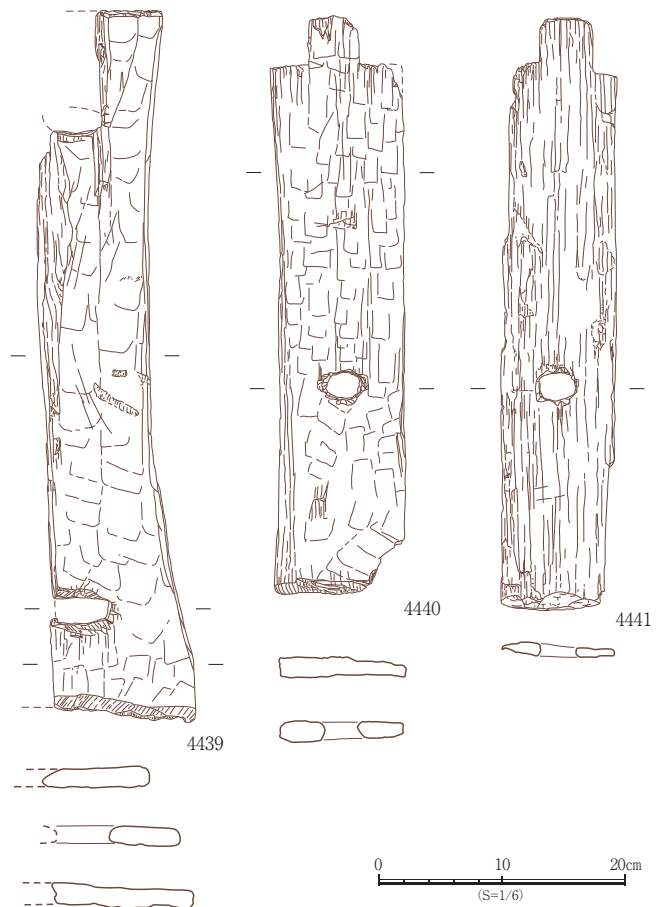


図3-81 SR-6出土木製品実測図4

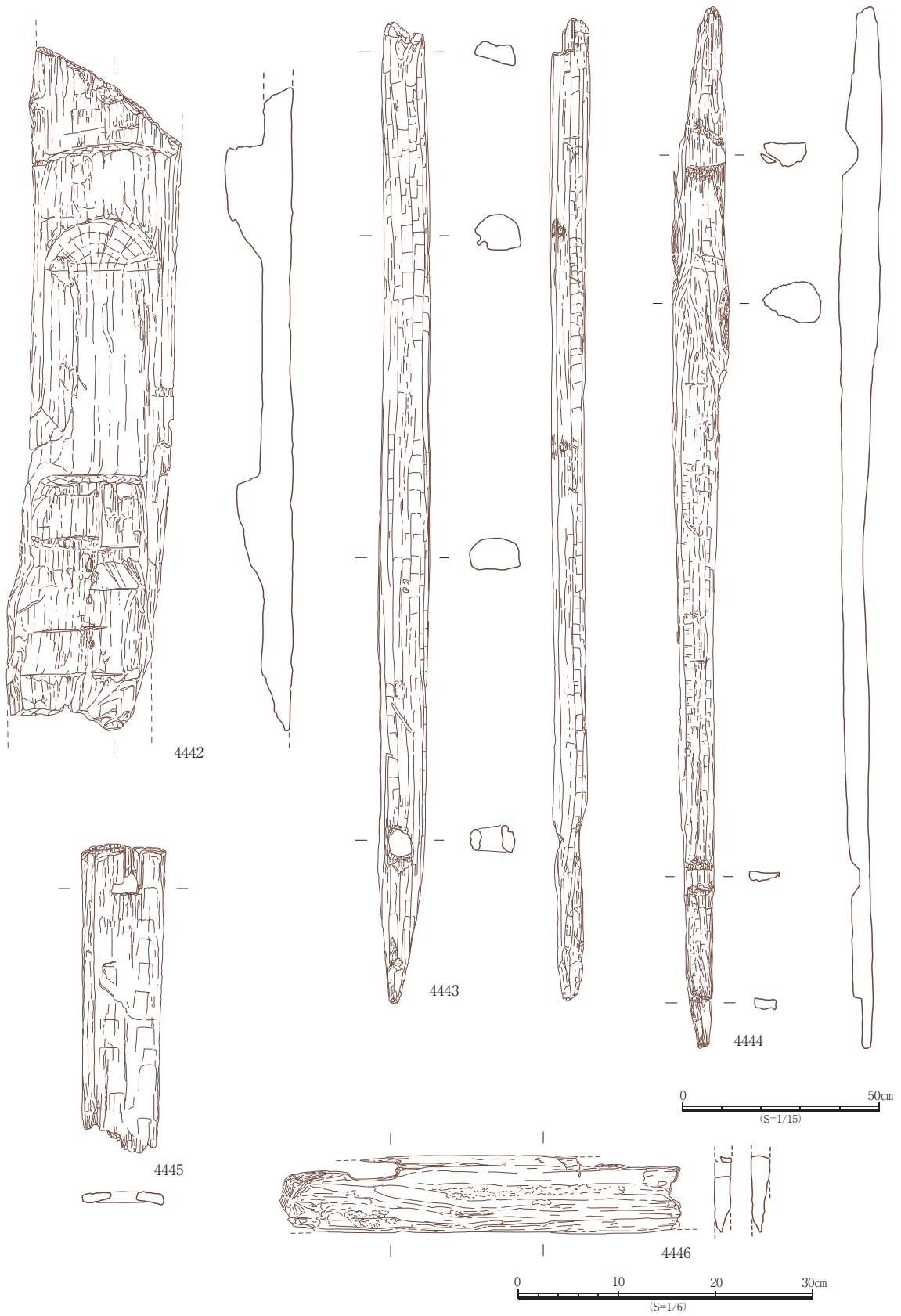


図3-82 SR-6出土木製品実測図5

4. IV区 (1) 自然流路

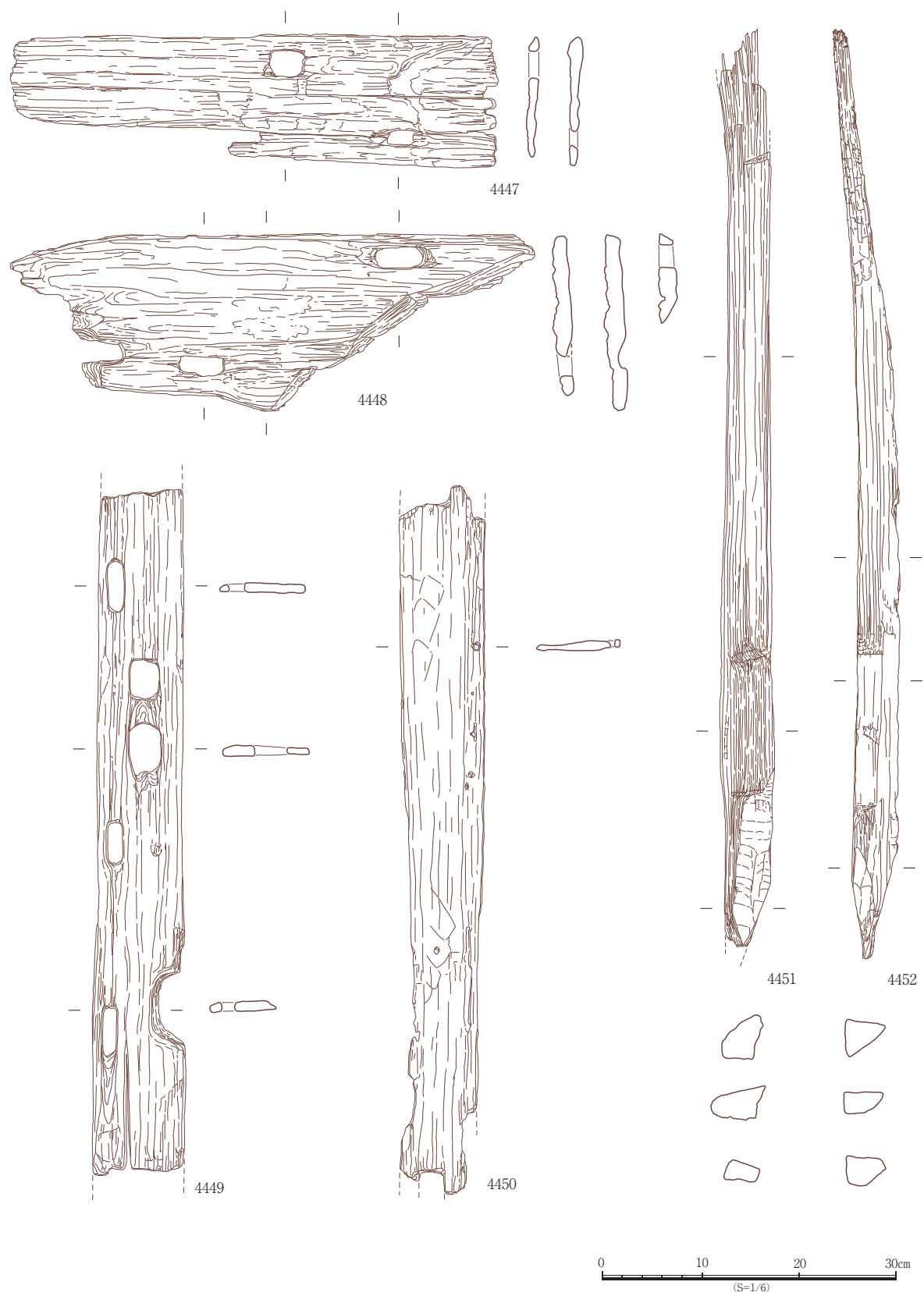


图3-83 SR-6出土木製品実測图6

には柄穴(挟りの可能性もある)と突起が残る。表面には鉋等による加工痕も部分的に認められるが、全般に木痩せし、木目が目立ち、虫食いの痕も残る。4451は横架材とみられるもので、扇割で木表を削り出す。断面は三角形を呈し、重なる部分には挟りが施される。先端は細く加工されており、杭に転用されたものとみられる。表面は木痩せし、木目が目立つ。4452も4451と同じ横架材とみられるもので、断面は三角形を呈し、重なる部分には挟りが施される。端部は手斧で削り尖らせ、一方は細



図3-84 SR-6出土木製品実測図7

4. IV区 (1) 自然流路

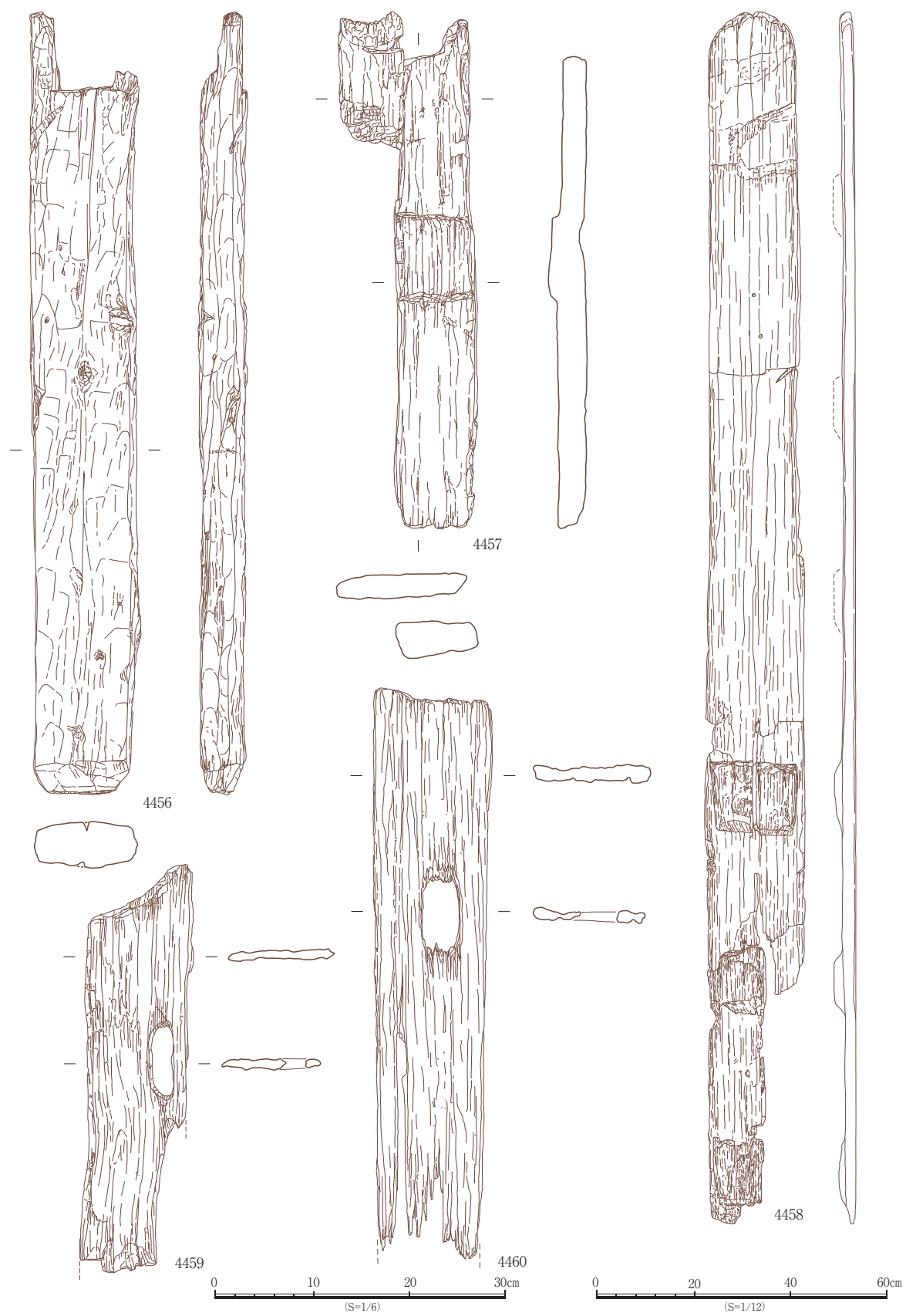


图3-85 SR-6出土木製品実測图8

く加工し、杭に転用されたものと考えられる。表面は全般に木瘦せし、木目が目立つ。4453も横架材とみられるもので、扇割の板目となる。一方の端部は溝状の抉り、片方は細く削り出しており、杭に転用されたものとみられる。抉り部分には加工痕が残るが、全般に木瘦せし、木目が目立つ。4454も横架材とみられるもので、扇割で作られる。断面はかまぼこ状を呈し、端部近くに柄穴が1ヵ所、側面端部に抉りが1ヵ所残る。表面は全般に木瘦せし、木目が目立つ。4455は竪穴住居の横架材とみられるもので、芯持ち材で作られ、各所にある節を手斧で切断する。端部近くには棧穴が1ヵ所残る。表面は木瘦せし、木目が目立つ。4456は鴨居材か敷居材とみられるもので、半割材を使用する。一方の端部には抉りにより両側面に突起を作り出し、片方の端部は斜めに削り出す。遺存状態は比較的

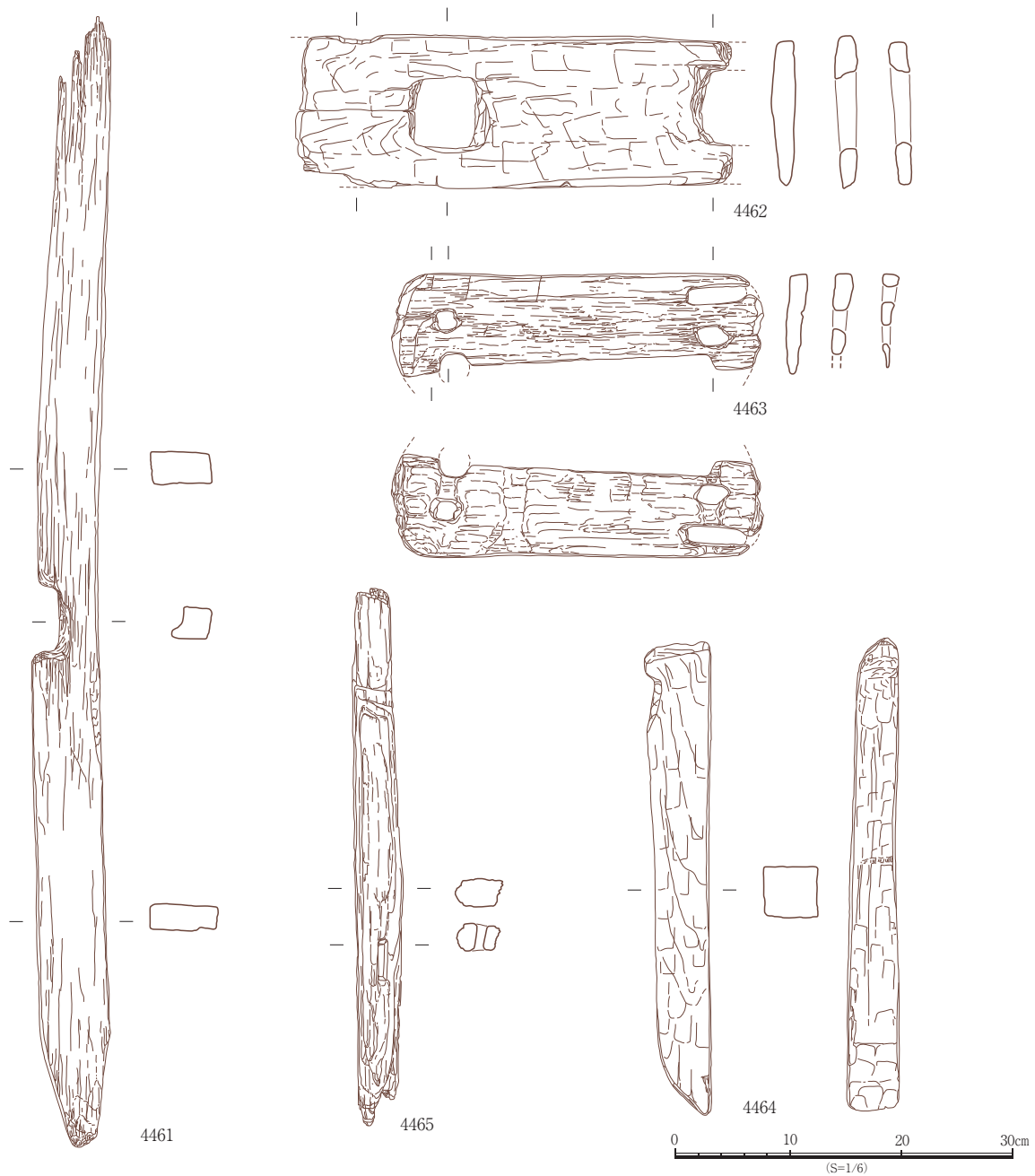


図3-86 SR-6出土木製品実測図9

4. IV区 (2) 土坑

よく、鉋の加工痕が各所に残る。4457は大引の一部とみられるもので、半割板目取りで、木表を削り出す。削り抜き部分には手斧によるとみられる加工痕が残るものの、他は全般に木瘦せし、木目が目立つ。4458も大引とみられるもので、半割板目取りによる。削り貫きは5カ所認められるが、内2カ所は削り取られ、3カ所残存する。端部は丸く2次加工される。加工痕は削り貫き部分に認められるものの、全般に木瘦せする。4459は大輪とみられるもので、半割追柁目となる。柄穴が側面よりに1カ所残るが、両端は欠損し炭化する。全般に木瘦せし、木目が目立つ。4460は構造物の部材とみられるが、用途不明で、半割板目取りとなる。柄穴が1カ所残存する。表面は木瘦せし、木目が目立つ。4461も構造物の部材とみられるが、用途不明で、扇割板目取りによる。側面中央部に抉りが1カ所残り、一方の側面に加工痕が残る。一方の端部は折損するが、片方は手斧で細く削り出し、杭に転用されたものとみられる。木表は比較的遺存状態がよく、加工痕も一部には残るものの、木面は木瘦せし、木目が目立つ。4462も何らかの構造物の部材とみられるものの用途不明で、板目取りとなる。柄穴とそれから続く切れ目が端まで続き、片方の端には抉りを入れる。表面には鉋によるとみられる調整痕も認められるが、全般に木瘦せし、木目が目立つ。

4463～4465は何らかの器具の部材とみられるが、判然としない。4463は半割板目取りで、柄穴が4カ所あったものとみられ、泥よけの可能性も考えられる。4464は扇割の角材で、板目となり、一方の端の側面には抉り、片方には斜めに切り込みを入れる。各面に鉋によるとみられる調整痕が残る。4465は扇割板目取りの角材で、両端が欠損する。端よりに矩形の柄穴が1カ所残存する。

(2) 土坑

SK-1 (図3-87)

西の調査区東端部、第XI層上面で検出した舟形の土坑で、中央部がやや膨らむ。長辺3.28m、短辺0.78m、深さ31cmを測り、長軸方向はN-38°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈し、特に南壁は急角度で立ち上がる。埋土は中粒砂混じりの黄灰色(2.5Y4/1)～黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器86点があったが、復元図示できるものはなかった。

SK-2 (図3-88)

SK-1の北側で検出した舟形の土坑で、北側約2/3には両側に平場を有する。長辺2.41m、短辺0.88m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-13°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は細粒砂から極粗粒砂を含む褐灰色(10YR4/1)～黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土単一であった。

出土遺物には弥生土器48点があり、1点(4466)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-89 4466)

完存する甕で、底部は上げ底となり、胴部は倒卵形で口頸部はくの字形をなす。口縁部は頸部からさらに外傾し、端部は下端を拡張し内傾する平面をなす。口頸部はヨコナデ調整、胴部内面には摩擦するもヘラナデ調整の痕跡が残り、外面にはハケ目が一面に残る。外底面は

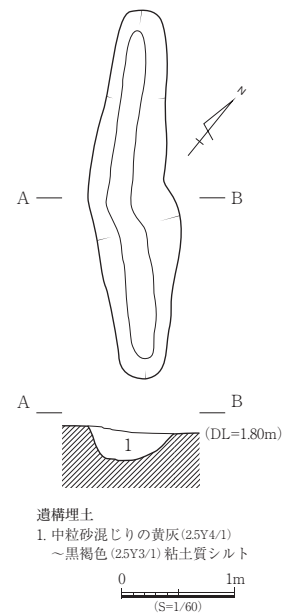


図3-87 SK-1

ナデ調整を施す。口頸部外面と中胴部外面に煤が付着する。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含んでいた。

SK-3

西の調査区東部、第XI層上面で検出した舟形の土坑で、SD-5を切る。長辺3.90m、短辺1.25m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-73°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は基本的に褐灰色(2.5Y4/1)～黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土であり、一部褐灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒～細粒砂が堆積する部分もみられた。出土遺物は皆無であった。

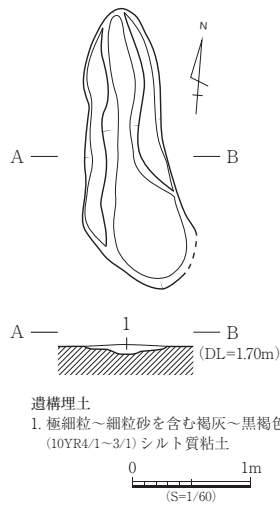


図3-88 SK-2

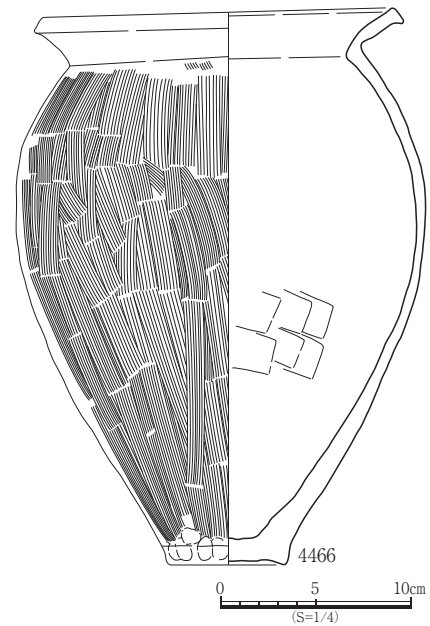


図3-89 SK-2出土遺物実測図

(3) 溝跡

SD-3 (図3-90)

東の調査区、SR-5の東側で検出した南北溝で、南側は調査区外にさらに延びる。検出幅は0.38～0.89m、深さ4～21cm、基底面の標高は南(1.204m)から北(1.078m)に向かって傾斜し、概ね北(N-2°-E)を示し、14.55mを検出した。断面形は概ね舟底形を呈し、基底面から緩やかに立ち上がる。埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト質極細粒～細粒砂単一で、洪水によって埋没し

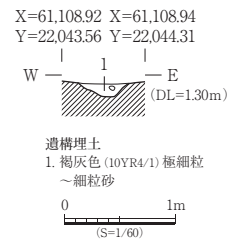


図3-90 SD-3

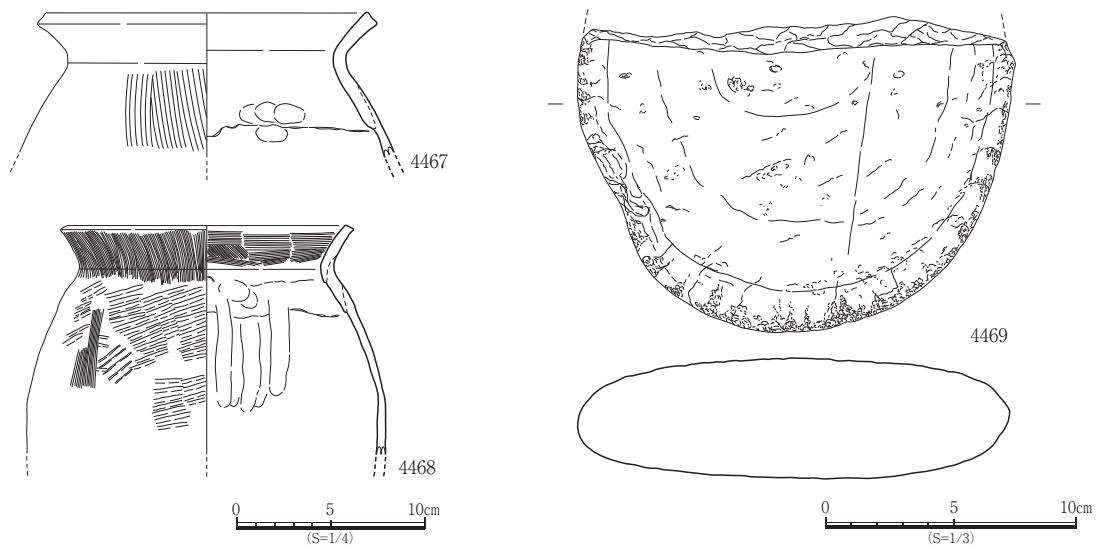


図3-91 SD-3出土遺物実測図

たものとみられる。出土遺物には弥生土器 60 点と石製品 1 点があり、弥生土器 2 点(4467・4468)と石製品 1 点(4469)の 3 点が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-91 4467・4468)

いずれも甕で、口頸部は膨らみのある胴部から内湾気味に外傾するもので、頸部内面は丸みを有し、口縁端部は内傾する凹面をなす。成形は外傾接合で行われ、肩部内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。4467 の胴部外面には粗いハケ目が残り、4468 の口頸部にはハケ調整、胴部内面は指ナデ調整を施し、胴部外面はタタキの後にハケ調整を加える。4468 の外面には煤が付着する。胎土には、4467 が細粒砂から極粗粒砂を少し、4468 が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

石製品(図3-91 4469)

扁平な台石で、約 1/2 が残存する。両面とも平滑で側面には弱い敲打痕が残る。

SD-4(図3-92)

西の調査区の南部、第 XI 層上面で検出した南北溝で、南側は調査区外にさらに延びる。溝は、SD-5 と並走する形となり、南に行くに従って幅を広げる。検出幅は 0.84 ~ 3.54m、深さ 16 ~ 47cm、基底面の標高は北(1.410m)から南(1.150m)に向かって傾斜し、概ね南(N-171°-W)を示し、10.04m を検出した。断面形は概ね舟底形を呈し、基底面から緩やかに立ち上がる。埋土は場所により 1 ~ 3 層に分層され、間層に炭化物が

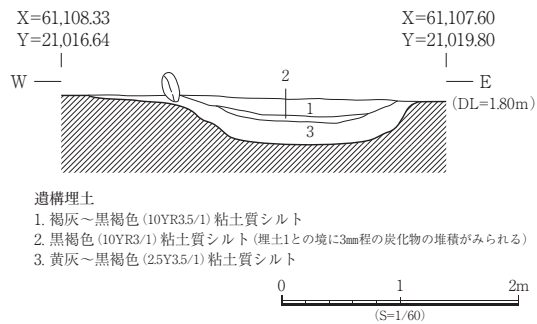


図3-92 SD-4

混じる黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトを挟む箇所もある。いずれの層もシルト質粘土ないし粘土質シルトとなっており、自然流路や土坑の堆積状況とは異なる。出土遺物には弥生土器が 89 点、石製品 2 点があり、弥生土器 3 点(4470~4472)と石製品 2 点(4473・4474)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-93 4470~4472)

いずれも鉢である。4470 は器高指数 37.8 と皿と表現し得るもので、口縁部はやや波打ち、底部は丸底となる。体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。端部は比較的太く丸味がある。器面はナデ調整を施す。4471 は器高指数 48.6 と底部がやや深く、ボタン状を呈する。体部は内湾気味に上がり、口縁部は真上を向き、端部は細く仕上げる。内面にはハケ調整、外面にはタタキを施す。4472 は大型の鉢で、器高指数は 41.5 である。底部は平らで、体部は外上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸い。口縁部はヨコナデ調整、内面にはナデ調整の後にヘラ磨き、外面にはタタキの後にハケ調整を加える。胎土には、4470 が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、4471 が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、4472 が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

石製品(図3-93 4473・4474)

4473 は扁平な磨石で、表面は平滑である。4474 はやや扁平な叩石で、敲打痕が両面と側面に残る。

SD-5(図3-94)

西の調査区の東部、第 XI 層上面で検出した南北溝で、南側は調査区外にさらに延びる。溝は、SR-

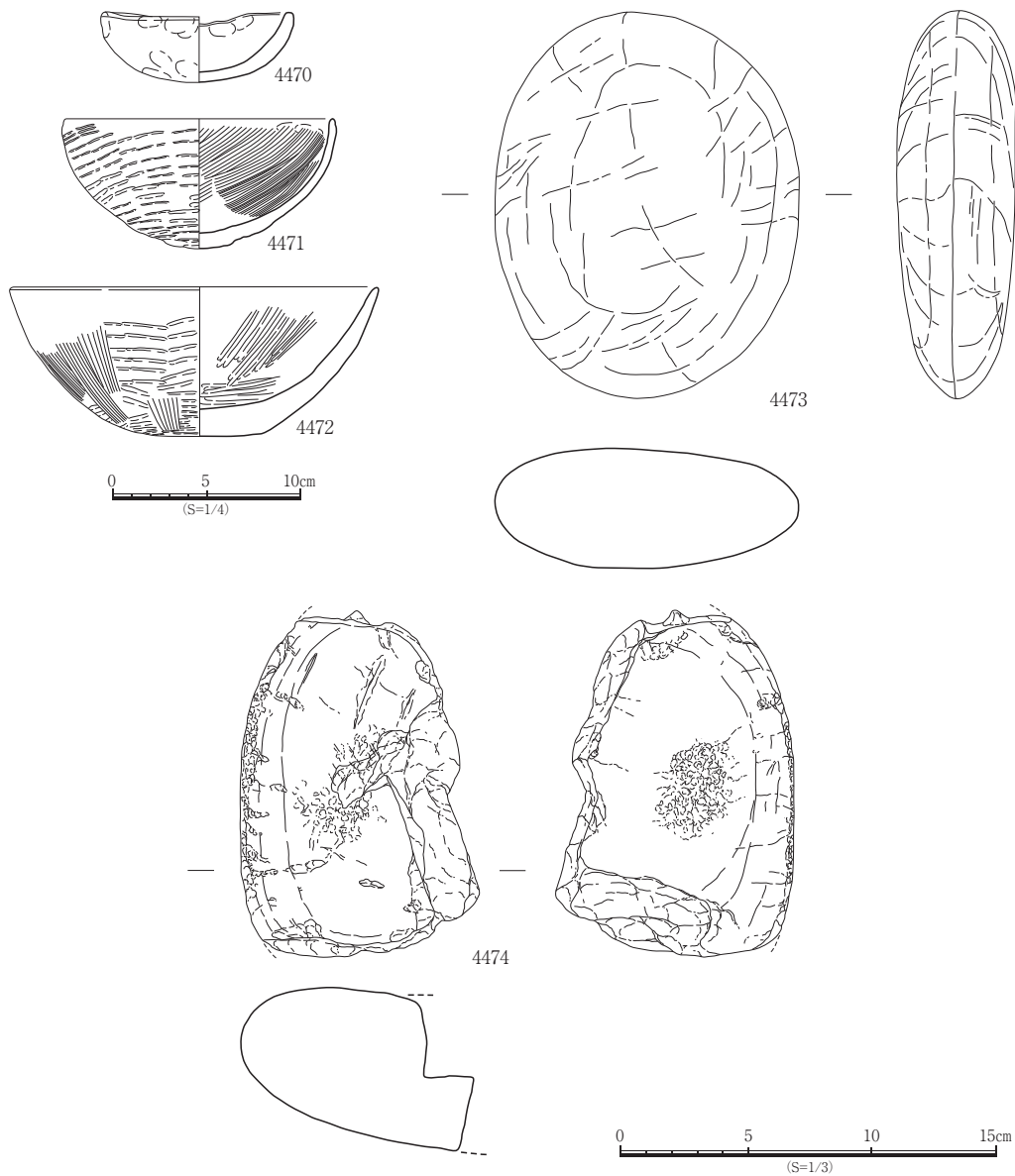


図3-93 SD-4出土遺物実測図

6に接し，SK-3に切られ，南に行くに従って幅を広げる。検出幅は0.83～5.19m，深さ12～64cm，基底面の標高は北(1.645m)から南(1.100m)に向かって傾斜し，概ね南(N-174°-W)を示し，30.11mを検出した。断面形は概ね舟底形を呈し，基底面から緩やかに立ち上がる。埋土は1～3層に分層され，下層ほど粘土分が強く，間層に炭化物や炭化物層を挟む箇所もあり，機能面に時期差が看取される。土質は砂粒を含む箇所もみられるものの，基本的にシルト質粘土でSD-4の堆積状態に近い。出土遺物には弥生土器が44点あり，7点(4475～4481)

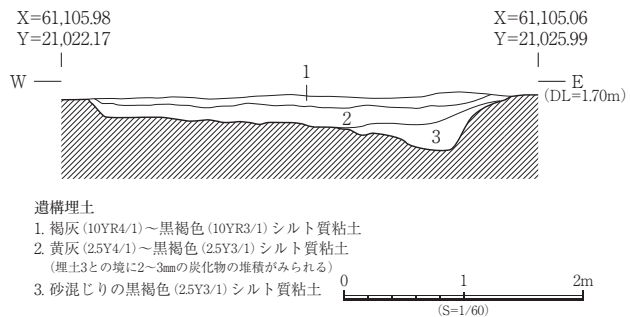


図3-94 SD-5

が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-95 4475~4481)

4475は壺で完存する。底部は上げ底となり、胴部は丸味があり中位に最大径を有し、頸部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は下端を僅かに拡張し、内傾する平面となる。内面は頸部にハケ調整, 他はナデ調整で肩部には指押えの痕が残る。外面は上胴部にタタキを施した後, ハケ調整を施す。頸部外面下端にはヨコ方向のハケ調整で施文位置を決めた後, 再度ハケ調整を施しながら同じハケ状工具で約7mm間隔に列点文を同時に施す。また, 外面は全面被熱で変色し, 肩部から下胴部を中心に煤が付着する。4476は壺の中胴部以下の大半が残存するもので, 底部は丸底に近くなり, 胴部は丸い。内面には粗いハケ調整の後に指ナデ調整とナデ調整, 外面にはほぼ全面にタタキを施す。黒斑が下胴部外面の一部に残存する。胎土には, 4475が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 4476が細粒砂から極細粒中礫を少し含んでいた。

4477~4479は甕の口縁部が残存するものである。4477は外傾接合により成形され, 胴部は膨らみ, 頸部は短く直立し, 口縁部は外傾し, 端部は内傾する凹面となる。内面には粘土紐の接合痕, 下胴部

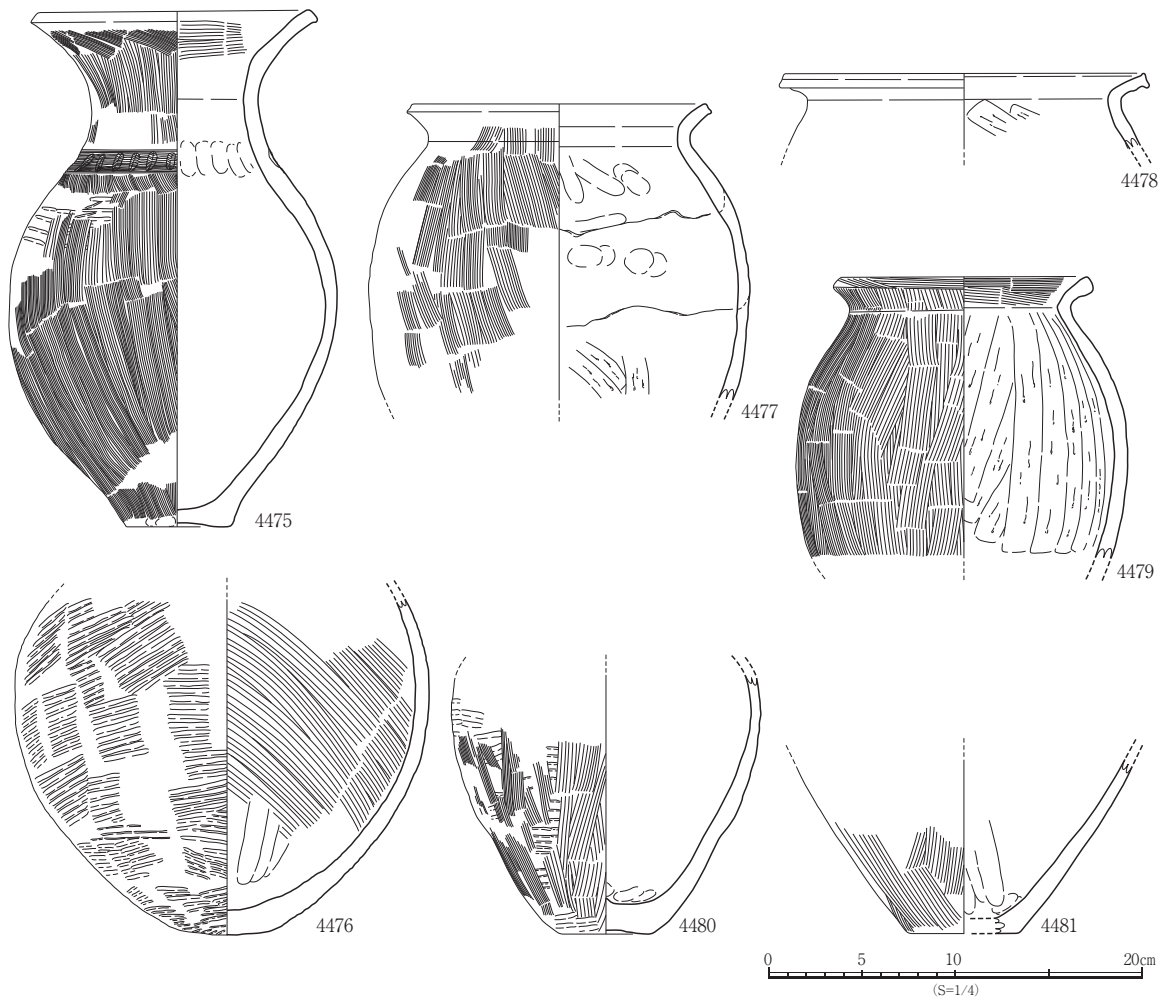


図3-95 SD-5出土遺物実測図

にはヘラ削り痕が残る。口頸部にはヨコナデ調整、頸部外面下端から胴部にかけてハケ調整を施す。また、外面一面に煤が付着する。4478は口頸部が大きく屈曲するもので、口縁端部は上下に拡張され、内傾する浅い凹面となる。口頸部はヨコナデ調整、胴部内面にはヘラ削りを施す。また、口縁部外面には煤が付着する。4479は口頸部がくの字形をなすもので、内面頸部基部に稜を持つ。口縁端部は肥厚され、やや丸味がある。口頸部内面から外面にかけて全面にハケ調整、胴部内面にはヘラ削りを施す。また、口縁部外面から中胴部外面にかけて煤が付着する。胎土には、4477が細粒砂から極粗粒砂を少し、4478・4479が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4480と4481は甕の底部が残るものである。4480は、底部が上げ底風で、胴部は中位よりやや上に最大径を有する。内面は基底面に指押え、他はナデ調整を施し、一部に爪痕が残る。外面はタタキの後にハケ調整を施す。4481は平底の底部で、胴部は外上方へ延びる。内面には指ナデ調整とナデ調整を施し、焦げ目が付着する。外面には粗いハケ調整を施す。胎土には、4480が細粒砂から極細粒中礫を少し、4481が細粒砂から極粗粒砂を少し含んでいた。

(4) 祭祀関連遺構

SF-1

西の調査区北西端、第XI層上面で検出した土器の集中箇所、炭化物、焼土、川原石を伴う。SR-6の右岸部分に当たり、明確な祭祀遺物は伴わないが、水辺の祭祀を行った遺構と考えられる。その範囲は長径(東西)3.39m、短径(南北)3.32mであった。出土遺物には弥生土器60点があり、2点(4482・4483)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-96 4482・4483)

4482は壺で、一部が欠損するも全体が復元できるものである。底部は平底で、胴部は丸く、中胴部よりやや上に最大径を有し、口頸部は内湾して立ち上がり、口縁部でさらに外反する。口縁端部は丸い。胴部内面にはハケ調整、外面にはタタキの後にハケ調整を施す。4483は壺の底部とみられるもので、底部は平らで、胴部は丸い。内面にはほぼ全面にハケ調整、外面にはハケ調整の後に下から上へヘラ磨きを施す。胎土には、4482が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、4483が細粒砂から細粒中礫を少し含んでいた。

SF-2

西の調査区北西部、第XI層上面で検出した土器の集中箇所、炭化物と焼土及び川原石を伴う。SF-1の南に隣接する形となり、一連のものとみられ、川原石が集中する部分があり、磐座であった可能性も考慮される。また、この時期の水辺の祭祀の特徴である甕が出土する。その範囲は長径(南北)4.31m、短径(東西)4.00mであった。出土遺物には図示した弥生土器3点(4484～4486)があった。

出土遺物

弥生土器(図3-96 4484～4486)

いずれも甕の底部とみられるもので、4484は高台状の底部となるもので、胴部は外上方へ立ち上がる。内面はナデ調整で、焦げ目が付着し、外面はタタキ目が残し、煤が付着する。4485は小さな平底の底部を有するもので、胴部は丸く、中胴部に最大径がある。内面にはナデ調整とハケ調整を施し、底部外面はタタキの後にナデ調整を施し、中胴部にハケ調整の後にヘラ磨きを施す。煤が中胴部外

4. IV区 (4) 祭祀関連遺構

面に付着する。4486も小さな平底の底部を有するもので、胴部は丸く、中胴部に最大径を有する。内面にはヘラ削りの後にハケ調整を施し、最後にナデ調整を加える。外面にはタタキの後にハケ調整を施す。外底面はナデ調整となる。煤が中胴部外面を中心に付着する。胎土には、4484が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く、4485が細粒砂から極細粒中礫を少し、4486が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

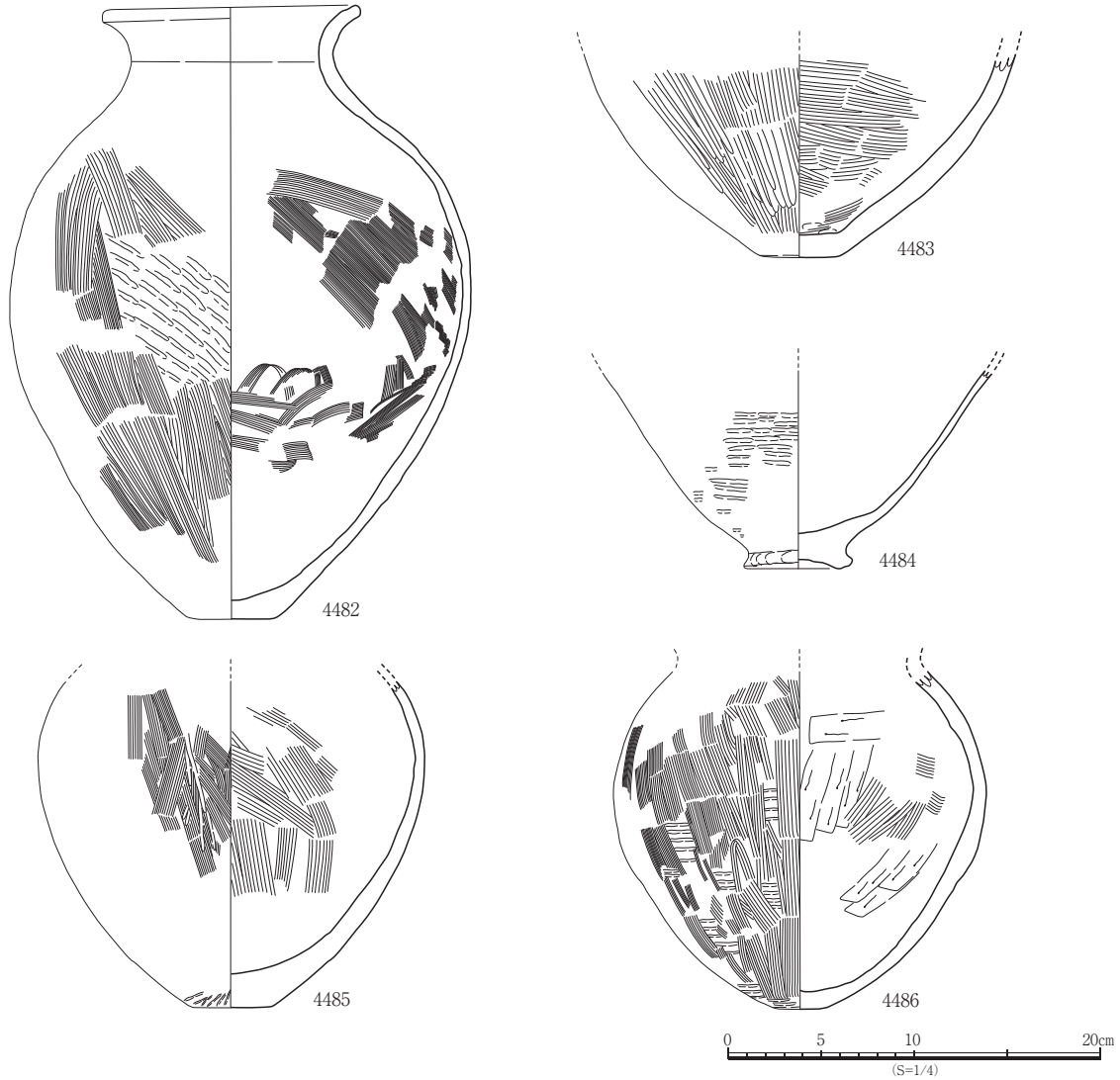


図3-96 SF-1・2出土遺物実測図

SF-3

西の調査区北西部、第XI層上面で検出した土器の集中箇所、炭化物、焼土、川原石を伴う。SF-2の南に隣接する形となり、一連のものとみられる。SF-2同様この時期の水辺の祭祀の特徴である甕がまとめて出土する。その範囲は長径(東西)4.60m、短径(南北)2.90mであった。出土遺物は弥生土器415点があり、6点(4487~4492)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-97 4487~4492)

いずれも甕である。4487は、口縁部が外傾して立ち上がる頸部から外反し、さらに端部を上方につ

まみ上げたもので、口縁部にはヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含んでいた。

4488と4489は口頸部がくの字形をなすもので、いずれも底部は小さな平底となる。4488は、胴部が膨らみ中胴部より上に最大径を有するもので、口頸部は外反し、端部は内傾する凹面となる。口縁部はヨコナデ調整、内面は頸部にハケ調整、胴部に指ナデ調整、ハケ調整、ナデ調整の順に調整を加える。胴部外面にはほぼ全面にハケ調整を施し、口縁部から中胴部にかけて煤が付着する。底部外面はナデ調整を施す。4489は、胴部が膨らみ中胴部に最大径があるもので、口頸部は外傾し、端部は内傾するやや丸味のある平面となる。口頸部にはハケ調整、胴部内面には指ナデ調整とナデ調整を施し、一部にハケ目が残る。胴部外面にはタタキの後にハケ調整を加える。煤が中胴部外面を中心に付着する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含んでいた。

4490～4492は底部が残存するもので、いずれも甕とみられる。4490は小さな平底の底部に膨らみの少ない胴部が付く。内面には指ナデ調整とナデ調整、外面にはハケ調整を施し、外面下端にタタキ目が残る。4491は上げ底風の底部にやや膨らみのある胴部が付くもので、内面は指ナデ調整とナデ調整を施し、焦げ目が付着する。外面はタタキの後に下胴部を中心にハケ調整を加える。また、外面には煤が付着する。4492は平底の底部に外上方を向く胴部が付くもので、内面には指ナデ調整とナデ調整を施し、焦げ目が付着する。外面は被熱で変色し、タタキ目が一部に残る。胎土には、4490が細粒砂から極粗粒砂を少し、4491が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、4492が細粒砂から極粗粒砂を多く含んでいた。

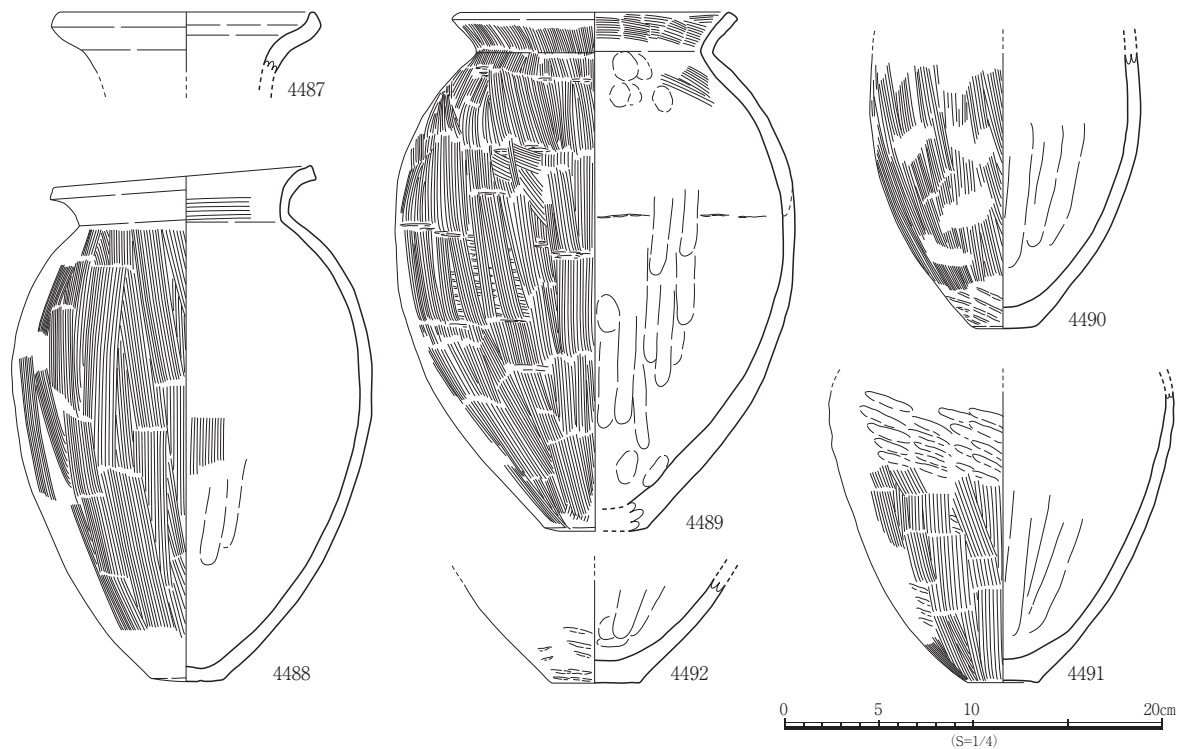


図3-97 SF-3出土遺物実測図

(5) 性格不明遺構

SX-1

西の調査区西部, 第XI層上面で検出した不整形の遺構で, SR-6と接する。遺構は東側北と南に溝状に突起した部分があり, 長辺3.46m, 短辺1.92m, 深さ7~39cmを測り, 長軸方向はN-28°-Eを示す。断面形は概ね皿状を呈する。埋土は極細砂粒から細砂粒を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト単一で, 土坑の埋土の土質と似る。出土遺物は皆無であった。

SX-2

西の調査区東部, 第XI層上面で検出した不整形の遺構で, SR-6を切る。長辺6.02m以上, 短辺1.86m, 深さ2~11cmを測り, 長軸方向は方眼北を示す。断面形は概ね皿状を呈し, 浅い。埋土は褐灰色(10YR4/1)~灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト単一で, 土坑の埋土の土質と似る。出土遺物は皆無であった。

註

- (1) 突帯, 突帯文, 貼付突帯文, 粘土帯, 刻目突帯, 微隆起突帯など様々に呼称されているが, 断面三角形の突帯とは異質なもので, ここでは微隆起突帯として記述している。なお, 第V章で詳述する。
- (2) 頭部の形状は儀杖形木製品と酷似するが, 長さが大きく異なる。

引用・参考文献

松山市文化財協会 1974『古照遺跡』

第Ⅳ章 自然科学分析

1. 自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻康男・辻本裕也・斉藤崇人・松元美由紀・馬場健司・高橋敦・斉藤紀行

(1) はじめに

今回の自然科学分析では、Ⅱ区およびⅣ区を中心とする調査区やその周辺的环境変遷と人間活動の関わりについて検討するための基礎的な古環境情報の獲得を目的として、遺跡の現地調査、花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析(土壌試料の洗い出し・分類、洗い出し試料同定・解析)、出土木材の樹種同定、放射性炭素年代測定を実施する。

(2) 試料

① Ⅰ～Ⅲ区

試料採取位置を図4-1に示す。花粉分析は、1地点で2点(試料番号1・2)、2地点で5点(試料番号1・3・7・8・10)、3地点で1点(試料番号1)で実施する。珪藻分析は、2地点で6点(試料番号3・6・7・8・10・12)で実施する。植物珪酸体分析は、1地点で2点(試料番号1・2)、2地点で5点(試料番号1・3・7・8・10)、3地点で2点(試料番号1・2)で実施する。種実遺体分析は、1地点の試料番号2と、Ⅳ区で検出された炭化穀粒の集合物について実施する。放射性炭素年代測定は、Ⅰ区・Ⅱ区から採取された8点の試料について実施する。出土木材の樹種同定はⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区の流路内に打設されていた杭材について9点を同定する。

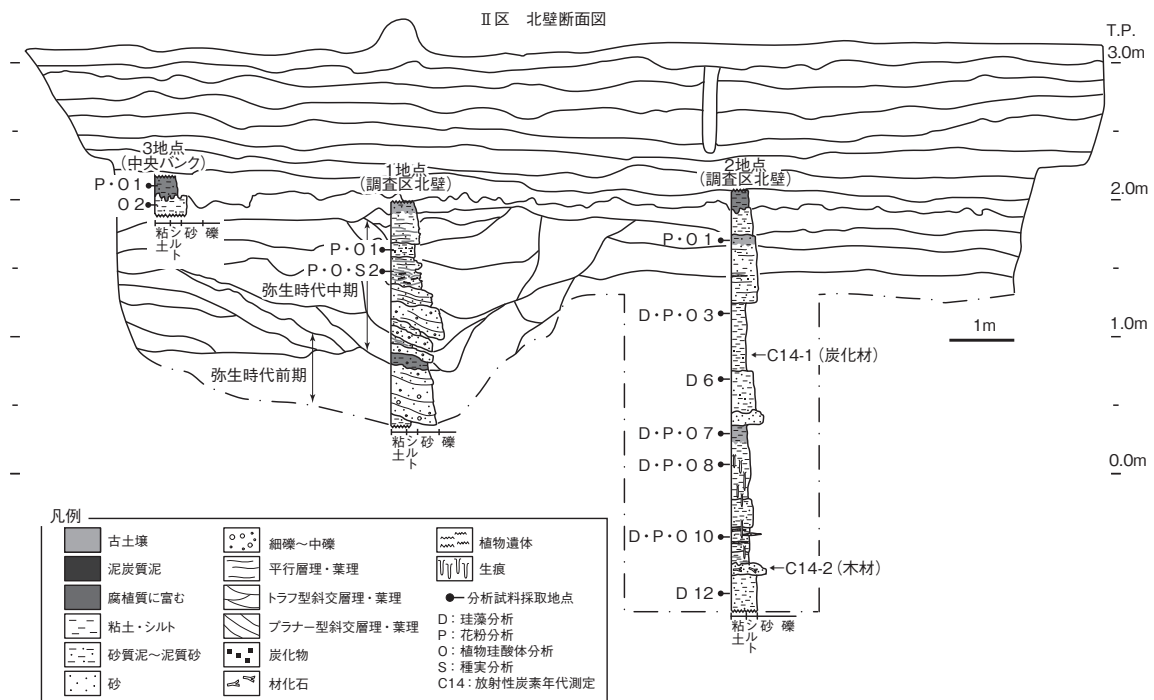


図4-1 Ⅱ区試料採取位置

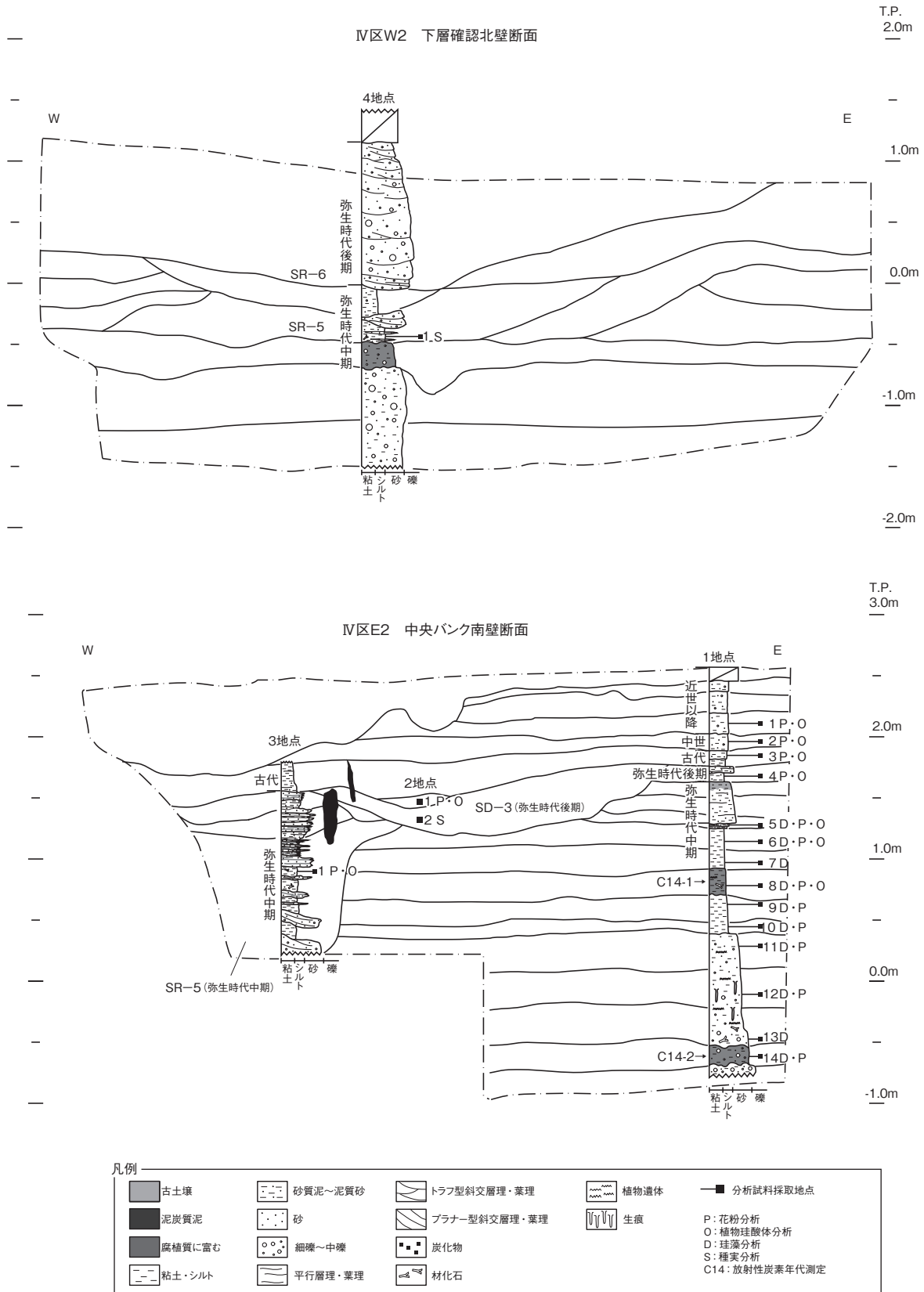


図4-2 IV区試料採取層準

② IV区

試料採取層準を図4-2, 写真4-2~6に示す。珪藻分析については, 1地点の試料番号5~14の10点について実施する。花粉分析は, 1地点の試料番号1~6, 8~12・14, 2地点の試料番号1(SD-3埋土), 3地点の試料番号1(SR-5埋土)の14点について実施する。植物珪酸体分析は, 1地点の試料番号1~6・8, 2地点の試料番号1(SD-3埋土), 3地点の試料番号1(SR-5埋土)の9点について実施する。種実遺体分析は, 2地点の試料番号2(SD-3埋土), 4地点の試料番号1(SR-5)について実施する。出土木材の樹種同定は, IV区のSR-6とSR-5から検出された木製品について21点の同定を行う。放射性炭素年代測定は, 1地点の試料番号8から採取した植物遺体と, 試料番号14から採取した木材の2点について実施する。

(3) 分析方法

① 放射性炭素年代測定

分析は, AMS法で実施する。試料表面の汚れをピンセット, 超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて, 試料内部の汚染物質を化学的に除去する。

試料をバイコール管に入れ, 1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて, 管内を真空にして封じきり, 500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し, 真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し, グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして, タンデム加速器のイオン源に装着し, 測定する。測定機器は, 3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に, 標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また, 測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため, この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は, LIBBYの半減期5,568年を使用する。また, 測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり, 誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお, 暦年較正は, RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver And PJ Reimer)を用い, 誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。なお, 測定については, 株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

② 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し, 過酸化水素水, 塩酸処理, 自然沈降法の順に物理・化学処理を施して, 珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後, カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後, プリュウラックスで封入して, 永久プレパラートを作製する。検鏡は, 光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い, メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し, 珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではないが, 1プレパラートあたり50個体以上の試料については2枚検鏡する)。種の同定は, 原口ほか(1998), Krammer (1992), Krammer & Lange - Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b), 渡辺(2005), Witkowski et al. (2000)などを参照し, 分類体系はRound, Crawford & Mann (1990)に従った。

同定結果は、中心類(Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱Coccinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(araphid pennate diatoms；広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分けた。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分はLowe (1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に分け、貧塩性種については、さらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、真塩性種～中塩性種については小杉(1988)、貧塩性種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai & Watanabe (1995)、渡辺(2005)の環境指標種を参考とする。

③ 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(分類群)について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で産出率を算出し図示する。

④ 植物珪酸体分析

各試料について乾燥重量を計測後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させた後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に産出するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、植物珪酸体含量密度の一覧表と植物珪酸体含量の層位的変化図として示す。なお、含量密度は、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積に基づき、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量密度(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を産出してある。

⑤ 種実遺体分析

試料各200ccを水に浸し、0.5mm目の篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種実の種類(分類群)と部位を同定し、個数を求める。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を

施して返却する。

⑥ 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し, プレパラートを作製する。作製したプレパラートは, 生物顕微鏡で木材組織を観察し, その特徴から種類(分類群)を同定する。

なお, 同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については, 島地・伊東(1982), Wheeler他(1998), Richter他(2006)を参考にする。また, 各樹種の木材組織の配列の特徴については, 林(1991), 伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(4) 結果

① 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表4-1に示す。また, 暦年較正值を表4-2・3に示す。暦年較正とは, 大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し, 過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動, 及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては, 本来10年単位で表すのが通例であるが, 将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算, 再検討に対応するため, 1年単位で表している。暦年較正は, 測定誤差 σ , 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲, 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また, 表中の相対比とは, σ , 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合, その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表4-1 放射性炭素年代測定結果

調査区	試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (%)	測定年代 BP	Code.No.
I区	SR-1-1	杭材	マキ属	2220±30	-26.97±0.82	2250±30	IAAA-52543
	SR-1-2	杭材	マキ属	2200±40	-27.15±0.95	2240±30	IAAA-52544
II区	2地点C14-1	炭化材	-	2480±30	-10.34±0.98	2240±30	IAAA-52541
	2地点C14-2	木材	-	4740±40	-29.03±0.79	4810±40	IAAA-52542
	SR-2-1	杭材	イヌガヤ	2490±40	-30.51±0.96	2580±30	IAAA-52545
	SR-2-2	杭材	スギ	2460±30	-26.20±1.01	2480±40	IAAA-52546
	SR-3-1	杭材	コナラ属アカガシ亜属	2200±30	-30.36±0.83	2290±40	IAAA-52547
	SR-3-2	杭材	ツブラジイ	2200±40	-31.97±0.82	2320±40	IAAA-52548
IV区	北半部VI層	炭化米	-	1740±40	-26.94±0.87	1770±30	IAAA-52549
	VI層	炭化材	モミ属	1690±40	-27.81±0.78	1730±30	IAAA-52550
	SR-6	杭材	ムクノキ属<根材>	1870±40	-24.61±0.89	1830±40	IAAA-52719
	1地点:C14-1	植物遺体	-	2440±30	-27.51±0.74	2480±30	IAAA-61142
	1地点:C14-2	木材	-	5570±40	-31.55±0.82	5680±40	IAAA-61143

1. 年代値の算出には, Libbyの半減期5568年を使用。
2. BP年代値は, 1950年を基点として何年前であることを示す。
3. 付記した誤差は, 測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

② 珪藻分析

i II区

珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表4-4に示す。分析結果を表4-5~7, 図4-3に示す。何れの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は70%前後と化石の保存状態が良

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

表4-2 暦年較正結果(1)

試料番号	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)												相対比	Code No.	
II区2地点14C-1	2482±30	σ	cal	BC	756	-	cal	BC	725	cal	BP	2,706	-	2,675	0.188	IAAA-52541
			cal	BC	694	-	cal	BC	684	cal	BP	2,644	-	2,634	0.057	
			cal	BC	669	-	cal	BC	541	cal	BP	2,619	-	2,491	0.754	
		2σ	cal	BC	770	-	cal	BC	504	cal	BP	2,720	-	2,454	0.956	
			cal	BC	493	-	cal	BC	489	cal	BP	2,443	-	2,439	0.004	
			cal	BC	462	-	cal	BC	449	cal	BP	2,412	-	2,399	0.013	
cal	BC	441	-	cal	BC	417	cal	BP	2,391	-	2,367	0.027				
II区2地点14C-2	4740±40	σ	cal	BC	3,632	-	cal	BC	3,558	cal	BP	5,582	-	5,508	0.638	IAAA-52542
			cal	BC	3,538	-	cal	BC	3,516	cal	BP	5,488	-	5,466	0.187	
			cal	BC	3,422	-	cal	BC	3,418	cal	BP	5,372	-	5,368	0.032	
		cal	BC	3,410	-	cal	BC	3,405	cal	BP	5,360	-	5,355	0.038		
		cal	BC	3,398	-	cal	BC	3,384	cal	BP	5,348	-	5,334	0.104		
		2σ	cal	BC	3,637	-	cal	BC	3,497	cal	BP	5,587	-	5,447	0.734	
cal	BC		3,451	-	cal	BC	3,443	cal	BP	5,401	-	5,393	0.015			
cal	BC		3,440	-	cal	BC	3,377	cal	BP	5,390	-	5,327	0.251			
I区SR-1-1	2219±33	σ	cal	BC	362	-	cal	BC	349	cal	BP	2,312	-	2,299	0.117	IAAA-52543
			cal	BC	311	-	cal	BC	268	cal	BP	2,261	-	2,218	0.373	
			cal	BC	264	-	cal	BC	208	cal	BP	2,214	-	2,158	0.511	
2σ	cal	BC	380	-	cal	BC	203	cal	BP	2,330	-	2,153	1.000			
I区SR-1-2	2203±36	σ	cal	BC	358	-	cal	BC	340	cal	BP	2,308	-	2,290	0.156	IAAA-52544
			cal	BC	329	-	cal	BC	278	cal	BP	2,279	-	2,228	0.422	
			cal	BC	258	-	cal	BC	241	cal	BP	2,208	-	2,191	0.129	
			cal	BC	237	-	cal	BC	203	cal	BP	2,187	-	2,153	0.293	
2σ	cal	BC	380	-	cal	BC	184	cal	BP	2,330	-	2,134	1.000			
II区SR-2-1	2493±37	σ	cal	BC	764	-	cal	BC	729	cal	BP	2,714	-	2,679	0.194	IAAA-52545
			cal	BC	692	-	cal	BC	680	cal	BP	2,642	-	2,630	0.070	
			cal	BC	673	-	cal	BC	658	cal	BP	2,623	-	2,608	0.081	
			cal	BC	653	-	cal	BC	543	cal	BP	2,603	-	2,493	0.655	
		2σ	cal	BC	785	-	cal	BC	504	cal	BP	2,735	-	2,454	0.959	
			cal	BC	493	-	cal	BC	489	cal	BP	2,443	-	2,439	0.004	
cal	BC	462	-	cal	BC	450	cal	BP	2,412	-	2,400	0.012				
cal	BC	441	-	cal	BC	417	cal	BP	2,391	-	2,367	0.025				
II区SR-2-2	2462±33	σ	cal	BC	751	-	cal	BC	686	cal	BP	2,701	-	2,636	0.361	IAAA-52546
			cal	BC	667	-	cal	BC	636	cal	BP	2,617	-	2,586	0.162	
			cal	BC	622	-	cal	BC	613	cal	BP	2,572	-	2,563	0.035	
			cal	BC	595	-	cal	BC	510	cal	BP	2,545	-	2,460	0.408	
		2σ	cal	BC	436	-	cal	BC	426	cal	BP	2,386	-	2,376	0.034	
			cal	BC	757	-	cal	BC	683	cal	BP	2,707	-	2,633	0.276	
cal	BC	670	-	cal	BC	478	cal	BP	2,620	-	2,428	0.586				
cal	BC	471	-	cal	BC	414	cal	BP	2,421	-	2,364	0.138				
II区SR-3-1	2198±34	σ	cal	BC	357	-	cal	BC	283	cal	BP	2,307	-	2,233	0.635	IAAA-52547
			cal	BC	256	-	cal	BC	246	cal	BP	2,206	-	2,196	0.073	
			cal	BC	235	-	cal	BC	202	cal	BP	2,185	-	2,152	0.292	
2σ	cal	BC	374	-	cal	BC	180	cal	BP	2,324	-	2,130	1.000			
II区SR-3-2	2203±37	σ	cal	BC	358	-	cal	BC	340	cal	BP	2,308	-	2,290	0.155	IAAA-52548
			cal	BC	329	-	cal	BC	278	cal	BP	2,279	-	2,228	0.419	
			cal	BC	258	-	cal	BC	241	cal	BP	2,208	-	2,191	0.128	
			cal	BC	239	-	cal	BC	203	cal	BP	2,189	-	2,153	0.298	
2σ	cal	BC	380	-	cal	BC	182	cal	BP	2,330	-	2,132	1.000			
IV区北半部VI層	1737±38	σ	cal	AD	245	-	cal	AD	345	cal	BP	1,705	-	1,605	0.993	IAAA-52549
			cal	AD	374	-	cal	AD	375	cal	BP	1,576	-	1,575	0.007	
2σ	cal	AD	218	-	cal	AD	408	cal	BP	1,732	-	1,542	1.000			
IV区VI層	1687±36	σ	cal	AD	264	-	cal	AD	275	cal	BP	1,686	-	1,675	0.109	IAAA-52550
			cal	AD	333	-	cal	AD	408	cal	BP	1,617	-	1,542	0.891	
		2σ	cal	AD	255	-	cal	AD	308	cal	BP	1,695	-	1,642	0.223	
cal	AD	311	-	cal	AD	424	cal	BP	1,639	-	1,526	0.777				

表4-3 暦年較正結果(2)

資料番号	補正年代(BP)	暦年較正年代(Cal)												相対比	Code No.	
		σ	cal	AD	79	-	cal	AD	142	cal	BP	1,871	-			1,808
IV区 SR-6 No.189	1873±36	σ	cal	AD	148	-	cal	AD	171	cal	BP	1,802	-	1,779	0.179	IAAA-52719
			cal	AD	193	-	cal	AD	210	cal	BP	1,757	-	1,740	0.145	
			2 σ	cal	AD	66	-	cal	AD	233	cal	BP	1,884	-	1,717	
		σ	cal	BC	728	-	cal	BC	693	cal	BP	2,678	-	2,643	0.208	
IV区 1地点 C14-1	2438±32	σ	cal	BC	658	-	cal	BC	654	cal	BP	2,608	-	2,604	0.022	IAAA-61142
			cal	BC	542	-	cal	BC	477	cal	BP	2,492	-	2,427	0.405	
			cal	BC	473	-	cal	BC	414	cal	BP	2,423	-	2,364	0.365	
			2 σ	cal	BC	752	-	cal	BC	686	cal	BP	2,702	-	2,636	
		2 σ	cal	BC	667	-	cal	BC	636	cal	BP	2,617	-	2,586	0.079	
			cal	BC	623	-	cal	BC	613	cal	BP	2,573	-	2,563	0.011	
			cal	BC	595	-	cal	BC	406	cal	BP	2,545	-	2,356	0.684	
			σ	cal	BC	4,447	-	cal	BC	4,418	cal	BP	6,397	-	6,368	
IV区 1地点 C14-2	5506±38	σ	cal	BC	4,402	-	cal	BC	4,362	cal	BP	6,352	-	6,312	0.572	IAAA-61143
			2 σ	cal	BC	4,459	-	cal	BC	4,346	cal	BP	6,409	-	6,296	

1. 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

2. 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3. 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

い。産出分類群数は、合計で131分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を下位層準の試料より述べる。

最下部の試料番号12は、淡水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻と言う)が全体の約50%を占め、これに次いで塩分濃度30~0.5%の汽水域に生育する汽水生種が約30%、淡水~汽水生種が約20%産出する。塩分濃度0.5%以下の淡水域に生育する淡水生種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好止水性種が優占あるいは多産する。主な産出種の特徴は、汽水泥質干潟指標種群のPseudopodosira kosugiiが約15%、塩分や塩類の豊富な電気伝導度の高い水域に生育する淡水~汽水生のPseudostaurosira brevistriataが約10%と多産し、淡水生で流水不定性のEpithemia adnata、止水性のCymbella leptoceros、止水性で偶来性浮遊性種(普段は、水生植物などに付着して生育しているが、波等の物理的な影響を受けて基物から剥離した後は浮遊生活を営む種)のStaurosira construens var. construens, Staurosira construens var. venterが認められる。これらは、汚濁性に対して、塩分や塩類などの電解質物を中程度に含んだ富栄養~中栄養水域に出現する。また、汽水付着性のNavicula peregrina、海水泥質干潟指標種群のDiploneis smithiiも伴う。

試料10になると、Pseudopodosira kosugiiが約85%と優占する。試料8・7は、汽水生種と水生珪藻とがそれぞれ35%前後と多産し、これに次いで淡水~汽水生種、海水~汽水生種を伴う。主な産出種の特徴は、Pseudopodosira kosugiiが約30%と優占し、Pseudostaurosira brevistriata、淡水生で流水不定性のEpithemia adnata、海水~汽水生種のNavicula formenterae、海水泥質干潟指標種群のDiploneis smithiiを伴う。

試料6になると、再びPseudopodosira kosugiiが約60%と優占し、これに次いでPseudostaurosira brevistriataが約15%と多産する。また、Diploneis smithiiを伴う。

上位の試料3になると、水生珪藻が全体の約70%を占め優占する。これに次いで、汽水生種が約20%産出する。また、海水~汽水生種、淡水~汽水生種、陸生珪藻も低率ながら産出する。淡水性種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種と真+好流水性種が優占あるいは多産する。個々の産出種の産状はとくに多産するものではなく、汽水付着性のAmphora strigosa、汽水浮遊性の

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

表4-4 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe (1974)による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0～30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0～0.5%に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937-38)による		
流水	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種
Hustedt (1937-38)による		

主に海水域での指標種群(小杉, 1988による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35%の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35～26%の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35～12%の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12～4%の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35～26%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26～5%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30～12%の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12～2%の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2%以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊性種群(G)	塩分濃度2%以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊性種群(H)	塩分濃度20～2%の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群(安藤, 1990による)	
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊性種としても沼沢湿地の付着性種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着性種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミズグケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群(伊藤・堀内, 1991による)	
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの

Thalassiosira lacustris, 淡水で中～下流性河川指標種群の Reimeria sinuata, 流水性の Cymbella turgidula var. nipponica, 流水不定性の Gomphonema parvulum, Amphora copulata, Diploneis parma, 止水性の Staurosira construens var. venter, 水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の Diadesmis confervacea 等が産出する。

表4-5 II区2地点硅藻分析結果(1)

種類	生態性			環境 指標種	上段:分析地点 下段:試料番号					
	塩分	pH	流水		2地点					
					3	6	7	8	10	12
Centric Diatoms (中心型珪藻類)										
Azpeitia nodulifera (A.Schmidt) Fryxell et Sims	Euh				-	-	-	-	1	-
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh			E2	3	123	64	65	200	32
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh - Meh	al - il	l - ph	L, S	-	1	-	-	-	3
Cyclotella radiosa (Grun.) Lemm.	Ogh - ind	al - il	l - bi	M, U	-	-	-	-	-	3
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh - ind	al - il	l - bi	N, U	-	-	-	-	-	2
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh - ind	ac - il	l - ph		-	-	-	1	-	-
Aulacoseira crenulata (Ehr.) Krammer	Ogh - ind	ind	l - ph		-	2	-	-	1	-
Aulacoseira granulata (Ehr.) Simonsen var. granulata	Ogh - ind	al - il	l - bi	M, U	-	-	-	-	-	1
Melosira varians Agardh var. varians	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, U	1	-	-	-	-	-
Araphidineae (無縱溝類)										
Thalassionema nitzschioides (Grun.) Grunow	Euh			A, B	-	-	1	-	-	-
Ctenophora pulchella (Ralfs ex Kuetz.) Williams & Round	Meh				-	2	2	1	-	-
Opephora martyi Heribaud	Meh			D1	-	3	3	1	-	2
Tabularia tabulata (Ag.) Snoeijis	Meh				3	3	3	4	-	1
Thalassiosira lacustris (Grun.) Hasle	Meh				13	-	2	5	1	7
Pseudostaurosira brevistriata (Grun.) Williams & Round	Ogh - Meh	al - il	l - ph	U	4	28	22	9	-	23
Fragilaria capucina Desmazieres var. capucina	Ogh - ind	al - il	ind	T	2	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh - ind	al - il	l - ph	T	-	-	2	-	-	5
Fragilaria capucina var. perminuta (Grun.) Lange - Bertalot	Ogh - ind	al - il	ind		1	-	-	-	-	-
Fragilaria rumpens var. fragilarioides (Grun.) Cleve - Euler	Ogh - ind	al - bi	l - ph	T	-	-	-	-	-	1
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen var. vaucheriae	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	-	-	-	-	-	1
Fragilariforma exigua (Grun.) D.M.Williams & Round	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	-	-	-	-	3
Fragilariforma virescens (Ralfs) Williams & Round	Ogh - ind	ac - il	l - ph	U	-	-	1	-	-	1
Staurosira construens Ehrenberg var. construens	Ogh - ind	al - il	l - ph	U	1	1	2	-	-	9
Staurosira construens var. binodis (Ehren.) Hamilton	Ogh - ind	al - il	l - ph	U	-	-	2	-	-	1
Staurosira construens var. venter (Ehren.) Kawashima & Kob.	Ogh - ind	al - il	l - ph	S	7	1	7	-	-	10
Staurosirella leptostauron (Ehr.) Williams & Round	Ogh - ind	al - il	l - ph	T	1	-	-	-	-	-
Synedra ulna (Nitzsch) Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	ind	U	4	-	2	4	1	3
Synedra ungeriana var. pseudogaillonii (H.Kobayasi et Idei)	Ogh - ind	al - il	r - ph	S	-	-	-	3	-	-
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh - hob	ac - il	l - bi	T	-	-	-	-	-	2
Monoraphid Pennate Diatoms (單縱溝羽狀珪藻類)										
Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.) Cleve	Meh			D1	-	-	-	-	-	1
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh - ind	al - bi	r - ph	T	1	-	1	-	-	-
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	1	-	-	-	-	-
Achnanthes lapidosa Krasske	Ogh - ind	ac - il	ind	T	1	-	-	-	-	-
Achnantheidium minutissimum (Kuetz.) Czarn.	Ogh - ind	al - il	ind	U	1	-	-	-	-	2
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	5	-	-	2	-	1
Cocconeis lineata Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	3	-	-	2	2	1
Cocconeis placentula Ehr. var. placentula	Ogh - ind	al - il	ind	U	1	-	-	-	1	4
Karayevia clevei (Grun.) Round et Bukhtiyarova	Ogh - ind	al - il	ind	T	1	-	-	-	-	-
Planothidium lanceolatum (Breb.) Round et Bukhtiyarova	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	2	-	3	-	-	1
Biraphid Pennate Diatoms (雙縱溝羽狀珪藻類)										
Amphora copulata (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh - ind	al - il	ind	U	8	1	1	2	-	1
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh - Meh	al - il	ind		1	-	1	-	-	-
Amphora montana Krasske	Ogh - ind	ind	ind	RA, U	3	-	-	-	-	1
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow var. pediculus	Ogh - ind	al - bi	ind	T	2	-	-	-	-	-
Amphora proteus Gregory	Euh - Meh				-	3	-	1	-	-
Amphora strigosa Hustedt	Meh				15	-	1	1	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve var. bacillum	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	-	-	-	-	-	1
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh - ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-
Caloneis molaris (Grun.) Krammer	Ogh - ind	ind	ind		-	1	1	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve var. silicula	Ogh - ind	al - il	ind		-	-	1	-	-	-
Caloneis spp.	Meh				-	1	-	-	1	-
Craticula spp.	Ogh - unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
Cymbella leptoceros (Ehr.) Kuetzing	Ogh - ind	al - bi	l - ph	T	-	1	2	6	7	12
Cymbella tumida (Breb.) Van Heurck	Ogh - ind	al - il	ind	T	1	-	4	1	1	3
Cymbella tumida var. gracilis Hustedt	Ogh - ind	al - il	l - ph	T	-	1	1	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	2	-	-	1	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	7	-	1	1	-	-
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald) Krammer	Ogh - ind	ind	ind	O	1	-	-	-	-	-
Diademsis confervacea Kuetzing	Ogh - ind	al - bi	ind	RB, S	8	-	1	1	-	-
Diademsis contenta var. biceps (Arnott ex Grunow) Hamilton	Ogh - ind	al - il	ind	RA, T	1	-	-	-	-	-
Diploneis litoralis (Donk) Cleve	Euh				-	-	-	-	1	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve var. ovalis	Ogh - ind	al - il	ind	T	4	1	1	1	-	-
Diploneis parva Cleve	Ogh - ind	ind	ind		8	2	2	-	-	-
Diploneis pseudovalis Hustedt	Meh				1	2	2	3	2	-
Diploneis smithii (Breb.) Cleve	Euh - Meh			E1	8	6	5	6	8	6
Diploneis smithii var. rhombica Mereschkowsky	Euh - Meh				1	-	-	-	-	-
Diploneis suborbicularis (Greg.) Cleve	Euh			E1	-	-	4	11	1	1
Encyonema mesianum (Kholnoky) D.G.Mann	Ogh - ind	ind	ind	T	1	1	-	-	-	-

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

表4-6 II区2地点珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	上段：分析地点 下段：試料番号					
	塩分	pH	流水		2地点					
					3	6	7	8	10	12
Encyonema silesiacum (Bleisch) D.G.Mann	Ogh - ind	ind	ind	T	2	-	-	1	-	5
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni var. vulgaris	Ogh - ind	al - il	ind	U	2	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh - ind	al - il	ind		1	-	-	-	-	-
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh - ind	ind	ind		-	-	-	-	-	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh - ind	al - bi	r - ph	T	3	-	-	1	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	O, U	1	-	-	-	-	-
Gomphonema inaequilonum (H.Kobayasi) H.Kobayasi	Ogh - ind	ind	r - ph		1	-	-	1	-	-
Gomphonema lagenula Kuetzing	Ogh - ind	ind	r - ph	S	1	-	2	-	-	1
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh - ind	ind	ind	U	17	-	1	1	-	1
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange - Bertalot	Ogh - ind	al - il	ind		3	-	-	-	-	-
Gomphonema rhombicum Fricke	Ogh - ind	ind	r - ph	U	-	-	-	2	-	-
Gomphonema spp.	Ogh - unk	unk	unk		3	-	-	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh - ind	ind	l - ph	T	-	-	1	6	1	1
Gomphonema vastum Hustedt	Ogh - unk	unk	ind		4	-	-	-	-	1
Gyrosigma nodiferum (Grun.) G.West	Ogh - Meh	al - il	ind		2	-	-	2	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh - ind	al - il	r - ph		2	-	-	-	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch) D.G.Mann	Ogh - ind	ind	ind	T	2	-	-	1	-	5
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni var. vulgaris	Ogh - ind	al - il	ind	U	2	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh - ind	al - il	ind		1	-	-	-	-	-
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh - ind	ind	ind		-	-	-	-	-	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh - ind	al - bi	r - ph	T	3	-	-	1	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	O, U	1	-	-	-	-	-
Gomphonema inaequilonum (H.Kobayasi) H.Kobayasi	Ogh - ind	ind	r - ph		1	-	-	1	-	-
Gomphonema lagenula Kuetzing	Ogh - ind	ind	r - ph	S	1	-	2	-	-	1
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh - ind	ind	ind	U	17	-	1	1	-	1
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange - Bertalot	Ogh - ind	al - il	ind		3	-	-	-	-	-
Gomphonema rhombicum Fricke	Ogh - ind	ind	r - ph	U	-	-	-	2	-	-
Gomphonema spp.	Ogh - unk	unk	unk		3	-	-	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh - ind	ind	l - ph	T	-	-	1	6	1	1
Gomphonema vastum Hustedt	Ogh - unk	unk	ind		4	-	-	-	-	1
Gyrosigma nodiferum (Grun.) G.West	Ogh - Meh	al - il	ind		2	-	-	2	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh - ind	al - il	r - ph		2	-	-	-	-	-
Hippodonta linearis (Oestrup) Lange - B., Metzeltin et Witkowski	Ogh - Meh	al - il	ind	U	-	-	-	-	-	1
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh - ind	al - il	ind	RA, S	1	1	1	-	-	1
Navicula capitata var. hungarica (Grun.) Ross	Ogh - Meh	al - il	ind	U	-	-	-	1	-	-
Navicula cincta (Ehr.) Kuetzing	Ogh - Meh	al - il	ind		-	-	1	-	-	-
Navicula comoides (Dillwgn) Peragallo	Meh			D2	3	-	-	-	-	-
Navicula formenterae Cleve	Euh - Meh				-	1	5	6	-	-
Navicula gregaria Donkin	Ogh - Meh	al - il	ind	U	-	-	2	1	-	-
Navicula kotschyi Grunow	Ogh - ind	al - il	ind		-	-	1	-	-	-
Navicula marina Ralfs	Euh - Meh			E1	-	2	1	-	-	-
Navicula oppugnata Hustedt	Ogh - ind	al - il	ind	T	-	-	1	-	-	-
Navicula peregrina (Ehr.) Kuetzing	Meh				-	-	3	1	1	8
Navicula peregrina var. hankensis Skvortzow	Meh				-	-	-	-	-	1
Navicula yarrensensis Grunow	Meh				-	-	1	-	-	-
Navicula spp.	Meh				-	1	-	-	-	-
Navicula pseudolanceolata Lange - Bertalot	Ogh - ind	ac - il	ind	U	1	-	-	-	-	-
Navicula rostellata Kuetzing	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, U	-	1	3	-	-	-
Navicula sanctaerucis Oestrup	Ogh - Meh	al - il	ind		-	-	-	-	-	1
Navicula subcostulata Hustedt	Ogh - ind	ind	ind		-	1	-	-	-	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogh - Meh	al - il	ind	S	1	-	1	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, U	2	-	1	-	-	-
Navicula spp.	Ogh - unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh - ind	ac - il	ind	O, U	1	-	-	1	-	1
Pinnularia lundii Hustedt	Ogh - ind	ind	l - ph		-	-	-	-	-	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh - hob	ac - il	l - ph	O	1	-	1	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh - hob	ac - il	ind		-	1	1	-	-	-
Pinnularia similis Hustedt	Ogh - ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh - ind	ac - il	ind		1	-	-	-	-	-
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh - hob	ac - il	l - ph		1	1	-	-	-	-
Pinnularia transversa (A.Schmidt) Mayer	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	-	-	1	-	-
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	1	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh - unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-
Placoneis elginensis (Greg.) E.J.Cox	Ogh - ind	al - il	ind	O, U	-	-	1	-	-	-
Placoneis elginensis var. neglecta (Krasske) H.Kobayasi	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	2	-	3	-	-	-
Reimeria sinuata (W.Greg.) Kocielek et Stoermer	Ogh - ind	ind	r - ph	K, T	9	-	1	-	-	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh - ind	al - il	ind		-	-	1	2	-	6
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh - Meh	al - il	ind		2	-	-	1	-	2
Rhopalodia musculus (Kuetz.) O.Muller	Meh				1	1	2	-	1	-
Tryblionella granulata (Grunow) D.G.Mann	Meh			E1	1	1	1	-	2	6

表4-7 II区2地点珪藻分析結果(3)

種類	生態性			環境 指標種	上段：分析地点 下段：試料番号						
	塩分	pH	流水		2地点						
					3	6	7	8	10	12	
管縦溝類											
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	1	13	36	1	13	
<i>Epithemia sores</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	-	-	-	1	
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2	-	-	
<i>Epithemia turgida</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	1	-	-	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	1	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow var. <i>amphibia</i>	Ogh-ind	al-bi	ind	S-U	1	-	-	-	-	4	
<i>Nitzschia compressa</i> (Bailey) Boyer	Meh			E1	-	1	-	-	-	-	
<i>Nitzschia compressa</i> var. <i>balatonis</i> (Grun.) Lange - Bertalot	Meh			E1	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	-	-	1	-	-	-	
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	2	-	6	
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		2	-	-	1	-	2	
<i>Rhopalodia musculus</i> (Kuetz.) O.Muller	Meh				1	1	2	-	1	-	
<i>Tryblionella granulata</i> (Grunow) D.G.Mann	Meh			E1	1	1	1	-	2	6	
翼管縦溝類											
<i>Campylodiscus echeneis</i> Ehrenberg	Meh				-	2	-	1	1	-	
短縦溝類											
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	-	-	-	-	1	
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow var. <i>minor</i>	Ogh-hob	ind	ind	O, T	3	-	-	-	-	-	
<i>Eunotia monodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	1	-	-	-	
海水生種					0	0	5	11	3	1	
海水～汽水生種					9	12	11	13	8	6	
汽水生種					40	140	86	82	209	58	
淡水～汽水生種					10	29	27	14	0	30	
淡水生種					150	19	73	81	15	109	
珪藻化石総数					209	200	202	201	235	204	

H.R.: 塩分濃度 pH: 水素イオン濃度 C.R.: 流水

Meh: 汽水生種 al-bi: 真アルカリ性種 l-bi: 真止水性種

Ogh-Meh: 淡水～汽水生種 al-il: 好アルカリ性種 l-ph: 好止水性種

Ogh-hil: 貧塩好塩性種 ind: pH不定性種 ind: 流水不定性種

Ogh-ind: 貧塩不定性種 ac-il: 好酸性種 r-ph: 好流水性種

Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種 ac-bi: 真酸性種 r-bi: 真流水性種

Ogh-unk: 貧塩不明種 unk: pH不明種 unk: 流水不明種

環境指標種群

B: 内湾指標種, D1: 海水砂質干潟指標種, E1: 海水泥質干潟指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)

K: 中～下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着性種,

P: 高層湿原指標種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI: 未区分, 伊藤・堀内, 1991)

ii IV区

分析結果を表4-8～10, 図4-4に示す。何れの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は, 試料10以深は約80%と高かったが, 上位に向かって約70%から約20%へと低下する。産出分類群数は, 162分類群である。

試料14～9では, 汽水生種が全体の50～85%と優占する。主要種は, *Pseudopodosira kosugii*が60%前後と優占することを特徴とする。試料14では, 優占種に加えて淡水域に生育する水生珪藻(以下, 水生珪藻と言う)の *Staurosira construens*, その変種の *Staurosira construens* var. *binodis*, *Staurosira construens* var. *venter*等を伴う。試料13～10では, 優占種に加えて海水泥質干潟指標種群の *Tryblionella granulata*, *Pseudostaurosira brevistriata*等を伴う。試料番号9では, 優占種に加えて淡水付着性で流水不定性の *Epithemia adnata*, *Staurosira construens*, その変種の *Staurosira construens* var. *binodis*, *Staurosira construens* var. *venter*等を伴う。

試料8では, 淡水生種が約55%, 汽水生種と淡水～汽水生種がそれぞれ約20%産出する。特徴は, 前帯で優占した *Pseudopodosira kosugii*は急減する。代わって, *Pseudostaurosira brevistriata*, が約10%と多産し, 汽水生で底生移動型の *Navicula peregrina*, 淡水付着性の *Diploneis ovalis*, 腐植栄養性の止水域に出現する *Fragilariforma exigua*等を伴う。

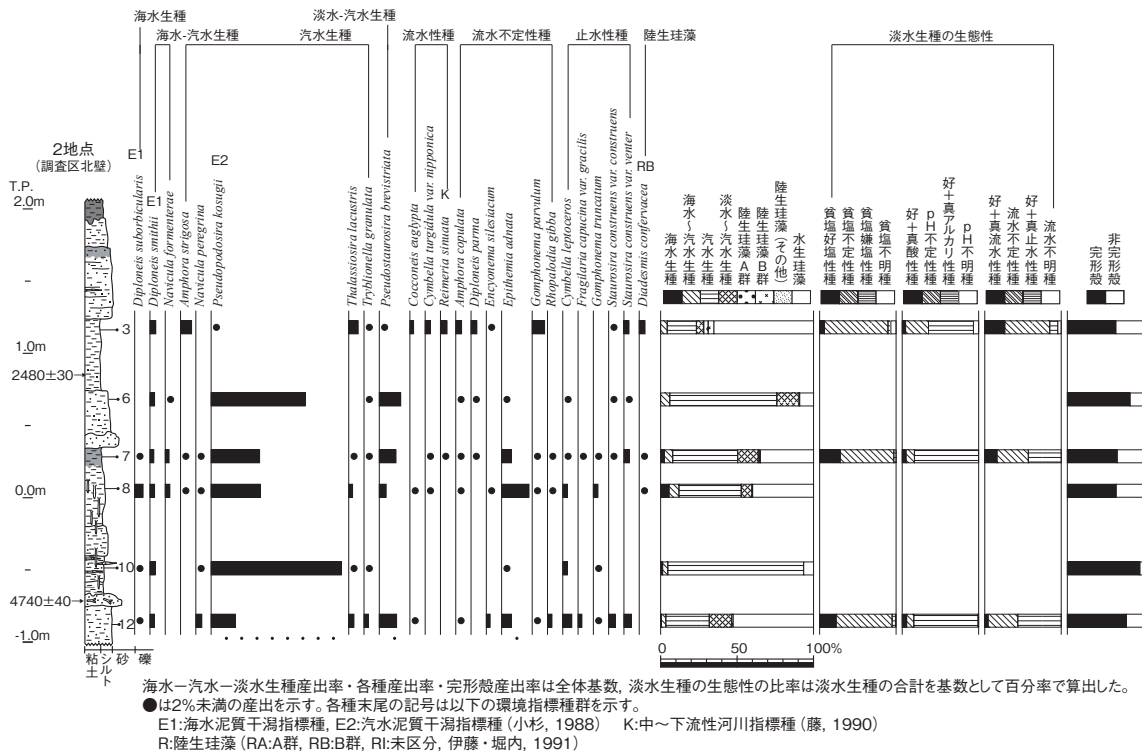


図4-3 II区2地点の主要珪藻化石群集の層位分布

試料7・6では、淡水生種が全体の約80%と優占し、汽水生種は約10%、淡水～汽水生種等を伴う。淡水生種の生態性は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種と真+好流水性種が優占あるいは多産する。主な産出種の特徴は、流水不定性のDiploneis parmaが約20%と多産し、淡水付着性のDiploneis ovalis、流水性で中～下流性河川指標種群のCymbella turgidula、Rhoicosphenia abbreviata、好流水性のAchnanthes inflata、Cocconeis euglypta、それに汽水付着性のDiploneis pseudovalis等を伴う。

試料5では、淡水生種が全体の約85%と優占する。また、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生珪藻も低率ながら産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水性種と流水不定性種が優占あるいは多産する。主な産出種の特徴は、流水性で中～下流性河川指標種群のCymbella turgidulaが約20%と多産し、同じく中～下流性河川指標種群のRhoicosphenia abbreviata、好流水性のGomphonema inaequilongum、流水不定性のSynedra ulna、Cymbella tumida等を伴う。また、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群のLuticola muticaを伴う。

③ 花粉分析

i II区

結果を表4-11・12, 図4-5～7に示す。図表中で複数の種類(分類群)をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、産出種類を+で表示するにとどめておく。いずれの試料からも花粉化石が産出するものの、地点により花粉化石の保存状態が大きく異なる。以下、地点ごとに述べる。

1 地点

本地点の花粉化石は、保存状態が非常に悪く、花粉外膜が溶解あるいは破損しているものが多く

表4-8 IV区1地点珪藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	上段:分析地点 下段:試料番号															
	塩分	pH	流水		1地点															
					5	6	7	8	9	10	11	12	13	14						
Centric Diatoms (中心型珪藻類)																				
Hydrosera whampoensis (A.F.Schwarz) Deby	Ogh - Meh	al - il	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Terpsionoe americana (Bail.) Ralfs	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Chaetoceros spp.					-	-	-	-	2	-	-	4	1	3	1					
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh - ind	al - il	l - bi	N, U	-	-	-	-	5	-	-	4	-	2						
Aulacoseira granulata (Ehr.) Simonsen	Ogh - ind	al - il	l - bi	M, U	-	-	1	3	2	2	1	1	2	2						
Coscinodiscus rudolfii Bachmann	Meh				-	-	2	1	-	-	-	-	3	-						
Coscinodiscus spp.	Euh				1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Actinoptychus senarius (Ehr.) Ehrenberg	Euh			A	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Melosira varians Agardh	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, U	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh			E2	2	3	3	7	83	147	101	132	114	103						
Paralia sulcata (Ehr.) Cleve	Euh			B	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella striata (Kuetz.) Grunow	Euh - Meh			B	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella striata - C. stolorum	Euh - Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh - Meh	al - il	l - ph	L, S	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Thalassiosira lacustris (Grun.) Hasle	Meh				-	6	2	5	-	4	1	-	1	1						
Araphidineae (無縱溝類)																				
Ctenophora pulchella (Ralfs ex Kuetz.) Williams & Round	Meh				-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh - ind	al - il	ind	T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilariforma exigua (Grun.) D.M. Williams & Round	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Fragilariforma virescens (Ralfs) Williams & Round	Ogh - ind	ac - il	l - ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs) V.Heurck	Ogh - ind	al - il	r - bi	K, T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Opephora martyi Heribaud	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1						
Pseudostaurosira brevistriata (Grun.) Williams & Round	Ogh - Meh	al - il	l - ph	U	-	1	-	23	1	5	4	3	22	4						
Staurosira construens Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	U	-	-	-	1	9	1	-	3	7	11						
Staurosira construens var. binodis (Ehren.) Hamilton	Ogh - ind	al - il	l - ph	U	-	-	-	1	15	2	-	2	3	9						
Staurosira construens var. venter (Ehren.) Kawashima & Kob.	Ogh - ind	al - il	l - ph	S	-	-	-	3	16	1	-	2	4	10						
Synedra lanceolata Kuetzing	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Synedra ulna (Nitzsch) Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	ind	U	8	5	6	2	2	1	1	2	-	2						
Tabularia tabulata (Ag.) Snoeijis	Meh				-	2	-	-	1	1	4	-	1	1						
Delphineis surirella (Ehr.) G.Andrews	Euh - Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh - hob	ac - il	l - bi	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Monoraphid Pennate Diatoms (單縱溝羽狀珪藻類)																				
Achnanthes brevipes Agardh	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.) Cleve	Meh			D1	-	-	1	-	-	-	8	-	-	1						
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	2	5	10	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Karayevia clevei (Grun.) Round et Bukhtiyarova	Ogh - ind	al - il	ind	T	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Planothidium lanceolatum (Breb.) Round et Bukhtiyarova	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Achnantheidium exiguum (Grunow) Czarm.	Ogh - ind	al - il	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	1	4	7	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis lineata Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	-	2	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placentula Ehr.	Ogh - ind	al - il	ind	U	1	3	2	1	4	2	1	1	1	2						
Cocconeis spp.	Ogh - unk	unk	unk		2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Biraphid Pennate Diatoms (雙縱溝羽狀珪藻類)																				
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh - Meh	al - il	ind		3	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora copulata (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	2	4	5	3	-	2	-	1	2						
Amphora inariensis Krammer	Ogh - ind	al - il	ind	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh - ind	al - il	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2						
Cymbella affinis Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh - ind	al - il	ind	O, T	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh - ind	ind	ind	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella leptoceros (Ehr.) Kuetzing	Ogh - ind	ind	ind	T	-	1	-	-	2	7	10	3	1	7						
Cymbella tumida (Breb.) Van Heurck	Ogh - ind	al - il	ind	T	7	3	5	1	1	1	3	-	1	-						
Cymbella turgidula Grunow	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	17	7	15	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	2	3	4	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh - unk	unk	unk		11	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald) Krammer	Ogh - ind	ind	ind	O, U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1					
Encyonema silesiacum (Bleisch) D.G.Mann	Ogh - ind	ind	ind	T	1	-	3	5	-	-	1	-	-	1						
Placoneis elginensis (Greg.) E.J.Cox	Ogh - ind	al - il	ind	O, U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Placoneis gastrum (Ehrenb.) Mereschkowsky	Ogh - ind	al - il	l - ph		-	-	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh - ind	ind	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema augur var. gautieri V.Heurck	Ogh - ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh - ind	ind	r - ph	T	2	3	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema contraturris Lange - B. & Reichardt	Ogh - ind	al - il	l - ph		1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	O, U	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema inaequilongum (H.Kobayasi) H.Kobayasi	Ogh - ind	ind	r - ph		5	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema lagenula Kuetzing	Ogh - ind	ind	r - ph	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

表4-9 IV区1地点珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	上段：分析地点 下段：試料番号													
	塩分	pH	流水		1地点													
					5	6	7	8	9	10	11	12	13	14				
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh - ind	ind	ind	U	1	3	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange - Bertalot	Ogh - ind	al - il	ind		-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh - ind	ind	r - bi	J	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	T	-	1	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-		
Gomphonema vastum Hustedt	Ogh - unk	unk	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
Reimeria sinuata (W.Greg.) Kociolek et Stoermer	Ogh - ind	ind	r - ph	K, T	2	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Rhoicosphenia abbreviata (C.Agardh) Lange - B.	Ogh - hil	al - il	r - ph	K, T	5	8	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Petronis granulata (Bailey) D.G.Mann in Round et al.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-		
Petronis marina (Ralfs) D.G.Mann in Round et al.	Euh - Meh			E1	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-		
Diploneis suborbicularis (Greg.) Cleve	Euh			E1	-	-	-	1	2	4	3	1	-	3	-	-		
Diploneis interrupta (Kuetz.) Cleve	Euh - Meh				-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
Diploneis smithii (Breb.) Cleve	Euh - Meh			E1	-	1	6	3	3	4	10	3	2	2	-	-		
Diploneis smithii var. rhombica Mereschkowsky	Euh - Meh				-	-	6	2	-	-	1	1	-	-	-	-		
Diploneis pseudovalis Hustedt	Meh				-	10	5	3	1	3	4	5	2	2	-	-		
Diploneis oblongella (Naegeli) Cleve - Euler	Ogh - ind	al - il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh - ind	al - il	ind	T	-	15	15	14	5	-	1	-	2	-	-	-		
Diploneis parma Cleve	Ogh - ind	ind	ind		-	39	41	6	-	-	1	-	-	-	-	-		
Diploneis spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula formenterae Cleve	Euh - Meh				-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	2	-		
Navicula sp. - 5	Euh - Meh				-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-		
Navicula comoides (Dillwgn) Peragallo	Meh			D2	-	1	6	2	-	1	-	-	-	-	-	-		
Navicula peregrina (Ehr.) Kuetzing	Meh				-	-	-	9	3	1	2	-	1	1	-	-		
Navicula yarrensii Grunow	Meh				-	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula cincta (Ehr.) Kuetzing	Ogh - Meh	al - il	ind	T	-	-	-	3	-	-	-	1	-	-	-	-		
Navicula gregaria Donkin	Ogh - Meh	al - il	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula angusta Grunow	Ogh - ind	ind	ind	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula capitatoradiata Lange - Bertalot	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula murrayi W. et G.S.West.	Ogh - unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-		
Navicula rostellata Kuetzing	Ogh - ind	al - il	r - ph	K, U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh - ind	ind	l - ph	RI	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-		
Navicula spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	-	-	3	-	1	1	1	1	-	-	-		
Gyrosigma exoticum Chohn.	Meh				-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
Gyrosigma nodiferum (Grun.) G.West	Ogh - Meh	al - il	ind		-	5	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-		
Gyrosigma procerum Hustedt	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	-	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-		
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh - ind	al - il	ind	S	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Craticula spp.	Ogh - unk	unk	unk		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh - ind	ind	l - ph	O, U	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-		
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh - ind	ind	ind	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Stauroneis spp.	Ogh - unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
Cosmioneis pusilla (W.Smith) Mann & Stickle	Ogh - Meh	ind	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Diademsis confervacea Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	RB, S	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
Diademsis contenta (Grun.) ex Van Heurck D.G.Mann	Ogh - ind	al - il	ind	RA, T	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Luticola goeppertiana (Bleisch) D.G.Mann	Ogh - hil	al - il	ind	S	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh - ind	al - il	ind	RA, S	4	1	6	5	2	-	-	1	2	-	-	-		
Luticola saxophila (Bock ex Hustedt) D.G.Mann	Ogh - ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Neidium ampliutum (Ehr.) Krammer	Ogh - ind	ac - il	l - ph		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Caloneis rhombica H.Kobayashi	Meh				-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Caloneis westii (W.Smith) Hendey	Meh				-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-		
Caloneis leptosoma Krammer & Lange - Bertalot	Ogh - ind	ind	l - ph	RB	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Caloneis minuta (Grunow) Ohtsuka et Fujita	Ogh - ind	al - il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh - ind	al - il	ind		-	-	-	4	1	1	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia elegans (W.Smith) Krammer	Euh - Meh				-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh - ind	al - il	l - ph	O	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia episcopalis Cleve	Ogh - hob	ac - il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh - ind	ac - il	ind	O, U	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh - hob	ac - il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh - ind	ac - il	ind	S	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh - ind	ac - il	l - bi		-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia nobilis Ehrenberg	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia ornata H.Kobayasi	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh - hob	ac - il	ind		-	1	2	3	-	-	1	-	-	-	-	-		
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh - ind	ac - il	ind		-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-		
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh - ind	ac - il	ind	RB, S	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh - hob	ac - il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-		
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh - ind	ind	ind	O, U	-	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

表4-10 IV区1地点珪藻分析結果(3)

種 類	生態性			環境	上段:分析地点 下段:試料番号														
	塩分	pH	流水		指標種	1地点													
						5	6	7	8	9	10	11	12	13	14				
Pinnularia spp.	Ogh - unk	unk	unk			2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh - ind	al - il	l - ph			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1			
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh - ind	ind	ind	S		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
Sellaphora rectangularis (Greg.) Lange - B.& Metzeltin	Ogh - ind	ind	ind			-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-			
管絃溝類																			
Giffenia cocconeiformis (Grun.) Round, F.E. & Basson, P.W.	Meh					-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1			
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh - ind	ind	ind	RA, U		1	4	1	2	-	-	-	-	-	-	-			
Nitzschia sigma (Kuetz.) W.Smith	Euh - Meh			E2		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
Nitzschia circumscuta (Bail.) Grunow	Meh					-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-			
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh - Meh	ind	ind	S		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-			
Nitzschia hantzschiana (Kuetz.) Grunow	Ogh - ind	al - bi	ind	U		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
Nitzschia nana Grunow	Ogh - ind	ind	ind	RB, S		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-			
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh - ind	ind	ind	U		1	1	1	1	-	-	-	1	-	-	-			
Nitzschia sigmoidea (Ehr.) W.Smith	Ogh - ind	al - bi	ind	T		-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-			
Tryblionella coarctata (Grun.) in Cleve & Grun.) D.G.Mann	Euh - Meh					-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-			
Tryblionella granulata (Grunow) D.G.Mann	Meh			E1		-	-	-	-	-	-	3	14	9	8				
Tryblionella plana (W.Sm.) Pelletan	Meh					-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
Tryblionella salinarum (Grunow) Pelletan	Meh					-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-			
Tryblionella victoriae Grunow	Ogh - Meh	al - il	ind	U		-	-	4	3	2	-	-	-	-	-	-			
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh - ind	al - bi	ind	T		1	5	2	5	27	7	17	4	1	7				
Epithemia sorex Kuetzing	Ogh - ind	al - bi	l - ph	T		-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	1			
Epithemia turgida (Ehr.) Kuetzing	Ogh - ind	al - il	l - ph	T		-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	2			
Epithemia spp.	Ogh - unk	unk	unk			3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
Rhopalodia musculus (Kuetz.) O.Muller	Meh					-	-	-	-	-	-	5	3	1	1				
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh - Meh	al - il	ind	U		-	1	1	4	1	-	1	-	-	-	-			
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh - ind	al - il	ind	U		-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-			
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh - hil	al - il	r - ph			1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
翼管絃溝類																			
Campylodiscus clypeus (Ehr.) Ehrenberg ex Kuetzing	Euh					-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-			
Campylodiscus echemeis Ehrenberg	Meh					-	-	1	1	1	-	1	1	1	-	-			
Surirella tenera Gregory	Ogh - hob	al - il	l - ph	U		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
短絃溝類																			
Eunotia bigibba Kuetzing	Ogh - hob	ac - bi	ind	RB		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh - hob	ac - il	l - bi	T		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh - hob	ac - il	ind	O, U		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
Eunotia minor (Kuetz.) Grunow	Ogh - hob	ind	ind	O, T		1	1	1	1	-	-	-	-	2	-	-			
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs) Rabenhorst	Ogh - hob	ac - il	ind	O		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
Eunotia praeurupta var. bidens (Ehren.) Grunow	Ogh - hob	ac - il	l - ph	RB, O, T		1	1	2	5	-	-	-	-	1	1				
Eunotia tschirchiana Muell.	Ogh - ind	al - il	unk			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
海水生種						1	0	1	1	2	4	4	3	1	4				
海水-汽水生種						1	1	12	7	3	8	14	5	5	5				
汽水生種						2	22	22	36	91	159	132	156	133	121				
淡水-汽水生種						3	10	7	35	4	6	5	6	23	4				
淡水生種						100	172	164	128	102	28	47	33	36	66				
珪藻化石総数						102	205	206	207	202	205	202	203	198	200				

珪藻の適応性

H.R.:塩分濃度 pH:水素イオン濃度 C.R.:流水
 Meh:汽水生種 al - bi:真アルカリ性種 l - bi:真止水性種
 Ogh - Meh:淡水-汽水生種 al - il:好アルカリ性種 l - ph:好止水性種
 Ogh - hil:貧塩好塩性種 ind: pH不定性種 ind:流水不定性種
 Ogh - ind:貧塩不定性種 ac - il:好酸性種 r - ph:好流水性種
 Ogh - hob:貧塩嫌塩性種 ac - bi:真酸性種 r - bi:真流水性種
 Ogh - unk:貧塩不明種 unk: pH不明種 unk:流水不明種

環境指標種群

B:内湾指標種, D1:海水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)
 K:中~下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着種,
 P:高層湿原指標種(以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

見受けられる。花粉化石群集は層位的に多少変化する。試料2ではアカガシ亜属が多産し、シイノキ属や針葉樹のスギ属・ツガ属などを伴う組成を示すが、試料1ではアカガシ亜属や針葉樹の種類が減少傾向を示し、シイノキ属やクリ属が増加する。草本花粉は層位的にほとんど変化せず、イネ科が最も多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの、水生~湿地生植物に由来する種類も産出する。

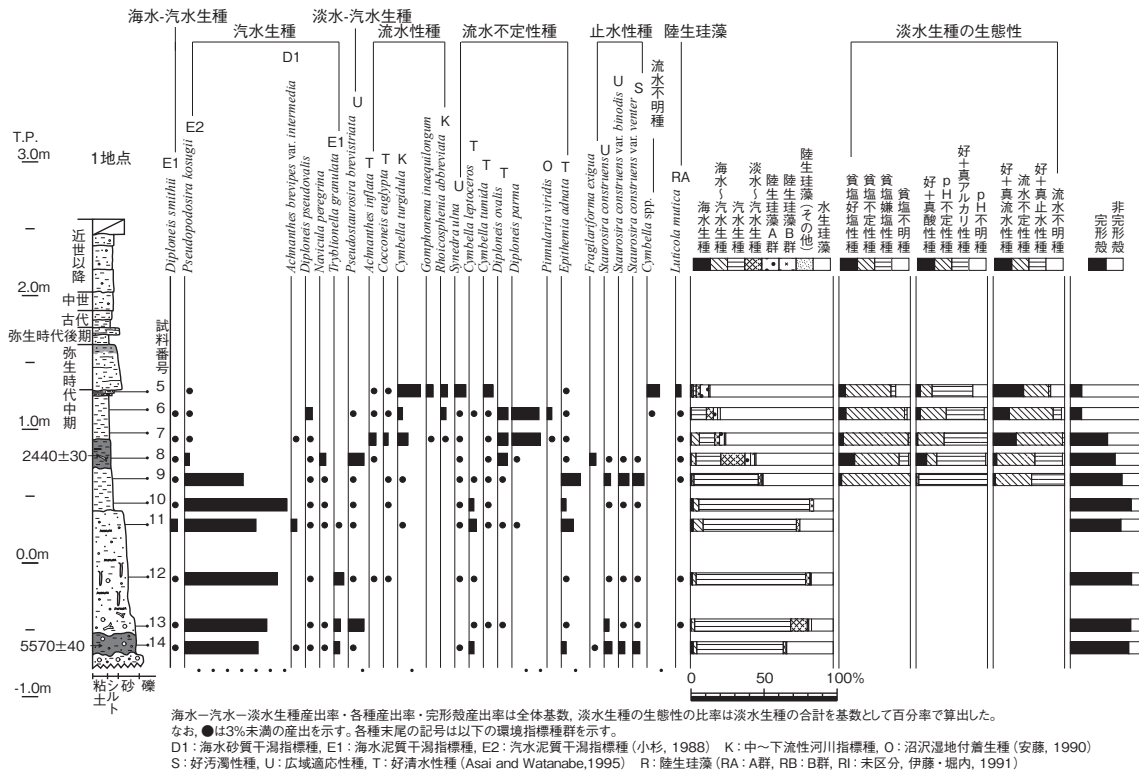


図4-4 IV区1地点の主要珪藻化石群集の層位分布

2地点

本地点の花粉化石は、いずれの試料も保存状態が良好である。花粉化石群集は試料7から3にかけて層位的に変化する。試料10～7では常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産し、常緑広葉樹のシイノキ属、落葉広葉樹のコナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属、針葉樹のツガ属・スギ属などを伴う。試料10～7ではカヤツリグサ科が比較的多産し、イネ科や抽水植物のガマ属、浮葉植物のフサモ属などを伴う組成を示す。

試料3～1になると、草本花粉の割合が増加する。木本花粉では、常緑広葉樹のアカガシ亜属・シイノキ属が増加し、両種類で60%前後を占めるようになる。これに対して、ツガ属などの針葉樹やコナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹の割合が減少ないし産出しなくなる。草本花粉ではイネ科が30%前後と高率に産出するようになり、産出する種類数も増加する。

3地点

本地点の花粉化石は、保存状態・産出状況とも良好である。花粉化石群集は草本花粉が高率を占める。木本花粉では常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産し、次いで針葉樹のマツ属(複維管束亜属)・シイノキ属が12%前後の産出率を示す。草本花粉ではイネ科が多産し、抽水植物のガマ属・オモダカ属・イボクサ属・ミズアオイ属や人里植物であるオオバコ属などを伴う。

ii IV区

結果を表4-11・12, 図4-8に示す。以下、地点ごとに述べる。

1地点

花粉化石は良好に産出する。花粉化石群集は、試料14と12, 試料9と8, 試料4と3の間の層準で層位的に変化する。

表4-11 花粉分析結果(1)

種類	上段：調査区 中段：分析地点 下段：試料番号																							
	II区										IV区													
	1		2				3				1										2		3	
	1	2	1	3	7	8	10	1	1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	14	1	1		
木本花粉	7	7	4	5	1	-	1	1	-	-	-	-	-	7	3	4	3	4	4	2	-	1		
マキ属	6	6	1	8	13	12	13	12	1	2	4	12	7	14	7	7	6	7	20	16	1	5		
モミ属	11	26	11	13	27	24	25	27	5	4	18	26	9	16	24	23	8	8	36	9	-	16		
ツガ属	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
トウヒ属	3	4	1	1	-	-	-	1	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
マツ属複雑管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	120	79	87	7	5	3	5	2	1	3	3	5	-	5	
マツ属(不明)	10	10	8	3	7	2	8	26	25	26	21	5	7	7	3	3	5	4	7	6	1	4		
コウヤマキ属	-	3	1	1	2	3	3	3	1	3	8	15	5	6	5	6	1	7	7	4	-	2		
スギ属	5	28	7	8	13	13	8	10	20	8	12	13	8	7	3	3	3	5	5	7	-	5		
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	12	1	2	5	2	2	5	1	5	4	12	13	13	29	27	39	10	18	5	-	21		
ヤナギ属	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヤマモモ属	8	5	11	4	7	7	5	15	3	4	9	5	12	5	7	7	8	2	4	4	1	10		
サワグルミ属	1	1	1	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
クルミ属	1	-	-	-	-	1	-	1	1	1	1	-	-	1	1	1	1	-	3	1	-	-		
クマシダ属-アサダ属	-	1	5	2	3	4	9	5	6	9	9	1	5	4	3	8	12	6	5	10	-	5		
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	1	-	2	-	-	1	3		
カバノキ属	-	1	-	4	-	1	1	4	-	2	4	-	-	2	-	-	-	-	2	-	-	-		
ハンノキ属	3	3	1	3	8	7	5	4	5	10	5	-	4	1	3	3	3	6	7	6	-	2		
ブナ属	-	4	2	4	1	3	3	4	5	4	1	-	1	-	4	2	1	1	2	9	1	3		
コナラ属コナラ亜属	5	5	2	12	19	18	27	3	14	12	14	7	18	8	24	31	23	32	19	25	-	11		
コナラ属アカガシ亜属	48	74	88	91	66	62	62	78	10	32	33	34	66	83	75	87	93	103	71	82	1	83		
クリ属	23	7	10	4	8	5	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
シイノキ属	68	29	55	49	21	34	25	34	-	2	9	17	40	47	24	15	38	26	8	18	3	51		
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	4	6	10	1	1	3	2	1	-	2	2	2	7	5	6	11	-	3		
エノキ属-ムクノキ属	-	1	-	1	1	1	5	1	1	1	-	-	-	-	1	4	4	3	5	6	-	2		
カツラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
シキミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
イスノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-		
カラスザンショウ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キハダ属	-	1	-	-	3	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-		
センダン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
ユズリハ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
アカメガシワ属	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-		
モチノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ニシキギ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カエデ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1		
トチノキ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-		
ブドウ属	-	1	1	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
ノブドウ属	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	2	-	1	-	-	-		
ウコギ科	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カキ属	1	-	-	-	4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ハイノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
エゴノキ属	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-		
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
テイカカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
クちなシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ミサオノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1		
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
草本花粉	3	2	1	20	17	14	6	119	-	1	1	3	1	10	132	15	14	7	18	3	-	20		
ガマ属	1	-	-	2	-	-	-	7	-	1	3	2	-	-	4	-	-	-	-	1	-	-		
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
スプラタ属	116	167	178	217	37	31	25	246	436	510	457	224	91	75	132	33	32	24	43	21	6	109		
イネ科	28	43	20	88	104	98	64	82	27	44	89	23	21	73	103	60	46	41	92	13	2	75		
カヤツリグサ科	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イボクサ属	-	2	-	8	1	-	-	5	15	17	12	3	-	-	13	-	-	-	-	-	-	2		
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
ユリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アヤメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
クワ科	4	6	-	1	3	1	-	1	-	-	7	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	41		
ギシギシ属	1	2	1	2	-	-	-	1	-	-	-	1	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
サナエタデ節-ウナギツカミ節	3	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	2	1	2	1	-	3	1	-	-		
タデ属	-	3	1	3	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-	5		
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

表4-12 花粉分析結果(2)

種 類	上段：調査区 中段：分析地点 下段：試料番号																							
	II区										IV区													
	1		2				3				1										2		3	
	1	2	1	3	7	8	10	1	1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	14	1	1		
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-		
アカザ科-ヒユ科	-	-	1	2	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ナデシコ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
コオホネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
カラマツソウ属	-	-	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
キンボウゲ科	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
アブラナ科	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
バラ科	3	-	1	2	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2		
マメ科	-	3	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
ミソハギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キカシグサ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	9	13	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヒシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4	-	-	-	-	-	1		
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アリノトウグサ属	-	-	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
フサモ属	-	-	-	1	4	14	1	-	-	-	-	-	-	-	1	3	12	-	2	-	-	4		
セリ科	3	4	2	2	-	2	1	1	-	1	-	4	4	1	-	2	-	1	1	-	1	6		
ネナンカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
シソ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キツネノマゴ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
オミナエシ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ゴキツル属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-		
ヨモギ属	7	12	11	13	4	4	4	4	4	6	10	4	12	5	3	1	2	2	-	4	2	21		
オナモミ属	1	3	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キク亜科	2	1	1	1	-	-	1	5	-	5	1	-	1	3	-	1	-	-	-	-	-	3		
タンポポ亜科	1	1	1	-	-	-	-	2	-	4	-	1	2	10	1	1	-	-	-	1	1	1		
不明花粉	24	15	17	15	10	8	11	51	-	5	3	8	11	14	5	2	5	8	7	4	11	2	12	
シダ類胞子																								
ヒカゲノカズラ属	3	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	3	1	1	-	1	2	-	1	1	-		
ゼンマイ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	2	-	-	-		
イノモトソウ属	11	11	2	2	9	9	11	3	-	9	4	1	39	15	7	1	1	4	10	7	14	14		
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
デンジソウ属近似種	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アカウキクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
他のシダ類胞子	144	82	63	54	77	82	78	81	-	187	87	46	123	112	80	14	7	12	33	58	21	43	74	
合 計																								
木本花粉	206	232	215	222	216	207	222	258	-	224	210	244	161	204	229	227	238	261	238	235	233	9	235	
草本花粉	178	252	222	368	173	168	104	481	-	508	605	587	280	144	168	397	125	107	74	163	44	10	291	
不明花粉	24	15	17	15	10	8	11	51	-	5	3	8	11	14	5	2	5	8	7	4	11	2	12	
シダ類胞子	158	93	65	59	86	92	89	85	-	201	97	48	165	129	89	16	9	15	38	71	29	57	88	
総計(不明を除く)	542	577	502	649	475	467	415	824	-	933	912	879	606	477	486	640	372	383	350	469	306	76	614	
その他の微化石																								
クンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	7	21	3	-	-	-	-	-	

試料14では木本花粉が高率を占め、その中ではアカガシ亜属が多産する。このほか、針葉樹のマキ属・ツガ属、常緑広葉樹のシイノキ属、落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属・コナラ亜属・トチノキ属などを伴う。

試料12~9になると草本の割合がやや増加する。木本花粉では依然としてアカガシ亜属が多産するが、針葉樹のツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が漸増し、試料11より上位層準では常緑広葉樹のシイノキ属も増加傾向を示すようになる。草本花粉では、カヤツリグサ科が最も多く産出し、イネ科、ガマ属、フサモ属、ヨモギ属などを伴う。試料9では、コオホネ属、ヒシ属などの水生植物も認められる。

試料8~4では、草本・シダ類胞子の割合が増加し、木本の割合が減少する。木本花粉組成は、試料12~9と類似するものの、針葉樹のイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科と落葉広葉樹のコナラ亜属がやや減少し、常緑広葉樹のシイノキ属が増加する。下位層に比べ草本花粉の割合が高くなり、特にイネ科の増加が顕著である。また、イネ科は上位の試料にむかって増加する傾向があり、カヤツリグサ

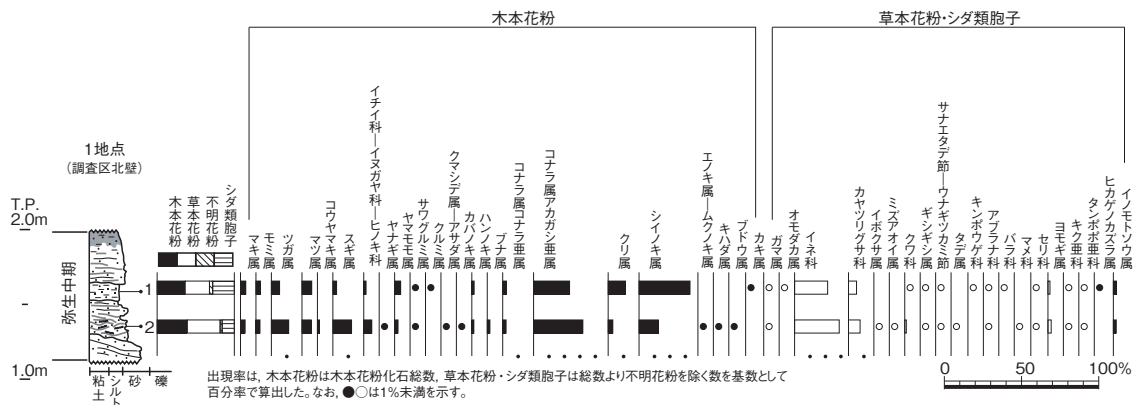


図4-5 II区1地点の主要花粉化石群集の層位分布

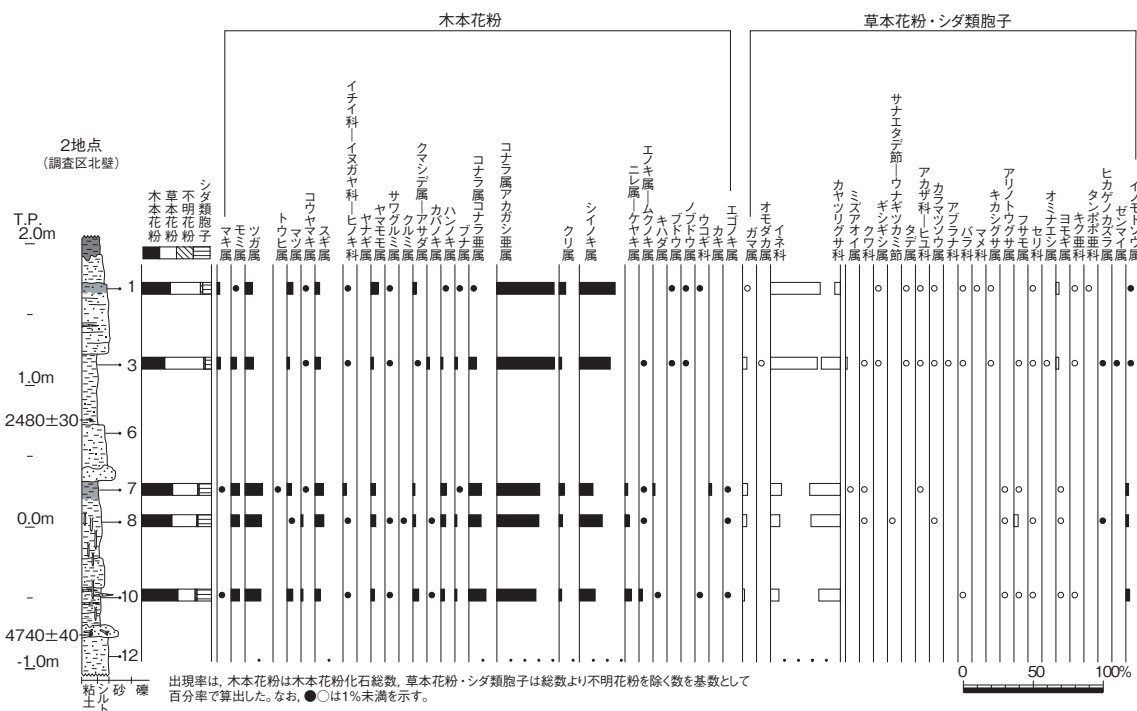


図4-6 II区2地点の主要花粉化石群集の層位分布

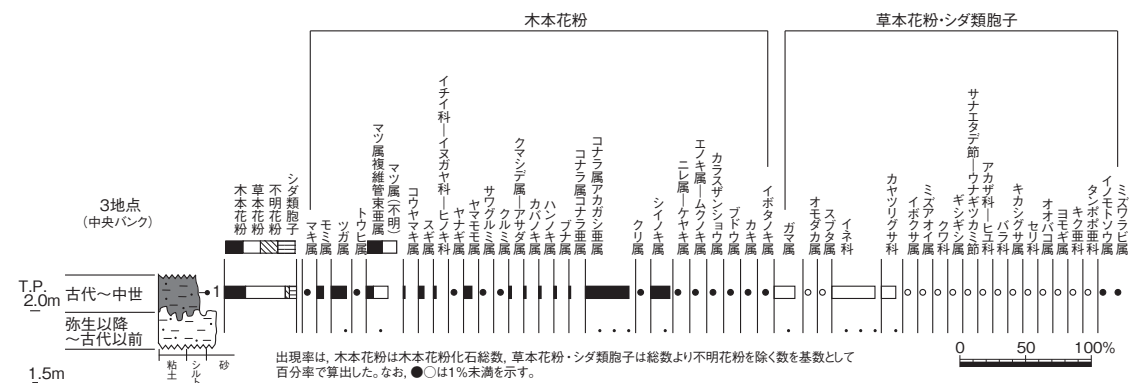


図4-7 II区3地点の主要花粉化石群集の層位分布

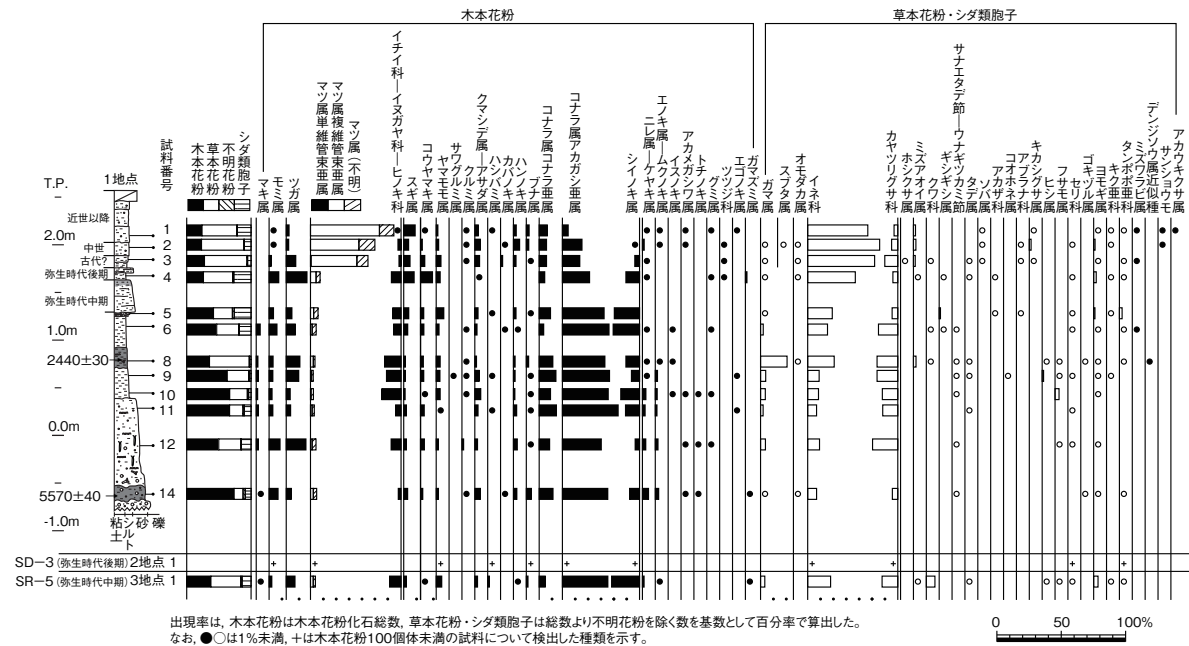


図4-8 IV区1・2・3地点の主要花粉化石群集の層位分布

科は逆に減少する傾向がある。また、オモダカ属、ミズアオイ属、ヒシ属、フサモ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属、デンジソウ属近似種など、水生～湿地生植物に由来する花粉・胞子も産出する。

試料3～1になると、草本花粉の割合が高くなり、イネ科が多産する。その他ではカヤツリグサ科、ミズアオイ属、キカシグサ属、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生～湿地生植物が認められ、栽培種であるソバ属も産出する。木本花粉では、マツ属が優占し、アカガシ亜属、コナラ亜属、ツガ属、スギ属などを伴う。マツ属は上位にむかって増加する傾向があり、アカガシ亜属は減少する傾向が認められる。

2地点

試料番号1は、花粉化石の産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかった。

3地点

試料番号1をみると、木本花粉ではアカガシ亜属が最も多く産出し、次いでシイノキ属が多い。その他ではツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、クワ科、ガマ属、ヨモギ属などを伴う。

④ 植物珪酸体分析

i II区

結果を表4-13、図4-9～11に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

1地点

植物珪酸体の産状は、試料1と2で異なる。含量密度は試料1で高く、約3.5万個/gを示す。各種類の相対的な産状は、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属などを伴う。また、試料1では栽培植物のイネ属の機動細胞珪酸体が産出し、樹木起源珪酸体の第IVグループ(近藤・ピアスン,1981)

表4-13 植物珪酸体含量

種類	上段：調査区 中段：分析地点 下段：試料番号																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	II区									IV区																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
	1地点		2地点				3地点			1地点				2地点	3地点																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
	1	2	1	3	7	8	10	1	2	1	2	3	4	5	6	8	1	1																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
イネ科葉部短細胞珪酸体																				イネ族イネ属	0	0	0	950	0	0	0	0	0	700	1,700	2,700	-	800	400	<100	-	100	タケ亜科ネザサ節	3,529	609	3,479	9,496	3,883	5,354	6,115	345	374	100	500	400	<100	2,200	800	800	200	2,600	タケ亜科	1,412	609	745	6,172	2,670	6,571	1,019	1,207	1,309	1,800	2,900	3,100	400	5,800	6,500	2,000	800	5,300	ヨシ属	0	0	248	1,899	243	243	255	0	0	-	-	100	<100	900	1,100	500	-	300	ウシクサ族ススキ属	0	0	0	0	0	243	0	0	0	-	-	<100	-	100	-	300	-	300	イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500
イネ族イネ属	0	0	0	950	0	0	0	0	0	700	1,700	2,700	-	800	400	<100	-	100	タケ亜科ネザサ節	3,529	609	3,479	9,496	3,883	5,354	6,115	345	374	100	500	400	<100	2,200	800	800	200	2,600	タケ亜科	1,412	609	745	6,172	2,670	6,571	1,019	1,207	1,309	1,800	2,900	3,100	400	5,800	6,500	2,000	800	5,300	ヨシ属	0	0	248	1,899	243	243	255	0	0	-	-	100	<100	900	1,100	500	-	300	ウシクサ族ススキ属	0	0	0	0	0	243	0	0	0	-	-	<100	-	100	-	300	-	300	イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																				
タケ亜科ネザサ節	3,529	609	3,479	9,496	3,883	5,354	6,115	345	374	100	500	400	<100	2,200	800	800	200	2,600	タケ亜科	1,412	609	745	6,172	2,670	6,571	1,019	1,207	1,309	1,800	2,900	3,100	400	5,800	6,500	2,000	800	5,300	ヨシ属	0	0	248	1,899	243	243	255	0	0	-	-	100	<100	900	1,100	500	-	300	ウシクサ族ススキ属	0	0	0	0	0	243	0	0	0	-	-	<100	-	100	-	300	-	300	イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																							
タケ亜科	1,412	609	745	6,172	2,670	6,571	1,019	1,207	1,309	1,800	2,900	3,100	400	5,800	6,500	2,000	800	5,300	ヨシ属	0	0	248	1,899	243	243	255	0	0	-	-	100	<100	900	1,100	500	-	300	ウシクサ族ススキ属	0	0	0	0	0	243	0	0	0	-	-	<100	-	100	-	300	-	300	イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																										
ヨシ属	0	0	248	1,899	243	243	255	0	0	-	-	100	<100	900	1,100	500	-	300	ウシクサ族ススキ属	0	0	0	0	0	243	0	0	0	-	-	<100	-	100	-	300	-	300	イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																													
ウシクサ族ススキ属	0	0	0	0	0	243	0	0	0	-	-	<100	-	100	-	300	-	300	イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																			
イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	100	100	-	-	<100	-	-	<100	不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																						
不明キビ型	0	152	248	1,424	0	1,947	0	517	187	300	300	700	<100	1,000	600	600	<100	500	不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																									
不明ヒゲシバ型	0	0	0	2,611	728	1,460	0	0	0	-	1,200	<100	-	1,300	1,400	200	<100	900	不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																												
不明ダンチク型	235	152	497	4,985	1,214	1,947	764	345	374	200	600	600	<100	1,000	1,000	400	<100	1,000	イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																															
イネ科葉身機動細胞珪酸体																			イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																		
イネ族イネ属	235	0	248	3,798	0	0	0	0	374	200	1,300	1,500	<100	2,300	1,700	500	-	600	タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																					
タケ亜科ネザサ節	22,821	3,199	36,528	32,761	24,514	13,873	35,669	690	2,806	-	200	200	<100	6,800	4,400	700	300	3,700	タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																								
タケ亜科	1,882	609	3,230	4,036	5,825	4,137	2,038	172	1,870	<100	1,400	1,500	900	4,600	2,300	400	1,100	2,100	ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																											
ヨシ属	1,647	152	745	3,798	2,184	3,407	3,057	345	374	-	-	100	<100	1,500	1,200	700	<100	500	ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																														
ウシクサ族	0	0	248	1,899	0	0	1,274	0	0	-	-	200	<100	200	300	200	-	<100	シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	<100	-	-	-	-	-	-	不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
不明	2,588	914	4,721	7,359	5,340	4,624	6,624	3,103	2,432	200	2,800	3,000	300	5,400	4,400	2,000	300	2,600	珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
珪化組織片																			イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
イネ属類珪酸体	0	0	0	950	0	0	0	0	0	<100	400	600	-	-	-	-	-	<100	樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
樹木起源																			第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
第IIIグループ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	800	1,100	300	-	400	500	-	-	200	第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
第IVグループ	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	-	-	200	-	700	500	200	-	400	合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
合計																			イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
イネ科葉部短細胞珪酸体	5,176	1,522	5,217	27,537	8,738	17,765	8,153	2,414	2,244	3,400	7,300	7,800	500	13,000	11,800	4,900	1,100	11,100	イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
イネ科葉身機動細胞珪酸体	29,173	4,874	45,720	53,651	37,863	26,041	48,662	4,310	7,856	600	5,700	6,500	1,400	20,800	14,300	4,500	1,700	9,700	珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
珪化組織片	0	0	0	950	0	0	0	0	0	100	400	600	0	0	0	0	0	100	樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
樹木起源	471	0	1,491	1,187	2,184	4,137	3,312	172	187	800	1,100	500	0	1,100	900	200	0	600	総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
総計	34,820	6,396	52,428	83,325	48,785	47,943	60,127	6,896	10,287	4,800	14,500	15,300	1,900	34,900	27,000	9,600	2,800	21,500																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								

も産出する。

2地点

植物珪酸体含量は、層位的に約5万～8万個/gの範囲で増減する。植物珪酸体の産状は概ね類似し、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属や樹木起源

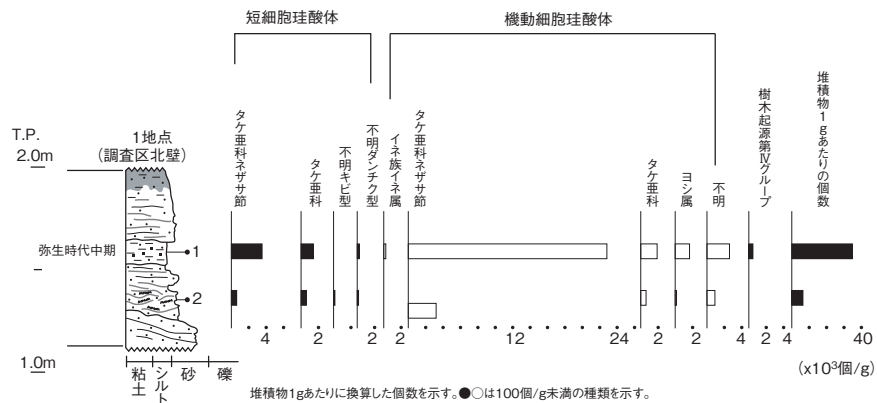


図4-9 II区1地点での植物珪酸体含量の層位的変化

珪酸体の第IVグループなどが認められる。また、栽培植物のイネ属が試料3・1から産出する。試料3では葉部に形成される短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のほか、籾殻に形成される穎珪酸体、試料1では機動細胞珪酸体が産出する。

3地点

いずれの試料もネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属や樹木起源珪酸体の第IVグループなどを伴う。また、試料番号2ではイネ属の機動細胞珪酸体が産出する。

ii IV区

結果を表4-13・図4-12に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

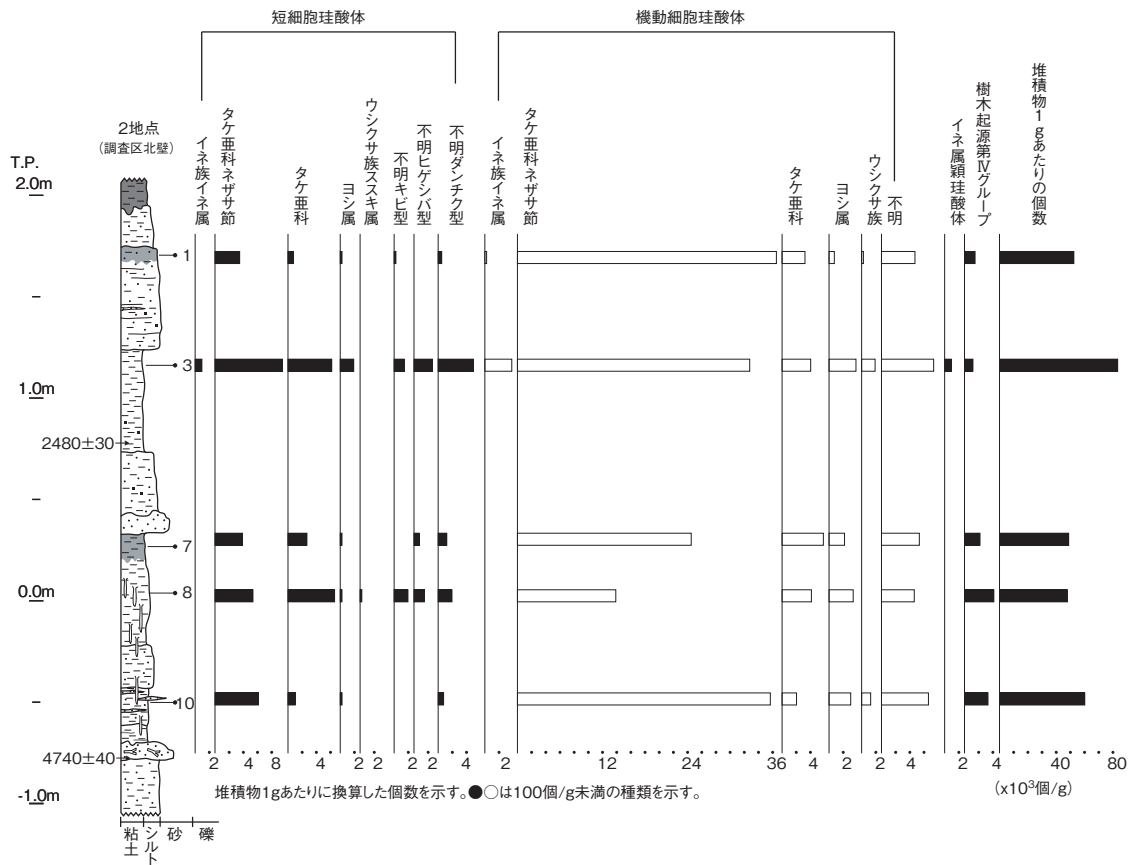


図4-10 II区2地点での植物珪酸体含量の層的变化

表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

1 地点

植物珪酸体含量密度は層的に増減し、試料5・6で多い。植物珪酸体群集の相対的産状は全試料を通じて概ね類似し、ネザサ節を含むタケ

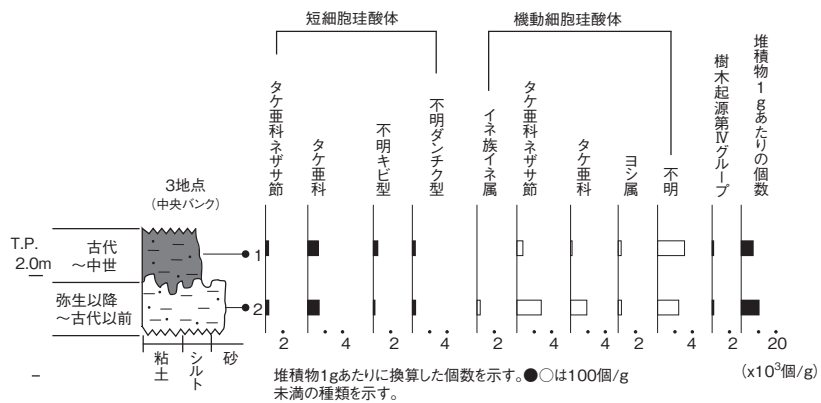


図4-11 II区3地点での植物珪酸体含量の層的变化

亜科が多産し、このほかヨシ属や栽培植物のイネ属、樹木起源珪酸体の第IIIグループと第IVグループ(近藤・ピアスン, 1981)を伴う組成を示す。また、試料4と1からはオオムギ族の短細胞珪酸体、試料3と1からシバ属が産出するなど、上位層準で種類数が増加する。

2 地点

産出種類数と含量はともに少なく、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属などが産出するに過ぎない。栽培植物に由来する植物珪酸体は産出しない。

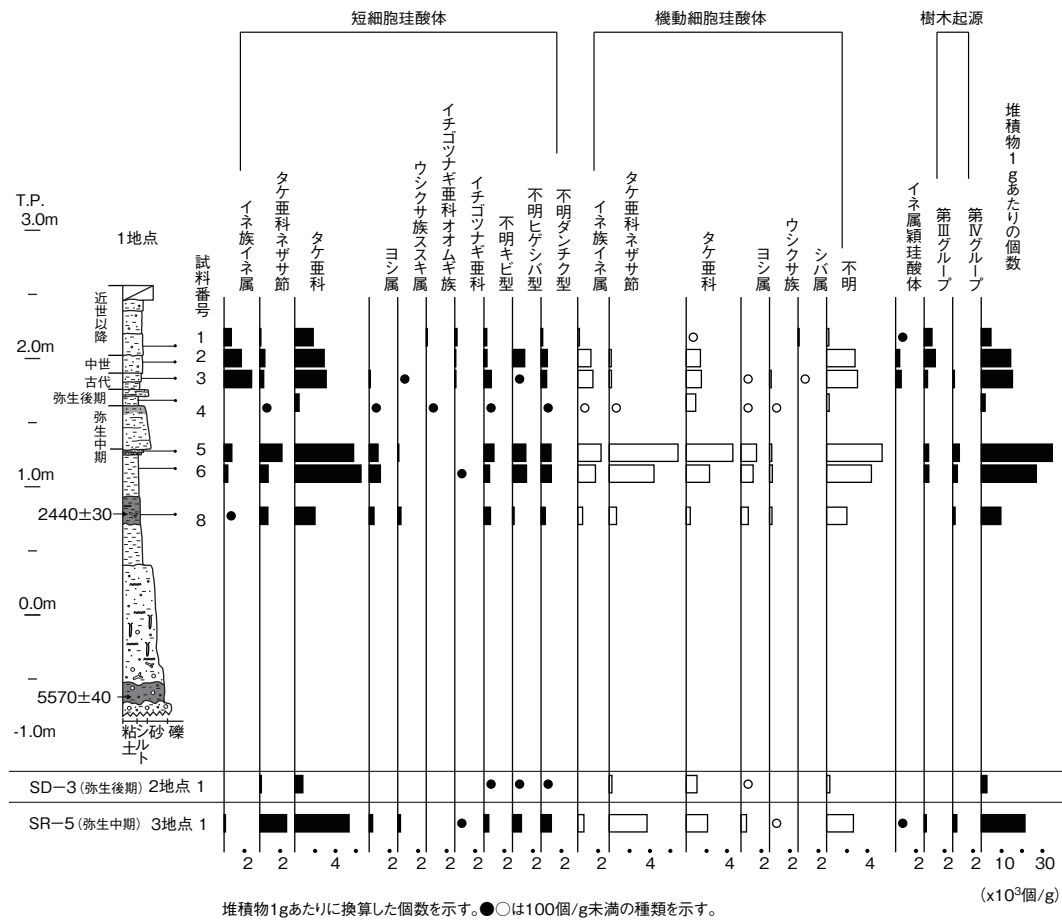


図4-12 IV区1・2・3地点での植物珪酸体含量の層的变化

3地点

ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、樹木起源珪酸体などが産出する。栽培植物のイネ属短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体・穎珪酸体が低密度ながら産出する。

⑤ 種実遺体分析

i II区

1地点の流路内堆積物からは、被子植物17分類群36個の種実が同定された(表4-14)。栽培植物のイネの穎が産出する。種実以外では、広葉樹の葉が産出したが、全て破片であった。イチイガシと思われる破片を除くと、葉縁は全縁の個体や、先端部に微鋸歯をもつ個体などがみられる。葉は厚く革質で、表面に光沢がある個体が多いが、同定根拠となる先端部と基部が欠落しており、種類の特定には至らなかった。

ii IV区

裸子植物1分類群1個、被子植物35分類群239個、不明11個、計249個の種実が産出した(表4-14)。

2地点2からは、木本13分類群(針葉樹のヒノキ、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、クワ属、クスノキ科、ヒサカキ属、キイチゴ属、アカメガシワ、ブドウ属、ウドカズラ、ブドウ科、クマノミズキ、エゴノキ属、ムラサキシキブ属)42個、草本17分類群(イネ、アワ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イラクサ科、カナムグラ、タデ属、アカザ科、ヒユ科、カタバミ属、フサモ属、イヌコウジュ属、キランソウ属、ナス科、メロン類、メナモミ属)69個、不明11個が産出した。栽培植物は、イネの穎、アワ近似種の果実、メロン類の種子が

確認され、イネの穎の一部とアワ近似種の果実は炭化している。

4地点1からは、木本6分類群(コナラ属アカガシ亜属, ヒサカキ属, キイチゴ属, イヌザンショウ属, ウドカズラ, イイギリ)8個, 草本9分類群(カワツルモ, ヒルムシロ属, イバラモ属, カヤツリグサ科, イラクサ科, カナムグラ, タデ属, イヌコウジュ属, キク科)119個が産出した。草本主体の種類構成で、汽水生植物のカワツルモが約7割(93個)を占める。

IV区の北半部のVI層から出土した8cm×4cm×3cm程度の炭化物は、多量の同一種と思われる粒状物質が塊状に固結した状態からなる。各粒状物質は不規則に配置しており、表面が癒着するなど状態が不明瞭なものもある。これら粒状物質のうち状態の良いものは、下記する形態の特徴を有していたことから、栽培植物のイネ(*Oryza sativa* L.; イネ科イネ属)の胚乳に同定された(表4-14)。

イネの胚乳は、全て炭化しており、黒色を呈する。大きさは、長さ4~5mm, 幅2.5mm, 厚さ1.5mm程度の長楕円形でやや扁平である。基部一端に胚が脱落した凹部がある。両面はやや平滑で2-3本の縦溝が確認される。また、表面に穎(果)の破片が付着した個体が認められる。穎(果)は、基部に斜切状円柱形の果実序柄がある。果皮は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

表4-15・16に同定された種実の形態的特徴を、木本、草本の順に示す。

⑥ 樹種同定

i I~III区

樹種同定結果を表4-17に示す。針葉樹4種類(スギ, ヒノキ, マキ属, イヌガヤ), 広葉樹3種類(コナラ属アカガシ亜属, ツブラジイ, アワブキ属)に同定された。

表4-14 種子分析結果

分類群	部位	状態	調査区・地点名・遺構・時代			
			II区	IV-E2区	IV-W2区	IV区
			1地点1	2地点2	4地点1	北半部
			SR-3	SD-3	SR-5	VI層
			弥生中期	弥生後期	弥生中期	-
木本						
ヒノキ	球果	完形	-	1	-	-
イチイガシ近似種	葉	破片	4	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	殻斗	完形	-	4	-	-
	果実	破片	-	2	-	-
	幼果	完形	-	6	1	-
クワ属	種子	完形	-	1	-	-
クスノキ科	種子	完形	-	1	-	-
ヒサカキ属	種子	完形	2	6	1	-
キイチゴ属	核	完形	2	1	2	-
アカメガシワ	種子	完形	-	4	-	-
イヌザンショウ属	核	完形	-	-	1	-
ブドウ属	種子	完形	-	1	-	-
ウドカズラ	種子	完形	-	6	2	-
ブドウ科	種子	完形	-	2	-	-
イイギリ	種子	完形	1	-	1	-
クマノミズキ	核	完形	-	1	-	-
タラノキ	核	完形	3	-	-	-
エゴノキ属	種子	完形	-	4	-	-
ムラサキシキブ属	核	完形	-	2	-	-
広葉樹	葉	破片	6	-	-	-
草本						
カワツルモ	果実	完形	-	-	93	-
ヒルムシロ属	果実	完形	-	-	1	-
イバラモ属	種子	完形	-	-	7	-
オモダカ科	種子	完形	1	-	-	-
イネ	胚乳	完形	-	-	-	多量
	穎	破片	6	12	-	-
アワ近似種	果実	炭化	-	1	-	-
イネ科	果実	完形	3	2	-	-
ホタルイ属	果実	完形	2	1	-	-
カヤツリグサ科	果実	完形	1	4	9	-
イラクサ科	果実	完形	-	1	4	-
カナムグラ	種子	完形	1	7	1	-
タデ属	果実	完形	3	7	2	-
アカザ科	種子	完形	3	4	-	-
ヒユ科	種子	完形	-	1	-	-
ナデシコ科	種子	完形	1	-	-	-
キジムシロ類	核	完形	2	-	-	-
カタバミ属	種子	完形	3	2	-	-
エノキグサ	種子	完形	1	-	-	-
フサモ属	果実	完形	-	18	-	-
イヌコウジュ属	果実	完形	-	4	1	-
キランソウ属	果実	完形	-	2	-	-
ナス科	種子	完形	-	1	-	-
メロン類	種子	破片	-	1	-	-
タカサブロウ	果実	完形	1	-	-	-
メナモミ属	果実	完形	-	1	-	-
キク科	果実	完形	-	-	1	-
不明種実			-	11	-	-
分析量			200cc (374.9g)	200cc (278.9g)	200cc (373.8g)	塊状炭化物

*キジムシロ類:キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

表4-15 大型植物化石の記載(1)

<p><木本植物></p>	
<p>・ヒノキ(<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属</p>	<p>球果が検出された。黒褐色、歪な球体で木質。径1cm程度。8個の球果鱗片が十字対生する。球果鱗片は径5-6mm程度。頂部は厚い楕状に発達し、外面は5-6角形で中央部がやや尖る。</p>
<p>・イチイガシ近似種(<i>Quercus cf. gilva</i> Blume) ブナ科コナラ属</p>	<p>葉の破片が検出された。灰褐色、完形ならば倒披針形。先端部は鈎状尖鋭形、基部は鈍形で葉柄がある。葉の下半部は全縁、上半部のみ2次脈が葉縁に到達する部分に鋭い鋸歯がある。2次脈は11-15対が主脈に対して鋭角に配列し、葉縁に到達する。2次脈は直線的で平行に配列する。3次脈は2次脈にほぼ直行し、上下の2次脈に到達し連結する。3次脈も直線的で平行に配列する。</p> <p>最大の破片は長さ5.3cm、葉幅は先端部に近い部分で最大となり、2.1cm程度。2次脈は9対確認される。基部に確認される葉柄の長さは1.4cm程度。</p>
<p>・アカガシ亜属(<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>) ブナ科コナラ属</p>	<p>殻斗、果実の破片、幼果が検出された。黒褐色。殻斗は長さ5-8mm、径0.9-1.2cm程度の碗状で、5-6段の輪状紋をもつ。果実や幼果は、頂部に輪状紋が認められるが、種の同定根拠となる柱頭が完全に残っていないため、アカガシ亜属としている。果実は、完形ならば長さ1-1.5cm、径1cm程度の卵状楕円体。破片の大きさは9mm程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられ、短い花柱基部が1-2mm程度突出し、突起状に残る。基部の径4-5mm程度の円形で維管束の穴が輪状に並ぶ着点を欠損する。果皮外面は平滑で、微細な縦筋が目立つ。幼果は径5-6mm程度の碗状で、表面に5-6段の輪状紋が配列する。</p>
<p>・クワ属(<i>Morus</i>) クワ科</p>	<p>種子が検出された。灰褐色、三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。長さ2.2mm、径1.7mm程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。日本に分布するクワ属は、ケグワ、オガサワラグワ、ヤマグワ、ハチジョウグワの4種と栽培種のマグワがある。ケグワ、オガサワラグワ、ハチジョウグワは分布地が限られており、本地域には分布していないことから、確認された種子は、ヤマグワやマグワに由来する可能性がある。</p>
<p>・クスノキ科(<i>Lauraceae</i>)</p>	<p>種子の破片が検出された。灰褐色、球体。径6mm。基部にはやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く表面は粗面、断面は櫛状。球状を呈する点から、クスノキ属クスノキまたはクロモジ属に由来すると思われる。</p>
<p>・ヒサカキ属(<i>Eurya</i>) ツバキ科</p>	<p>種子が検出された。茶-黒褐色、不規則な多角形でやや偏平、径1.5-1.8mm程度。一端に臍があり、臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。</p>
<p>・キイチゴ属(<i>Rubus</i>)バラ科</p>	<p>核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、半円形-三日月形。長さ1.8-1.9mm、幅0.8-1mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。</p>
<p>・アカメガシワ(<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Mueller - Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属</p>	<p>種子の破片が検出された。黒褐色。完形ならば径3.5-4mm程度の歪な球体。破片の大きさは3mm程度。基部にあるY字形の稜に沿って割れている。種皮は硬く、表面は瘤状突起が密布しゴツゴツしている。断面は櫛状組織が内側に湾曲する。</p>
<p>・イヌザンショウ属(<i>Fagara</i>) ミカン科</p>	<p>核(内果皮)の破片が検出された。黒褐色、非対称広倒卵体でやや偏平。長さ3.3mm、幅2.8mm程度。片方の側面に核の長さの半分以上に達する深く広い臍がある。内果皮は厚く硬く、表面にやや深く大きな網目模様がある。</p>
<p>・ブドウ属(<i>Vitis</i>) ブドウ科</p>	<p>種子が検出された。灰-黒褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嚙状に尖る。長さ4mm、径3mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は櫛状。</p>
<p>・ウドカズラ(<i>Ampelopsis cantoniensis</i> (Hooker et Arn.) Planchon) ブドウ科ノブドウ属</p>	<p>種子が検出された。黒褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嚙状に尖る。径4mm程度。背面にはU字状に開いたさじ状の凹みがあり、その両側には稜状隆条が5-6個直角に配列する。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は櫛状。なお、ブドウ属と区別する根拠の背面が欠損した破損個体を、ブドウ科(<i>Vitaceae</i>)とした。</p>
<p>・イイギリ(<i>Idesia polycarpa</i> Maxim.) イイギリ科イイギリ属</p>	<p>種子が検出された。灰-黒褐色、広倒卵体。長さ1.7mm、径1.1-1.3mm程度。頂部に径0.5mm程度の円形の孔がある。頂部から基部の臍にかけて1本の縦隆条がある。表面は海綿状の微細な網目模様があり、ざらつく。</p>
<p>・クマノミズキ(<i>Swida macrophylla</i> (Wall.) Sojak) ミズキ科ミズキ属</p>	<p>核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、偏球体。径3.7mm程度。基部に小さく浅い凹みがあり、表面には一周する1本のやや幅広く浅い縦溝と、細く浅い縦溝数本が走る。</p>
<p>・タラノキ(<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属</p>	<p>核(内果皮)が検出された。灰褐色、半円形でやや偏平。長さ1.5-2mm、幅1-1.3mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面は粗面。</p>
<p>・エゴノキ属(<i>Styrax</i>) エゴノキ科</p>	<p>種子が検出された。茶褐色、卵体。長さ8.5mm、径5mm程度。頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で、灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は櫛状。表面には微細な粒状網目模様があり、ざらつく。</p>
<p>・ムラサキシキブ属(<i>Callicarpa</i>) クマツヅラ科</p>	<p>核(内果皮)が検出された。灰黄褐色、倒卵体で偏平。長さ2.5mm、径1.3mm程度。背面は丸みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損している個体が見られる。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。</p>
<p><草本植物></p>	
<p>・カワツルモ(<i>Ruppia maritima</i> L.) ヒルムシロ科カワツルモ属</p>	<p>果実が検出された。黒褐色、倒狭卵体。径1.5-2.5mm程度。先端は嚙状に尖る。背面の先端近くには広線形の隆起があり、腹面の先端近くの左右には半円状の浅い凹みがある。果皮は硬く、表面は微細な網目模様が配列しざらつく。</p>
<p>・ヒルムシロ属(<i>Potamogeton</i>) ヒルムシロ科</p>	<p>果実が検出された。淡灰褐色、左右非対称な倒卵体でやや偏平。径2mm、厚さ1.5mm程度。頂部に嚙状の太い花柱基部が残る。側面の正中線に深い縦溝と稜があり、その基部に1個の刺状突起がある。果皮はスポンジ状でざらつく。</p>
<p>・イバラモ属(<i>Najas</i>) イバラモ科</p>	<p>種子が検出された。淡褐色、針状長楕円体。長さ1.7mm、径0.5mm程度。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面には縦長の網目模様が配列する。</p>
<p>・オモダカ科(<i>Alismataceae</i>)</p>	<p>種子が検出された。茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。長さ1.7mm、幅1mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。</p>

1. 自然科学分析調査報告 (4) 結果

表4-16 大型植物化石の記載(2)

・イネ (<i>Oryza sativa</i> L.)	イネ科イネ属
<p>穎(果)の破片が検出された。淡-灰褐色、炭化個体は黒色。完形ならば長さ6-7mm、幅4mm、厚さ2mm程度のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の種穎を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片の大きさは1-2.5mm程度。</p>	
・アワ近似種 (<i>Setaria cf. italica</i> (L.) P.Beauv.)	イネ科エノコログサ属
<p>果実が確認された。炭化しており黒色、半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。長さ2.2mm、径1.7mm程度。果皮表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。今回確認された果実は、遺存状態が良好であるため、走査型電子顕微鏡下観察で種類が特定される(松谷, 1980; 2000など)可能性がある。</p>	
・イネ科 (Gramineae)	
<p>果実が検出された。イネ、アワ近似種以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡-黄褐色、半楕円体で背面は丸みがあり腹面は偏平。長さ1.5-3mm、径0.5-2mm程度。果皮は薄く柔らかく弾力がある。表面には微細な網目模様が発達する。</p>	
・ホタルイ属 (<i>Scirpus</i>)	カヤツリグサ科
<p>果実が検出された。灰-黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵体。径1.8-2.1mm程度。頂部は尖り、基部は切形で逆刺を持つ鬚状の腕が伸びる。背面はやや高く正中線上に鈍稜がある。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。</p>	
・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)	
<p>果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡-黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径1-4mm程度。頂部は柱頭部分が伸び、基部は切形。果皮表面は平滑または微細な網目模様がある。</p>	
・カナムグラ (<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.)	クワ科カラハナソウ属
<p>種子が検出された。灰-黒褐色、側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径4-4.5mm、厚さ1-1.5mm程度。頂部はやや尖り、縦方向に一周する稜がある。基部に淡黄褐色、径1mm程度のハート形の臍点がある。種皮表面は粗面。</p>	
・イラクサ科 (Urticaceae)	
<p>果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2mm程度。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。</p>	
・タデ属 (<i>Polygonum</i>)	タデ科
<p>果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡-黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径1-4mm程度。頂部は柱頭部分が伸び、基部は切形。果皮表面は平滑または微細な網目模様がある。</p>	
・アカザ科 (Chenopodiaceae)	
<p>種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.2mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢が強い。</p>	
・ヒユ科 (Amaranthaceae)	
<p>種子が検出された。黒色、円盤状で偏平、縁は稜状。径1.2mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢が強い。</p>	
・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)	
<p>種子が検出された。淡-茶褐色、腎状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤-針状突起が同心円状に配列する。</p>	
・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (<i>Potentilla - Duchesnea - Fragaria</i>)	バラ科
<p>核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、腎形でやや偏平。径1mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。</p>	
・カタバミ属 (<i>Oxalis</i>)	カタバミ科
<p>種子が検出された。黒褐色、卵形で偏平。長さ1.4-1.5mm、幅1mm程度。基部は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4-7列の肋骨状横隆条が配列する。</p>	
・エノキグサ (<i>Acalypha australis</i> L.)	トウダイグサ科エノキグサ属
<p>種子が検出された。黒褐色、倒卵体。長さ1.6mm、径1.1mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密布しざらつく。</p>	
・フサモ属 (<i>Myriophyllum</i>)	アリノトウグサ科
<p>果実が検出された。灰-黒褐色、三稜状倒卵体。長さ2.2mm、径1.2mm程度。基部は斜切形で長楕円形の臍がある。腹面正中線上に鈍稜がある。背面には5-6本の突起が配列するスポンジ状の翼がある。果皮は厚く、表面は粗面。</p>	
・イヌコウジュ属 (<i>Mosla</i>)	シソ科
<p>果実が検出された。灰褐色、倒広卵体。径1.1mm程度。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。</p>	
・キランソウ属 (<i>Ajuga</i>)	シソ科
<p>果実が検出された。灰褐色、狭楕円体。長さ2mm、径1.2mm。腹面基部には果実の長さの2/3に達する大きな楕円形の着点痕の孔がある。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。</p>	
・ナス科 (Solanaceae)	
<p>種子が検出された。淡灰褐色、歪な腎臓形で偏平。径1.5mm程度。種子は基部のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面は微細な星型網目模様が臍を中心として同心円状に発達する。</p>	
・メロン類 (<i>Cucumis melo</i> L.)	ウリ科キュウリ属
<p>種子の破片が検出された。淡灰褐色、狭倒卵針形で偏平。長さ6.5mm、幅3.5mm、厚さ1mm程度と、藤下(1984)の基準によるマクワ・シロウリ型(長さ6.1-8.0mm)に該当する。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。</p>	
・タカサブロウ (<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.)	キク科タカサブロウ属
<p>果実が検出された。灰褐色、倒三角形でやや偏平。長さ2.5mm、径1.5mm程度。両端は切形、表面は海綿状で、背腹両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。</p>	
・メナモミ属 (<i>Siegesbeckia</i>)	キク科
<p>果実が検出された。黒褐色、狭三角状菱形で腹面方向へやや湾曲する。長さ2mm、径1mm程度。頂部には円形の臍がある。表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境界は短く突出し、全体に微細な突起がある。</p>	
・キク科 (Compositae)	
<p>果実が検出された。淡灰褐色、倒狭卵体。長さ2.2mm、幅1mm程度。頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面には微細な網目模様が縦列し、ざらつく。</p>	

ii IV区

樹種同定結果を表4-17に示す。木材は針葉樹4種類(マツ属複維管束亜属、スギ、アスナロ、ヒノキ科)、広葉樹7種類(コナラ属コナラ亜属クスギ節、コナラ属アカガシ亜属、ムクノキ、クスノキ、ツブラジイ、ムク

表4-17 樹種同定結果

年次	地区・地点	遺構	試料名	時代	器種	樹種	図版番号
2006年度	IV区W南	SR-6	No.1	弥生後期後半	部材	ヒノキ	-
	IV区W南	SR-6	No.2	弥生後期後半	部材	スギ	-
	IV区W	SR-6	No.3	弥生後期後半	部材	ヒノキ	-
	IV区W	SR-6	No.4	弥生後期後半	部材	クスノキ	-
	IV区W南	SR-6	No.5	弥生後期後半	部材	スギ	-
	IV区W南	SR-6	No.6	弥生後期後半	部材	スギ	-
	IV区W南	SR-6	-	弥生後期後半	杭材	ムクノキ属<根材>	-
	Ⅲ区	SR-4	No.7	弥生中期	杭材	ヒノキ	-
	Ⅲ区	SR-4	No.8	弥生中期	杭材	ヒノキ	-
	Ⅱ区	SR-2	No.9	弥生前期新段階	杭材	アワブキ属	-
	Ⅱ区	SR-3	SR-3-1	弥生中期	杭材	イヌガヤ	-
	Ⅱ区	SR-3	SR-3-2	弥生中期	杭材	スギ	-
	Ⅱ区	SR-2	SR-2-1	弥生前期新段階	杭材	コナラ属アカガシ亜属	-
	Ⅱ区	SR-2	SR-2-2	弥生前期新段階	杭材	ツブラジイ	-
2007年度	I区	SR-1	SR-1-1	弥生中期	杭材	マキ属	-
	I区	SR-1	SR-1-2	弥生中期	杭材	マキ属	-
	I地点	-	C14-2	-	年代試料	マツ属複雑管束亜属	-
	IV区W	SR-6	No.182	弥生後期後半	部材	ムクロジ	4435
	IV区W	SR-6	No.237	弥生後期後半	堅杵	コナラ属アカガシ亜属	-
	IV区W北	SR-6	No.293	弥生後期後半	部材	アスナロ	-
	IV区E1	SR-5	杭列1	弥生中期	杭材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	-
	IV区E1	SR-5	杭列2	弥生中期	杭材	アスナロ	-
	IV区E1	SR-5	杭列3	弥生中期	杭材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	-
	IV区E1	SR-5	杭列4	弥生中期	杭材	マツ属複雑管束亜属	-
	IV区E1	SR-5	杭列5	弥生中期	杭材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	-
	IV区E2	SR-5	No.1	弥生中期	杭材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	-
	IV区E2	SR-5	No.2	弥生中期	杭材	ツブラジイ	-
	IV区E2	SR-5	No.3	弥生中期	杭材	カキノキ属	-
IV区E2	SR-5	No.4	弥生中期	杭材	コナラ属アカガシ亜属	-	
IV区E2	SR-5	No.5	弥生中期	杭材	ヒノキ科	-	
IV区W	Ⅵ層	No.10	弥生後期後半	部材	スギ	-	

ロジ, カキノキ属)に同定された。このうち、ムクノキは根材であった。

表4-18に各種類の解剖学的特徴等を示す。

(5) 考察

① 層序と堆積環境変遷

i はじめに

ここでは、現地調査で記載した堆積層の層相と珪藻化石群集および放射性炭素年代値から、Ⅱ区とⅣ区の堆積環境変遷について検討を行う。層理面・再侵食面と層相、珪藻化石群集の特徴から、各調査区に累重する堆積層は、Ⅱ区でUnit(「堆積ユニット」とも言う。)1~5(図4-13)、Ⅳ区でUnit1~8に区分される(図4-14)。

ii 遺跡の立地

花宴遺跡は、香宗川左岸の氾濫原上に位置する(図4-15・16)。現香宗川流路沿いには、旧河道跡と自然堤防と思われる地形的な高まりが認められる(図4-17)。今回の調査区は、自然堤防状の高まりと周囲の相対的な低所に位置している。また、本遺跡の南方向約1.5kmには、浜堤と考えられる海岸線に並行する細長い高まりが存在する。調査区は、この背後の平坦な氾濫原上に立地する。これらの地形から、花宴遺跡は、浜堤後背の潟湖性の湿地ないし香宗川の後背湿地に立地するものとみなされる。

iii Ⅱ区

Unit5(堆積ユニット5)

堆積ユニット5では、灰色を呈し、不明瞭な水平葉理をなす泥層が主体をなす。これらの泥層には、砂質シルト層や砂層が挟在する。泥層については、周囲から運搬されてきた粘土やシルトが、滞水域

表4-18 材化石の記載

・マツ属複維管束亜属 (<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>) マツ科 軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は柔細胞、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。
・スギ (<i>Cryptomeria japonica</i> (L. f.) D. Don) スギ科スギ属 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。分野壁孔の孔口の長軸方向が水平になる傾向がある。放射組織は単列、1-15細胞高。
・ヒノキ (<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。
・アスナロ (<i>Thuopsis dolabrata</i> Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。
・ヒノキ科 (<i>Cupressaceae</i>) 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。
・マキ属 (<i>Podocarpus</i>) マキ科 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔構成される。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1-2個。放射組織は単列、1-10細胞高。
・イヌガヤ (<i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1-2個。放射組織は単列、1-10細胞高。
・カヤ (<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属 軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型〜ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。
・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (<i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Cerris</i>) ブナ科 環孔材で、孔圏部は1-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。
・コナラ属アカガシ亜属 (<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>) ブナ科 放射孔材で、管壁厚は中庸〜厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと同複合放射組織とがある。
・ツブラジイ (<i>Castanopsis cuspidata</i> (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属 環孔性放射孔材で、孔圏部は接線方向に疎な3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。
・ムクノキ (<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属 試料は中心部に髄が認められないことから根材である。散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。
・ヤマグワ (<i>Morus australis</i> Poir.) クワ科クワ属 環孔材で、孔圏部は4-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では最初ほぼ単独で、後塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。
・クスノキ (<i>Cinnamomum camphora</i> (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属 散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高で、やや層階状に配列する。柔組織は周囲状〜翼状。柔細胞には油細胞が認められる。
・ムクロジ (<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属 環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周囲状〜連合翼状、帯状およびターミナル状。
・アワブキ属 (<i>Meliosma</i>) アワブキ科 散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔または階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は5段前後。壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-50細胞高。
・カキノキ属 (<i>Diospyros</i>) カキノキ科 散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、10-20細胞高で階層状に配列する。

で浮遊沈降することによって形成されたものと判断される。試料番号12付近では、水平葉理をなす砂質シルト層が挟在する。この砂質シルト層最上部では、材化石を多く含む水平葉理をなす中粒砂層が載る。試料番号10から試料番号7では、細粒砂の葉理を挟在する砂質粘土質シルト層から粘土質シルト層へと上方細粒化する。ここでは、幅10~15mm前後の管状をなす生痕が多く分布する。試料番号7では、腐植質に富む粘土質シルト層からなる古土壌が存在する。この古土壌は、水平葉理をなしシルトを含む中粒砂層に覆われる。この上位の試料番号6から試料番号3にかけては、砂質シルト層からシルト質粘土層へと上方細粒化をなす。

珪藻分析結果では、試料番号12~6で、汽水生種が優占ないし多産し、これに淡水生種が比較的多

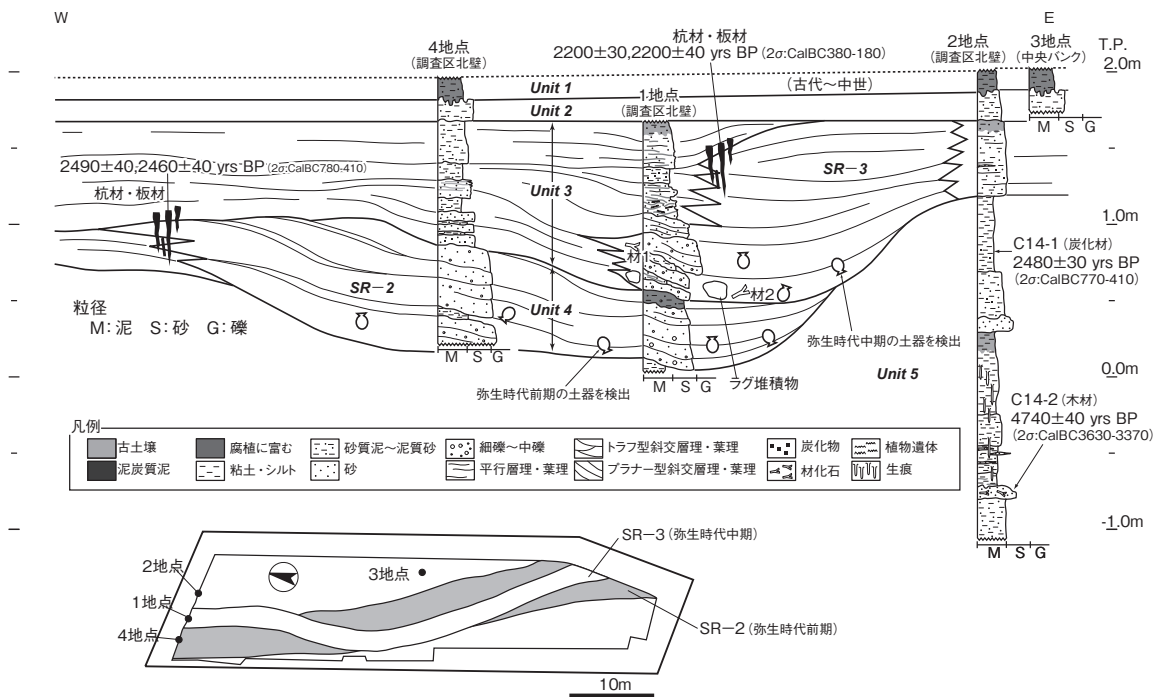


図4-13 II区の堆積層柱状模式断面図と分析試料採取層準の位置



写真4-1 II区北壁断面の流路堆積物断面

く伴う。このことから、試料番号12～6の堆積層は、陸水の影響をかなり受ける汽水域の堆積環境下で形成されたことが示唆される。試料番号12～6で多産ないし優占する *Pseudopodosira kosugii* は、汽水泥質干潟指標種と呼ばれ、塩分濃度12～2%の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育する種群である。*Pseudopodosira kosugii* は、考古遺跡の分析において、陸域に近い塩性湿地や、潮汐に伴って海水塩分の影響をうけて塩分濃度が変化する潮入川の領域に相当する干潟後背の湿地や湖沼の層相を示す堆積層において優占ないし多産する傾向が認められる(辻本ほか, 2007)。

これに対し、試料番号3では、淡水生種が優占し、淡水域の堆積環境下で形成されたことが確認される。試料番号3の珪藻化石群集では、優占する種類が認められない。このような珪藻化石群集

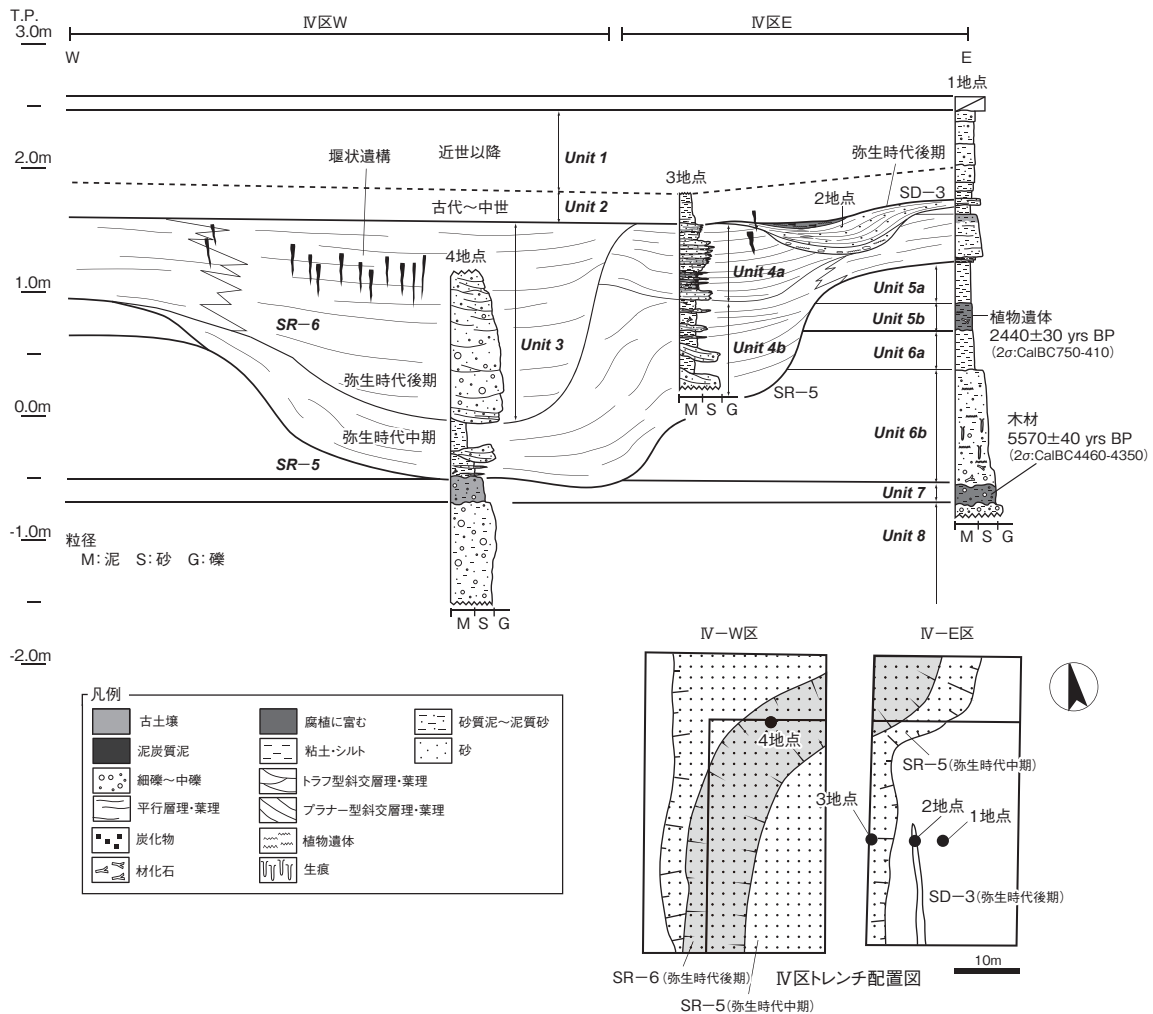


図4-14 IV区に累重する堆積層の柱状模式断面図

は、陸域において河川氾濫原堆積物中で普通に認められ、混合群集と呼称される(堀内・高橋・橋本, 1996)。混合群集において互いに相反する生態性の化石が混在するのは、洪水時に氾濫原の様々な場所に生育していた珪藻が割剥され、洪水流で運搬され、二次的に堆積した結果である。よって、試料番号3では、周辺の流路から洪水時におもに泥が浮遊沈降するような堆積場であったと推定される。上記の珪藻化石群集からは、II区において、試料番号6と3の間に大きな水域環境の変化があったことがうかがえる。

なお、本ユニットで得られた放射性炭素年代測定値は、試料番号11と試料番号10～7の層準の間に挟在する砂層で 4740 ± 40 yrs BP (2σ : Cal BC 3630-3370)と縄文時代中期前半、試料番号6直上の泥層で 2480 ± 40 yrs BP (2σ : Cal BC 770-410)と弥生時代前期の年代が、それぞれ得られている。

以上のような堆積ユニット5の層相と放射性炭素年代測定結果および珪藻分析結果から、縄文時代中期前半頃から弥生時代前期以前のある段階にII区では、陸域に近い汽水域の湿地や池沼～沼沢地が形成されており、その後、弥生時代前期頃に淡水域の沼沢地や湿地へと変化したと捉えられる。

Unit3・4 (堆積ユニット3・4)

堆積ユニット3・4は、全体的に灰色を呈し、細礫～中礫を多く含み、基質が粗粒砂～極粗粒砂から

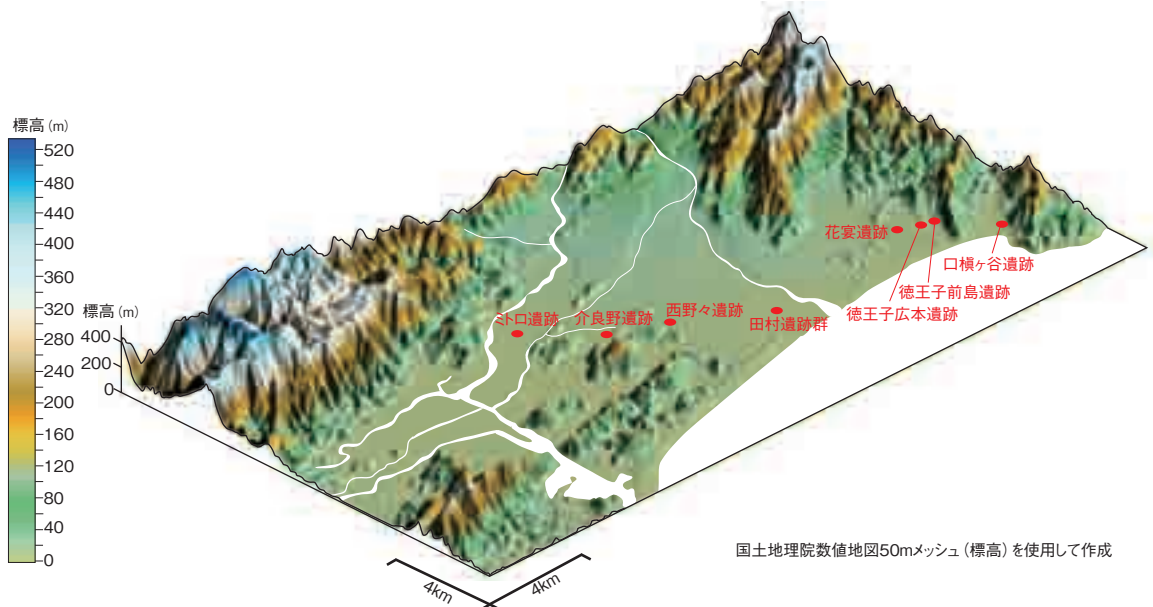


図4-15 調査地点位置図

なる砂礫層と、シルト～粘土の葉理を挟在するシルト質砂からシルト混じりの細粒砂～中粒砂からなる泥質砂層ないし泥混じり砂層で構成される。これら堆積層は、指交関係にあり、同時異相として堆積する。砂礫層は流路状の堆積空間を埋積しており、斜交層理が発達する。堆積ユニット4の砂礫層では、シルトの葉理を挟在し東方向へ斜交する葉理が形成される。このような層相は、砂礫層が西から東方向へ準じ埋積されたことを示し、側方付加が顕著であったと考えられる。本ユニットの泥

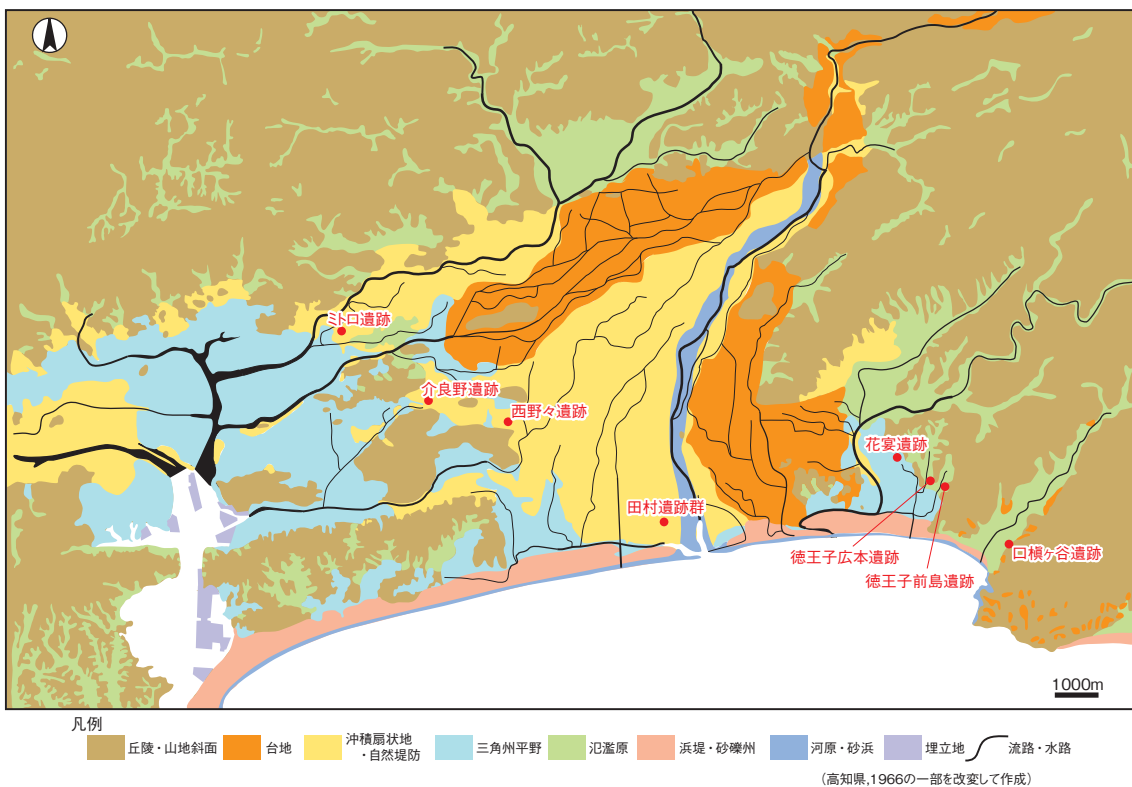


図4-16 香長平野の地形と遺跡の立地

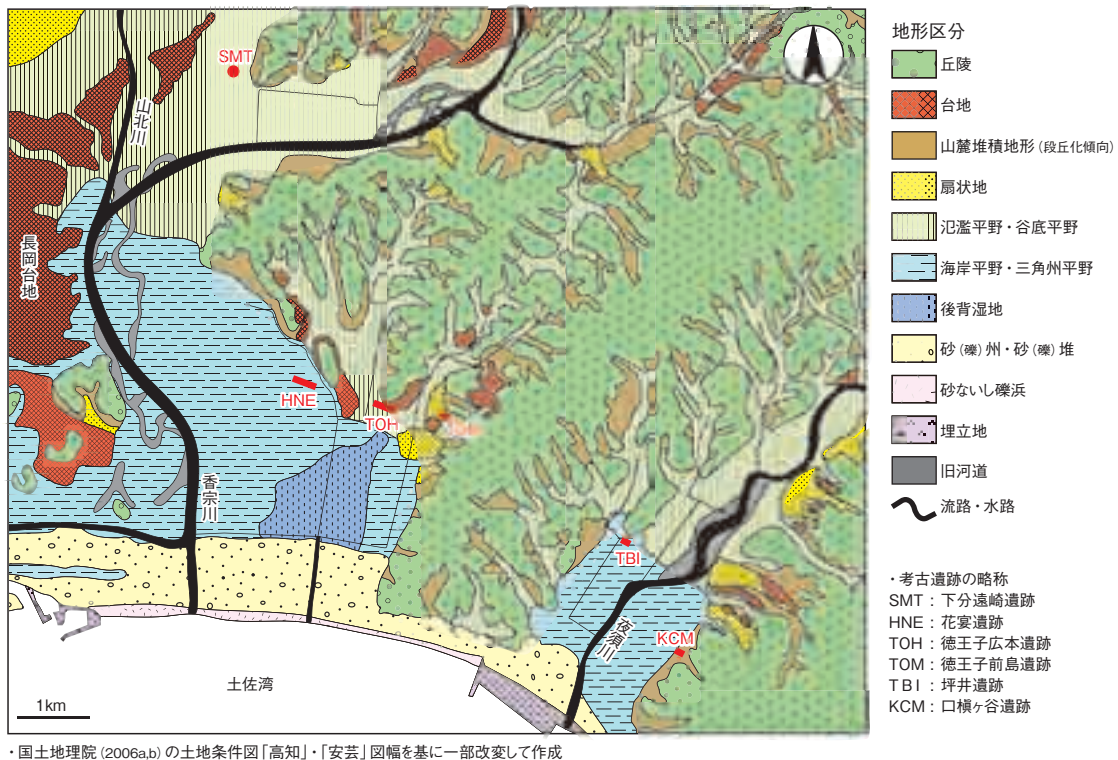


図4-17 花宴遺跡周辺地形分布図

混じり砂層では、層状の外形を示し、水平葉理をなして堆積層が累重する。本層の最上部には、腐植に富む古土壌が形成される。

上述の層相をふまえると、堆積ユニット3・4では、砂礫層が流路、混じり砂層が流路縁から河岸に累重した堆積層と判断される。堆積ユニット3・4では、堆積層の上方への細粒化と、流路から河岸へ至る側方へ細粒化が明瞭に観察される。このような特徴から、本堆積ユニットは、蛇行河川の堆積システム(増田, 1999)によって形成されたと解釈される。

なお、発掘調査では、堆積ユニット3・4の流路内堆積物をSR-3とSR-2として、それぞれ掘削を行っている。その検出プランおよび完掘形態は、蛇行流路をなす。このように発掘調査によって検出された平面的形態からも、堆積ユニット3・4は、蛇行流路とその周囲の河岸に位置する領域の堆積環境下で形成されたと確認される。

堆積ユニット3・4は、放射性炭素年代測定により、弥生時代前期に形成されたと判断される堆積ユニット5上部を侵食して累重する。本ユニットの流路部分の発掘調査結果では、堆積ユニット3で弥生時代前期～中期、堆積ユニット4で弥生時代前期の土器の包含が確認される。流路肩部に打設されていた杭材の放射性炭素年代値は、ユニット3で 2200 ± 30 ・ 2200 ± 40 yrs BP (2σ : Cal BC 380-180)、堆積ユニット4で 2490 ± 40 ・ 2460 ± 40 yrs BP (2σ : Cal BC 780-410)と、出土する遺物と調和的な傾向を示す。これらの年代値から、堆積ユニット3は弥生時代中期、堆積ユニット4が弥生時代前期に累重したことが確認される。

以上のような層相および放射性炭素年代測定結果から、弥生時代前期に調査区では、後背湿地に蛇行流路の堆積システムをなす流路が流入し、流路と氾濫原堆積物からなる堆積物の上方および側方への付加が進行したことが確認される。

Unit1・2 (堆積ユニット1・2)

堆積ユニット1・2は、堆積ユニット3最上部の古土壌の上位に累重する。堆積ユニット1は、腐植を多量に含む黒褐色シルト質粘土層である。層相は、見かけ上塊状を示す。堆積ユニット2は、褐色砂質粘土質シルト層である。層相は塊状を呈す。堆積ユニット1と堆積ユニット2は、層状に堆積する。堆積ユニットの層界は、非常に乱れた状態を示し、波状ないし火炎状をなす部分が多く観察される。このような堆積構造は、地震動による変形に伴うものである可能性が考えられる。なお、出土した遺物から、堆積ユニット1については、古代～中世に形成された可能性が指摘される

以上のような層相と堆積層の累重、および出土遺物の相対年代から、II区では、弥生時代前期～中期のある段階で流路が埋没し、調査区やその近辺では、地表面上にある程度の期間継続的に植物が生育できるような、安定した堆積環境が形成されたことが示唆される。その後、弥生時代以降のある段階に調査区では、再び氾濫堆積物が流入するような環境へと変化したと考えられる。

iv IV区

Unit8 (堆積ユニット8)

深掘トレンチでは、T.P. - 0.8m付近において、非常に固結した砂礫層が確認される(写真4-6)。砂礫層は、基質部の風化が進行しており、粘土化が認められ、上位の堆積層と明瞭に区分される。堆積ユニット8は、この砂礫層に相当する。固結度および基質部の風化状況から、堆積ユニット8は、完新統ではなく更新世ないしそれ以前に形成された地層と考えられる。このような堆積ユニット8は、平坦面をなして分布することから、埋没段丘面をなすと判断される。

Unit7 (堆積ユニット7)

堆積ユニット7は、埋没段丘面を構成する堆積ユニット8の直上に載る。本堆積ユニットは、腐植質に富み、材化石を多く含む細礫混じりの砂質シルト層で構成される。堆積ユニット7に含まれる材化石からは、 5570 ± 40 yrs BP (2 σ : Cal BC 4460 - 4350)の放射性炭素年代値が得られている。珪藻分析では、汽水生種の*Pseudopodosira kosugii*が優占する。本堆積ユニットでは、腐植質に富むことから、堆積速度の小さな安定した環境が示唆される。珪藻化石群集をふまえると、堆積ユニット7は、埋没段丘面上において形成された汽水域の湿地性の土壌と推測される。

Unit6 (堆積ユニット6)

堆積ユニット6は、生痕が発達する砂質シルト層で構成される。堆積ユニット6の珪藻分析結果では、堆積ユニット7と同様に汽水生種が優占する。本ユニットで優占する珪藻は、II区の堆積ユニット5でも多産した汽水生種の*Pseudopodosira kosugii*である。上述した本種の生態性および層相から、堆積ユニット6は、浜堤後背の陸域に近い、汽水域の湿地や池沼～沼沢地の堆積環境下で形成されたと考えられる。なお、II区に比べIV区では、*Pseudopodosira kosugii*の優占する層準の粒度組成が粗粒であることが認識される。花宴遺跡の地形についてみると、IV区はII区比べ、相対的に丘陵

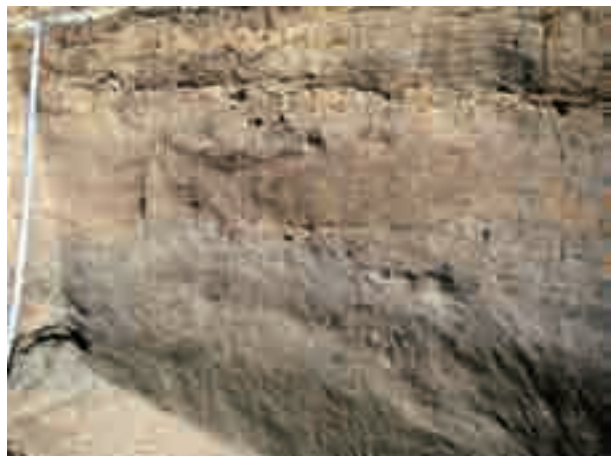


写真4-2 IV区E2中央バンク深掘断面(西端部)

や台地に近い。この要因については、IV区が、より陸域に近い堆積場であったことに起因するものと判断される。

Unit5 (堆積ユニット5)

堆積ユニット5は、シルト質粘土層で構成され、腐植質に富む層相を示す5bと、腐植をほとんど含まない碎屑物主体の5aに細分される。本ユニットの珪藻化石群集は、淡水生種が優占する。汽水生種の優占から、淡水生種を主体となす化石群集への急激な変化は、T.P. -0.8m付近で認められ、II区も同様の傾向を示す。堆積ユニット5では、下位のユニット5bで認められていた腐植栄養の止水域に生息する種を含む止水生種が、上位のユニット5aに向かって減少し、中～下流性河川指標種群を含む流水生種が増加する傾向を示す。このことから、堆積ユニット5では、次第に河川氾濫水の影響を強く受ける堆積場へと変化したと考えられる。層相および珪藻化石群集をふまえると、堆積ユニット5では、5bで閉鎖的環境の沼沢地や湿地、5aで河川氾濫の影響を受ける沼沢地や河川の後背湿地の堆積環境下で形成されたと解釈される。堆積ユニット5bに含まれる植物遺体からは、 2440 ± 30 yrs BP (2σ : Cal BC 750-410)の放射性炭素年代値が得られている。



写真4-3 IV区E2中央バンク断面(東端部)

Unit3・4 (堆積ユニット3・4)

堆積ユニット3・4は、堆積ユニット5以下の地層を深く侵食して形成された流路状の堆積空間を充填する。流路状の堆積空間の中心部には、砂礫層が存在する。その側方には、砂礫層と同時異相をなす砂泥互層やシルト質砂層が分布する。砂礫層は粗粒砂～極粗粒砂混じりの細礫～中粒の中礫、砂泥互層は泥質砂層を構成する砂が細粒砂～中粒砂からなる。上記のような一連の堆積層の分布形態は、II区で検出された流路と同様に、蛇行河川の堆積システムで形成されたものとみなされる。従って、砂礫層は当時の河床を埋積した堆積物と判断される。これと同時異相をなす砂泥互層や泥質砂は、流路縁や河岸に累重した堆積物と認定される。堆積ユニット3については、堆積ユニット4を深く再侵食して形成されている。堆積ユニット3・4からは、ユニット3で弥生時代後期を下限とする土器、ユニット4で弥生時代中期を下限とする土器が検出されている。

Unit1・2 (堆積ユニット1・2)

堆積ユニット1・2は、砂質粘土質シルト層で構成される。層相から、これらの堆積ユニットは、後背湿地の堆積環境下で形成されたと解釈される。堆積物中に含まれる考古遺物から、形成年代については、堆積ユニット1が近世以降、堆積ユニット2が古代～中世と考えられる。堆積ユニット1・2では、強い人為的な擾



写真4-4 IV区E2 SD-3断面と試料採取状況

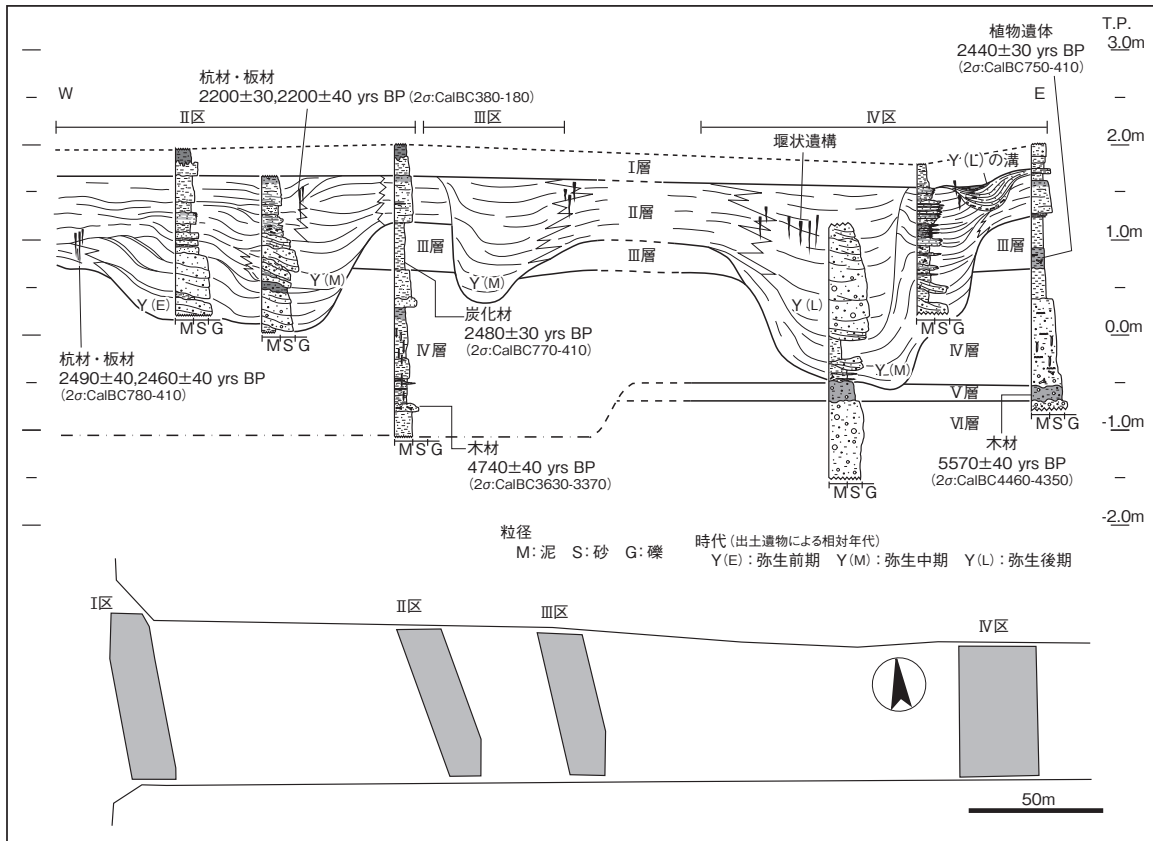


図4-18 花宴遺跡の東西方向の堆積物累重状況

乱が認められる。

② 花宴遺跡の地形発達史

本節では、II区とIV区の調査・分析成果に基づき、花宴遺跡における地形発達史を検討する。花宴遺跡に累重する堆積層については、層相および珪藻化石群集、放射性炭素年代値から、I～VI層までの層序区分を試みた(図4-18)。以下に、この層序区分に基づき各堆積層の時期の堆積環境と地形発達を述べる。

VI層(埋没段丘堆積物)

VI層は、IV区で認められた埋没段丘を構成する砂礫層に相当する。VI層はT.P.-0.8m付近から下位に累重するが、同一の標高においてII区でその存在が確認されない。このことから、VI層で構成される埋没段丘面は、調査区の北側に存在する丘陵・台地に近いIV区周辺のみ分布するものと判断される。なおVI層では、テフラの挟在が認められない。そのため、現状では固結度と基質部の風化状況から、VI層の形成年代については、更新世ないしそれ以前との推測にとどまっている。遺跡周辺の現地踏査では、IV区北側背後の丘陵部や段丘面において、VI層に対応するような地層が確認されていない。IV区で確認された埋没段丘を構成する砂礫層については、ボーリングデータや、より詳細な遺跡周辺の踏査をふまえ、今後さらに検討を進めていく必要があるものと思われる。

V層(縄文時代前期中頃)

V層は、埋没段丘のVI層上部に累重する木材化石を多く含む腐植質泥層である。含まれる木材化石からは、6340-6300 Cal BPと縄文時代前期中頃の年代値が得られている。V層の珪藻分析結果で

は、汽水生種が優占するが、上位のⅣ層に比べ淡水生種が多く含まれる。

以上のような珪藻分析と年代値および層相から、花宴遺跡においてⅣ区周辺の埋没段丘面上では、縄文時代前期中頃に、陸域に近い汽水域の安定した湿地の環境下で土壌が形成されるような堆積場であったと推定される。

Ⅳ層(縄文時代中期前半から弥生時代前期以前)

Ⅳ層は、花宴遺跡の深部において側方へ連続して認められる堆積層である。本層は、陸域に近いⅣ区で泥混じりの細粒砂～中粒砂、Ⅱ区で砂層の葉理を挟在する砂混じりの泥層で

構成される(写真4-7)。Ⅳ層の珪藻化石群集は、陸域に近い塩性湿地や、潮汐流の影響を受ける領域の干潟後背の湿地や湖沼にみられる種群の *Pseudopodosira kosugii* で特徴づけられる。Ⅳ層では、Ⅱ区で確認された最深部の T.P.-0.8m において、5600-5320 Cal BP と縄文時代中期前半の年代値が得られている。また、Ⅳ層の上部に累重するⅢ層では、後述するように弥生時代前期頃を示す年代値が得られている。

以上のような珪藻化石群集と年代値および層相から、花宴遺跡では、縄文時代中期前半から弥生時代前期以前に、浜堤後背の汽水域の沼沢地および池沼や湖沼の環境であったと考えられる。当該期には、最上部を除き、縄文時代前期中頃に比べ陸水の影響が少なく、継続的に水没するような古水文環境となる堆積場が形成されていたと考えられる。

Ⅲ層(縄文時代晩期～弥生時代前期頃)

Ⅲ層は、Ⅳ層と同様に花宴遺跡において側方に連続して認められる堆積層である(写真4-3)。Ⅳ層は、腐植質泥層を挟在する泥層で構成される。本層では、Ⅱ区の炭化材で 2720-2370 Cal BP、Ⅳ区の植物遺体で 2700-2360 Cal BP と、縄文時代晩期～弥生時代前期頃(西本編, 2006)の年代値が得られている。泥層で構成されることから、Ⅲ層は滞水域における浮遊土砂が静水沈降するような堆積場で形成されたと考えられる。このようなⅢ層では、下位のⅣ層で優占していた汽水生種が急減し、淡水生種が優占する珪藻化石群集となる。このうち、Ⅳ区の腐植質泥層では、腐植栄養性の滞水域に出現する *Fragilariforma exigua* が検出され、閉鎖的な沼沢地や湿地の堆積環境が示唆される。Ⅲ層上部では、流水性や中～下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Reimeria sinuata* が検出されるようになり、下部に比べ河川氾濫の影響が強まったことが示唆される。さらにⅢ層上部では、好清水性種に



写真4-5 Ⅳ区W北壁断面



写真4-6 Ⅳ区W2北壁断面最下部埋没段丘堆積層

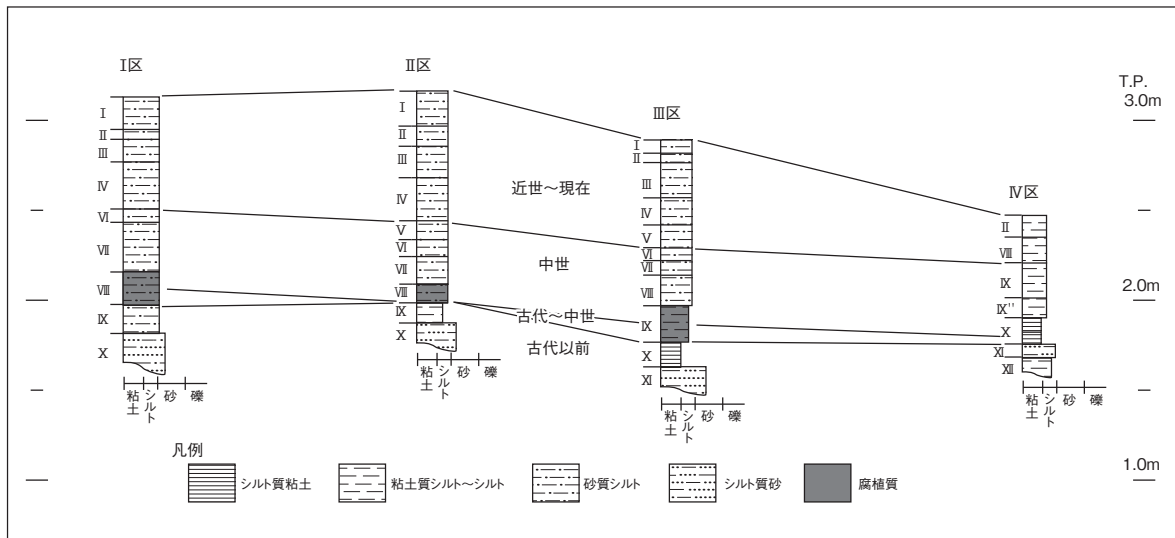


図4-19 I～IV区の弥生時代以降の堆積層の累重

区分される種群の多産も目立つ。

以上のような珪藻化石群集と年代値および層相から、花宴遺跡では、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃に、一部に閉鎖的な沼沢地や湿地が形成されるものの、洪水時などに河川流の影響を頻繁に受けるような表層水の循環が良好な池沼～沼沢地や、流路の後背湿地であったと考えられる。当該期に調査区では、縄文時代中期前半から弥生時代前期以前の時期のように、全体的に水没するような古水文環境ではなく、湿地や浅い滞水域が広がるような堆積場が形成されていたものと推測される。

II層(弥生時代前期～後期)

II層は、花宴遺跡で発掘対象となった流路や溝を埋積する堆積層である。本層は、下位のIII層以下の地層を侵食して累重する。II層では、流路状の形態をなす堆積空間が幾つも形成されている。本層では、下に凸型をなす流路状の堆積空間内に砂礫層が分布し、その側方へ同時異相となる砂泥互層や泥質砂層が広く層状に分布する(図4-13, 写真4-1)。このような層相と堆積状況から、本層は、蛇行河川の堆積システムによって累重する河床堆積物の砂礫層と、その側方へ発達する氾濫原堆積物の砂泥互層や泥質砂層からなるものと判断される。発掘調査が実施されたI～IV区では、後背湿地泥層の分布がほとんどみられず、流路および流路縁から河岸を構成する堆積層が分布する。従って、今回の花宴遺跡の調査範囲に分布するII層については、流路とその周囲の河岸をなす自然堤防の堆積層によって構成される。II層のうち、流路を充填する河床堆積物からは、弥生時代前期～後期の各段階の土器が検出されている。また、河床堆積物に打設された堰状遺構をなす杭列や護岸を構成する木材も、出土する土器と調和的な年代値を示す(図4-13)。なお、上述した流路-河岸をなす河川堆積物については、再侵食面をもっていくつかの堆積ユニットに区分される。これらの堆積ユニットには、包含される考古遺物の下限年代と絶対年代値から、弥生時代前期、中期、後期の各段階において、流路-河岸をなす蛇行河川の堆積システムが形成されていたことが確認される(図4-18)。

以上のような年代値および層相から、花宴遺跡では、弥生時代前期～後期に、流路と自然堤防が形成されるような環境であったと考えられる。縄文時代晩期末～弥生時代前期頃のIII層を含めると、花宴遺跡では、弥生時代前後の期間に約2mの氾濫原面が上昇したことが確認される。上記の内容をふまえると当該期には、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃に比べ、河川攪乱の頻度が高い、相対的に

乾燥した土壤環境が形成されていたと認識される。

I層(弥生時代以降)

I層は、弥生時代以降に累重した地層である。空中写真判読によれば、今回の調査区は、香宗川の後背湿地の領域に位置することが読みとれる。実際、I区～IV区を構成するI層では、泥層を主体とした堆積物で構成されており、空中写真判読結果と調和的な層相と捉えられる。現地形は、香宗川の流路から東へ緩やかに傾斜しており、I区からIV区にかけて現地盤高の低下が確認される(図4-19)。I層では、I区からIII区で古代～中世にかけて形成された黒褐色腐植質の泥層の累重が認められる。しかしながら、この腐植質泥層については、今回の調査範囲



写真4-7 II区北壁断面深掘状況

において現地盤高で一番低所に位置するIV区でその存在が確認されない。花粉分析では、腐植質泥層において、水湿地生の草本も少なからずみられることから、湿地や湿性の土壤環境下で形成された可能性が示唆される。標高に基づく堆積層の分布と花粉分析結果から、黒色腐植泥層は、湿性の環境下で生成された土壤と推定される。黒色腐植泥層が分布するI～III区よりも相対的に低所なIV区では、より低湿で水位が高い状況下であり、土壤発達程度が低い、湿潤な地表面の環境が形成されていたと想定される。なお、I層ではその構成層の多くが人為的な擾乱を強く受けていることが、現地での肉眼観察からうかがえる。このことから、I層は耕作土などの土地利用がなされたものと認識される。

以上のような堆積層の遺物出土状況と層相およびその分布から、花宴遺跡では、弥生時代以降、流路の後背湿地の環境下で耕作地などの土地利用がなされていたものと考えられる。このような後背湿地では、IV区において、I区からIII区よりも低湿な土壤環境であったと解釈される。当該期には、地表面が常時水没する状態ではなく、大気下に曝される時期も長く維持される湿地の堆積・土壤環境下にあったと推定される。

③ 調査区周辺の古植生

ここでは、II区およびIV区の植物化石群集の層位変化について、上述したI～V層の層序区分(図4-18)に基づいて比較検討し、縄文時代前期中頃以降の植生変遷について検討する。各層の植物化石群集はI～V層の堆積環境を踏まえると、基本的に異地性と判断されることから、集水域の広い範囲の植生を反映していると想定しておく必要がある。ただし、花粉化石群集のうち草本花粉は木本花粉に比べより局地性が強いとされる(辻, 2000)。また、植物珪酸体や種実化石は花粉化石より局地的な植生を反映する場合が多い。これらの産状に基づいて調査区近辺の植生についても検討を試みる。

i 遺跡をとりまく山地・丘陵斜面や台地の古植生

縄文時代前期中頃(V層)

縄文時代前期中頃のV層は、花粉化石群集において常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占することが特徴である。この特徴から、当時の花宴遺跡をとりまく山地・丘陵斜面や台地の植生は、カシ類を主

体とする暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)であったことが推定される。随伴するシイノキ属や針葉樹のモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、落葉広葉樹のサワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属なども当時の林分構成要素であった可能性がある。

ところで、現在の照葉樹林は、大きく、タブ林・シイ林・カシ林に区分され、主にタブ林が海岸沿いか沖積地、シイ林が丘陵地・低山地、カシ林がこれらより標高の高い山地に分布している(山中, 1979)。上記したように縄文時代前期中頃の本地域周辺山地などに成立していた照葉樹林はカシ類を主としていた可能性が考えられる。同時期の物部川水系の伊達野のボーリングコアの花粉分析結果では、縄文時代前期中頃の層準においてアカガシ亜属のほかにはシイノキ属花粉も比較的多産しており(三宅ほか, 2005)、同じ沿岸部でも地域によって成立していた照葉樹林の様相が異なっていた可能性がある。

縄文時代中期前半から弥生時代前期以前(IV層)

縄文時代中期前半から弥生時代前期以前の花宴遺跡をとりまく山地・丘陵斜面や台地の植生は、V層形成期と同様に照葉樹林であったと推定される。ただし、本時期には、花粉化石群集において針葉樹のツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が増加する。増加するツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、花粉化石群集の構成からみて、暖温帯から冷温帯の推移帯に分布する温帯性針葉樹のツガやヒノキなどに由来する可能性が高い。温帯性針葉樹は、斜面崩壊地や地滑りなどにより鉱質土壌が露出する攪乱地が生育適地とされる(中静, 2004)。これらのことから、縄文時代中期前半には周辺の山地斜面や山麓の扇状地などの攪乱地を中心に温帯性針葉樹が分布を上げた可能性がある。また、Ⅲ層中・上部形成期には、常緑広葉樹のシイノキ属花粉が増加傾向を示すようになることから、後背地においてシイ林の成立領域も拡大したことが推定される。先述したようにシイ林は低山地や台地を主に分布するが、沖積低地でもタブ林よりも乾いた環境においてカシ類と混生する(山中, 1979)。IV層からⅢ層にかけての堆積環境変化を踏まえると、調査区の後背地域における陸域の拡大に伴い、分布を上げた可能性があり、今後、調査地域の地形変化との関連性について検討していく必要がある。

縄文時代晩期～弥生時代前期頃(Ⅲ層)

縄文時代晩期～弥生時代前期以降のⅢ層形成期も遺跡周辺の植生は、花粉化石群集において常緑広葉樹が依然として多産することから、暖温帯性常緑広葉樹林が継続分布していたと推定される。Ⅲ層の木本花粉の層位変化をみると、IV層で増加傾向を示したシイノキ属が一度減少した後、再び増加傾向を示すようになる。シイノキ属は萌芽更新能力が高い樹種であり、現在でも高知県沿岸部の広い範囲においてシイ萌芽林が成立している(藤原, 1982a・b)。これらのことや後述するように本時期には人間活動が顕著となることを踏まえると、Ⅲ層からⅡ層にかけてのシイノキ属の増加はカシ林域などに人為的植生攪乱など何らかの植生攪乱が及び、シイ萌芽林が分布を上げた可能性が考えられる。

弥生時代前期～後期(Ⅱ層)

弥生時代前期～後期のⅡ層になると、花粉化石群集において優占していたアカガシ亜属のほか、マキ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・コナラ亜属が減少傾向を示すようになる。このことから、周辺山地に分布していた照葉樹林域を中心に植生変化が起こったことが推定される。

本時期の堆積物から出土した木製品等の木材利用の詳細については後述するが、本時期に利用されている木材の樹種が花粉化石で減少する種類と対応するものが多いことが認識される。また、花粉化石群集では、Ⅱ層上部で二次林要素であるマツ属花粉が漸増傾向を示している。これらのことを踏まえると、弥生時代前期～後期になると、周辺に存在した林分に対する人為的植生攪乱の影響が強まり、二次林的性格の強い林分に変化していったことが推定される。なお、このように人為的植生攪乱の影響を受けていたものの、基本的な植生は照葉樹を主体としていたことが推定される。

古代・中世以降(Ⅰ層)

古代以降のⅠ層形成期になると、周辺植生は大きく変化する。花粉化石群集に占める木本花粉の割合が著しく低下し、木本組成において複維管束亜属を主としたマツ属が卓越するようになる。マツ属複維管束亜属には、アカマツ・クロマツが含まれるが、いずれの樹種も陽樹であり二次林の代表的な樹種である。したがって、古代以降には花宴遺跡の周辺の山地・丘陵斜面などにおいて、林分が縮小し、マツ属二次林の目立つ植生へ変化し、部分的に裸地化したことが推定される。

照葉樹林の成立領域では、植生攪乱の規模によって成立する二次植生の様態が異なり、攪乱の頻度が小さいと、先に述べたシイ類やアラカシなどの萌芽能力の高い樹種が分布を拡げるが、攪乱の規模や頻度が頻繁になるとマツ二次林へ変化することが知られている(山中, 1979)。このことを踏まえると、本地域における古代以降の植生変化が如何に規模の大きな変化であったかが窺える。このような攪乱要因としては、河川氾濫や地滑りなどの地表攪乱の可能性もあるが、二次林化が新しい時代にかけて継続することから、人為的な植生攪乱に起因すると考えるのが妥当である。弥生時代以降の人間活動に伴う植生干渉によるマツ属の増加は、日本各地で確認されている(那須, 1980; 波田, 1987)。今回の結果も同調的变化といえるが、二次林の成立過程やその要因については地域により差があることも指摘されている(例えば、辻本ほか, 2007)。本地域で確認された古代以降の二次林の分布拡大についても、千葉(1991)が指摘しているような当時の社会体制の変化を踏まえた評価が今後必要と考える。

ii 調査区やその近辺の古植生

縄文時代前期中頃(Ⅴ層)

Ⅳ区周辺の埋没段丘面上では、縄文時代前期中頃に、陸域に近い汽水域の安定した湿地の環境下で土壌が形成されるような堆積場であった。この湿地周辺には、ガマ属・オモダカ属・イネ科・カヤツリグサ科・ゴキヅル属などの湿地～水生植物が分布していたことが花粉化石の産状から推定される。

縄文時代中期前半から弥生時代前期以前(Ⅳ層)

縄文時代中期前半から弥生時代前期以前のⅣ層形成期の調査区は、浜堤後背の汽水域の沼沢地および池沼や湖沼の環境であった。本層における草本花粉をみると、湿地生植物を含むカヤツリグサ科・イネ科のほか、沈水植物のフサモ属が連続して産出するようになる。また、上位に向かって草本花粉の割合や種類数がやや増加し、浮葉植物のヒシ属なども産出するようになる。これらのことから、縄文時代中期前半から弥生時代前期以前には、調査区背後の池沼～沼沢地の開水域や止水域において沈水植物のフサモ属・ヒシ属が生育し、水辺にヨシ属やガマ属などの抽水植物が生育していたと考えられる。なお、フサモ属の層位的産状をみると、Ⅳ層直上のⅢ層に相当する腐植質泥層でも産出するが、それより上位のⅢ層や下位のⅤ層で認められない。このようなフサモ属の産状は、層相および珪藻化石群集から、下位のⅤ層や上位のⅢ層よりも相対的な水位が高かったと判断されるⅣ

層の古水文環境と調和的である。

縄文時代晩期～弥生時代前期頃(Ⅲ層)

縄文時代晩期末～弥生時代前期頃のⅢ層形成期には、上述したように洪水時などに河川の流水の影響を受け、表層水の循環が良好な湿地や浅い滞水域が広がる淡水域へ変化している。このような堆積場の環境変化と対応するように、草本花粉(辻, 2000)の割合が増加し、植物珪酸体含量密度も増加傾向を示すようになる。各種類では大型の抽水植物のガマ属・ヨシ属、小型のミズアオイ属、湿地生植物を含むイネ科・カヤツリグサ科である。調査区近辺の水文環境の変化に伴い、これらの水生～湿地生植物の生育領域が拡大したことが推定される。

また、Ⅲ層において注目されるのは、植物珪酸体分析において、栽培植物のイネ属機動細胞珪酸体が、Ⅱ区で3700個/g、Ⅳ区で1700個/g、2300個/g、700個/gと比較的多く産出することである。このようなイネ属珪酸体の含量から、弥生時代前期には、Ⅰ～Ⅳ区ないしその近接地で水田が存在していた可能性が高いことが示唆される。

弥生時代前期～後期(Ⅱ層)

弥生時代前期～後期のⅡ層は、流路と自然堤防堆積物からなり、全体的に高燥な土壤環境が形成される。本層の花粉化石・植物珪酸体群集では、Ⅲ層と比較して水湿地生の草本植物に乏しく、ヨモギ属やネザサ節などの乾いた土地条件を好む種類が目立ち、地形発達過程と調和的な花粉化石群集の変化を示す。Ⅱ層では、Ⅱ区で弥生時代中期の流路縁堆積物、Ⅳ区で弥生時代中期の流路底の滞水堆積物、弥生時代後期の溝埋土において種実遺体分析を行っている。これらの分析では、ホタルイ属、タカサブロウ、フサモ属の水湿地生の植物も産出するものの、カナムグラ、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、カタバミ属、メナモミ属といった河原や荒地などの明るく開けた場所に分布する人里植物の産出が目立つようになる。これらは当時の調査区周辺で高燥な土壤環境が形成されたことと同調的な変化といえる。なお、Ⅳ区の弥生時代中期の流路底からは、沿岸部の池沼に分布し、塩分耐性の高いカワツルモが多産し、水湿地生のヒルムシロ属、イバラモ属も産出している。これらの水生～湿地生植物は、分析地点の層相から、流路底に形成された滞水域などを中心に生育していたことが推定される。

また、当該期の種実分析で検出された木本植物は、照葉樹林要素であるアカガシ亜属(イチイガシ近似種)、クスノキ科、ヒサカキ属が確認されるが、その産出数は少なく、河畔林や林縁に普通なアカメガシワ、イネザンショウ属、イイギリ、クマノミズキ、エゴノキ属、タラノキといった落葉広葉樹が多くを占める。このような木本種実遺体の組成から、調査区およびその近辺の氾濫原では、照葉樹林とよべる林分が間近に存在していなかったことが推定される。

弥生時代には、発掘調査の結果、流路や溝において護岸や堰状遺構が確認されており、調査区周囲において水田の存在が示唆されている。栽培種のイネ属珪酸体の産状をみると、Ⅱ層では、水田の取水先となる流路や導水路となる溝埋土において分析を実施しており、下位のⅢ層ほど多産していないものの産出する。種実遺体では、Ⅱ区の弥生時代中期の流路、Ⅳ区の弥生時代後期の溝からイネの穎、Ⅳ区の弥生後期の溝では、イネ以外に栽培種のアワ近似種やメロン類も産出する。花粉化石では栽培種が確認されないものの、弥生時代の層準からオモダカ属やミズアオイ属といった水田雑草でもある水生～湿地生草本類が安定して産出ようになる。これらの栽培植物などの産状をふまえると、弥生時代前期～後期のⅡ層では、調査区の近辺で、水田が存在していた蓋然

性が高いことを指示する。

以上の知見をふまえると、弥生時代前期～後期にかけて、花宴遺跡では、全体的に高燥な土地条件が形成されるとともに、明るく開け草が卓越する植生景観が広がり、埋没流路や自然堤防の微高地上でカナムグラ、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、メナモミ属、ヨモギ属、ネザサ節、それらの間や周囲の相対的低所となる湿地や放棄流路などの滞水域で、ホタルイ属、タカサブロウ、フサモ属、ヒルムシロ属、イバラモ属、カワツルモが分布していたものと推定される。また、調査区周辺には、オモダカ属やミズアオイ属なども分布するような、水田が存在していたものと推測される。

さらに、今回の調査範囲の周囲をとりまく丘陵や台地と氾濫原の境界をなす林縁部には、アカガシ亜属やクスノキ科といった照葉樹の他、常緑広葉樹のヤマモモ属、落葉広葉樹のアカメガシワ、イヌザンショウ属、イイギリ、クマノミズキ、エゴノキ属、タラノキなどが分布していたと考えられる。花宴遺跡が立地する氾濫原上では、活動的な流路沿いの河岸、自然堤防、埋没流路の微高地において、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属やコナラ亜属の一部が河畔林、沼沢地や後背湿地においてハンノキ属が湿地林として林分を形成していたことも推察される。

古代・中世以降(I層)

後背湿地の環境下において弥生時代以降に形成されたI層では、上述したように遺跡周辺の森林域で次第に人為的攪乱が及び二次林領域が拡大したことが推定される。当該期の草本花粉に注目すると、弥生時代以降には、水田雑草を構成する種類にもなるガマ属、オモダカ属、スブタ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ギシギシ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属の出現が目立つようになり、人里植物のオオバコ属も検出されるようになる。これらの水生～湿地生の植物や人里植物の出現は、弥生時代以降に耕作地がさらに広がったことを示している可能性がある。I層は、層相から耕作土からなる部分が多いと推定され、草本花粉群集の層位変化は調和的な結果とみなされる。イネ属植物珪酸体の含量密度は、弥生時代よりも少ないものの、I層の相対比率では下位の堆積層に比べ概ね増加傾向にあることが指摘される。

以上のようなI層の花粉・植物珪酸体の産状から、弥生時代以降に花宴遺跡では、遺跡周辺の森林域で次第に人間の攪乱が強まると同時に、調査区周辺でイネ属の他、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ギシギシ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生～湿地生植物やヨモギ属、オオバコ属、シバ属が水田などの耕作地を中心に分布していたことが推定される。

④ 出土の木材の樹種

弥生時代後期後半のSR-6とSR-5弥生時代中期から出土した木材の大半は、杭など護岸に転用された部材である。部材については、IV区-WのSR-6でヒノキ、アスナロ、スギ、クスノキ、ムクロジに同定される。また、IV区E1・2のSR-5弥生時代中期の杭材は、アカガシ亜属、クヌギ節、マツ属複雑管束亜属、アスナロ、ヒノキ科、ツブラジイ、カキノキ属、ムクノキ属である。なお、IV区-WのSR-6の試料No.237は、堅杵であり、アカガシ亜属に同定された。

弥生時代前期のSR-2の杭材では、アワブキ属、アカガシ亜属、ツブラジイが確認される。弥生時代中期のSR-1・SR-3の杭材は、マキ属、イヌガヤ、スギと同定された。

上記のように同定された樹種のうち、アカガシ亜属とツブラジイは暖温帯常緑広葉樹林の主要構

成種であり、ムクロジもその林縁部等に生育する。マツ属複雑管束亜属やクヌギ節は、二次林や河川氾濫原等に生育する。針葉樹のヒノキ・スギは温帯性針葉樹である。スギとヒノキは、割裂性が高く、加工が容易であり、耐水性も比較的高い。本地域では同時期の資料は少ないが、スギやヒノキは弥生時代の板材等に比較的多く利用されている樹種である(島地・伊東, 1988)。

これに対し、アスナロについては、山地・丘陵地の尾根筋等に生育する種類であり、他の種類とは生育地傾向が異なる。アスナロが耐水性の高い有用材であることを考慮すると、部材と由来が異なる可能性も想定される。

以上のことと、先述の古植生の検討結果を踏まえると、樹種同定を行った木材の多くは、遺跡周囲に存在していた林分から採取されたものと判断される。多くの同定結果が存在する弥生時代後期の流路で確認される樹種については、遺物の性状、調査区内での空間的な位置、遺構形成過程などをふまえ、さらに検討していくことが課題と認識される。

なお、同定されたアワブキ属には、落葉性と常緑性の種類があるが、組織から判別することは難しい。今回の試料については、常緑性ヤマビワ等に似ている印象を受ける。また、カキノキ属については、日本に8種(ヤエヤマコクタン・トキワガキ・ヤワラケガキ・リュウキュウガキ・カキノキ・マメガキ・リュウキュウマメガキ・オールドガキ)とカキノキの変種であるヤマガキが分布し、四国にはそのうち3種(トキワガキ・ヤマガキ・リュウキュウマメガキ)が分布する。カキノキとマメガキは、中国から渡来した栽培種とされ、四国でも栽培されている。これらを木材組織の特徴から判別することは困難である。

⑤ 塊状の炭化物の同定結果

IV区の北半部のVI層で検出された塊状の炭化物は、炭化したイネ胚乳、すなわち炭化米からなることが確認された。この炭化米は、 1740 ± 40 yrs BP (2σ : Cal AD 218-408)の年代値を示す。

なお、米を蒸し炊きし過ぎにより「おこげ」状となった場合、今回のように胚脱落部や表面の縦溝が確認されるなど明瞭に胚乳の形をとどめることはないと考えられ、生米の状態では火熱を受けたことが推定される。また、穎の破片が付着した胚乳が確認されることから、脱穀前の穎が付いた状態で貯蔵や保管等に利用されていたものが火を受け炭化し、炭化すると脆く壊れやすい穎が脱落して胚乳のみが残ったことが推定される。

(6) 小結

① 堆積環境

・ IV区では、T.P.-0.8m付近から下位に、更新世ないしそれ以前と推測される、非常に固結し基質部の風化が進行する砂礫層が確認された。この砂礫層は、埋没段丘面を構成していた。なお、II区でその存在が確認されない。

・ IV区周辺の埋没段丘面上では、縄文時代前期中頃に、陸域に近い汽水域の安定した湿地の環境であった。

・ 縄文時代中期前半から弥生時代前期以前に、調査区やその近辺では、汽水域の沼沢地および池沼や湖沼の環境であった。当該期には、全体的に継続的に水没するような水文環境となるような堆積場が形成されていたものと推測される。

・ 縄文時代晩期～弥生時代前期頃に、調査区やその近辺では、洪水時などに河川の流水の影響を受け、通常時に表層水の循環が良好な沼沢地や流路の後背湿地が広がるような環境であった。

・ 弥生時代前期～後期に、調査区やその近辺では、流路と自然堤防が形成されるような環境であった。このような堆積場では、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃に比べ、河川攪乱の頻度が高いものの、相対的に乾燥した土壌環境が形成されていたと考えられた。

・ 縄文時代晩期末～弥生時代前期頃から弥生時代後期にかけて、花宴遺跡では、弥生時代前後の期間に約2mほど氾濫原面が上昇した。

・ 現地形は、香宗川の流路から東へ緩やかに傾斜し、I区からIV区にかけて現地盤高の低下が確認された。

・ I～IV区は、弥生時代以降の地形発達史を示す現在の地形において、香宗川の後背湿地の領域に位置することが指摘された。

・ I～IV区を構成する弥生時代以降の層準は、河川後背湿地の堆積環境下で累重した泥層を主体とした堆積物で構成され、人為的擾乱が顕著に認められる。

・ 弥生時代以降、調査区やその近辺では、流路の後背湿地の環境下で耕作地などの土地利用が行われたことが推定された。

・ I区からIII区で古代～中世にかけて形成された黒褐色腐植質泥層は、好気的な土壌環境で形成された湿性の土壌と推定された。

・ IV区では、古代以降、I～III区よりも湿潤な土壌環境にあった。

・ 弥生時代以降、調査区やその近辺では、常時地表面が水没するような状態になく、大気下に曝される時期も長く維持されるような湿性の土壌環境が分布する領域が広がっていたと推定された。

② 古植生

・ 縄文時代前期中頃から弥生時代前期～後期は、花宴遺跡をとりまく山地・丘陵斜面や台地にカシ類を主体とする暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)が成立していた。モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イネガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹林や、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属といった落葉広葉樹も混生していた可能性がある。

・ 縄文時代中期前半から弥生時代前期以前には、調査区やその近辺に広がる沼沢地および湖沼や池沼といった止水域に沈水植物のフサモ属が生育し、水辺にガマ属などの抽水植物が着生していたと考えられた。

・ 縄文時代晩期末～弥生時代前期頃には、調査区やその近辺にヨシ属やガマ属、ギシギシ属などの水湿地生の植物が分布していたことが推定された。

・ 縄文時代晩期末～弥生時代前期頃には、比較的多くのイネ属珪酸体が確認され、調査区やその近接地で水田が存在していた可能性が高いことが示唆された。

・ 弥生時代前期～後期にかけて、調査区やその近辺では、明るく開けた草地が卓越する植生景観が広がり、埋没流路や自然堤防の微高地上でカナムグラ、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、カタバミ属、メナモミ属、ヨモギ属、ネザサ節が生育し、それらの間や周囲の相対的低所となる湿地や放棄流路などの滞水域で、ホタルイ属、タカサブロウ、フサモ属、ヒルムシロ属、イバラモ属、カワツルモが分布していた。

・ 弥生時代前期～後期には、存在が推定される水田やその導水元となる流路や溝に、オモダカ属やミズアオイ属が分布していた可能性が推察された。

・ 弥生時代前期～後期に、栽培種としては、イネ以外に、アワ近似種やメロン類が確認された。

- ・ 弥生時代前期～後期に森林域は、調査区から比較的離れた場所にあったと推測された。
- ・ 弥生時代前期～後期に調査区の周囲には、アカガシ亜属やクスノキ科といった照葉樹も存在していたものの、沿岸部に生育する常緑広葉樹のヤマモモ属、林縁をなす常緑広葉樹のアカメガシワ、イネザンショウ属、イイギリ、クマノミズキ、エゴノキ属、タラノキといった落葉広葉樹が主体となる林分が存在していたと考えられた。
- ・ 弥生時代前期～後期に花宴遺跡が立地する氾濫原上では、活動的な流路沿いの河岸、自然堤防、埋没流路の微高地において、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属やコナラ亜属の一部が河畔林、沼沢地や後背湿地においてハンノキ属が湿地林として林分が構成していたものと推定された。
- ・ 弥生時代以降に花宴遺跡では、遺跡周辺の森林域で次第に人間の攪乱が及ぶようになったと推定された。
- ・ 中世には、マツ属花粉が卓越し、人為的攪乱による常緑広葉樹林の衰退に伴う二次林化が顕著化したと考えられた。
- ・ 弥生時代以降に調査区周辺では、イネ属の他、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ギシギシ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水湿地生の植物を中心に、ヨモギ属、オオバコ属、シバ属が水田などの耕作地を中心に分布していたものと判断された。
- ・ 弥生時代以降に調査区周辺では、イネ以外にソバ属も栽培されていたことが確認された。

③ 木材利用

- ・ 弥生時代前期から後期の流路で検出された杭材と護岸に転用された部材は、その多くが、暖温帯性常緑広葉樹林と温帯性針葉樹林をなす主要構成要素であった。遺跡の立地をふまえると、遺跡周囲に存在していた林分から採取されたものと判断された。
- ・ 弥生時代後期後半の流路から検出された護岸に転用された部材と杭材は、ヒノキ科、ヒノキ、アスナロ、スギ、マツ属複雑管束亜属、アカガシ亜属、クヌギ節、ツブラジイ、ムクノキ属、ムクロジ、カキノキ属に同定された。このうち、アスナロやヒノキ科は、他の部材と由来が異なる可能性が想定された。
- ・ 杭材は、弥生時代前期でイヌガヤ、スギ、アワブキ属、中期でマキ属、アカガシ亜属、ツブラジイが認められる。
- ・ 弥生時代後期の堅杵は、アカガシ亜属に同定された。

④ 塊状の炭化物の同定結果

- ・ 生米の状態で火熱された炭化米からなることが確認された。

引用文献

- 安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理42』73-88
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.
- 千葉徳爾 1991「はげ山の研究」『そしえて』349p
- 原口和夫・三友清史・小林弘 1998「埼玉の藻類珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527-600
- 波田善夫 1987『花粉分析からみたマツ林の歴史.松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究-松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について-資料集』財

1. 自然科学分析調査報告 (6) 小結

- 日本自然保護協会 41-49.
- 林昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- 平井幸弘 2004「8-5 外帯河川のつくる沖積低地」『日本の地形6 近畿・中国・四国』太田洋子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編 東京大学出版会 318-325.
- Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen - Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15: 131-177, 15: 187-295, 15: 393-506, 15: 638-790, 16: 1-155, 16: 274-394.
- 藤下典之 1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎 638-654
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所 81-181
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所 66-176
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所 83-201
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所 30-166
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所 47-216
- 伊藤良永・堀内誠示 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌6』23-45
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究27』1-20
- 近藤鍊三 2004「植物ケイ酸体研究ペドロジスト48」46-64
- 近藤鍊三・ピアスン友子 1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告12』217-229.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh - water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 増田富士雄 1999「透水層・帯水層のトレース: ダイナミック地層学からのアプローチ」『地下水技術41』1-15
- 松谷暁子 1980「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」『浦幌町郷土博物館報告第16号』203-211
- 松谷暁子 2000「植物遺残の識別と保存について」『Ouroboros 東京大学総合研究博物館ニュース Volume 5』Number 18-10
- 満塩大洗・阿子島功 1991「(4) 高知県の完新統日本の地質 8 四国地方」『日本の地質 四国地方』編集委員会編 共立出版株式会社 147-149
- 三宅尚・中村純・山中三男・三宅三賀・石川慎吾 2005「高知平野伊達野低地周辺における最終氷期以降の植生史」『第四紀研究44』275-288

- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会642p
- 那須孝悌1980「花粉分析からみた二次林の出現」『関西自然保護機構会報4』3-9
- 西本豊弘編2006『新弥生時代のはじまり第1巻弥生時代の新年代』雄山閣143p
- パリノ・サーヴェイ1982『矢中遺跡群(Ⅱ)天王前遺跡高崎市文化財調査報告書第35集』高崎市教育委員会40-41
- パリノ・サーヴェイ1983『村北A・天王前遺跡矢中遺跡群(Ⅲ)』高崎市教育委員会高崎市文化財調査報告書第40集30-34
- RichterHG,Grosser D,Heinz I and Gasson PE (編)2006『針葉樹材の識別IaWaによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修)海青社70p [RichterH.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Sato,H.,Tanimura,Y. and Yokoyama,Y.,1996,a Characteristic Form of Diatom Melosira as an Indicator of Marine Limit during the Holocene in Japan. The Quaternary Research, 35, 2, p.99-107.
- 島地謙・伊東隆夫編1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣296p
- 杉山真二2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」辻誠一郎編著『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社189-213
- 田中宏之1987「群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻」『群馬県立歴史博物館紀要8』1-15
- Tanimura,Y.,Sato,H.,1997,PSEUDOPODOSIRA KOSUGII : A new Holocene diatom found to be auseful indicator to identify former sea - levels. Diatom Research, 12, 2, p.357-368.
- 辻誠一郎2000「植物と植物遺体」『辻誠一郎編著考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社23-41.
- 辻本裕也・辻康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋敦・松元美由紀・馬場憲司2007「池島・福万寺遺跡の古環境変遷2」『池島・福万寺遺跡3-恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-(池島I期地区)本文・考察編』(財)大阪府文化財センター397-473
- 辻本裕也2007「1万年の植生史~大阪湾岸地域の考古遺跡における古植生調査をもとに」『第22回日本植生史学会大会講演要旨集』
- 渡辺仁治2005『淡水珪藻生態図鑑群集解析に基づく汚濁指数DAIpopH耐性能』内田老鶴圃666p.
- Witkowski, A., & Lange - Bertalot, H. & Metzeltin, D.,2000, Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p.

2. II区及びIII区出土土器付着炭化物(おこげ)の放射性炭素年代測定(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

花宴遺跡は、高知県香南市香我美町徳王子字花宴(北緯33°33′04″, 東経133°44′05″)に所在する。試料は、更新世に堆積した平野部で検出した自然流路の堆積物の砂礫層(8~10層)中から出土した。

(2) 測定目的

自然流路の堆積時期を遺物と照合する。

(3) 測定対象試料

SR-2(II区)の8層から出土した土器(2186)の内面に付着した炭化物(No.1:IAAA-70923), SR-4(III区)の9層から出土した土器(3041)の内面に付着した炭化物(No.2:IAAA-70924), 同10層から出土した土器(3040)の内面に付着した炭化物(No.3:IAAA-70925), 合計3点である。

(4) 化学処理工程

- ・メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ・AAA (Acid Alkali Acid)処理。酸処理, アルカリ処理, 酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- ・試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- ・液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- ・精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- ・グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- ・年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- ・BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を

基準年として遡る¹⁴C年代である。

・ 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

・ $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰:パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \dots\dots\dots(1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \dots\dots\dots(2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_S または (¹⁴C/¹³C)_S

$^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_R または (¹⁴C/¹³C)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度(¹³A_S=¹³C/¹²C)を測定し、PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に[加速器]と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの¹⁴C濃度(¹⁴A_N)に換算した上で計算した値である。(1)式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的好くその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算される。

表4-19 花宴遺跡出土弥生土器付着炭化物の放射性炭素年代測定結果

IAA CodeNo.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70923	試料採取場所 : 高知県香南市香我美町徳王子 字花宴 花宴遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : No.1 (2186)	Libby Age (yrBP) : 2,250 ± 40 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -24.67 ± 0.63 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -244.8 ± 3.4 pMC (%) = 75.52 ± 0.34
	#1869-1 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -244.2 ± 3.2 pMC (%) = 75.58 ± 0.32 Age (yrBP) : 2,250 ± 30
IAAA-70924	試料採取場所 : 高知県香南市香我美町徳王子 字花宴 花宴遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : No.2 (3041)	Libby Age (yrBP) : 2,440 ± 40 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -25.41 ± 0.91 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -261.8 ± 3.4 pMC (%) = 73.82 ± 0.34
	#1869-2 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -262.4 ± 3.2 pMC (%) = 73.76 ± 0.32 Age (yrBP) : 2,450 ± 40
IAAA-70925	試料採取場所 : 高知県香南市香我美町徳王子 字花宴 花宴遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : No.3 (3040)	Libby Age (yrBP) : 2,480 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -26.55 ± 0.59 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -266.0 ± 3.0 pMC (%) = 73.40 ± 0.30
	#1869-3 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -268.3 ± 2.9 pMC (%) = 73.17 ± 0.29 Age (yrBP) : 2,510 ± 30

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

・ ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

・ 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10 較正プログラム(Bronk Ransley1995 Bronk Ransley2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001)を使用した。

表4-20 分析試料の補正年代

IAA CodeNo.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-70923	No. 1	2254 ± 35
IAAA-70924	No. 2	2438 ± 37
IAAA-70925	No. 3	2484 ± 33

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

(7) 測定結果

SR-2 (II区)の8層から出土した土器付着炭化物(No.1 : IAAA-70923)の ^{14}C 年代が $2250 \pm 40\text{yrBP}$, SR-4 (III区)の9層から出土した土器付着炭化物(No.2 : IAAA-70924)の ^{14}C 年代が $2440 \pm 40\text{yrBP}$, 同10層から出土した土器付着炭化物(No.3 : IAAA-70925)の ^{14}C 年代が $2480 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代($1\sigma = 68.2\%$)は、No.1が $390 \sim 350\text{BC}$ (27.2%)・ $290 \sim 230\text{BC}$ (41.0%), No.2が $740 \sim 690\text{BC}$ (14.7%)・ $660 \sim 650\text{BC}$ (3.2%)・ $550 \sim 410\text{BC}$ (50.2%), No.3が $760 \sim 720\text{BC}$ (13.8%)・ $700 \sim 680\text{BC}$ (4.0%)・

670～530BC (50.5%)である。測定対象試料は土器に付着した炭化物であり、試料の由来となる木の樹齢などに影響され、土器の使用年代を遡る場合がある。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

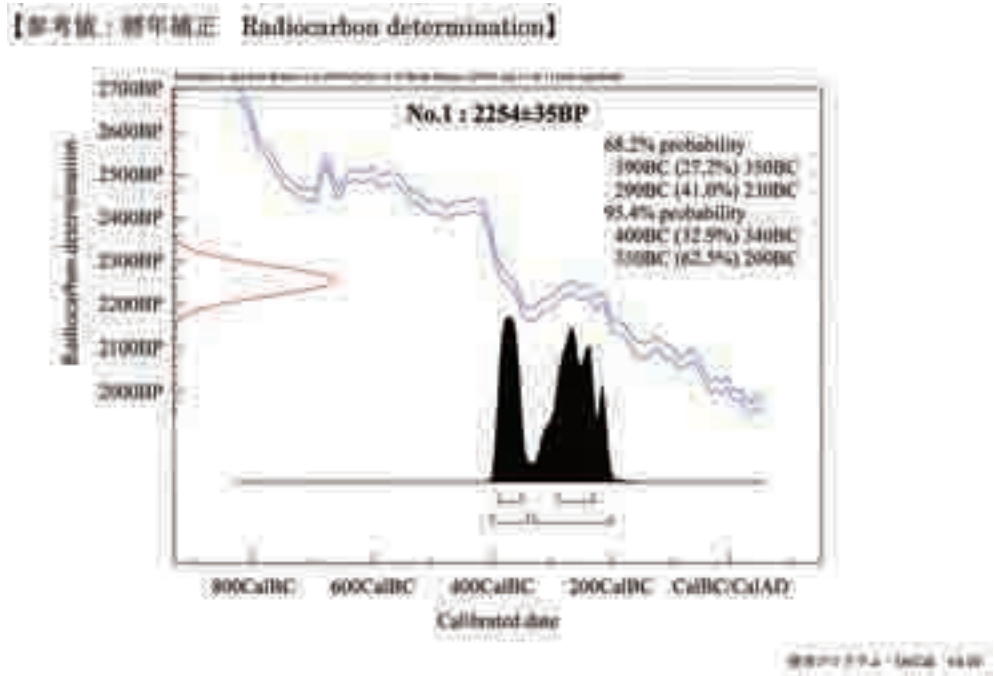


図4-20 分析試料No.1の暦年補正データ

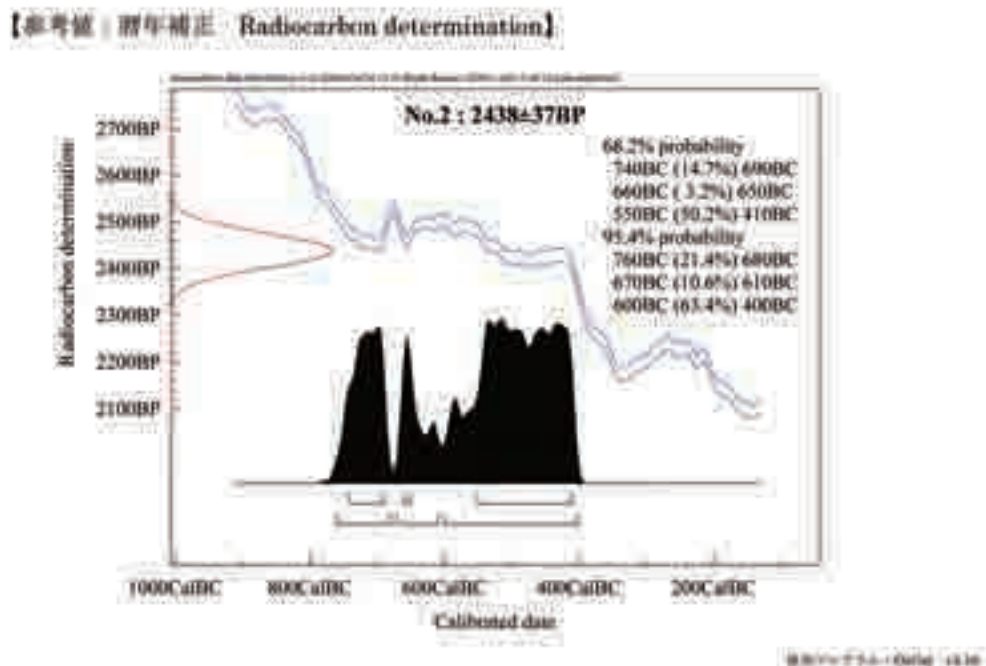


図4-21 分析試料No.2の暦年補正データ

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】

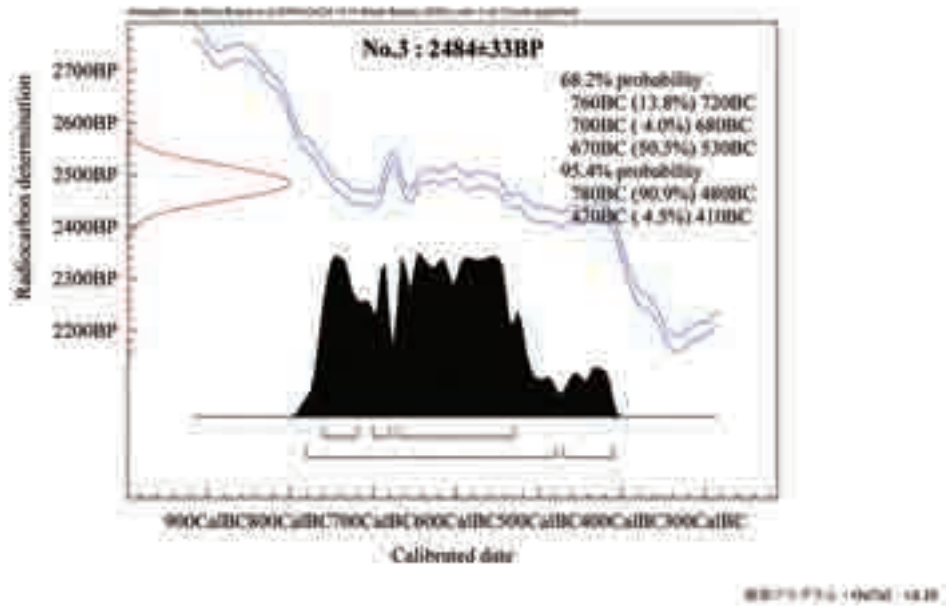


図4-22 分析試料No.3の暦年補正データ

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19,355-363
- Bronk Ramsey C.1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, Radiocarbon 37(2),425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A) ,355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J.and Weninger B.2001'Wiggle Matching'radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A) ,381-389
- Reimer,P.J,et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration,0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46,1029-1058

3. 花宴遺跡出土木製品保存処理樹種同定記録

(株)東都文化財保存研究所

(1) 平成17年度

① 試料

試料は、弥生時代後期後半～終末の部材1点(試料番号1)である。

② 分析方法

部材は板状で、3片に分割されていたが、薄いために接合面から木片を採取することができず、接合面の内側を中心に剃刀で直接3断面(木口・柾目・板目)の徒手切片を作製した。

切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)を参考にした。

③ 結果

木製品は、針葉樹のスギに同定された。解剖学的特徴等を記す。なお、樹種同定結果は遺物観察表に併記している。

・ スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

木口面は加工面であり、採取できた切片は晩材部の微細な切片のみであった。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並ぶ傾向がある。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は晩材部のため正確な形状を把握できない。放射組織は単列、1-15細胞高。

分野壁孔の形態など、針葉樹材の同定で重要な組織の観察ができなかったが、晩材部で樹脂細胞が接線方向に配列する傾向があること、晩材部が厚いこと等の特徴が該当する種類として、スギに同定した。

引用文献

島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176p.

(2) 平成18年度

① 試料

試料は、出土した木製品45点(試料番号1-45)である。試料番号1, 2, 4, 5, 9, 11, 12, 13, 14, 34は接合面から木片を採取した。試料番号3, 6, 8, 17, 18, 19, 26, 44は割れ目内や破損部から木片を採取した。試料番号7, 10, 15, 16, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 45は表面から直接切片を採取した。なお、試料番号については遺物観察表に平成19年度樹種同定試料と記入している。

② 分析方法

木片で採取した試料は、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製する。切片は、試料ごとにガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で

木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

③ 結果

木製品は、針葉樹4種類(スギ・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科)、広葉樹8種類(コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・クスノキ・ツバキ属・サカキ・シャシャンボ)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。なお、樹種同定結果は遺物観察表に併記している。

・ スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ コウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

2点とも木口が加工面のために切片の採取ができず、柾目面・板目面の2面のみ観察した。軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1-5細胞高。

・ ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ ヒノキ科(*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ ツブラジイ(*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky)ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-3個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・ スダジイ(*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai)ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-3個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に

配列する。放射組織は同性, 単列, 1-20細胞高。

ツブラジイとスタジイは, 集合～複合放射組織の有無がもっとも大きな違いであるが, ツブラジイの集合～複合放射組織の出現頻度は, 個体によって大きく異なり, 顕著に認められるものからほとんど認められないものまで様々である。そのため, スタジイとした中には集合～複合放射組織の出現頻度が低いツブラジイが混じっている可能性があるが, 本報告では集合～複合放射組織が認められたものをツブラジイ, 認められなかったものをスタジイとした。

・クスノキ(*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で, 道管径は比較的大径, 管壁は薄く, 横断面では楕円形, 単独または2-3個が放射方向に複合して散在し, 年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し, 壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性, 1-3細胞幅, 1-20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・ツバキ属(*Camellia*) ツバキ科

散孔材で, 管壁は薄く, 横断面では多角形～角張った楕円形, 単独および2-3個が複合して散在し, 年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し, 壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性, 1-2細胞幅, 1-20細胞高で, 時に上下に連結する。

・サカキ(*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で, 小径の道管がほとんど単独で散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し, 壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性, 単列, 1-20細胞高。

・シャシャンボ(*Vaccinium bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属

散孔材で, 道管はほぼ単独で年輪界に一様に散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し, 内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性, 単列で8細胞高前後のもの5-7細胞幅, 30-60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

引用文献

- 林昭三 1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所 81-181。
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所 66-176。
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所 83-201。
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所 30-166。
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所 47-216。
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006「針葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998「広葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

(3) 平成19年度

① 試料

試料は, 花宴遺跡から出土した弥生時代後期後半～終末の建築部材4点(試料番号1-4)である。

② 分析方法

各遺物を観察し、破損部を利用して小片を採取する。剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982), Wheeler 他(1998), Richter 他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林(1991), 伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

③ 結果

建築部材は、針葉樹2種類(スギ・ヒノキ科)と広葉樹1種類(クリ)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。なお、樹種同定結果は遺物観察表に併記している。

- ・ スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・ ヒノキ科(*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

- ・ クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

引用文献

- 林昭三 1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所 47-216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006「針葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998「広葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第V章 総括

1. はじめに

花宴遺跡からは人の手が加わった弥生時代の自然流路6条が確認された。いずれの自然流路も横木と杭によって護岸工事され、IV区で確認したSR-6には堰が構築されていた。県内では初めての発見で、弥生時代の治水工事の様子を垣間みることのできる貴重な資料となっている。また、自然流路から出土した木製の威儀具は、全国的にも類例の少ないもので、当時の祭祀を考える上で極めて重要な遺物である。

これら自然流路とその出土遺物等から花宴遺跡を評価するに当たり、まず自然科学分析の結果を踏まえた上で、遺跡を特徴付けるとみられる事項について考察し、総括としたい。

2. 遺跡周辺の古環境と地形発達史

当遺跡の古環境を復元するに当たり、遺跡が香宗川の後背湿地に立地していることから、土壌分析が有効な手段と考え、専門家による現地調査を伴う花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析、および放射性炭素年代測定と出土木材の樹種の同定を実施した。その結果については第四章に記しているが、ここではその結果を踏まえた上で考古学的な視野を交えてまとめてみたい。

さて、この地に人が居着くようになったのは、確認された遺構から弥生時代前期中葉以降である。そして、その痕跡を弥生時代終末⁽¹⁾まで追うことができる。人が沖積平野に進出できた要因については、自然環境の変化が大きく影響していることが自然科学分析によって明らかになった。また、人の痕跡が途絶える古墳時代以降についても自然科学分析から示唆する結果が得られている。

まず、弥生時代以前の様子を自然科学分析結果からみとめることにする。下層確認は、II区とIV区で、地表下3.0～4.0mまで掘削して行った。その結果、堆積層から植物遺体や木材が採取でき、自然流路の基盤層の堆積年代と共に花粉分析や珪藻分析により当時の古環境を復元することができた。

5570±40 yrs BP (2σ: calBC4460～4350)に当たる縄文時代前期中頃には陸地に近い汽水域の安定した湿地であり、周辺の丘陵や山地には照葉樹林が広がっていたことが推定される。4740±40 yrs BP (2σ: calBC3630～3370)～2490±40 yrs BP (2σ: calBC750～410)に当たる縄文時代中期前半から弥生時代前期以前の頃は、浜堤後背の汽水域の沼沢地および池沼や湖沼の環境であったものとみられ、縄文時代前期中頃や後述する古墳時代以降よりも水位が相対的に高かったものと考えられている。また、周辺の丘陵や山地には針葉樹林の増加がみられるものの基本的には照葉樹林であったものと推定される。このような環境下では、平野部への人の進出は難しかったものと考えられる。2480±30 yrs BP (2σ: calBC770～410)～2440±30 yrs BP (2σ: calBC750～410)に当たる縄文時代晩期から弥生時代前期頃には河川の流水の影響を受けた湿地や滞水域が拡がり、汽水域から淡水域へ変化し、水生～湿地生植物の生育領域の拡大が推測され、周辺の丘陵や山地には照葉樹林が継続的に分布するもののシイノキ属の増加が指摘され、人間活動の影響が示唆されている。周辺の山林において人間の活動が徐々にみられるようになってきた時期であろう。しかし、平野部への進出にはもう少し時間を要した。

2200±30 yrs BP (2σ: calBC380～180)～1873±36 yrs BP (2σ: calAD66～233)に当たる弥生時代前

3. 自然流路の出現と埋没

期から後期頃には、自然流路が形成される。自然流路については次節で詳述するが、出土遺物から前期中葉頃から後期後半ないし終末にかけて存続したものとみられる。多量の遺物の出土などから周辺には当該期の集落の存在が十分に推測される。その候補地としては北側にある北西から東に連なる丘陵上が想定され、実際、東の丘陵上にある徳王子大崎遺跡からは一連の発掘調査で弥生時代前期から後期の竪穴建物跡も検出されている。このことから弥生時代は比較的安定していた環境にあったことが推測されるものの、いずれの自然流路も粒形の比較的大きな砂礫で埋没しており、河川氾濫が頻繁にあったことも窺える。下層の自然流路の基盤層となる堆積層からは大型の抽水植物のガマ属・ヨシ属、小型のミズオアイ属、湿地生植物のイネ科・カヤツリグサ科がみられ、前述のとおり水生～湿地生植物の拡がりも想定され、湿潤な環境にあったものと考えられるが、自然流路が形成される弥生時代前期中葉頃になるとヨモギ属やネザサ節などの乾いた土地条件を好む種類が目立つと共にカタバミ属やメナモミ属などの人里植物の産出も目立ち、自然流路と自然堤防が形成されるような環境であったことが考えられ、相対的に乾燥した土壌環境が形成されていたものとみられる。周辺の丘陵や山地は基本的には以前と同じく照葉樹林が主体となるもの的人為的な影響が徐々にみられ、マツ属花粉の漸増傾向がみられ、二次林が形成されたことも示唆される。また、木製品に利用された樹種が花粉化石から減少する種類と対応するものが多いことも指摘される。

自然流路埋没後である古墳時代以降、具体的には堆積層から出土した遺物からすると古代後半以降は、湿地や湿性の土壌環境下にあったとみられ、土壌発達程度が低い、湿潤な地表面の環境が形成されたと想定され、耕作土などの土地利用が考えられている。発掘調査でも明確な遺構は確認されておらず、弥生時代とはやや様相を異にする。また、周辺の丘陵や山地は弥生時代とは大きく変化し、アカマツやクロマツの二次林が目立つ植生となり、部分的には裸地化したことが推測されている。

以上のように、遺構が形成される弥生時代に限り、古環境も人間の進出を可能にしているが、古墳時代以降、古代後半までの期間はこれといった人間活動の痕跡はみられない。中でも、SR-6の埋没後、換言すれば古墳時代に入ってから、人間の痕跡が忽然と消える。このことは県内一円にみられる現象であり、その要因は如何なるものであろうか。次節以降、この点も視野に入れ、考察したい。

3. 自然流路の出現と埋没

確認した6条の自然流路の推測される存続期間を図5-1、各自然流路の規模と検出標高の関係を図5-2に示した。なお、図5-1以外では、便宜的にSR-1・3～5を弥生時代中期、SR-2を前期、SR-6を後期と表記している。

まず、自然流路が形成される時期は、壺や甕に施されたヘラ描沈線から前期の中葉頃と考えられる。最初に形成されたのは出土遺物からSR-2とみられ、SR-4とSR-5もほぼ前後して形成され、その後SR-1が形成されたと考えられる。SR-2の埋没後にSR-3が形成されるが、出土遺物を見る限り存続期間は短く、中期中葉を中心に、中期後半には至らないとみられる。この時期までにSR-1～4はすべて埋没している。SR-1、SR-2、SR-4の間には、検出面に一定の比高差が見られる。このことは、緩斜面が漸次的に繋がっていたのではなく、その間に自然堤防が形成されていたものと考えられる。それ故に、SR-2が埋没し、SR-3が形成され機能している時期に検出面が低いSR-4が埋没することなく存続できたのではなかろうか。

SR-5はSR-3と検出面がほぼ同じ標高で、他の自然流路に比べ6倍以上の規模を誇り、存続期間

	弥生時代前期				弥生時代中期				弥生時代後期	
	中葉		後半		前半 II様式	中葉		後半		
	I様式 (中)		(新)			III様式 (古)	IV様式 (新)	IV様式 (古)	V様式	
	BC700	BC600	BC500	BC400	BC300	BC200	BC100	0	AD100	AD200
SR-1				BC380~203 BC380~184						
SR-2	BC785~417									
		BC754~414								
SR-3					BC380~182 BC374~180					
SR-4	BC780~480									
			BC600~400							
SR-5										
SR-6									AD66~233	

グラデーションは自然流路の相対的な存続時期を示し、年代は放射性炭素年代測定の暦年較正年代結果を記入

図5-1 自然流路の変遷

が最も長く、出土遺物からみる限りほぼ弥生時代を通じて機能している。また、規模を比較するとSR-5が本流で、それ以外は支流と表現することもできよう。ただし、SR-1~5はそれぞれ一定の間隔があり、相関関係は今回の調査だけでは判然としない。いずれにしても、SR-5が機能していた時期にはSR-1・2・4、SR-2埋没後はSR-1・3・4も機能していたとみられる。

次に、SR-6との関係について試みる。新旧関係はセクションなどによって明らかなようにSR-5の埋没後にSR-6が形成されている。一方、検出面は同じ第XI層上面である。注目されるのは出土遺物である。SR-5には前期新段階の遺物から中期の遺物を中心に後期後半から終末の4190や4204・4205のような搬入品がみられ、また、SR-6にも後期後半から終末の4310や4324、および4341~4350のような搬入品がみられる。SR-6の方がやや新相を示し、搬入品が多いという違いはみられるものの、大きな時期差は見出せないし、明確な型式差があるとも言い難い。換言すれば、SR-6は、SR-5の埋没後、ほぼ同時、場合によっては同じ洪水によって形成され、短期間の内に埋没したものと考えられる。すなわち、SR-5が埋没するほどの洪水が弥生時代後期後半から終末に発

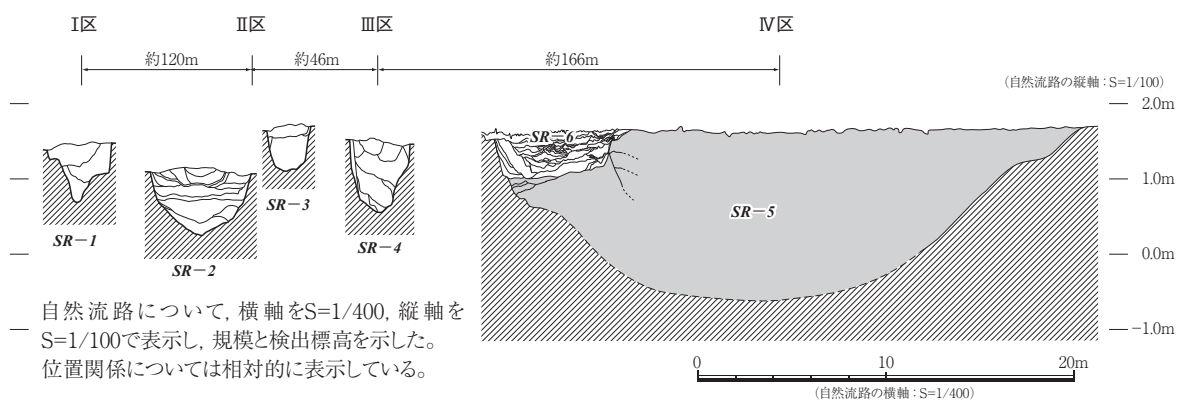


図5-2 自然流路の規模と検出標高

4. 堰の構築と廃絶

生し、SR-5の埋没によって、行く手を失った流れがSR-6を形成したものでなかろうか。SR-6には短期間にせよ、堰が構築され、治水がなされていたことは事実であり、集落の営みが続いていたことが分かる。しかし、それも長くは続かず、度重なる洪水⁽²⁾により埋没し、機能を失ったものとみられる。図3-6を見ると、堰状遺構付近を中心に、木製品や部材などの木材が散乱しており、多くは上流部にあったであろう集落から流出したのではなかろうか。

これ以降、周辺部では6世紀後半まで人の痕跡を確認することができない。

4. 堰の構築と廃絶

堰状遺構はSR-5が埋没した後、ほぼ同時に形成されたみられるSR-6で検出された。構築時期は、前述のとおり弥生時代後期後半から終末と考えられる。

堰は、SR-6が西南西(N-109°-W)に延びた後、屈曲して南(N-175°-W)に方向を変える変化点に丁度構築されていた。西側約2.00mは、埋没時の洪水の影響か、遺存していなかったが、復元全長は約9.20mで、3ブロックに分けて構築されたものとみられる。堰の構造は、松山市古照遺跡(松山市1974)と同じく縦・横・斜めに複雑に木材を組み合わせた合掌堰とみられ、当時の土木技術のレベル高さを窺わせる。一方、使用された木材は、廃材、杭、丸太であったが、廃材の使用が目立った。

また、堰の機能を考える上で、堰の上流部の左岸からSR-6に取り付く形で検出したSD-5が重要である。SD-5は比高差0.545m(傾斜角度約1°3′)で、概ね南(N-174°-W)に傾斜していることからSR-6から取水したものとみられ、水田に水を引くための溝であった可能性が高い。このことから考慮すると堰は農業用の灌漑施設であったものと考えることができよう。

存続期間は、前述のようにSR-5の埋没以後に構築されたこと、および出土遺物からすると決して長期に及ぶものとは言えず、むしろ短期間であったとみた方が良さそうである。砂礫層が累重するSR-6の堆積状況からすると何度かの洪水によって埋没し、機能しなくなったのは比較的早かつ

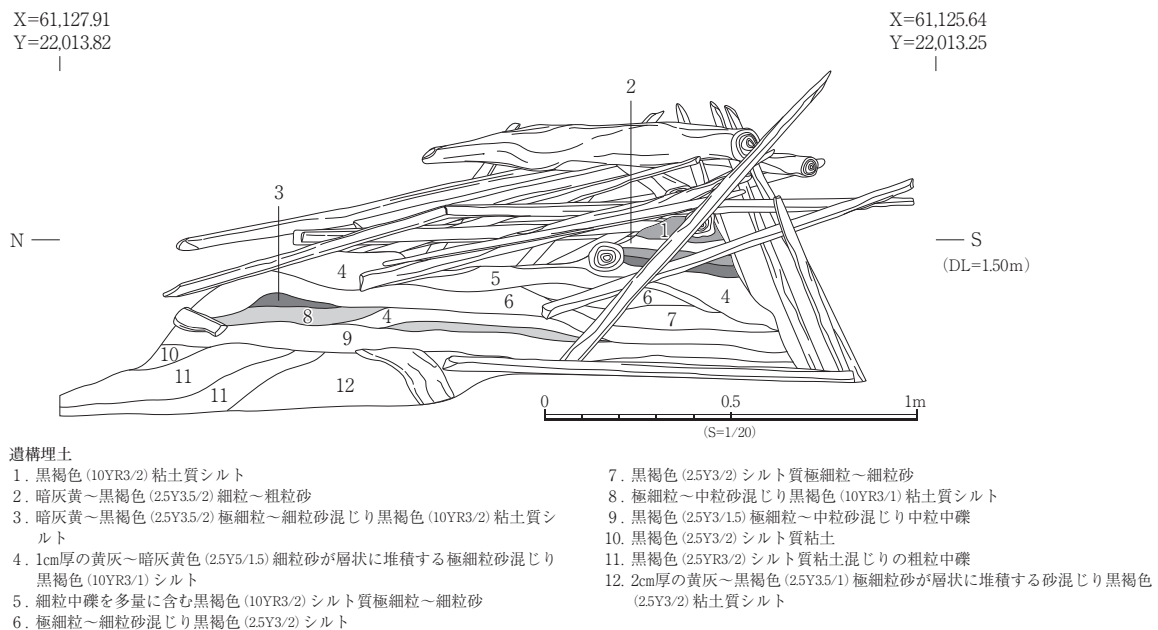


図5-3 堰状遺構断面図

たのではなかろうか。SR-5より後出であることには間違いなく、絶対年代では一定の時期差があるが、相対年代ではほぼ同じ弥生時代後期後半ないし終末と考えられる。つまり、SR-5の埋没とSR-6の出現と廃絶は弥生時代後期後半から終末の範疇で捉えられる。

5. その他の遺構

花宴遺跡は自然流路が中心の遺跡で、溝跡などもそれに付随したものと考えられる。そのような中で、ここでは、祭祀関連遺構として報告しているSR-6の右岸部で検出したSF-1～3についてみてみることにする。

県内では弥生時代中期末ないし後期初め頃から古墳時代後期にかけて、河川の近くで土器などを用いた祭祀が行われており、水辺の祭祀と捉えられている。これらの祭祀は大きく8類型に分類(廣田2009)でき、今回検出された3カ所の祭祀関連遺構は其中で最も初現的な形態である土器のみを用いた祭祀(I類)に分類される。この形態は最もシンプルなもので、古墳時代になっても続き、6世紀後半まで続く。この時期のものは、甕を主体とし、鉢も伴出することから煮炊きを行い、神へのお供えと直会(共飲共食儀礼)の痕跡とみられ、検出したいずれの遺構からも土器と共に炭化物、焼土、河原石がみられ、煤が付着する甕も出土している。範囲は明確ではないものの、円形状を呈しており、土器分布状況から判断して、その範囲はSF-1が8.84㎡、SF-2が13.55㎡、SF-3が11.04㎡と比較的狭い。

今回のように河原石を伴うことも多く、「自然石」に対し、特別な意味合いがあったものとみられる。すなわち、神の依代となり、「磐座」といった神が降臨してくる場所であったとも考えることができる。また、この時期具同中山遺跡群(高知県2001)では集石を伴う例もみられ、かつこの時期の遺跡から散見されることが多く、弥生時代後期後半から終末頃には河川祭祀が盛んに行われていたものと推察される。

実際、この時期は中山間(佐川町1995)にも集落の拡がりが見られ、人口の増加が予測され、それによって水田耕作がより盛んに行われるようになったものとみられる。収穫を左右する水への畏敬の念から、水に対し神(水霊)を意識し、水辺で祭祀が行われたものと推察される。それは、五穀豊穡を願った農耕祭祀と捉えることができるのではなかろうか。また、各遺跡で散見できるのは、この時期水害が頻繁に発生していたことに起因する可能性も考慮される。古墳時代前期の集落が極端に少ない理由の一つにこの自然災害を指摘できるのかもしれない。

6. 微隆起突帯の諸種と変遷

前期新段階からみられる南西四国特有の文様で、突帯、突帯文、貼付突帯文、粘土帯、刻目突帯、微隆起突帯などと呼称されているものである。1026や2079など突帯とは異質であり、わずかな起伏のものもみられることから単に突帯というよりも「微隆起突帯」と呼称した方が施文状態にあっているとみられることから「微隆起突帯」として記述した。この文様を施した土器がSR-2を中心に出土している。施文方法も種々あり、第三章で分類を行ったが、ここで改めてまとめてみる。

前述のとおり、器面の加工により作り出すタイプ(Aタイプ)と器面に粘土紐を貼付するタイプ(Bタイプ)がみられる。形式的にはAタイプが古相を示すとみられ、今回出土した中では、AタイプよりBタイプの割合が多くなっている。また、施文部位に違いがみられ、Aタイプは口頸部と胴部の

6. 微隆起突帯の諸種と変遷

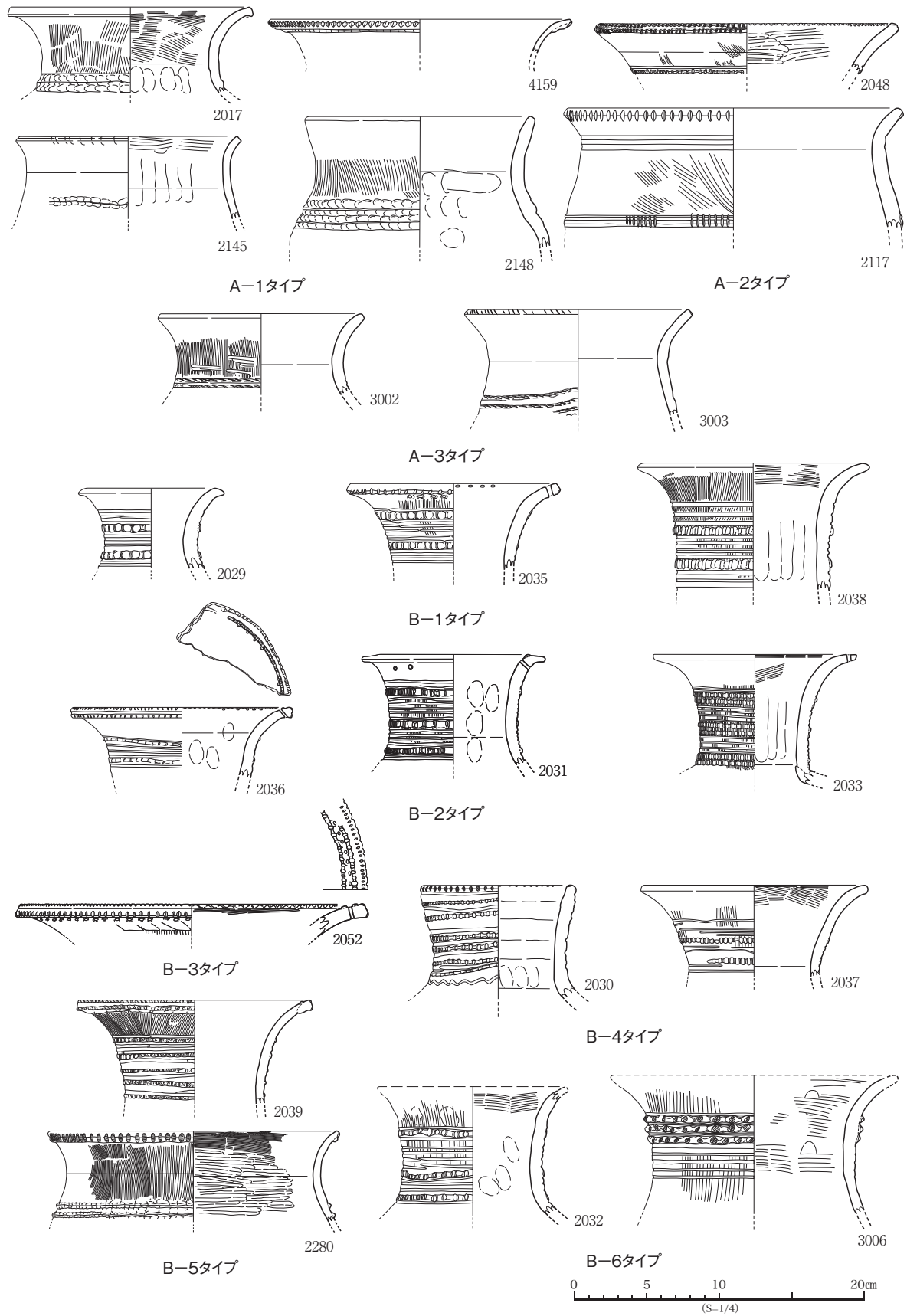


図5-4 微隆起突帯の諸種

境や肩部外面, および口縁部外面, Bタイプは頸部外面を中心に施文される。

A-1タイプは, 器面を指先(指の腹・指頭)で摘んで作り出したもので, 口頸部と胴部の境や肩部外面に2段施すもの(2017・2148など)が多く, 比較的幅広となる。また, 貼付口縁の外面に, 1段ないし2段作り出すもの(4159)がみられる。大きく開く貼付口縁の外面に指先で強くヨコナデすることにより1段ないし2段作り出すものがあり, その多くにクシ描直線文を突帯間に加える。

A-2タイプは, 上下をヘラ描沈線などで凹めることにより作り出すもの(2048・2117)で, その多くに刻目や刺突文を加える。

A-3タイプは, A-1タイプが指の腹で器面を摘むのに対し指先の爪でつまみ出したもの(3002・3003)で, 爪痕が沈線状に残る。文様は, 直線的ではなく, 右上がりとなっており, 土器を回しながら施文したものと考えられる。

Bタイプは, 粘土紐を貼付した一般に見られるもので, 指先(指の腹・指頭)で施文したもの(B-1・2タイプ), 工具を使用したもの(B-3~5タイプ), 指先と工具を併用したもの(B-6タイプ)に大きく分れる。

B-1タイプは粘土紐に指先(指の腹・指頭)で押圧を加えながらつまみ出したもの(2029・2035・2038など)で, つまみ出された部分が盛り上がり, 横断面が山形になる。また, 貼付する部位に予め沈線などで目印を入れているもの(2029など)もみられる。また, このタイプはヘラ描沈線とセットとなる文様帯である。

B-2タイプは, B-1タイプのように指先(指の腹・指頭)でつまみ出したものではなく, ヨコ方向ないし斜め方向に指先(指の腹・指頭)で押圧を加えることにより作り出したもので, 細かなもの(2031・2033など)や粗雑なもの(2036など)がある。

B-3タイプは, 他のタイプに比べ細い粘土紐を使用し, それにヘラ状工具で刻目ないし刺突文を加える際の押圧で貼付したもの(2036・2052)で, 口縁部内側などにみられる。

B-4タイプ(2030など)とB-5タイプ(2039)は, 施文具の違いのよって分けたもので, いずれも頸部外面に施されることが多い。貼付される粘土紐の幅は, B-3タイプのものより概して広く, B-6タイプのものより概して狭い。

B-6タイプはB-1とB-4・5タイプの複合タイプで, 粘土紐に指の腹で押圧を加えながらつまみ出し, さらにその頂部にヘラ状工具や棒状工具などで押圧を加えたものである。施文部位は頸部外面である。

これらは, 前期後半の新段階にみられるもので, A-1タイプは西南四国型といわれる土器に散見され, 口縁部外面に施されるものは後期初めまでみられる。

7. 木製威儀具について

今回, SR-5から非常に稀な木製品が出土した。当初は, 不明木製品として取り扱っていたが, 威儀具の可能性を指摘され⁽³⁾, 改めて類例を調査したところその蓋然性が高まったため, 本書では威儀具として報告している。

類例が儀杖形木製品(樋上 2006)の中にみられ, 図5-5に類例を掲載した。この中で, 守山市下長遺跡のもの(図5-5の1)に類似点がみられる。まず, 棒軸部の先端である頭部に円環状の飾りを作り出している点を挙げることができる。さらに, 二重円を彫刻している点も指摘できる。本例(4438)には

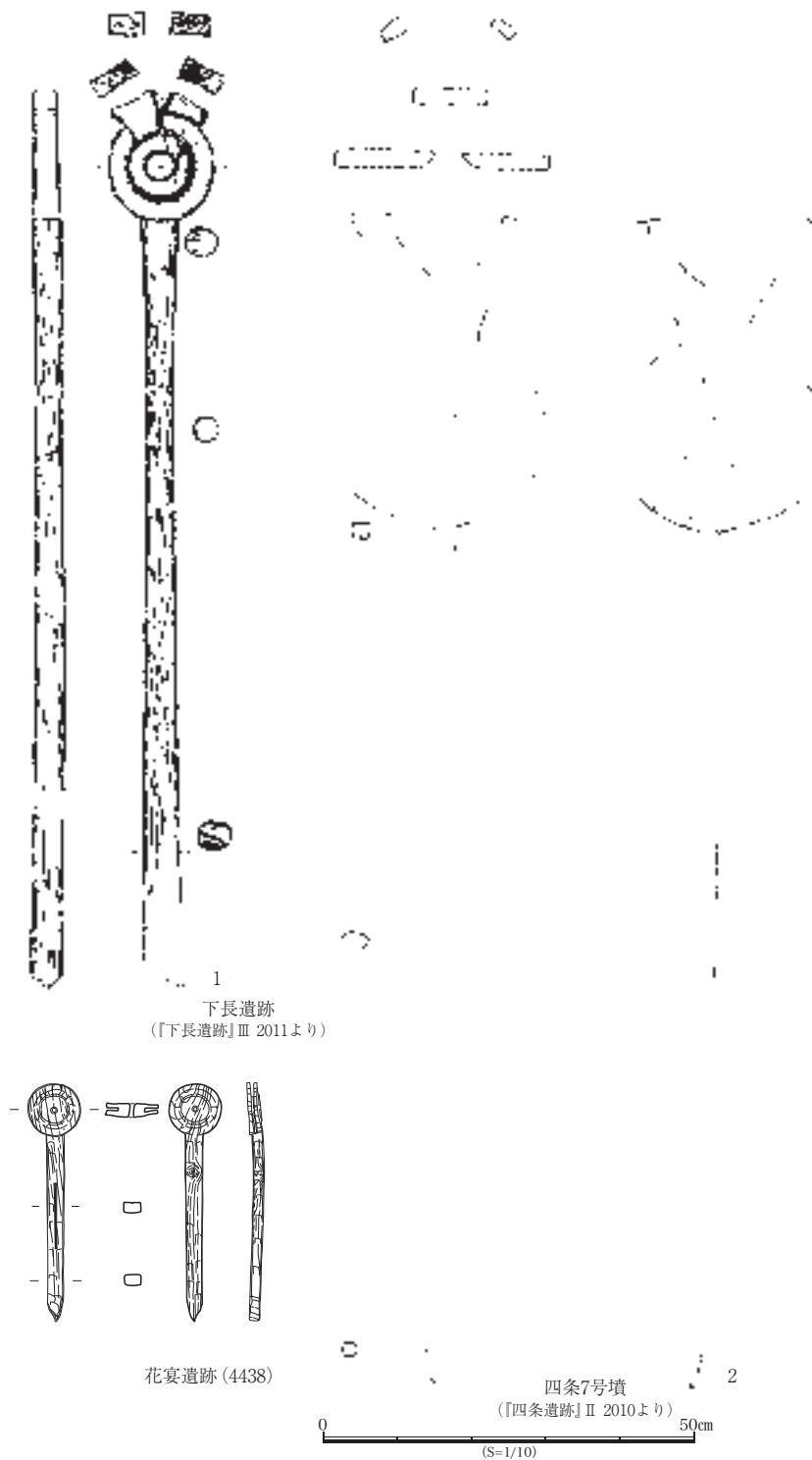


図5-5 儀杖形木製品と花宴遺跡出土威儀具

さらに頭部周縁に深さ2.1 cmの溝を彫込んでおり、先の例より精緻な細工をしているとも言える。しかし、図5-5の1・2には角状突起と言われる二股に分かれる飾りが頭部に作り出されているが、本例にはみられない。また、本例には軸部に当たる柄に長さ8.7 cm、幅1～3 mm、深さ2～2.5 mmの溝が彫込まれているが、先の2例にはみられない。そして、最も大きな相違点として指摘されるのが長さである。本例が全長31.8 cmであるのに対し、同図の1が116.5 cm、同図の2が157.2 cmで、杖と表現できるが、本例は杖とは言いがたい。ところが、先端部に類似性が認められる。すなわち、同図の2や儀杖形木製品の中には先端が尖ったものがみられる点である。それらは地面に突き刺していたものと考えられており、本例もそのように使用された可能性は否定できない。ただ、地面に突き刺すには短過ぎるように思われ、形式的に先端を尖らせ、

実際は手に持って使用したのではなかろうか。

これらのことから考えると今回報告した本例は儀杖形木製品に含めるかどうか検討の余地を残すものの威儀具と捉えて間違いなさそうである。

ここでは、儀杖形木製品と言われる中で、本例に類似する頭部が環状をなすものを抽出したが、時

期的には同図の2が古墳時代初頭、同図の3が古墳時代中期後半で、同形態のものが四条1号墳(奈良県 2010)からも出土している。頭部が環状をなすものは他にも何例かみられるものの(樋上 2006)管見によればいずれも古墳時代以降のものであり、弥生時代に遡るものはなく、威儀具の系譜を探る上で重要な資料となろう。

また、「威儀具は儀礼や祭祀の場で、首長が手にし、身に帯びることによって、首長の権威を参集者に知らしめるための道具立て」(樋上 2006)と言われる。そのようなものを持った人物が弥生時代後期後半から終末にかけてこの地に居たことになり、今後本遺跡に伴う集落のあり方を考えて行く上で欠くことのできない資料ともなろう。

8. まとめ

ここでは、遺跡の出現と廃絶について述べ、まとめとした。

遺跡の出現は、弥生時代前期中葉頃のSR-2の形成に始まる。水位が下降したことにより本流であったとみられる旧香宗川に新たな自然流路(蛇行流路)が形成し始めたものではなかろうか。ほぼ時を同じくしてSR-4とSR-5が形成される。SR-5は規模が大きく、弥生時代後期後半から終末にかけて存続する。

次に形成されたのはSR-1で、中期前半まで続き、中期中葉を待たず、埋没する。標高が高いため新たな流路は形成されない。一方、SR-2はSR-1より早く埋没するものの、上層に新たな流路、SR-3が出現する。このSR-2の上層に新たな自然流路が形成されたのは、周辺部より標高が低かったことに起因すると思われる。しかし、SR-3の存続期間は短く、中期中葉で、中期後半には至らない。

また、形成されていないSR-6とSR-5以外は、中期後半を待たずにすべて埋没する。SR-5は幅30m以上に及ぶことからSR-1~4が埋没した規模程度の洪水では埋没を免れたのであろう。

しかし、後期後半から終末頃に発生した洪水によってSR-5は完全に埋没し、ほぼ同時に新たな自然流路SR-6が形成されたとみられる。

SR-6には、灌漑用と考えられる堰を構築し、水田耕作を行うと共に川岸では祭祀行為を行い、五穀豊穡を願ったものと思われる。しかし、それも長くは続かず、度重なる洪水で埋没すると共に人の痕跡が消える。次に、人の痕跡が確認できるのは古墳時代後期を待たなくてはならない。この空白期間は、どのような暮らしが展開されていたのであろうか。集落の移動も視野に入れながら、続く古墳時代前期の様相を考えて行くことが、高知県の歴史解明の糸口になるように思われる。

いずれにしても、南四国はこれまでにない繁栄をみた弥生時代の終焉を迎え、格差社会ともいべき古墳時代⁽⁴⁾に突入し、長く停滞した社会が続く。

9. おわりに

本章では、自然科学分析の結果を踏まえた上で、遺跡を特徴付けるとみられる5事項について考察し、遺跡を評価した。自然科学分析にも力を注ぎ古環境を復元することにより遺跡の消長をより鮮明にすることができたものと思われる。遺構が自然流路とそれに伴う溝跡などの生産関連遺跡であり、集落形態については言及できなかったが、集落の様相について示唆する遺物が出土し、今後集落形態を考える上での資料となった。また、今回の調査では確認できなかったものの、自然科学分析によって近辺に水田が存在する蓋然性の高さが指摘され、かつ土器の内面に付着した「おこげ」の存在

9. おわりに

などから田村遺跡群(高知県 1986)で確認されて以来の水田跡の発見も今後期待される。

最後に、種々の理由により、発掘調査から6年が経過したが、本報告をまとめることができた。立场上、調査担当者に代わって記述することになったが、同じ状況下でまとめることになった報告書が他に2冊あり、合わせると掲載遺物点数は3,600点を超す。片手間で一人で整理するにはやや多い気はするが、いずれも本年度刊行する運びとなった。これで何とか調査担当者の代役の責を果たすことができたのではなかろうか。いずれにしても、本年度刊行できたのは、偏にフルDTPのための素材作りを平成16～18年度を中心に実施した38回に及ぶ研修で身に付けた整理作業員と技術補助員の方々のお陰である。記して感謝申し上げ、本書の結びとする。

註

- (1) SR-5とSR-6からはタタキ目のある土器に混じって庄内式土器とみられる搬入品が一定出土しており、古墳時代初めと表現される場合も考えられ、本地方では、弥生時代後期後半(場合によっては弥生時代終末)から古墳時代初めと言われることが多い。しかし、本地方で古墳が築造されるのは早くとも4世紀後半以降であり、畿内地方が古墳時代であったとしても、本地方、南四国は依然として弥生時代が続いているし、第V様式の特徴を持ち続ける。
- (2) 図3-41・63のSR-6のセクションを見る限り、堆積する砂礫の厚さが比較的薄く、累重していることから、度重なる洪水で埋没したものと考えられる。
- (3) 木製品についてご指導頂いた首都大学東京の山田教授に滋賀県下長遺跡から似ているものが出土しているとのことご教示を頂いた。
- (4) 土佐では、古墳数が四国の他の3県に比べて少なく、香川県の1/10にも満たず、かつ前方後円墳が県内最大の平野部である高知平野からは確認されていない。

引用・参考文献

- 伊藤雅文 2005「畝田遺跡出土玉杖形木製品にかんする新知見と研究メモ」『石川県埋蔵文化財情報』第13号財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 高知県教育委員会 1986『田村遺跡群』第3分冊
- 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001『具同中山遺跡群Ⅳ』
- 高知県佐川町教育委員会 1995『岩井口遺跡, 二ノ部遺跡・城跡』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2010『四条遺跡Ⅱ』
- 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録-近畿原始編-』
- 樋上昇 2006「儀杖の系譜」『考古学研究』第52巻第4号(通巻208号)考古学研究会
- 廣田佳久 2009「古墳時代の祭祀-南四国を中心に-」『一山典還暦記念論文集-考古学と地域文化-』一山典還暦記念論文集発行会
- 松山市文化財協会 1974『古照遺跡』
- 守山市教育委員会 2001『下長遺跡』Ⅷ

遺物觀察表

凡例

1. 図版番号は, I 区が1001~1068, II 区が2001~2294, III 区が3001~3062, IV 区が4001~4492である。
2. 法量は土器を基準にcmで示しているが, 土製品, 石製品, 木製品は口径が全長(cm), 器高が全幅(cm), 胴径が全厚(cm), 底径が重量(g), 古銭は銭径(cm), 内径(cm), 銭厚(cm), 量目(g)と読み替えている。それ以外の値については, 特徴または本文中に記している。なお, カッコ付きの数値は残存値を表している。
3. 遺存状態については, 遺存部が1/6に満たないものは「破片」, 1/10に満たないものは「細片」と表記している。

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1001	第I層	古銭 寛永通宝	2.5	2.0	0.1	2.4	-	-	完存, 銅一文銭で古寛永とみられる。
1002	SR-1	弥生土器 壺	16.4	(6.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口頸部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内外面にハケ調整の後に, 外面に施文
1003	〃	〃 〃	18.4	(7.5)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内外面にハケ調整の後に, 外面に施文, 口縁部内面に煤が付着
1004	〃	〃 〃	10.4	(5.8)	-	-	黒褐色 褐色	やや不良	口頸部の約1/2が残存, 口縁部にヨコナデ調整, 内面にナデ調整, 口縁部内面と頸部外面に施文
1005	〃	〃 〃	13.6	(5.2)	-	-	灰黄褐色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部にヨコナデ調整, 頸部内外面にハケ調整の後に, 口縁部内面と頸部外面に施文
1006	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	不良	口縁部の破片, 口縁部にヨコナデ調整を施し, 端部は凹面をなす。口縁端部両端に刻目
1007	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	-	暗灰黄色 灰黄褐色	良	頸部の破片, 内外面にナデ調整, 外面に竹管文
1008	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	4.9	褐色 灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 器面は全般的に摩耗するも内面に指頭圧痕が残存
1009	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	6.2	褐色 灰黄褐色	〃	底部約1/3が残存, 器面は内面を中心に剝離し, 摩耗する。
1010	〃	〃 〃	-	(5.0)	(16.0)	6.4	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/4が残存, 内面に指ナデ調整, 外面はナデ調整で, 下端に指頭圧痕が残存
1011	〃	〃 〃	-	(4.0)	(12.6)	7.7	灰色 にぶい褐色	〃	底部約1/3が残存, 器面は外面を中心に摩耗するも, 内面にナデ調整と指頭圧痕が残存
1012	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	8.0	灰黄褐色 暗灰黄色	〃	底部約1/2強が残存, 器面は外面を中心に摩耗するも, 内面にナデ調整と指頭圧痕が残存
1013	〃	〃 〃	-	(5.7)	(15.4)	9.4	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面は外面を中心に摩耗するも, 内面に指ナデとナデ調整, 外面にハケ目が一部に残存
1014	〃	〃 〃	-	(6.3)	(16.4)	9.5	黄灰色 灰黄褐色	〃	底部約1/4が残存, 器面は外面を中心に摩耗するも, 内面に指ナデとナデ調整, 外面にハケ目が一部に残存
1015	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	10.0	黄灰色 にぶい褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面は全般に摩耗するも, 指頭圧痕が残存
1016	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	10.8	黄灰色 灰黄色	やや不良	底部約1/4が残存, 器面は全般に摩耗し調整は不明瞭
1017	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	12.0	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	底部約1/4が残存, 器面は外面を中心に摩耗するも, 外面下端に指頭圧痕が明瞭に残存
1018	〃	〃 甕	-	(4.2)	-	-	灰黄褐色 暗灰黄色	〃	口頸部の破片, 口縁部から外面にハケ調整を施した後に, 口縁部にヨコナデ調整を加え, 口唇部と外面に施文
1019	〃	〃 〃	17.8	(4.4)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部にヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 外面に煤が付着
1020	〃	〃 〃	18.6	(5.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片, ハケ調整の後に口縁部にヨコナデ調整を加える。器面は全般に摩耗
1021	〃	〃 〃	20.0	(5.6)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口頸部の破片, ハケ調整の後に口縁部にヨコナデ調整を加える。外面に煤がタール状となり付着
1022	〃	〃 〃	23.6	(6.5)	-	-	黄灰色 〃	〃	口頸部の破片, ハケ調整の後に口縁部にヨコナデ調整を加える。外面には煤が付着
1023	〃	〃 〃	24.3	(6.6)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, ハケ調整の後に口縁部にヨコナデ調整を加える。
1024	〃	〃 〃	28.6	(7.9)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, ハケ調整の後に口縁部にヨコナデ調整を加える。外面には煤が付着
1025	〃	〃 〃	23.4	(7.0)	-	-	暗灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 頸部にヘラ磨き, 口縁部にヨコナデ調整を施し, 口唇部と外面にヘラ状工具による施文

I 区 遺物観察表2 (1026~1050)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1026	SR-1	弥生土器 甕	35.8	(8.5)	-	-	灰黄褐色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部にヨコナデ調整, 内面にナデ調整, 外面に指ナデとナデ調整及びヨコナデ調整
1027	〃	〃 〃	13.0	(4.7)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 外面にハケ調整, 口縁部にヨコナデ調整, 内面にナデ調整を施し, 外面に煤が付着
1028	〃	〃 〃	14.0	(7.8)	13.8	-	〃 〃	〃	口縁部から肩部の約1/5が残存, 外面にはハケ調整の後にヘラ磨き, 一面に煤が付着
1029	〃	〃 〃	15.0	(7.9)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 内面はヨコ方向, 外面はタテ方向のハケ調整, 口縁部はヨコナデ調整
1030	〃	〃 〃	-	(6.6)	-	-	にぶい褐色 〃	やや不良	口縁部の破片, 器面は摩耗
1031	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい褐色	良	口縁部の破片, 内面にハケ調整, 外面にハケ調整の後にナデ調整, 口縁部にはヨコナデ調整
1032	〃	〃 〃	-	(11.2)	-	-	にぶい褐色 〃	やや不良	口縁部から上胴部の破片, 内面にナデ調整, 外面にハケ調整, 口縁部にヨコナデ調整
1033	〃	〃 〃	-	(7.3)	-	-	灰黄褐色 灰黄色	〃	頸部から肩部の破片, 頸部内外面にハケ調整, 外面には多条のヘラ描き沈線を加える。
1034	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	4.2	黄灰色 灰黄褐色	良	底部が残存, 内面にナデ調整, 外面にハケ調整, 外底面にナデ調整, 内面には焦げ目が付着
1035	〃	〃 〃	-	(5.8)	(9.4)	4.6	にぶい褐色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整で指頭圧痕が残り, 外面下端にも指頭圧痕が残存
1036	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	5.4	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面に指ナデと指頭圧痕, 外面にハケ調整, 外底面にナデ調整
1037	〃	〃 〃	-	(6.8)	(9.4)	5.4	灰黄色 浅黄色	〃	底部が残存, 内面にハケ目と指頭圧痕, 外面にタテ方向のヘラ磨き, 外底面にナデ調整
1038	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	5.5	灰黄褐色 にぶい赤褐色	〃	底部が残存, 内外面ナデ調整で, 内底面と外面下端に指頭圧痕が残存
1039	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	5.7	黄灰色 〃	〃	底部が残存, 内外面とも指ナデ調整, 外底面はナデ調整
1040	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	5.8	黄灰色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 内面にナデ調整, 外面にハケ調整の後にヘラ磨き, 内面に焦げ目が付着
1041	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	5.8	灰褐色 黄灰色	〃	底部約1/4が残存, 内面にナデ調整, 外面にハケ調整, 内面には煤が僅かに付着
1042	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	6.1	灰黄褐色 灰褐色	〃	底部が残存, 内面にナデ調整, 外面に指ナデを施し, 外面下端に指頭圧痕が残存
1043	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	6.1	褐灰色 暗灰黄色	〃	底部が残存, 内面にヘラナデ調整とナデ調整, 外面はナデ調整で指頭圧痕が残存
1044	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	6.1	黄灰色 灰黄褐色	〃	底部約2/3が残存, 内面にナデ調整, 外面にはハケ目が僅かに残存
1045	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	6.2	灰黄色 灰黄褐色	〃	底部約1/4が残存, 内外面ともナデ調整で, 部分的に指頭圧痕が残存
1046	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	6.3	黒褐色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面にナデ調整, 外面にハケ調整
1047	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	6.7	灰黄褐色 褐灰色	〃	底部約2/3が残存, 内面に指ナデ調整, 外面にナデ調整
1048	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	6.9	灰黄褐色 〃	〃	底部が残存, 内面にナデ調整, 外面に指ナデ調整を施す。外面は被熱で黒く変色
1049	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	7.2	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は指ナデとナデ調整, 外底面はナデ調整, 被熱痕
1050	〃	〃 〃	-	(5.7)	(13.8)	7.4	明赤褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指ナデ調整とナデ調整, 外面は被熱し, 剝離と摩耗する。

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1051	SR-1	弥生土器 甕	-	(7.4)	(14.7)	7.4	黒褐色 にぶい褐色	良	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面にはハケ調整の痕跡が僅かに残る。また, 内面には焦げ目が付着
1052	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	6.5	褐灰色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指押えとハケ調整, 外面はナデ調整
1053	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	7.6	暗灰色 褐灰色	〃	底部約1/2が残存, 器面は被熱で変色し, 剝離と摩耗がみられ, 内面には焦げ目が残存
1054	〃	〃 〃	-	(5.4)	(13.4)	7.6	黄灰色 黒褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨きとナデ調整, また, 外面には煤が付着
1055	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	7.8	灰黄褐色 黄灰色	〃	底部約1/3が残存, 内外面ともナデ調整で, 内面には焦げ目が付着, 接合痕が器壁に残存
1056	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	8.1	褐灰色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 内面には焦げ目が付着
1057	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	8.2	灰黄褐色 灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 内外面ともナデ調整で, 内底面と外面下端に指頭圧痕が残存
1058	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	8.4	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内外面ともナデ調整で, 内底面と外面下端に指頭圧痕が残存
1059	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	8.5	褐灰色 灰黄褐色	やや 不良	底部約1/3が残存, 内面と外底面はナデ調整で, 外面にはハケ目が僅かに残存
1060	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	8.7	黒褐色 灰黄褐色	良	底部約1/3が残存, 内外面ともナデ調整で, 内面には指頭圧痕が残存
1061	〃	〃 〃	-	(6.5)	(15.2)	9.6	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整で, 外面には部分的にハケ目が残り, 内面には焦げ目が付着
1062	〃	〃 蓋	-	(2.8)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	径7.0cmのつまみが残存, 内外面ともナデ調整で, つまみ基部に指頭圧痕が残存
1063	〃	〃 〃	15.2	10.5	-	-	暗灰黄色 〃	〃	約2/3が残存, 天井部にはナデ調整, 外面にはハケ調整, 内面にはヘラ磨きを施す。
1064	〃	〃 ミニチュア土器	-	(7.3)	(10.7)	4.8	黒褐色 暗灰色	〃	底部から下胴部の約1/3が残存, 底部は上げ底で, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き, 外面はナデ調整
1065	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	4.6	灰黄褐色 〃	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面にはタテ方向のハケ調整
1066	〃	〃 〃	4.6	(3.7)	-	(2.3)	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	約2/3が残存, 内外面とも指ナデとナデ調整で, 部分的に指頭圧痕が残存
1067	〃	〃 〃	-	5.5	-	6.7	にぶい橙色 灰黄色	〃	約2/3が残存, 天井部には径4.0cmの小さなつまみが付く。外面はハケ調整, 他はナデ調整
1068	〃	土製品 紡錘車	2.6	2.6	0.6	4.3	- 灰黄色	〃	完存, 土器を転用したもので, 中央部に径2mmの円孔を上下から穿つ。表面はナデ調整

II区 遺物観察表1 (2001~2025)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2001	SR-2	弥生土器 壺	13.0	(4.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整で, 外面に4条のヘラ描沈線
2002	〃	〃 〃	14.3	(4.9)	-	-	褐灰色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 外面に4条のヘラ描沈線
2003	〃	〃 〃	14.4	(4.8)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 外面に2条のヘラ描沈線
2004	〃	〃 〃	14.8	(4.7)	-	-	灰オリーブ色 灰白色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 外面にタテ方向のハケ調整, 他はナデ調整
2005	〃	〃 〃	15.2	(6.4)	-	-	灰色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 外面にはハケ調整, 頸部外面に施文
2006	〃	〃 〃	15.6	(11.5)	(19.5)	-	暗灰黄色 灰黄褐色	良	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面と外面はハケ調整とヘラ磨き
2007	〃	〃 〃	15.6	(5.6)	-	-	黄灰色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 頸部外面に施文
2008	〃	〃 〃	15.7	(4.9)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 口縁下にヘラナデで突帯を明瞭にする。
2009	〃	〃 〃	16.0	(6.5)	-	-	灰オリーブ色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2010	〃	〃 〃	16.2	(8.7)	(22.6)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 口頸部内面と胴部外面にヘラ磨き
2011	〃	〃 〃	16.4	(5.4)	-	-	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2012	〃	〃 〃	18.6	(4.5)	-	-	黄灰色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2013	〃	〃 〃	16.6	(5.7)	-	-	灰黄色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は摩耗するが, 4条のヘラ描沈線が残る。
2014	〃	〃 〃	15.4	(8.8)	(19.9)	-	浅黄橙色 〃	良	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整で, 外面に施文
2015	〃	〃 〃	15.4	(7.0)	-	-	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片, 口唇部は指押え, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2016	〃	〃 〃	15.6	(9.4)	(19.0)	-	灰褐色 橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部は口唇部に指押えの後にヨコナデ調整, 内外面にハケ調整
2017	〃	〃 〃	16.6	(5.9)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部は口唇部をつまみ出した後にヨコナデ調整, 内外面にハケ調整, 頸部下端に施文
2018	〃	〃 〃	17.2	(7.6)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整で, 口唇部下端をつまみ出す。内面はハケ調整の後にナデ調整
2019	〃	〃 〃	19.4	(10.0)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 外面はハケ調整の後に8条のヘラ描沈線, 内面は摩耗
2020	〃	〃 〃	14.2	(6.5)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はハケ調整で, 口唇部両端に刻目, 外面は被熱で変色
2021	〃	〃 〃	16.0	(3.7)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部と頸部にハケ調整を施した後に, 口縁部にはヨコナデ調整を加える。
2022	〃	〃 〃	16.2	(7.0)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整
2023	〃	〃 〃	16.2	(5.6)	-	-	にぶい赤褐色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, 内面はナデ調整でハケ目が僅かに残り, 外面に3本単位のクシ状工具によるとみられるハケ目
2024	〃	〃 〃	17.6	(8.3)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	やや不良	口頸部約1/4が残存, 器面は剝離し, 外面には煤がタール状に付着する部分が残る。
2025	〃	〃 〃	18.4	(5.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はタテ方向のハケ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2026	SR-2	弥生土器壺	20.3	(3.0)	-	-	褐灰色 灰黄褐色	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 内面はヘラ磨きの可能性あり。
2027	〃	〃	9.0	(4.7)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	口頸部約 1/4 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整の後に施文
2028	〃	〃	10.4	(4.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部約 1/2 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整の後に施文
2029	〃	〃	10.0	(5.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部約 1/2 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 頸部外面に施文
2030	〃	〃	10.2	(7.8)	-	-	灰白色 にぶい黄橙色	やや不良	口頸部が残存, 内面はヨコ方向の指ナデ, 外面はナデ調整の後でヘラとクシによる施文
2031	〃	〃	10.3	(7.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部約 1/3 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2032	〃	〃	(12.9)	(8.8)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部約 1/2 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2033	〃	〃	13.8	(8.9)	-	-	灰褐色 にぶい褐色	〃	口頸部がほぼ完存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2034	〃	〃	13.9	(2.9)	-	-	灰黄褐色 灰黄色	やや不良	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はタテ方向のハケ調整
2035	〃	〃	14.1	(6.0)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部約 1/3 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2036	〃	〃	14.9	(4.8)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 口唇部と外面にヘラにより施文
2037	〃	〃	15.8	(6.2)	-	-	にぶい橙色 灰黄色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2038	〃	〃	15.4	(8.7)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部約 1/4 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整と指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2039	〃	〃	16.0	(7.1)	-	-	黒褐色 〃	〃	口頸部約 1/4 が残存, 内面はヨコナデ調整とナデ調整, 外面はハケ調整とナデ調整の後に施文
2040	〃	〃	16.1	(5.3)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄色	〃	口頸部約 1/4 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外面はハケ調整の後に施文
2041	〃	〃	16.5	(8.8)	-	-	灰白色 にぶい黄橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2042	〃	〃	16.7	(4.0)	-	-	灰黄色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はハケ調整で外面に施文
2043	〃	〃	17.0	(2.1)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 3ヶ所に円孔, 1条のヘラ描沈線が残存
2044	〃	〃	17.0	(4.3)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整とみられ, 外面に施文
2045	〃	〃	17.7	(5.5)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で外面に施文
2046	〃	〃	17.8	(3.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整で内外面に施文
2047	〃	〃	18.0	(5.7)	-	-	〃 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はハケ調整で外面にヘラによる施文
2048	〃	〃	19.8	(3.5)	-	-	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にナデ調整を加えた上で施文
2049	〃	〃	20.0	(2.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	やや不良	口縁部の破片, 器面は摩耗し, 調整は不明, 口唇部と外面に施文
2050	〃	〃	20.4	(5.1)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文

II 区 遺物観察表3 (2051～2075)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2051	SR-2	弥生土器 壺	21.6	(5.0)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 外面に施文
2052	〃	〃 〃	23.6	(2.2)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 内面はハケ調整の後にヨコナデ調整, 外 面はハケ調整の後にヘラナデを加える。
2053	〃	〃 〃	30.2	(13.1)	-	-	灰黄色 橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部から内面にかけてナデ調整, 外面 はハケ調整の後にナデ調整を加えた上で施文
2054	〃	〃 〃	15.5	(7.3)	-	-	灰黄褐色 黄灰色	〃	口頸部約 1/5 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナ デ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2055	〃	〃 〃	19.5	(4.0)	-	-	浅黄褐色 橙色	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗し, 口縁部内面と頸部に施文
2056	〃	〃 〃	21.2	(8.6)	-	-	灰黄褐色 にぶい褐色	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整 の後にナデ調整, 外面は摩耗し, クシ描直線文が残存
2057	〃	〃 〃	-	(7.9)	-	-	灰白色 〃	良	頸部約 1/2 が残存, 内面はナデ調整, 外面は微隆起突帯 と3本単位のクシ描直線文が5段残存
2058	〃	〃 〃	-	(11.2)	(21.0)	-	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	頸部の大半と上胴部約 1/5 が残存, 内面は指ナデとナデ 調整, 頸部外面はハケ調整の後に施文
2059	〃	〃 〃	10.4	(3.6)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, ヨコナデ調整の痕が 一部に残る。
2060	〃	〃 〃	14.0	(5.5)	-	-	灰黄色 灰褐色	良	口頸部の破片, 口縁部から内面は摩耗し, 外面はハケ調 整の後に施文
2061	〃	〃 〃	14.4	(2.7)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整
2062	〃	〃 〃	15.2	(5.3)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	やや不良	口頸部がほぼ完存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ 調整, 外面はハケ調整の後にヘラナデ
2063	〃	〃 〃	17.0	(4.3)	-	-	暗灰黄色 灰黄色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整 の後にナデ調整, 外面はナデ調整
2064	〃	〃 〃	18.8	(3.8)	-	-	灰色 にぶい黄褐色	やや不良	口頸部の破片, 口縁部には指押えの痕が明瞭に残存, 内 面は不明瞭, 外面はハケ調整
2065	〃	〃 〃	23.0	(9.2)	-	-	灰黄褐色 暗灰黄色	良	口頸部約 1/3 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハ ケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整
2066	〃	〃 〃	-	(3.9)	(20.0)	-	灰黄色 〃	〃	頸部と上胴部の破片, 頸部内面はハケ調整, 胴部はナデ 調整, 頸部と胴部の境に施文
2067	〃	〃 〃	-	(7.1)	(20.0)	-	灰色 〃	やや不良	頸部と上胴部の破片, 内面はナデ調整で指頭圧痕が残 り, 外面はハケ調整で, 頸部に施文
2068	〃	〃 〃	-	(5.1)	(25.5)	-	黒色 橙色	〃	頸部から上胴部の破片, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整 で頸部にクシ描直線文と微隆起突帯を貼付
2069	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	-	にぶい黄褐色 浅黄褐色	良	頸部の破片, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハ ケ調整の後に施文
2070	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	-	にぶい褐色 橙色	〃	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に円 形浮文と4本単位のヘラ描沈線を施文
2071	〃	〃 〃	-	(5.9)	-	-	にぶい黄褐色 浅黄色	〃	頸部の破片, 内外面ともハケ調整で, 外面にクシ描直線 文と重弧文を施文
2072	〃	〃 〃	-	(5.9)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はナデ調整の後にヘ ラ描きによる沈線と鋸歯文を施文
2073	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	にぶい褐色 明赤褐色	〃	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にク シ描直線文と鋸歯文を施文
2074	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はナデ調整の後にク シ描直線文と斜格子文及びヘラ描沈線を施文
2075	〃	〃 〃	-	(8.1)	-	-	オリーブ黒色 黒色	〃	胴部の破片, 内面はヘラナデ, 外面はハケ調整の後にク シ描きによる沈線と鋸歯文を施文

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2076	SR-2	弥生土器 壺	-	(4.9)	-	-	暗灰黄色 黒褐色	良	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にクシ描きによる鋸歯文, 直線文, 重弧文を施文
2077	〃	〃	-	(4.9)	-	-	灰黄色 暗灰黄色	〃	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にクシ描きによる直線文と円弧文を施文
2078	〃	〃	-	(4.2)	-	-	灰白色 〃	良好	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にクシ描きによる直線文, 区画文及び楕円形浮文を施文
2079	〃	〃	-	(5.5)	-	-	黒色 浅黄橙色	良	上胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はナデ調整の後にヘラ描沈線と微隆起突帯を施文
2080	〃	〃	-	(4.4)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	上胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はヘラ描沈線, 棒状浮文, 竹管文を施文
2081	〃	〃	-	(5.8)	-	-	淡橙色 淡黄色	〃	胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面は4本単位のクシ描直線文, 微隆起突帯, 棒状浮文を施文
2082	〃	〃	-	(7.0)	10.5	3.7	黄灰色 灰黄褐色	〃	胴部以下約2/3が残存, 内面はハケ調整の後に指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後に中胴部に施文
2083	〃	〃	-	(8.7)	13.2	5.2	浅黄橙色 にぶい黄橙色	〃	胴部以下の大半が残存, 内底面に指頭圧痕が残る以外器面は摩耗と剥離がみられる。
2084	〃	〃	-	(7.1)	(11.0)	7.3	黄灰色 灰白色	〃	底部と脚部が約1/2が残存, 内面には指ナデ, 器面は外面を中心に摩耗
2085	〃	〃	-	(3.0)	-	4.5	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 器面は摩耗し, 調整は不明瞭
2086	〃	〃	-	(6.6)	(17.1)	6.8	灰色 灰白色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は摩耗
2087	〃	〃	-	(4.8)	-	8.8	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 内外面はナデ調整で, 外面下端にヘラナデが一部に残存
2088	〃	〃	-	(9.2)	(17.8)	7.5	灰黄褐色 黄灰色	〃	底部が残存, 内面は指ナデの後にヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にヘラ磨きとナデ調整, 外底面はナデ調整
2089	〃	〃	-	(5.5)	(12.4)	5.5	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で底面に指頭圧痕が残る。外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
2090	〃	〃	-	(4.7)	-	7.0	褐灰色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指頭圧痕とナデ調整, 外面はナデ調整
2091	〃	〃	-	(5.8)	(14.6)	8.0	黄灰色 にぶい褐色	良好	底部約2/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整, 被熱で変色
2092	〃	〃	-	(3.2)	-	8.7	灰黄色 〃	良	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はナデ調整で, 下端に指頭圧痕が残存
2093	〃	〃	-	(4.8)	-	8.7	灰オリーブ色 灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 内外面ともナデ調整で, 外面には指頭圧痕が残る。また, 外面に煤が僅かに付着
2094	〃	〃	-	(4.0)	-	9.0	灰黄褐色 灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラナデとナデ調整, 外面は被熱で変色
2095	〃	〃	-	(4.8)	-	9.2	灰白色 浅黄橙色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で, 焦げ目が残存, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
2096	〃	〃	-	(6.0)	-	9.2	灰色 にぶい橙色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指頭圧痕と指ナデ, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
2097	〃	〃	-	(4.8)	-	9.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で焦げ目が残存, 外面は指ナデ, 外底面はナデ調整
2098	〃	〃	-	(3.9)	-	7.6	暗灰色 浅黄色	やや不良	底部約1/2が残存, 器面は内外面ともナデ調整
2099	〃	〃	-	(7.6)	(18.4)	7.8	灰白色 灰黄色	良	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
2100	〃	〃	-	(4.7)	-	9.2	にぶい黄橙色 浅黄色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整とナデ調整, 外底面はヘラ削りとナデ調整

II区 遺物観察表5 (2101～2125)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2101	SR-2	弥生土器 壺	-	(5.9)	(16.0)	8.6	灰白色 〃	良	底部が残存, 内面はナデ調整で底面に指頭圧痕が残り, 外面は摩耗
2102	〃	〃 〃	-	(7.1)	(17.3)	8.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で指頭圧痕が残り, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
2103	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	9.1	橙色 灰黄褐色	〃	底部が残存, 器面は内外面ともナデ調整で, 外面は一部にヘラナデの可能性あり。
2104	〃	〃 〃	-	(5.7)	(16.2)	9.2	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面は斜めのヘラ磨き, 下端から外底面はナデ調整
2105	〃	〃 〃	-	(7.1)	(15.2)	9.5	〃 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ削り, 外底面もヘラ削り
2106	〃	〃 〃	-	(6.0)	(15.0)	10.0	灰黄色 にぶい橙色	〃	底部約3/4が残存, 内面はナデ調整で底面に指頭圧痕が残り, 外面は指ナデ, 外底面はナデ調整
2107	〃	〃 〃	-	(5.5)	(16.8)	10.2	暗灰黄色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は内外面ともナデ調整で, 内底面に指頭圧痕が残存
2108	〃	〃 甕	15.6	(4.8)	(15.1)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部は内外面ともナデ調整で, 外面上端にクシ描直線文
2109	〃	〃 〃	18.2	(5.0)	(18.2)	-	にぶい橙色 灰白色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ目が一部残存
2110	〃	〃 〃	17.4	(2.4)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 端部にヘラ状工具により刻目
2111	〃	〃 〃	21.0	(5.5)	(20.0)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部は内外面ともナデ調整, 口縁部下端に刻目
2112	〃	〃 〃	21.0	(5.6)	(18.4)	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内外面にハケ調整, 外面に6条のヘラ描直線
2113	〃	〃 〃	21.6	(7.4)	(20.8)	-	灰黄色 暗灰黄色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整で, 外面に8本単位のクシ描直線文
2114	〃	〃 〃	22.0	(7.6)	20.4	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	口縁部から胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ描沈線
2115	〃	〃 〃	23.5	(7.8)	(18.4)	-	灰黄色 黒褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にクシ描直線文
2116	〃	〃 〃	17.2	(5.5)	(18.0)	-	灰白色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整
2117	〃	〃 〃	22.8	(8.4)	(23.2)	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
2118	〃	〃 〃	24.1	(6.1)	(23.6)	-	灰黄色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整で煤が付着
2119	〃	〃 〃	25.8	(4.0)	-	-	にぶい黄色 褐灰色	良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 口縁端部に刻目
2120	〃	〃 〃	13.2	(8.6)	(16.6)	-	にぶい橙色 橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はヘラ磨き
2121	〃	〃 〃	14.0	(11.9)	(21.5)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 胴部内面は指ナデ, 口縁部外面にハケ目が残る以外は摩耗
2122	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内外面にヘラ磨き, 外面には煤が付着
2123	〃	〃 〃	21.4	(5.2)	(21.4)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はハケ調整の後にヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
2124	〃	〃 〃	16.1	(3.6)	(16.3)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整
2125	〃	〃 〃	14.1	(8.6)	(16.1)	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はヘラナデで煤が付着

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2126	SR-2	弥生土器甕	11.0	(7.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面に3段にハケ目が残り, 煤が一面に付着
2127	〃	〃	13.2	(3.8)	-	-	灰黄色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 内面はナデ調整, 外面にハケ調整を施した後でヨコナデ調整, 外面には煤が付着
2128	〃	〃	13.6	(9.7)	(18.4)	-	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はハケ調整, 胴部内面は指ナデ, 外面はハケ調整
2129	〃	〃	14.5	(4.6)	-	-	灰白色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はナデ調整
2130	〃	〃	15.0	(6.7)	-	-	灰黄色 黒色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部にハケ調整を施した後で, 口縁部外面にヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整
2131	〃	〃	17.4	(5.4)	(16.0)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 内外面はヨコナデ調整で, 部分的にヨコナデ調整を加え, 外面には煤が付着
2132	〃	〃	18.7	(5.9)	-	-	黄灰色 黒褐色	〃	口縁部から上胴部の破片で, 口頸部はハケ調整, 胴部内面は指押え, 外面はヘラ磨きで煤が付着
2133	〃	〃	-	(4.5)	-	-	灰黄褐色 黒色	〃	口縁部の破片, 器面はナデ調整で, 外面に2本単位のクシ描文を施文
2134	〃	〃	-	(5.4)	-	-	にぶい橙色 黄灰色	〃	口頸部の破片で, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部は内外面ともハケ調整で, 外面に2本単位のクシ描文を施文
2135	〃	〃	-	(7.2)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に12条のヘラ描沈線
2136	〃	〃	-	(5.1)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はナデ調整, 外面に煤が付着, 口縁部両端に刻目
2137	〃	〃	-	(6.3)	-	-	灰白色 浅黄褐色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はナデ調整, 口縁部下端にハケ状工具による刻目
2138	〃	〃	-	(5.9)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整
2139	〃	〃	-	(6.2)	-	-	黒褐色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整で, 内面のハケ目の溝に煤が付着
2140	〃	〃	-	(11.4)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はハケ調整で, 口縁部外面にヨコナデ調整を加え, 胴部との境に微隆起突帯
2141	〃	〃	13.4	(15.6)	13.8	-	黒褐色 〃	〃	口縁部から胴部の約1/4が残存, 頸部にハケ調整を施した上で口縁部にヨコナデ調整を加え, 頸部下端に施文
2142	〃	〃	13.8	(5.2)	-	-	にぶい黄橙色 黒色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はヘラ磨きで, 内面に焦げ目, 外面に煤が付着
2143	〃	〃	14.5	(5.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片, 内面に粗いハケ調整, 外面にハケ調整を施した後で, 口縁部にヨコナデ調整を加える。
2144	〃	〃	14.8	(5.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	やや不良	口頸部の破片, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は摩耗
2145	〃	〃	15.0	(5.6)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は上位にハケ調整, 下位に指ナデとナデ調整, 外面はナデ調整
2146	〃	〃	14.8	(7.2)	(16.0)	-	灰白色 浅黄褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, それ以外はナデ調整で, 外面に煤が付着
2147	〃	〃	15.0	(7.4)	15.2	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はハケ調整の後にヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はナデ調整
2148	〃	〃	15.2	(9.0)	(18.9)	-	灰黄褐色 灰褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後で施文
2149	〃	〃	15.8	(6.0)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整で, 下端に1条のヘラ描沈線
2150	〃	〃	15.8	(5.1)	-	-	暗オリーブ褐色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にヘラナデ, 外面はハケ調整で煤が一面に付着

II区 遺物観察表7 (2151~2175)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2151	SR-2	弥生土器 甕	16.0	(5.9)	-	-	褐灰色 黒色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨きで, 下端に微隆起突帯を作り出す。
2152	〃	〃 〃	16.2	(7.4)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はタテ方向のヘラ磨きで, 煤が付着
2153	〃	〃 〃	16.4	(5.7)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面にはハケ目が僅かに残存
2154	〃	〃 〃	16.8	(7.3)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整
2155	〃	〃 〃	18.0	(5.9)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はヨコ方向にヘラナデ
2156	〃	〃 〃	18.2	(6.1)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整で指頭圧痕と指ナデの痕跡が残り, 外面はハケ調整
2157	〃	〃 〃	18.8	(5.1)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 内外面にハケ調整を行った後に口縁端部から口縁部外側にヨコナデ調整を加える。
2158	〃	〃 〃	19.6	(5.3)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整
2159	〃	〃 〃	19.1	(7.6)	(17.6)	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口頸部にハケ調整を行った後に口縁部にヨコナデ調整を施す。
2160	〃	〃 〃	19.8	(4.3)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	良	口頸部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整を行った上で口縁端部から口縁外面にヨコナデ調整
2161	〃	〃 〃	20.0	(6.0)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はタテ方向のナデ調整
2162	〃	〃 〃	20.0	(6.2)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部は口縁端部から内側にヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外面はハケ調整
2163	〃	〃 〃	20.0	(7.7)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は下から上へのナデ調整
2164	〃	〃 〃	20.2	(6.5)	-	-	灰黄褐色 灰色	〃	口頸部の破片, 器面は摩耗, 外面2ヵ所に微隆起突帯を貼付, 口縁部外面に煤が付着
2165	〃	〃 〃	20.8	(5.0)	-	-	黄灰色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ目をナデ消すが, 一部にハケ目が残る。
2166	〃	〃 〃	21.3	(7.6)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後に部分的にヘラ磨き, 外面はハケ調整
2167	〃	〃 〃	21.6	(11.2)	(21.6)	-	黒褐色 灰褐色	良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内外面はナデ調整で, 外面には各所に煤が付着
2168	〃	〃 〃	22.0	(9.5)	23.2	-	にぶい褐色 黒褐色	〃	口縁部から上胴部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は一面に煤が付着
2169	〃	〃 〃	22.4	(7.2)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面は粗いタテ方向のハケ調整
2170	〃	〃 〃	22.6	(4.0)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はタテ方向のハケ調整
2171	〃	〃 〃	22.6	(9.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 外面はタテ方向のハケ調整, 下端に微隆起突帯
2172	〃	〃 〃	23.0	(3.7)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 内面は摩耗し不明瞭, 外面はハケ調整で, 煤が付着
2173	〃	〃 〃	23.0	(6.6)	-	-	浅黄橙色 にぶい黄褐色	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整で, 外面に煤が付着
2174	〃	〃 〃	23.0	(9.1)	(16.2)	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部から胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内外面はハケ調整の後にナデ調整, 上胴部に施文
2175	〃	〃 〃	-	(9.8)	(24.0)	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	頸部から胴部の破片, 頸部内外面にはハケ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整で肩部に微隆起突帯

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2176	SR-2	弥生土器甕	-	(8.7)	(28.0)	-	灰黄褐色 〃	良	頸部から胴部の破片、頸部内面はハケ調整と指ナデ、外面はハケ調整、胴部は内外面ナデ調整
2177	〃	〃	-	(11.5)	(30.0)	-	橙色 〃	良好	頸部から胴部の破片、頸部内面はナデ調整、外面はハケ調整、胴部内面は指ナデ、外面は指押えとナデ調整
2178	〃	〃	23.1	(4.9)	-	-	灰黄褐色 黒色	良	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はハケ調整で、外面に煤が付着
2179	〃	〃	24.6	(6.6)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口頸部の破片、内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はタテ方向のハケ調整で、下端に3本のヘラ描沈線
2180	〃	〃	25.0	(9.7)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整、指ナデとナデ調整
2181	〃	〃	22.0	(12.0)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄橙色	やや不良	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整、外面は摩耗し、下端に1本のヘラ描沈線
2182	〃	〃	30.5	(6.5)	-	-	にぶい橙色 橙色	良	口頸部の破片、内面はヨコ方向、外面はタテ方向のハケ調整、口縁部両端にハケ状工具による刻目
2183	〃	〃	31.2	(9.3)	-	-	浅黄橙色 〃	やや不良	口頸部の破片、口縁部から内面は摩耗し、下端に指頭圧痕が僅かに残り、外面はタテ方向のハケ調整
2184	〃	〃	35.6	(13.0)	(38.5)	-	褐灰色 にぶい黄褐色	良	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整とナデ調整、外面はナデ調整
2185	〃	〃	29.6	(6.6)	(30.6)	-	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整で、内面にハケ目が残る、頸部以下はナデ調整、外面は摩耗
2186	〃	〃	-	(6.3)	-	-	浅黄橙色 〃	やや不良	胴部の破片で、内面に焦げ目が厚く付着し、タール状になる部分もみられる。放射線炭素分析資料
2187	〃	〃	-	(5.5)	-	3.5	明褐灰色 〃	良	底部が残存し、内面はナデ調整で、焦げ目が僅かに残り、外面は指ナデとナデ調整で、赤く変色
2188	〃	〃	-	(4.0)	-	3.2	暗灰色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存、内面はナデ調整、外面はヘラナデ、外底面はナデ調整、外面に煤が付着
2189	〃	〃	-	(4.8)	-	4.7	黒褐色 にぶい褐色	やや不良	底部の大半が残存、内面はナデ調整で、焦げ目が一面に付着、外面は被熱で変色、摩耗
2190	〃	〃	-	(3.9)	-	5.0	黒色 にぶい橙色	良	底部が残存、内面と外底面はナデ調整、外面はハケ調整、被熱で変色
2191	〃	〃	-	(4.3)	-	5.0	灰白色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存、内面はナデ調整で焦げ目が付着、外面は指ナデ、外底面はヘラナデ
2192	〃	〃	-	(3.8)	-	5.2	黒色 にぶい黄褐色	〃	底部約1/2が残存、内面はナデ調整で焦げ目が一面に付着、外底面はナデ調整、外面はヘラ磨きで煤が付着
2193	〃	〃	-	(4.0)	-	5.2	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存、内面は指ナデ、外面はハケ調整の後にヘラナデと指ナデ、外底面はナデ調整
2194	〃	〃	-	(4.7)	-	5.2	灰白色 灰黄色	〃	底部が残存、内面は指押えと指ナデ、外面はハケ調整の後にナデ調整で、煤が一部に付着
2195	〃	〃	-	(3.6)	-	5.5	黒褐色 灰黄色	〃	底部が残存、内面は指押えとナデ調整で、煤が付着、外面はハケ調整で煤が僅かに付着、外底面はナデ調整
2196	〃	〃	-	(4.2)	-	5.5	にぶい橙色 〃	〃	底部が残存、内面と外底面はナデ調整、外面は指ナデ、被熱で変色
2197	〃	〃	-	(3.8)	-	5.6	黄灰色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存、内面と外底面はナデ調整、外面は指ナデ、被熱で変色
2198	〃	〃	-	(4.2)	-	5.6	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存、内面はナデ調整で一面に焦げ目が付着、外面はヘラナデ、外底面はナデ調整
2199	〃	〃	-	(3.2)	-	5.7	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	底部が残存、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にナデ調整、外底面はヘラ削り
2200	〃	〃	-	(3.9)	-	5.9	黄灰色 灰黄色	〃	底部が残存、内外面ともナデ調整

II 区 遺物観察表9 (2201～2225)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2201	SR-2	弥生土器 甕	-	(3.5)	-	6.0	黒褐色 にぶい黄橙色	良	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はナデ調整で, 下端に指頭圧痕が僅かに残存
2202	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	6.0	黄灰色 〃	〃	底部が残存, 内面は指押えと指ナデで, 中央部が角状に盛り上がる。外面はナデ調整
2203	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存, 器面は被熱で変色, 摩耗, 外面下端に指頭圧痕が僅かに残存
2204	〃	〃 〃	-	(6.5)	(12.4)	6.0	黄灰色 にぶい黄橙色	やや不良	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面は被熱で変色, 摩耗, 外面下端に指頭圧痕が僅かに残存
2205	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	6.0	灰黄色 〃	良	底部が残存, 内面と外面は指押えとナデ調整, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
2206	〃	〃 〃	-	(12.4)	(17.2)	6.0	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	下胴部から底部の約1/4が残存, 内面は指押えとナデ調整で焦げ目が部分的に付着, 外面は剝離と摩耗
2207	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	6.2	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面は指ナデ
2208	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	6.3	黒色 〃	良好	底部約1/2が残存, 内面と外底面はナデ調整で, 内面には焦げ目が付着, 外面は指押えと指ナデ, 器壁が薄い。
2209	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	6.4	黄灰色 〃	良	底部が残存, 内面は焦げ目が付着し, 指頭圧痕の輪郭が残り剝離, 外面はナデ調整, 外底面は指押えとナデ調整
2210	〃	〃 〃	-	(7.6)	-	6.4	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
2211	〃	〃 〃	-	(6.0)	(11.2)	6.4	灰白色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整で焦げ目が付着, 外面はハケ調整で被熱で変色, 外底面はナデ調整
2212	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	6.5	暗灰色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整で, 焦げ目が一面に付着, 外面は指ナデ, 外底面はナデ調整
2213	〃	〃 〃	-	(9.6)	-	6.5	灰黄色 〃	〃	底部約2/3が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整で底面に指頭圧痕, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
2214	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	6.7	黒色 灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指押えで焦げ目が全面に付着, 外面は指押えとヘラナデ, 外底面はナデ調整
2215	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	6.7	にぶい赤褐色 橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整で, 下端に指頭圧痕が残存
2216	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	6.8	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で焦げ目が付着, 外面はヘラ削りとナデ調整, 外底面はナデ調整
2217	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	6.8	灰黄色 灰褐色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面は指押えの後にハケ調整で, 被熱で変色
2218	〃	〃 〃	-	(8.1)	(11.7)	6.9	灰黄色 黒褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は指押えとハケ調整で部分的に煤が付着, 外底面はナデ調整
2219	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	7.0	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整でヘラ状工具による傷が無数に残存, 外面はヘラナデとナデ調整, 外底面はナデ調整
2220	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	7.0	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面は指ナデ, 外底面はナデ調整
2221	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約3/4が残存, 内面はナデ調整で, ほぼ全面に焦げ目が付着, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
2222	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	7.0	黒色 浅黄色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で, 焦げ目が一面に付着, 外面と外底面はナデ調整で被熱で変色
2223	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	7.0	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で焦げ目が薄く残り, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
2224	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	7.1	褐灰色 灰黄色	〃	底部が残存, 内面は指ナデで, 焦げ目が全面付着, 外面はヘラナデと指押え, 外面はナデ調整
2225	〃	〃 〃	-	(5.5)	(14.2)	7.1	暗灰色 赤橙色	〃	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面は指押えとナデ調整, 外底面はナデ調整で, 被熱で変色

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2226	SR-2	弥生土器甕	-	(5.7)	(11.0)	7.1	黄灰色 灰黄色	良	底部の大半が残存、内面と外底面はナデ調整、外面はハケ調整、被熱で変色
2227	〃	〃	-	(7.6)	(14.6)	7.2	灰黄色 褐灰色	〃	底部約1/2が残存、内面はナデ調整と指ナデ、外面はハケ調整で、煤が付着、外底面はナデ調整、被熱で変色
2228	〃	〃	-	(6.7)	(13.4)	7.2	にぶい橙色 灰黄色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラナデとヘラ削り、外底面はナデ調整、被熱で変色
2229	〃	〃	-	(4.5)	-	7.2	灰黄色 灰褐色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はヘラナデ、外底面はナデ調整、被熱で変色
2230	〃	〃	-	(6.9)	(12.1)	7.2	灰黄褐色 灰白色	〃	底部の大半が残存、内面はナデ調整で焦げ目が一面に付着、外面は摩耗、下端に指頭圧痕が僅かに残存
2231	〃	〃	-	(3.6)	-	7.4	褐灰色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存、内面はナデ調整で、焦げ目が付着、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
2232	〃	〃	-	(4.5)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存、内面と外底面はナデ調整、外面は指ナデ
2233	〃	〃	-	(4.8)	-	7.6	灰白色 灰黄色	〃	底部が残存、内外面は指ナデとナデ調整、外底面はナデ調整、被熱で変色
2234	〃	〃	-	(6.7)	(14.5)	7.6	にぶい黄橙色 〃	やや不良	底部が残存、内面はナデ調整で焦げ目が付着、外面は指ナデ、外底面はナデ調整
2235	〃	〃	-	(4.3)	-	7.8	灰黄色 にぶい黄橙色	良	底部が残存、内外面は指ナデ、外底面はナデ調整
2236	〃	〃	-	(5.4)	-	7.8	にぶい橙色 〃	〃	底部約3/4が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整、被熱で変色
2237	〃	〃	-	(3.9)	-	7.9	灰黄色 〃	〃	底部が残存、内面と外底面はナデ調整、外面は指ナデで、黒斑が残存
2238	〃	〃	-	(4.7)	-	7.9	褐灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存、内面と外底面はナデ調整、外面はヘラナデで指頭圧痕が残存し、被熱で変色
2239	〃	〃	-	(5.5)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存、内面はナデ調整で焦げ目が付着、外面はナデ調整、外底面はナデ調整で指頭圧痕が残存
2240	〃	〃	-	(4.3)	-	8.0	灰黄色 〃	〃	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は摩耗し、下端に指頭圧痕が僅かに残り、煤が薄く付着
2241	〃	〃	-	(3.8)	-	8.0	にぶい黄褐色 〃	〃	底部が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整で被熱で変色、外底面はナデ調整
2242	〃	〃	-	(4.0)	-	8.0	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はヘラナデと指ナデ、外底面はナデ調整
2243	〃	〃	-	(4.1)	-	8.7	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/2が残存、内外面は指ナデ、外底面はナデ調整とみられるが剥離、被熱で変色
2244	〃	〃	-	(6.7)	-	8.7	灰黄色 橙色	〃	底部約1/2が残存、内面は指押えとナデ調整、外面と外底面はナデ調整で、外底面には指頭圧痕が残り、被熱で変色
2245	〃	〃	-	(5.3)	(14.2)	8.8	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は被熱で変色、摩耗
2246	〃	〃	-	(4.3)	-	7.1	灰黄褐色 灰黄色	〃	底部が残存、内面は指押えとナデ調整で焦げ目が付着、外面はハケ調整と指ナデ、外底面はナデ調整
2247	〃	〃	-	(10.4)	(19.2)	9.2	灰白色 褐灰色	〃	底部の大半が残存、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨きとナデ調整で、煤が付着
2248	〃	〃	-	(4.7)	-	9.6	灰黄色 〃	〃	底部約3/5が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はナデ調整で下端に指頭圧痕が残存、外底面はナデ調整
2249	〃	〃	-	(4.2)	-	10.2	黒褐色 〃	〃	底部が残存、内面はナデ調整で全面に焦げ目が付着、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
2250	〃	〃	-	(5.8)	-	11.0	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	底部約2/5が残存、内面はヘラナデ、外面は指押えとナデ調整、被熱で変色、外底面はナデ調整

II区 遺物観察表 11 (2251～2275)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2251	SR-2	弥生土器 鉢	-	(2.8)	-	-	暗灰色 〃	良	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 突帯を貼付し, 棒状工具による刺突文を施す。
2252	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	-	灰黄色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片, ヨコナデ調整で, 内面はヘラ磨き, 端部下端にヘラ状工具により刻目, 外面にヘラ描沈線と微隆起突帯
2253	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	-	褐灰色 にぶい黄褐色	〃	体部の破片, 内面はヨコ方向のヘラ磨き, 外面はナデ調整で, 中位に刻目とクシ描きによる重弧文
2254	〃	〃 〃	27.5	(5.8)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後に指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後に施文
2255	〃	〃 〃	32.2	(3.7)	-	-	灰褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片, 内外面はヘラナデで, 口唇部周囲をヨコナデ調整
2256	〃	〃 〃	37.6	(10.0)	37.6	-	灰白色 淡褐色	良好	口縁部から体部上位の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にクシ描きによる施文
2257	〃	〃 高杯	-	(4.5)	-	(5.5)	灰色 にぶい黄褐色	良	脚台部の大半が残存, 器面はナデ調整で, 基部には指押えと指ナデ
2258	〃	〃 蓋	-	(3.0)	-	-	にぶい黄褐色 灰白色	〃	径4.8cmの天井部が残存, 器面はナデ調整で, ハケ目が一部に残り, 天井部に小さなつまみを作り出す。
2259	〃	〃 〃	10.4	3.0	-	-	浅黄褐色 灰黄褐色	やや 不良	口縁部約1/3が欠損する以外が残存, 天井部は径5.1cmで, 外面はヘラ削り, 内面は指ナデと指押え, ハケ調整
2260	〃	〃 〃	14.1	8.4	-	-	灰黄色 灰白色	良	径5.6cmの天井部と口縁部の一部が残存, 器面はナデ調整で, 天井部内面に指頭圧痕が残存, 外面は被熱で変色
2261	〃	〃 ミニチュア土器	-	(2.8)	-	4.1	灰黄色 〃	良好	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整, 外底面はヘラ削りで, 煤が僅かに付着
2262	〃	〃 〃	6.3	6.1	-	4.1	黄灰色 〃	良	ほぼ完存, 器面は指ナデで成形し, 部分的にナデ調整を加え, 外底面には指頭圧痕が残存
2263	〃	〃 〃	7.3	4.6	-	5.7	灰黄色 褐灰色	〃	約1/2が残存, 口縁部から内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 被熱で変色, 内底面には焦げ目が付着
2264	〃	〃 〃	(7.8)	(4.3)	-	4.6	灰黄色 〃	〃	口縁部が欠損, 内面は指ナデ, 外面は指押えと指ナデ, 外底面はナデ調整
2265	SR-3	〃 壺	19.3	(10.5)	-	-	暗灰黄色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はヘラ磨きで, 頸部外面に断面三角形の突帯を貼付
2266	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部の破片, ハケ調整の後に口唇部周囲にヨコナデ調整を加え, 円孔を内から外へ穿つ。外面にはヘラ描沈線
2267	〃	〃 〃	16.6	(3.2)	-	-	浅黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整, 口縁部内側に焦げ目が付着
2268	〃	〃 〃	16.0	(2.8)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部の破片, 器面は全般に摩耗, 円孔, ヘラ描沈線, 刻目が残存
2269	〃	〃 〃	16.4	(5.3)	-	-	〃 〃	やや 不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整
2270	〃	〃 〃	19.6	(4.6)	-	-	〃 〃	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 外面には指ナデの痕跡が残存
2271	〃	〃 〃	18.2	(9.7)	-	-	にぶい黄褐色 暗灰黄色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内外面には粗いハケ調整
2272	〃	〃 〃	-	(23.8)	28.0	10.1	にぶい橙色 にぶい褐色	やや 不良	中胴部以下約1/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ削り, 外底面はヘラ削りとナデ調整
2273	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	6.2	灰黄褐色 にぶい褐色	良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面から外底面はナデ調整で, 外面下端には指頭圧痕が残存
2274	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	7.0	にぶい黄色 〃	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は摩耗するが, ハケ目が一部に残存
2275	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	7.1	灰黄色 にぶい赤褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指押えの後にナデ調整, 外面から外底面には指頭圧痕が明瞭に残存

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2276	SR-3	弥生土器 壺	-	(5.2)	-	7.8	灰黄色 にぶい黄橙色	良	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面と外底面はナデ調整
2277	〃	〃 甕	-	(9.0)	-	-	暗灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後で2条の微隆起突帯
2278	〃	〃 〃	26.0	(4.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頭部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他は摩耗, 外面には2条の微隆起突帯とクシ描文
2279	〃	〃 〃	15.6	(3.1)	-	-	黒褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片, 器面は摩耗, 口縁端部にヘラ状工具による刻目, 外面にヘラ描きによる直線文と重弧文
2280	〃	〃 〃	19.6	(6.3)	(19.4)	-	灰黄色 灰色	良	口頭部の破片, 内面はハケ調整とヘラ磨き, 外面はハケ調整の後に微隆起突帯を貼付, 口縁部下端に刻目
2281	〃	〃 〃	17.0	(5.8)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	口頭部の破片, 内面はハケ調整, 口唇部周囲はヨコナデ調整, 外面はハケ調整
2282	〃	〃 〃	14.0	(10.1)	(17.4)	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部から上胴部の約1/6が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部と胴部の境に指押え, 外面はハケ調整
2283	〃	〃 〃	20.1	31.5	22.9	7.4	〃 〃	やや不良	約3/4が残存, 全般に摩耗するが, 頸部内面と外面にハケ目, 内面に指頭圧痕が残存, 中胴部外面に煤が付着
2284	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	5.0	灰黄褐色 〃	良	底部約2/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は指ナデとナデ調整, 外底面はナデ調整, 被熱で変色
2285	〃	〃 〃	-	(5.6)	(11.7)	5.6	暗灰色 灰黄褐色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整, 外底面はナデ調整
2286	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	5.9	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色し, 煤が僅かに付着
2287	〃	〃 〃	-	(5.7)	(11.2)	6.0	〃 〃	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 内面には焦げ目が付着
2288	〃	〃 〃	-	(9.6)	13.1	6.0	黄褐色 浅黄色	〃	中胴部以下約2/3が残存, 内面は指ナデとナデ調整で, 底面に指頭圧痕が残存, 外面はハケ調整
2289	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	6.7	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整で, 被熱で変色
2290	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	7.0	黒色 褐灰色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で焦げ目が付着, 外面から外底面はナデ調整で, 下端に指頭圧痕が僅かに残存
2291	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	7.4	褐灰色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内外面は指ナデとナデ調整で, 内面には焦げ目, 外面には煤が付着, 外底面はナデ調整
2292	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	8.6	灰黄色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整で, 煤が僅かに付着, 外面は指押えの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
2293	〃	〃 蓋	-	(6.3)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部以外約3/4が残存, 器面はナデ調整で, 天井部内面には指ナデ, 天井部は径6.0cmを測る。
2294	〃	〃 ミニチュア土器	(5.0)	2.7	2.2	-	〃 〃	〃	ほぼ完存, 両端面はナデ調整, 側面は指ナデ

Ⅲ区 遺物観察表1 (3001～3025)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3001	第Ⅷ層	土師質土器 椀	-	(3.1)	-	5.8	にぶい黄橙色 灰黄色	良	口縁部以外が残存、成形はA技法、回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加え、体部外面に回転ヘラ削り
3002	SR-4	弥生土器 壺	13.8	(5.6)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、頸部下端に微隆起突帯
3003	〃	〃 〃	15.1	(7.3)	-	-	黄灰色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はナデ調整、頸部外面下端に微隆起突帯、口縁端部に刻目
3004	〃	〃 〃	17.8	(5.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はヘラ磨き、外面はハケ調整の後に3条のヘラ描沈線
3005	〃	〃 〃	18.0	(5.8)	-	-	にぶい黄色 〃	良	口頸部約2/3が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、ハケ調整の後にナデ調整
3006	〃	〃 〃	(19.4)	(9.4)	14.0	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片、内面はハケ調整とナデ調整、ハケ調整の後に微隆起突帯とヘラ描沈線、外面に煤が付着
3007	〃	〃 〃	14.6	(3.8)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片、口唇部内側にヨコナデ調整、内外面はヘラ磨き、口縁端部両端にハケ状工具による刻目
3008	〃	〃 〃	16.6	(4.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はナデ調整、貼付された口縁には貼付の際の指頭圧痕が残存
3009	〃	〃 〃	17.8	(7.9)	-	-	灰黄色 〃	やや不良	口頸部約1/4が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面はヨコ方向、外面はタテ方向のハケ調整
3010	〃	〃 〃	20.0	(11.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部約1/6が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整とナデ調整、外面はハケ調整、下端にクシ描文
3011	〃	〃 〃	18.2	(4.5)	-	-	浅黄色 〃	〃	口頸部の破片、口唇部にヨコナデ調整、内外面はナデ調整、口縁上部内側に微隆起突帯と円孔
3012	〃	〃 〃	(9.5)	(7.2)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部約1/2が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面は指押えとナデ調整、外面にはヘラ描沈線と微隆起突帯
3013	〃	〃 〃	12.0	(5.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部約1/2が残存、口縁部はヨコナデ調整と微隆起突帯、内面はナデ調整、外面にはヘラ描沈線と微隆起突帯
3014	〃	〃 〃	5.1	(4.5)	-	-	灰黄色 〃	良	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部にハケ調整、頸部下端からクシ描波状文
3015	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	頸部の破片、内外面ともナデ調整で、外面に2本のクシ描波状文の間にヘラ描きによる格子状の文様帯
3016	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	6.8	灰白色 にぶい黄橙色	〃	底部がほぼ残存、器面は摩耗するが、外面下端に指頭圧痕が残存
3017	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	8.7	にぶい黄橙色 浅黄色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はナデ調整と下端に指ナデ、外底面は指押えとナデ調整
3018	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	8.9	黄灰色 灰黄色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は基本的にハケ調整で、部分的にヘラ削りとなり、外底面はナデ調整
3019	〃	〃 甕	-	(4.9)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	〃	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整で、口縁端部と外面に施文、口縁下に1条の突帯
3020	〃	〃 〃	11.7	(5.5)	12.5	-	灰黄色 暗灰黄色	〃	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ描沈線を施文
3021	〃	〃 〃	31.0	(15.5)	32.6	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から中胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面にハケ調整とナデ調整、外面はハケ調整で、煤が一面に付着
3022	〃	〃 〃	39.2	(6.2)	38.6	-	にぶい黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面はハケ調整で、煤が付着
3023	〃	〃 〃	28.3	(6.3)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内外面はナデ調整で、外面には微隆起突帯とクシ描文を施文
3024	〃	〃 〃	15.3	(1.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の破片、内面はナデ調整で、クシ描きで施文、外面はハケ調整、口縁端部両端にヘラ状工具による刻目
3025	〃	〃 〃	19.8	(5.0)	-	-	灰黄色 浅黄色	〃	口頸部の破片、内面は指ナデ、外面はナデ調整、口縁端部両端にヘラ状工具による刻目

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3026	SR-4	弥生土器甕	22.4	(4.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片、内面はナデ調整、外面はハケ調整、口縁端部両端にヘラ状工具による刻目
3027	〃	〃	22.4	(4.4)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はナデ調整で、内面には焦げ目が僅かに付着
3028	〃	〃	18.0	(5.3)	-	-	暗灰黄色 灰色	不良	口頸部の破片、内面はナデ調整、他は摩耗、外面に微隆起突帯とヘラ描沈線
3029	〃	〃	21.2	(12.2)	15.8	-	灰黄色 にぶい黄橙色	良	口縁部から上胴部が残存、内面はハケ調整とナデ調整、外面はハケ調整で、頸部と胴部の境に段部を作り出す。
3030	〃	〃	14.0	(8.8)	(16.3)	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内外面ともハケ調整とナデ調整で、胴部外面に煤が付着
3031	〃	〃	16.8	(6.1)	(17.4)	-	にぶい黄橙色 にぶい黄色	良	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内外面ともハケ調整で、外面にヘラ描沈線
3032	〃	〃	19.6	(4.7)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整で、赤色塗彩される。外面はハケ調整
3033	〃	〃	20.9	(6.1)	-	-	灰黄褐色 灰色	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はナデ調整で、外面に微隆起突帯と爪による刻目と刺突文
3034	〃	〃	22.0	(7.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内外面はナデ調整で、頸部と胴部の境が稜となる。
3035	〃	〃	22.8	(8.1)	-	-	橙色 〃	良	口頸部約1/6が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整とナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き
3036	〃	〃	21.4	(10.9)	(24.4)	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/6が残存、口縁部内面はハケ調整、頸部外面はハケ調整、胴部外面はナデ調整
3037	〃	〃	23.7	(5.9)	-	-	黒色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はヘラ磨きとナデ調整、外面はヘラ磨きで、下端に突帯を貼付
3038	〃	〃	-	(21.2)	23.6	7.5	灰色 にぶい黄褐色	〃	中胴部以下約1/3と底部が残存、内面は指ナデ、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
3039	〃	〃	-	(23.1)	27.0	8.0	灰色 灰黄色	〃	胴部約1/2と底部が残存、内面は指ナデで、焦げ目が付着、外面はハケ調整、外底面はヘラ削りとナデ調整
3040	〃	〃	-	(9.9)	-	-	にぶい黄褐色 褐灰色	〃	胴部の破片、内面は一面に厚く焦げ目が付着、外面はハケ調整で煤が付着、放射線炭素分析資料
3041	〃	〃	-	(4.9)	-	-	黒色 灰白色	〃	胴部の破片、内面は一面に厚く焦げ目が付着、外面はハケ調整、放射線炭素分析資料
3042	〃	〃	-	(3.6)	-	4.9	黄灰色 灰黄色	〃	底部が残存、器面はナデ調整で、内面には煤が薄く一面に付着し、外面下端には指頭圧痕が残存
3043	〃	〃	-	(3.0)	-	4.8	黄灰色 にぶい黄褐色	〃	底部約2/3が残存、器面はナデ調整で、内面には焦げ目が付着し、外面は被熱で変色
3044	〃	〃	-	(2.7)	-	5.4	にぶい黄褐色 〃	〃	底部が残存、内面はナデ調整で爪痕が多数残存、外面はハケ調整、外底面はヘラ削り
3045	〃	〃	-	(5.6)	-	5.6	浅黄色 暗灰黄色	〃	底部の大半が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整で、煤が付着
3046	〃	〃	-	(3.3)	-	6.3	灰黄色 〃	〃	底部が残存、内面は指押えと指ナデ、外面は指ナデ、外底面はナデ調整
3047	〃	〃	-	(5.9)	(12.0)	6.6	浅黄色 にぶい黄色	〃	底部約2/3が残存、内面はナデ調整、外面はヘラナデの後にヘラ磨き、外底面はヘラ磨き
3048	〃	〃	-	(3.4)	-	6.6	灰黄色 〃	〃	底部が残存、内面はナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整で煤が付着
3049	〃	〃	-	(3.8)	-	6.7	にぶい黄色 〃	〃	底部約1/2が残存、内面は器面が剥離し、外面と外底面はナデ調整で、被熱で変色
3050	〃	〃	-	(3.8)	-	7.2	灰黄色 浅黄色	〃	底部が残存、内面は指押えとナデ調整で、焦げ目が付着、外面は指ナデ、外底面はナデ調整

Ⅲ区 遺物観察表3 (3051～3062)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3051	SR-4	弥生土器 甕	-	(4.8)	-	7.5	黄灰色 暗灰黄色	良	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整で煤が一面に付着, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整で煤が付着
3052	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	7.8	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指ナデ, 外面はヘラナデ, 外底 面はナデ調整
3053	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	8.0	淡黄色 浅黄色	やや 不良	底部約1/2が残存, 内外面ともナデ調整で, 外面に黒斑 が一部に残存
3054	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	7.8	浅黄色 黒色	良	底部約1/2が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外 底面はナデ調整
3055	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	8.0	灰白色 灰黄色	やや 不良	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整で, 外面には煤が付着
3056	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	9.0	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整で, 外面は被熱で変色
3057	〃	〃 〃	-	(8.2)	(21.8)	10.6	浅黄橙色 灰黄色	やや 不良	底部約1/2が残存, 内面は剝離, 外面はナデ調整とヘラ 削り, 外底面はヘラ削りとヘラナデ
3058	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	11.8	淡黄色 にぶい黄色	良	底部約1/3が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はヘ ラナデ
3059	〃	〃 ミニチュア土器	-	(4.1)	(8.6)	5.0	灰黄色 灰黄褐色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 内面には焦げ目, 外面 には黒斑が残存
3060	〃	〃 〃	8.0	(4.4)	-	4.6	灰黄色 〃	〃	口縁部大半が欠損, 口縁部から内面はナデ調整, 外面は ハケ調整の後に指ナデとナデ調整, 外底面はナデ調整
3061	〃	〃 〃	2.7	4.0	-	1.7	黒色 にぶい黄橙色	〃	ほぼ完存, 内面は指ナデ, 他はナデ調整で, 外面下端に ヘラナデの痕跡が残存
3062	〃	石製品 石庖丁	(5.1)	3.8	0.5	-	-	-	約1/2が残存, 表面は全体的に摩滅し, ローリングの影 響が看取される。

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4001	第V層	弥生土器 甕	19.4	(5.8)	(18.8)	-	にぶい褐色 黒色	良	口縁部から上胴部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面はハケ調整とナデ調整、外面はタタキとハケ調整
4002	〃	土師質土器 杯	-	(1.6)	-	7.0	にぶい橙色 〃	不良	底部約1/2が残存、成形はB技法で、底部の切り離しは回転糸切り、内面にはロクロ目、器面は摩耗
4003	〃	金属製品 鉄鏃	(7.2)	2.8	0.4	6.5	-	-	刃先が欠損、刃先から関に向かって厚みを増し、茎は錆化が進み、芯のみの部分もある。
4004	第VI層	弥生土器 高杯	-	(3.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	脚基部が残存、器面はナデ調整で、内面にはしまり目が残存、丸い透かしが3方向に開く。
4005	第VIII層	〃 壺	-	(14.0)	(26.0)	7.2	灰黄色 〃	〃	下胴部以下約1/4が残存、内面はヘラナデの後にナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整
4006	〃	〃 甕	-	(14.7)	(23.7)	6.8	〃 〃	〃	中胴部以下約1/2が残存、内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
4007	第IX層	〃 壺	13.2	29.5	22.4	2.7	橙色 〃	〃	約1/2が残存、口縁部はヨコナデ調整、胴部内面はヘラ削りと指ナデ、外面はタタキの後にハケ調整
4008	〃	〃 甕	11.2	20.3	14.0	3.2	淡黄色 〃	〃	大半が残存、口唇部から頸部外面にヨコナデ調整、内面はハケ調整、外面はタタキの後にハケ調整
4009	〃	〃 〃	13.4	(10.3)	14.2	-	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から中胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後に指ナデ、外面はタタキとハケ調整
4010	〃	〃 〃	20.0	(8.0)	(21.8)	-	橙色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整と指ナデ、外面はタタキの後にハケ調整
4011	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	5.2	灰色 灰黄色	やや不良	底部が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整、外底面はナデ調整で、煤が付着
4012	〃	〃 〃	-	(10.8)	(18.9)	4.8	暗灰黄色 にぶい黄橙色	〃	下胴部以下が残存、内面はナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整、外面は被熱で変色
4013	〃	〃 〃	-	(8.2)	(14.7)	3.0	灰黄色 〃	良	底部約2/3が残存、内面はハケ調整の後に指ナデ、外面はタタキの後にヘラ削り
4014	〃	〃 鉢	11.8	8.6	-	2.2	浅黄橙色 にぶい黄橙色	やや不良	約1/4が残存、内面にハケ目が一部に残る以外は摩耗
4015	第XI層	〃 甕	-	(9.4)	(16.4)	7.1	黒褐色 灰白色	良	下胴部約1/5と底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はタタキの後にナデ調整
4016	〃	〃 鉢	17.9	8.9	-	4.7	灰黄色 〃	やや不良	完存、口縁部はヨコナデ調整、内外面ともハケ調整、外底面はナデ調整
4017	〃	〃 〃	16.9	7.5	-	-	褐灰色 〃	良	口縁部の大半が欠損、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はタタキの後にナデ調整
4018	SR-5	〃 壺	7.6	(5.5)	(10.7)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面は指押えとナデ調整、外面は摩耗
4019	〃	〃 〃	12.4	(4.8)	-	-	〃 〃	やや不良	口頸部約1/6が残存、口縁部はヨコナデ調整、外面にはハケ目が僅かに残存
4020	〃	〃 〃	16.4	(5.8)	-	-	〃 〃	良	口頸部約1/4が残存、口縁部はヨコナデ調整、内外面ともハケ調整で、外面に2条のヘラ描沈線を施文
4021	〃	〃 〃	15.0	(7.6)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整と指ナデとナデ調整、外面はハケ調整で、ヘラ描沈線を施文
4022	〃	〃 〃	-	(5.9)	-	-	灰黄色 〃	〃	頸部の破片、内面はナデ調整、外面はハケ調整で5条のヘラ描沈線を施文
4023	〃	〃 〃	16.6	(3.9)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	良好	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はナデ調整
4024	〃	〃 〃	12.4	(4.1)	-	-	明赤褐色 〃	やや不良	口頸部の破片、器面は摩耗、内面に微隆起突帯を2カ所に貼付、外面に微隆起突帯とヘラ描沈線を施文
4025	〃	〃 〃	14.6	(5.1)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内外面ともナデ調整で、外面にはヘラ描沈線と刺突文を施文

IV区 遺物観察表2 (4026~4050)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4026	SR-5	弥生土器 壺	15.0	(6.9)	-	-	黄灰色 〃	不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整 とナデ調整, 外面はハケ調整で刻目突帯を貼付
4027	〃	〃 〃	14.5	(2.9)	-	-	黄灰色 淡黄色	良	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 外面には ハケ目が残存
4028	〃	〃 〃	15.2	(5.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハ ケ調整の後にナデ調整, 外面は摩耗し, 煤が付着
4029	〃	〃 〃	-	(6.7)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	口頸部約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナ デ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
4030	〃	〃 〃	-	(16.9)	18.0	-	にぶい黄色 灰黄色	〃	頸部から中胴部約1/2が残存, 胴部内面はハケ調整の後 に指ナデ, 外面はタテ方向のハケ調整
4031	〃	〃 〃	(14.9)	(22.2)	18.0	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部から中胴部1/2弱が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は指ナデとハケ調整
4032	〃	〃 〃	17.4	(7.6)	-	-	〃 〃	〃	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハ ケ調整の後にヨコナデ調整とナデ調整, 外面はハケ調整
4033	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は器面が剥 離し, 外面はハケ調整の後にヘラ描沈線を施文
4034	〃	〃 〃	-	(5.7)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	頸部の破片, 内外面ナデ調整で, 外面にヘラ描沈線と微 隆起突帯を施文
4035	〃	〃 〃	23.4	(8.7)	-	-	にぶい褐色 にぶい赤褐色	〃	口頸部の破片, 内面はヨコ方向のハケ調整, 外面は摩耗 するが, 微隆起突帯とクシ描直線文が残存
4036	〃	〃 〃	(6.4)	(8.6)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	良	頸部約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 内面にはしまり 目, 外面には10条のヘラ描沈線が残存
4037	〃	〃 〃	8.2	(5.4)	-	-	黒色 〃	〃	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナ デ調整, 外面はハケ調整で, 口縁外面に円形浮文を貼付
4038	〃	〃 〃	10.8	(4.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後に微隆起突帯とヘラ描沈線を施文
4039	〃	〃 〃	9.6	(6.1)	-	-	にぶい赤褐色 橙色	やや不良	口頸部約1/6が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナ デ調整, 外面はタテ方向のハケ調整
4040	〃	〃 〃	12.8	(13.7)	(20.9)	-	灰黄色 〃	良	口縁部から上胴部約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指ナデ, 外面はヘラナデの後にヘラ磨き
4041	〃	〃 〃	14.8	(6.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ 調整, 外面はハケ調整
4042	〃	〃 〃	-	(14.6)	(20.5)	-	橙色 〃	〃	頸部と上胴部の約1/4が残存, 頸部内面は指押えの後に ナデ調整, 外面はヘラ磨き
4043	〃	〃 〃	15.0	(7.2)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナ デ調整, 口縁端部には擬凹線文を施文
4044	〃	〃 〃	15.2	(7.0)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部約3/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面 は指ナデ, 外面はハケ調整
4045	〃	〃 〃	16.4	(8.6)	-	-	にぶい黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハ ケ調整で, 外面にはヘラナデを加える。
4046	〃	〃 〃	17.0	(7.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面 はナデ調整, 外面はハケ調整
4047	〃	〃 〃	17.0	(10.0)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面 は指ナデの後にナデ調整
4048	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	-	浅黄色 にぶい黄色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ 調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
4049	〃	〃 〃	16.8	(14.7)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面 は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整で, 下端に凹線
4050	〃	〃 〃	17.0	(12.8)	-	-	灰黄色 灰白色	〃	口頸部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ 調整とナデ調整, 外面はハケ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4051	SR-5	弥生土器 壺	-	(8.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	頸部約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 内面にはしほり目, 外面には10本単位のクシ描文が3帯残存
4052	〃	〃	-	(11.3)	(15.1)	-	灰黄色 暗灰黄色	良	口頸部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整
4053	〃	〃	-	(22.0)	(20.8)	-	オリーブ黒色 灰黄褐色	〃	頸部から中胴部の約1/3弱が残存, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は指ナデ, 外面はハケ調整で煤が付着
4054	〃	〃	-	(13.2)	(20.4)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	頸部から上胴部が残存, 頸部はハケ調整, 胴部内面は指押え, 外面はハケ調整の後に施文
4055	〃	〃	12.4	(8.5)	(13.6)	-	灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整
4056	〃	〃	12.8	(8.2)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部の大半が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面ともハケ調整で, 外面下端に刺突文
4057	〃	〃	14.4	(5.0)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
4058	〃	〃	16.0	(7.1)	-	-	にぶい黄色 灰黄褐色	〃	口頸部約1/6が残存, 口縁部は口唇部から内側にヨコナデ調整, 頸部外面はハケ調整の後にヘラ磨き
4059	〃	〃	16.4	(3.5)	-	-	灰黄色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整
4060	〃	〃	17.4	(9.1)	-	-	にぶい黄橙色 〃	不良	口頸部約1/5が残存, 器面は摩耗するが, 頸部内面にはヨコ方向, 外面にはタテ方向のハケ目が残存
4061	〃	〃	18.0	(3.3)	-	-	〃 〃	良	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヨコ方向, 外面はタテ方向のハケ調整
4062	〃	〃	21.3	(5.1)	-	-	灰黄褐色 〃	やや不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 外面にタテ方向のハケ目が残存
4063	〃	〃	22.1	(2.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 外面はハケ調整, 口縁端部には指頭圧痕が明瞭に残存
4064	〃	〃	27.0	(3.7)	-	-	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部内側にヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁端部外面には指頭圧痕が残存
4065	〃	〃	17.2	(1.7)	-	-	灰黄褐色 〃	やや不良	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 内面に微隆起突帯3条と円孔を施文
4066	〃	〃	-	(2.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片, 口唇部から内面にヨコナデ調整, 外面にハケ調整, 口縁内面にヘラ描きによる重弧文
4067	〃	〃	34.2	(7.5)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 口縁部内面にハケ状工具による刺突文と作り出し微隆起突帯3条を施文
4068	〃	〃	16.2	(6.0)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 外面に粘土帯貼付前のハケ目と指頭圧痕が残存
4069	〃	〃	16.6	(2.6)	-	-	黄褐色 にぶい黄橙色	良	口頸部の破片, 口唇部から内面にヨコナデ調整, 外面にハケ調整, 口縁外面に指頭圧痕が残存
4070	〃	〃	16.8	(4.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口唇部から内面にヨコナデ調整, 頸部内外面にはハケ調整, 口縁外面に指頭圧痕が残存
4071	〃	〃	17.9	(5.0)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄色	〃	口頸部の破片, 内面にハケ調整を施した後で口縁部にヨコナデ調整, 頸部内面にヘラナデ, 外面にハケ調整
4072	〃	〃	-	(2.3)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	良	口縁部の細片, 器面にヨコナデ調整を施した後で内面と口縁端部にヘラ状工具で施文
4073	〃	〃	-	(2.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の細片, 器面にヨコナデ調整を施した後で内面と口縁端部にハケ状工具で施文
4074	〃	〃	-	(2.4)	-	-	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の細片, 器面にヨコナデ調整を施した後で, 口縁端部にヘラ状工具で斜格子文を施文
4075	〃	〃	19.6	(8.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 外面はヨコナデ調整とナデ調整

IV区 遺物観察表4 (4076~4100)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4076	SR-5	弥生土器 壺	20.6	(6.2)	-	-	淡黄色 にぶい橙色	やや不良	口頸部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁端部にヘラ状工具で施文
4077	〃	〃 〃	22.0	(3.3)	-	-	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は剝離, 外面はハケ調整
4078	〃	〃 〃	22.3	(2.5)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 口唇部から内面にヨコナデ調整, 口縁外面は指押え, 頸部外面はハケ調整
4079	〃	〃 〃	-	(6.5)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部の破片, 器面はヨコナデ調整, 拡張した口縁端部に円形浮文とヘラ状工具で綾杉文を施文
4080	〃	〃 〃	14.4	(5.5)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	口頸部から上胴部約1/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整で, 外面下端にハケ状工具による刺突文
4081	〃	〃 〃	19.0	(11.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデ, ナデ調整と指押え, 外面は摩耗
4082	〃	〃 〃	11.6	(7.9)	(19.3)	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の大半が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整とヘラ磨き
4083	〃	〃 〃	11.9	(5.9)	-	-	灰黄色 暗灰黄色	〃	口頸部から上胴部1/2強が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はハケ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整
4084	〃	〃 〃	-	(20.2)	18.4	5.4	にぶい黄橙色 〃	〃	頸部以下約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後に中胴部以外にハケ調整
4085	〃	〃 〃	12.8	(11.3)	(18.6)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
4086	〃	〃 〃	13.4	(3.6)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 外面には黒斑が残存
4087	〃	〃 〃	15.0	(5.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部から上胴部の約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 上胴部外面はハケ調整の後にヘラ磨き
4088	〃	〃 〃	15.6	(5.9)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整
4089	〃	〃 〃	15.8	33.3	25.5	6.8	灰黄褐色 〃	やや不良	ほぼ完存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面一面にヘラ削り, 内底面はナデ調整
4090	〃	〃 〃	16.0	(5.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整
4091	〃	〃 〃	16.6	(8.3)	-	-	明黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整
4092	〃	〃 〃	16.8	(5.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面は摩耗
4093	〃	〃 〃	18.6	(3.8)	-	-	橙色 にぶい橙色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他は摩耗
4094	〃	〃 〃	18.8	(7.7)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他は摩耗
4095	〃	〃 〃	20.0	(4.7)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヨコ方向, 外面はタテ方向のハケ調整
4096	〃	〃 〃	20.0	(7.2)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部外面はハケ調整で, 下端に1条の凹線, 他は摩耗
4097	〃	〃 〃	16.2	(12.1)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	口頸部が残存, 口縁部はヨコナデ調整とナデ調整, 頸部内面はヘラ削りの痕にハケ調整
4098	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	胴部の破片, 器面は摩耗, 外面にはヘラ描沈線と竹管文を施文
4099	〃	〃 〃	-	(6.4)	-	-	オリーブ黒色 にぶい橙色	やや不良	上胴部の破片, 器面はナデ調整で, 貼付微隆起突帯とクシ描波状文を施文
4100	〃	〃 〃	-	(6.9)	-	-	明黄褐色 浅黄橙色	良	上胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はナデ調整とハケ調整で, ヘラ描沈線と刻目を施文

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4101	SR-5	弥生土器 壺	-	(3.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	頸部から上胴部の破片、頸部内面はナデ調整、胴部内面は剥離、外面にクシ描波状文・直線文、円形浮文を施文
4102	〃	〃	-	(8.5)	15.2	-	にぶい黄橙色 褐色	良	胴部上半約1/2が残存、内面は上胴部に指ナデ、中胴部にヨコナデ調整、外面はハケ調整
4103	〃	〃	-	(14.1)	27.0	-	灰黄色 にぶい黄色	〃	胴部上半約1/3が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整
4104	〃	〃	-	(6.2)	-	11.2	灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/4が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は摩耗するが、下端に指頭圧痕が残存
4105	〃	〃	-	(4.0)	-	11.0	にぶい黄褐色 赤褐色	やや不良	底部約1/4が残存、内面はナデ調整、外面は摩耗
4106	〃	〃	-	(6.4)	(15.6)	10.2	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	底部約1/4が残存、内面はヘラ削り、外面から外底面はナデ調整で、指頭圧痕が残存し、煤が付着
4107	〃	〃	-	(4.8)	-	9.6	にぶい黄橙色 橙色	やや不良	底部約1/2が残存、内面は指頭圧痕が明瞭に残存、外面から外底面はナデ調整で、黒斑が残存
4108	〃	〃	-	(6.1)	(16.2)	9.4	にぶい黄色 〃	良	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面から外底面はナデ調整
4109	〃	〃	-	(4.8)	-	9.4	暗灰黄色 にぶい黄色	やや不良	底部約1/2が残存、器面はナデ調整とみられるが摩耗
4110	〃	〃	-	(5.8)	-	9.2	灰色 にぶい黄色	良	底部が残存、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にナデ調整
4111	〃	〃	-	(3.4)	-	9.0	浅黄色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面から外底面はナデ調整
4112	〃	〃	-	(6.0)	-	9.0	明黄褐色 黒褐色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
4113	〃	〃	-	(4.8)	-	8.8	明黄褐色 浅黄色	〃	底部約1/4が残存、器面はナデ調整、外面から外底面はナデ調整で、下端に指頭圧痕が残存
4114	〃	〃	-	(4.4)	-	8.8	灰色 にぶい黄橙色	やや不良	底部約1/2が残存、器面は指ナデとナデ調整、外面はナデ調整とみられ、黒斑が残存
4115	〃	〃	-	(3.6)	-	8.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/2が残存、器面は指ナデとナデ調整、外面から外底面はナデ調整
4116	〃	〃	-	(7.1)	(18.5)	8.4	橙色 にぶい橙色	良	底部1/2弱が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面から外底面はナデ調整とみられ、黒斑と鉄分が付着
4117	〃	〃	-	(3.7)	-	8.4	灰色 にぶい黄色	〃	底部約2/3が残存、器面はナデ調整
4118	〃	〃	-	(7.7)	(14.9)	8.0	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	下胴部の一部と底部約1/2が残存、内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラナデ
4119	〃	〃	-	(4.1)	-	8.0	黄灰色 橙色	やや不良	底部約1/2が残存、内面は指押えとナデ調整、外面から外底面はナデ調整とみられる。
4120	〃	〃	-	(3.7)	-	7.8	灰色 にぶい黄橙色	良	底部約1/2が残存、内面は指ナデ、外面から外底面はナデ調整
4121	〃	〃	-	(5.8)	-	7.5	暗灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存、内面はナデ調整で、黒斑が残存、外面はヘラ磨き、外底面はヘラ削りの後にナデ調整で、黒斑が残存
4122	〃	〃	-	(3.2)	-	7.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約3/4が残存、内面は指押えとナデ調整、他は摩耗
4123	〃	〃	-	(3.4)	-	7.4	にぶい黄色 〃	〃	底部が残存、器面は摩耗するが、外面下端に指頭圧痕が残存
4124	〃	〃	-	(5.4)	-	7.4	浅黄色 〃	〃	底部1/2弱が残存、器面はナデ調整で、外面にはヘラ磨きを施していた可能性がある。
4125	〃	〃	-	(4.7)	-	7.0	黒色 浅黄色	〃	底部約1/2が残存、内面は指押えと指ナデ、外面はハケ調整、外底面はナデ調整

IV区 遺物観察表6 (4126～4150)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4126	SR-5	弥生土器 壺	-	(7.3)	(16.0)	6.6	灰色 灰黄色	良	下胴部約1/3と底部約1/2が残存、内面は指押えと指ナデ、外面はハケ調整で、下端に指押え
4127	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	6.0	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整で、指頭圧痕が残存、外面は摩耗
4128	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	良好	底部約1/2が残存、内面はヘラナデと指ナデ、外面はハケ調整、外底面はナデ調整で、被熱で変色
4129	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	5.6	灰色 〃	良	底部の大半が残存、器面は摩耗するが、外面下端に指頭圧痕が残存
4130	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	5.6	灰色 にぶい黄橙色	やや不良	底部が残存、内面は指ナデ、外面は摩耗、下端周囲に黒斑が残存
4131	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	5.5	黄灰色 橙色	〃	底部が残存、器面はナデ調整とみられるが摩耗し、不明瞭
4132	〃	〃 〃	-	(24.8)	25.6	5.5	灰黄色 灰白色	良	胴部以下約3/4が残存、内面はナデ調整でヘラ削りの痕が残存、外面はタタキの後にハケ調整
4133	〃	〃 〃	-	(19.8)	16.2	5.4	にぶい橙色 灰黄色	〃	頸部以下が残存、内面はヘラ削りで、一部に指ナデを加え、外面はタタキの後にハケ調整
4134	〃	〃 〃	-	(7.7)	(17.4)	5.2	灰黄色 〃	〃	底部の大半が残存、内面はヘラナデとナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整、外底面はナデ調整
4135	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	5.0	暗灰黄色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はタタキ、下端から外底面はナデ調整
4136	〃	〃 〃	-	(6.0)	(16.1)	4.8	灰色 灰黄色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整で、焦げ目が付着、外面はハケ調整で、煤が付着、外底面はナデ調整
4137	〃	〃 〃	-	(14.1)	23.4	3.6	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	中胴部の一部と下胴部以下が残存、内面はハケ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
4138	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	4.8	にぶい黄橙色 浅黄色	〃	底部が残存、器面はナデ調整で、外面下端には指頭圧痕が残存
4139	〃	〃 甕	13.4	(2.1)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ描きによる施文
4140	〃	〃 〃	19.0	(8.2)	17.6	-	にぶい黄色 〃	〃	口縁部から上胴部が残存、器面は摩耗
4141	〃	〃 〃	12.2	(8.0)	10.8	-	にぶい褐色 浅黄橙色	〃	口縁部から中胴部の約1/3が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整とヘラ削り
4142	〃	〃 〃	13.4	(4.5)	(11.3)	-	褐灰色 黒色	やや不良	口縁部から上胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部はハケ調整、胴部内面は指ナデとナデ調整
4143	〃	〃 〃	-	(9.7)	16.4	-	にぶい黄褐色 にぶい黄色	良	頸部から中胴部の破片、内面はハケ調整とヘラ削り、外面はタタキの後にハケ調整で、煤が付着
4144	〃	〃 〃	16.2	(7.7)	15.3	-	浅黄色 黒色	〃	口縁部から中胴部の破片、中胴部内面にヘラ削り、他はハケ調整で、外面には煤が付着
4145	〃	〃 〃	(15.4)	(16.5)	14.9	5.0	にぶい黄褐色 〃	〃	頸部以下約2/3が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整とナデ調整、外底面はナデ調整
4146	〃	〃 〃	22.0	(8.2)	-	-	浅黄色 〃	良好	口頸部約1/6が残存、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面はハケ調整とナデ調整、外面はハケ調整で、下端に施文
4147	〃	〃 〃	24.0	(6.2)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はハケ調整
4148	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部の細片、口縁部はヨコナデ調整、他は摩耗するが、外面には微隆起突帯と棒状工具による沈線を施文
4149	〃	〃 〃	27.5	(5.7)	-	-	浅黄褐色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面は指ナデとナデ調整、外面は摩耗するが、棒状工具で施文
4150	〃	〃 〃	20.0	(4.7)	-	-	にぶい黄褐色 浅黄色	〃	口頸部の破片、器面は摩耗するが、口縁部外面には指頭圧痕が残存、口縁部両端にヘラ状工具による刻目

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4151	SR-5	弥生土器甕	-	(3.2)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	良	口頸部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁端部に指頭圧痕が残存
4152	〃	〃	16.6	(2.5)	-	-	灰色 〃	〃	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部外面にはヘラ状工具で刻目
4153	〃	〃	17.0	(3.5)	-	-	にぶい黄色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁部外面には指頭圧痕が残存
4154	〃	〃	17.1	(5.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部約1/6が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整
4155	〃	〃	18.0	(7.0)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 頸部外面下半にハケ目が残存, 下端に1条のヘラ描沈線
4156	〃	〃	18.4	(4.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
4157	〃	〃	19.0	(4.5)	-	-	〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整で, 内面下端に指頭圧痕が残存
4158	〃	〃	19.8	(5.4)	-	-	浅黄色 灰黄色	やや不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 頸部外面にハケ目が残存
4159	〃	〃	20.6	(2.3)	-	-	黄灰色 〃	良	口頸部の破片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁部外面下端に微隆起突帯
4160	〃	〃	13.0	(4.7)	-	-	橙色 明褐色	〃	口頸部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整とヘラ削り, 外面はナデ調整
4161	〃	〃	13.9	(7.6)	(21.5)	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整, 中位以下にヘラ削り
4162	〃	〃	14.0	(6.6)	(18.6)	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整の後ナデ調整, 外面はハケ調整
4163	〃	〃	14.6	(5.3)	(15.4)	-	浅黄色 暗灰黄色	〃	口縁部から上胴部の約1/6が残存, 器面は摩耗, 肩部外面にハケ状工具による刺突文, 外面には煤が付着
4164	〃	〃	14.6	(9.7)	15.8	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口頸部内面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
4165	〃	〃	14.6	(5.1)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
4166	〃	〃	14.9	(5.2)	(15.9)	-	にぶい黄橙色 黒褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整とヘラ削り, 外面はハケ調整
4167	〃	〃	15.0	(10.2)	19.0	-	灰黄色 黒色	〃	口縁部から中胴部の約1/6が残存, 胴部にハケ調整を施した後で, 口頸部から肩部外面にヨコナデ調整を施す。
4168	〃	〃	15.0	(3.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整
4169	〃	〃	15.2	(6.5)	(16.0)	-	灰黄褐色 にぶい褐色	やや不良	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指ナデ, 胴部内面はヘラ削り
4170	〃	〃	15.8	(9.5)	16.9	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部から中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面はヘラ削りの後にナデ調整
4171	〃	〃	15.8	(8.6)	(20.0)	-	浅黄色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口唇部周囲にヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 肩部内面は指ナデとナデ調整
4172	〃	〃	15.8	(7.5)	(16.6)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 頸部内面にヘラナデを行った後で口頸部にヨコナデ調整を施す。胴部内面はヘラ削り
4173	〃	〃	16.4	(10.7)	21.1	-	灰黄色 〃	良	口縁部から中胴部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 肩部内面は指押えとナデ調整
4174	〃	〃	16.6	(10.0)	(24.6)	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 肩部内面はナデ調整, 胴部内面はヘラ削り
4175	〃	〃	17.4	(8.5)	19.1	-	〃	良	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 肩部内面はナデ調整

IV区 遺物観察表8 (4176~4200)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4176	SR-5	弥生土器 甕	17.6	(6.0)	-	-	にぶい黄橙色 黒色	良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部 内外面はハケ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整
4177	〃	〃	18.3	(10.4)	(24.2)	-	にぶい黄橙色 浅黄色	〃	口縁部から上胴部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部 内面はハケ調整, 胴部内面は指ナデの後にハケ調整
4178	〃	〃	18.5	(7.7)	(17.8)	-	明褐色 灰黄色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部 内面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整とハケ調整
4179	〃	〃	19.2	(8.0)	(24.2)	-	にぶい黄褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の約 1/5 が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 頸部から肩部内面にハケ調整, 胴部内面はナデ調整
4180	〃	〃	22.0	(4.1)	-	-	灰黄褐色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指押 えの後にナデ調整, 外面はハケ調整
4181	〃	〃	23.4	(11.5)	25.1	-	〃 〃	〃	口縁部から中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部 内面はハケ調整の後にナデ調整, 胴部内面は指ナデ
4182	〃	〃	11.7	15.9	13.3	3.2	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の一部が欠損, 頸部内面をヘラナデした後に口頸 部にヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削りの後に指ナデ
4183	〃	〃	12.6	(4.7)	(13.0)	-	にぶい黄褐色 黒色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押 えの後にナデ調整, 外面はハケ調整
4184	〃	〃	13.0	(20.1)	17.6	-	灰黄褐色 橙色	やや不良	口縁部から下胴部の約 1/4 が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 胴部内面中位から上はハケ調整の後にナデ調整
4185	〃	〃	15.0	(10.0)	(20.4)	-	にぶい黄色 黒色	良	口縁部から中胴部の約 1/4 が残存, 口頸部はヨコ方向の ハケ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整
4186	〃	〃	15.2	(7.0)	(19.0)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部 内面は指押えの後にヘラ削りとナデ調整
4187	〃	〃	15.4	(6.4)	(18.3)	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約 1/3 が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整
4188	〃	〃	16.8	(11.0)	19.4	-	にぶい黄色 〃	〃	口縁部から中胴部の約 1/3 が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整
4189	〃	〃	15.7	24.7	19.1	5.2	にぶい黄褐色 黒褐色	〃	中胴部約 1/3 が欠損, 口頸部内外面はハケ調整, 胴部内 面はヘラ削りの後にハケ調整と指ナデ
4190	〃	〃	11.4	18.6	14.2	4.0	にぶい黄褐色 灰黄褐色	良好	ほぼ完存, 内面はハケ調整で, 内底面には指押え, 外面 はタタキの後に下胴部にハケ調整
4191	〃	〃	17.0	(6.1)	(17.6)	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部 内面はナデ調整, 胴部内面はヘラ削り
4192	〃	〃	19.2	(5.8)	(20.4)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口縁部から上胴部の約 1/4 が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面はヘラ削り
4193	〃	〃	25.0	(7.6)	(23.7)	-	灰黄色 橙色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 肩部 内面はナデ調整, 胴部内外面はハケ調整
4194	〃	〃	13.0	(6.3)	15.5	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部 と胴部外面はハケ調整
4195	〃	〃	13.6	(6.1)	(18.7)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部 内面はヘラ削りとナデ調整, 外面は粗いハケ調整
4196	〃	〃	15.2	(4.0)	-	-	にぶい黄褐色 黒色	〃	口頸部約 1/5 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部外面 はハケ調整, 外面には煤が付着
4197	〃	〃	15.6	(6.8)	(18.8)	-	浅黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の約 1/6 が残存, 口頸部はヨコナデ調 整, 胴部内面はヘラ削り, 肩部に指押えとナデ調整
4198	〃	〃	17.0	(8.7)	(22.3)	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部 内面はハケ調整の後にナデ調整
4199	〃	〃	17.8	(4.2)	-	-	灰黄褐色 黒色	〃	口頸部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整
4200	〃	〃	18.4	(22.0)	22.1	-	灰黄褐色 浅黄褐色	〃	口縁部から下胴部の約 1/3 が残存, 口唇部はヨコナデ調 整, 頸部はハケ調整, 胴部内面はヘラ削りの後にナデ調整

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4201	SR-5	弥生土器 甕	18.6	(7.3)	(19.8)	-	灰黄色 黒色	良好	口縁部から胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整, 焦げ目が付着, 外面はハケ調整
4202	〃	〃	19.0	(10.9)	(22.6)	-	にぶい橙色 黒色	良	口縁部から中胴部の約1/4が残存, 口唇部ヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整
4203	〃	〃	24.0	(9.5)	(26.4)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部から頸部外面はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整
4204	〃	〃	14.8	(8.5)	(19.8)	-	にぶい橙色 橙色	良好	口縁部から上胴部の約1/6が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削りの後に肩部にハケ調整
4205	〃	〃	14.2	(9.7)	(19.3)	-	暗灰黄色 黒色	良	口縁部から中胴部の1/2弱が残存, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内面と外面はハケ調整
4206	〃	〃	-	(5.1)	-	8.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面から外底面は指押えとナデ調整, 外面は被熱で変色
4207	〃	〃	-	(11.9)	(21.0)	8.5	明赤褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面はヘラ削り, 外面はヘラ磨き, 外底面はヘラ削りの後にナデ調整で, 黒斑が残存
4208	〃	〃	-	(4.1)	-	8.4	にぶい黄橙色 〃	やや不良	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整で, 内底面に指頭圧痕が残存
4209	〃	〃	-	(4.8)	-	8.2	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	底部が残存, 内面はヘラ削りの後にナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
4210	〃	〃	-	(10.6)	(19.8)	8.0	灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約2/3が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整とみられる。
4211	〃	〃	-	(6.7)	(13.3)	6.9	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存, 外面は被熱で変色
4212	〃	〃	-	(7.5)	(14.0)	7.6	黒色 明赤褐色	〃	底部が残存, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はタタキの後にヘラ磨き, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
4213	〃	〃	-	(4.8)	-	7.4	オリーブ黒色 にぶい黄橙色	〃	底部の大半が残存, 内面はナデ調整で焦げ目が付着, 外面と外底面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕
4214	〃	〃	-	(3.7)	-	7.0	灰黄褐色 浅黄色	〃	底部が残存, 内面はヘラ削り, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
4215	〃	〃	-	(3.3)	-	7.0	浅黄色 〃	〃	底部の大半が残存, 器面はナデ調整
4216	〃	〃	-	(5.9)	(12.5)	6.8	灰黄褐色 灰黄色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整で, 内面には焦げ目が付着, 外面はタタキの後にハケ調整
4217	〃	〃	-	(3.1)	-	6.8	にぶい黄色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕, 外面は被熱で変色
4218	〃	〃	-	(4.8)	-	6.7	にぶい黄色 〃	〃	底部が残存, 内面はヘラナデ, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整, 外面には黒斑が残り, 煤が付着
4219	〃	〃	-	(3.8)	-	6.5	浅黄色 〃	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で外面下端に指頭圧痕
4220	〃	〃	-	(4.5)	-	6.4	黒色 にぶい黄色	やや不良	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面は被熱で変色
4221	〃	〃	-	(5.6)	(12.6)	6.4	灰色 灰黄色	良	底部約1/2が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面は粗いハケ調整
4222	〃	〃	-	(7.5)	(16.8)	6.2	灰黄色 〃	〃	底部約1/4が残存, 内面は指ナデ, 外面はタタキで, 煤が付着, 外底面はナデ調整
4223	〃	〃	-	(15.4)	(24.4)	6.2	浅黄色 〃	〃	胴部の一部と底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
4224	〃	〃	-	(3.8)	-	6.0	暗灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整で, 内面には焦げ目が付着, 外面はハケ調整
4225	〃	〃	-	(5.6)	(12.8)	6.0	黒色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存, 内面は指ナデで, 一面に焦げ目が付着, 外面と外底面はナデ調整

IV区 遺物観察表10 (4226～4250)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4226	SR-5	弥生土器 甕	-	(3.4)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	良	底部がほぼ残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存
4227	〃	〃 〃	-	(5.7)	(11.2)	6.0	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面はヘラナデで, 煤が付着, 外面と外底面はハケ調整で煤が付着
4228	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	5.9	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整
4229	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	5.9	灰黄色 浅黄色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はヘラ磨きとみられ, 一部に黒斑が残存
4230	〃	〃 〃	-	(6.4)	(13.5)	5.9	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	底部約4/5が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整
4231	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	5.8	褐色 黒色	良好	底部約1/3が残存, 内面はヘラ削り, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整, 外面は煤が付着
4232	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	5.8	にぶい黄褐色 〃	やや不良	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整, 外面は被熱で変色
4233	〃	〃 〃	-	(5.6)	(11.2)	5.8	灰黄色 灰黄褐色	良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデ, 外面と外底面はナデ調整で, 被熱で変色
4234	〃	〃 〃	-	(7.1)	(13.1)	5.6	褐灰色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はハケ調整で, 煤が付着
4235	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	5.6	黒色 黄灰色	〃	底部約1/2が残存, 内面はヘラ削りで, 焦げ目が付着, 外面はハケ調整で, 煤が付着
4236	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	5.6	にぶい黄色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整
4237	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	5.6	にぶい黄褐色 〃	〃	底部の大半が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存, 外面は被熱で変色
4238	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	5.5	浅黄色 〃	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存
4239	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	5.4	黒色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整
4240	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	5.2	浅黄色 〃	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 内面に爪痕が残存, 外面は被熱で変色
4241	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	5.2	〃 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面はヘラ削り, 外面はナデ調整で, 部分的にヘラ磨きを施す。
4242	〃	〃 〃	-	(10.4)	(17.0)	5.2	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面はヘラ削りの後に指ナデ, 外面はタタキの後にハケ調整, 煤が付着
4243	〃	〃 〃	-	(6.8)	(13.6)	4.9	灰白色 〃	〃	底部が残存, 内面はハケ調整とナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はタタキの後にハケ調整
4244	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	4.8	黄褐色 〃	〃	底部の破片, 器面はナデ調整
4245	〃	〃 〃	-	(5.3)	-	4.8	黒色 灰黄色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整で焦げ目が付着, 外面はハケ調整で, 煤が付着
4246	〃	〃 〃	-	(5.4)	(9.1)	4.5	灰黄色 〃	〃	下胴部と底部が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
4247	〃	〃 〃	-	(7.3)	(12.9)	4.3	灰黄色 黒色	〃	底部が残存, 内面はヘラ削りの後にハケ調整と指ナデ, 外面はハケ調整で, 煤が付着
4248	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	4.2	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整で, 黒斑が残存
4249	〃	〃 〃	-	(22.6)	22.0	3.6	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	上胴部以下約1/2が残存, 内面はハケ調整の後に指ナデ, 外面はタタキの後にハケ調整
4250	〃	〃 高杯	22.2	(4.4)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内外面はハケ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4251	SR-5	弥生土器 高杯	-	(6.5)	-	-	明黄褐色 にぶい黄褐色	良	脚柱部が残存, 杯部内面はナデ調整, 脚部内面にしぼり目, 外面にはハケ目が残存
4252	〃	〃	-	(6.9)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	脚柱部が残存, 杯部内面はナデ調整, 脚部内面にしぼり目とナデ調整, 外面はハケ調整, 透かしが3カ所
4253	〃	〃	-	(7.3)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄色	〃	脚柱部約2/3が残存, 杯部内面はナデ調整, 脚部内面にしぼり目とナデ調整, 外面はハケ調整, 透かしが3カ所
4254	〃	〃	-	(8.0)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄色	〃	脚柱部が残存, 脚部内面にしぼり目とヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 透かしが4カ所
4255	〃	〃	-	(9.1)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	脚柱部が残存, 杯部内面はナデ調整, 脚部内面にしぼり目と指ナデ, 外面はヘラ磨き
4256	〃	〃	-	(5.2)	-	-	〃 〃	〃	脚部が残存, 内面はナデ調整とハケ調整, 外面はヘラ磨きで, 透かしが1カ所残存
4257	〃	〃	-	(8.6)	-	-	〃 〃	不良	杯底部から脚柱部の約1/2が残存, 杯外面はハケ調整, 脚部内面はしぼり目, 他はナデ調整
4258	〃	〃 鉢	(8.2)	(7.1)	-	4.2	〃 〃	良	口縁部が欠損, 器面はナデ調整で, 体部外面にヘラ磨きが一部に残存
4259	〃	〃	11.3	7.2	-	3.6	灰黄色 〃	〃	約2/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にヘラナデ, 外面はナデ調整
4260	〃	〃	10.4	6.0	-	3.4	にぶい黄褐色 〃	〃	1/2弱が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後に指ナデ, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
4261	〃	〃	15.8	7.2	-	0.9	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	〃	1/2弱が残存, 口唇部から口縁外面はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨きと粗いナデ調整
4262	〃	〃	(14.3)	(6.3)	-	3.8	にぶい褐色 浅黄色	〃	口縁部が欠損, 体部内外面はヘラ磨き, 底部外面はナデ調整で, 下端に指頭圧痕が残存
4263	〃	〃	19.4	8.3	-	4.6	にぶい橙色 橙色	〃	約3/5が残存, 内面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外面はナデ調整で, 下端にハケ状工具による押圧が残存
4264	〃	〃	-	(5.0)	-	(5.0)	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	体部以下約2/3が残存, 内面はヘラナデの後にヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
4265	〃	〃	19.4	(5.6)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 外面はヘラ削りの後にヘラ磨き
4266	〃	〃	(13.6)	(7.7)	-	2.0	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	口縁部以外約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
4267	〃	〃	12.0	(7.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや 不良	底部以外約1/6が残存, 器面はナデ調整, 口縁外面に指頭圧痕が残存
4268	〃	〃	-	(3.5)	-	-	〃 〃	良好	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内外面はヘラ磨き, 口縁部外面にクシ描波状文
4269	〃	〃	19.2	(5.9)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内外面はヘラ磨き
4270	〃	〃 蓋	11.5	5.6	-	-	にぶい褐色 〃	不良	ほぼ完存, 天井部は径3.6cm, 天井部内面はヘラナデ, 他は指押えとナデ調整で, 外面にハケ目が残存
4271	〃	〃	(9.2)	(6.5)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部と天井端部が欠損, 天井部は径3.4cm, 内面は指ナデ, 他はナデ調整で, 指頭圧痕が部分的に残存
4272	〃	〃	8.2	(7.0)	-	-	灰黄色 〃	〃	約2/3が残存, 天井部は径4.5cm, 器面はナデ調整
4273	〃	〃 ミニチュア土器	-	(1.0)	-	5.4	にぶい黄褐色 オリーブ黒色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整
4274	〃	〃	(4.6)	(3.9)	-	2.6	浅黄色 〃	〃	口縁部が欠損, 器面はナデ調整
4275	〃	〃	(7.4)	(4.9)	-	3.2	〃 〃	〃	体部から底部の約1/3が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面にはハケ目が一部に残存

IV区 遺物観察表12 (4276~4300)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4276	SR-5	弥生土器 ミニチュア土器	-	(5.6)	(9.0)	4.2	黄灰色 にぶい黄色	良	下胴部約1/2と底部が残存, 内面は指ナデ, 外面と外底面はナデ調整で, 黒斑が残存
4277	〃	〃	4.8	2.6	-	1.2	灰黄褐色 〃	〃	完存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存
4278	〃	〃	4.5	2.1	-	2.4	灰黄色 〃	〃	約1/2が残存, 器面は指押えとナデ調整
4279	〃	〃	6.4	4.8	-	2.6	浅黄色 灰黄色	〃	ほぼ完存, 手づくねで, 器面は指押えとナデ調整
4280	〃	〃	7.4	5.7	-	4.0	灰黄色 〃	〃	口縁部約1/3と底部が残存, 器面はナデ調整
4281	〃	〃	-	(3.6)	(6.2)	4.2	にぶい黄橙色 暗灰黄色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指ナデ, 外面に黒斑が残存
4282	〃	〃	-	(3.8)	(7.0)	5.0	浅黄褐色 にぶい橙色	〃	体部の一部と底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 他はナデ調整, 外面下端に指頭圧痕が残存
4283	〃	〃	(7.8)	(5.1)	-	(5.6)	黄灰色 灰黄褐色	〃	基部が残存, 内面はハケ調整の後に指ナデ, 他はハケ調整とナデ調整
4284	〃	〃	-	(5.3)	(8.0)	4.8	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	下胴部と底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 黒斑が残存
4285	〃	石製品 磨石	15.9	13.9	6.1	1954.8	-	-	完存, 細粒砂岩の河原石を使用, 中央部を中心に擦痕
4286	〃	- 自然石	2.7	2.5	2.9	23.1	-	-	ほぼ完存するとみられる。礫岩で, 径7mmの円孔が開く。
4287	〃	ガラス製品 ガラス玉	0.6	0.6	0.6	0.2	- コバルトブルー	-	完存, 1ヵ所気泡が入る。
4288	SR-6	弥生土器 壺	13.6	(6.5)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや 不良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 頸部外面はヘラ磨き, 肩部外面はハケ調整
4289	〃	〃	13.0	(9.8)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口縁部の一部と頸部から上胴部の約3/4が残存, 頸部内面にハケ目が残存する以外は摩耗
4290	〃	〃	13.0	(8.5)	-	-	暗灰黄色 橙色	〃	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ目が僅かに残存
4291	〃	〃	13.0	(7.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
4292	〃	〃	18.8	(9.3)	-	-	灰黄褐色 橙色	不良	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整
4293	〃	〃	16.8	(7.2)	-	-	灰黄色 〃	良	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整
4294	〃	〃	21.4	36.3	25.8	3.7	灰黄褐色 〃	〃	約3/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面はハケ調整の後に指ナデとナデ調整
4295	〃	〃	16.8	(4.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや 不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁端部には指頭圧痕が残存
4296	〃	〃	18.8	(5.8)	-	-	〃 〃	良	口頸部1/2弱が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整で, 外面には煤が付着
4297	〃	〃	13.1	(15.2)	15.8	-	にぶい赤褐色 にぶい橙色	不良	底部以外の約1/2が残存, 胴部内面に指頭圧痕, 外面に細かなハケ目が残存, 他は摩耗
4298	〃	〃	-	(5.6)	(19.3)	-	灰黄褐色 〃	良	頸部から上胴部の約1/3が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
4299	〃	〃	-	(19.0)	23.2	-	灰黄色 にぶい黄褐色	〃	頸部から胴部の約1/3が残存, 内面は上半に指ナデとナデ調整, 下半にハケ調整とナデ調整
4300	〃	〃	-	(10.5)	(19.6)	-	黒色 にぶい橙色	〃	底部約2/3が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4301	SR-6	弥生土器壺	-	(9.3)	(20.4)	-	灰白色 灰黄色	良	底部約1/3が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面はタタキ
4302	〃	〃	-	(11.1)	(24.6)	2.2	にぶい黄橙色 〃	〃	下胴部から底部の約1/2が残存, 内面はヘラ削りの後にナデ調整, 外面はタタキの後に底部外面にハケ調整
4303	〃	〃 甕	11.8	(20.0)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の一部と胴部約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整
4304	〃	〃	12.8	(3.7)	-	-	浅黄色 灰黄褐色	不良	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から口頸部外面はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整
4305	〃	〃	13.4	(6.5)	(13.7)	-	暗灰黄色 〃	良	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 胴部外面はタタキ, 他はハケ調整で, 口唇部のみヨコナデ調整
4306	〃	〃	13.8	(5.7)	(16.6)	-	灰黄色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口唇部と口頸部外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 胴部外面はタタキ
4307	〃	〃	14.2	(21.2)	19.8	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	良	口縁部約1/3と胴部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面はヘラ削り
4308	〃	〃	14.2	27.1	18.2	9.4	にぶい黄褐色 浅黄褐色	〃	約3/4が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面は肩部にハケ調整, それ以下にヘラ削り
4309	〃	〃	14.3	22.5	17.1	5.0	橙色 にぶい黄褐色	〃	ほぼ完存, 口頸部はハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後に肩部と下胴部にハケ調整
4310	〃	〃	14.5	18.5	16.8	-	灰白色 黄灰色	〃	ほぼ完存, 口唇部はナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は下胴部にヘラ削りの後に中胴部にハケ調整
4311	〃	〃	15.0	(20.1)	17.6	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	口縁部から胴部の約1/2が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は中胴部以下にヘラ削り, 肩部にナデ調整
4312	〃	〃	15.6	26.4	22.1	2.2	灰黄褐色 灰黄色	〃	約3/4が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はヘラナデ, 胴部内面はナデ調整
4313	〃	〃	16.6	(8.6)	(18.6)	-	にぶい黄褐色 灰黄色	〃	口縁部から中胴部の破片, 口唇部から頸部外面はナデ調整, 頸部内面はハケ調整
4314	〃	〃	17.1	(4.6)	-	-	灰黄色 にぶい黄褐色	良好	口頸部から上胴部の破片, 口唇部から口縁外面はヨコナデ調整, 口頸部内面と頸部外面はハケ調整
4315	〃	〃	20.2	(8.2)	(21.2)	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は全面にハケ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
4316	〃	〃	10.3	(6.8)	11.0	-	灰黄褐色 〃	良	口縁部から胴部の約1/3が残存, 口唇部から口縁部外面はヨコナデ調整, 口頸部内面はハケ調整
4317	〃	〃	13.6	(20.3)	15.0	-	灰黄色 〃	〃	底部以外約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整
4318	〃	〃	8.6	(7.0)	(14.1)	-	暗灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/2が残存, 口頸部は指押えとナデ調整, 胴部内面は指ナデで, 焦げ目が付着
4319	〃	〃	10.3	(11.2)	12.6	-	灰黄色 〃	不良	口縁部から下胴部の約1/2が残存, 口頸部は摩耗, 胴部内面はハケ調整, 外面にはタタキ目が僅かに残存
4320	〃	〃	13.8	(7.8)	14.1	-	暗灰黄色 黄灰色	良	口縁部から胴部の破片, 口頸部は指押えとナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
4321	〃	〃	15.0	(8.0)	(22.8)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	〃	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整
4322	〃	〃	17.4	(6.8)	15.1	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	やや不良	口縁部から中胴部の約1/2が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は丁寧なナデ調整, 外面は粗目のハケ調整
4323	〃	〃	11.6	(8.3)	(18.9)	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	良	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他はハケ調整で, 胴部外面にはタタキ目が残存
4324	〃	〃	12.3	18.8	15.6	1.9	灰黄色 灰黄褐色	〃	約1/2が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面は肩部以下にタタキ, 煤が付着
4325	〃	〃	14.2	(9.7)	17.9	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/2が残存, 口唇部から口頸部外面はヨコナデ調整, 内面は中胴部にヘラ削り

IV区 遺物観察表 14 (4326～4350)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4326	SR-6	弥生土器 甕	10.8	(11.8)	15.6	-	黄灰色 黒色	良	口縁部の一部と上胴部約 1/3 が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整で, 胴部に指ナデを加える。
4327	〃	〃 〃	11.2	(8.5)	14.4	-	灰黄褐色 灰色	やや不良	口縁部から中胴部の破片, 口縁部と頸部外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整
4328	〃	〃 〃	12.0	14.8	10.9	3.2	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の一部が欠損, 口唇部から肩部内面はハケ調整, 上胴部以下は指ナデ, 口頸部外面はナデ調整
4329	〃	〃 〃	13.0	(9.1)	13.5	-	灰黄色 〃	良	口縁部から中胴部の約 1/3 が残存, 口頸部から肩部内面はハケ調整
4330	〃	〃 〃	13.4	(6.3)	(14.9)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部外面から内面はハケ調整, 頸部から胴部外面にタタキ
4331	〃	〃 〃	13.6	(5.9)	(14.5)	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から内面はハケ調整, 口縁部から胴部外面はタタキ
4332	〃	〃 〃	(14.3)	(9.3)	19.5	-	灰白色 灰黄色	〃	頸部から胴部の破片, 内面はハケ調整の後にナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面は一面にタタキ
4333	〃	〃 〃	15.4	(5.9)	(16.6)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約 1/5 が残存, 口唇部はナデ調整, 口頸部内面は粗いハケ調整
4334	〃	〃 〃	15.6	(19.8)	19.0	-	〃 〃	〃	口縁部から下胴部の約 1/5 が残存, 口頸部内外面は粗いハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
4335	〃	〃 〃	15.7	(25.7)	18.2	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から下胴部の破片, 口頸部内外面はハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
4336	〃	〃 〃	15.9	24.9	17.1	3.5	にぶい黄褐色 明黄褐色	〃	口縁部から上胴部の一部と中胴部以下約 2/3 が残存, 口頸部から肩部内面はハケ調整
4337	〃	〃 〃	16.8	(4.8)	(17.8)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部から肩部内面はハケ調整, 外面はタタキ
4338	〃	〃 〃	16.8	(11.4)	18.8	-	〃 〃	〃	口縁部から中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部から肩部内面はハケ調整, 胴部内面はヘラ削り
4339	〃	〃 〃	17.0	(5.3)	(15.8)	-	にぶい黄褐色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部から肩部内面はハケ調整, 胴部外面は摩耗
4340	〃	〃 〃	19.0	(9.5)	20.8	-	にぶい橙色 橙色	良	口縁部から中胴部の破片, 口唇部から頸部内面は摩耗, 胴部内面はハケ調整
4341	〃	〃 〃	10.0	(5.7)	(18.5)	-	黄褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 煤が付着
4342	〃	〃 〃	12.0	(17.6)	17.0	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部の一部と胴部約 1/2 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面上半はナデ調整, 下半はヘラ削り
4343	〃	〃 〃	13.2	(5.1)	-	-	〃 〃	〃	口頸部約 1/4 が残存, 口唇部から口頸部外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 胴部外面はハケ調整
4344	〃	〃 〃	13.4	(5.4)	(18.0)	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部内面にハケ調整, 外面にタタキの後に口頸部にヨコナデ調整を加える。
4345	〃	〃 〃	14.2	(10.8)	16.5	-	にぶい黄褐色 灰黄色	〃	口縁部の一部と胴部約 1/4 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整
4346	〃	〃 〃	14.2	(11.2)	17.2	-	灰黄色 黄灰色	やや不良	口縁部の一部と胴部上半約 1/2 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はハケ調整
4347	〃	〃 〃	14.6	(15.2)	19.9	-	灰黄色 〃	良	口縁部の一部と胴部約 1/3 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は肩部にヘラ削り, それ以下に指ナデ
4348	〃	〃 〃	14.6	(18.3)	19.5	-	褐灰色 黒色	〃	口縁部の一部と胴部約 1/2 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は一面にヘラ削り, 外面は細かなハケ調整
4349	〃	〃 〃	14.8	(13.0)	21.6	-	灰黄色 〃	〃	口縁部の一部と上胴部約 1/3 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は上半にナデ調整, 下半にヘラ削り
4350	〃	〃 〃	14.8	(17.0)	17.2	-	浅黄色 〃	〃	口縁部の一部と胴部約 1/2 が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は下半にハケ調整の後にヘラ削り

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4351	SR-6	弥生土器 甕	-	(6.6)	19.9	-	にぶい黄色 淡黄色	良	上胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面は全面にタタキ
4352	〃	〃 〃	-	(8.9)	19.0	-	灰黄色 〃	不良	頸部から上胴部の約1/4が残存, 胴部内面は指押えとハケ調整, 外面はタタキ
4353	〃	〃 〃	-	(14.5)	19.8	-	黄灰色 灰黄色	良	頸部の一部と胴部約1/2が残存, 内面はハケ調整とナデ調整で, 焦げ目が残存, 外面はタタキの後にハケ調整
4354	〃	〃 〃	-	(28.4)	(25.0)	4.4	灰黄色 〃	〃	上胴部の一部と中胴部以下約1/2が残存, 内面は指ナデ, ハケ調整, ヘラナデ, ヘラ削り
4355	〃	〃 〃	-	(8.2)	(13.4)	5.4	〃 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 煤が僅かに付着
4356	〃	〃 〃	-	(14.7)	(17.8)	3.7	浅黄色 〃	良好	底部1/2強が残存, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整で, 黒斑と煤が一部に残存, 外底面はナデ調整
4357	〃	〃 〃	-	(6.2)	(12.1)	3.6	灰黄色 〃	良	下胴部と底部約1/2が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整
4358	〃	〃 〃	-	(14.4)	16.0	3.6	暗灰黄色 〃	〃	下胴部以下約3/4が残存, 内面は指ナデとナデ調整で, ハケ目が一部に残存, 外面はタタキの後にハケ調整
4359	〃	〃 〃	-	(20.1)	23.5	3.4	にぶい黄橙色 〃	不良	胴部約1/2と底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はタタキとハケ調整, 他は摩耗
4360	〃	〃 〃	-	(6.0)	(14.6)	3.0	にぶい褐色 灰色	良	底部約2/3が残存, 内面はナデ調整, 外面は細かなタタキで, 煤が付着
4361	〃	〃 〃	-	(14.4)	18.1	2.8	灰黄色 黄灰色	〃	中胴部約1/5と底部が残存, 内面はハケ調整と指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
4362	〃	〃 〃	-	(7.6)	(14.0)	2.2	黄灰色 灰黄色	〃	底部約2/3が残存, 内外面はヘラナデ, 外底面周囲はナデ調整で, 外面に煤が付着
4363	〃	〃 〃	-	(9.4)	(20.7)	5.6	にぶい橙色 にぶい黄橙色	やや不良	底部約1/2が残存, 内面はハケ調整で, 煤が付着, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はハケ調整
4364	〃	〃 〃	-	(11.1)	(25.2)	5.8	黒色 灰黄色	良	底部の大半が残存, 内面はナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
4365	〃	〃 〃	-	(7.8)	(17.5)	4.0	黄灰色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面は全面に粗いハケ調整, 外面はタタキの後に部分的に粗いハケ調整
4366	〃	〃 〃	-	(8.3)	(18.0)	3.8	灰黄色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はタタキの後にハケ調整で, 黒斑が残存
4367	〃	〃 〃	-	(8.1)	(17.1)	3.4	黒色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は全面にハケ調整, 外面は全面にタタキで, 煤が付着
4368	〃	〃 〃	-	(7.2)	(14.8)	3.4	灰黄色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にヘラナデ, 外底面はナデ調整
4369	〃	〃 〃	-	(8.0)	(14.9)	1.4	灰黄色 黒褐色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキで, 煤が一面に付着
4370	〃	〃 〃	-	(13.0)	14.2	1.0	灰黄色 暗灰黄色	〃	中胴部約1/4と底部が残存, 内面はヘラ削りとナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はタタキの後にハケ調整
4371	〃	〃 〃	-	(9.0)	(17.1)	1.0	暗灰黄色 〃	良好	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整, 被熱で変色, 外底面にタタキ目が残存
4372	〃	〃 〃	-	(18.2)	17.3	1.4	にぶい黄褐色 灰黄褐色	良	胴部以下1/2弱が残存, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はタタキの後にナデ調整で, タタキ目をスリ消す。
4373	〃	〃 甔	15.8	14.5	-	4.6	灰黄色 〃	〃	約2/3が残存, 内底面と外底面はナデ調整, 他は摩耗, 外底面に径7mmの円孔を作り出す。
4374	〃	〃 鉢	14.6	5.8	-	3.0	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口縁部の大半が欠損, 内面はヘラ磨き, 口唇部から外面はナデ調整
4375	〃	〃 〃	15.8	5.3	-	3.8	〃 〃	良	約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はナデ調整

IV区 遺物観察表16 (4376~4400)

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4376	SR-6	弥生土器 鉢	(10.7)	(5.0)	-	4.2	灰黄色 〃	やや不良	口縁部は欠損, 内底面と外面下端に指押え, 他はナデ調整
4377	〃	〃 〃	12.9	6.0	-	2.1	にぶい黄橙色 灰黄色	良	口縁部約1/4と底部が残存, 内面はヘラナデ, 外面はタタキの後にナデ調整, 外底面は未調整
4378	〃	〃 〃	15.6	6.7	-	2.0	にぶい黄橙色 〃	〃	約1/2が残存, 口唇部はナデ調整, 内面は粗いハケ調整, 外面は全面にタタキ, 外底面はナデ調整
4379	〃	〃 〃	11.1	(6.5)	-	(4.0)	にぶい黄橙色 褐灰色	やや不良	底部が欠損, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整
4380	〃	〃 〃	11.9	6.7	-	2.8	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	ほぼ完存, 口唇部から口縁外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はタタキの後に丁寧なナデ調整
4381	〃	〃 〃	19.2	11.2	-	4.2	にぶい黄橙色 〃	〃	大半が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
4382	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	2.7	〃 〃	〃	底部が残存, 内面はハケ調整, 外面はタタキ, 外底面はナデ調整
4383	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	4.2	灰黄色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面はハケ調整, 外面はナデ調整
4384	〃	〃 〃	12.2	4.3	-	6.3	灰黄褐色 黄灰色	〃	約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はタタキと指ナデの後にナデ調整
4385	〃	〃 〃	19.1	10.6	-	4.8	灰白色 〃	やや不良	1/2強が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
4386	〃	〃 〃	16.9	10.9	-	9.2	にぶい黄橙色 〃	〃	完存, 内面はナデ調整, 他は摩耗
4387	〃	〃 〃	8.3	2.4	-	3.9	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 体部下端から外底面は指押え
4388	〃	〃 〃	10.0	2.7	-	(2.2)	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	約3/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 外面は指押えの後にナデ調整
4389	〃	〃 〃	12.8	(4.7)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内外面は部分的にヘラ磨きが残存, 他は摩耗
4390	〃	〃 〃	13.2	4.5	-	-	灰黄色 〃	〃	約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 外底面はヘラ削りで, 他はナデ調整
4391	〃	〃 〃	14.6	5.8	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	ほぼ完存, 内面はハケ調整の後にヘラ磨き, 口縁部はヨコナデ調整, 外面はタタキの後にヘラナデ
4392	〃	〃 〃	12.0	5.2	-	-	暗灰黄色 〃	〃	約1/2が残存, 内面はヘラナデ, 外面はタタキの後にナデ調整を加える。内面には焦げ目が残存
4393	〃	〃 〃	12.0	5.4	-	1.6	にぶい黄橙色 灰黄色	〃	約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はヘラ削りの後にナデ調整
4394	〃	〃 〃	13.0	(6.2)	-	-	にぶい黄色 〃	〃	底部を除く約1/6が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はナデ調整
4395	〃	〃 〃	13.8	5.8	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	ほぼ完存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はナデ調整
4396	〃	〃 〃	14.1	6.7	-	-	黄灰色 〃	〃	口縁部の一部が欠損, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面はタタキで, 口縁部はナデ調整を加える。
4397	〃	〃 〃	17.7	7.7	-	2.3	灰黄色 灰白色	〃	体部約1/2が残存, 内面はハケ調整の後に部分的にナデ調整, 口唇部から口縁外面はヨコナデ調整
4398	〃	〃 〃	11.4	6.0	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	1/2強が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はナデ調整で, 外底面にタタキ目が僅かに残存
4399	〃	〃 〃	11.6	6.3	-	-	灰黄色 〃	〃	約2/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 下端部に指頭圧痕が残存
4400	〃	〃 〃	12.4	7.0	-	2.2	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の一部と体部と底部の約1/2が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4401	SR-6	弥生土器鉢	13.0	(5.9)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部から体部の約1/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はタタキ
4402	〃	〃	(15.5)	(9.3)	-	1.8	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	体部から底部の約1/4が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面は未調整
4403	〃	〃	-	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	底部が残存, 内面はヘラ磨き, 外面はナデ調整, 外底面は粘土を貼付した際の指頭圧痕が残存
4404	〃	〃	-	(2.8)	-	-	灰黄色 〃	良好	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はタタキで, 被熱で一部が変色
4405	〃	小型丸底鉢	9.8	5.3	-	-	にぶい橙色 灰黄褐色	良	1/2強が残存, 口縁部内面はハケ調整, 口唇部から口縁外面はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨きとナデ調整
4406	〃	鉢	12.1	6.5	-	-	にぶい橙色 橙色	不良	一部が欠損するがほぼ完存, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内外面はヘラ磨き, 外底面は指押え
4407	〃	ミニチュア土器	(7.5)	(10.0)	9.8	1.1	灰黄色 〃	良	口縁部が欠損, 内面は指押えとナデ調整, 外面はタタキの後にナデ調整
4408	〃	石製品 石庖丁	(8.0)	5.3	1.2	53.6	-	-	約1/2が残存, 石材は粘板岩, 刃部と抉り部に研磨痕が残存, 大半が未調整
4409	〃	叩石	16.2	14.9	4.1	1441.3	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 中央部の弱い敲打痕, 縁辺を中心に擦痕
4410	〃	台石	15.4	10.6	3.1	862.1	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 片面中央に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕, 煤が付着
4411	SR-5	木製品 掛矢	(41.3)	8.2	4.4	-	-	-	ほぼ完存, 身と握りは折損, 樹種はコナラ属アカガシ亜属
4412	〃	直柄平鍬	16.9	8.9	2.0	-	-	-	刃部約2/3が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属
4413	SR-6	曲柄又鍬	(18.0)	(6.6)	7.1	-	-	-	刃部・軸部とも大半が欠損, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号7)
4414	〃	〃	(29.9)	(10.3)	1.1	-	-	-	刃部先端が欠損するが, 軸部が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号4)
4415	〃	〃	(40.8)	(6.5)	1.1	-	-	-	刃部の半分と笠が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号19)
4416	〃	〃	62.9	(13.6)	1.5	-	-	-	刃部2本と軸部が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号11)
4417	〃	組合せ鋤	39.3	22.3	1.9	-	-	-	身の大半が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号2)
4418	〃	〃	(34.5)	(8.2)	2.0	-	-	-	身の約1/3が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号9)
4419	〃	一本鋤	(76.8)	9.4	2.2	-	-	-	刃部の約1/2と柄が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号5)
4420	〃	田下駄	56.4	2.9	6.5	-	-	-	ほぼ完存, 樹種はヒノキ(平成18年度樹種同定試料番号10)
4421	SR-5	竪杵	(34.1)	7.8	7.5	-	-	-	一方の搦き部と握部の一部が残存, 樹種はクリ
4422	〃	〃	(35.8)	7.3	5.5	-	-	-	一方の搦き部約2/3が残存, 樹種はツバキ属
4423	SR-6	〃	(40.5)	8.9	7.6	-	-	-	一方の搦き部が残存, 樹種はシャシヤンボ(平成18年度樹種同定試料番号3)
4424	〃	〃	(46.3)	8.1	6.9	-	-	-	一方の搦き部と握部の一部が残存, 樹種はツバキ属(平成18年度樹種同定試料番号13)
4425	〃	横槌	(16.7)	9.6	9.6	-	-	-	身が残存, 樹種はコナラ属アカガシ亜属(平成18年度樹種同定試料番号17)

IV区 遺物観察表 18 (4426～4450)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4426	SR-5	木製品 横槌	30.4	7.9	6.5	-	-	-	部分的に欠損するが、ほぼ完存、樹種はコナラ属アカガシ亜属
4427	SR-6	〃 〃	38.8	10.1	7.3	-	-	-	ほぼ完存、樹種はスダジイ(平成18年度樹種同定試料番号18)
4428	〃	〃 皿	(40.0)	(17.4)	3.2	-	-	-	平らな底と湾曲する側面が残存、樹種はコヤマキ(平成18年度樹種同定試料番号20)
4429	〃	〃 槽	57.8	(15.3)	7.1	-	-	-	約2/3が残存、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号6)
4430	〃	〃 〃	-	7.1	6.3	-	-	-	一部欠損、樹種はヒノキ科(平成18年度樹種同定試料番号22)
4431	〃	〃 〃	24.7	8.9	5.7	-	-	-	大半が欠損、樹種はクスノキ(平成18年度樹種同定試料番号26)
4432	〃	〃 側板	12.1	6.5	1.0	-	-	-	ほぼ完存、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号43)
4433	〃	〃 〃	37.6	6.3	0.6	-	-	-	部分的に欠損、樹種はヒノキ科(平成18年度樹種同定試料番号24)
4434	〃	〃 底板	26.5	16.0	0.9	-	-	-	約1/2が残存、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号28)
4435	〃	〃 〃	31.1	19.4	2.4	-	-	-	ほぼ完存、樹種はムクロジ
4436	〃	〃 鳥形	(50.3)	12.3	1.5	-	-	-	頭部と尾の部分が残存、樹種はスギ(平成17年度樹種同定試料番号1)
4437	〃	〃 舟形	(80.2)	9.0	4.4	-	-	-	両端と側面の一部が欠損、樹種はヒノキ(平成18年度樹種同定試料番号8)
4438	SR-5	〃 威儀具	31.8	7.1	1.8	-	-	-	完存、樹種はスダジイ(平成18年度樹種同定試料番号45)
4439	SR-6	〃 椅子	57.7	(11.5)	1.8	-	-	-	天材とみられ、一部が欠損、樹種はヒノキ科(平成18年度樹種同定試料番号30)
4440	〃	〃 〃	46.6	10.3	1.7	-	-	-	脚の部材で、一部が欠損、樹種はヒノキ(平成18年度樹種同定試料番号31)
4441	〃	〃 〃	48.0	9.4	1.0	-	-	-	脚の部材で、ほぼ完存、樹種はヒノキ科(平成18年度樹種同定試料番号32)
4442	〃	〃 梯子	(69.3)	15.2	6.9	-	-	-	一部が残存、樹種はクリ(平成18年度樹種同定試料番号1)
4443	〃	〃 榎形材	248.5	13.0	9.0	-	-	-	杭に転用、一方の端部が欠損、樹種はクリ(平成19年度樹種同定試料番号1)
4444	〃	〃 方形隅柱	263.5	14.6	10.3	-	-	-	杭に転用、ほぼ完存、樹種はヒノキ科(平成19年度樹種同定試料番号3)
4445	〃	〃 屋根材	41.0	8.3	1.2	-	-	-	先端が欠損、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号42)
4446	〃	〃 壁板	(40.7)	7.9	2.0	-	-	-	両端が欠損、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号25)
4447	〃	〃 〃	49.7	13.4	1.6	-	-	-	多くが折損し一部が残存、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号33)
4448	〃	〃 床か壁板	53.3	18.1	2.1	-	-	-	一部が残存、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号29)
4449	〃	〃 壁板	(69.8)	9.5	1.1	-	-	-	部分的に欠損、樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号35)
4450	〃	〃 〃	(72.1)	8.6	1.0	-	-	-	部分的に欠損、樹種はツブラジイ(平成18年度樹種同定試料番号34)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4451	SR-6	木製品 横架材	(93.0)	5.5	4.5	-	-	-	杭に転用, 一方の端部が欠損, 樹種はヒノキ科(平成18年度樹種同定試料番号15)
4452	〃	〃	94.2	4.6	3.8	-	-	-	杭に転用, ほぼ完存, 樹種はヒノキ科(平成18年度樹種同定試料番号16)
4453	〃	〃	141.0	11.9	5.1	-	-	-	杭に転用, ほぼ完存, 樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号27)
4454	〃	〃	156.2	11.2	4.7	-	-	-	両端が欠損, 樹種はスギ(平成19年度樹種同定試料番号2)
4455	〃	〃	182.8	16.6	16.7	-	-	-	完存, 樹種はクリ(平成19年度樹種同定試料番号4)
4456	〃	〃 敷居板	80.5	11.0	4.8	-	-	-	部分的に欠損, 樹種はサカキ(平成18年度樹種同定試料番号44)
4457	〃	〃 大引	(52.7)	13.4	3.8	-	-	-	大半が欠損, 樹種はスダジイ(平成18年度樹種同定試料番号14)
4458	〃	〃	(248.8)	20.7	4.2	-	-	-	一部が欠損, 樹種はツブラジイ(平成18年度樹種同定試料番号12)
4459	〃	〃 大輪	(42.1)	11.1	1.1	-	-	-	部分的に欠損, 樹種はコウヤマキ(平成18年度樹種同定試料番号23)
4460	〃	〃 建築部材	(58.8)	12.3	1.8	-	-	-	一部が残存, 樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号36)
4461	〃	〃	100.0	6.3	2.9	-	-	-	杭に転用, 一方の端部が欠損, 樹種はヒノキ(平成18年度樹種同定試料番号40)
4462	〃	〃	(25.6)	13.3	2.1	-	-	-	大半が残存, 樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号38)
4463	〃	〃 器具の部材	33.0	(9.2)	1.6	-	-	-	泥除の可能性があるので, 部分的に欠損, 樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号21)
4464	〃	〃	41.9	5.7	4.5	-	-	-	ほぼ完存, 樹種はヒノキ(平成18年度樹種同定試料番号37)
4465	〃	〃	47.6	4.3	2.5	-	-	-	大半が残存, 樹種はスギ(平成18年度樹種同定試料番号39)
4466	SK-2	弥生土器 甕	18.4	29.3	21.5	6.2	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	ほぼ完存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整で, 一部にヘラナデ, 外面はハケ調整
4467	SD-3	〃	17.0	(7.7)	(19.8)	-	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は指押えとナデ調整, 外面は粗いハケ調整
4468	〃	〃	14.7	(12.2)	19.0	-	暗灰黄色 〃	〃	口縁部から上胴部約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 内面は指ナデとナデ調整
4469	〃	石製品 台石	(12.6)	17.4	4.8	1554.6	-	-	約1/2が残存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に弱い敲打痕
4470	SD-4	弥生土器 鉢	9.8	3.7	-	-	灰黄色 〃	やや不良	完存, 器面は指押えとナデ調整
4471	〃	〃	14.2	6.9	-	-	灰黄褐色 〃	〃	約2/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はタタキ, 外底面はナデ調整
4472	〃	〃	19.3	8.0	-	5.8	灰黄色 〃	良	口縁部と体部の大半が欠損, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き
4473	〃	石製品 磨石	15.4	12.1	4.8	1285.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕
4474	〃	〃 叩石	(13.9)	(9.5)	6.5	1500.0	-	-	約1/2が残存, 石材は粗粒砂岩, 敲打痕が両面中央部と側面の3ヵ所に残存
4475	SD-5	弥生土器 甕	14.4	27.6	17.4	5.4	灰黄褐色 〃	良	完存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整, 外底面はナデ調整

IV区 遺物観察表20 (4476～4492)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4476	SD-5	弥生土器壺	-	(18.0)	21.1	5.0	灰白色 〃	良	中胴部以下の大半が残存, 内面は粗いハケ調整の後に底面に指ナデとナデ調整, 外面はタタキ
4477	〃	〃甕	15.6	(15.8)	20.4	-	灰黄褐色 黒色	〃	口縁部から中胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は上半に指ナデとナデ調整, 下半にヘラ削り
4478	〃	〃	19.2	(4.0)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	不良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面は摩耗, 口縁部外面に煤が付着
4479	〃	〃	13.2	(15.1)	17.7	-	にぶい黄橙色 灰黄色	良	口縁部から中胴部の約3/4が残存, 口頸部内面から外面全面にハケ調整, 胴部内面はヘラ削り
4480	〃	〃	-	(13.9)	16.5	4.9	黄灰色 灰黄色	〃	下胴部以下約1/3が残存, 内面はナデ調整で, 一部に爪痕が残存, 外面はタタキ, 下胴部外面に黒斑が残存
4481	〃	〃	-	(9.8)	(18.0)	6.0	灰黄色 暗灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整で焦げ目が付着, 外面は粗いハケ調整
4482	SF-1	〃壺	13.5	32.8	24.6	4.7	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口縁部と中胴部の一部が欠損, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は中胴部を中心にハケ調整, 下胴部はナデ調整
4483	〃	〃	-	(11.0)	(23.1)	4.2	〃 〃	良	約1/2が残存, 内面はハケ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面はナデ調整
4484	SF-2	〃甕	-	(10.7)	(20.8)	5.8	〃 〃	やや不良	下胴部以下が残存, 内面はナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はタタキ, 外底面はナデ調整で, 外面下端に指押え
4485	〃	〃	-	(17.6)	20.7	4.0	にぶい黄橙色 褐灰色	〃	胴部以下約1/5が残存, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 底部外面にタタキ
4486	〃	〃	-	(18.2)	20.0	3.0	灰黄色 〃	〃	胴部以下約1/3が残存, 内面はヘラ削りの後にハケ調整とナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
4487	SF-3	〃壺	13.4	(3.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整
4488	〃	〃甕	13.5	27.3	19.0	3.8	浅黄橙色 灰黄色	〃	ほぼ完存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部外面はハケ調整で, 口唇部から中胴部外面に煤が付着
4489	〃	〃	14.1	27.4	21.1	5.4	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	1/2強が残存, 口頸部はハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
4490	〃	〃	-	(14.6)	14.3	3.4	にぶい黄橙色 〃	不良	中胴部以下の大半が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
4491	〃	〃	-	(15.5)	18.2	3.8	灰黄褐色 灰黄色	良	中胴部以下が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
4492	〃	〃	-	(5.6)	(13.8)	4.8	暗灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面と外底面はタタキで, 被熱で変色

图版



主な撮影機材

1. 現場作業

Mamiya 645 PRO

Mamiya-SEKOR ZOOM 55～110mm F4.5

Mamiya-SEKOR MACRO 80mm F4.5

Mamiya RZ67 PRO II

Mamiya-SEKOR 50mm F4.5

2. 整理作業

NikonD2H (保存処理前遺物), NikonD3 (保存処理前遺物以外)

Ai AF Micro Nikkor 60mm F2.8D

AF-S VR Micro Nikkor ED 105mm F2.8G

AF-S VR Zoom Nikkor ED 24～120mm F3.5～5.6G

AF-S Nikkor ED 70～300mm F1.45～5.6G

TOYO WEIGHT STAND81

COMET CX-124T

COMET CX-25 III H×2 (ウェーハー・バンク付)

3. 画像処理と補正

現場写真はいずれもフィルムでスキャニングを外注し、自前で画像調整・補正して使用している。遺物写真は上記デジタルカメラで撮影したRAWデータをPhotoshopで現像した上で、画像調整・補正して使用している。



調査前全景(北より)



調査前全景(東より)

図版 2



I 区 遺構検出状態 (北より)



I 区 遺構完掘状態 (北より)



I 区 遺構検出状態(南より)



I 区 遺構完掘状態(南より)

図版 4



I区 遺構完掘状態(上空より)



I区 遺構完掘状態(西上空より)



I 区 西壁セクション(東より)



I 区 下層確認トレンチセクション(東より)

図版 6



I 区 SR-1 北バンク (南より)



I 区 SR-1 南バンク (南より)



I 区 SR-1 (東より)



I 区 SR-1 (西より)

図版 8



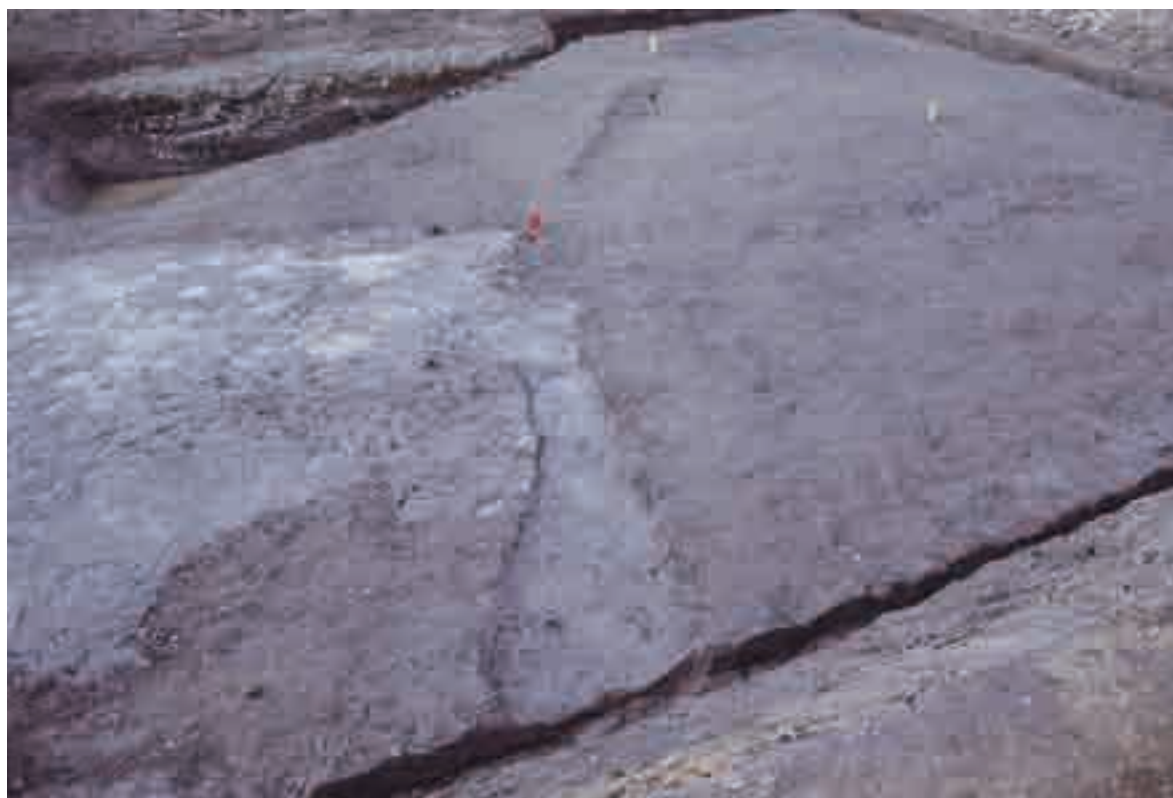
I 区 SD-1 (南東より)



I 区 SD-1 (東より)



I 区 SD-2(南東より)



I 区 SD-2(南東より)

图版 10



I 区 SR-1 弥生土器壺 (1004) 出土状态



I 区 SR-1 弥生土器甕 (1024) 出土状态



Ⅱ区 上面遺構検出状態(北より)



Ⅱ区 上面遺構完掘状態(北より)

図版 12



Ⅱ区 上面遺構検出状態(南より)



Ⅱ区 上面遺構完掘状態(南より)



II区 上面遺構完掘状態(上空より)



II区 上面遺構完掘状態(東上空より)



Ⅱ区 北壁セクション(南より)



Ⅱ区 上面中央バンクセクション(南より)



Ⅱ区 北壁セクション(南より)



Ⅱ区 北壁セクション(南より)



Ⅱ区 SR-3(南より)



Ⅱ区 SR-3護岸跡(東より)



Ⅱ区 下面遺構検出状態(北より)



Ⅱ区 下面遺構完掘状態(北より)

図版 18



Ⅱ区 下面遺構検出状態(南より)



Ⅱ区 下面遺構完掘状態(南より)



Ⅱ区 下面遺構完掘状態(東上空より)



Ⅱ区 下面遺構完掘状態(上空より)



Ⅱ区 下面中央バンクセクション(南より)



Ⅱ区 SR-2(南より)



II区 SR-2 弥生土器壺 (2010) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2019) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2030) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2031·2058) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2032) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2033) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2038) 出土状态



II区 SR-2 弥生土器壺 (2060) 出土状态



Ⅱ区 SR-2 弥生土器壺 (2062) 出土状態



Ⅱ区 SR-2 弥生土器壺 (2102) 出土状態



Ⅱ区 SR-2 弥生土器甕 (2141) 出土状態



Ⅱ区 SR-2 弥生土器甕 (2159) 出土状態



Ⅱ区 SR-2 弥生土器甕 (2184) 出土状態



Ⅱ区 SR-2 弥生土器鉢 (2256) 出土状態



Ⅱ区 SR-3 弥生土器甕 (2283) 出土状態



Ⅱ区 SR-3 ミニチュア土器 (2294) 出土状態



Ⅲ区 遺構検出状態(北より)



Ⅲ区 遺構完掘状態(北より)



Ⅲ区 遺構検出状態(北東より)



Ⅲ区 遺構完掘状態(北東より)



Ⅲ区 遺構検出状態(南より)



Ⅲ区 遺構完掘状態(南より)



Ⅲ区 遺構完掘状態(上空より)



Ⅲ区 遺構完掘状態(北上空より)



Ⅲ区 中央バンクセクション(南より)



Ⅲ区 下層確認トレンチセクション(南より)



Ⅲ区 SR-4(南より)



Ⅲ区 SR-4杭列検出状態(東より)



Ⅲ区 SR-4 弥生土器甕 (3035) 出土状态



Ⅲ区 SR-4 弥生土器甕 (3036) 出土状态



Ⅲ区 SR-4 弥生土器ミニチュア土器 (3061) 出土状態



Ⅲ区 SR-4 石庖丁 (3062) 出土状態



IV区 W 遺構検出状態(北西より)



IV区 W 遺構検出状態(西より)

図版 32



IV区W 遺構完掘状態(西上空より)



IV区W 遺構完掘状態(南上空より)



IV区 W 遺構完掘状態(北上空より)



IV区 W 遺構完掘状態(東上空より)



IV区 SR-6堰状遺構(南東より)



IV区 SR-6堰状遺構(北東より)



IV区W 東壁セクション(西より)



IV区W 中央バンクセクション(南西より)



IV区 SD-5(南西より)



IV区 SD-5 弥生土器甕(4475) 出土状態



IV区 SF-1 (東より)



IV区 SF-1 弥生土器壺 (4482) 出土状態



IV区 SF-3(北西より)



IV区 SF-3弥生土器甕(4490)出土状態



IV区W 遺構検出状態(南より)



IV区W 遺構完掘状態(南より)

図版 40



IV区E 遺構検出状態(南より)



IV区E 遺構完掘状態(南より)



IV区E 遺構完掘状態(西上空より)



IV区E 遺構完掘状態(上空より)



IV区W 中央バンクセクション(南より)



IV区W 下層確認トレンチセクション(南より)



IV区E 下層確認トレンチセクション(南より)



IV区 SD-3(東より)

図版 44



IV区 SR-6 堰状遺構断面 (西より)



IV区 SR-6 木製品出土状態 (南西より)



IV区 SR-6 木製品出土状態 (北より)



IV区 SR-6 木製品出土状態 (東より)



IV区 SD-4 (南より)



IV区 SD-5 (南より)



IV区 SR-5 杭列検出状態 (南西より)



IV区 SR-5 杭列検出状態 (西より)



IV区 第VIII層弥生土器壺(4005) 出土状态



IV区 第IX層弥生土器甕(4008) 出土状态



IV区 第XI層弥生土器鉢(4016) 出土状态



IV区 SR-6炭化米出土状态



IV区 SR-6弥生土器壺(4297) 出土状态



IV区 SR-6弥生土器甕(4342) 出土状态



IV区 SR-6弥生土器鉢(4379) 出土状态



IV区 SR-6弥生土器鉢(4389) 出土状态



IV区 SR-6木製品曲柄鋤(4416)出土状態



IV区 SR-6木製品組合わせ鋤(4417)出土状態



IV区 SR-6木製品一本鋤(4419)出土状態



IV区 SR-6木製品田下駄(4420)出土状態



IV区 SR-6木製品堅杵(4424)出土状態



IV区 SR-6木製品槽(4429)出土状態



IV区 SR-6木製品鳥形(4436)出土状態



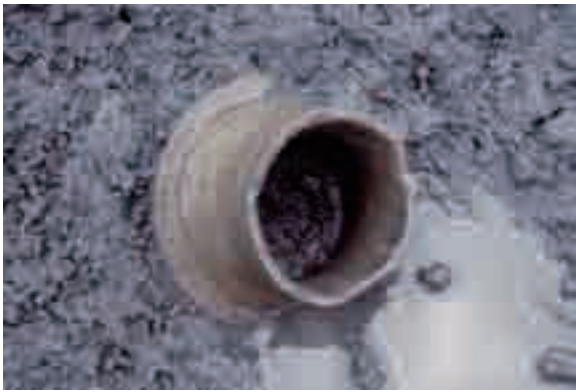
IV区 SR-6木製品梯子(4442)出土状態



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4050) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4052) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4056) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4082) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4089) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4097) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器壺 (4133) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器甕 (4182) 出土状态



IV区 SR-5 弥生土器甕 (4189) 出土状態



IV区 SR-5 弥生土器高杯 (4253) 出土状態



IV区 SR-5 弥生土器蓋 (4270) 出土状態



IV区 SR-5 ミニチュア土器 (4277) 出土状態



IV区 SR-5 ミニチュア土器 (4279) 出土状態



IV区 SR-5 ガラス玉 (4287) 出土状態



IV区 SR-5 木製品横槌 (4426) 出土状態



IV区 SR-5 木製品威儀具 (4438) 出土状態



4438

木製品（威儀具保存処理後）



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)

图版 56



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)

图版 60



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)

图版 62



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)

图版 64



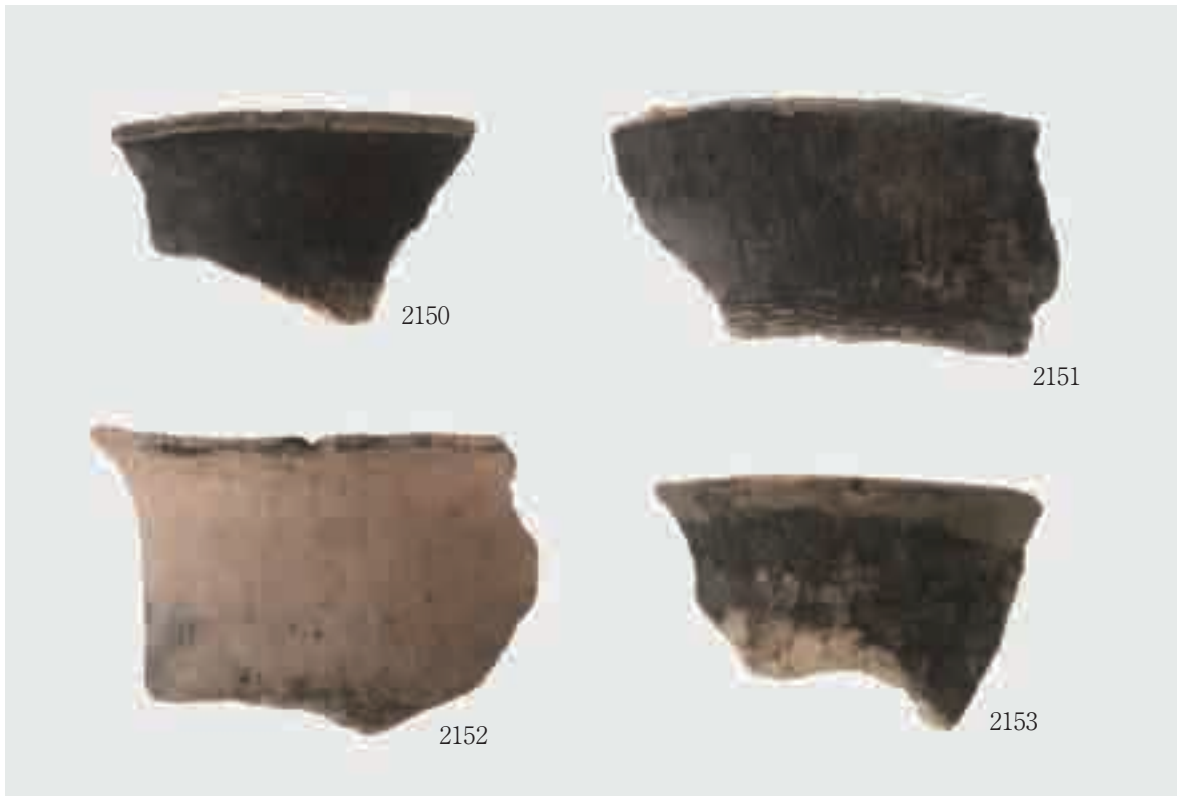
弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



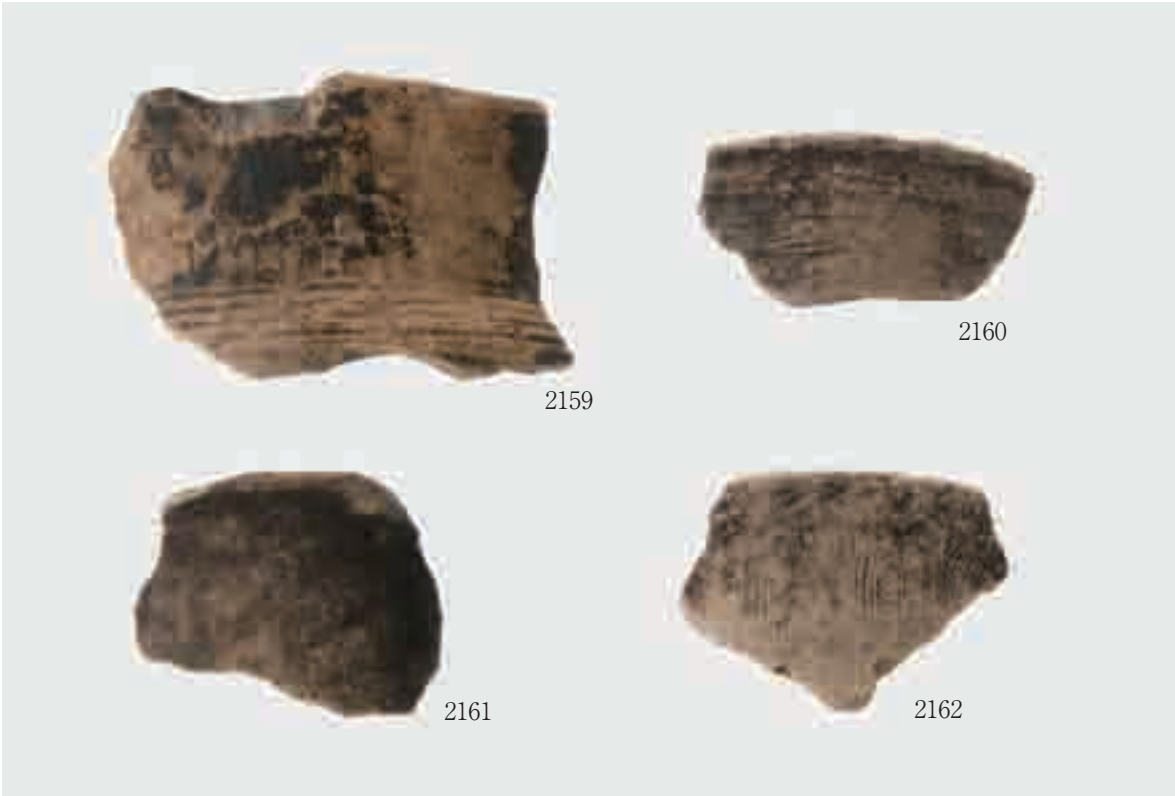
弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(鉢)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)

图版 78



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



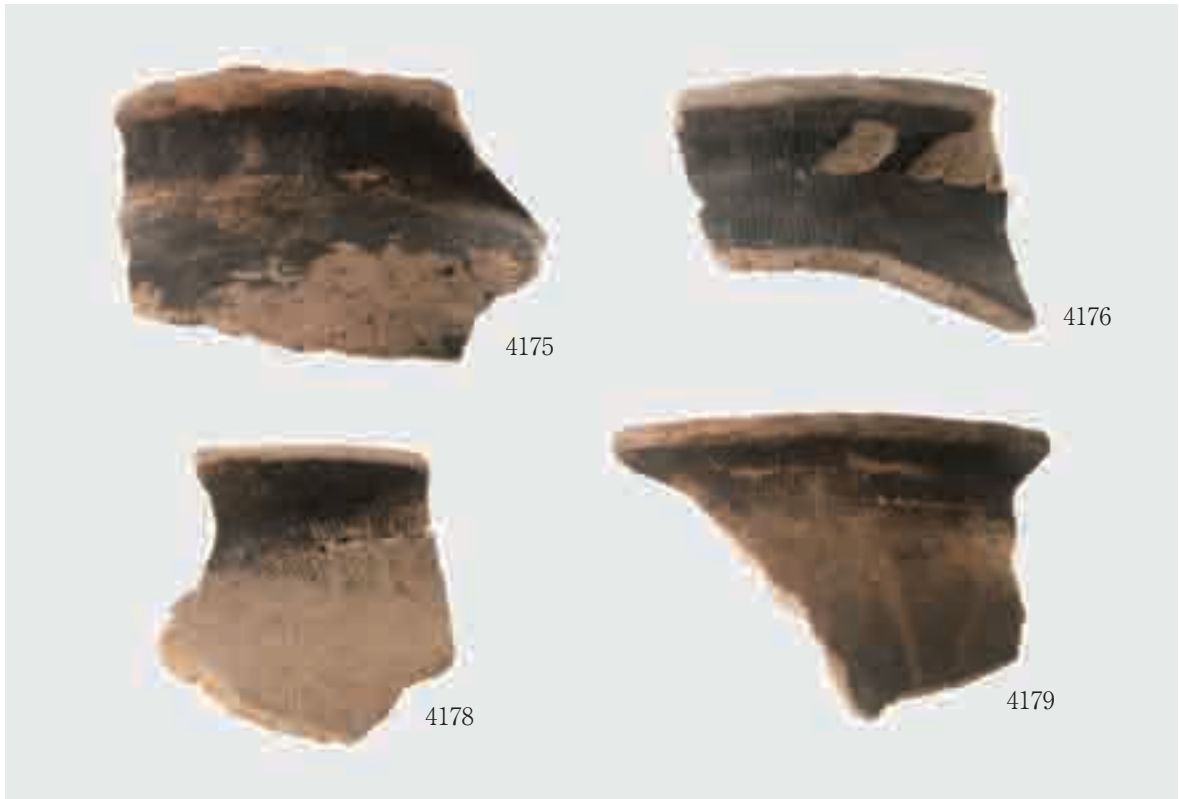
弥生土器(甕)



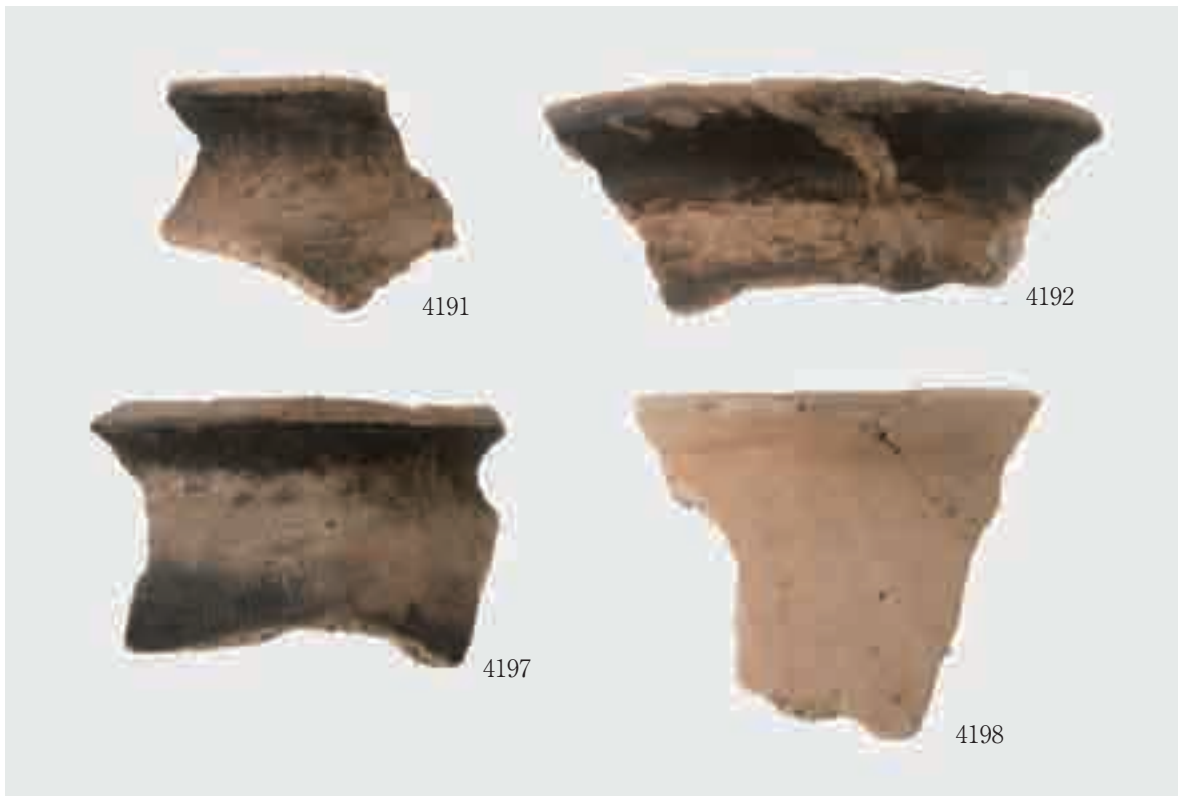
弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)

图版 84



弥生土器(高杯)



弥生土器(鉢)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(鉢)



木製品(器具の部材)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)

図版 90



4420



4436



4447

木製品(田下駄・鳥形・壁板)



4449



4455



4465

木製品(壁板・横架材・器具の部材)



弥生土器(壺・甕), 鉄製品(鉄鏃)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕), 木製品(櫛・組合せ鋤)



弥生土器(甕), 木製品(底板・威儀具保存处理前)



弥生土器(壺・甕)



木製品(掛矢・曲柄又鉞)



木製品 (組合せ鋤・一本鋤・豎杵)



木製品(横槌・槽・舟形・椅子・梯子)



木製品（榭形材・方形隅柱・壁板・横架材）

図版 100



木製品(敷居板・大引・建築部材・器具の部材)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕・甑)



弥生土器(甕・ミニチュア土器), 石製品(台石), 木製品(直柄平鋏)

図版 108



弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器)



弥生土器(壺・ミニチュア土器)

图版 110



弥生土器(壺)



弥生土器(壺・甕)

図版 112



弥生土器(壺・甕・鉢・蓋・ミニチュア土器)



弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器), 歯牙



弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器)



弥生土器(壺・甕・鉢)



弥生土器(壺)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕・高杯・鉢)

図版 120



弥生土器 (鉢・蓋・ミニチュア土器)



弥生土器（ミニチュア土器）

图版 122



弥生土器(壺・甕), 石製品(磨石)



弥生土器(甕・鉢)

图版 124

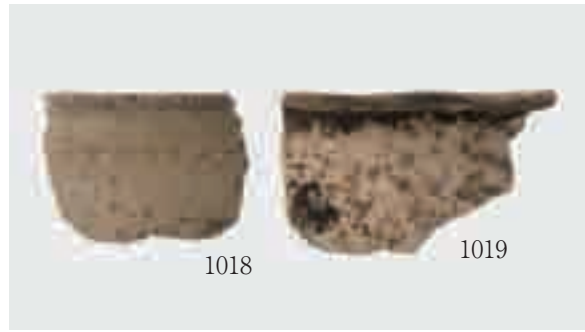


弥生土器(鉢・丸底鉢), 石製品(叩石), 木製品(横槌・皿・槽・側板)



弥生土器(壺・甕), 石製品(台石・磨石・叩石)

図版 126



弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器), 土製品(紡錘車), 古銭(寛永通宝)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕・鉢・高杯)



弥生土器(壺・甕・蓋・ミニチュア土器)

図版 130



弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器), 土師質土器(椀)



弥生土器(壺・甕・高杯・ミニチュア土器), 石製品(石庖丁)

图版 132



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕)

図版 134



弥生土器(壺・甕・鉢・ミニチュア土器), ガラス玉



弥生土器(甕・鉢)

图版 136



弥生土器(鉢)



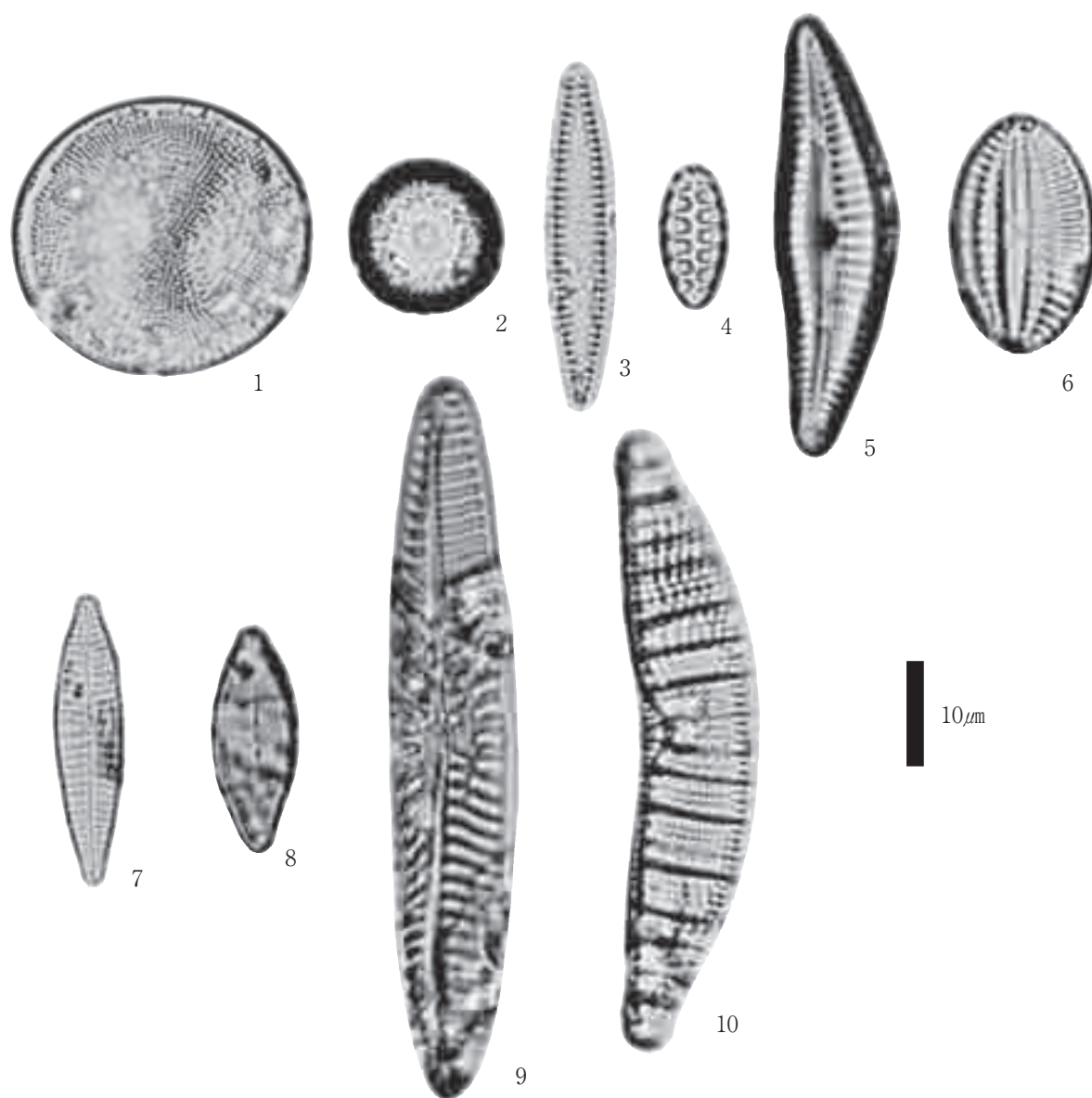
弥生土器(鉢), 石製品(石庖丁), 木製品(側板)

図版 138



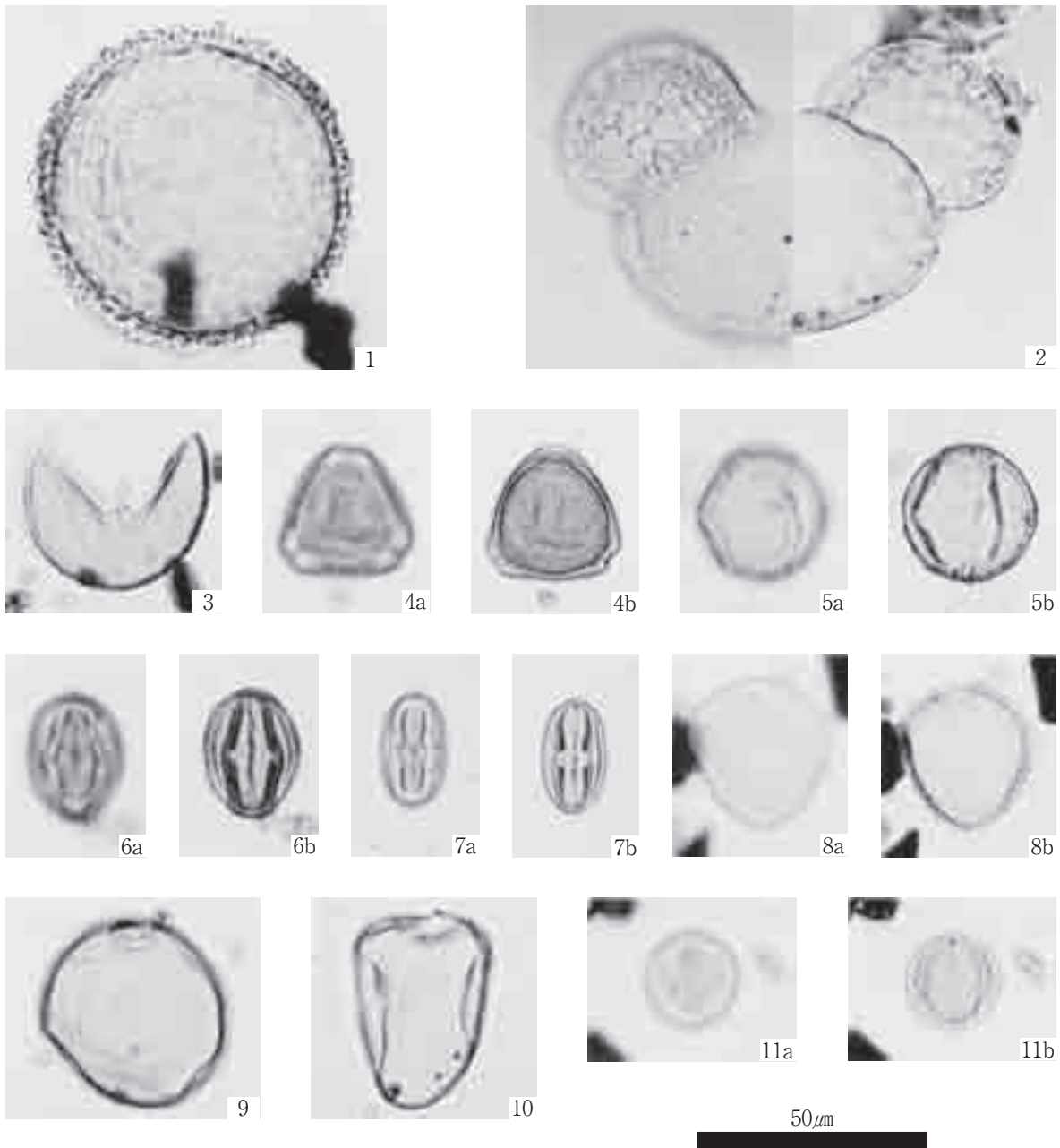
弥生土器(壺・甕・鉢), 木製品(椅子・屋根材・壁板・床か壁板・大輪・建築部材)

自然科学分析



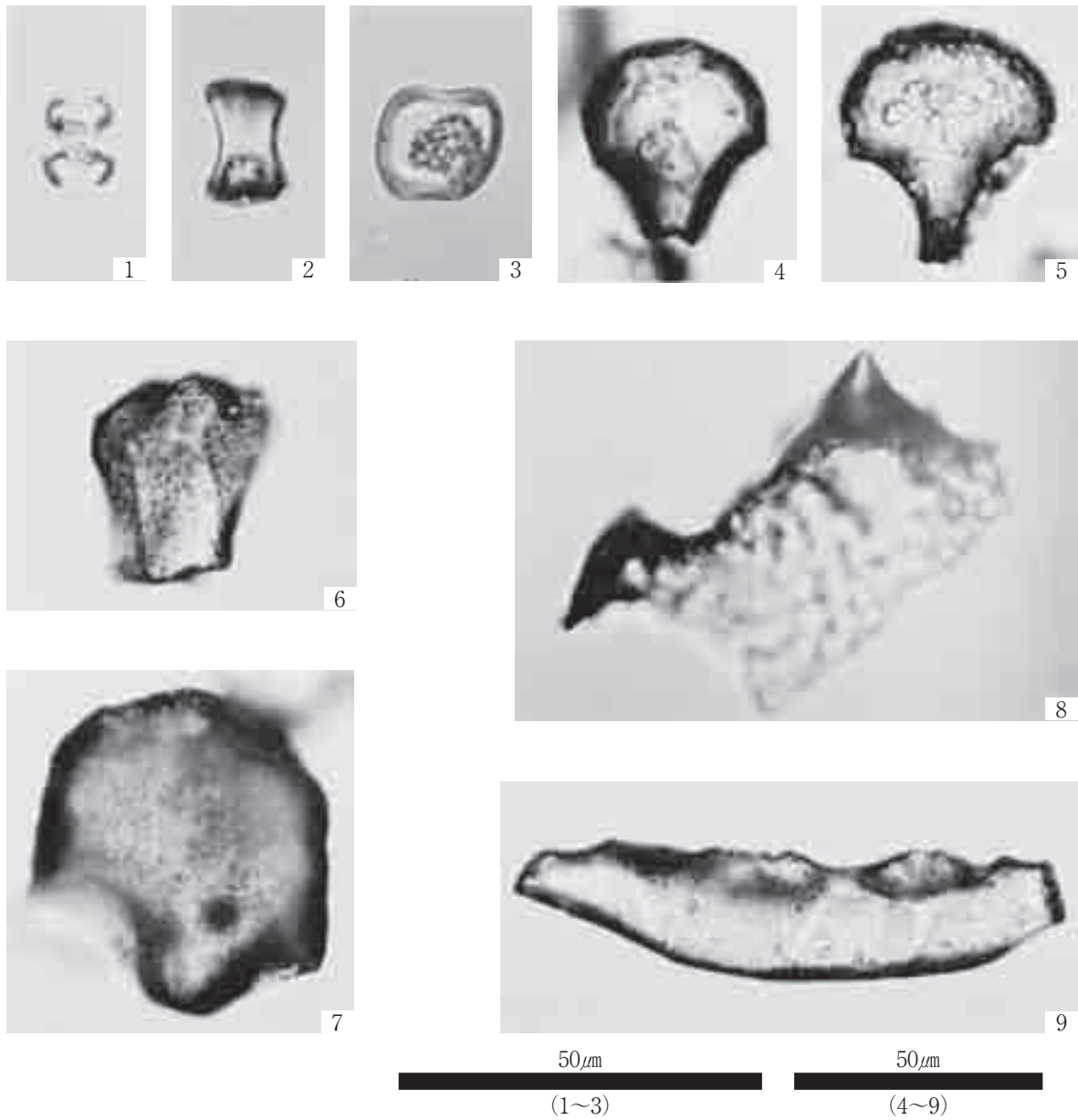
1. *Thalassiosira lacustris* (Grun.) Hasle (Ⅱ区 2地点; 3)
2. *Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato (Ⅱ区 2地点; 6)
3. *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.) Williams & Round (Ⅱ区 2地点; 6)
4. *Opephora martyi* Heribaud (Ⅱ区 2地点; 6)
5. *Cymbella leptoceros* (Ehren.) Kuetzing (Ⅱ区 2地点; 8)
6. *Diploneis suborbicularis* (Greg.) Cleve (Ⅱ区 2地点; 8)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (Ⅱ区 2地点; 3)
8. *Diadsmis confervacea* Kuetzing (Ⅱ区 2地点; 3)
9. *Navicula formentterae* Cleve (Ⅱ区 2地点; 8)
10. *Epithemia adnata* (Kuetz.) Brebisson (Ⅱ区 2地点; 8)

図版 140



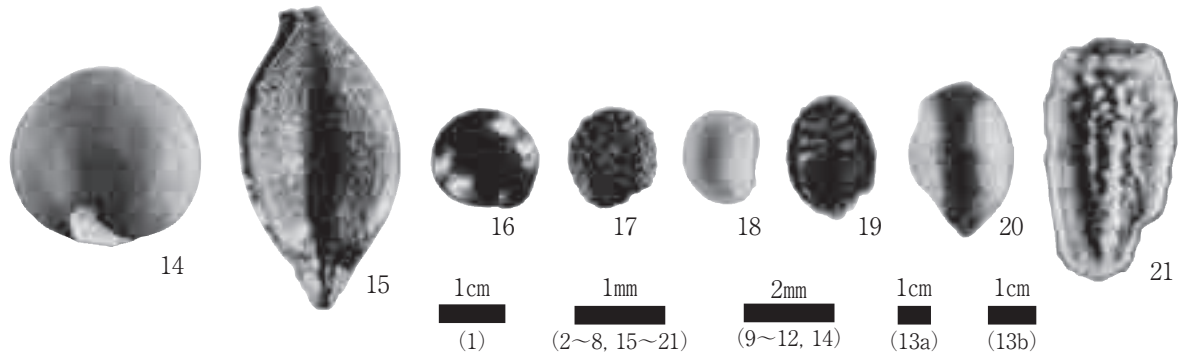
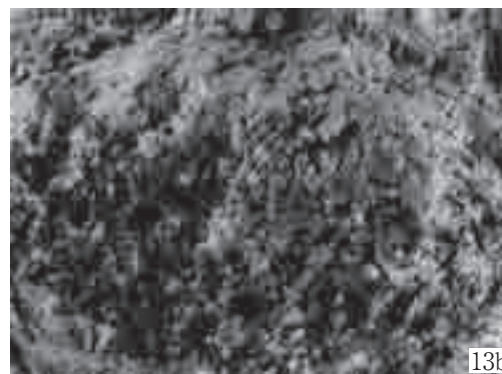
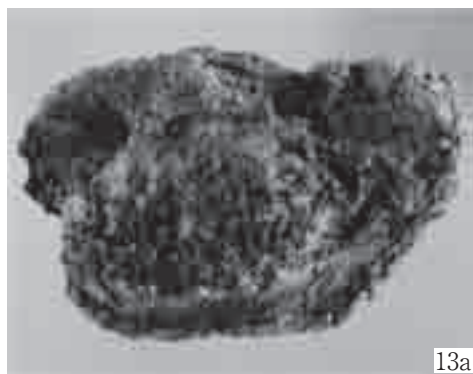
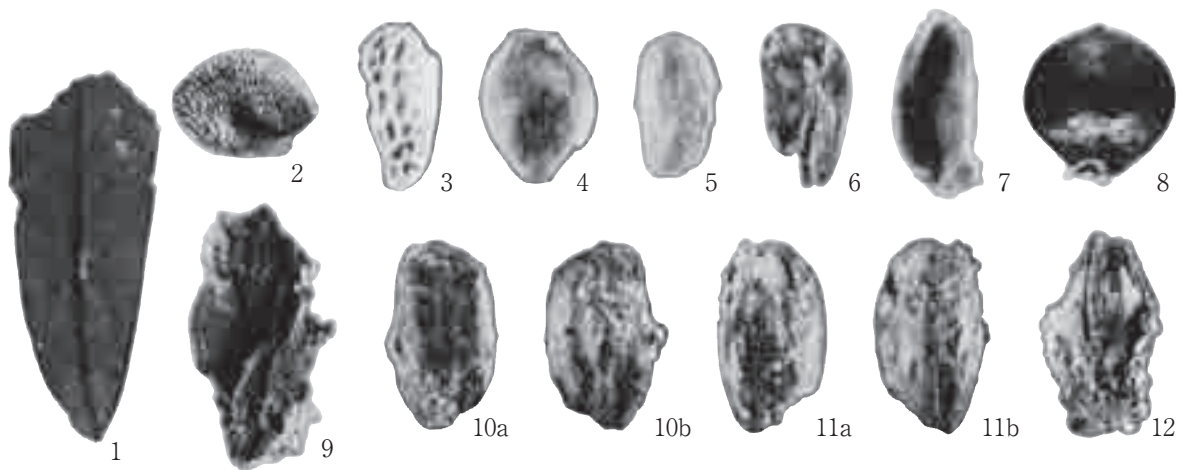
- 1. ツガ属 (Ⅱ区 2地点; 1)
- 2. マツ属 (Ⅱ区 2地点; 3)
- 3. スギ属 (Ⅱ区 2地点; 3)
- 4. ヤマモモ属 (Ⅱ区 2地点; 1)
- 5. コナラ属コナラ亜属 (Ⅱ区 2地点; 1)
- 6. コナラ属アカガシ亜属 (Ⅱ区 2地点; 1)

- 7. シイノキ属 (Ⅱ区 2地点; 3)
- 8. ガマ属 (Ⅱ区 2地点; 3)
- 9. イネ科 (Ⅱ区 2地点; 1)
- 10. カヤツリグサ科 (Ⅱ区 2地点; 3)
- 11. ヨモギ属 (Ⅱ区 2地点; 3)



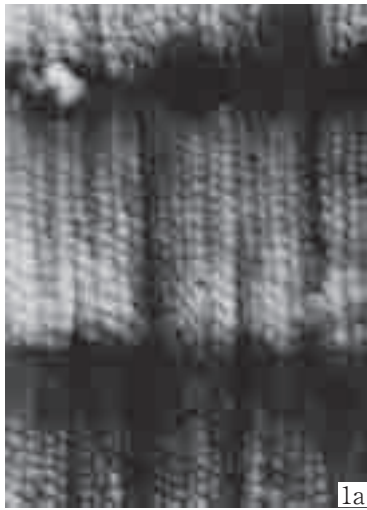
- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) | 6. ネザサ節機動細胞珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) |
| 2. ネザサ節短細胞珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) | 7. ヨシ属機動細胞珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) | 8. イネ属穎珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) |
| 4. イネ属機動細胞珪酸体 (Ⅱ区 2地点; 3) | 9. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ (Ⅱ区 2地点; 7) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体 (Ⅱ区 3地点; 2) | |

図版 142



1. イチイガシ近似種 葉 (Ⅱ区 SR-3)
2. ヒサカキ属 種子 (Ⅱ区 SR-3)
3. キイチゴ属 核 (Ⅱ区 SR-3)
4. イイギリ 種子 (Ⅱ区 SR-3)
5. タラノキ 核 (Ⅱ区 SR-3)
6. オモダカ科 種子 (Ⅱ区 SR-3)
7. イネ科 果実 (Ⅱ区 SR-3)
8. ホタルイ属 果実 (Ⅱ区 SR-3)
9. イネ 穎 (Ⅳ区:北半部 VI層)
10. イネ 胚乳 (Ⅳ区:北半部 VI層)
11. イネ 胚乳 (Ⅳ区:北半部 VI層)

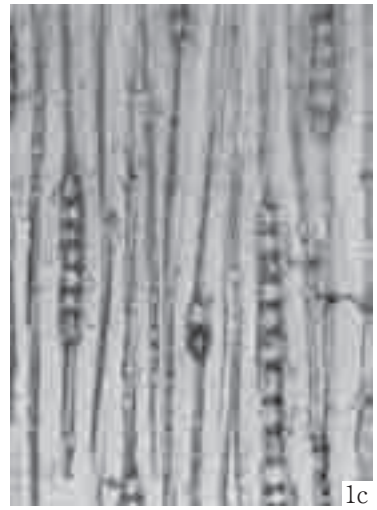
12. イネ 胚乳 (Ⅳ区:北半部 VI層)
13. イネ 胚乳 (Ⅳ区:北半部 VI層)
14. カナムグラ 種子 (Ⅱ区 SR-3)
15. タデ属 果実 (Ⅱ区 SR-3)
16. アカザ科 種子 (Ⅱ区 SR-3)
17. ナデシコ科 種子 (Ⅱ区 SR-3)
18. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核 (Ⅱ区 SR-3)
19. カタバミ属 種子 (Ⅱ区 SR-3)
20. エノキグサ 種子 (Ⅱ区 SR-3)
21. タカサプロウ 果実 (Ⅱ区 SR-3)



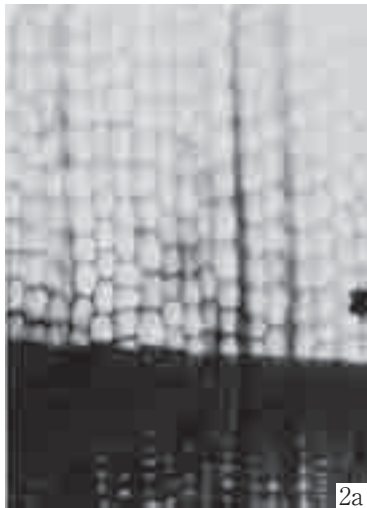
1a



1b



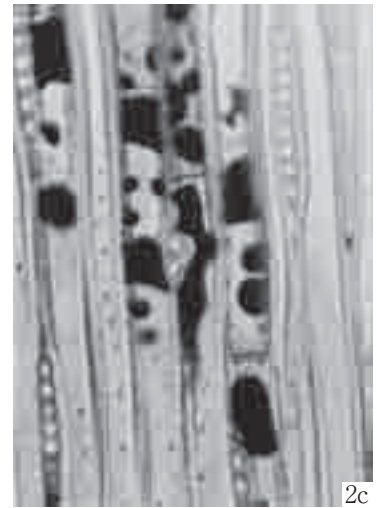
1c



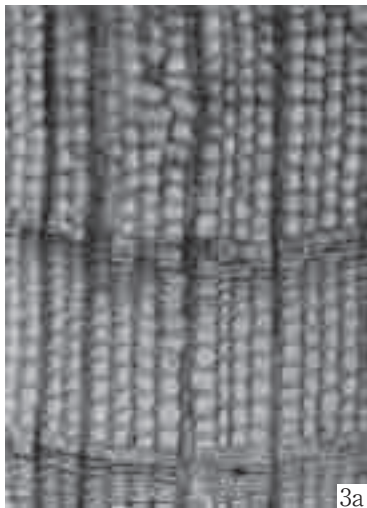
2a



2b



2c



3a



3b



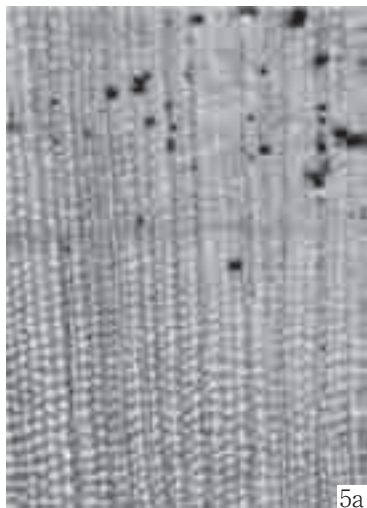
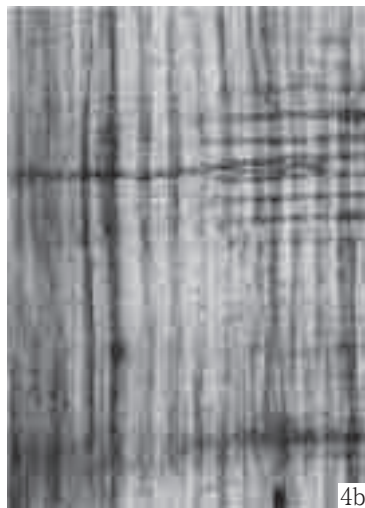
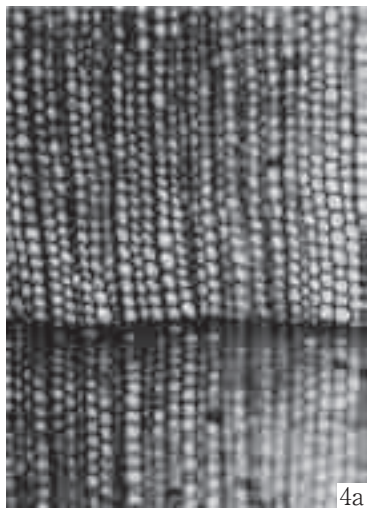
3c

1. モミ属 (IV区 IV層; 炭化材)
 2. スギ (II区 SR-3; No2)
 3. ヒノキ (IV区 SR-6)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
100 μ m : b, c

木材 1 (平成 17 年度実施分)

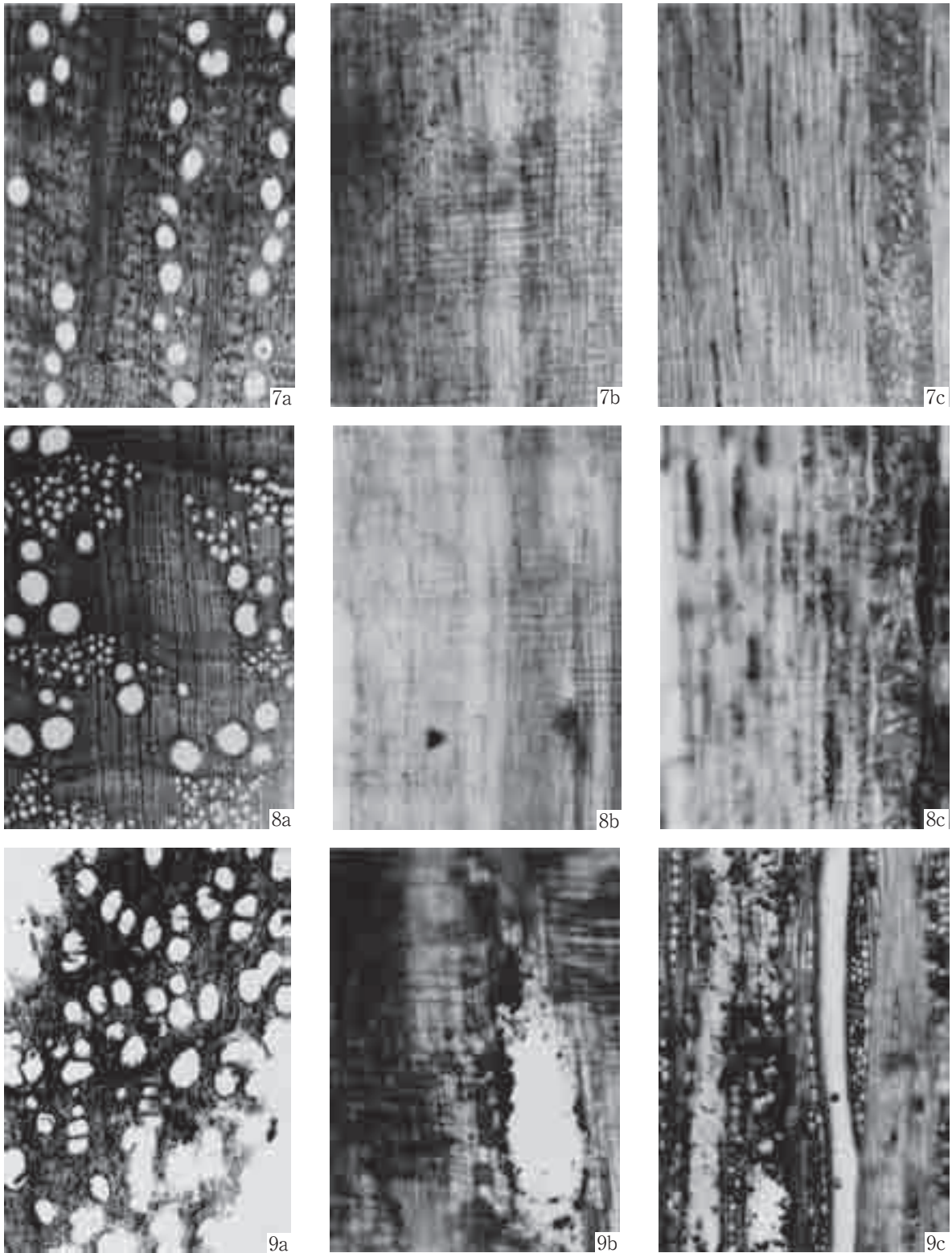
図版 144



- 4. マキ属 (I区 SR-1; No2)
- 5. イヌガヤ (II区 SR-3; No1)
- 6. カヤ (IV区 SR-6; 材1)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
100 μ m : b, c

木材2 (平成17年度実施分)



7. コナラ属アカガシ亜属 (Ⅱ区 SR-2; No1)
 8. ツブラジイ (Ⅱ区 SR-2; No2)
 9. ムクノキ〈根材〉(14C用木材 Ⅳ区 SR-6)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

■ 200 μ m : a
 ■ 200 μ m : b, c

木材3 (平成17年度実施分)

図版 146



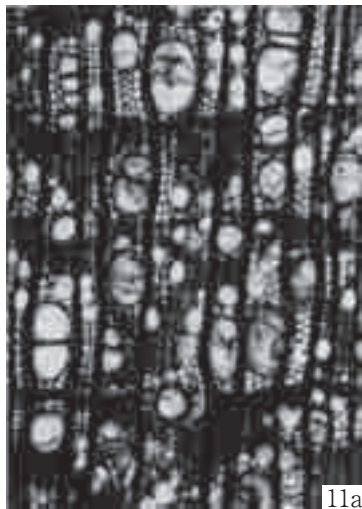
10a



10b



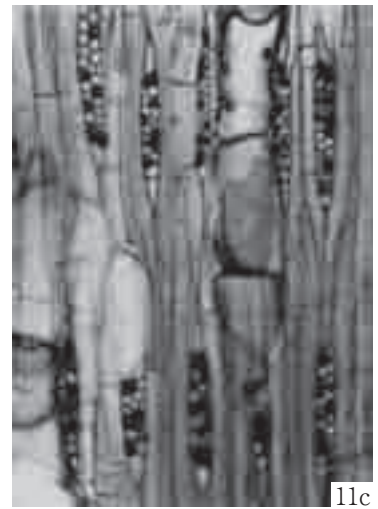
10c



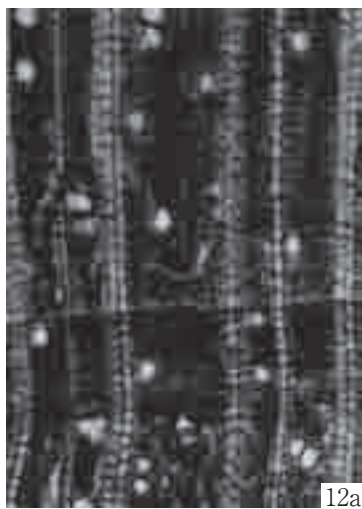
11a



11b



11c



12a



12b

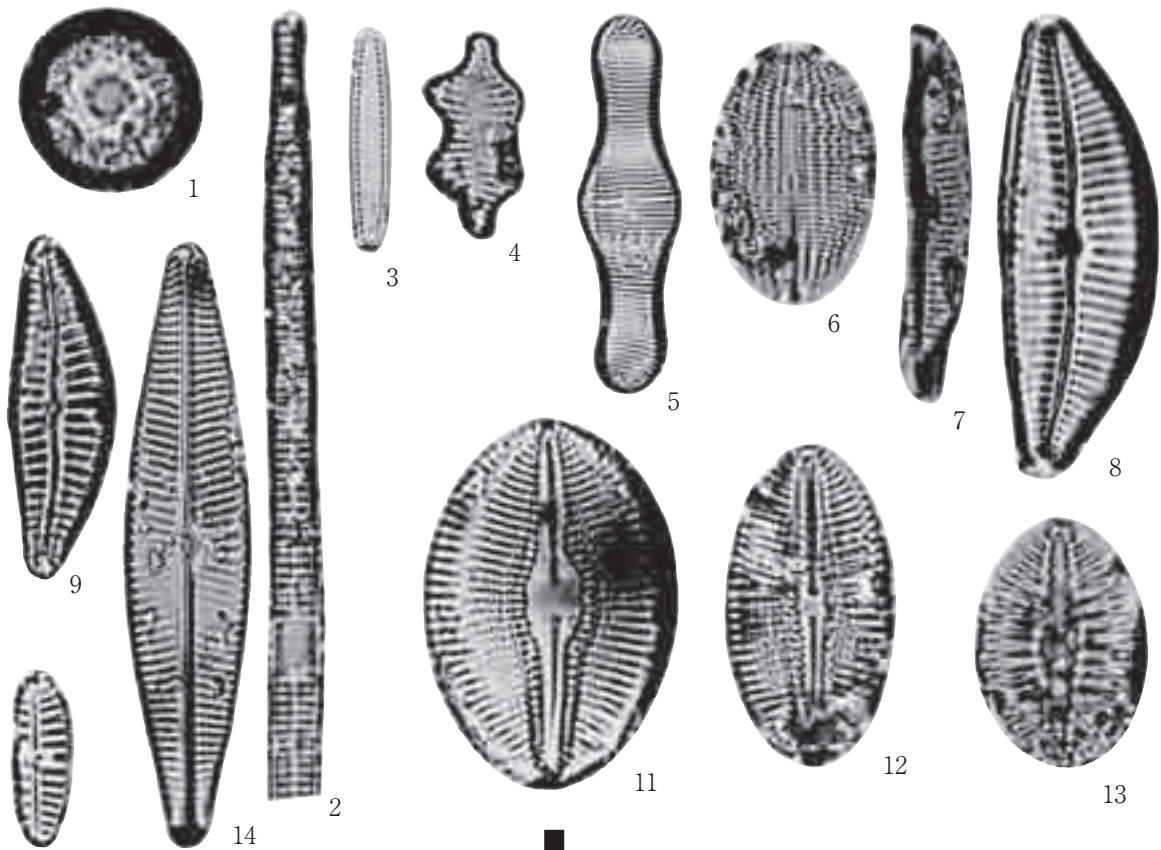


12c

10. ヤマグチ (IV区 SR-6: 材2)
 11. クスノキ (IV区 SR-6: 取上番号183)
 12. アワブキ属 (II区 SR-2: 試料No.9)
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

■ 200 μ m : a
 ■ 100 μ m : b, c

木材4 (平成17年度実施分)

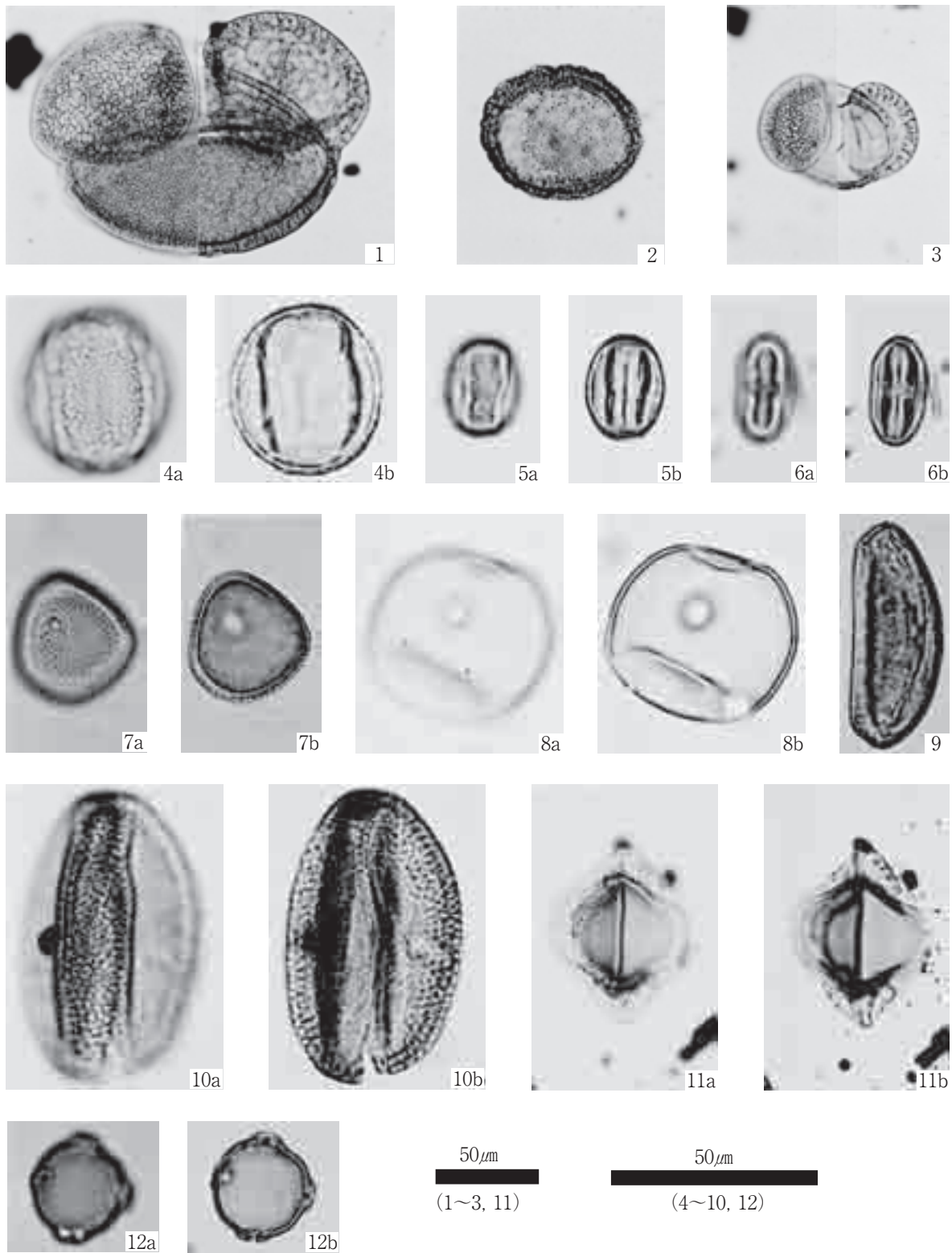


10μm (1, 3, 4, 6~13, 15, 16) 10μm (2, 5, 14)



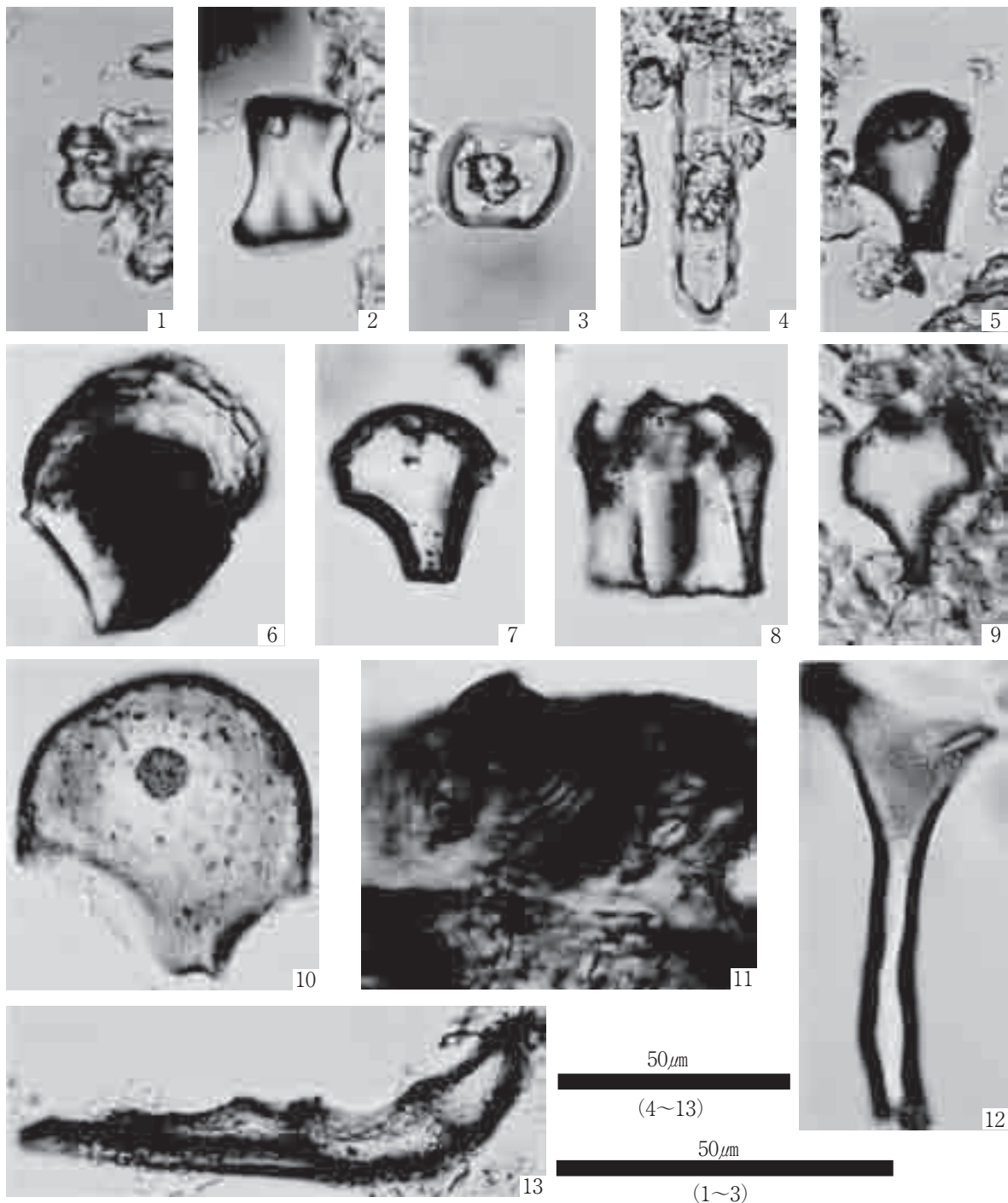
1. *Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato (IV区1地点; 6)
2. *Synedra ulna* (Kuetz.) Ehrenberg (IV区1地点; 6)
3. *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.) Williams & Round (IV区1地点; 8)
4. *Staurosira construens fo.binodis* (Ehren.) P.G.Ham. (IV区1地点; 9)
5. *Achnanthes inflata* (Kuetz.) Grunow (IV区1地点; 6)
6. *Cocconeis euglypta* Ehrenberg (IV区1地点; 6)
7. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-Bertalot (IV区1地点; 6)
8. *Cymbella turgidula* Grunow (IV区1地点; 6)
9. *Cymbella leptoceros* (Ehren.) Kuetzing (IV区1地点; 11)
10. *Diploneis smithii* (Breb.) Cleve (IV区1地点; 7)
11. *Diploneis parma* Cleve (IV区1地点; 6)
12. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (IV区1地点; 7)
13. *Diploneis pseudovalis* Hustedt (IV区1地点; 6)
14. *Navicula peregrina* (Ehren.) Kuetzing (IV区1地点; 8)
15. *Reimeria sinuata* (W.Greg.) Kociolek et Stoermer (IV区1地点; 8)
16. *Epithemia adnata* (Kuetz.) Brebisson (IV区1地点; 9)

図版 148



- | | | |
|-------------------------|----------------------|----------------------|
| 1. モミ属 (IV区1地点:8) | 5. アカガシ亜属 (IV区1地点:2) | 9. ミズアオイ属 (IV区1地点:2) |
| 2. ツガ属 (IV区1地点:2) | 6. シイノキ属 (IV区1地点:6) | 10. ソバ属 (IV区1地点:2) |
| 3. マツ属複維管束亜属 (IV区1地点:2) | 7. ガマ属 (IV区1地点:8) | 11. ヒシ属 (IV区1地点:8) |
| 4. コナラ亜属 (IV区1地点:9) | 8. イネ科 (IV区1地点:2) | 12. フサモ属 (IV区1地点:8) |

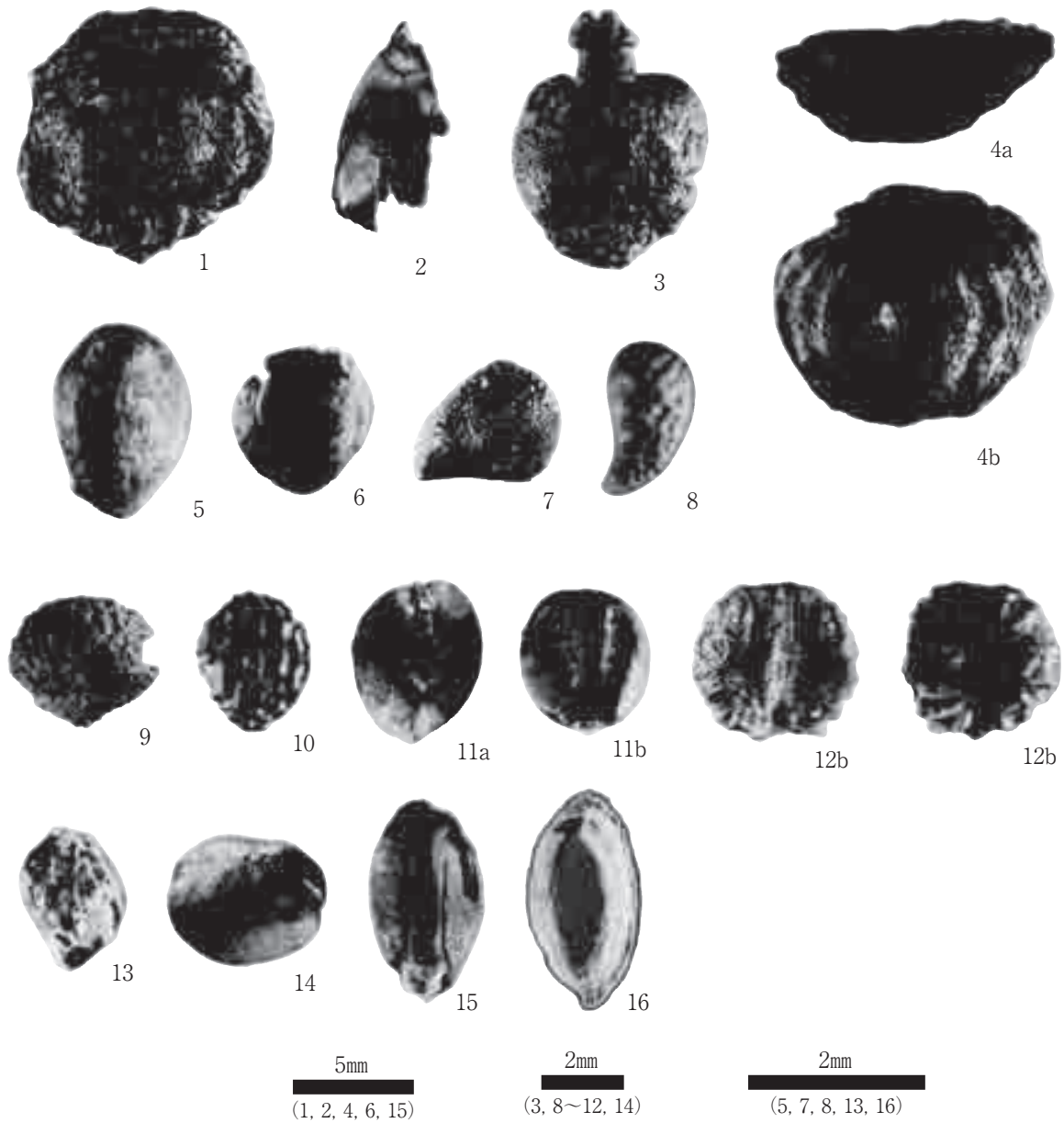
花粉化石 (平成18年度実施分)



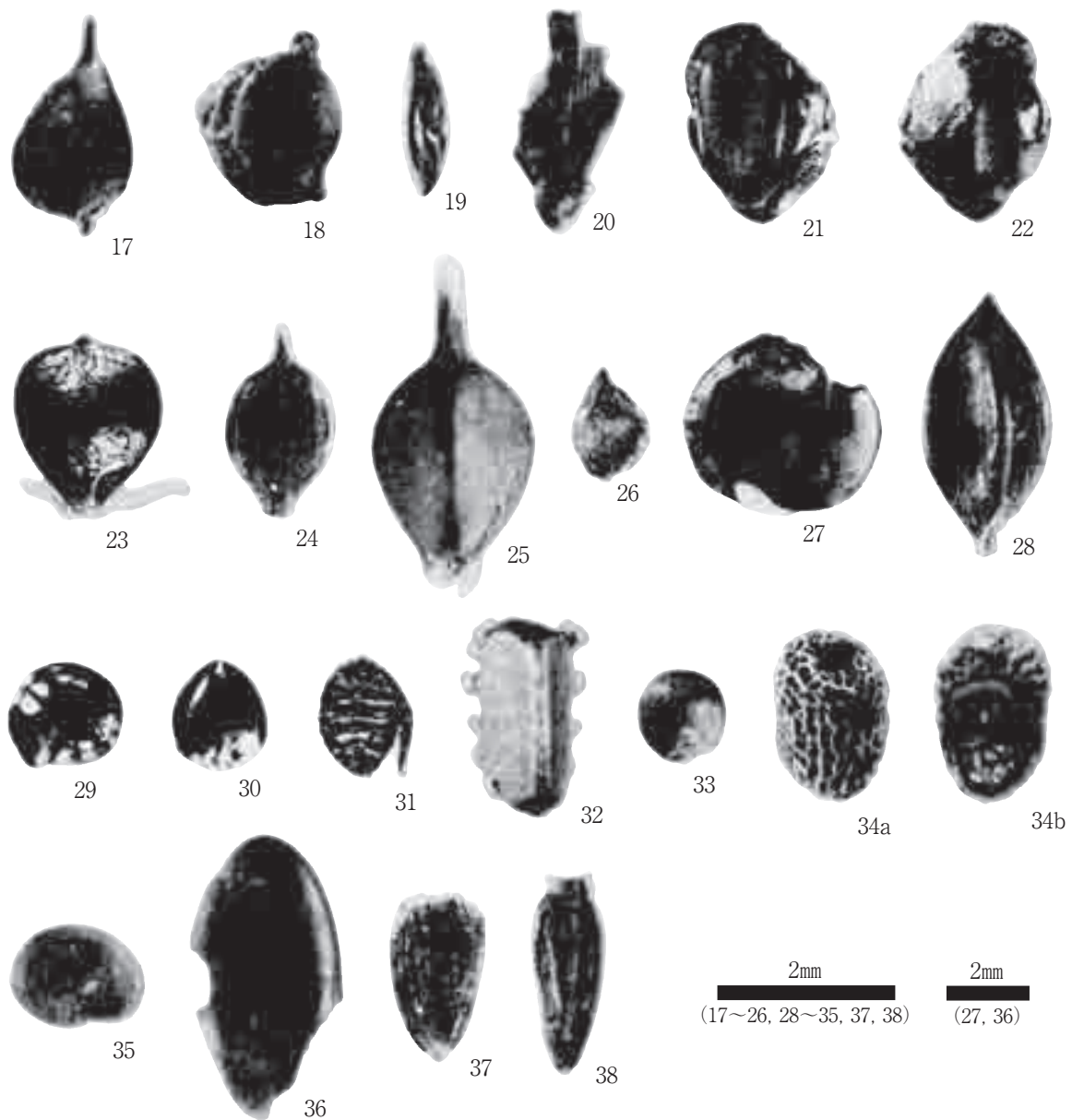
- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (IV区1地点; 2) | 8. ネザサ節機動細胞珪酸体 (IV区1地点; 8) |
| 2. ネザサ節短細胞珪酸体 (IV区1地点; 8) | 9. シバ属機動細胞珪酸体 (IV区1地点; 1) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (IV区1地点; 5) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (IV区1地点; 5) |
| 4. オオムギ属短細胞珪酸体 (IV区1地点; 1) | 11. イネ属穎珪酸体 (IV区1地点; 8) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体 (IV区1地点; 2) | 12. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ (IV区1地点; 6) |
| 6. イネ属機動細胞珪酸体 (IV区1地点; 6) | 13. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ (IV区1地点; 3) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (IV区1地点; 8) | |

植物珪酸体 (平成 18 年度実施分)

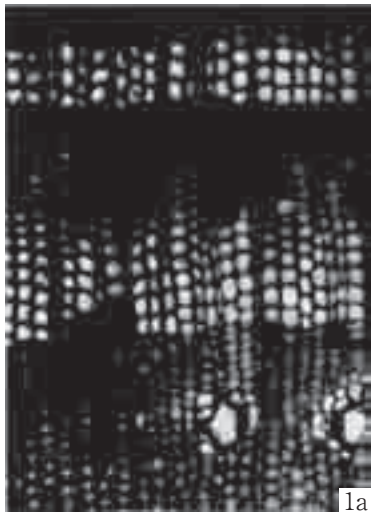
図版 150



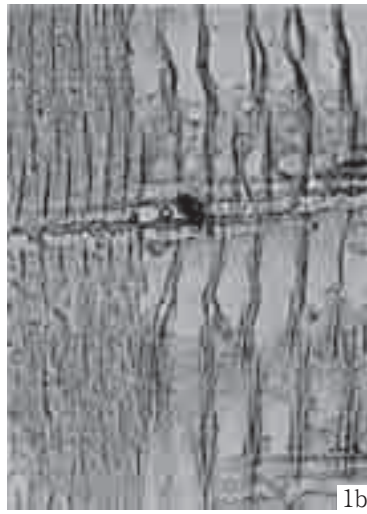
- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1. ヒノキ 球果 (IV区 SD-3) | 9. アカメガシワ 種子 (IV区 SD-3) |
| 2. コナラ属アカガシ亜属 果実 (IV区 SD-3) | 10. イヌザンショウ属 核 (IV区 SR-5) |
| 3. コナラ属アカガシ亜属 幼果 (IV区 SD-3) | 11. ブドウ属 種子 (IV区 SD-3) |
| 4. コナラ属アカガシ亜属 殻斗 (IV区 SD-3) | 12. ウドカズラ 種子 (IV区 SD-3) |
| 5. クワ属 種子 (IV区 SD-3) | 13. イイギリ 種子 (IV区 SR-5) |
| 6. クスノキ科 種子 (IV区 SD-3) | 14. クマノミズキ 核 (IV区 SD-3) |
| 7. ヒサカキ属 種子 (IV区 SD-3) | 15. エゴノキ属 種子 (IV区 SD-3) |
| 8. キイチゴ属 核 (IV区 SR-5) | 16. ムラサキシキブ属 核 (IV区 SD-3) |



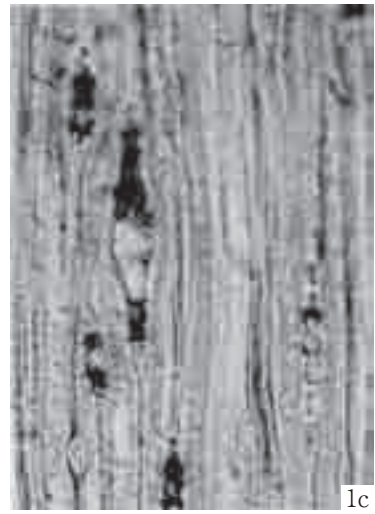
- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 17. カワツルモ 果実 (IV区 SR-5) | 28. タデ属 果実 (IV区 SD-3) |
| 18. ヒルムシロ属 果実 (IV区 SR-5) | 29. アカザ科 種子 (IV区 SD-3) |
| 19. イバラモ属 種子 (IV区 SR-5) | 30. ヒユ科 種子 (IV区 SD-3) |
| 20. イネ 穎 (IV区 SD-3) | 31. カタバミ属 種子 (IV区 SD-3) |
| 21. エノコログサ属 果実 (IV区 SD-3) | 32. フサモ属 果実 (IV区 SD-3) |
| 22. アワ近似種 果実 (IV区 SD-3) | 33. イヌコウジュ属 果実 (IV区 SD-3) |
| 23. ホタルイ属 果実 (IV区 SD-3) | 34. キランソウ属 果実 (IV区 SD-3) |
| 24. カヤツリグサ科 果実 (IV区 SD-3) | 35. ナス科 種子 (IV区 SD-3) |
| 25. カヤツリグサ科 果実 (IV区 SD-3) | 36. メロン類 種子 (IV区 SD-3) |
| 26. イラクサ科 果実 (IV区 SR-5) | 37. メナモミ属 果実 (IV区 SD-3) |
| 27. カナムグラ 種子 (IV区 SD-3) | 38. キク科 果実 (IV区 SR-5) |



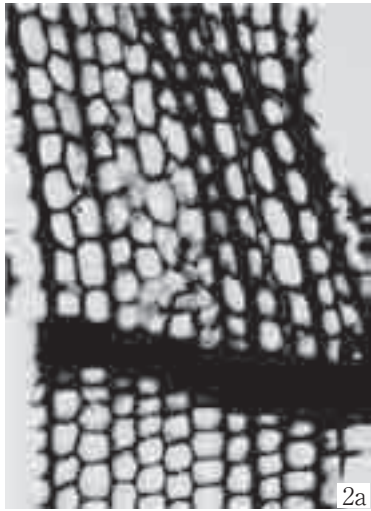
1a



1b



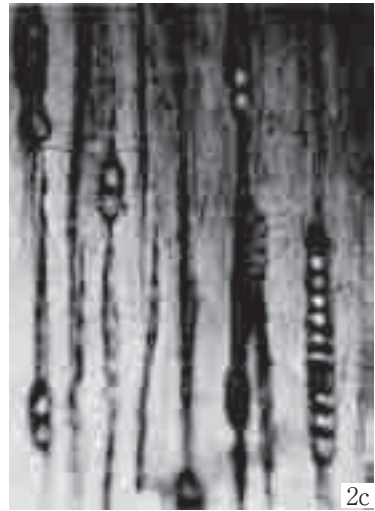
1c



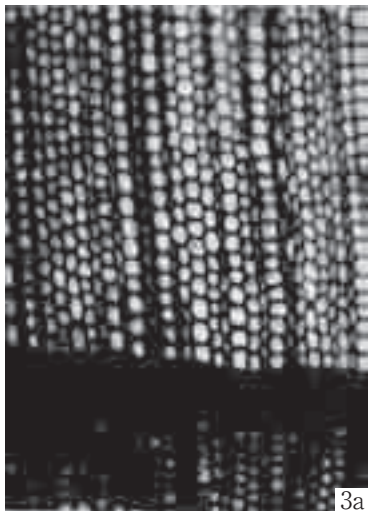
2a



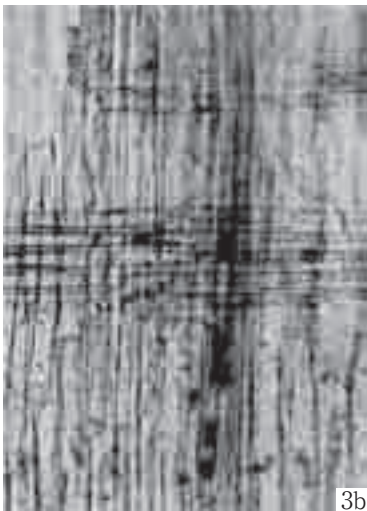
2b



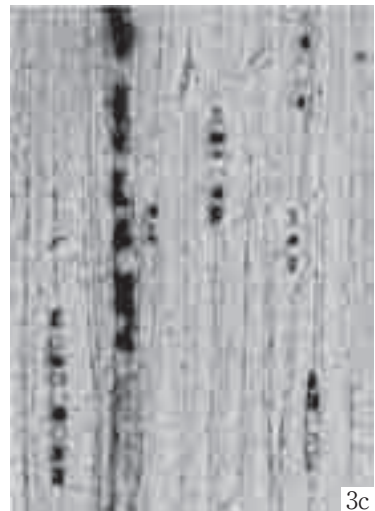
2c



3a



3b



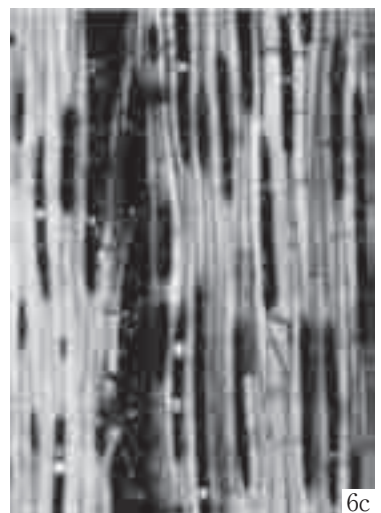
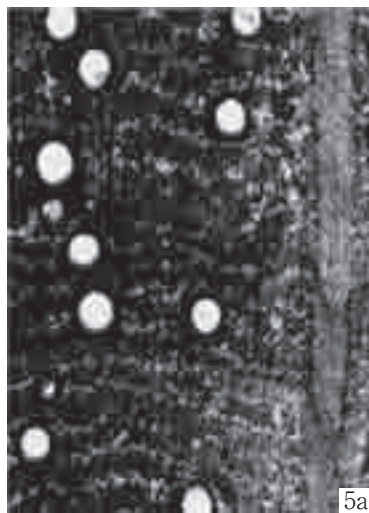
3c

1. マツ属複維管束亜属 (IV区 SR-5; 杭列4)
 2. スギ (IV区 IV層; No10)
 3. アスナロ (IV区 SR-5; 杭列2)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a

100 μ m : b, c

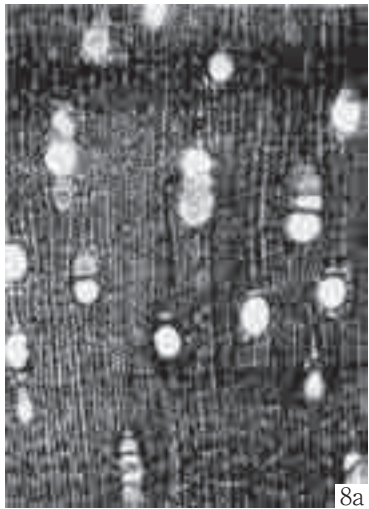
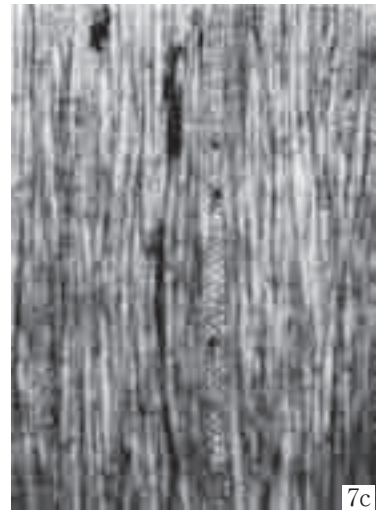
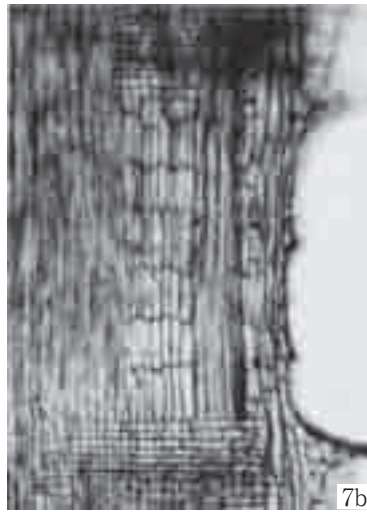
木材1 (平成18年度実施分)



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (IV区 SR-5:No1)
 5. コナラ属アカガシ亜属 (IV区 SR-5:No4)
 6. ツブラジイ (IV区 SR-5:No2)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目
 木材 2 (平成 18 年度実施分)

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版 154



7. ムクロジ (IV区 SR-6; 図版番号4435)

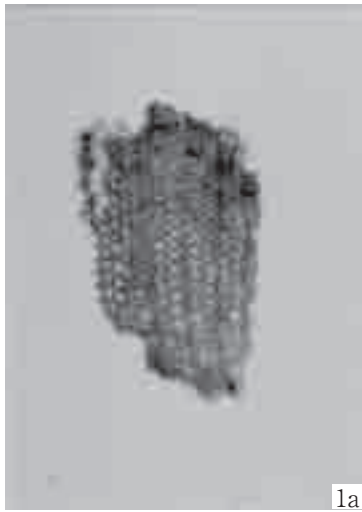
8. カキノキ属 (IV区 SR-5; No3)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μ m : a

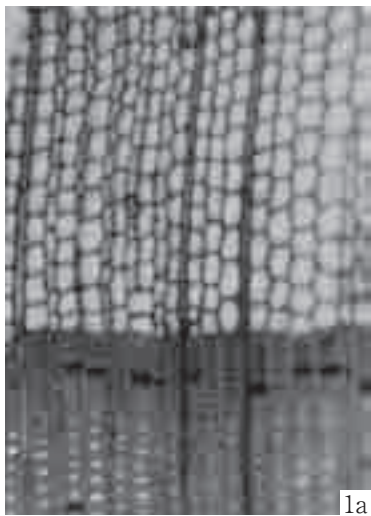
200 μ m : b, c

保存処理木製品の樹種



1. スギ (図版番号4436)
a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μ m : a
100 μ m : b, c



1a



1b

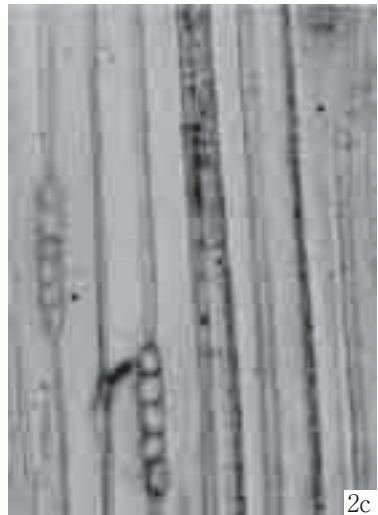


1c

プレパラート作成不能



2b



2c



3a



3b



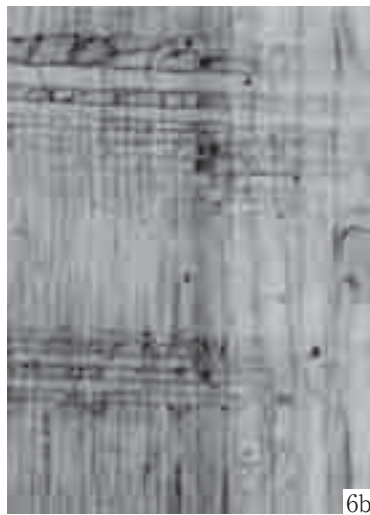
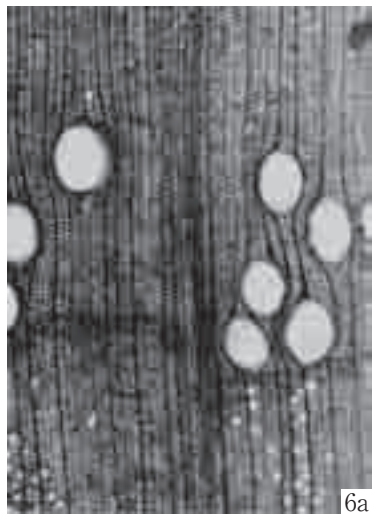
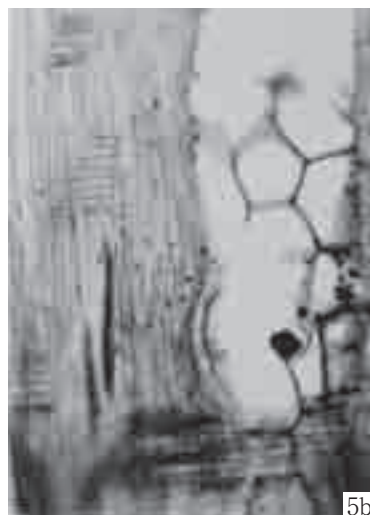
3c

- 1. スギ (図版番号4429)
 - 2. コウヤマキ (図版番号4428)
 - 3. ヒノキ (図版番号4420)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

木製品の木材2 (平成18保存処理実施分)

200 μ m : a

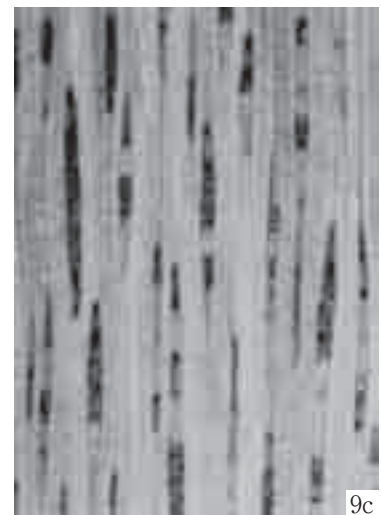
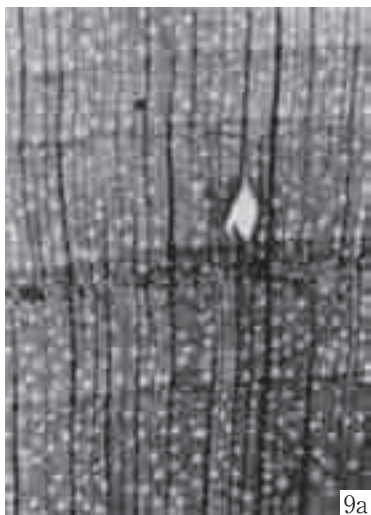
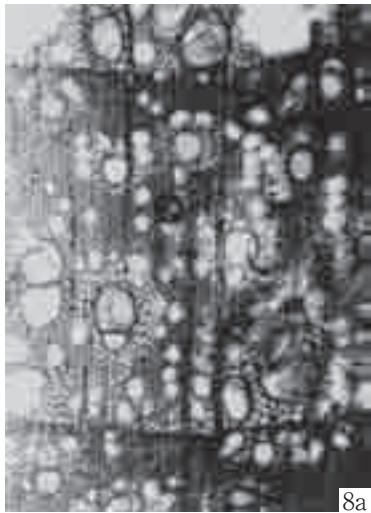
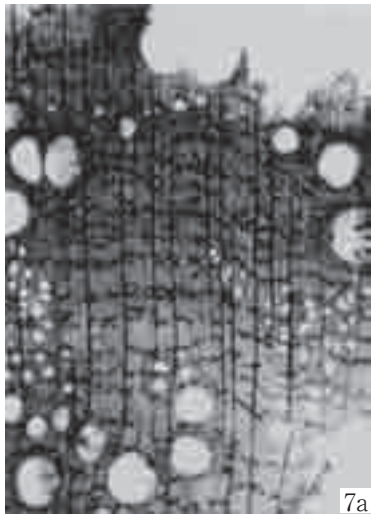
100 μ m : b, c



- 4. コナラ属アカガシ亜属 (図版番号4419)
- 5. クリ (図版番号4442)
- 6. ツブラジイ (図版番号4458)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

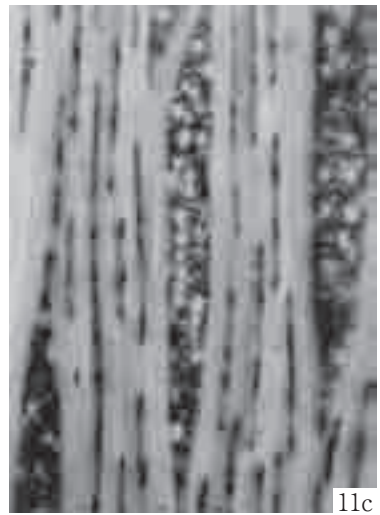
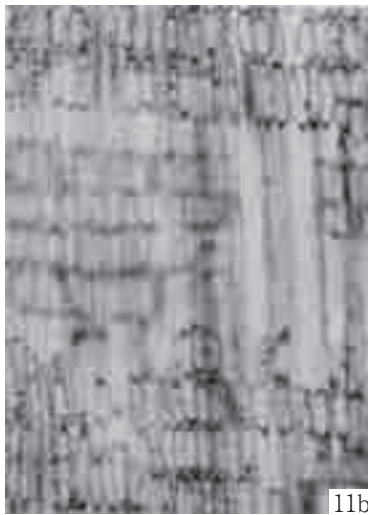
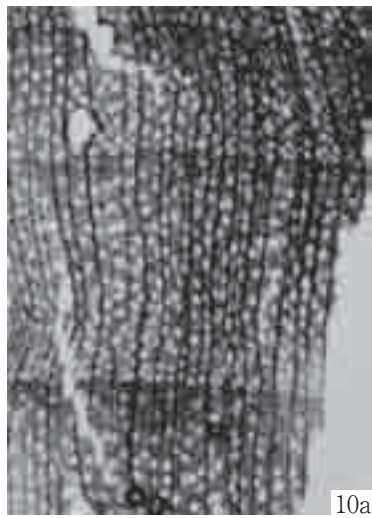
200 μ m : a
 200 μ m : b, c

木製品の木材3 (平成18年度保存処理実施分)



- 7. スダジイ (図版番号4457)
- 8. クスノキ (図版番号4431)
- 9. ツバキ属 (図版番号4424)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c



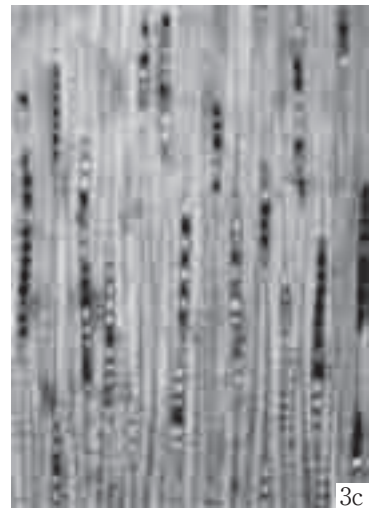
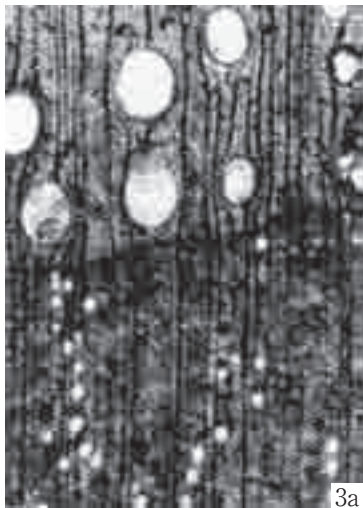
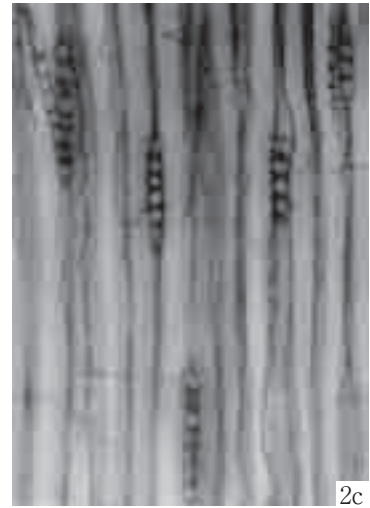
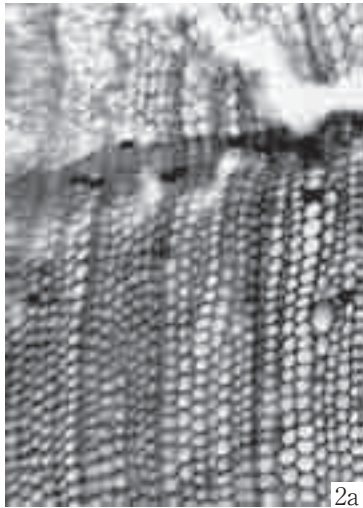
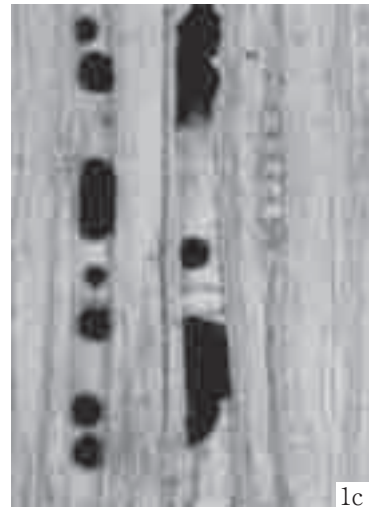
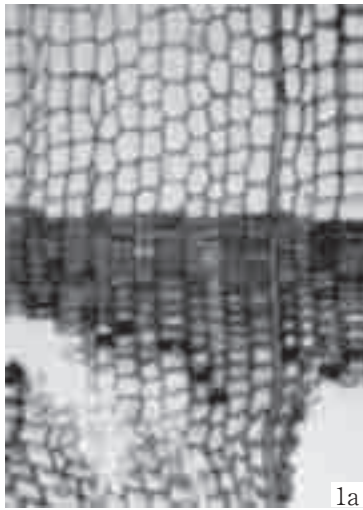
10. サカキ (図版番号4456)

11. シヤシャンボ (図版番号4423)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a

200 μ m : b, c



- 1. スギ (図版番号4454)
- 2. ヒノキ科 (図版番号4444)
- 3. クリ (図版番号4443)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

300 μ m : 3a
 200 μ m : 1a~2a, 3b, 3c
 100 μ m : 1b~2b, 2c

木製品の木材6 (平成19年度保存処理実施分)

報告書抄録

ふりがな		はなのえんいせき						
書名		花宴遺跡						
副書名		南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第115集						
編著者名		廣田佳久, 小野由香, 下村裕, パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原南泉1437-1						
発行年月日		2010年12月24日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
はなのえんいせき 花宴遺跡	〒781-5332 こうちけんこうなんし 高知県香南市 かがみちようとうおうじ 香我美町徳王子 あざはなのえん 字花宴	39211	180053	33° 33' 04"	133° 44' 05"	2005.11.1 ～ 2006.3.21 2006.4.21 ～ 2006.8.28	7,303㎡	一般国道55号自動車専用道路建設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
花宴遺跡	生産遺跡	弥生時代	自然流路	6条	弥生土器	弥生時代後期後半から終末の自然流路より県内初の堰状遺構を確認すると共に木製の威儀具が出土した。		
			土坑	3基	土師質土器			
			溝跡	5条	金属製品			
			祭祀関連遺構	3基	土製品			
			性格不明遺構	2基	石製品 木製品			
要約	<p>花宴遺跡は、平成16年度から実施した香我美地区の試掘調査によって新たに発見された遺跡であり、本書は平成17年度と平成18年度に行った発掘調査の報告である。</p> <p>確認された遺構は自然流路6条を中心とした弥生時代の遺構で、4ヵ所（Ⅰ～Ⅳ区）に分かれており、Ⅳ区で検出した自然流路（SR-5）からは木製の威儀具、SR-5の上面で検出した自然流路（SR-6）からは県内初となる堰状遺構が検出された。</p> <p>花宴遺跡は香宗川左岸の三角州平野に所在し、後背湿地の様相を呈するが、遺構が形成された弥生時代には、自然流路や自然堤防が形成され、相対的に乾燥した土壌環境が形成されていたとみられる。遺跡の出現は、前期中葉頃のSR-2の形成に始まる。ほぼ時を同じくしてSR-4とSR-5が形成される。次に形成されたのはSR-1で、中期前半まで続き、中期中葉を待たず、埋没する。一方、SR-2はSR-1より早く埋没するものの、上層に新たな流路、SR-3が出現する。しかし、SR-3の存続期間は短く、中期中葉で、中期後半には至らない。SR-5は後期後半から終末頃に発生した洪水によって完全に埋没し、ほぼ同時に新たな自然流路SR-6が形成されたとみられる。SR-6には、灌漑用と考えられる堰を構築し、水田耕作を行うと共に川岸では祭祀行為を行い、五穀豊穡を願ったものと思われる。しかし、それも長くは続かず、度重なる洪水で埋没すると共に人の痕跡が消える。</p> <p>いずれにしても、南四国はこれまでにない繁栄をみた弥生時代の終焉を迎え、格差社会ともいべき古墳時代に突入し、長く停滞した社会が続く。</p>							

本書作成データ

ハード：MacPro 2×2.8GHz Quad-Core Intel Xeon, iMac2.4GHz Intel Core2 Duo, PowerMacG5/Dual2.0GHz,
PowerBookPro/2.5GHz

システム：MacOS X (10.6.4)

ソフト：JeditX2.26, Microsoft Excel Mac2008, ProofReader2.1.0, Adobe Photoshop®10.0.1, Adobe
Illustrator®13.0.3, Adobe Indesign®5.0.4J

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times Italic

プリンタ：DocuPrint C3540 (文書校正)

データ：Macintosh Full DTPで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第115集

花宴遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ)

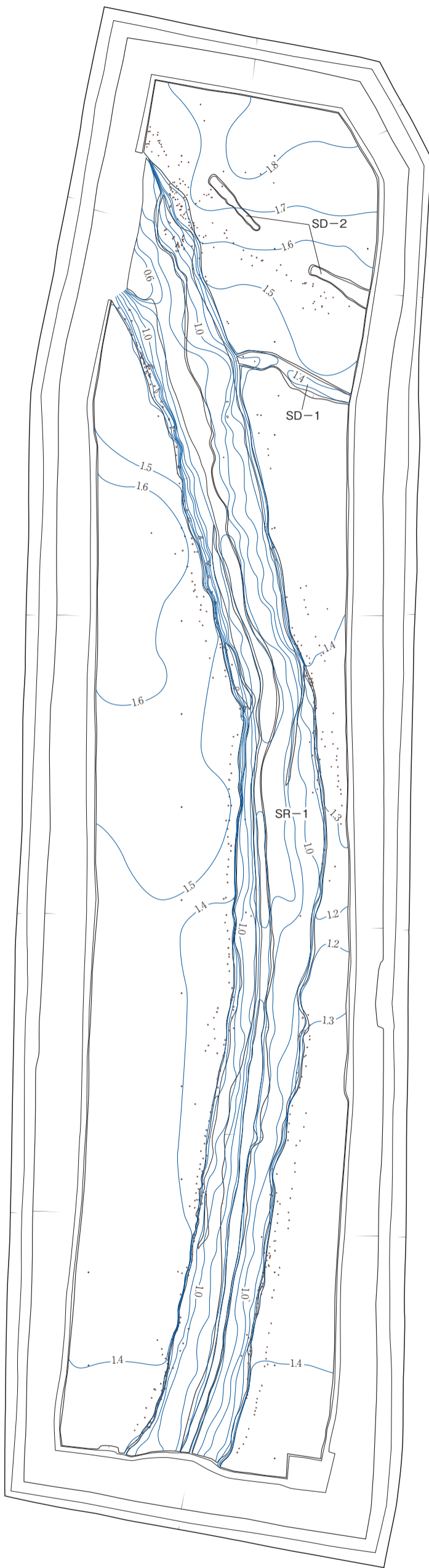
2010年12月24日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 株式会社 飛鳥



— X=61,220m

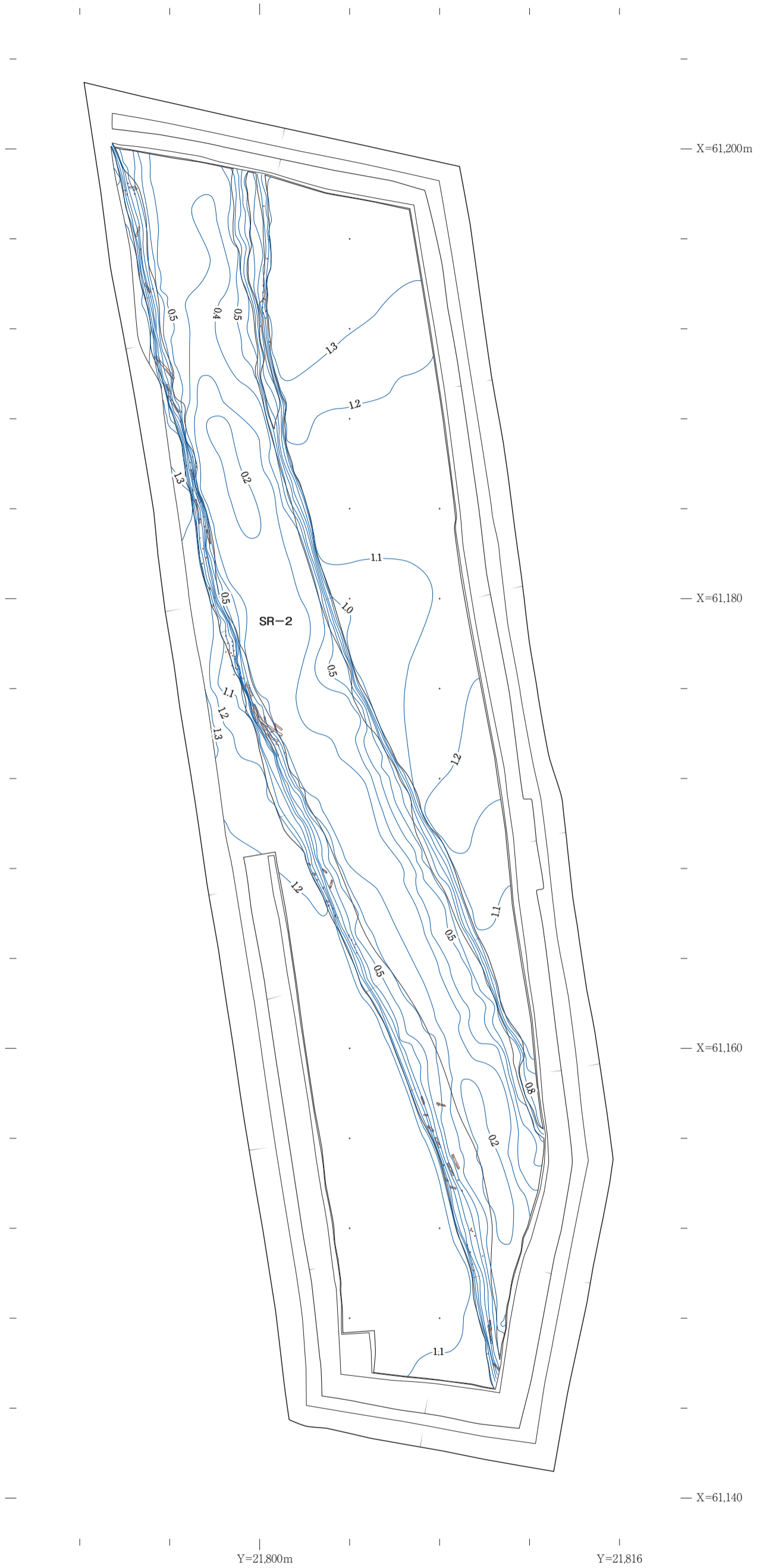
— X=61,200

— X=61,180

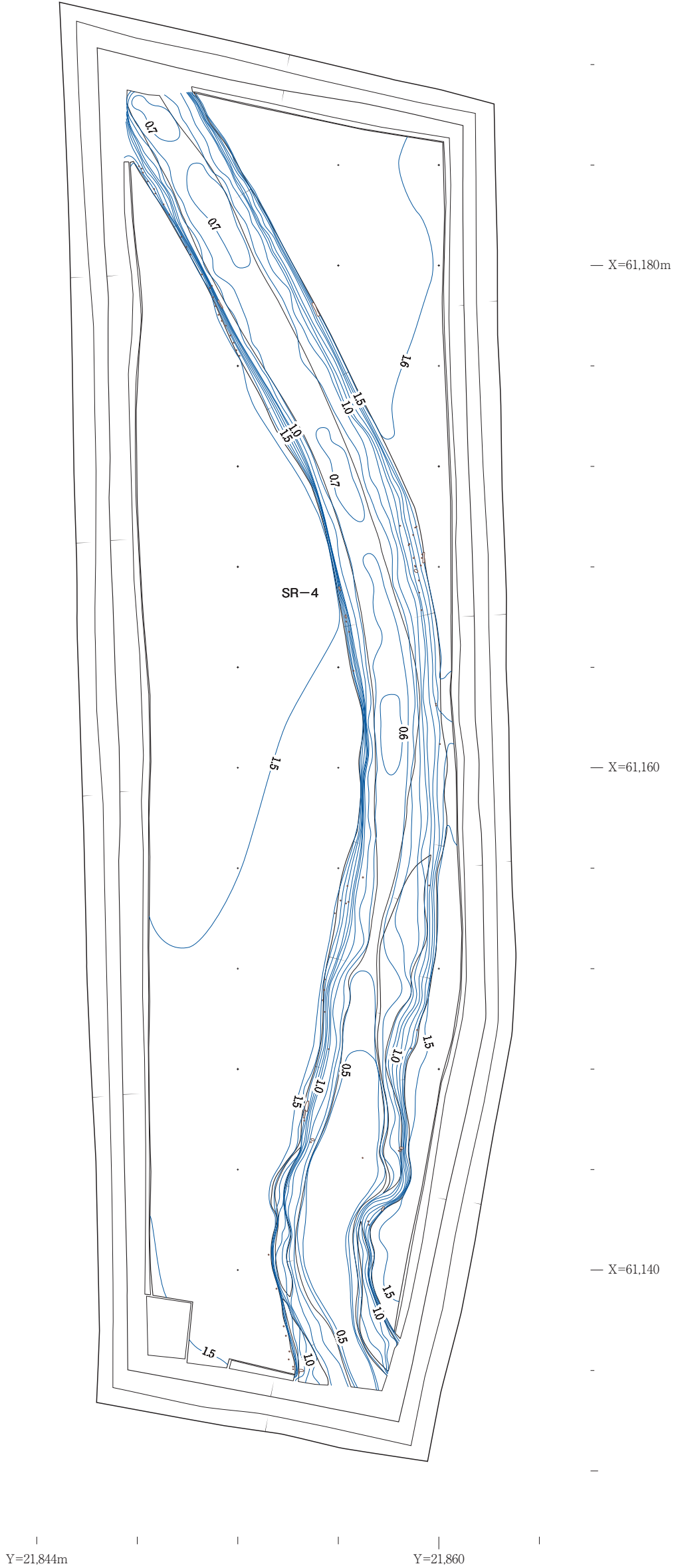
Y=21,680m

Y=21,700

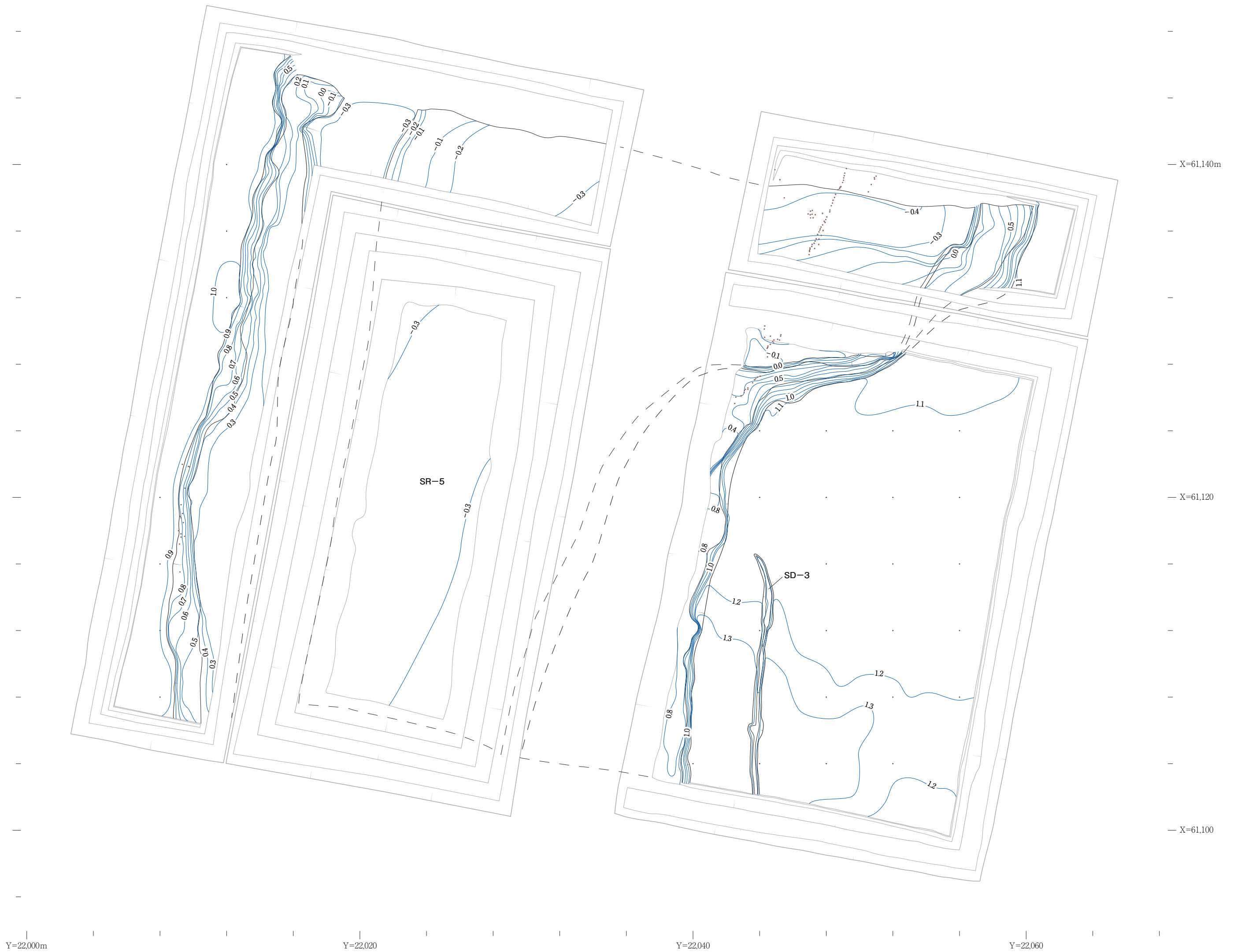
付図1 花宴遺跡 I 区遺構平面図 (S=1/200)



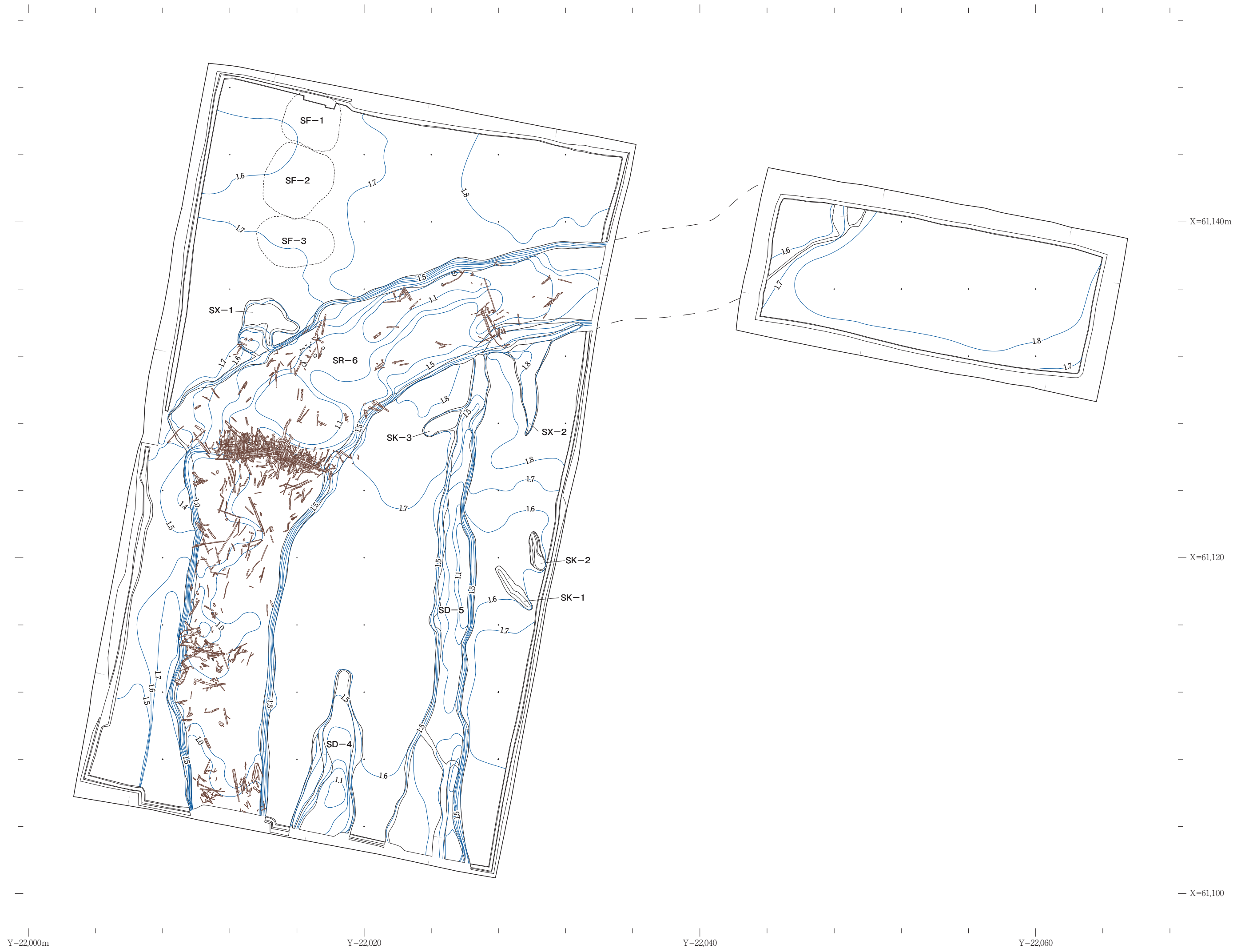
付図2 花宴遺跡Ⅱ区下面遺構平面図 (S=1/200)



付图 4 花宴遺跡Ⅲ区遺構平面図 (S=1/200)



付图5 花宴遗址IV区下面遗构平面图 (S=1/200)



付図6 花宴遺跡IV区上面遺構平面図 (S=1/200)